静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第212集

駿河山遺跡 II

第二東名No.91地点
（縄文時代編　第１分冊）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－４

２０１０

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第212集

駿河山遺跡 II

第二東名No.91地点
（縄文時代編　第１分冊）

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－４

２０１０

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

第二東名高速道路は静岡県を東西約170㎞に渡って貫く形で建設が進められています。本書はその建設に伴い実施された島田市牛尾に所在する駿河山遺跡の発掘調査報告書（縄文時代編）です。

島田市域では、上ノ山遺跡や上志戸呂古窯、駿河山遺跡、上伊太遺跡の４個所で本調査が行われ、いずれでもその地域の特性を示す貴重な発見がなされています。本書を含む５分冊で報告が計画されている駿河山遺跡は最も大規模な調査が行われた遺跡のひとつで、特に縄文時代中期前半～後期後半・弥生時代後期～古墳時代前期では質・量ともに大井川流域の歴史を語るためには欠かせない資料を提供しています。

本書で報告する縄文時代は、大井川流域の発達した河岸段丘上に集落が数多く営まれる時期であり、駿河山遺跡もその一つに数えられます。駿河山遺跡は、大井川の西岸、山間部と志太平野が接する独立丘陵上に位置する遺跡ですが、かつては対岸と尾根続きであったといわれ、調査前から表面採集資料などから大集落の存在が示唆されていました。今回の調査によって出土した土器群は、大井川流域や志太平野といった、比較的小地域の動向を示すものにとどまらず、東は富士川以東で頻繁にみる関東系、北は長野県でみる中部高地系、西は愛知県下でみる東海系や少量ながら近畿系のものなど、様々な地域の特徴をもつものが寄り集まっていることが判明しました。遺構についても、住居域・墓域など丘陵上を使い分けて暮らしていた様子が認められ、当時の社会の一例を俯瞰する好事例となっています。現在でも静岡県は東西文化が接し交わる地域として語られることが多いのですが、遥かいにしえにもこの地に文化の接点があったことは、遠い過去から現在が何かしら繋がっているものと思えてなりません。山間部と平野部の接点・大河川の流域という地の利が、さまざまな文化をもつ複数の人々との交流を可能にしていったのでしょう。このような駿河山遺跡の資料が、現代に生きる私たちと縄文時代人との懸橋として、永く記憶に留められ活用されていくことを切に願っています。

今回の発掘調査ならびに本書の作成にあたっては、中日本高速道路株式会社東京支社（旧横浜支社）、島田市（旧金谷町）教育委員会、静岡県教育委員会等の関係機関各位、地元住民の方々より多大な御理解と御協力をいただきました。さらに、多くの方から様々な御指導・御助言をいただいています。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

平成22年３月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　天野　忍

例言

1　本書は、島田市金谷地区における第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、静岡県島田市牛尾1174他に所在する駿河山遺跡の発掘調査報告書（縄文時代編）である。

2　第二東名建設事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査においては、それぞれ地点名が付されている。本書は、Ｎｏ.91地点に相当するものである。

3　第二東名建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の作成は、地区（市町村）単位で実施している。島田市域では本書が第４冊目であるため「島田市-４」とした。

4　駿河山遺跡の資料整理は、平成17年12月から実施し平成24年３月までの予定である。報告書は、平成19年度に図版編が刊行されており、続いて縄文時代編、弥生・古墳・歴史時代編が編集・刊行される。本書は、当遺跡の報告書第２分冊であるため「駿河山遺跡Ⅱ（縄文時代編）」とした。

5　調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、島田市（旧金谷町）の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

6　現地調査・資料整理の期間と当研究所の担当者は以下のとおりである。

確認調査：平成10年８月～10月　足立順司、河合修、川上努

本 調 査：平成10年10月～平成11年３月　足立順司、河合修、川上努

平成11年４月～平成12年３月　及川司、飯塚晴夫、諸星雅一、河合修、石田勉、木崎道昭、大林元

平成12年４月～平成13年３月　及川司、飯塚晴夫、諸星雅一、河合修、中田出、大畑要

平成13年４月～平成14年３月　及川司、加藤埋文、河合修、桶田光俊

資料整理・報告書作成：平成17年12月～平成19年３月　河合修、鈴木淑子

平成19年４月～平成20年３月　河合修（４～６月、12月～３月）、鈴木淑子

平成20年４月～平成21年３月　松川淑子（旧姓鈴木）

平成21年４月～平成22年３月　河合修

7　当研究所の担当者とともに梅川光隆（平成11年４月～12年３月）、高山正久（平成12年４月～５月）、真鍋治（５月～平成13年８月）が本調査の一部を分担した。

8　本書の執筆分担は以下のとおりである。

河合（第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章第１節１、第Ⅲ章第２節のうち遺構、第Ⅳ章のうち遺構）

松川（第Ⅲ章第１節２、第Ⅲ章第２節のうち石器・石製品）

澁谷昌彦（当研究所準調査員：第Ⅲ章第２節のうち土器）

9　調査における協力者等は、文末に記載した。整理作業では、縄文土器については戸田哲也氏（玉川文化財研究所）にご指導いただいた。石器石材については　伊藤通玄氏、黒曜石の産地分類については望月明彦氏（元独立行政法人沼津工業高等専門学校教授）に同定いただいた。

10　現地での基準点測量、空中写真撮影及び遺構測量の一部は株式会社フジヤマに委託した。

11　本書で使用した遺物写真図版は、すべて当研究所写真室が撮影した。

12　調査の概要は、当研究所の出版物で一部公表されているが、内容において本書と相違がある場合は本報告をもって訂正する。

13　本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。

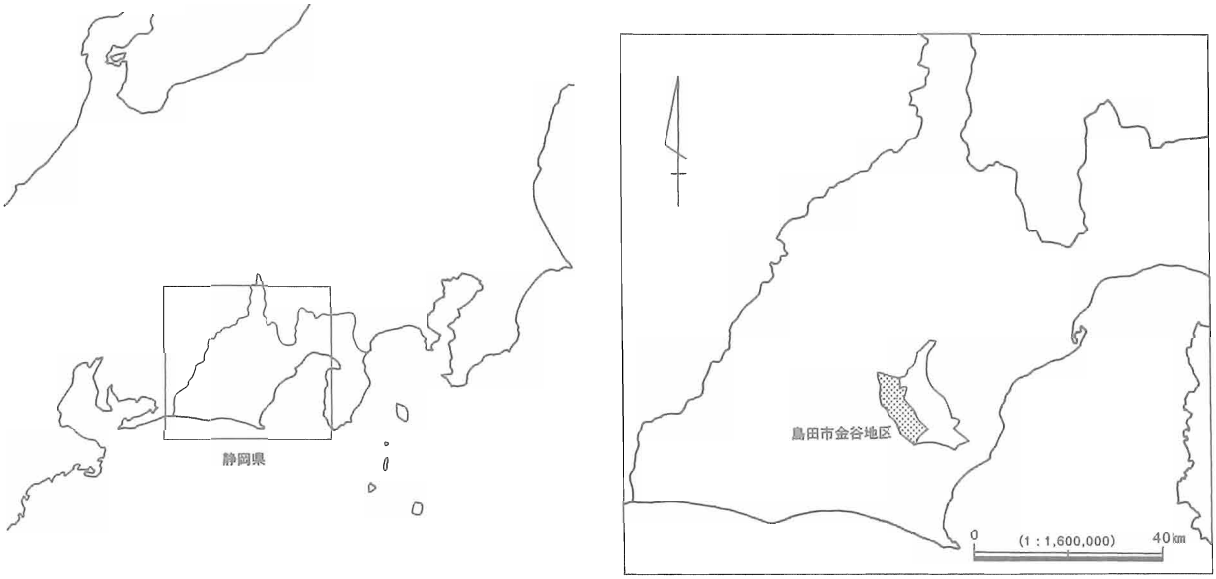
14　発掘調査の資料は、静岡県教育委員会が保管している。

凡例

1　座標は平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を使用している。
2　グリッドは、1の座標を用い1辺10mの方眼を設定している。また、方位も1の座標による方位(座標北)を基準としている。
3　本書に使用した図表は主に調査によって測量・実測した図を基に作成している。これ以外の図については各図中に出典等を示している。
4　本書で使用した遺構の表記は次の通りである。
　例）ＳＫ19543（ＳＫ：遺構の種別　　19543：遺跡内の全遺構通し番号）
　ＳＨ：竪穴住居　　ＳＰ：柱穴・小穴　　ＳＫ：土坑墓・土坑　　ＳＸ：風倒木痕
5　遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。
6　遺構図には遺構と撹乱を同時に表記してある。これらのうち、撹乱に付いては下端線を破線として落ち込みの記号を遺構とは別のものに替えた上、トーンを落とした。
7　遺物番号は、挿図掲載遺物について種類・挿図の別にかかわらず、通し番号を付した。
8　本文中に用いる色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修　1992）を使用した。
9　本書の図中に用いたスクリーントーン等の使い分けは、必要なものを各図の中で表記した他、遺物については次のように統一した。

石器・石製品摩耗範囲

被熱範囲



島田市金谷地区の位置

駿河山遺跡Ⅱ（縄文時代編　第1分冊）
目次

序／例言／凡例／目次

第1章　遺跡の位置と環境……11
　第1節　遺跡の位置と地理的環境……11
　第2節　歴史的環境と調査歴……12
第2章　調査の方法と経過……17
　第1節　調査の体制……17
　第2節　発掘調査の方法と経過……18
　第3節　資料整理の方法と経過……24
第3章　調査の成果……25
　第1節　概要……25
　　1　立地と基本層序……25
　　2　遺構、遺物の概要……26
　第2節　遺構と遺物……27
　　1　竪穴式住居と出土遺物……27
　　2　土坑墓と出土遺物……89
　　3　土坑と出土遺物……140
　　4　遺物集中地点と出土遺物……170
　　5　風倒木痕と出土遺物……212
　第3節　遺構外出土遺物……223

報告書抄録

（第2分冊）
第4章　まとめ
付　載　縄文土器胎土分析
　　黒曜石産地分析
図版
報告書抄録

挿図目次

島田市金谷地区の位置
第１図　大井川流域の縄文時代遺跡 ……13
第２図　駿河山遺跡と周辺の遺跡 ……14
第３図　牛尾山の地形と本調査範囲 ……16
第４図　確認調査トレンチ配置位置図 ……18
第５図　本調査区とグリッド配置図 ……19
第６図　土層柱状図 ……25
第７図　竪穴式住居分布図 ……27
第８図　ＳＨ70666平面・断面図 ……28
第９図　ＳＨ70667平面・断面図 ……29
第10図　ＳＨ70667出土遺物 ……30
第11図　ＳＨ70668平面・断面図 ……31
第12図　ＳＨ70669平面・断面図 ……32
第13図　ＳＨ70670平面・断面図 ……33
第14図　ＳＨ70671出土遺物実測図 ……33
第15図　ＳＨ70671平面・断面図 ……34
第16図　ＳＨ70672平面・断面図 ……35
第17図　ＳＨ23302平面・断面図 ……36
第18図　ＳＨ23303平面・断面図 ……37
第19図　ＳＨ22763平面・断面図 ……38
第20図　ＳＨ22763出土遺物１ ……39
第21図　ＳＨ22763出土遺物２ ……40
第22図　ＳＨ22763出土遺物３ ……41
第23図　ＳＨ22763出土遺物４ ……42
第24図　ＳＨ22585平面・断面図 ……43
第25図　ＳＨ21978平面・断面図 ……44
第26図　ＳＨ21978出土遺物 ……45
第27図　ＳＨ19336平面・断面図 ……46
第28図　ＳＨ23306平面・断面図 ……47
第29図　ＳＨ23304平面・断面図 ……48
第30図　ＳＨ23304出土遺物 ……49
第31図　ＳＨ21637平面・断面図 ……50
第32図　ＳＨ21637出土遺物 ……50
第33図　ＳＨ23305平面・断面図 ……51
第34図　ＳＨ23305出土遺物 ……52
第35図　ＳＨ23307平面・断面図 ……53
第36図　ＳＨ23307出土遺物 ……54
第37図　ＳＨ64915平面・断面図 ……55
第38図　ＳＨ64913平面・断面図、出土遺物 ……56
第39図　ＳＨ64914平面・断面図 ……57
第40図　ＳＨ64916平面・断面図 ……58
第41図　ＳＨ64916出土遺物 ……59
第42図　ＳＨ64917平面・断面図 ……59
第43図　ＳＨ64659平面・断面図 ……60
第44図　ＳＨ64659炉平面・断面図 ……61
第45図　ＳＨ64659出土遺物Ｉ ……62
第46図　ＳＨ64659出土遺物２ ……63
第47図　ＳＨ64659出土遺物３ ……64
第48図　ＳＨ61978平面・断面図１ ……65
第49図　ＳＨ61978平面・断面図２ ……66
第50図　ＳＨ61978出土遺物 ……67
第51図　ＳＨ64918平面・断面図 ……68
第52図　ＳＨ64919平面・断面図 ……69
第53図　ＳＨ64920平面・断面図、出土遺物 ……70
第54図　ＳＨ64921平面・断面図 ……71
第55図　ＳＨ64922平面・断面図 ……72
第56図　ＳＨ33015平面・断面図 ……73
第57図　ＳＨ7394平面・断面図 ……74
第58図　ＳＨ7394出土遺物 ……75
第59図　ＳＨ33016平面・断面図 ……76
第60図　ＳＨ9542平面・断面図 ……77
第61図　ＳＨ9542出土遺物１ ……78
第62図　ＳＨ9542出土遺物２ ……79
第63図　ＳＨ9848平面・断面図 ……80
第64図　ＳＨ33017平面・断面図 ……81
第65図　ＳＨ33018平面・断面図 ……82
第66図　ＳＨ8029平面・断面図 ……83
第67図　ＳＨ8029出土遺物１ ……84
第68図　ＳＨ8029出土遺物２ ……85
第69図　ＳＨ9543出土遺物 ……86
第70図　ＳＨ9543平面・断面図 ……86
第71図　ＳＨ8158平面・断面図 ……87
第72図　ＳＨ8158出土遺物 ……88
第73図　土坑墓位置図１ ……89
第74図　土坑墓位置図２ ……90
第75図　土坑墓位置図３ ……91
第76図　土坑墓エリアＡ（１）平面・断面図 ……92
第77図　土坑墓エリアＡ（１）出土遺物 ……93
第78図　土坑墓エリアＡ（２）
平面・断面図、出土遺物 ……94
第79図　土坑墓エリアＡ（３）平面・断面図 ……95
第80図　土坑墓エリアＡ（４）平面・断面図 ……96
第81図　土坑墓エリアＡ（５）平面・断面図 ……97
第82図　土坑墓エリアＡ（５）出土遺物 ……98
第83図　土坑墓エリアＡ（６）平面・断面図 ……99
第84図　土坑墓エリアＡ（６）出土遺物 ……100
第85図　土坑墓エリアＡ（７）平面・断面図 ……101
第86図　土坑墓エリアＡ（７）出土遺物 ……102
第87図　土坑墓エリアＢ（１）平面・断面図 ……103
第88図　土坑墓エリアＢ（１）出土遺物 ……104
第89図　土坑墓エリアＢ（２）平面・断面図 ……106
第90図　土坑墓エリアＢ（２）出土遺物 ……107
第91図　土坑墓エリアＢ（３）平面・断面図 ……108
第92図　土坑墓エリアＢ（４）平面・断面図 ……109
第93図　土坑墓エリアＢ（４）出土遺物 ……110
第94図　土坑墓エリアＢ（５）平面・断面図 ……112
第95図　土坑墓エリアＢ（５）出土遺物 ……113
第96図　土坑墓エリアＢ（６）平面・断面図 ……114
第97図　土坑墓エリアＢ（６）出土遺物 ……115
第98図　土坑墓位置図４ ……116
第99図　土坑墓エリアＣ（１）平面・断面図 ……117
第100図　土坑墓エリアＣ（１）出土遺物 ……119
第101図　土坑墓エリアＣ（２）平面・断面図 ……120
第102図　土坑墓エリアＣ（２）出土遺物 ……121
第103図　土坑墓エリアＣ（３）平面・断面図 ……122
第104図　土坑墓エリアＣ（３）出土遺物 ……123
第105図　土坑墓エリアＣ（４）平面・断面図 ……124
第106図　土坑墓エリアＣ（４）出土遺物 ……126
第107図　土坑墓エリアＣ（５）平面・断面図 ……127
第108図　土坑墓エリアＣ（５）出土遺物 ……128
第109図　土坑墓エリアＣ（６）平面・断面図 ……129
第110図　土坑墓エリアＣ（６）出土遺物 ……130
第111図　土坑墓エリアＣ（７）平面・断面図 ……131
第112図　土坑墓エリアＣ（７）出土遺物 ……132
第113図　土坑墓エリアＣ（８）平面・断面図 ……133
第114図　土坑墓エリアＣ（８）出土遺物 ……134
第115図　土坑墓エリアＤ ……136
第116図　土坑墓エリアＤ出土遺物 ……137
第117図　土坑墓エリアＤ出土遺物 ……138
第118図　ＳＫ60918平面・断面図、出土遺物 ……141
第119図　ＳＫ70601・70646・70602
平面・断面図 ……142

第120図　ＳＫ70601出土遺物１ ……143
第121図　ＳＫ70601出土遺物２ ……144
第122図　ＳＫ70601・70602出土遺物 ……145
第123図　ＳＫ64907・64660・64661・62004
　　平面・断面図 ……146
第124図　ＳＫ19022・20841・7951・30295
　　平面・断面図 ……147
第125図　土坑出土遺物１ ……149
第126図　ＳＫ62735・9145・32047・9332
　　平面・断面図 ……150
第127図　土坑出土遺物２ ……151
第128図　土坑出土遺物３ ……153
第129図　土坑出土遺物４ ……155
第130図　土坑出土遺物５ ……158
第131図　土坑出土遺物６ ……160
第132図　土坑出土遺物７ ……161
第133図　土坑出土遺物８ ……162
第134図　土坑出土遺物９ ……163
第135図　土坑出土遺物10 ……164
第136図　土坑出土遺物11 ……166
第137図　土坑出土遺物12 ……167
第138図　土坑出土遺物13 ……168
第139図　土坑出土遺物14 ……169
第140図　遺物集中地点遺物分布状況１（土器） ……171
第141図　遺物集中地点遺物分布状況２（石器） ……172
第142図　遺物集中地点出土遺物１ ……174
第143図　遺物集中地点出土遺物２ ……175
第144図　遺物集中地点出土遺物３ ……177
第145図　遺物集中地点出土遺物４ ……178
第146図　遺物集中地点出土遺物５ ……179
第147図　遺物集中地点出土遺物６ ……181
第148図　遺物集中地点出土遺物７ ……183
第149図　遺物集中地点出土遺物８ ……184
第150図　遺物集中地点出土遺物９ ……186
第151図　遺物集中地点出土遺物10 ……188
第152図　遺物集中地点出土遺物11 ……190
第153図　遺物集中地点出土遺物12 ……192
第154図　遺物集中地点出土遺物13 ……193
第155図　遺物集中地点出土遺物14 ……194
第156図　遺物集中地点出土遺物15 ……196
第157図　遺物集中地点出土遺物16 ……199
第158図　遺物集中地点出土遺物17 ……200
第159図　遺物集中地点出土遺物18 ……201
第160図　遺物集中地点出土遺物19 ……202
第161図　遺物集中地点出土遺物20 ……203
第162図　遺物集中地点出土遺物21 ……204
第163図　遺物集中地点出土遺物22 ……205
第164図　遺物集中地点出土遺物23 ……206
第165図　遺物集中地点出土遺物24 ……207
第166図　遺物集中地点出土遺物25 ……208
第167図　遺物集中地点出土遺物26 ……209
第168図　遺物集中地点出土遺物27 ……210
第169図　ＳＸ7002平面・断面図・出土遺物 ……211
第170図　風倒木痕分布状況 ……212
第171図　ＳＸ21751平面・断面図・出土遺物 ……213
第172図　ＳＸ64794平面・断面図 ……214
第173図　ＳＸ63919平面・断面図 ……215
第174図　ＳＸ63919出土遺物 ……216
第175図　ＳＸ64216平面・断面図・出土遺物 ……217
第176図　ＳＸ30322平面・断面図 ……218
第177図　ＳＸ64891平面・断面図 ……219
第178図　ＳＸ64891出土遺物 ……220
第179図　ＳＸ8822平面・断面図 ……221
第180図　ＳＸ31202平面・断面図・出土遺物 ……222
第181図　遺構外出土遺物１ ……224
第182図　遺構外出土遺物２ ……226
第183図　遺構外出土遺物３ ……227
第184図　遺構外出土遺物４ ……229
第185図　遺構外出土遺物５ ……231
第186図　遺構外出土遺物６ ……233
第187図　遺構外出土遺物７ ……234
第188図　遺構外出土遺物８ ……236
第189図　遺構外出土遺物９ ……237
第190図　遺構外出土遺物10 ……239
第191図　遺構外出土遺物11 ……241
第192図　遺構外出土遺物12 ……243
第193図　遺構外出土遺物13 ……244
第194図　遺構外出土遺物14 ……246
第195図　遺構外出土遺物15 ……248
第196図　遺構外出土遺物16 ……250
第197図　遺構外出土遺物17 ……252
第198図　遺構外出土遺物18 ……254
第199図　遺構外出土遺物19 ……255
第200図　遺構外出土遺物20 ……257
第201図　遺構外出土遺物21 ……258
第202図　遺構外出土遺物22 ……259
第203図　遺構外出土遺物23 ……261
第204図　遺構外出土遺物24 ……262
第205図　遺構外出土遺物25 ……263
第206図　遺構外出土遺物26 ……264
第207図　遺構外出土遺物27 ……265
第208図　遺構外出土遺物28 ……267
第209図　遺構外出土遺物29 ……268
第210図　遺構外出土遺物30 ……269
第211図　遺構外出土遺物31 ……270
第212図　遺構外出土遺物32 ……272
第213図　遺構外出土遺物33 ……274
第214図　遺構外出土遺物34 ……276
第215図　遺構外出土遺物35 ……277
第216図　遺構外出土遺物36 ……279
第217図　遺構外出土遺物37 ……280
第218図　遺構外出土遺物38 ……282
第219図　遺構外出土遺物39 ……285
第220図　遺構外出土遺物40 ……286
第221図　遺構外出土遺物41 ……288
第222図　遺構外出土遺物42 ……290
第223図　遺構外出土遺物43 ……292
第224図　遺構外出土遺物44 ……294
第225図　遺構外出土遺物45 ……296
第226図　遺構外出土遺物46 ……300
第227図　遺構外出土遺物47 ……302
第228図　遺構外出土遺物48 ……304
第229図　遺構外出土遺物49 ……305
第230図　遺構外出土遺物50 ……307
第231図　遺構外出土遺物51 ……309
第232図　遺構外出土遺物52 ……311
第233図　遺構外出土遺物53 ……313
第234図　遺構外出土遺物54 ……315
第235図　遺構外出土遺物55 ……316
第236図　遺構外出土遺物56 ……318
第237図　遺構外出土遺物57 ……320
第238図　遺構外出土遺物58 ……321
第239図　遺構外出土遺物59 ……323
第240図　遺構外出土遺物60 ……324
第241図　遺構外出土遺物61 ……325
第242図　遺構外出土遺物62 ……326
第243図　遺構外出土遺物63 ……327
第244図　遺構外出土遺物64 ……328

第245図　遺構外出土遺物65 ……329
第246図　遺構外出土遺物66 ……330
第247図　遺構外出土遺物67 ……331
第248図　遺構外出土遺物68 ……332
第249図　遺構外出土遺物69 ……333
第250図　遺構外出土遺物70 ……334
第251図　遺構外出土遺物71 ……335
第252図　遺構外出土遺物72 ……336
第253図　遺構外出土遺物73 ……337
第254図　遺構外出土遺物74 ……338
第255図　遺構外出土遺物75 ……340
第256図　遺構外出土遺物76 ……341
第257図　遺構外出土遺物77 ……342
第258図　遺構外出土遺物78 ……343
第259図　遺構外出土遺物79 ……344
第260図　遺構外出土遺物80 ……345
第261図　遺構外出土遺物81 ……346
第262図　遺構外出土遺物82 ……347
第263図　遺構外出土遺物83 ……348
第264図　遺構外出土遺物84 ……349
第265図　遺構外出土遺物85 ……350
第266図　遺構外出土遺物86 ……351
第267図　遺構外出土遺物87 ……352
第268図　遺構外出土遺物88 ……353
第269図　遺構外出土遺物89 ……354
第270図　遺構外出土遺物90 ……355
第271図　遺構外出土遺物91 ……356
第272図　遺構外出土遺物92 ……357

挿表目次

第１表　調査体制と実施内容（平成21年度まで） ……17
第２表　土坑墓一覧表 ……139

写真目次

写真１　確認調査 ……21
写真２　本調査表土除去 ……21
写真３　本調査状況（Ａ区） ……21
写真４　本調査状況（Ｂ区） ……21
写真５　本調査状況（Ｂ区） ……23
写真６　遺物掘削状況（Ｄ区ＳＺ288） ……23
写真７　断面実測状況 ……23
写真８　金谷小学校児童の遺跡見学 ……23
写真９　遺物接合・復原作業 ……24
写真10　遺物実測作業 ……24
写真11　版下作成作業 ……24
写真12　原稿執筆状況 ……24

第１章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

島田市西部（以下「金谷地区」という）は、北緯34度50分、東経138度７分30秒付近の静岡県中部に位置し、北側は榛原郡川根本町や周智郡森町、東は大井川をはさみ島田市東部（島田地区）や藤枝市、西は掛川市や菊川市、南は牧之原市に接している。金谷地区は、島田市のうちでも大井川の西岸地域北側にあたり、平成17年５月の島田市との合併以前は、金谷町であった。金谷地区の面積は64.35㎢を測り、島田市の面積195.39㎢のおよそ30％を占める。

金谷地区は、南アルプスの南端に当たる丘陵と、大井川が主体となって形成した沖積平野から構成されている。丘陵は市域の北側～西側に広く分布し、平野部は横岡・相賀付近から急激に幅を広げ、市域の南東側を占める。この丘陵は、地区の北部では中生界白亜系の四万十層群、半ばでは古第三系の瀬戸川層群、南部では新第三系の倉間層群などに属する。これらのうち、四万十層群・瀬戸川層群には頁岩や砂岩を含む層位が発達している。大井川の河床にも流出した転石が多く含まれており、流域の縄文時代遺跡から頁岩製・砂岩製の石器が多く出土することにも反映している。これら丘陵部は白亜紀末以降の造山運動によって隆起したものと言われるが、現在では大井川や白光川、大代川など丘陵部一帯の雨水を集める河川によって開析された急峻な谷地形により、大きく３つの山塊に分けられる。

最も北側が八高山（標高832.1m）と裾部に広がる尾根である。この山塊は、北は川根町家山から切山にかけての大きな谷によって、南は島田市福用から西へ入る谷に区切られる。西側は掛川市域の大尾山（標高661m）との間にある掛川市黒俣付近から北に入る谷が境となる。中ほどが経塚山（標高669.9m）と裾部に広がる尾根である。北は金谷町福用から西へ入る谷に区切られ、南と西は大代川とその源流部が開析した谷部で区切られる。この丘陵の、特に南東部の尾根上は台地上の平坦面が発達する。最も南側が粟ケ岳（標高532.1m）と裾部に広がる尾根である。この山塊の南側は漸移的に牧之原台地の北縁につながる。これらの丘陵の東縁となるのは、大井川である。特に島田市高熊・鍋島・神尾付近では丘陵の張り出しに遮られてＳ字状の蛇行を繰り返す。また、同地域と島田市横岡付近の丘陵端部には、大井川の影響による河岸段丘が発達する。これら丘陵部には、高位においては杉や檜の人工林や広葉樹の自然林がモザイク状に入り組んでいる。低位においては、等高線に沿って茶の栽培が盛んに行われ、静岡県中西部における特徴的な景観を醸し出している。

大井川が沖積平野に放たれる付近には、駿河山遺跡が営まれた牛尾山（駿河山）がある。牛尾山は頂部がほぼ平らで現在では独立丘となっているが、かつては島田市相賀の丘陵部と牛尾山の先端部（山鼻という）が低い尾根によってつながっていたと言われる。斜面部はおよそすべての個所で急峻な崖状を呈している。頻繁に地滑りを起こしているようで、特に木竹の少ない西側斜面には小さな谷状の地形が幾筋も観察できる（『駿河山遺跡Ⅰ』図版１－２）。山の頂部は全面茶園に開発されている。

主に大井川の堆積物による沖積平野は、島田市横岡付近から金谷河原付近にかけて発達する。この平野部は、中村一氏が天正18年（1590）に牛尾山と横岡の間に堤を築き、相賀・牛尾山間を掘り割って大井川の本流を西側に導いたため、耕作域として安定したと言われる。つまりそれ以前は、「島」地名に見えるような中州が点在する大井川の氾濫原であった。

この平野部の堆積作用には、大井川のみならず経塚山から流出する大代川も大きく影響している。大代川は今なお大量の土砂を運びながら平野部を南下し、牧ノ原台地の北縁で東へ流れを変えて大井川に合流する。なお、この地域の地質図は『上ノ山遺跡』に記載してある。併せてご参照いただきたい。

第２節　歴史的環境と調査歴

駿河山遺跡のある大井川流域は、縄文時代遺跡が比較的多く営まれている地域としても知られている。上・中流域には、沼ノ平・久保尾遺跡（川根本町）、柿間・長者原・安田原（島田市）のように大井川からやや離れた標高の高い位置に営まれる遺跡が若干あるが、多くは大井川を望む安定した河岸段丘上に営まれる傾向がある。

ここでは地形的な特徴から、静岡市葵区小河内から川根本町千頭付近までを上流域、千頭付近から島田市神尾付近までを中流域、これより下流を下流域として所在する縄文時代の遺跡について概観する。

１　上流域の遺跡

上流部では遺跡の分布がかなり希薄で偏っている。これは、川岸まで急峻な崖地形がせり出して、河岸段丘が発達する部分が限られていることに起因する。最も上流部に位置するのは、八木尾又・割田原・松山段遺跡である。割田原遺跡は井川ダムの建設に先立って昭和29・30年に発掘調査が行われ、縄文時代中期前半～後半の遺跡であることが判明している。現在は割田原遺跡が井川ダムにより水没し、八木尾又・松山段遺跡は水面に程近い場所にあるが、いずれも元来は河床から隔たった上位の段丘上にある。

ここから下流側には直線距離で11㎞隔てた川根本町奥泉に至るまで遺跡が確認されていない。奥泉には東に傾斜する河岸段丘上に森ノ平・池ノ谷・下開土遺跡がある。これらの遺跡は昭和26年（1951）に藤枝東高校郷土研究部の踏査によって発見された遺跡である（藤枝東高等学校郷土研究部1954）。同高郷土研究部は昭和32年に至るまで下開土遺跡で複数回の発掘調査を実施し、この遺跡が縄文時代前期から弥生時代中期に至る遺跡であることを明らかにした。その後、平成５年（1993）と翌年に発掘調査が行われ、遺跡の内容が明らかになっている（佐藤・河合1995、佐藤・関野・中村1996）。現在遺跡の中心部は駅前広場とロータリーになっているが、中央に当時の生活をイメージしたモニュメントが作られて遺跡の存在を明らかにしている。

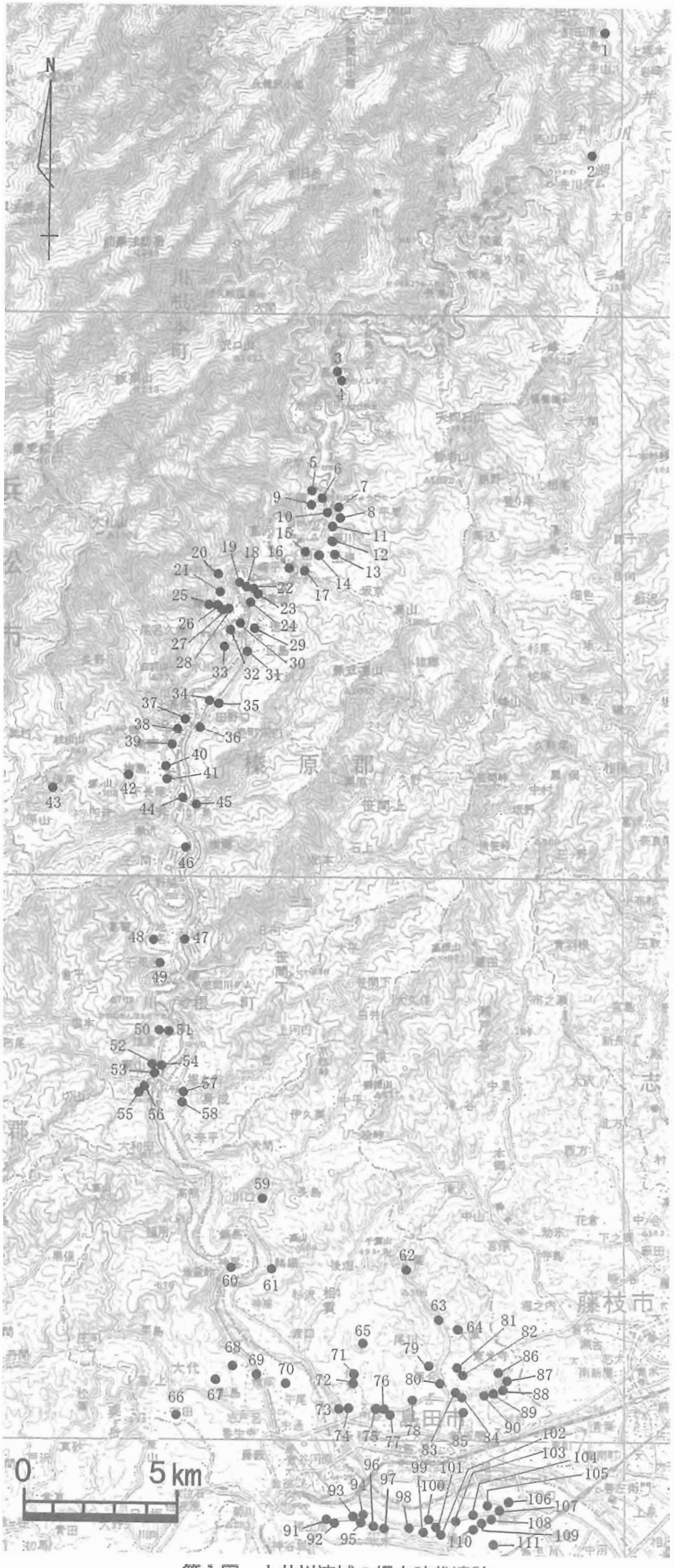
２　中流域の遺跡

奥泉から直線距離でおよそ3.5㎞の間にも遺跡が確認されていない。この付近も上流域と同様な険しい地形が生活域として適さなかったことを示唆しているのだろう。川根本町千頭から徳山にかけての地域はこの前後と比べて遺跡が盛んに営まれる。千頭周辺では大井川の東岸に、徳山周辺では西岸に遺跡が多くみられる。これは湾曲した大井川の攻撃面にあたる部分に、より河岸段丘が発達しているからである。また、かつての本川根町・中川根町の中心部はこの地域にあり、現在でも旧２町の人口のおよそ43％が居住していることが依然居住の適地であることを示している。

千頭付近では高千山・郷平・新貝平・山王遺跡が知られる。山王遺跡は昭和８年(1933)、発電所建設の軌道建設に際して発見された縄文中期から晩期にかけての遺跡で、町道建設に伴う調査により後・晩期が主体であることが明らかとなった。ここから出土した石剣は、町指定文化財となっている。 また、台形様石器等が採集されていた高千山遺跡では平成12年に確認調査が行われ、旧石器時代と考えられる遺物が出土している。

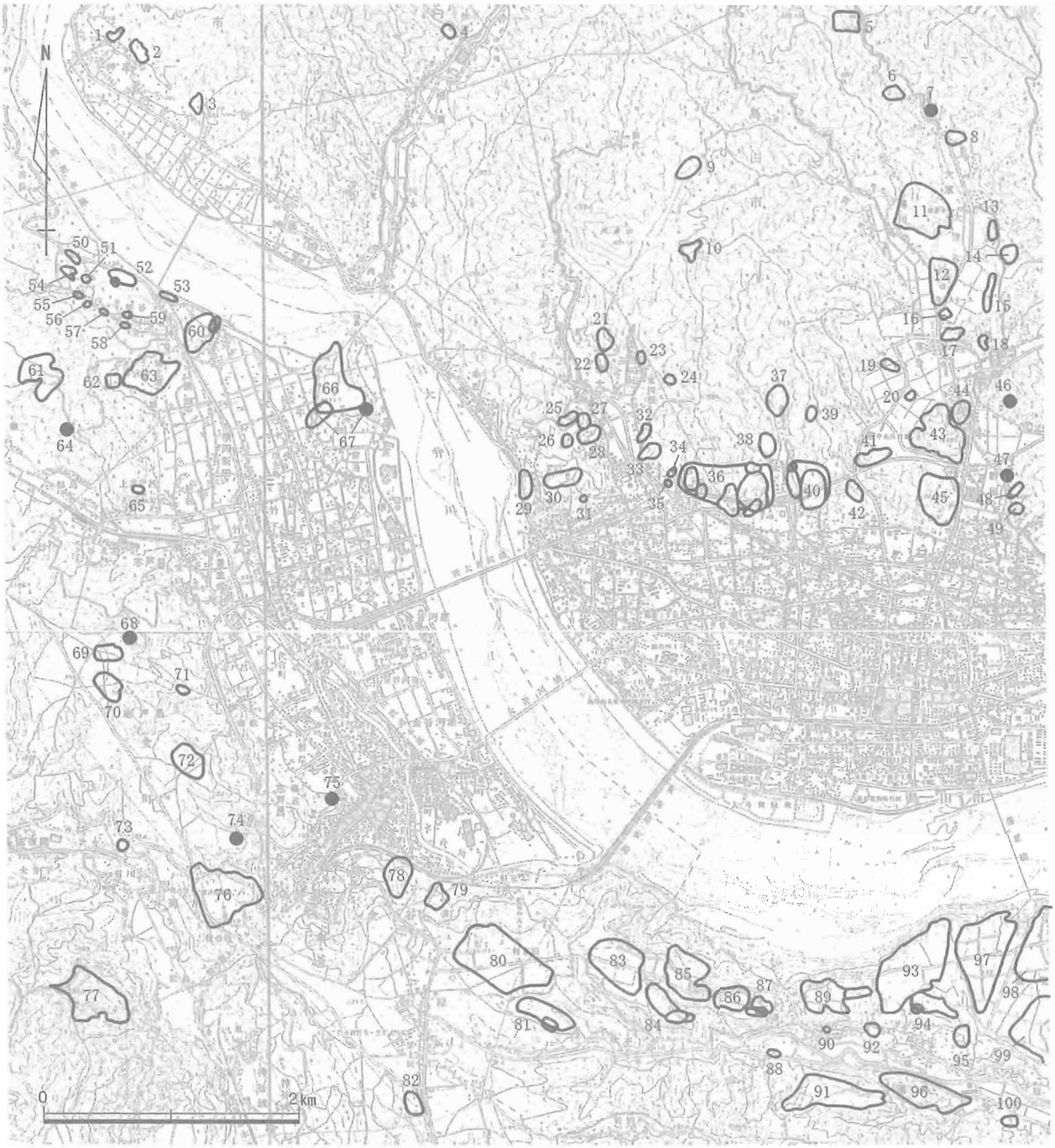
千頭の対岸にあたる東藤川～小長谷には、大島・井戸口・下井戸などの遺跡がある。大島遺跡は平成５年に調査が行われ、当地域では類例の少ない縄文晩期後半の条痕文系土器が出土している。これより南におよそ２㎞隔てた高位の段丘上にはぬたぶら遺跡がある。平成６～16年にかけて断続的に発掘調査が行われ、縄文時代の層位の下位からナイフ型石器が出土したことが注目されている。

藤川・徳山周辺は遺跡が多いが、調査が実施され内容の判明する例は少ない。徳山の大井川沿いにある下村Ⅰ遺跡では昭和46年（1971）に発掘調査が行われている。徳山の南端に位置する釜ノ口遺跡は昭



1	割田原	56	天王山
2	松山段	57	原八坂
3	奥泉・森ノ谷	58	見成原
4	奥泉・下開戸	59	柿間
5	高千山	60	神尾
6	神具平	61	鵜網
7	大島	62	大段
8	井戸口	63	竹ノ尾
9	郷平	64	広段
10	山王	65	尾川平
11	下井戸	66	安田原
12	森平	67	長者原
13	中ノ筋	68	釜谷Ⅰ
14	小山	69	宮ノ段
15	榎平	70	駿河山
16	中平	71	八幡社裏
17	ぬたぶら	72	八幡社前
18	中島Ｃ	73	大鳥
19	中島Ｄ	74	天神原
20	小井平	75	旗指１
21	出草	76	旗指２
22	中島Ｂ	77	旗指４
23	中島Ａ	78	田ノ谷
24	沢間原	79	山王前
25	照尾	80	落合
26	西村	81	神谷東
27	高村	82	管ヶ谷
28	下貝戸	83・84	波田
29	下村Ⅰ	85	二俣
30	森ノ段	86	礫段
31	釜ノ口	87	岸
32	下村Ⅱ	88	馬平
33	平溝	89	中山奥
34	田野口Ⅰ	90	中山
35	田野口Ⅲ	91	唐沢
36	田野口Ⅱ	92	唐沢原
37	惣金地	93	吹木原
38	智満寺前	94	西原
39	上長尾	95	双川
40	天王原	96	御小屋原Ⅰ
41	高手山	97	御小屋原Ⅱ
42	沼ノ平	98	屋敷原
43	久保尾	99	風西
44	下長尾東	100	東鎌塚原
45	下泉原	101	木村原
46	平谷	102	半段
47	地名原	103	原ノ平
48	沢谷平	104	東照宮
49	石風呂	105	尼沢
50	抜里原Ⅱ	106	谷口原
51	抜里原Ⅰ	107	宮上
52	絵下原Ⅰ	108	色尾原
53	上ノ原	109	大原
54	道場原	110	えびす森
55	家山原	111	沼伏神社

第１図　大井川流域の縄文時代遺跡



第２図　駿河山遺跡と周辺の遺跡

1　神座Ａ地点古窯、2　神座Ｂ地点古窯、3　大沢、4　相賀古窯、5　大津山、6　竹ノ尾、7　天徳山山門、8　広段、9　尾川平、10　立合、11　大津城、12　山王前、13　神谷東、14・15　管ヶ谷、16　落合、17　スモウダン、18　管ヶ谷Ｂ地点古窯、19　落合西、20　鳥羽美、21　八幡社裏、22　八幡社前、23　東川根上、24　東川根Ⅰ古窯、25　中村Ⅰ、26　中村Ⅱ、27　中村地蔵尊前古窯、28　中村Ⅲ、29　大鳥、30　天神原、31　天神原古墳群、32　東川根Ⅱ古窯、33　東川根Ⅲ古窯、34　伊太口古窯、35伊太口古墳群、36　旗指古窯、37　静居寺裏古窯、38　瀞居寺前Ｃ地点、39　大観堂、40　旗指８地点、41　田ノ谷、42　菰ヶ谷、43　野田城、44　居倉、45　鵜田古墳群、46　波田、47　竜雲寺古墳群、48　駒形古墳群、49　二俣古墳群、50　きつね沢古窯、51　ほろん沢東、52　釜谷Ⅰ、53　すやん沢古窯、54　ほろん沢古窯、55　北古窯、56　新兵衛古窯、57　中古窯、58　南古窯、59　内藤古窯、60　宮ノ段、61　長者原、62　観勝寺、63　志戸呂城、64　孫エ門原古墳、65　上志戸呂古窯、66　駿河山、67　駿河山古墳群、68　狐平古墳、69　加藤原、70　杉ノ沢、71　杉沢古墳群、72　西原、73　宗行郷塚、74　伊之助原古墳、75　医王寺薬師堂、76　諏訪原城、77　火剣山砦、78　天王町、79　下坂、80　唐沢、81　唐沢原、82　落井上原、83　吹木原、84　双川、85　西原、86　御小屋原Ⅰ、87　御小屋原Ⅱ、88　丸山Ⅰ、89　屋敷原、90　丸山古窯、91　ミョウガ原、92　風西、93　東鎌塚原、94　本村原、95　半段、96　湯日城、97　原ノ平、98　東照宮、99　えびす森、100　長軒谷

和32年（1957）に藤枝東高郷土研究部の踏査によって発見された遺跡で、同36年の発掘調査では配石遺構が検出され、縄文晩期の土器・土偶、弥生中期の土器若干量が出土している。また、釜ノ口遺跡の北にある森ノ段遺跡からは縄文時代草創期の尖頭器が採集されている。

徳山からおよそ4㎞下流の大井川西岸には比較的広い河岸段丘があり、複数の遺跡が営まれる。分布のほぼ中心には、古くから遺物が採集できることで知られていた上長尾遺跡がある。上長尾遺跡は縄文早期・中期～弥生中期初頭の遺跡で、過去に4度の発掘調査が行われている。昭和27(1952)・29年に島田高校郷土研究部が行った発掘調査によって、遺跡は後・晩期を主体とすることが判明した。この際には晩期にあたる中空土偶が出土したことが注目される。昭和51・52年の調査では、晩期の土坑墓が70基検出されている。ここから直線距離で約11㎞下流の家山付近に至る地域には段丘上に小規模な遺跡が散在している。

家山は、平成20年4月に島田市と合併する以前は川根町の中心部であった。市街地は家山川と大井川の沖積作用による平地に広がっているが、縄文時代の遺跡は比較的小規模なものが丘陵部に位置している。天王山遺跡は沖積地の中に残された河岸段丘上にある弥生時代～古墳時代を主体とする遺跡であり、平成5～6年に行われた調査によって早期・中期の遺物も少量出土している。ここから大井川が志太平野に放たれる付近までは、柿間遺跡、鵜網遺跡などのようにやや広い遺跡が段丘上に散在している。

3　下流域の遺跡

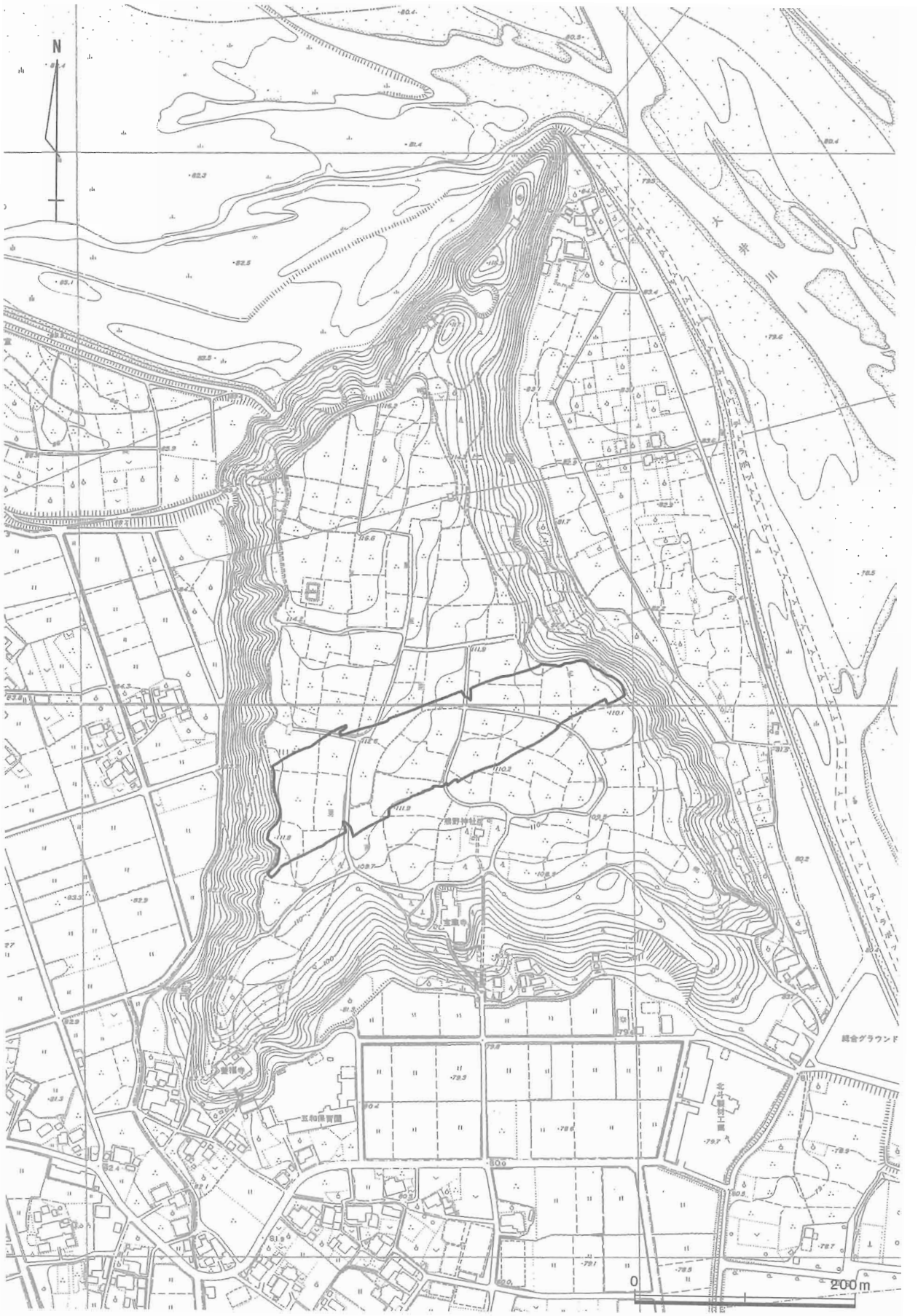
志太平野に至った大井川は牧ノ原台地に突当って東向きに大きく流れを変える。

左岸域は沖積作用による平野が広がり、現在島田市街地が営まれている。ここは厚い堆積層によって遺跡の存在が明らかでない。沖積地の北側には丘陵が広がる。この部分は大井川東岸の丘陵部の末端にあたり、大井川の河岸段丘が発達しない部分である。大井川の支流である伊太谷川や大津谷川の開析作用によって形作られた急峻な斜面をもつ丘陵が多く、低く頂部に比較的大きな緩斜面をもつ山王前遺跡・岸遺跡の他は小規模な遺跡が目立つ。

大井川を眼下に望む丘陵上に位置する大鳥遺跡は、一帯の遺跡分布の最も西側に位置する。平成5年（1993）、県道の拡幅に伴う発掘調査が行われ、縄文時代早期にあたる遺物や住居跡が検出されている。さらに下層からはナイフ形石器等旧石器時代の遺物が出土しており、この部分の最も古手の遺跡に数えられている。旗指遺跡は灰釉陶器を生産した旗指古窯跡群を含む遺跡として知られている。昭和62年（1987）に発掘調査が行われた1地点からはこの地域の縄文時代遺跡では最も古くに位置づけられる草創期の遺物が出土し、礫群が検出されている。また、住居跡と考えられる柱穴や炉跡と思われる焼土も検出されており、当時の暮らしを彷彿させる貴重な発見を提示している。また、波田遺跡では昭和51年（1976）に国道1号バイパスの建設に先立って発掘調査が行われている。ここでは縄文時代中期の石囲炉をもつ竪穴式住居が検出されている。

一方、右岸域は最も河岸段丘が発達した部分で、およそ流れに平行に奥行きのある平坦面を形成している。河岸段丘上に縄文集落が発達したこの地域にとっては、集落を営むのに格好の場所である。旧石器時代の遺物も原ノ平・宮上・中原遺跡等で出土している。この地域は県下有数の茶産地の一角にあたるので、茶樹の改植に伴う発掘調査が頻繁に行われている。東鎌塚原遺跡は、この地域の遺跡分布のほぼ中心にある、縄文時代中期後半の遺跡である。『静岡縣史』にも記載され、昭和20年代後半から藤枝東高や島田高の郷土研究部が表面採集を行っている。発掘調査は昭和63年以降断続的に行われており、六角形のプランをもつ竪穴式住居が検出されるなど注目される発見がある。

御小屋原遺跡は、東鎌塚原遺跡より西へおよそ1㎞隔てた場所にある。ここでも平成4～18年にわたり茶畑の改植に伴って断続的に発掘調査が行われ、縄文時代中期の配石遺構が検出されている。



第３図　牛尾山の地形と本調査範囲

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の体制

本書で報告する駿河山遺跡の調査は第１表に示した体制で実施している。実際には、第二東名建設事業に伴う掛川工区〈金谷町（現島田市）・掛川市・森町・豊岡地区〉の埋蔵文化財発掘調査として体制を組んでおり、同表は島田市金谷地区に関わる一部である。なお、金谷地区の体制については、すでに記したものがある（静岡県埋蔵文化財調査研究所2006）。

第１表　調査体制と実施内容（平成21年度まで）

			平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
所長			齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	齋藤　忠	清水　哲	天野　忍
副所長				山下　晃	山下　晃	山下　晃	飯田英夫	飯田英夫	飯田英夫					
常務理事兼事務局長												清水　哲		
事務局次長												大場正夫 佐野五十三 及川　司 稲葉保幸		
総務部	常務理事兼総務部長		伊藤友雄	伊藤友雄	伊藤友雄	粂田徳幸	粂田徳幸	粂田徳幸	平松公夫	平松公夫	平松公夫			
	次長							鐵田英巳	鐵田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎			
	総務課長		杉本敏雄	杉本敏雄	杉本敏雄	本杉昭一	本杉昭一	鐵田英巳	鐵田英巳	鈴木大二郎	鈴木大二郎	大場正夫	大場正夫	松村　享
	担当	経理担当員	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸	稲葉保幸				
		総務係長	田中雅代						芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	芦川美奈子	山内小百合	山内小百合
		会計係長	杉田　智								杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝	杉山和枝
		副主任			鈴木秀幸	鈴木秀幸			中鉢京子	中鉢京子				
		主事		鈴木秀幸			鈴木秋博	鈴木秋博						
調査研究部	部長		石垣英夫	佐藤達雄	佐藤達雄	佐藤達雄	山本昇平	山本昇平	山本昇平	石川素久	石川素久			
	次長			佐野五十三	及川　司	栗野克巳 及川　司	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	栗野克巳 中嶋郁夫	佐野五十三 及川　司 稲葉保幸		及川　司 稲葉保幸	及川　司 稲葉保幸
	次長心得		佐野五十三											
	担当課長		遠藤喜和	及川　司	及川　司	及川　司	篠原修二	足立順司	中嶋郁夫	中嶋郁夫	及川　司	及川　司	及川　司	及川　司
	会計担当										稲葉保幸	稲葉保幸 中鉢京子	稲葉保幸 中鉢京子	稲葉保幸 中鉢京子
	担当係長										河合　修	河合　修	河合　修	河合　修
	工区主任			飯塚晴夫	飯塚晴夫	加藤理文								
	主任調査研究員		飯塚晴夫							河合　修				
	調査研究員		石田　勉 諧星雅一 河合　修 川上　努	石田　勉 諧星雅一 木崎道昭 河合　修 川上　努 大林　元	大畑　要 諧星雅一 川上　努 中田　出 河合　修	河合　修 福田光俊	川上　努	川上　努	川上　努	鈴木淑子	鈴木淑子	鈴木淑子	松川淑子	
	保存処理室長					西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二	西尾太加二
実施内容	現地調査		確認調査	本調査	本調査	本調査								
	資料整理						金谷地区全体を対象として実施							

第２節　発掘調査の方法と経過

１　確認調査

1998年８月18日から、周知の包蔵地である駿河山遺跡の一部である91地点全域（21,637㎡）を対象とし、試掘･確認調査を開始した。試掘・確認調査では、対象範囲のすべてを網羅するように路線の方向に平行・直交する位置に幅１ｍで任意の長さのトレンチ36ヶ所を設定した。掘削は主にバックホーを用い、壁面と底面の一部を人力で行った。掘削は同19日より対象範囲の東端から開始し、９月第３・４週と10月第３週が降雨のためほとんど作業ができなかったものの、10月30日までに予定個所のすべての調査を終了した。記録は各トレンチの平面図・土層柱状図を作成し、35㎜カラーネガを用いて状況写真を撮影した。記録の終了したトレンチは随時安全のために一旦埋めもどすこととした。

一帯はほぼ全面が茶畑として利用されていたが、茶木は調査着手前までに元位置で専用機械により粉砕されていた。土層は上位から５層（Ⅰ～Ⅴ）を確認した。Ⅰ層は黒ボクを主体とする層で、層厚は0.1～0.8mを測る。このうち地表面に近い部分は茶畑などの耕作土として利用されていたため撹乱を受けていた。下位には撹乱を受けていない個所が部分的に存在していたが、撹乱の深度がまちまちであり複雑に切り込む部分が多く認められたので両者を厳密に区分することは困難であった。Ⅰ層上位には撹乱によって巻き上げられた縄文時代以降現代に至るまでの遺物が混在して含まれ、Ⅰ層下位には古墳時代前期以前の遺物が主体となって含まれている。

Ⅱ層は褐色シルト層で最大0.4mの厚みを測るが、Ⅰ層が薄い個所では撹乱が及んで消失している。この層には部分的に縄文時代の遺物が含まれる。

Ⅲ層は橙褐色粘土層で、0.2～0.4mの厚みがある。Ⅳ層は黄色粘土層で0.3～４ｍの厚さがあり、Ⅴ

第４図　確認調査トレンチ配置位置図

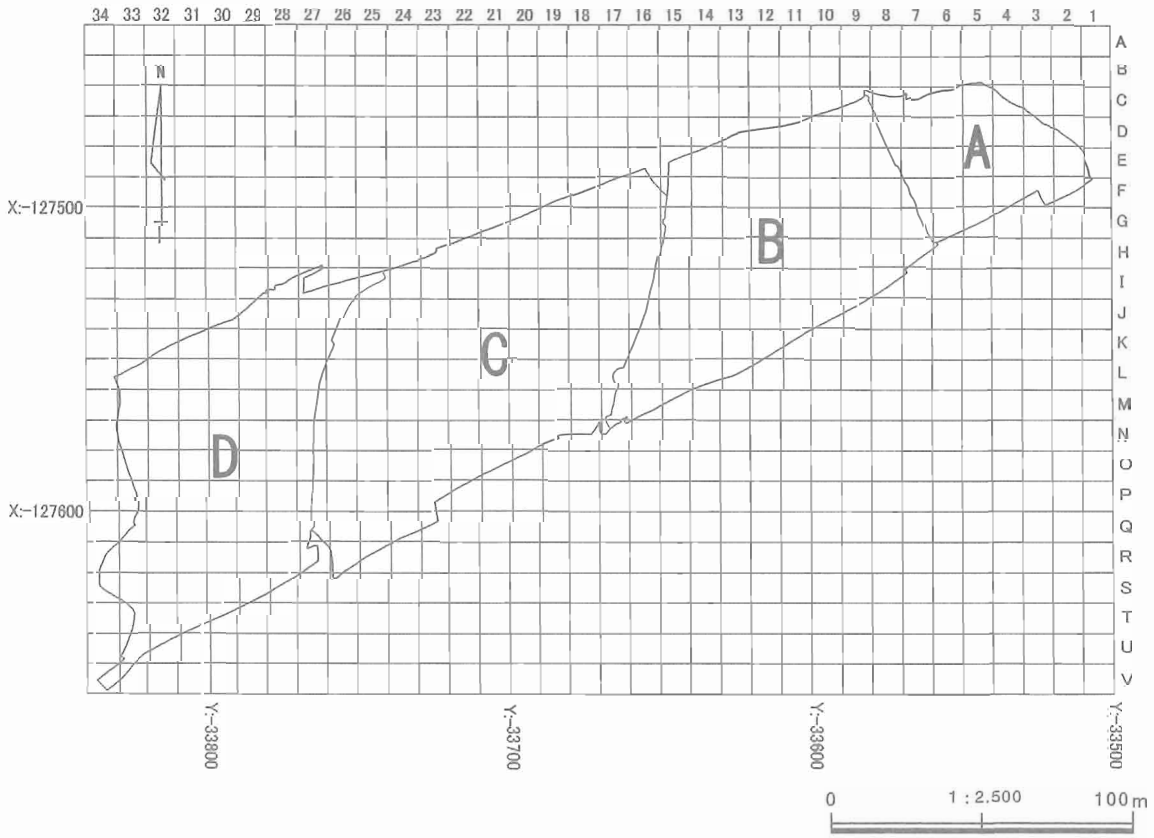
層は地質時代に堆積した握り拳大～人頭大の砂岩の円礫を多く含む黄色粘土層である。場所によって白色味が強いより淘汰された粘土が堆積する場所がある。Ⅳ・Ⅴ層はともに無遺物層である。

遺構・遺物はすべてのトレンチから出土しており、一帯がひとつの広大な遺跡であることが判明した。把握された遺構は竪穴式住居・溝・土坑・小穴などである。特に竪穴式住居は17軒が想定され、対象範囲全体に万遍なく分布することからも、一帯が広く居住域として利用されていたことが想定された。また、13トレンチ南側から19～22トレンチ東側に至る地域はⅠ～Ⅱ層がより厚く、埋没谷のあることが判明した。

2　本調査

確認調査の結果、本調査範囲は開発範囲のすべてに及ぶものと特定された。調査区が広大であり、周辺の茶畑での農作業への影響や排土の取り扱い、道路工事の着手時期などいくつかの考慮せざるを得ない課題が想定されたため、全体を東からＡ～Ｄ区の４つに分割して優先される部分から本調査を実施することとした。この区分はＡ区が先行して着手される工事範囲、Ｂ～Ｄ区が調査区を南北に横断する農道を境にしている。調査面積は確認調査によって道路設計の詳細が明らかになるに従ってやや増加し、最終的には24,189㎡となっている。調査は、排土置き場の移動を最小限にするためにＡ区・Ｄ区・Ｂ区・Ｃ区の順番で実施した。

耕作によってⅠ層上位が攪拌されⅠ層下位へ複雑に切り込んでいる状況が把握されていたので、Ⅰ層の除去は0.25㎥積みのバックホーを用いて実施し、排土の移動は主にクローラーダンプを用いて行うこととした。Ⅰ層全体をバックホーで除去することによって、この「複雑な切り込み」は主に茶畑の改植によるものと判明した。茶樹は、樹勢がおとろえると抜かれて新たに植え直される。農道に接する茶畑では昭和30年代半ば以降、この作業に伴ってブルドーザーを搬入し天地返しを行っている。このブルドーザーには幅３ｍ程度で９本の爪が備えられたバケットが取り付けられていたようで、Ⅰすくい２ｍ



第５図　本調査区とグリッド配置図

程度の幅で掘削痕が連続して残されている。また、Ｂ区の北東端からＡ区の北西側に至る部分はＶ層に至るまで箱状に掘り取られている。Ⅲ～Ⅴ層上位は耐火性に富む粘土なので、掘り採られて志戸呂焼など在地の焼物生産に用いられた可能性が高い。

遺構の検出面は２面とし、基本的には弥生～古墳時代の遺構（第１面）をⅡ層上面、縄文時代（第２面）の遺構をⅢ層上面でそれぞれ検出することとした。これは、確認調査の状況下から黒ボクを主体とする覆土に弥生・古墳時代遺構が多く、Ⅱ層に類似した褐色シルトを覆土とする遺構がこれらより古く位置づけられると考え、それぞれが明確に判別できる位置を求めた結果である。

しかしⅠ層除去が進むにつれて、下位の層位に起伏があることが明らかとなった。水平にⅠ層を除去した場合、埋没谷状にへこむ部分にはⅠ層が残存することとなった。これらの部分は耕作が及んでいないことが多く、丹念に検出することによって第１面の遺構を見出すことができた。また、第２面に相当する遺構もこの部分では黒ボクを主体とする覆土となることが予期された。しかし、明確な遺物が出土しない限り第１面の遺構と分離することは困難であった。第２面の調査は窪んだⅢ層上面で実施しているが、縄文時代遺構の中でも著しく深いもののみを抽出することとなった。

測量杭は表土除去が終わった後に20m間隔で区ごとに打設することとした。

なお、調査に要する仮設建物は、当面は確認調査の際にＣ区南東隅に設置したものを調査棟に改造し、北側に平行して作業員棟を増築することで対応することとし、Ｃ区の調査の際には調査が終了している予定のＤ区へ諸施設とともに移設することとした。

Ａ区の調査

最初に本調査へ取りかかった個所は調査区東端部分にあたるＡ区である。ここには大井川にかかる橋梁の橋台を建設することとなっており、工事によって掘削される範囲に事後の調査への安全な間隔を加味した2,200㎡を調査実施平面積とした。本調査は平成10年10月６日から開始した。表土を全面にわたって除去し後、工事の対象範囲となる東半部分を優先して調査することとし、人力掘削に取り掛かった。11月25日までに東半部の第１面の調査が終了し航空写真測量を実施したのち、検出面を解体した。これとともに西半部では第１面の調査を開始し、東半部の第２面の調査と並行して実施した。翌年１月８日までにこれらの掘削作業を終え、翌週の13日に航空写真測量を実施して西半部の第１面及び東半部の調査を終了した。西半部第１面の解体は１月18日から開始し、同26日から第２面の調査に着手した。１月29日、土坑ＳＫ70625から硬玉製の大珠が出土し、主に長楕円形を呈する大型土坑は墓であることが判明した。第２面の遺構の掘削は２月２日までに終了し、全体清掃後、同８日から16日にかけて遺構の全体測量を実施してＡ区の調査を終了した。

調査区の外周に掘削した排水溝から、チャートの縦長剥片が出土している。これはⅢ層上位から出土したもので、当遺跡の最も古い遺物である。Ａ区ではⅢ層中に遺物が含まれる可能性があると考え、調査終了後に確認トレンチを複数個所人力で掘削したが、他に遺物を得ることはできなかった。

Ｄ区の調査

Ａ区に継続して調査に着手したのは、最も西にあたるＤ区であり、調査実施平面積は6,429㎡である。平成11年３月からは作業員等の増員に対応するための仮設建物や駐車場の整備、防塵ネットの設置、Ⅰ層の除去等を並行して実施し、実質的な人力掘削作業の再開は４月20日となった。調査に際して発生する排土は、ベルトコンベアーの先に２ｔ積みのクローラーダンプを常駐させて受け止め、隣接するＣ区に設けた排土置き場に積み上げることとした。この排土置き場には当初簡易なゲートが設けてあったが、調査休業日に第三者が侵入しⅠ層に紛れていた遺物を採取するという事態が複数回発生したので、以後危険防止の観点からも厳重かつ施錠の可能なものに切り替えている。

Ｄ区の調査は、当初北側に未買地が存在していたので、南側3/4程度の範囲で調査を先行した。20人

程度１班のグループを３班編成し、西から遺構検出・掘削に取り掛かった。５月中旬までかけて１面の遺構検出と確認調査トレンチの再掘削を実施し、確認調査では把握できなかった方形周溝墓が複数基存在することが確認された。これらはより新しい遺構であると考え方形周溝墓の調査を隣接する竪穴式住居より優先して実施することとした。方形周溝墓の掘削は８月末までかかり、９月初頭に一旦全体写真を撮影した。この後、竪穴式住居の調査に取り掛かり、10月初旬までに終了した。

竪穴式住居には炉が良好の残存している例が複数存在したので、広岡公夫氏（当時富山大学教授）に熱残留地磁気測定のサンプル採取を依頼した。以後の第１面検出住居跡に関しても同様に、サンプル採取を広岡氏へ依頼した。

Ｄ区のⅡ層は北西側の一部を除いてほぼ無遺物層であることが第１面の調査中に把握されていたので、Ⅱ層の除去も主にバックホーを利用して行った。Ⅱ層の除去は11月下旬に終了し、随時遺構検出・掘削に移行した。第２面では小穴や風倒木痕が多く、年末までに測量までを含めて調査を終了した。

第１面の調査中に、Ｄ区北側にあたる用地が確保されたので、Ｄ区南側の１面解体に合わせて北側のⅠ層除去を実施することとした。北側部分の第１面では大型の方形周溝墓が複数基検出され、南側からの連続性を確認した。第１面の調査は１月下旬に終了し、実測・Ⅱ層掘削を経て第２面の調査に移行した。第２面は３月中旬までに検出・掘削・実測作業がすべて終了した。

Ｄ区北側の調査に並行して、平成12年１月上旬から南縁の防塵ネットとベルトコンベアーの設置に利用していた幅およそ４ｍの区域の調査を実施した。この調査によって、崖際にあたる南西隅にまで弥生時代の竪穴式住居が存在することが明らかになり、弥生時代以降崖面の浸食が著しく進んでいることを感じさせた。この部分の調査終了は３月半ばとなり、およそ11カ月でＤ区の調査のすべてを終了した。

調査の終了したＤ区には、バックホーとクローラーダンプを用いてＣ区の排土置き場から土砂を運搬して埋め戻し、上位を均一に転圧した。この作業は３月末までに終了している。

写真１　確認調査

写真２　本調査表土除去

写真３　本調査状況（Ａ区）

写真４　本調査状況（Ｂ区）

また、来るべきC区の調査の際に現農道下も掘削する予定であったので、埋め戻し土を安定させた後の平成12年4月7日からC区・D区間の農道をD区側に切り替える工事を実施した。

A・D区の調査によって、駿河山遺跡を構成する遺構の種類・構造をおよそ把握することができた。この成果によって、後続したB・C区の調査を円滑に運ぶことが可能となった。

D区の調査段階では、北東隅部分が農道との取り合いにより調査が未了であった。この部分はC区の調査期間に並行する平成13年6月に調査を行い、D区の竪穴式住居を巡る溝の延長を検出している。

B区の調査

B区はA区から西側に連続する部分で、調査実施平面積は6,195㎡である。D区のⅡ層除去が終了した11月下旬からⅠ層の除去を開始し年末までに人力掘削が可能な状況となった。B区の排土はC区に設けた排土置き場に仮置きすることとした。

年明けの平成12年1月7日から遺構検出作業に2班で取り掛かった。この時点では、残り1班はD区北側等の作業に従事していた。D区の班の参入は、D区の調査が終了した4月以降となった。

B区の第1面は、古墳時代前期の竪穴式住居の存在が特徴的である。同時期の住居はA区で検出されているがD区では明らかでなく、弥生時代から古墳時代に至る間に土地利用の流儀が改変されていることが察せられた。1月末までに全域で遺構検出作業を行い、随時掘削作業に取り掛かった。3月末までにすべての遺構を掘削し、航空写真測量を実施して第1面の調査を終了した。

第2面の調査は諸準備の後、4月中旬から再開した。第1面遺構を解体しながらⅡ層を除去し、Ⅲ層上で遺構を検出する作業を行った。第1面遺構が希薄であった西半部から北部にかけては第2面の検出作業が順調に推移したが、住居の密集する東半部は住居の解体作業に7月半ばまでを費やすこととなった。6月末に西半部から北部にかけての遺構掘削に目途がついてきたため、2班をⅠ層の除去が終了したC区に移し遺構検出にあたらせた。

東半部の第2面調査は7月半ばから8月下旬まで行い、航空写真測量の後土坑墓を解体した。土坑墓部分の調査がすべて終了したのは9月下旬であった。また、9月下旬からは南縁に設置していた防塵ネットを撤去した後の幅2m程度の調査を継続した。調査は第1面が主体となり、9月末に終了した。

一方でB区の調査に並行して、来るべきC区の調査の際に障害となる仮設建物・駐車場・現農の移設も実施した。仮設建物・駐車場は調査が終了したD区へ移設することとし、平成12年5月末から移設準備を開始し、6月中旬までに完了した。更に埋め戻し土を安定させた後の10月4日からB区・C区間の農道をB区側に切り替える工事を実施した。

C区の調査

C区はB区の調査にめどを付けた2班によって平成12年7月初旬より調査を開始した。B区あるいはD区との境となる農道下についてもここで調査することしていたので、調査実施平面積が8,600㎡といずれの区よりも広大となった。第1面の遺構検出、撹乱層除去から着手し、9月末から遺構掘削に着手した。この部分もD区と同様に方形周溝墓が調査区中央付近に密集して検出されたので、方形周溝墓の掘削から実施することとした。周溝墓の中には周溝内の比較的深い位置と浅い位置ふたつに遺物が集中するものや、周溝を作り足しているとみられるもの、円形を呈するもの等が把握され、D区のあり方とはいささか異なる傾向が把握された。また、調査区南西側で長方形状のプランを有する竪穴状の遺構を検出した。当初は方形周溝墓の一辺かと考えたが対になる溝がなく、直方体状の掘方で底面縁辺に対になる華奢な柱穴があるので、建物遺構であると考えた。この遺構の性格については向坂鋼二氏に現地で指導をいただいている。方形周溝墓群の掘削は11月末までに終了し、全景写真撮影後竪穴式住居の調査に移行した。

竪穴式住居は比較的南東側に密に分布している。構造は他の調査区と同様で、ほぼ近似した時期のも

のと考え調査を行った。竪穴式住居の床面までの調査は平成13年１月上旬で終了し、記録を採った後に解体し掘方の形状を明らかにした。竪穴式住居の調査は３月末までに概ね終了し、13年度は４月上旬から第２面の調査を全域で行うことで再開された。

第２面の調査は遺構検出から取りかかり、４月下旬には遺構分布の全容が明らかとなった。継続して遺構掘削に移行し、調査区東側では竪穴式住居、西側では風倒木痕主体に調査を実施した。また、西側ではなだらかな埋没谷が存在したが、この部分のⅢ層からは頁岩製の尖頭器が出土している。Ａ区で出土したチャート製の縦長剥片と同時期のものと考えられる。第２面の調査は６月上旬で終了し、南北縁辺の防塵ネット設置部分の調査を継続して実施した。この調査は７月中旬で終了し、およそ３ヵ年に及んだ掘削作業のすべてを完了した。

Ｃ区の埋め戻しは、Ｃ区本体部分の調査が終了した直後の６月下旬から開始し、８月下旬に完了した。これに並行して不要となった諸施設の撤去を随時行っている。調査資料は基礎整理作業を行う島田整理事務所へ搬入した後、仮設建物等の撤去を行い、８月31日に調査のすべてを完了した。

調査の記録

調査に係る記録は、図面と写真である。図面は平面図と断面図である。平面図は個所ごとに航空写真測量で作成した。特にＤ区の調査以降は、調査区が広範であることから実機のヘリコプターと航空カメラを用いての撮影が主体となった。断面図は手取りで作成し、測点は各グリッド杭から座標値をトータルステーションで計測し記録した。また、Ｄ区の調査以降は、遺構図に撹乱を下端まで入れて明示することとした。これは、耕作による撹乱が至る所に存在して撹乱中に遺構が残存する例が多く認められたことから、相互の位置関係を明確にした上で、視覚的にも宙に浮いたような違和感を残さないことを目的としている。したがってＡ区とＢ～Ｄ区では遺構の表現方法が変わっているがご容赦願いたい。

また、竪穴式住居は、床面が遺存するものは一旦床面上までを調査し、記録を採った後に解体し、再度掘方で実測している。床面が撹乱等によって失われている場合は掘方まで完掘している。全体図では

写真５　本調査状況（Ｂ区）

写真６　遺物掘削状況（Ｄ区ＳＺ288）

写真７　断面実測状況

写真８　金谷小学校児童の遺跡見学

写真９　遺物接合・復原作業

写真10　遺物実測作業

写真11　版下作成作業

写真12　原稿執筆状況

床面があらわになった状態を図化しているので、掘方の状態に記されるものはすでに床面が失われているものを示す。

写真は随時35㎜判カラーネガ・カラースライド・モノクロ、６×７判カラースライド・モノクロを用いて記録した。

第３節　資料整理の方法と経過

第二東名建設に伴う発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理は多くの現地調査が終了した段階で実施することとなった。これに先行する基礎的整理作業（出土遺物の洗浄・注記・接合・復原・実測、写真整理、図面整理・修正、各種台帳作成等）は、上志戸呂古窯の現地調査終了後、他の現地調査と並行して実施した。

平成13年度末の時点で掛川工区（金谷地区）の現地調査がほぼ終了したことから、平成14年度から掛川工区（金谷地区）の基礎整理および資料整理を、本格的に開始した。資料整理を必要としていた複数の遺跡の中で、上ノ山遺跡（№93地点）は基礎整理が比較的進展していたため、他の資料整理及び基礎整理と並行しながら、優先的に資料整理を行うことになった。なお、上ノ山遺跡については平成17年度に報告書を刊行し、整理作業のすべてを終了している。上志戸呂古窯の資料整理については、平成17年度半ばから本格的に開始した。資料整理は、遺構図、遺物実測図の作成・修正・トレース、遺物の写真撮影、原稿執筆等の順で行い、これらを編集して平成20年度に報告書を刊行した。

駿河山遺跡の資料整理は、平成17年度12月から本格的に開始し、同24年３月で終了する見込みである。平成19年度には『駿河山遺跡Ⅰ』（図版編）を刊行し、縄文時代編、弥生・古墳・歴史時代編と随時刊行する予定である。

なお、遺物の写真撮影は６×７判のモノクロ及びカラーポジを用いている。

第３章　調査の成果

第１節　概要

１　立地と基本層序

遺跡が乗る牛尾山は島田市牛尾にある。現在は独立丘に見えるが、元来島田市大賀方面の丘陵と尾根続きの河岸段丘であったといわれる。この時期には大井川は牛尾山の西側を流れていたが、天正18年(1590)、時の領主中村一氏によって尾根が開削されて大井川の流路が現在の方向に切り替えられたと伝えられる（天正の瀬変え）。牛尾山が俗に「駿河山」と呼ばれて遺跡名にもなっているのは、大井川の西岸となって遠江国に含まれるこの部分が元来駿河国内であったことを言わんとしている。

牛尾山の頂部はほぼ平らで、近世以降茶畑として盛んに利用されてきた。

一方で斜面部は、地滑りによる崩落が頻繁に起きていたようで、西側斜面一帯には幾筋もの谷状の地形が連続している。Ｄ区南西隅の崖際からも竪穴式住居が検出されたことは、元来の牛尾山の頂部が更に外側へ広がっていたことを物語る。

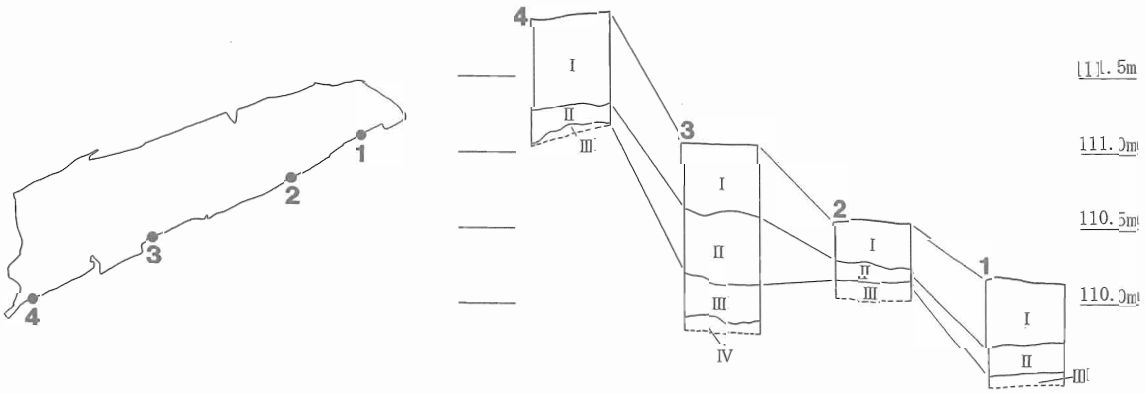
確認調査の段階で基本的な層序はⅠ～Ⅴの５層が把握された。

最上位にあるⅠ層は黒ボクを主体とする層で、層厚は0.1～0.8mを測る。このうち地表面に近い部分は茶畑などの耕作土として利用されていたため撹乱を受けていた。下位には撹乱を受けていない部分が部分的に存在していたが、撹乱の深度がまちまちであり複雑に切り込む部分が多く認められたので両者を厳密に区分することは困難であった。Ⅰ層上位には撹乱によって巻き上げられた縄文時代以降現代までの遺物が混在して含まれ、Ⅰ層下位には古墳時代前期以前の遺物が主体となって含まれている。

Ⅱ層は褐色シルト層で最大0.4mの厚みを測るが、Ⅰ層が薄い個所では撹乱が及んで消失している。この層には部分的に縄文時代の遺物が含まれるが、比較的希薄である。

Ⅲ層は橙褐色粘土層で、0.2～0.4mの厚みがある。Ａ区・Ｃ区のこの層位からは若干量の石器が出土している。Ⅲ層の上面は水平ではなく、穏やかな起伏をもっている。窪んだ部分はわずかな谷地形を形成して、上位に堆積するⅠ～Ⅱ層が厚くなる。このわずかな谷地形は、およそ南北方向に存在し、東西方向にはない。図版編に掲載した図版１～８でみることができるⅠ～Ⅱ層が残存している部分がこれにあたる。茶畑として均された現在では肉眼で判別できないが、元来牛尾山山上は、この起伏を反映して地表面でもある程度の凹凸があったのかもしれない。

Ⅳ層は黄色粘土層で0.3～４mの厚さがあり、Ⅴ層は握り拳大～人頭大の砂岩の円礫を多く含む黄色粘土層である。場所によって白色味が強いより淘汰された粘土が堆積する場所がある。ともに無遺物層



第６図　土層柱状図

である。これ以下は密な礫層を経て軟弱な岩盤となる。

これらの層位のうち、少なくともⅣ層以下は更新世の堆積物である。Ⅲ層下位からＶ層にかけて堆積した粘土は、従来からこの地域で行われている窯業生産に用いられる粘土とほぼ同質である。Ａ～Ｂ区で検出された掘り抜き痕とみられる大きな穴も、粘土採集のために掘られたものとみられる。

2　遺構、遺物の概要

遺構は、縄文時代中期～後期、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代のものが主体である。なかでも前２者に該当する遺構が濃厚である。ここでは、本書で報告する縄文時代の概要を述べる。

縄文時代では、中期前半～後期前半にあたる竪穴式住居・土坑墓群・土坑・風倒木痕などが検出されている。しかし、弥生時代後期以降の土地利用による影響で撹乱が激しく、遺構の全容が判然としないものが多い。遺物量全体から見ると遺構に伴う遺物も豊富ではないため、はっきりとした時期が決定できる遺構も多くはないが、駿河山の台地上に人が住み始めるのは古手の石器の時期として考えられる縄文時代早期頃からであろう。土器が認められるのは縄文時代中期前半からであり、量的に主体となる中期末頃を経て後期初頭～前半頃までは人々の生活が営まれていたと言えよう。

竪穴式住居は、資料整理の段階で柱穴の並びなどから住居跡としたものを含め40軒存在する。このうち、現地調査段階で把握していたものは８軒、資料整理段階で柱の並び等から住居であろうと考えたものが32軒である。主柱穴を４本又は５本有する住居は10軒で、うち埋甕を持つ中期前半のものが１軒（型式不明）・中期末のものが２軒（加曽利Ｅ３・曽利Ⅲ）・後期前半のものが１軒（型式不明）ある。石囲い炉を有する住居は６軒あり、方形の囲いを明瞭に残すものも存在する。中期末頃の住居は不定形ながらある程度円形・馬蹄形を呈して配され、３～４か所の集落を成していたようである。いずれの集落でも出土した土器は加曽利Ｅ３～Ｅ４・曽利Ⅲ～Ⅴが主体であり、同時期か近い時期に駿河山台地上にこれらの集落が存在していたとも考えられる。なお、「２戸一対」という単位が存在する可能性がある。後期初頭～前半と考えられる住居は４軒と少ない。調査区よりさらに南へ住居域が広がっている可能性はあるが、おそらくは明確なまとまりは見せず散在していたと思われる。

石器については、磨石・台石類は住居とほぼ重なるか近接するグリッドから出土しているものが多いのに対し、打製石斧や石錘は住居に囲まれた空間や住居域の外側まで広範囲に及ぶグリッドから出土している。磨石・台石を用いたのは比較的家の近所、打製石斧や石錘の使用空間・作業空間はそれより広く住居域の共有広場や周辺の森林の中まで及んでいたことを示唆している。

土坑墓は、調査区東寄りＡ～Ｂ区の辺りにかけて４つの群を形成している。南の群ほど後期の土器を含む土壙が若干増えることと、群によって包括する土壙の形状にちがいが看取できることから、４つの群には幅狭ながら時期差が存在し、南の群ほど新しい時期のものになると考えられる。もっとも北のエリアＡからはヒスイ製の大珠２点・小玉１点が出土し、被葬者の社会的役割を示唆している。その他の土坑墓では副葬品といえる品は判然としない。土坑墓の上端は耕作の影響もあって検出面を低い位置に取ったために、現況では下端まで深さ10cm以下～20cm程度しか確認できていない。しかし、土壙上部に台石状の石が残っているものからすれば、石から底部までの深さが最大で40cm前後あり、元来の深さを察することができる。本来は土壙の上に盛土され墓石が配されていた状態で埋葬されていたと考えるのが妥当であり、石が低い位置にあるものは抱き石の可能性を考えたい。

風倒木痕は住居域と住居域の間にある程度まとまって存在しているが、同時期に倒れたものとは考えにくい。倒木痕から土器が出土し、穴を利用し土器を廃棄したと思われる個所もある。また、打製石斧が出土した個所があり、倒木を掘り起こす際に使用された石斧が土中に残された可能性を考えた。

調査区西端斜面地の包含層で土器片・石器・石屑の集中する一帯があるが、台地上に集落が存在する時期に長期に渡り土器や石器の破損品・未製品などが廃棄されたゴミ捨て場だと考えたい。

第２節　遺構と遺物

１　竪穴式住居と出土遺物

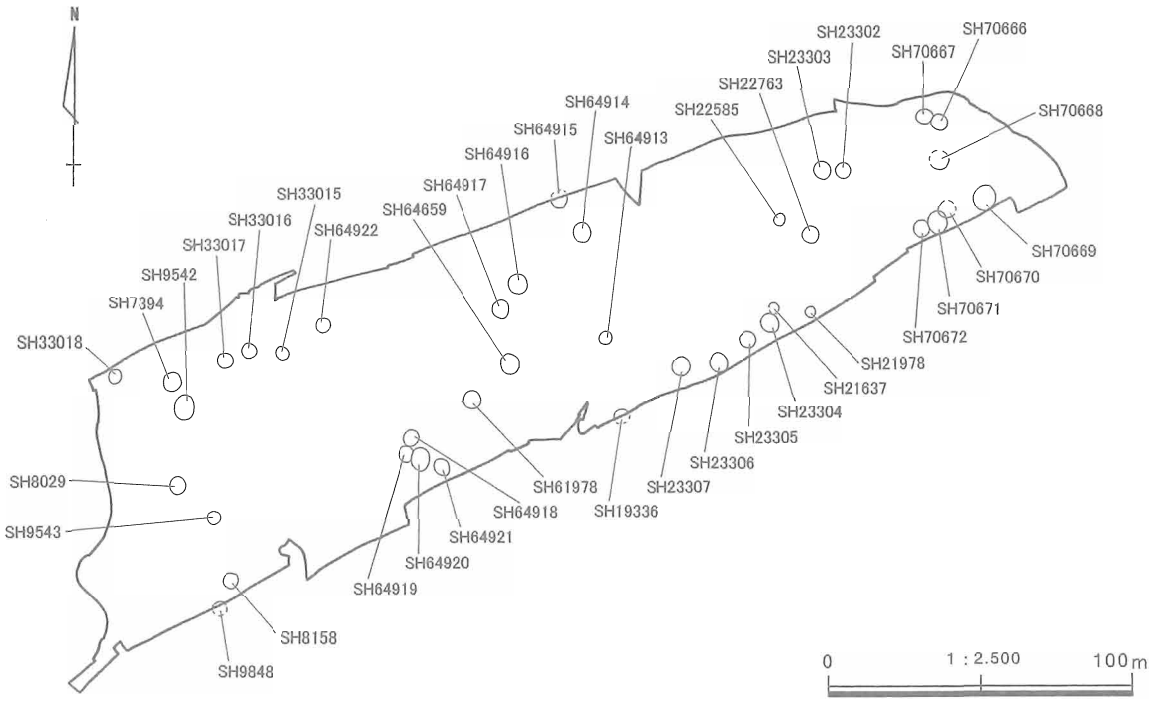
竪穴式住居は、資料整理の段階で柱穴の並びなどから住居跡としたものを含め40軒存在する。埋甕をもつもの、方形の石囲炉をもつもの、主柱穴を４本又は５本もつものなどがあるが、耕作や第１面の遺構の影響を激しく受けているので、様子が明らかなものは半数に満たない。

住居跡の掘方が残存するものをみると、平面形状はいずれも円形であり、多角形状を呈するものは見当たらない。規模はＳＨ21978（直径2.1m）、ＳＨ22585（2.3m）、ＳＨ61978（5.7m）、ＳＨ64659（６m）などから大小の差が認められる。

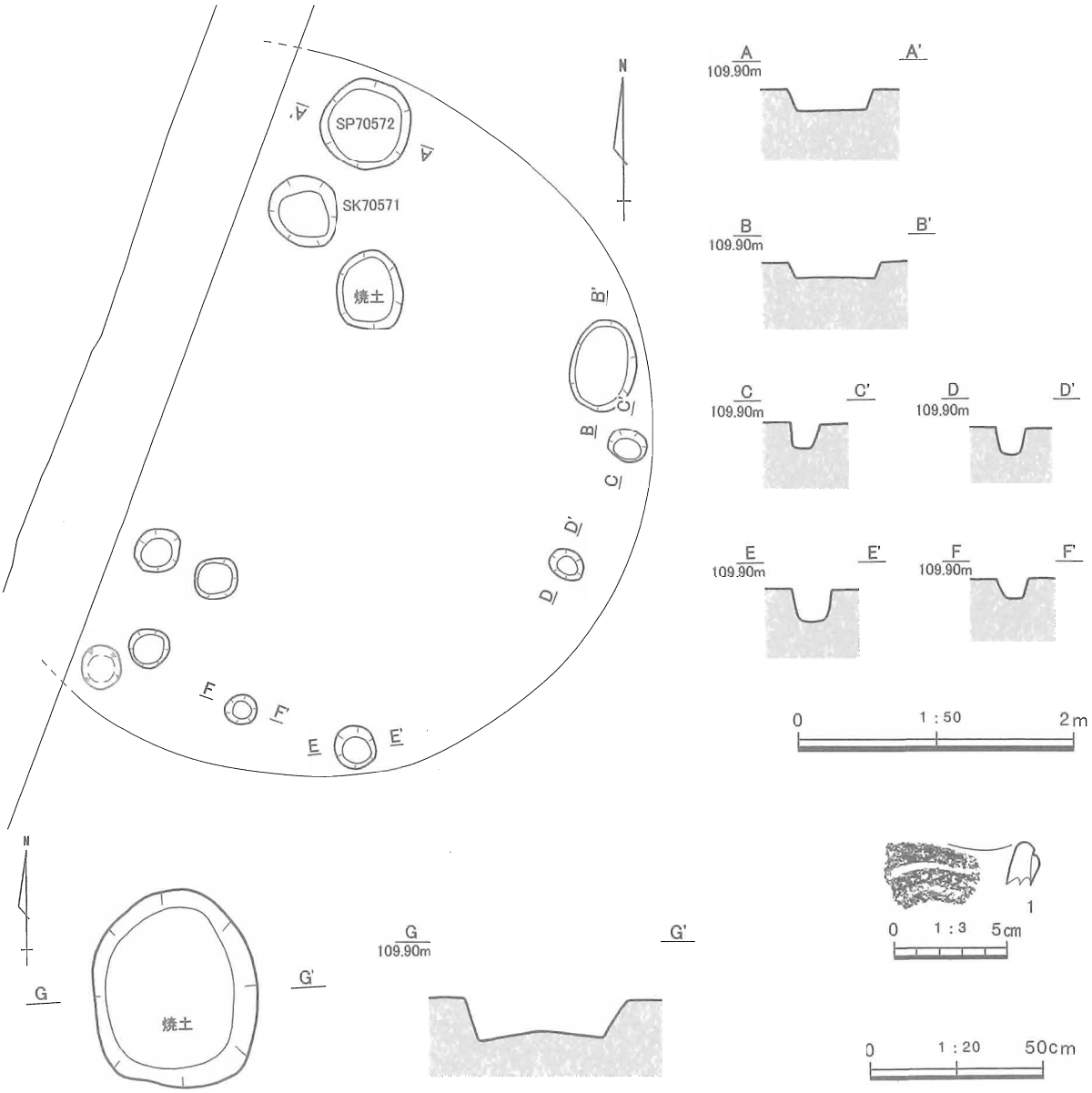
埋甕を有する住居は、埋甕の型式を元に時期を決定した。遺構に伴って出土した土器は破片で点数はさほど多くはないが、加曽利Ｅ３～Ｅ４・曽利Ⅲ～Ⅴなど中期末の土器が大半を占め、これに北裏Ｃ・北屋敷など中期前半～中葉の土器と、称名寺・堀之内など後期初頭～前半の土器が加わる。

今回は縄文時代に属すと考えられる小穴が密集する部分や、同一円周上に複数の小穴が存在する部分も住居跡の可能性を考慮した。これらの構成要素は残存する小穴や炉と思われる焼土、場所によっては埋甕となる。図中に記載した遺構群を取り巻くラインは住居跡とした場合の規模を想定したものである。出土遺物は、厳密には小穴等から出土するわずかなものに限られる。ここでは、住居の想定範囲の上位にある包含層等から出土した遺物をも、元は当該住居に属していたものと想定して取り上げている。

なお、炉が残存するものは炉の遺構番号を、柱穴のみの場合はより若い柱穴の遺構番号を代表させて住居跡の遺構番号としている。以降、調査区東の遺構から順に記載していく。



第７図　竪穴式住居分布図



第８図　ＳＨ70666平面・断面図

ＳＨ70666（第８図）

【遺構】Ｃ５～Ｄ５グリッドで検出された。炉と思われる焼土があり、その周囲に同一円周上に乗る小穴が６か所見出せたことから、柱穴掘方のみ残存する住居であると考えた。

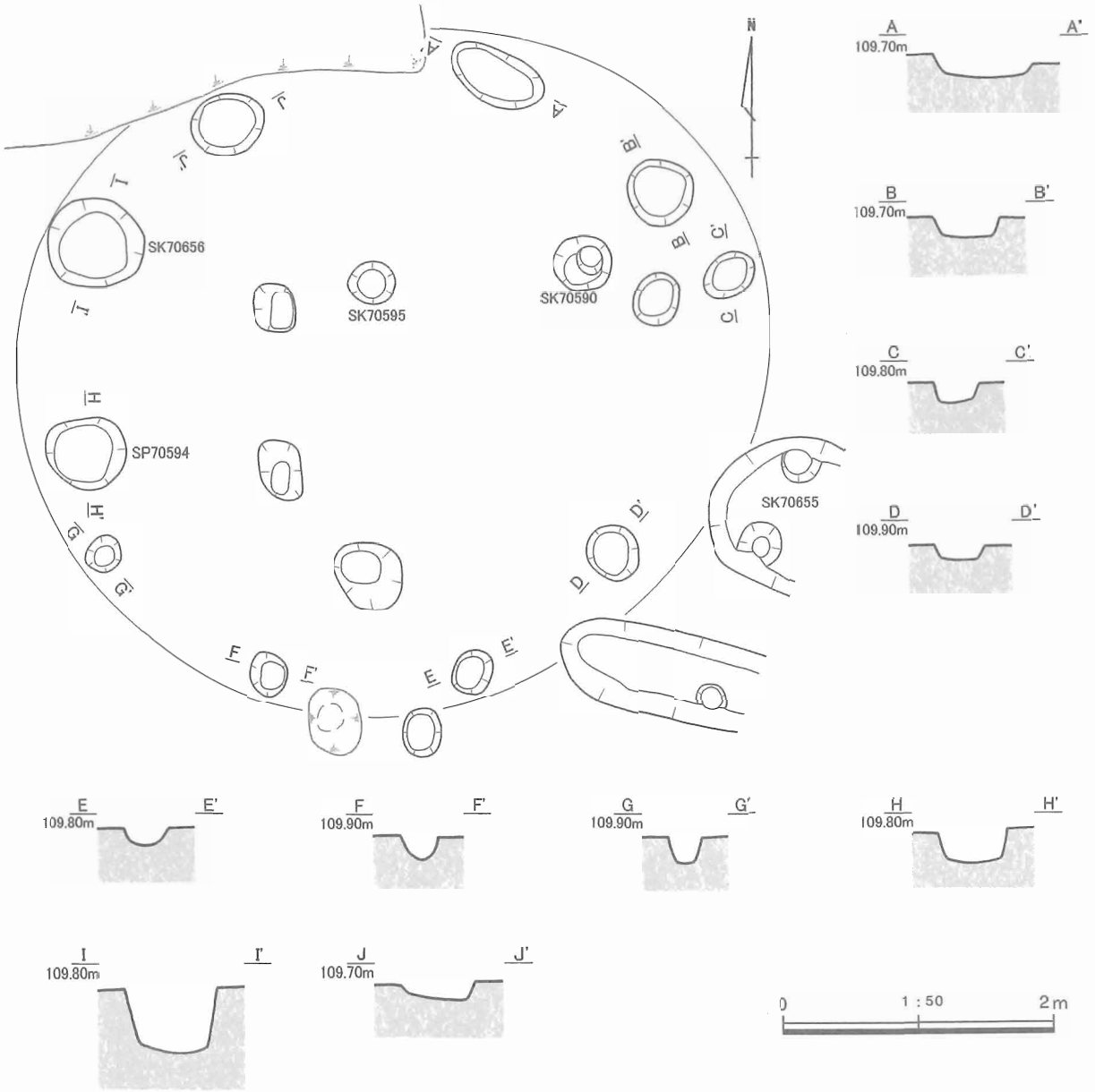
焼土は長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.1m前後の小穴内に充満している状況であった。調査時点では掘方をもつものと捉えたが、地床炉であった可能性も否定できない。

柱穴の可能性のある小穴は６か所想定した。北～東よりにある直径0.65m前後のやや大きな小穴と、東～南よりにある直径0.2～0.3m程度の小さなものがある。トレンチよりも西側では柱穴が確定できなかったので、有機的な関係は判断が難しい。

【遺物・土器】文様のわかる土器片は１点（第８図１）が出土している。土器の文様は波状口縁に沿って粘土紐を貼り付け、上部に刺突を施している。時期は不明である。

ＳＨ70667（第９図・第10図）

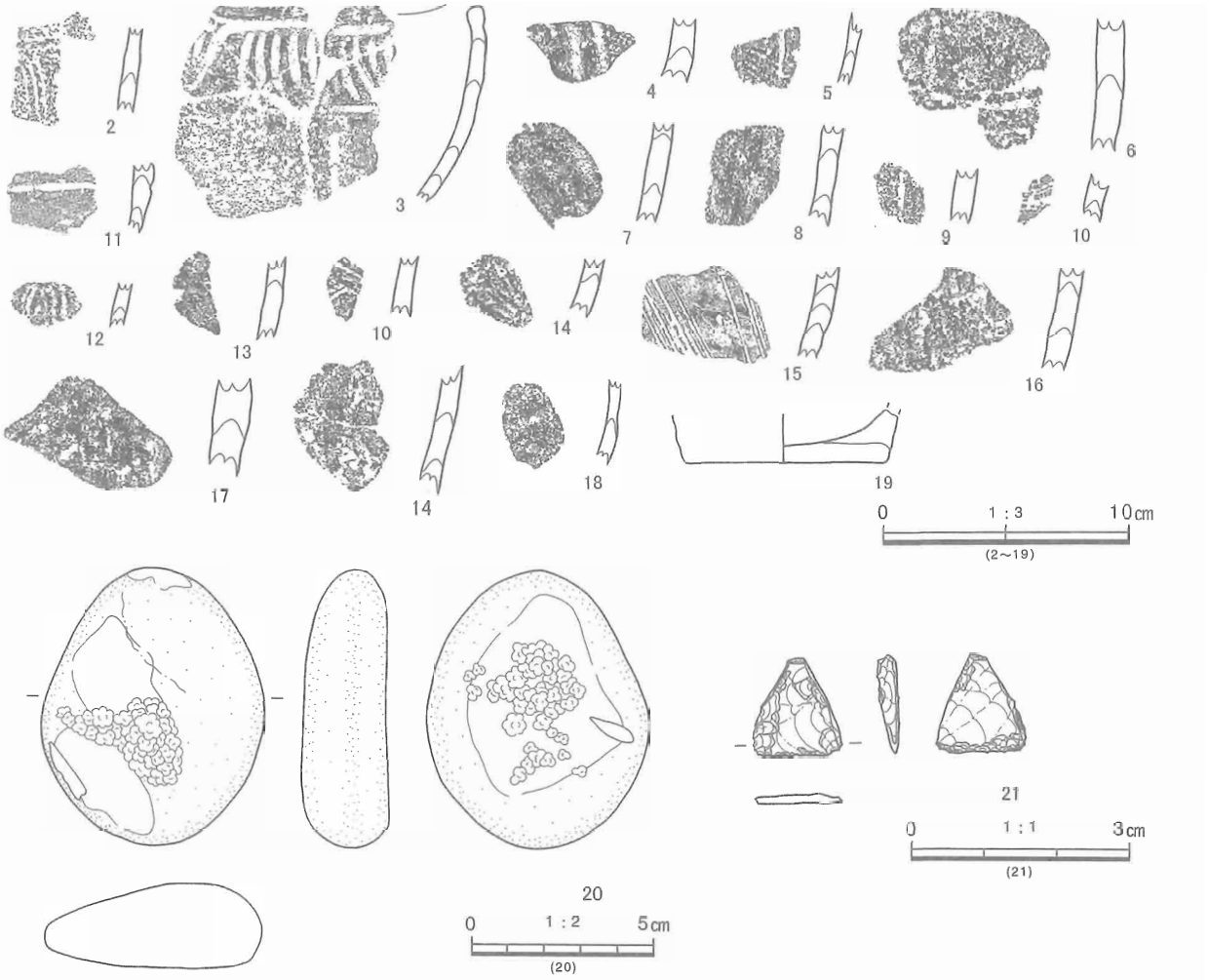
【遺構】Ｃ６～Ｄ６グリッドで検出された。同一円周上に乗る小穴が10か所見出せたことから、柱穴掘



第９図　ＳＨ70667平面・断面図

方のみ残存する住居であると考えた。柱穴と考えた小穴は直径0.5m前後が最も大きく、小ぶりなものでも0.3m程度あり、北～東側が大きく、南側がやや小さくなる傾向がある。深さは0.1～0.2mとやや浅くなる。北西側のＳＰ70656は直径0.62mの土坑状で0.48mと深い。

【遺物：土器】文様のわかる土器片は18点（第10図２～19）が出土している。（第10図２）は半截竹管状工具で縦位沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第10図３）は口縁に沿って横位に沈線を２本引き、区画内に縦位弧状に沈線を付けた在地の加曽利Ｅ３式併行土器である。（第10図４）は縦位隆帯を付け、ＬＲ縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。（第10図５）は横位沈線を付け、条の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。（第10図11）は横位沈線を付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第10図６）は器面が風化しており、横位沈線を付けた後期前半土器である。（第10図15）は胴部に条線を付けた時期不明の土器である。（第10図７～10・12～14・16～18）は沈線を付けたり、無文土器で時期不明である。（第10図19）は底部破片である。



第10図　ＳＨ70667出土遺物

【遺物：石器】（第10図21）はＳＨ70667の柱穴ＳＰ70656から出土した粘板岩製のスクレイパーである。鋭角を作る縁辺２辺を調整し刃部としている。（第10図20）は住居東のＳＫ70655から出土した扁平な中粒砂岩製の敲石である。平らな表裏両面に凹みをもち、磨石としても使用していた。

ＳＨ70668（第11図）

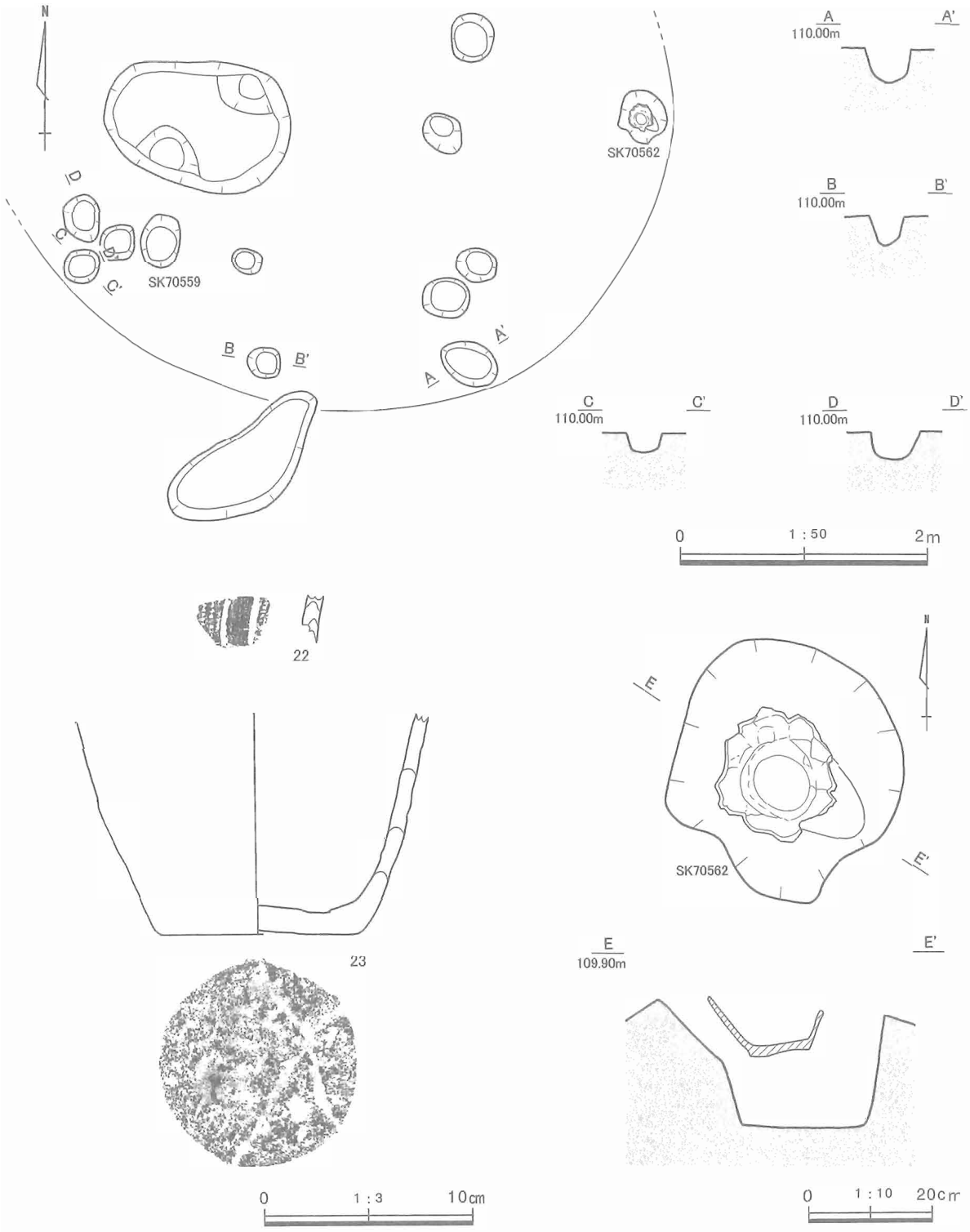
【遺構】Ｅ５グリッドで検出された。同一円周上に乗る小穴が４か所見出せたことから、柱穴掘方のみ残存する住居であると考えた。さらに東端の土坑ＳＫ70562内には埋甕があり、縁辺に埋甕をもつ住居であったと考えられる。柱穴と考えた小穴は直径0.25～0.5m程度で深さ0.15～0.3mと大小差がある。

ＳＫ70562は長軸0.41m、短軸0.37mの南側に凸部をもつ円形状をなし、深さは0.22mである。埋甕は掘方底面から0.11mほど浮いた位置にほぼ水平に底部を置いている。土坑の掘り上げの際に底部に土を残し、平らにならした上に深鉢を据え付けたのかもしれない。胴部半ば以上が失われているので、元来はもっと高い位置から掘りこまれていた可能性は十分ある。

【遺物：土器】文様のわかる土器片は２点（第11図22・23）が出土している。（第11図23）はＳＫ70562から出土している埋甕で無文土器の底部であり、中期前葉から中葉と考えられる。（第11図22）は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付け、沈線を弧状に入れて縄文を磨り消した称名寺式土器である。

ＳＨ70669（第12図）

【遺構】Ｆ４グリッドで検出された。同一円周上に直径0.3m前後の小穴が複数個所に見出せたことから、

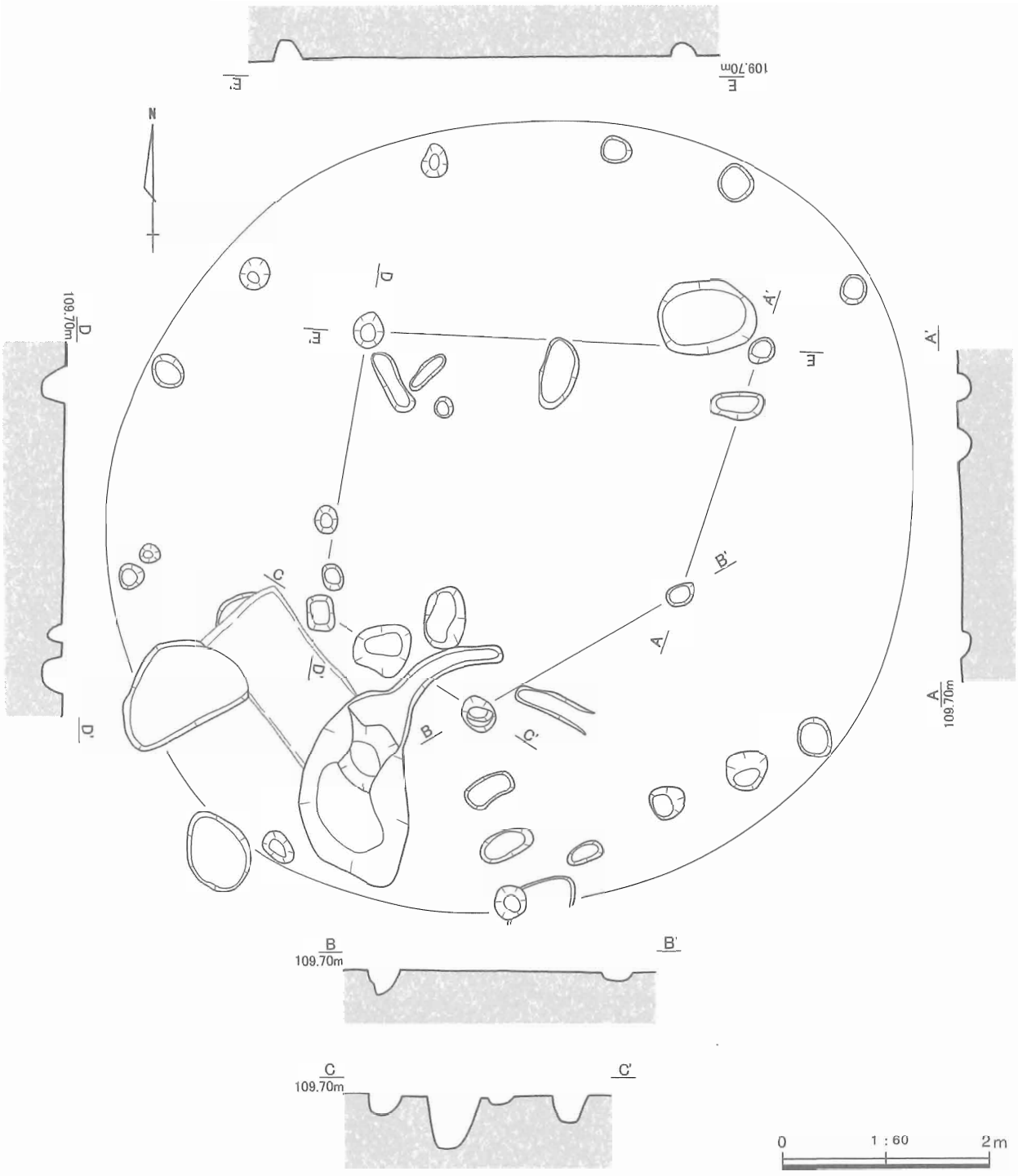


第11図　ＳＨ70668平面・断面図

柱穴掘方のみ残存する住居であると考えた。想定した範囲の中央部には５か所の小穴があり、ＳＨ64659に見るような五角形の配置をもつものとも考えられる。直径0.3～0.55mの円形・方形・不定形をなし、0.1～0.25mの深さがあり、それぞれは1.8～3.8mの間隔がある。

ＳＨ70670（第13図）

【遺構】Ｆ・Ｇ５グリッドで検出された。同一円周上に乗る小穴が11か所見出せたことから、柱穴掘方

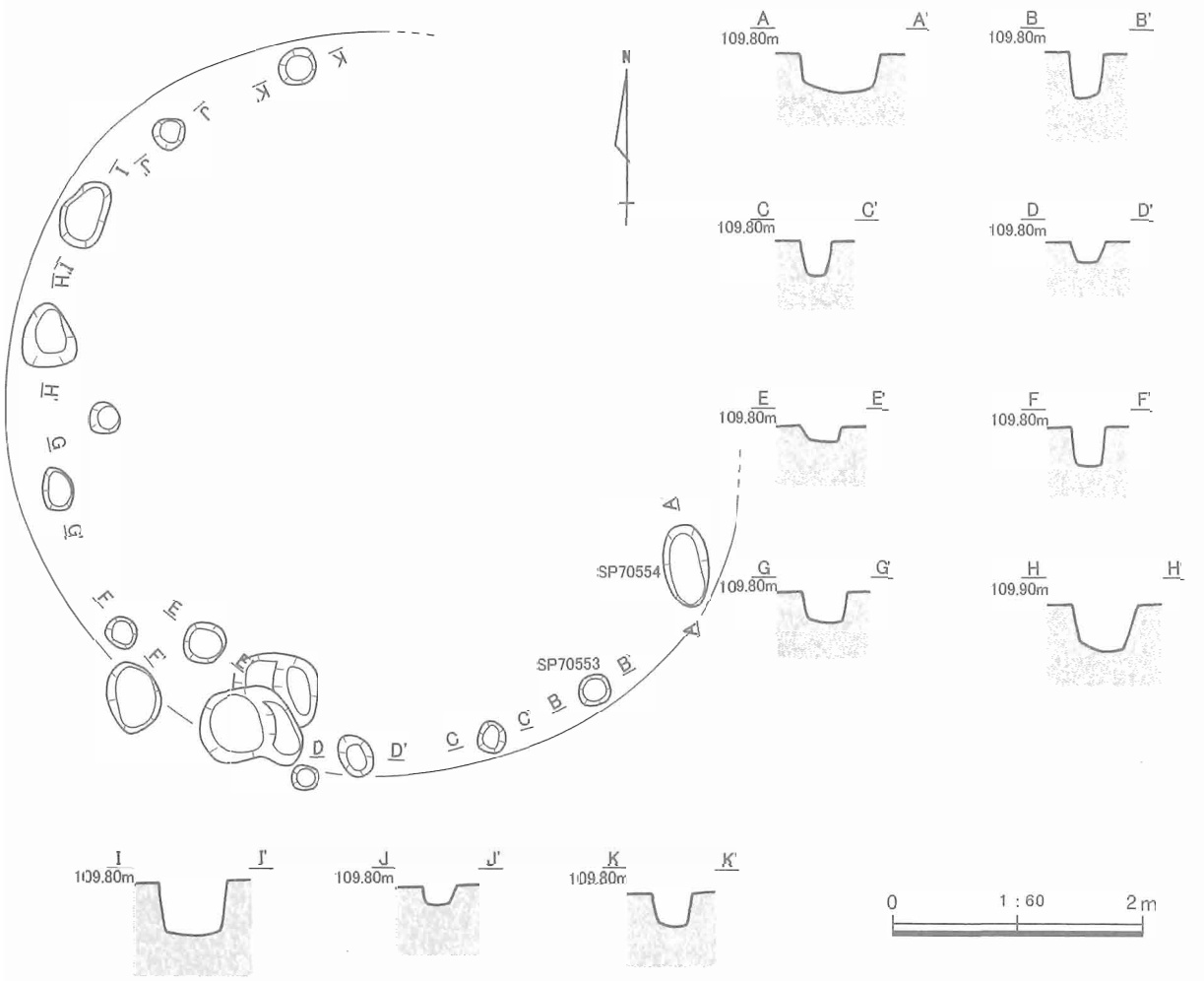


第12図　ＳＨ70669平面・断面図

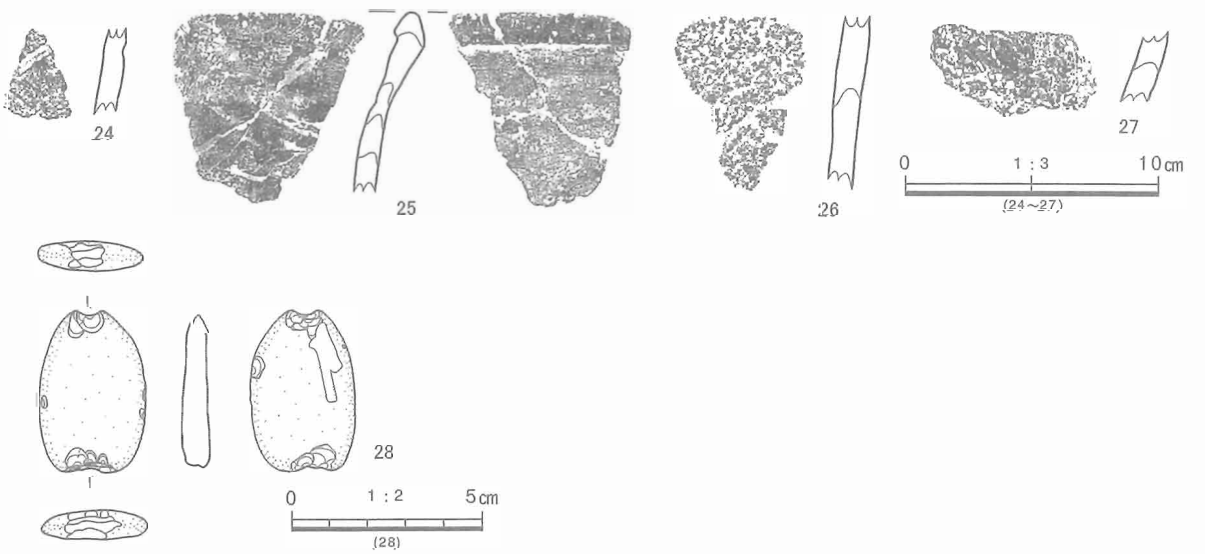
のみ残存する住居であると考えた。北東部は撹乱により相当する小穴は検出されていない。南東端にあるＳＰ70554は長軸0.62m、短軸0.35mの長楕円形を呈し、類似した小穴が西側にも２か所みられる。このほかは直径0.25～0.35mの円形である。深さは0.15～0.45mと均一でない。

ＳＨ70671（第14図）

【遺構】Ｇ５～６グリッドで検出された。同一円周上に乗る小穴が18か所見出せたことから、柱穴掘方

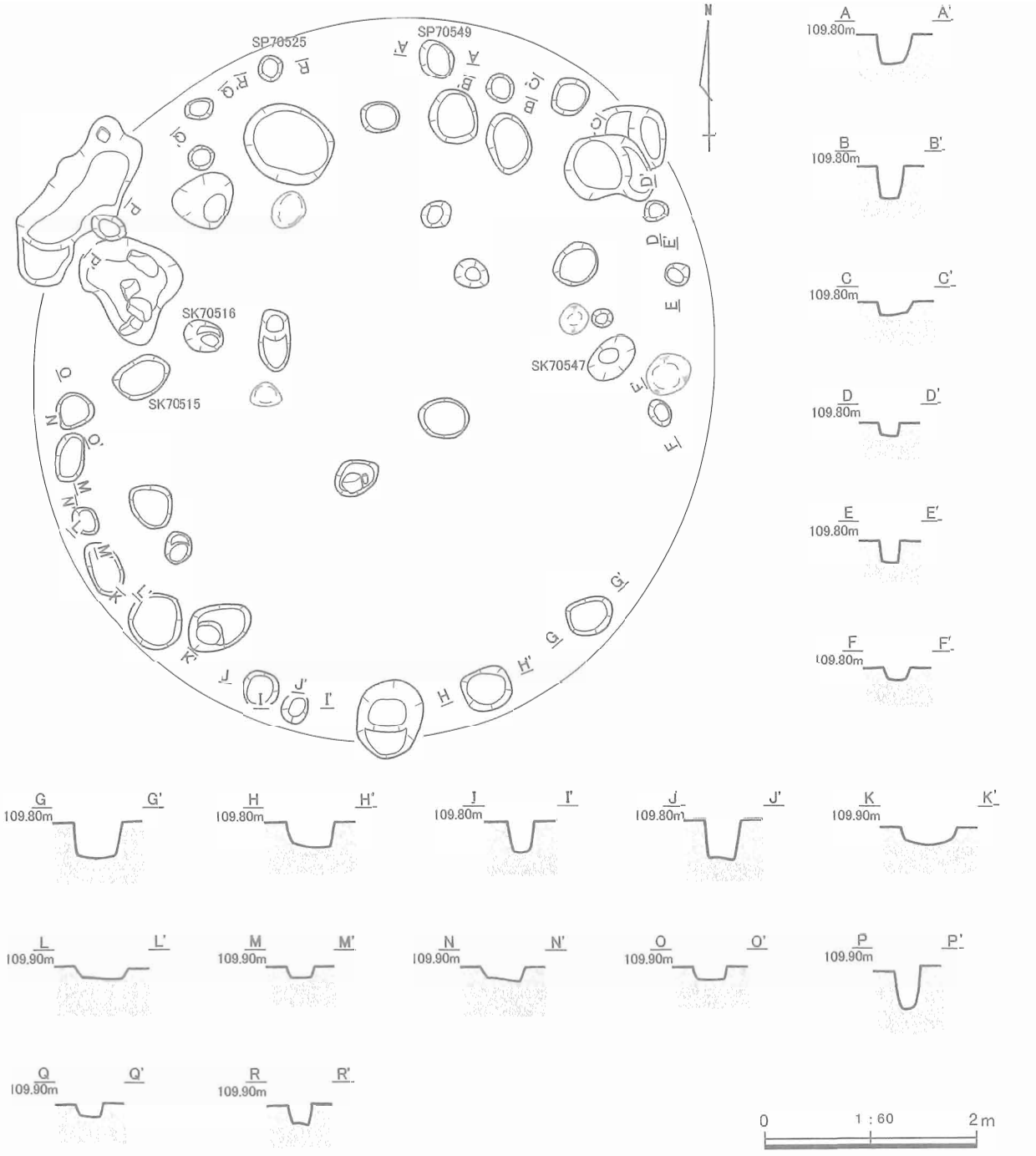


第13図　ＳＨ70670平面・断面図



第14図　ＳＨ70671出土遺物実測図

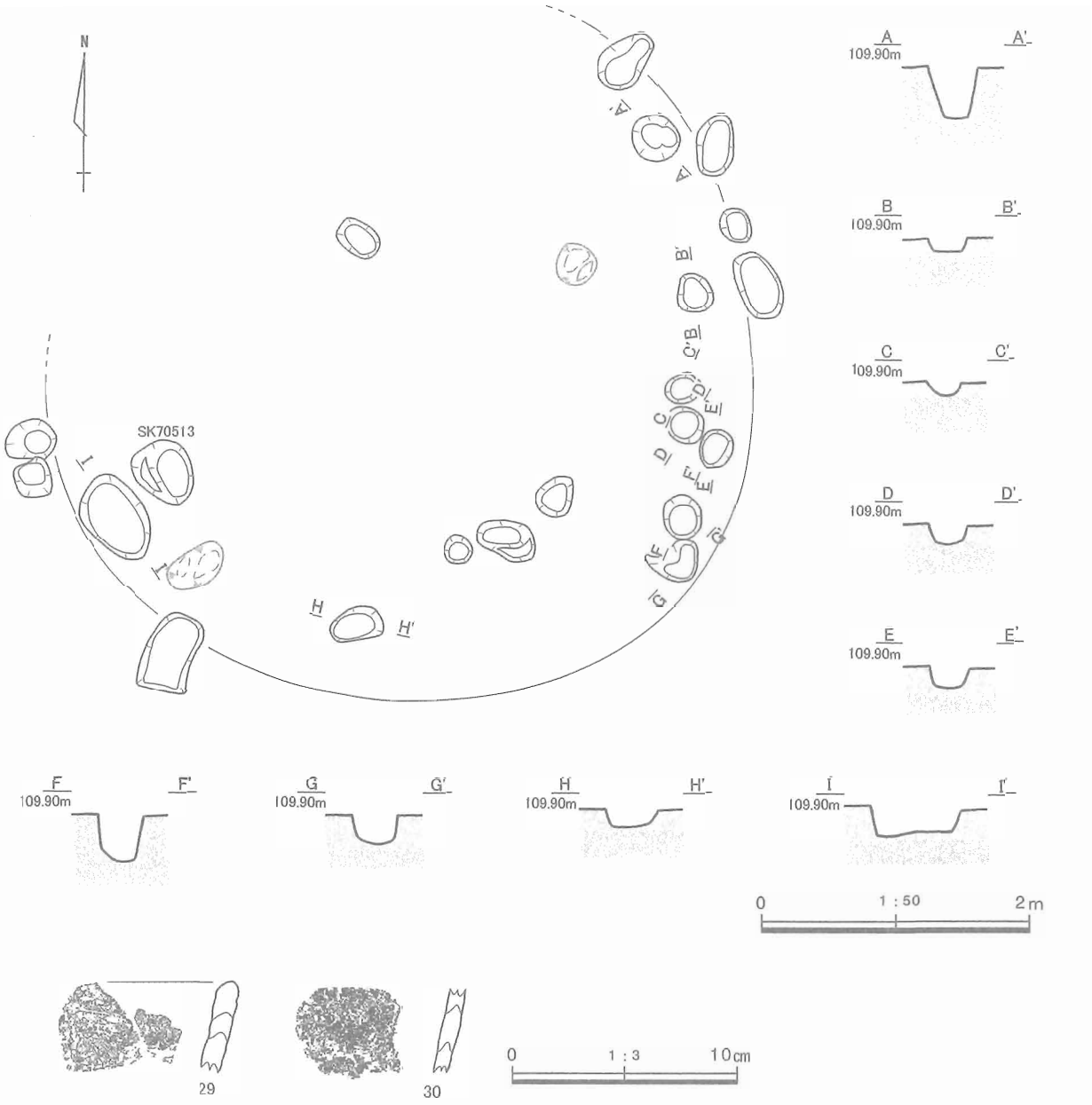
のみ残存する住居であると考えた。柱穴と考えられる小穴は円形のものが主体で、直径20cm前後から50cm程度で、深さも10～40cmほどと差がある。複数時期に属する柱穴が混在している可能性もあろう。



第15図　ＳＨ70671平面・断面図

【遺物:土器】文様のわかる土器片は４点（第14図24～27）が出土している。（第14図24）は繊維が硬く、条の太さ約0.4㎝のＬ縄文を付け、横位沈線を施した北裏Ｃ式土器と思われる。（第14図25）は口縁部が無文であるが、内面が折り返し口縁になっている掘之内Ｉ式土器である。（第14図26・27）は胴部破片であるが、風化により文様や型式が不明である。

【遺物：石器】（第14図28）はＳＰ70547から出土した粘板岩製の打欠石錘である。長軸の両端に縄掛け部が作り出され、その周辺がやや磨滅している。



第16図　ＳＨ70672平面・断面図

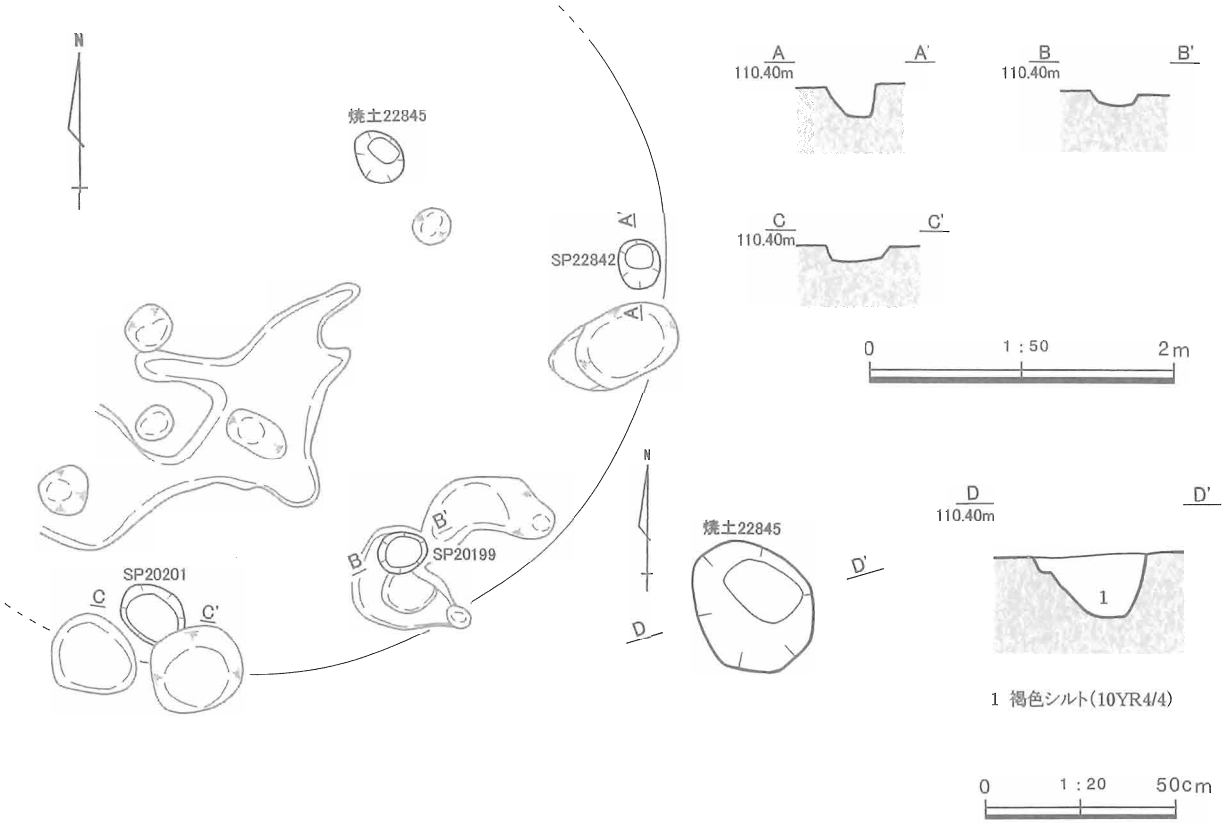
ＳＨ70672（第16図）

【遺構】Ｇ６グリッドで検出された。北西側は撹乱によって遺構の存在が明らかでない。同一円周上に乗る小穴が９か所見出せたことから、柱穴掘方のみ残存する住居であると考えた。柱穴と考えられる小穴は円形・楕円形で、南から南西側に楕円形のものがみられる。円形の小穴は直径25～30cmと近似するが、深さは10～50cmと開きがある。楕円形のものは長軸35～65cm、深さ12～22cmと土坑状を呈する。

【遺物：土器】比較的しっかりした土器片は２点（第16図29・30）が出土しており、いずれも無文で時期不明である。

ＳＨ23302（第17図）

【遺構】Ｅ８・９グリッドから検出された。炉と考えられる焼土22845を内部に持つ住居跡と考えた。周囲には柱穴に該当しそうな小穴が３か所ある。いずれも直径30～40cmの円形で、深さはＳＰ22842が20cmほどであるのに比べ他は10cm前後と浅くなる。



第17図　ＳＨ23302平面・断面図

ＳＨ23303（第18図）

【遺構】Ｅ９・10グリッドで検出された。同一円周上に乗る小穴が10か所、礫を埋める小土坑が１か所見出せたことから、主に柱穴掘方のみ残存する住居であると考えた。小穴は円形で、直径20～50㎝、深さ15～40㎝程度の規模がある。礫を埋める小土坑ＳＫ20314は、住居想定範囲の南縁にある。直径16～20㎝程度、深さ８㎝ほどの円形の掘方に、長軸14㎝の自然礫を立てて埋め込んでいる。住居の床面の高さが分からないので確かではないが、礫の頂部は露出していたものと考えたい。

【遺物:石器】粘板岩製の打欠石錘（第18図31）の完形品が出土した。長軸の両端に縄掛け部をもち重量は24.4ｇの、本遺跡では最も標準的なタイプのものである。縄掛け部から裏面にかけてやや磨滅している。

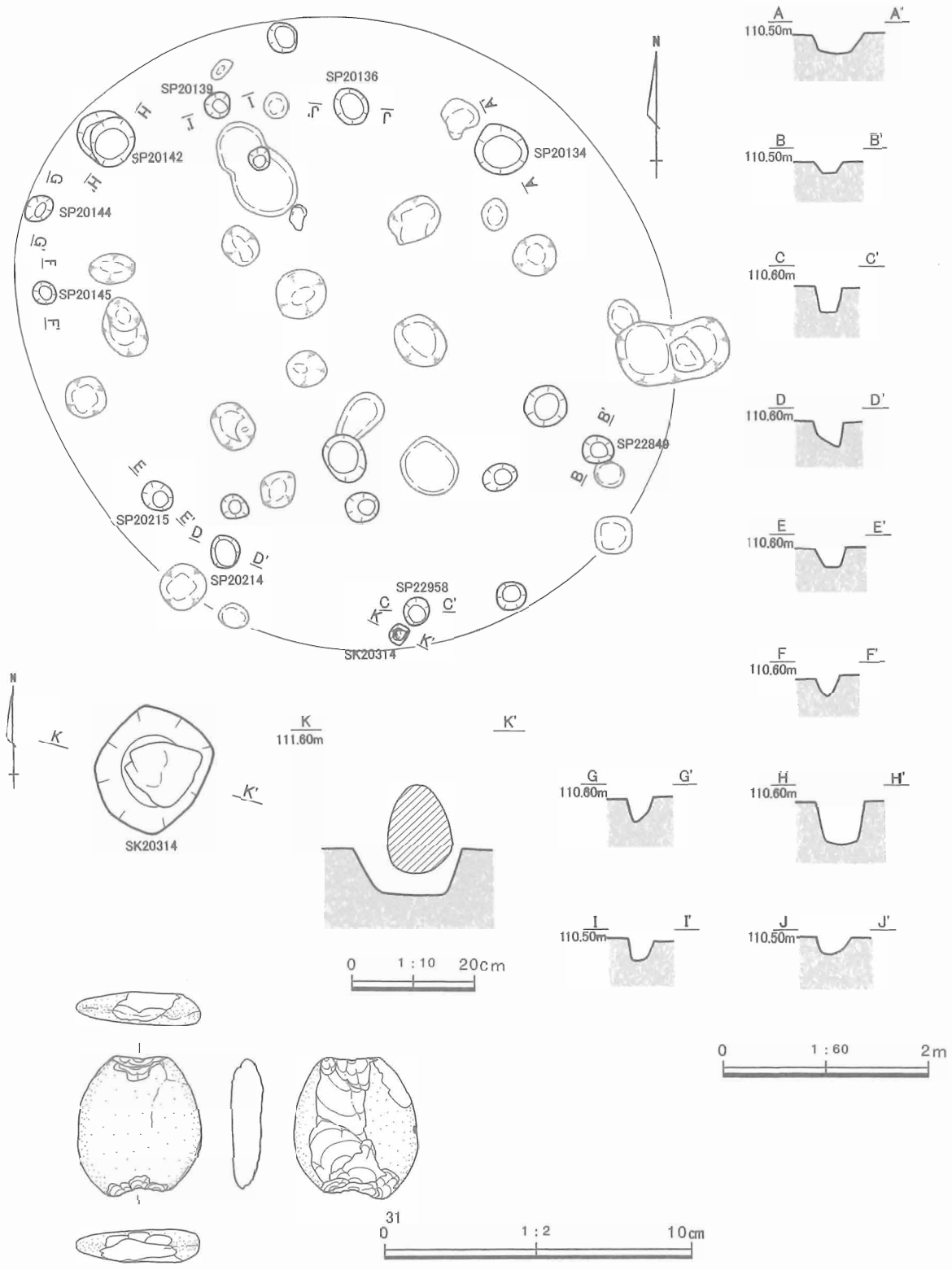
ＳＨ22763（第19図～第23図）

【遺構】Ｇ10で検出された。中央に炉があり、東縁に埋甕をもつ。柱穴は６か所確認された。直径0.4～0.55mの円形で深さ0.45～0.75mを測る。西側のＳＰ22600のみ直径0.9mとひときわ大きいが深さは他と大差ないので、柱穴の一つと考えた。

炉ＳＫ22763は住居のほぼ中央にある。掘方は長軸1.2m、短軸は隣接する土坑ＳＫ22764によって不確かであるが0.8m程度と思われる。一度土坑状に掘り抜いた中に暗褐色シルトを敷きこんで上面を炉に使用している。耐火性を考えてのことだろう。

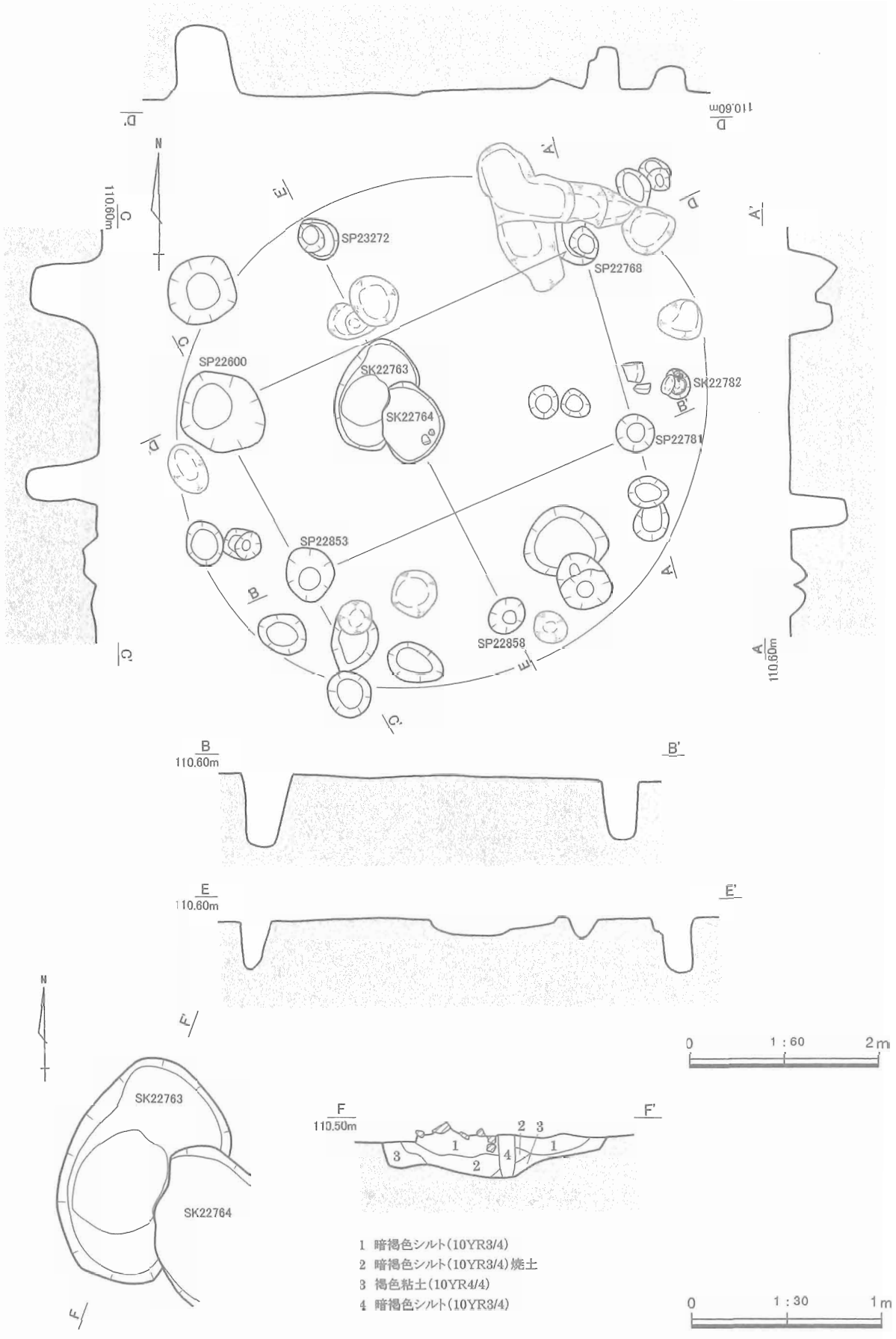
埋甕ＳＫ22782は住居の東縁にあたる部分から検出された。直径0.28～0.32m、深さ0.32mの掘方内に深鉢が据えられる。深鉢の上半部は失われているが、土坑内に小児頭大の自然礫が埋め込まれていたことからも上半部を意図的に割り取って用いていることが分かる。

【遺物:土器】文様などがわかる土器18点（第20図32～49）が出土している。（第20図32）は波状口縁部に沿って連続爪形を付けた北屋敷式土器である。（第20図33）は縦位の沈線で区画した後、条の太さ約

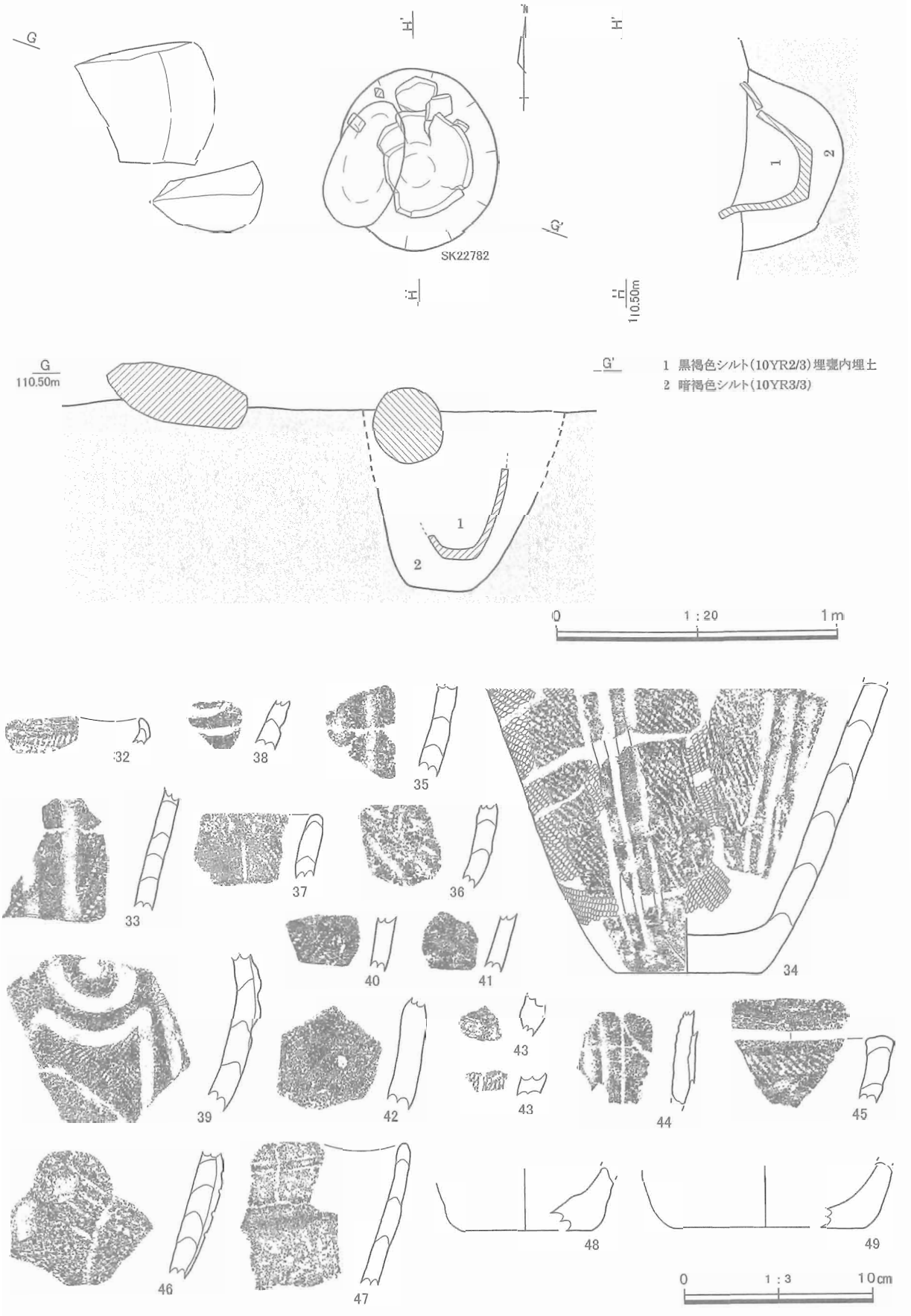


第18図　ＳＨ23303平面・断面図

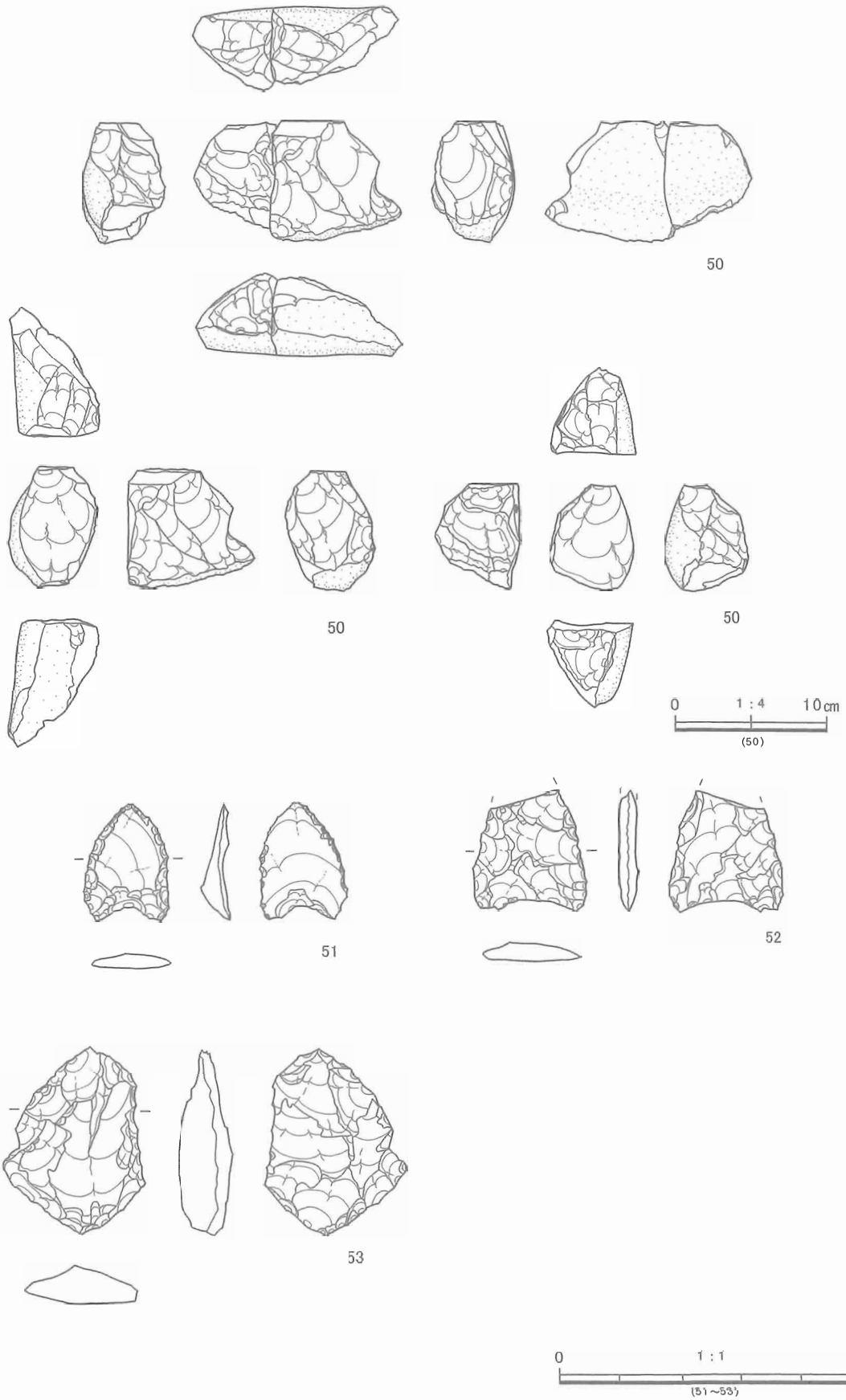
0.4cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第20図34)はＳＫ22782から出土した埋甕で正位に出土した。この土器は加曽利Ｅ３式土器であり口縁部が欠損している。文様は条の太さ約0.3cm、長さ約2.5cmのＬＲ縄文を付けた後、縦位に沈線を入れ磨り消している。(第20図35)は縦位に沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第20図36)は口縁部に連弧文を付けた咲畑式土器である。(第20図37)は条



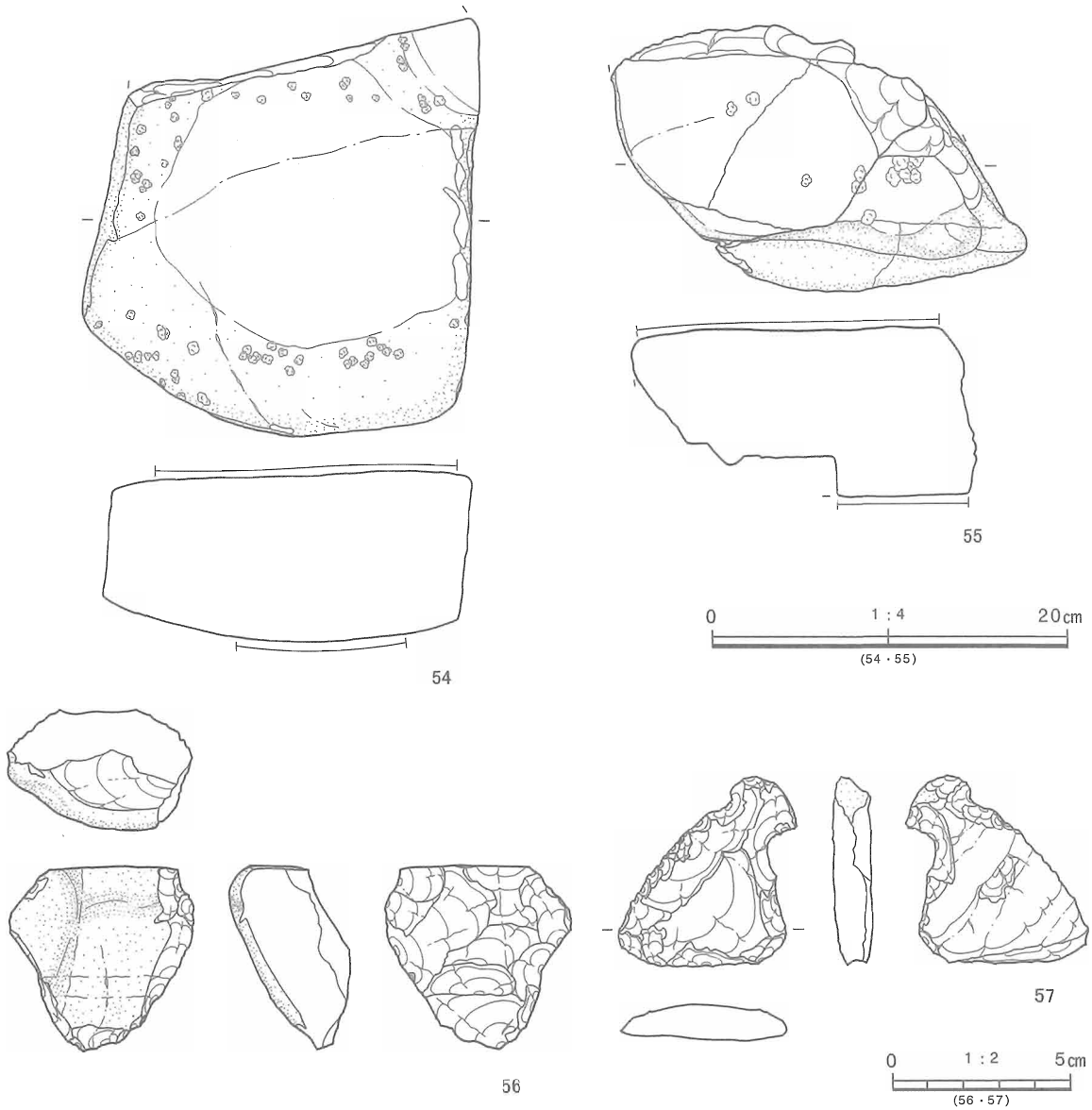
第19図　ＳＨ22763平面・断面図



第20図　ＳＨ22763出土遺物１



第21図　ＳＨ22763出土遺物２

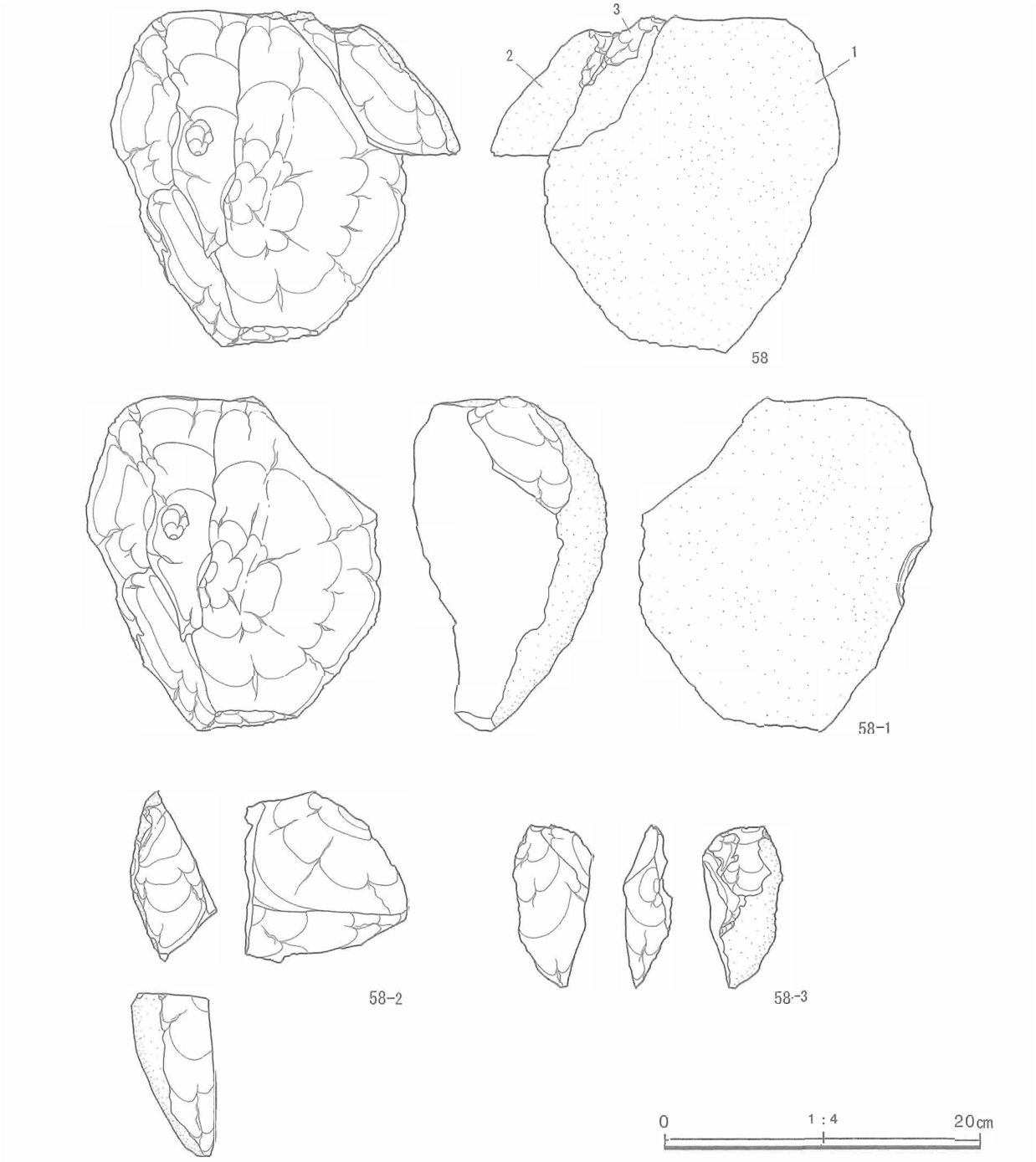


第22図　ＳＨ22763出土遺物３

の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を付けた後、縦位に細い沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第20図38)はハの字状の沈線を付けた曽利Ｖ式土器である。(第20図39)は太い渦巻き沈線を付け、条の太さ約0.2㎝のＲＬ縄文を施した中津式土器である。(第20図40)は条の太さ約0.2㎝のＲＬ縄文を施した型式不明である。(第20図41～43)は無文土器で型式不明土器である。(第20図45)は波状口縁部で口唇部から条の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を施した型式不明土器である。(第20図47)は口縁に沿って横位に沈線を付けた土器であり型式不明である。(第20図48・49)は底部の破片で風化しているが縄文と沈線が付いた型式不明土器である。

【遺物:石器】(第21図50)は炉の覆土から出土した細粒砂岩の石核で被熱している。同じく炉の覆土から出土した(第23図58)の石材と同一母岩と思われるが、接合しなかった。

(第21図51・53)は住居内から出土した石鏃と石鏃未製品で、それぞれ凝灰質頁岩製・珪質頁岩製である。(第21図51)は剥片の縁辺のみに調整を加えた凹基無茎鏃で、表裏とも原石から割り取られた際の剥離面を広く残す。(第21図52)は柱穴ＳＰ22600から出土した珪質頁岩製の凹基無茎鏃で、先端部が欠損している。

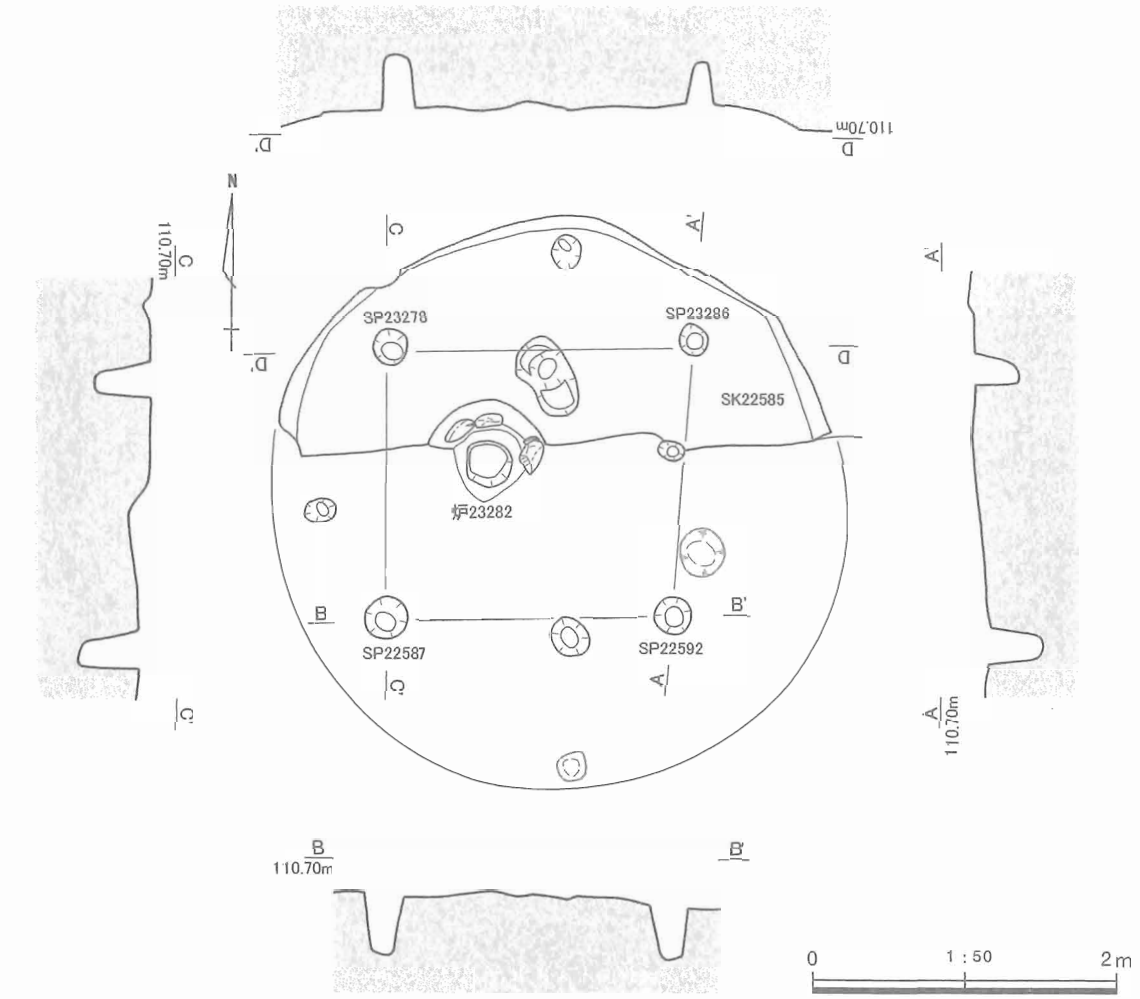


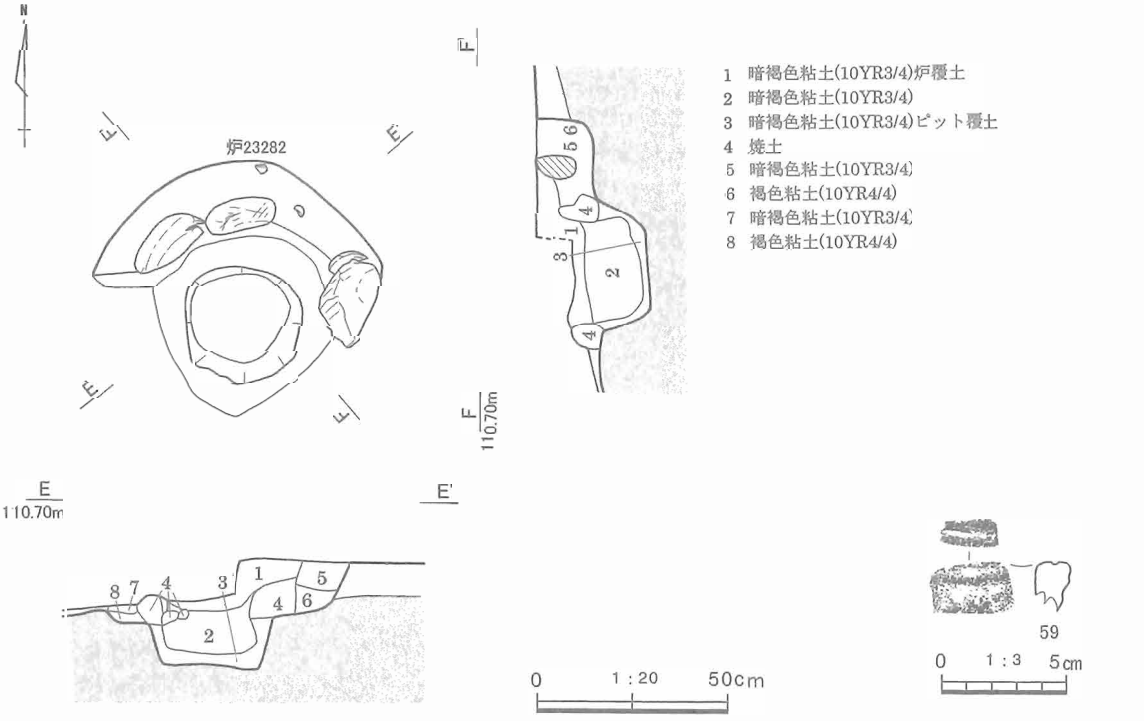
第23図　ＳＨ22763出土遺物４

（第22図54）は小穴ＳＰ22782の上面から出土した中粒砂岩製の石皿である。（第22図55）は粗粒砂岩製の石皿で、両者とも表裏面に磨面と若干の敲痕をもつ。（第22図56）は礫器と思われ、チャート製である。（第22図57）は粘板岩を使用した石匙で、全体的にやや磨耗している。つまみが斜め上方に付く横型石匙は本遺跡内で最も一般的な形態である。

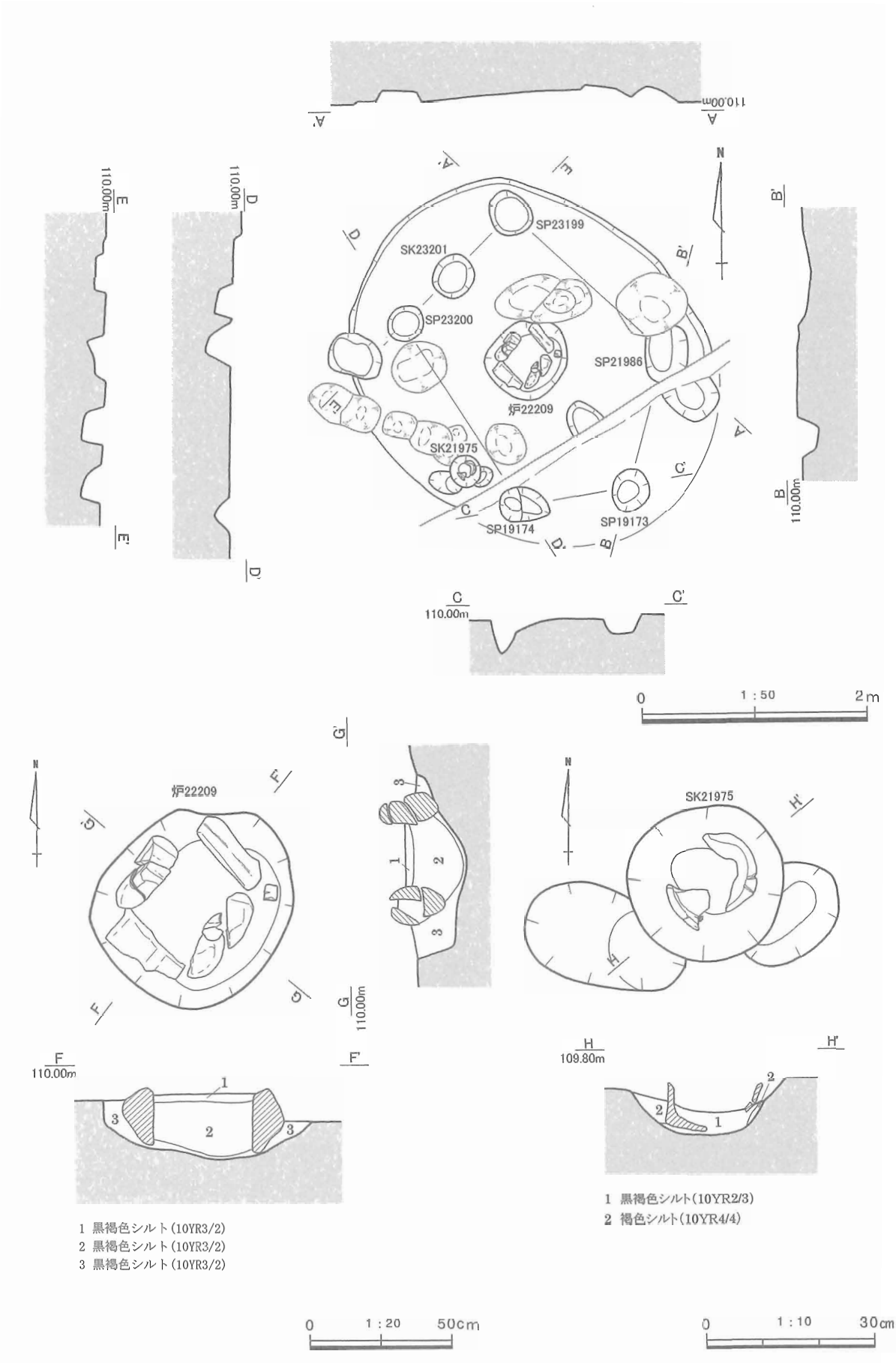
ＳＨ22585（第24図）

【遺構】Ｇ11グリッドで検出された円形の住居である。南側のおよそ3/5は茶畑の撹乱によって住居掘方が失われている。中央北西よりに炉をもち主柱穴はほぼ正方形に配置される。柱穴は直径0.2～0.28mの円形で、深さも0.3～0.4mとほぼ均等である。この他に、住居掘方の縁沿い北・西・南の３か所に同





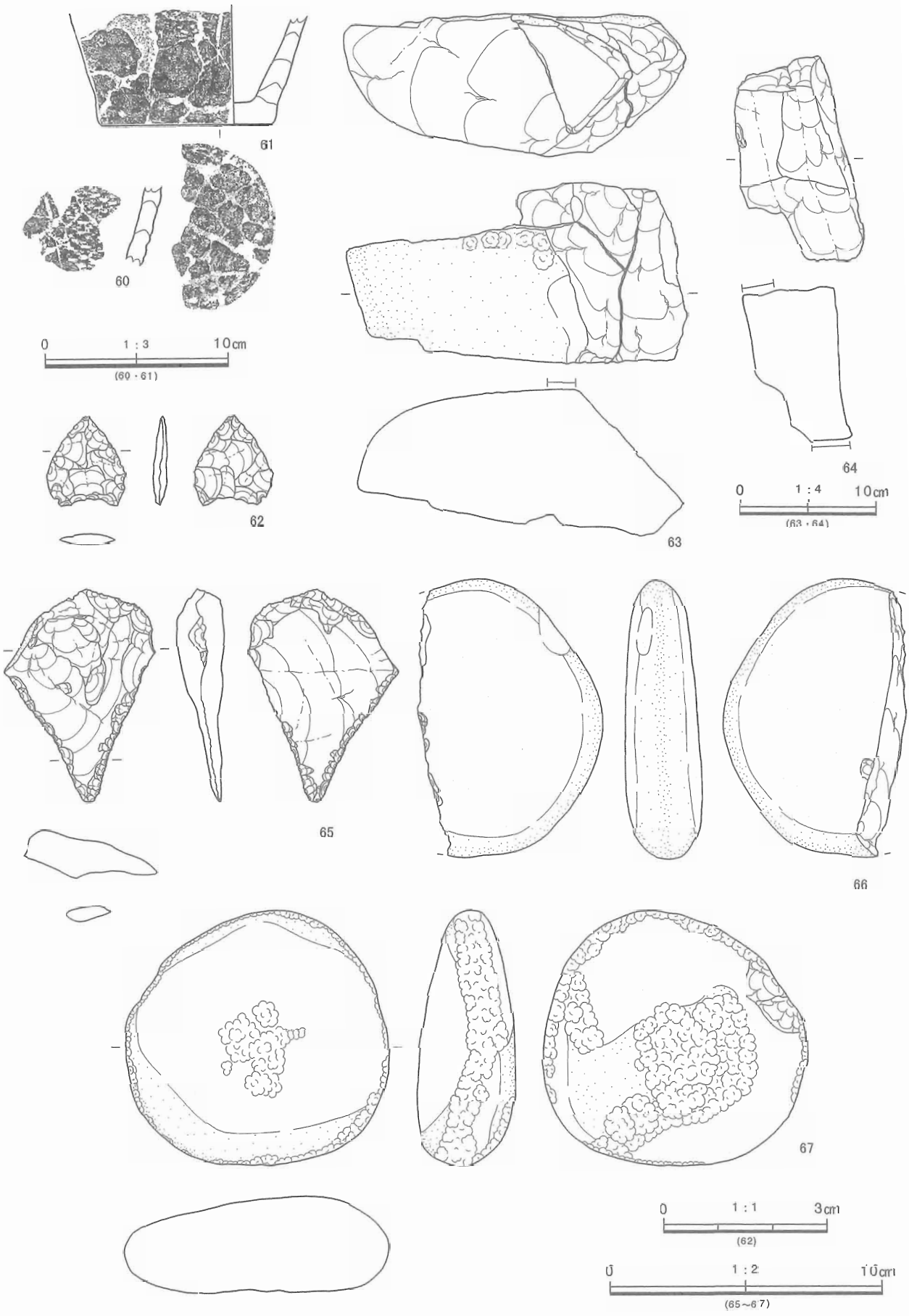
第24図　SH22585平面・断面図



1 黒褐色シルト(10YR3/2)
2 黒褐色シルト(10YR3/2)
3 黒褐色シルト(10YR3/2)

1 黒褐色シルト(10YR2/3)
2 褐色シルト(10YR4/4)

第25図　ＳＨ21978平面・断面図



第26図　ＳＨ21978出土遺物

等かやや小さな小穴がある。これらも柱穴を構成していた可能性がある。

炉は小児頭大の礫を配置する石囲炉である。石の並びからすると円形になるようだが、一部の礫は抜き取られたようで残存していない。炉の壁面は焦土として確認されたが礫から５～７cm離れているので、礫の内側に土を入れ、更に粘土を貼りこんでいるとみられる。底面にあたる焼土は確認されず、比較的やわらかな暗褐色粘土で充填されていた。抜かれた礫の痕跡なども併せて、住居が放棄される際に破壊されているものと考えられる。

【遺物:土器】文様などがわかる土器１点（第24図59）が出土している。（第24図59）は口縁に沿って隆線が付いた曽利Ⅲ式土器である。

ＳＨ21978（第25図）

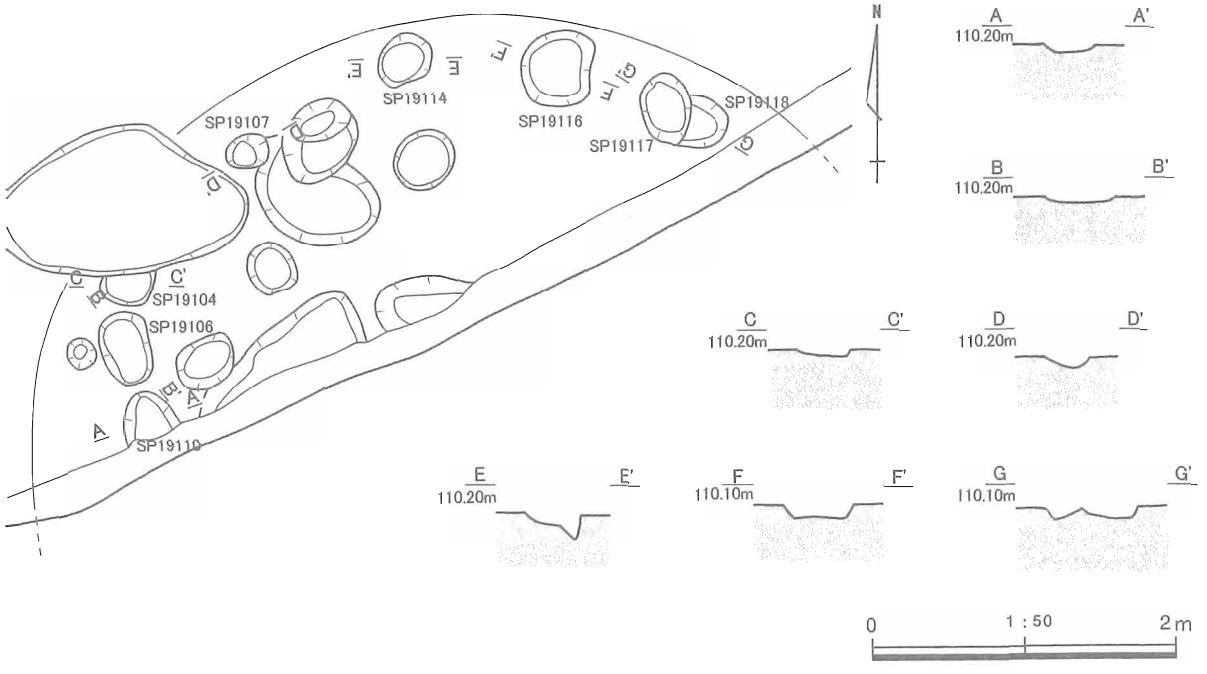
【遺構】Ｊ10グリッドで検出された円形で小型の住居である。ほぼ中央に炉、南西隅に埋甕が配置され、柱穴は５本で構成されるものと考えられる。柱穴は直径30cm前後の円形で、深さは10～28cmとややばらつきがある。ＳＰ19173が南東側に突出し、柱穴配置の平面形状は五角形状となる。

炉22209は石囲炉で長軸37cm、短軸32cmの円形状の掘方内を四角に区切るように礫が配置される。礫は主に小児頭大の自然礫ひとつを用いるが、南東辺のみやや小ぶりなものを二つ用い、いずれも焼けている。内面は炭化物の混じる黒褐色シルトで充満するが、硬化した焼土は認められない。

埋甕は、直径20cm、深さ10cm程の土坑ＳＫ21975に収められる。検出面がやや下がっており、炉の高さから察すればもう15cmほど上位まで掘方が存在した可能性がある。埋甕に使用された深鉢は上位と底部の一部が存在しない。割取った破片を土坑の内面に並べて使用したのであろうか。

【遺物:土器】文様などがわかる土器２点（第26図60・61）が出土している。（第26図60）は縄文を付けた後期前半の土器である。（第26図61）はＳＫ21975から出土した底部の破片で縦位沈線が付き、底面に薄く網代痕を施した後期前半の土器である。

【遺物:石器】（第26図62・第26図63）は石囲炉22209からの出土品である。（第26図62）は炉石の間から出土した珪質頁岩製の凹基無茎の石鏃で、側縁からの比較的広い剥離によって調整されている。（第26図63）は含礫粗粒砂岩の炉石の一部であるが、磨敲面があるため台石としての役目も果たしていたもの



第27図　ＳＨ19336平面・断面図

が転用されたと思われる。

（第26図64）は粗粒砂岩製の台石である。（第26図65）は２辺を尖頭状に調整した粘板岩製の二次加工剥片、（第26図66）は扁平な中粒砂岩を使用した磨石である。

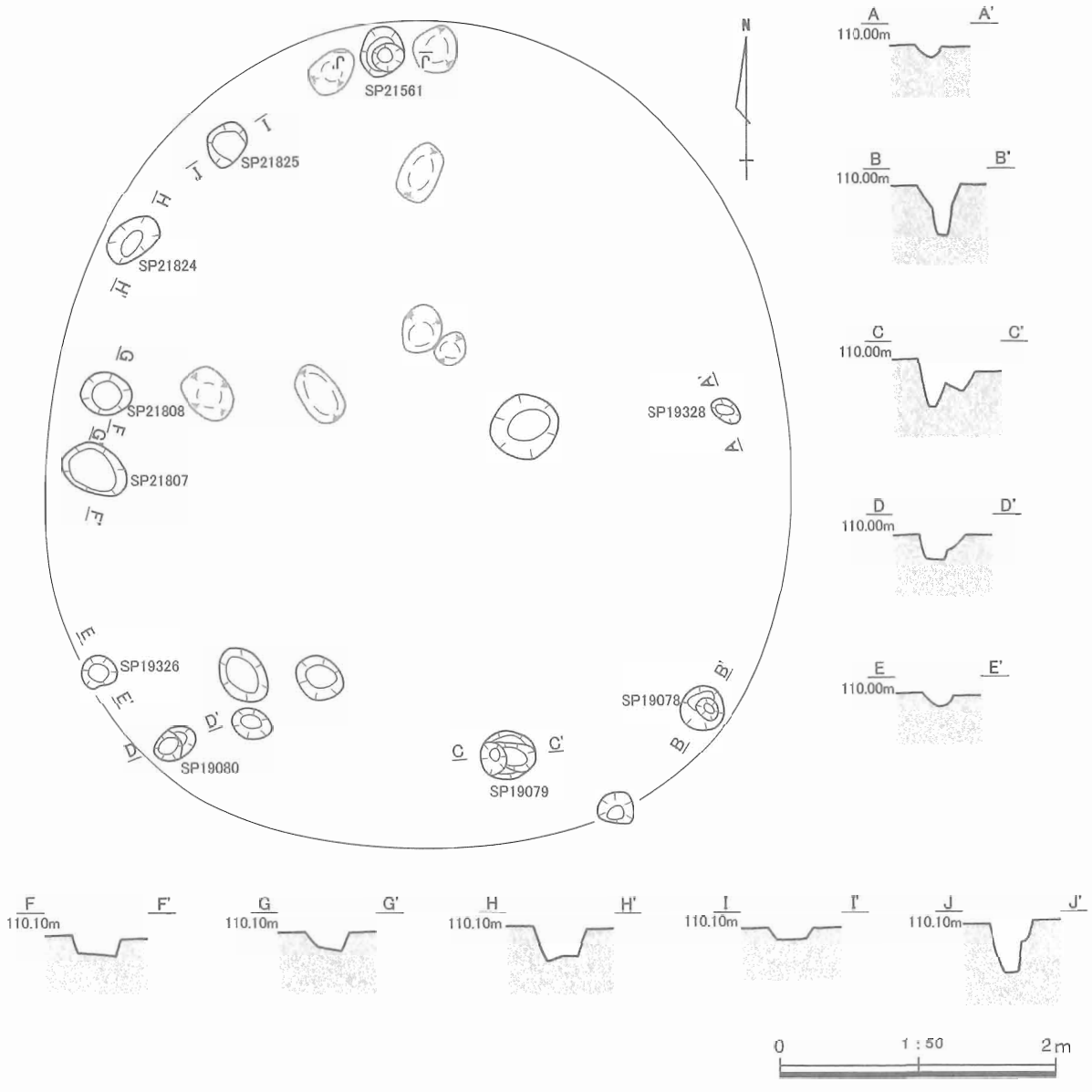
（第26図67）は、主柱穴ＳＰ21986から出土した扁平な中粒砂岩製の磨敲石で、被熱している。平らな表裏面を磨り・敲き面として、周縁部を敲面として使用している。

ＳＨ19336（第27図）

【遺構】M16で検出された。同一円周上に乗る７か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。南側およそ3/5は調査区外となり検出されていない。いずれの小穴も長軸30～50cmの楕円形状であるが、いずれも深さ５～15cm台と浅い。

ＳＨ23306（第28図）

【遺構】Ｋ・Ｌ13で検出された。同一円周上に乗る10か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。想定される範囲内の東～北東側では茶畑の改植を重機で行った際にできた撹乱がひどく、該当する小穴が明らかでない。ＳＰ19328が長軸20cm程度、深さ10cmほどとひときわ小規



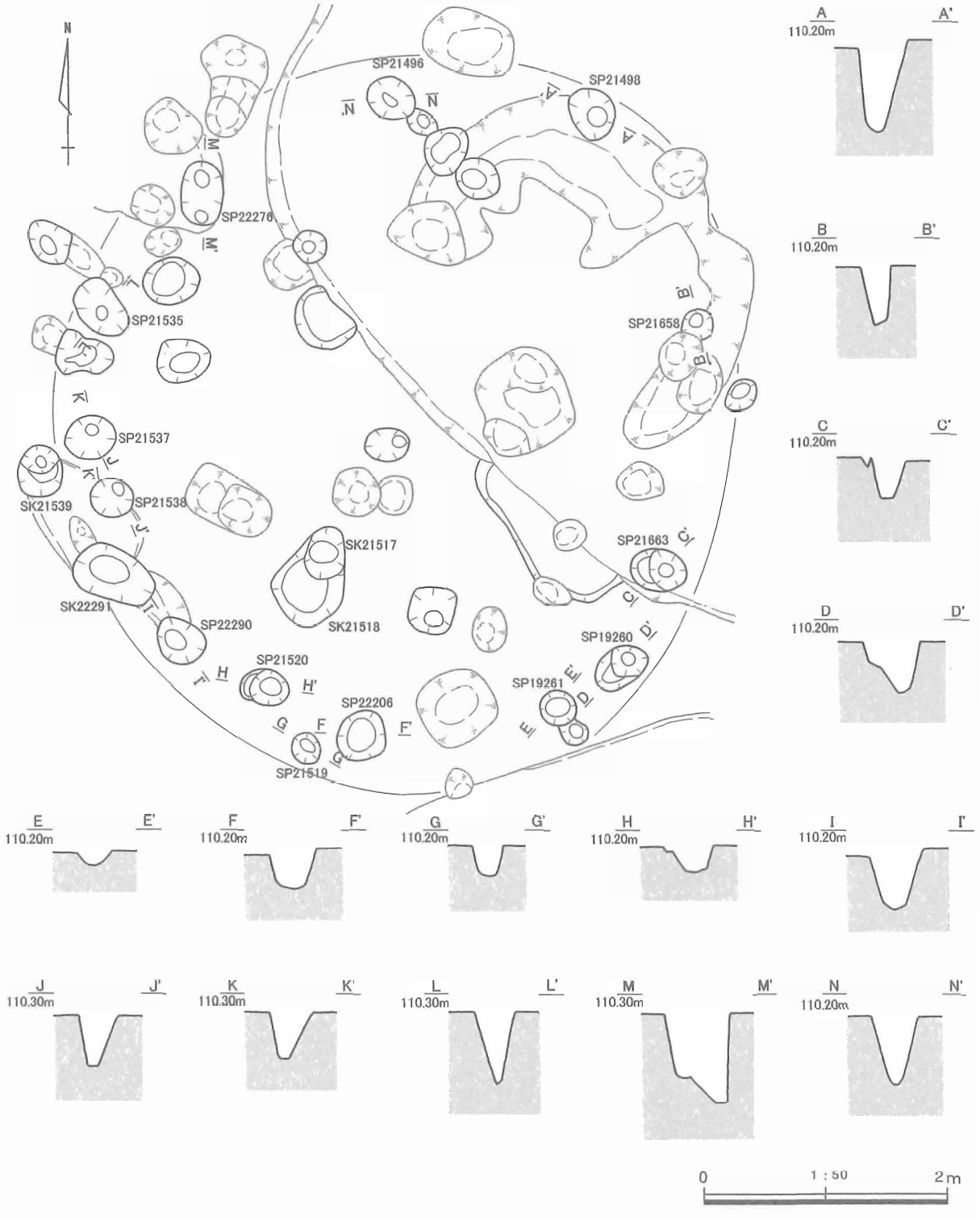
第28図　ＳＨ23306平面・断面図

模なのはこの撹乱の影響である。ＳＰ19326や21825も同様であろう。他の小穴は直径30～40㎝台の円形であるが、深さは15～40㎝ほどと差がある。

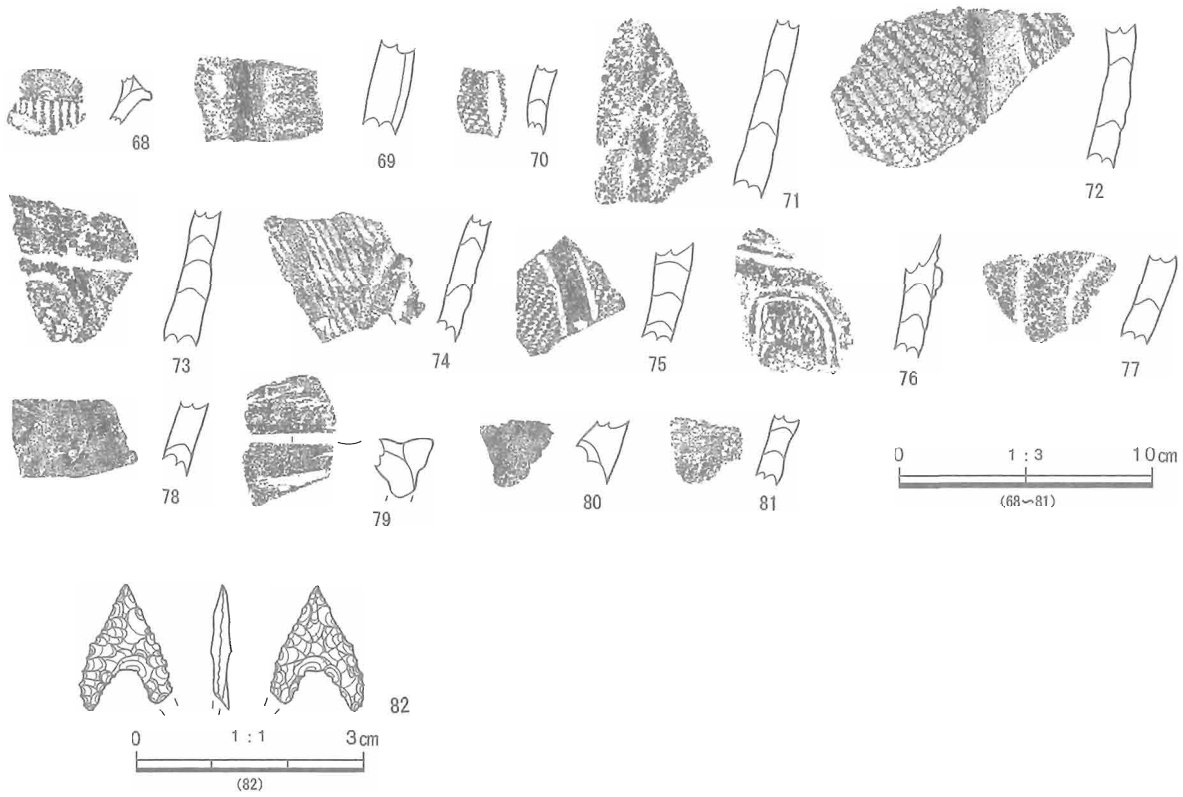
ＳＨ23304（第29図）

【遺構】Ｊ11で検出された。同一円周上に乗る小穴が14か所見出せたことから、柱穴掘方のみ残存する住居であると考えた。北東側およそ2/5が第１面の竪穴式住居によって破壊されている。

小穴は直径25～40㎝程の円形が主体で、ＳＰ22276など楕円形のものもあるが、下端が錯綜している



第29図　ＳＨ23304平面・断面図



第30図　ＳＨ23304出土遺物

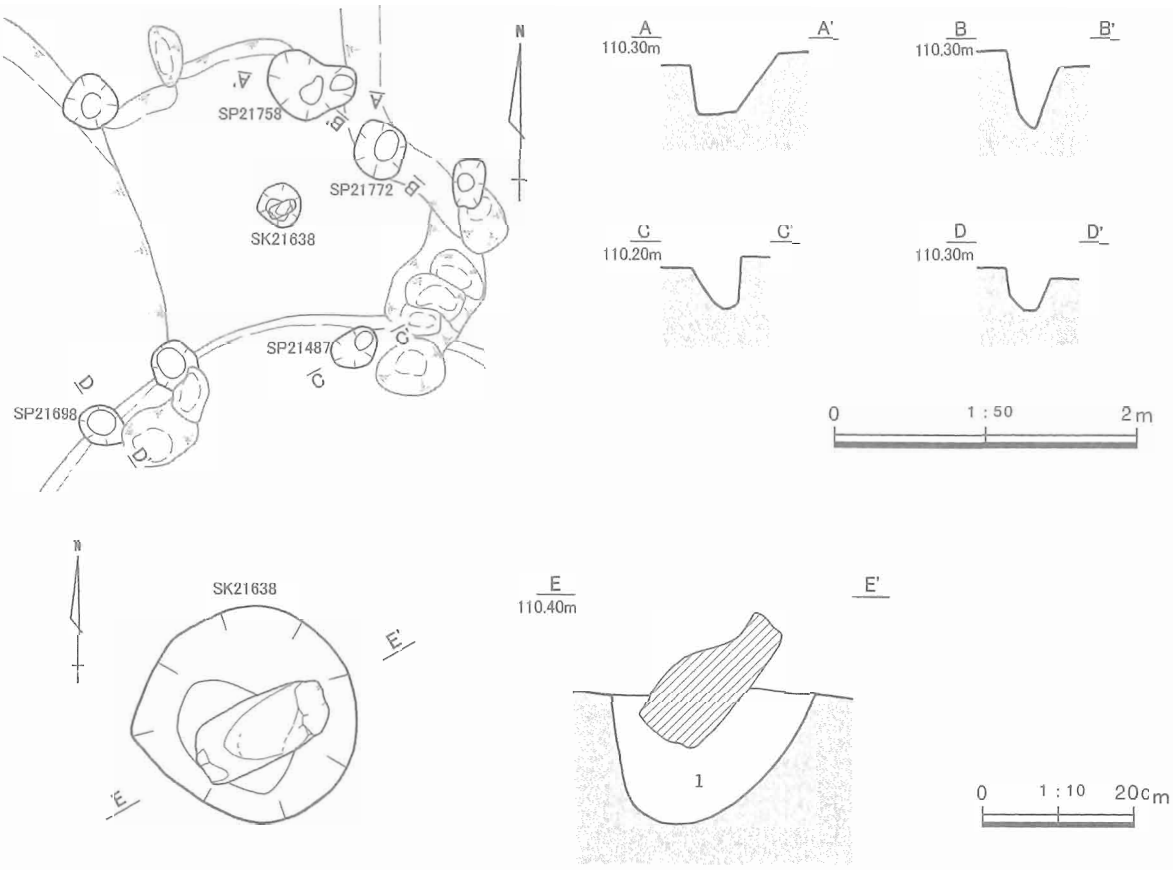
ので同規模な小穴２個が重複しているのだろう。深さはＳＰ19261が最も浅く10cm程度であるが、他は25～70cm前後で深めなものが目立つ。特にＳＰ21498・21658・21535・21496などは底に行くに従って円錐状に狭くなる。

【遺物:土器】文様などがわかる土器14点（第30図68～81）が出土している。（第30図68）は口縁部に連続爪形を付けた北屋敷式土器である。（第30図69）は胴部に縦位隆帯を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第30図70）は胴部に条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け、縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第30図71）は胴部破片で風化しているが、条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付け、縦位隆線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第30図72）は粘土紐で区画した中に、条の太さ約0.5cmのＬＲ縄文を胴部に付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第30図73）は粘土紐で区画した中に、条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を胴部に付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第30図74）は粘土紐で区画した中に、条の長さ約0.2cm、長さ約2.0cmのＬ縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第30図75）は条の太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。（第30図76）は粘土紐を貼り付け、沈線で区画した中に条の太さ約0.4cmのＲＬの多条縄文を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第30図77）は沈線で渦巻きを付けた曽利Ⅳ式土器である。（第30図79）は口縁部に半截竹管状工具で沈線渦巻きを付けた曽利Ⅳ式土器である。（第30図78・80・81）は無文で時期不明の土器である。（第30図79）は口縁部に沈線を付けた時期不明の土器である。

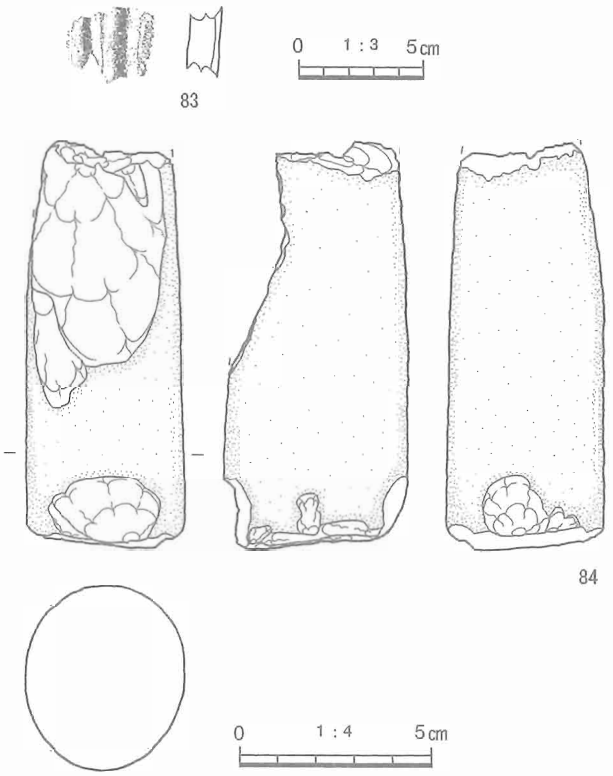
【遺物：石器】（第30図82）は住居内のＳＫ21518から出土した凹基無茎の石鏃で、細かい調整により周縁を仕上げ脚部端部はやや丸みを帯びている。諏訪星ヶ台産の黒曜石製である。

ＳＨ21637（第31図・第32図）

【遺構】Ⅰ・Ｊ11で検出された。円形の掘方を持つが、南側と西側は第１面の住居によって撹乱されて



第31図　ＳＨ21637平面・断面図



第32図　ＳＨ21637出土遺物

いる。掘方の縁辺には柱穴と考えられる小穴が４か所に認められるが、特に西側の第１面住居の範囲には見当たらない。直径20～50cmの円形状で深さは28～50cmと一定しない。

中央やや北よりに石棒が埋め込まれる土坑ＳＫ21638がある。掘方は直径28cm程の円形で、深さは18cm程度である。石棒は頭部を上にして、傾いた状態で検出されている。

ここでは住居のひとつとして取り上げたが、上屋を持つ祭祀遺構と考えてもよいだろう。

【遺物：土器】文様などがわかる土器１点（第32図83）が出土している。胴部縦位に隆帯を付けた加曽利Ｅ３式土器である。

【遺物:石器】住居内の土坑ＳＫ21638からは無頭石棒（第32図84）が出土し

た。伊豆半島産の多孔質安山岩が使用され、断面はやや楕円形を呈する。被熱し、頭部は欠損しているが、底部は残存し平面になるよう成形されているのが見てとれる。本来は、長さ25～30cm程度であろう。表面は敲きにより調整されていると思われるが、全体に研磨が行き届き、敲打痕はほとんど目立たない。

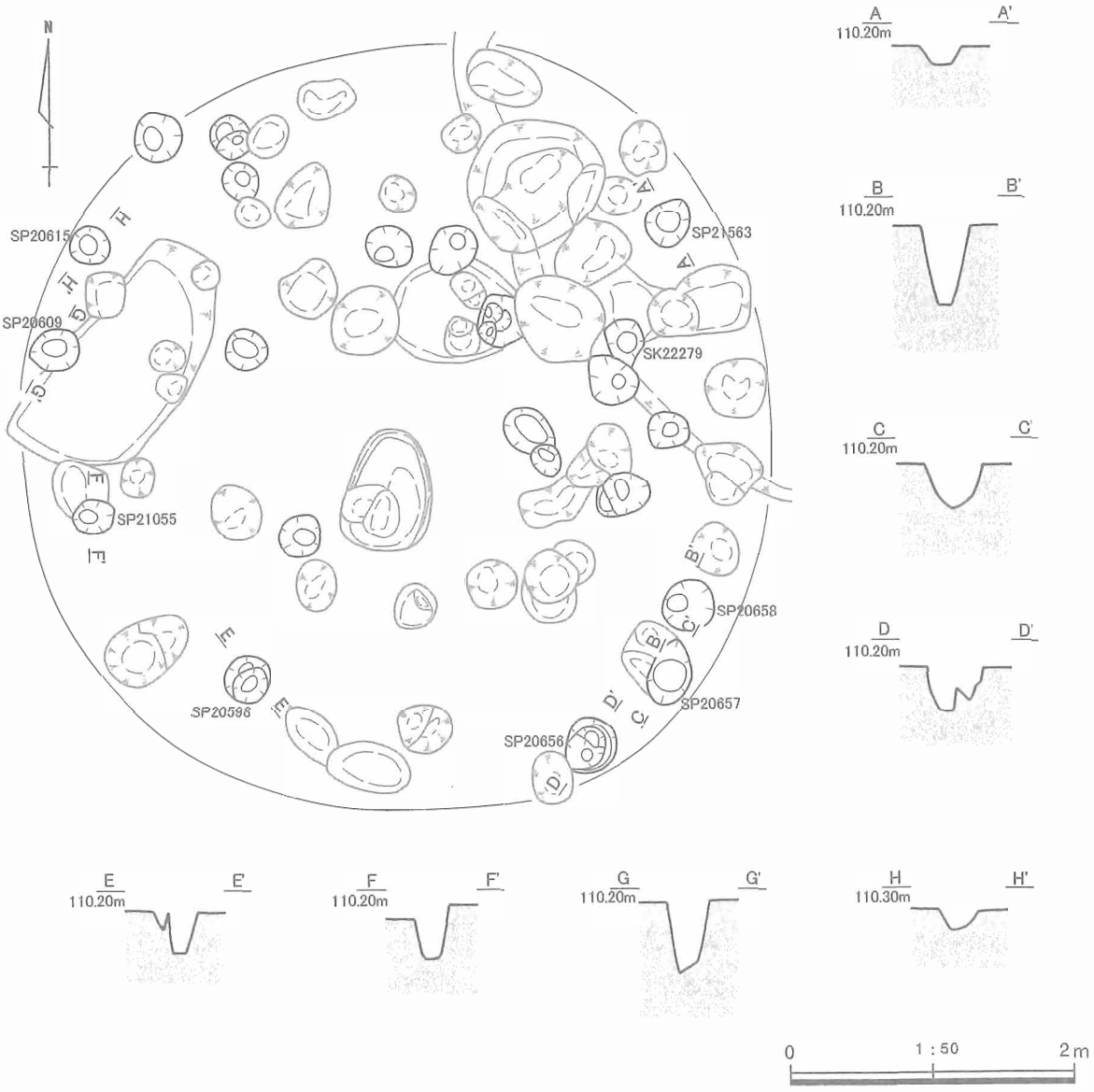
ＳＨ23305（第33図・第34図）

【遺構】Ｊ・Ｋ12で検出された。同一円周上に乗る８か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。想定範囲の北側には該当する遺構が検出されていない。ＳＰ20657が長軸およそ50cmの楕円形状のほかは直径20～30cm台の円形である。深さはＳＰ20615・21563が14cmとひときわ浅く、他は30～50cm台となる。

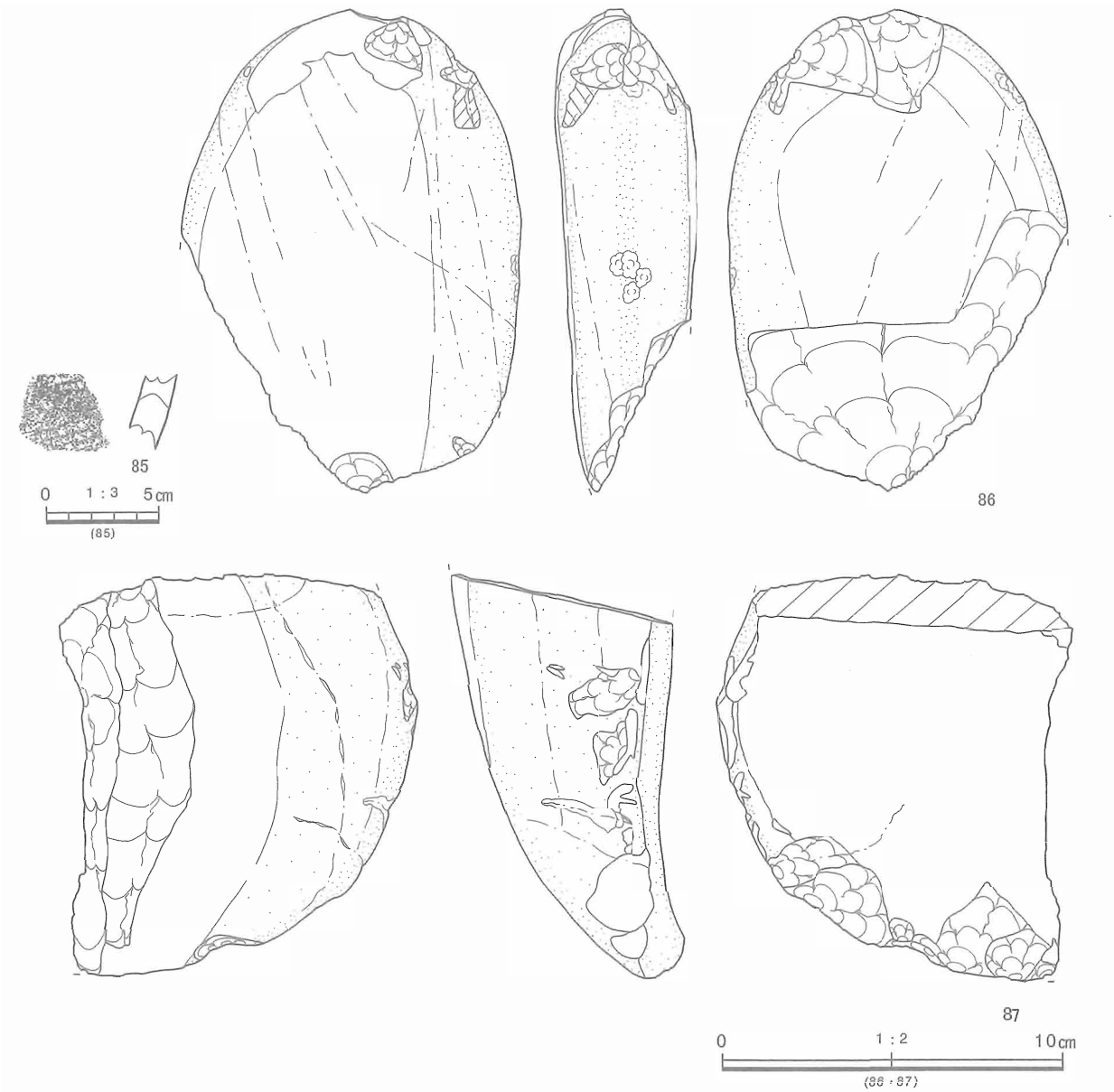
【遺物：土器】文様などがわかる土器１点（第34図85）が出土している。土器表面が風化しているが縄文を施した時期不明の土器である。

【遺物：石器】（第34図87）はＳＰ20656から出土した細粒砂岩製の台石である。欠損著しいが、表裏両方に磨面をもち、裏面の周縁は粗く打ち欠かれ安定して据えることができるよう成形されていると思われる。

（第34図86）はＳＰ20598から出土した中粒砂岩製の磨敲石である。扁平礫の表裏に磨面を持ち、長軸



第33図　ＳＨ23305平面・断面図



第34図　ＳＨ23305出土遺物

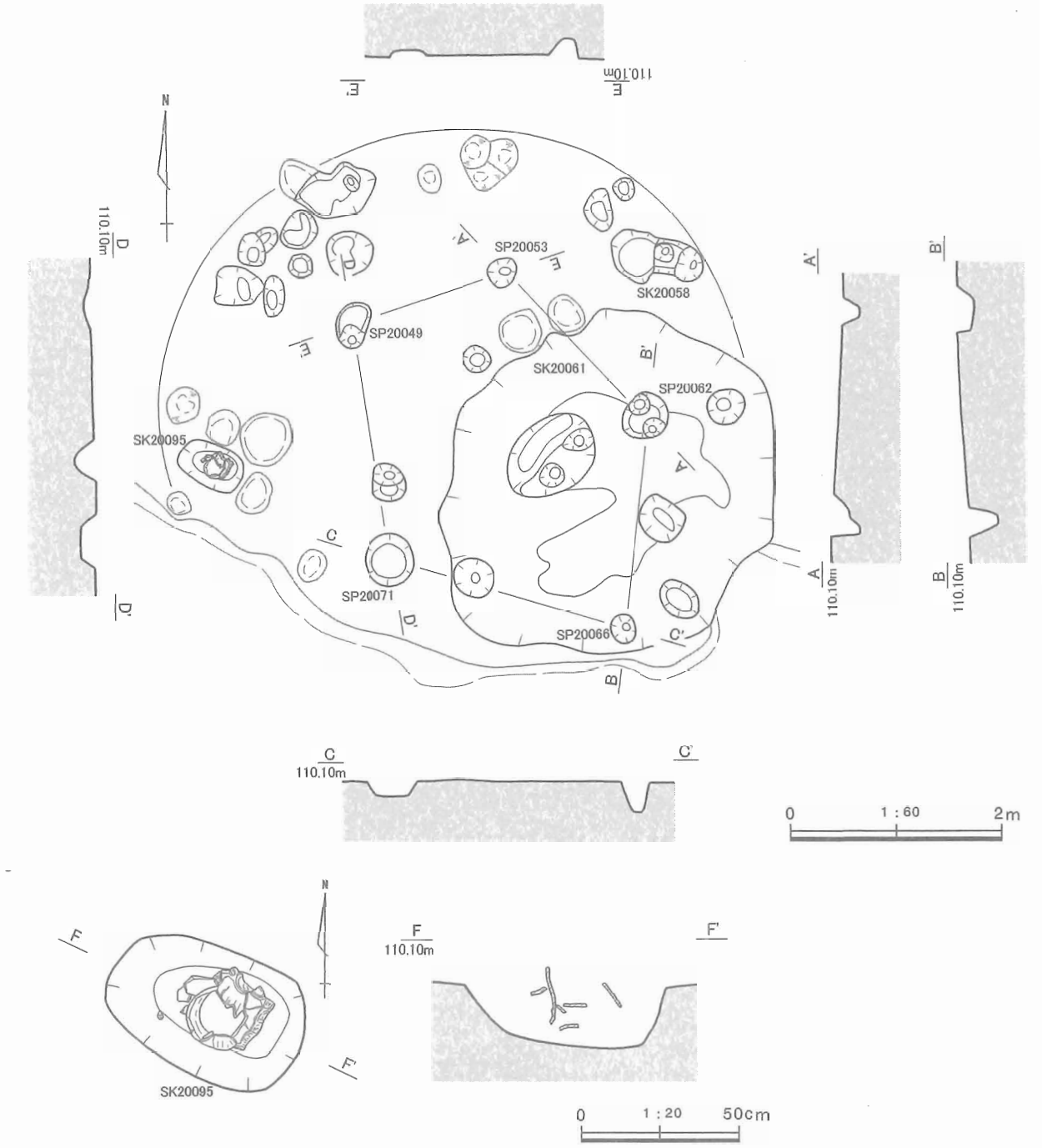
の端部と右側面に敲打痕が残る。長軸端部は敲石としての利用により大きく剥離・欠損をしたのであろう。

ＳＨ23307（第35図・第36図）

【遺構】Ｋ・Ｌ14で検出された。西側に埋甕をもつ住居で、中心付近に５か所の柱穴と考えられる小穴を検出した。南側1/5程度は溝状に落ち込む自然地形で失われており、南東側では風倒木痕ＳＫ20061と重複するが風倒木痕のほうが古い。図中の断面は、便宜的に検出面での状態を図示している。

柱穴はいずれも円形状でＳＰ20053・20066がやや小さく直径25cm前後、深さ15～25cmとなる。他は直径45～50cmの円形～楕円形状でＳＰ20049が５cmと浅いほかは12～25cmの深さがある。

埋甕は想定される範囲の西側から検出された。長軸65cm、短軸40cm、深さ20cmの楕円形状を呈する土坑ＳＫ20095のほぼ中央に、深鉢が逆位で埋め込まれていた。底は検出段階で失われていたので、元来割り取られていた可能性がある。口縁部は土坑の底面から西側で５cm、東側で15cm程度浮いた状態だったので、埋められた時点ですでにややかしいでいたと見られる。また、検出時には土坑掘方上に破片が

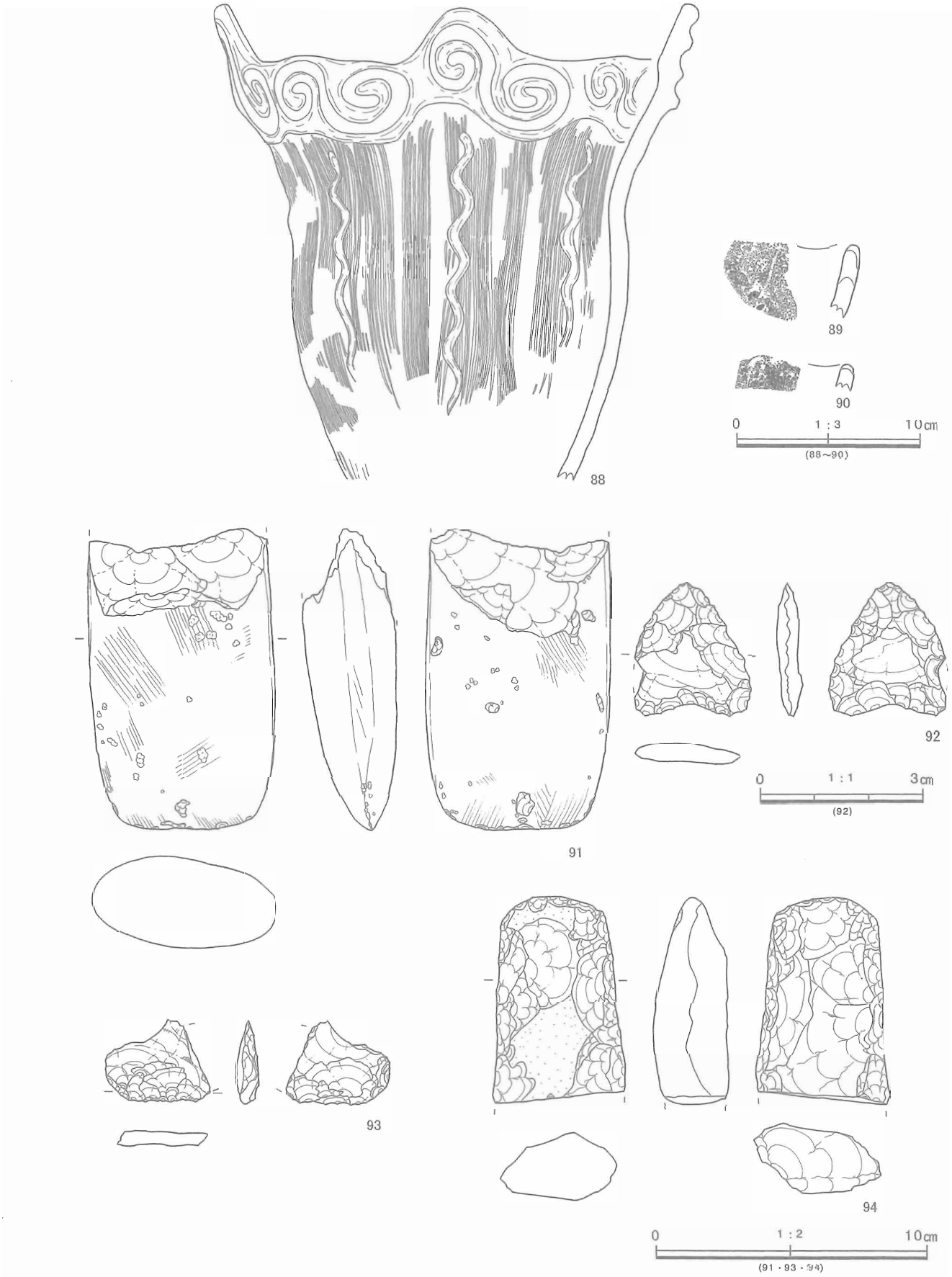


第35図　ＳＨ23307平面・断面図

露出した状態であったので、元来の掘方はさらに高い位置であったと考えられる。

また、柱穴ＳＰ20062と20066の中間付近の同一レベルで検出された直径40㎝前後の円形状の小土坑ＳＰ20058からは、磨製石斧（第36図91）が出土している。住居の範囲内に存在した可能性があることからここに取り上げた。なお土坑ＳＫ20061からは未製品と思われる石鏃１点（第36図92）、スクレイパー（第36図93）が出土している。住居より古い遺構だが、便宜的にここに掲載した。

【遺物：土器】文様などがわかる土器３点（第36図88～90）が出土している。（第36図88）は波状口縁に隆帯を渦巻き状に貼り付け、それに沿って凹線で横位に展開する渦巻きを施す。胴部以下に７本歯の櫛歯状工具で縦位沈線を付け、縦の太い波状沈線を垂下している曽利Ⅲ式土器である。（第36図89・90）は



第36図　ＳＨ23307出土遺物

波状口縁の破片であるが、無文で型式不明である。

【遺物：石器】（第36図91）はＳＰ20058出土の磨製石斧である。凝灰質細礫岩を使用した両凸の蛤刃をもち全体によく研磨されている。左右側面も縦～斜め方向に研磨されており主面との間にごく緩い稜が見受けられるが断面形に表れにくい程度の稜である。

ＳＫ20061からは凝灰質頁岩製の石鏃（第36図92）と珪質頁岩製のスクレイパー（第36図93）が出土した。（第36図92）は凹基無茎鏃で、縁辺は細かい調整が成されているが表裏に未調整の剥片面を残す。基部の磨滅は柄の装着痕と推測される。

（第36図94）は刃部が欠損した打製石斧である。中粒砂岩を使用し側縁から調整を施し原礫面を残している。

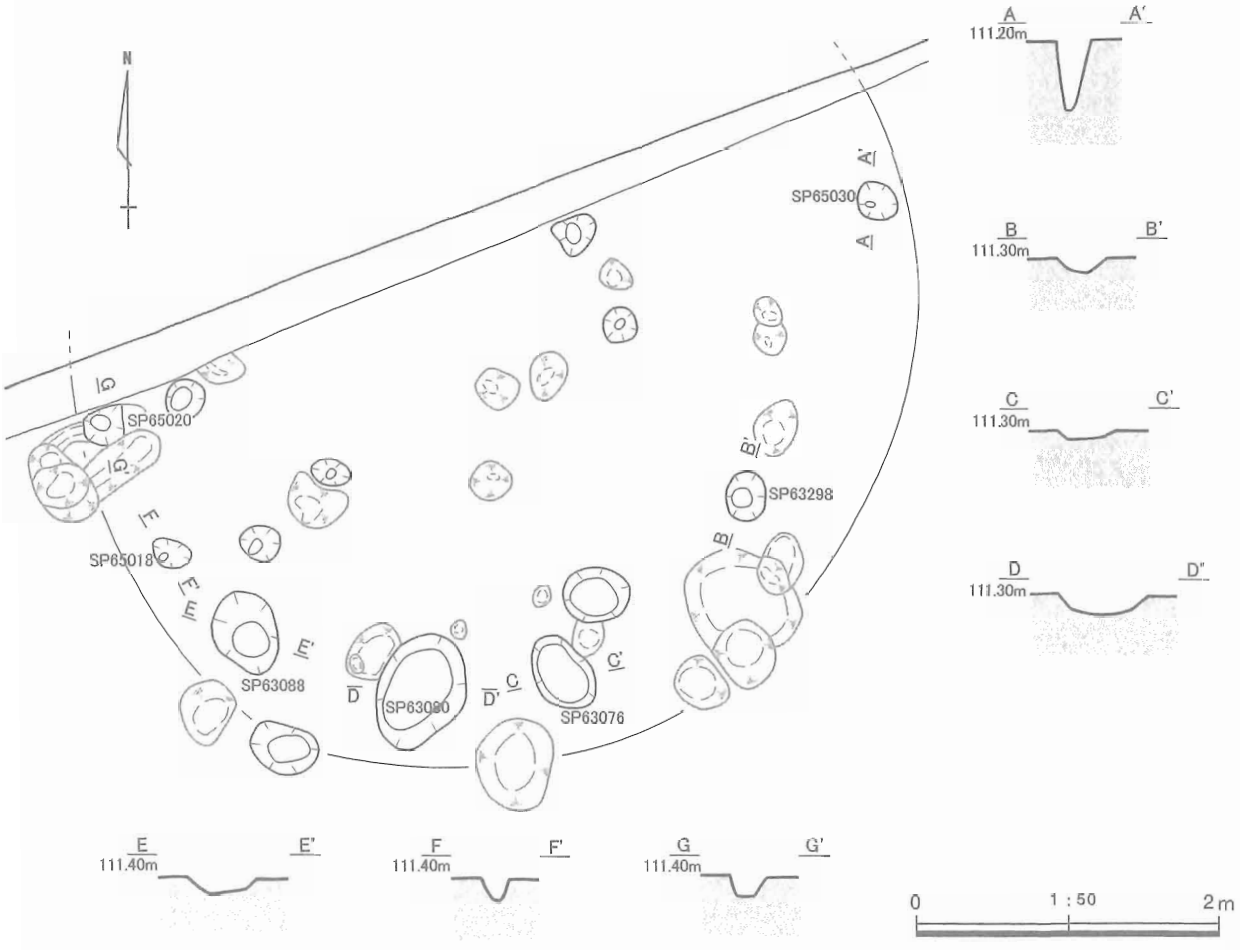
ＳＨ64915（第37図）

【遺構】Ｆ18グリッドで検出された。同一円周上に乗る７か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。北側およそ1/2は調査区外となり検出されていない。

小穴には大小がある。東側・西側に小ぶりなものが多く、南西側に大型の小穴が集まっている。小ぶりな小穴は直径20～30cm程度の円形で、深さも10～15cm程度であるが、ＳＰ65030のみが48cmとひときわ深い。大型の小穴は、長軸50～80cm、短軸30～50cm台の楕円形状で、深さも５～14cm程度と浅く収まる。

ＳＨ64913（第38図）

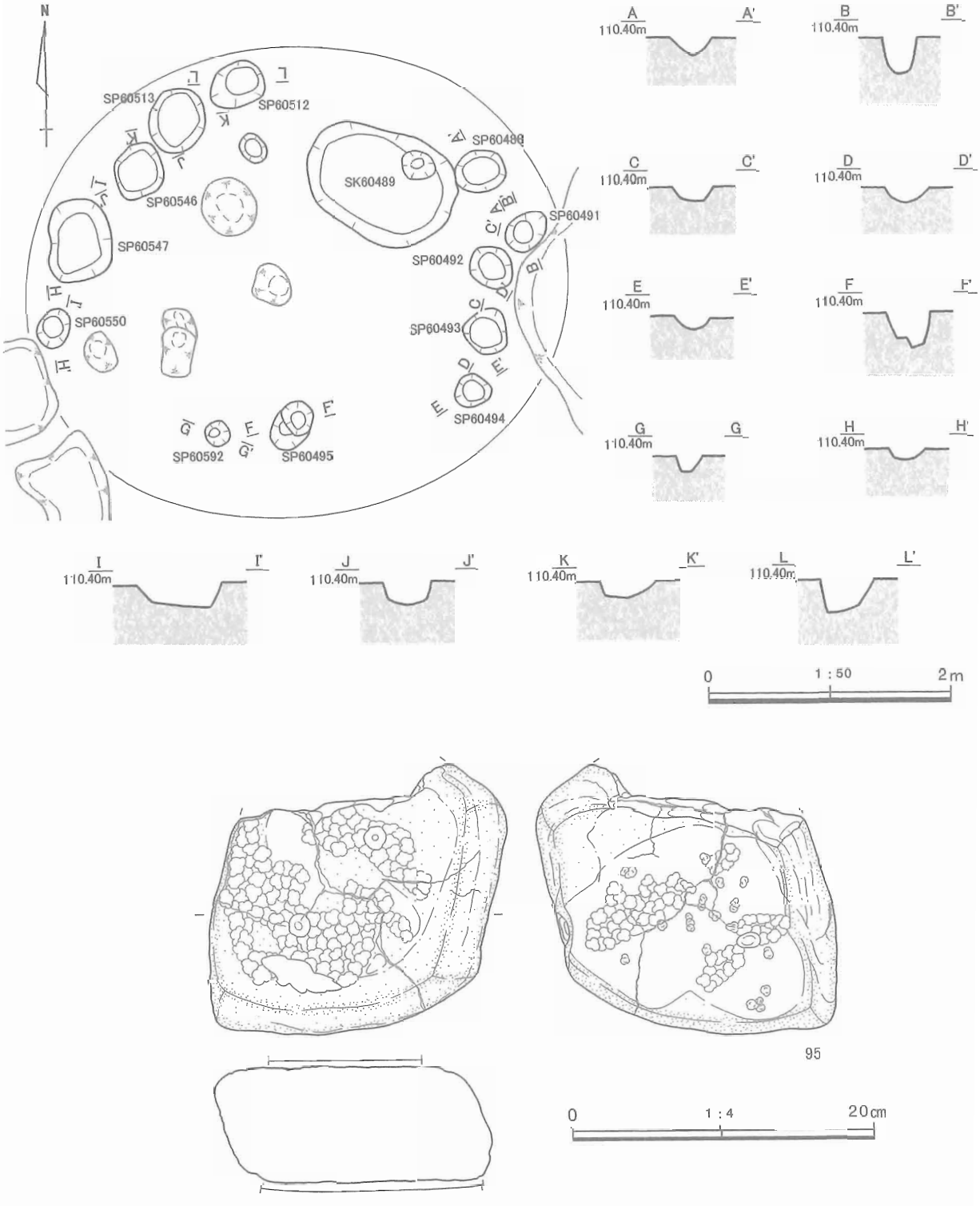
【遺構】Ｊ16～Ｋ17グリッドで検出された。長軸1.28m、短軸0.92mを測る土坑ＳＫ60489からは、一部が破損した台石（第38図95）が出土している。土坑の規模から炉の掘方である可能性があるが、焼土等



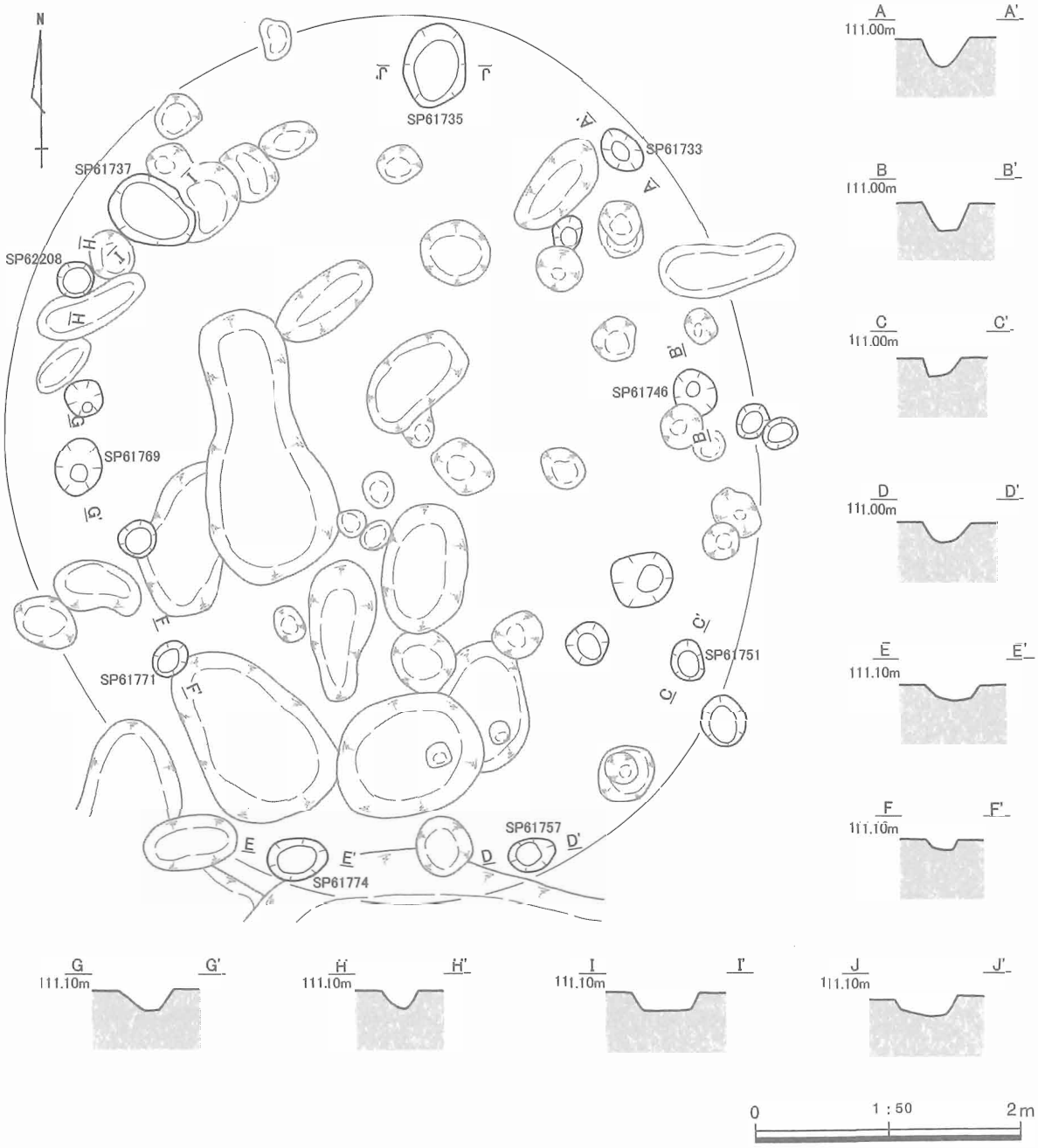
第37図　ＳＨ64915平面・断面図

は検出されず確証がない。この周囲には、柱穴になりうる小穴が12か所見出された。東～西側には直径20～40cm程の円形で、深さ10～28cmの小穴が分布する。中でもＳＰ60491・60495が比較的深い。西～北側には直径40～60cm台の大ぶりな小穴が分布する。ＳＰ60547は土坑状となるが、深さはいずれも10～26cmと浅く収まっている。

【遺物：石器】住居内の土坑ＳＫ60489から20cm四方程度の台石（第38図95）が出土した。厚さ7.7cmの板状を呈する中粒砂岩で、表裏に磨面・敲打痕を残す。



第38図　ＳＨ64913平面・断面図、出土遺物

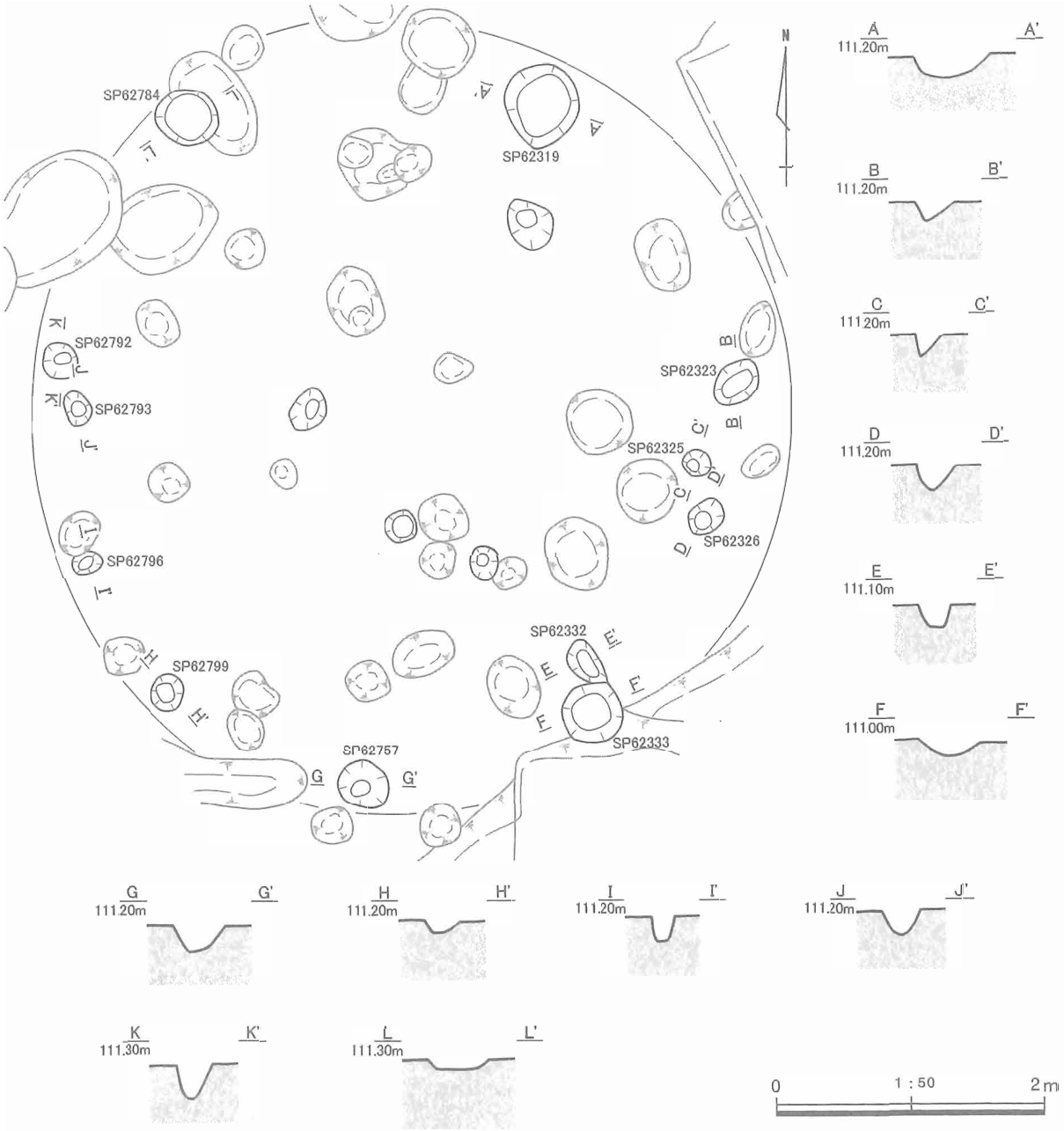


第39図　ＳＨ64914平面・断面図

ＳＨ64914（第39図）

【遺構】Ｇ17グリッドで検出された。楕円形状の範囲に柱穴の可能性のある小穴が集中している。分布の中心付近から南側にかけては、長軸１～２ｍ、短軸0.6～１ｍの土坑状の撹乱が密集して遺構が定かでない部分が多い。

この範囲からは柱穴になる可能性のある小穴は、1.5～２ｍ間隔に10か所で見出すことができた。北東側から西側に掛けては直径20～40㎝台の小ぶりな小穴が目立つ。これらの深さは８～20㎝と浅い。一方、北西～北側には長軸60㎝台、短軸50㎝前後の土坑状の小穴がある。深さは15㎝前後と浅く、底面が平らとなる。



第40図　ＳＨ64916平面・断面図

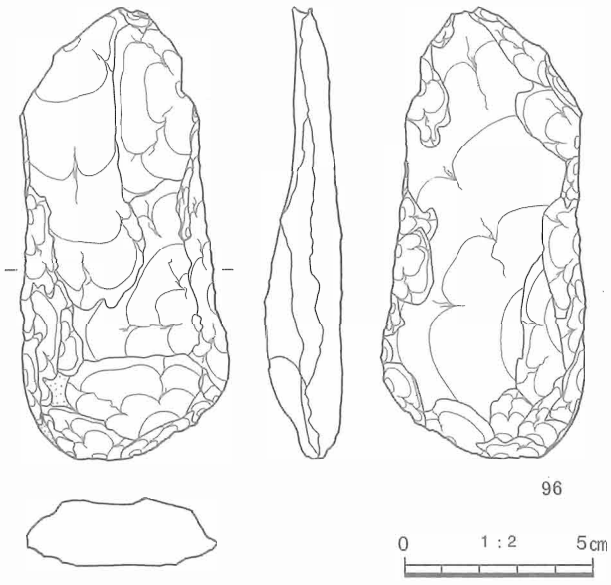
ＳＨ64916（第40図・第41図）

【遺構】Ｉ19・20グリッドで検出された。同一円周上に乗る12か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。東～南～西側に分布が偏っており、北側は大型のＳＰ62319・62784のみとなる。小ぶりな小穴は直径20～40cm台の円形で、深さは10～25cm程度となる。大型の小穴は直径40～60cmの土坑状で、深さは６～18cmとやや浅い。

【遺物：石器】覆土層から細粒砂岩製の打製石斧（第41図96）が１点出土した。短冊形を呈し、側縁からの広い剥離により原礫面をほとんど取り去った後、側縁に細かい調整を加えている。刃部が使用により磨耗している。

ＳＨ64917（第42図）

【遺構】Ｉ・Ｊ20グリッドで検出された。同一円周上に乗る10か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。範囲内には木痕と思われる撹乱が多く認められる。特に中央部分に



第41図　ＳＨ64916出土遺物

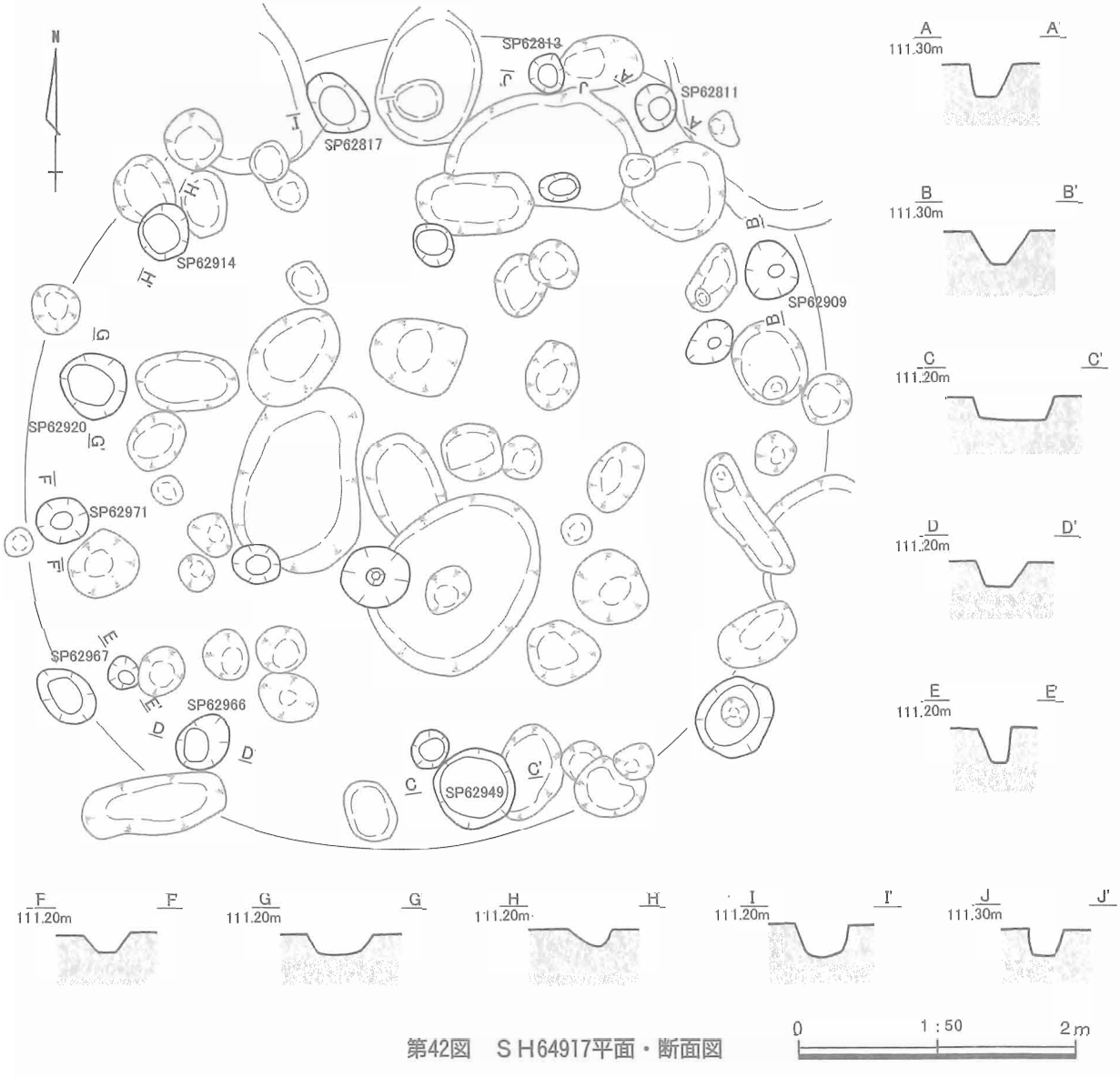
長軸0.6～1.4m、短軸0.5～1.1mを測る土坑状の撹乱が集中する。

小穴は、直径20～60cm前後と大小あるが、30～50cm台が多い。深さは西側のＳＰ62914・62920・62971が10cm前後と浅いが、他は15～20cm台と深くはないものの比較的均一である。

ＳＨ64659（第43図～第47図）

【遺構】Ｋ19～Ｌ20グリッドで検出された。壁溝とみられる幅10～37cm、深さ10～14cmの湾曲した溝が存在することから、直径６mのプランをもつものとみられる。北西側から南側にかけては方形周溝墓によって破壊されている。

柱穴は５か所を特定した。芯々で2.2～2.9mと近似した間隔に掘られている。いずれも直径40cm前後～50cm程度の円形で深さは25～50cmとなるが、いずれの底面も近似した高さにある。



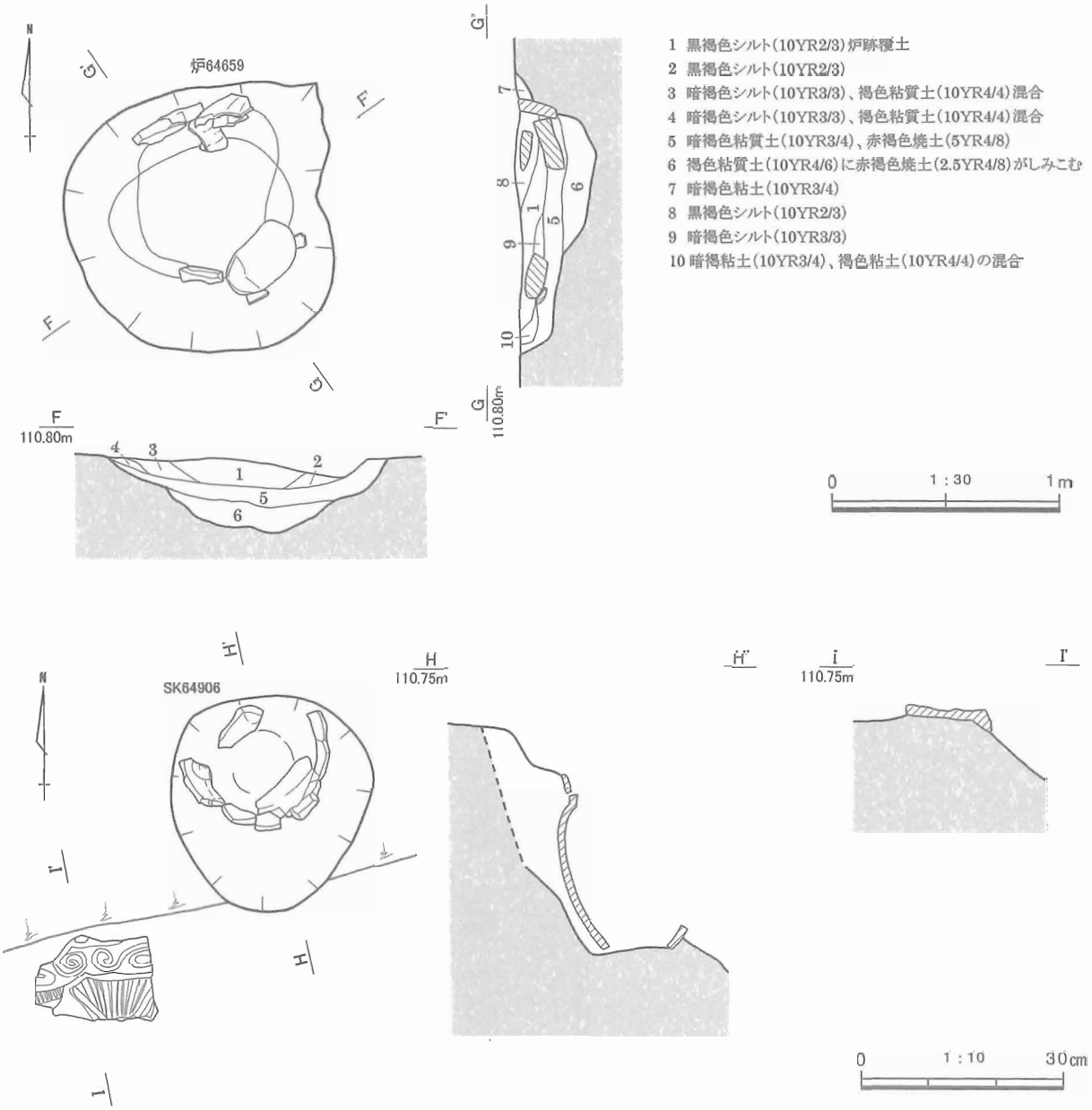
第42図　ＳＨ64917平面・断面図

中央やや北西よりに石囲炉64659がある。直径1.1～1.2mの掘方内に扁平な礫を立てて、内部を炉として利用する。礫は北側と南側の一部に残存しており、特に南側には長軸32cmの扁平な礫が内側に倒れこんでいた。住居を廃棄する際に炉を破壊しているものと考えられる。これら石囲炉に用いられた礫は102のように接合するので、元来縦38cm、横55cm程度の台石を割って転用したことが分かる。炉の内面には焼土が認められたが、炭化物は少ない。廃棄される前に清掃されているのであろうか。

南側には埋甕ＳＫ64906がある。北側のおよそ2/5は方形周溝墓ＳＺ50880が掘削された際に破壊されているので掘方の規模は明らかでないが、直径40cm、深さ35cm程であったと考えられる。埋甕には底が抜かれた深鉢が正位で埋め込まれている。

埋甕の南西側からは深鉢の口縁部辺が平らな状態で出土している。この遺物は、何らかの要件で床面

第43図　ＳＨ64659平面・断面図

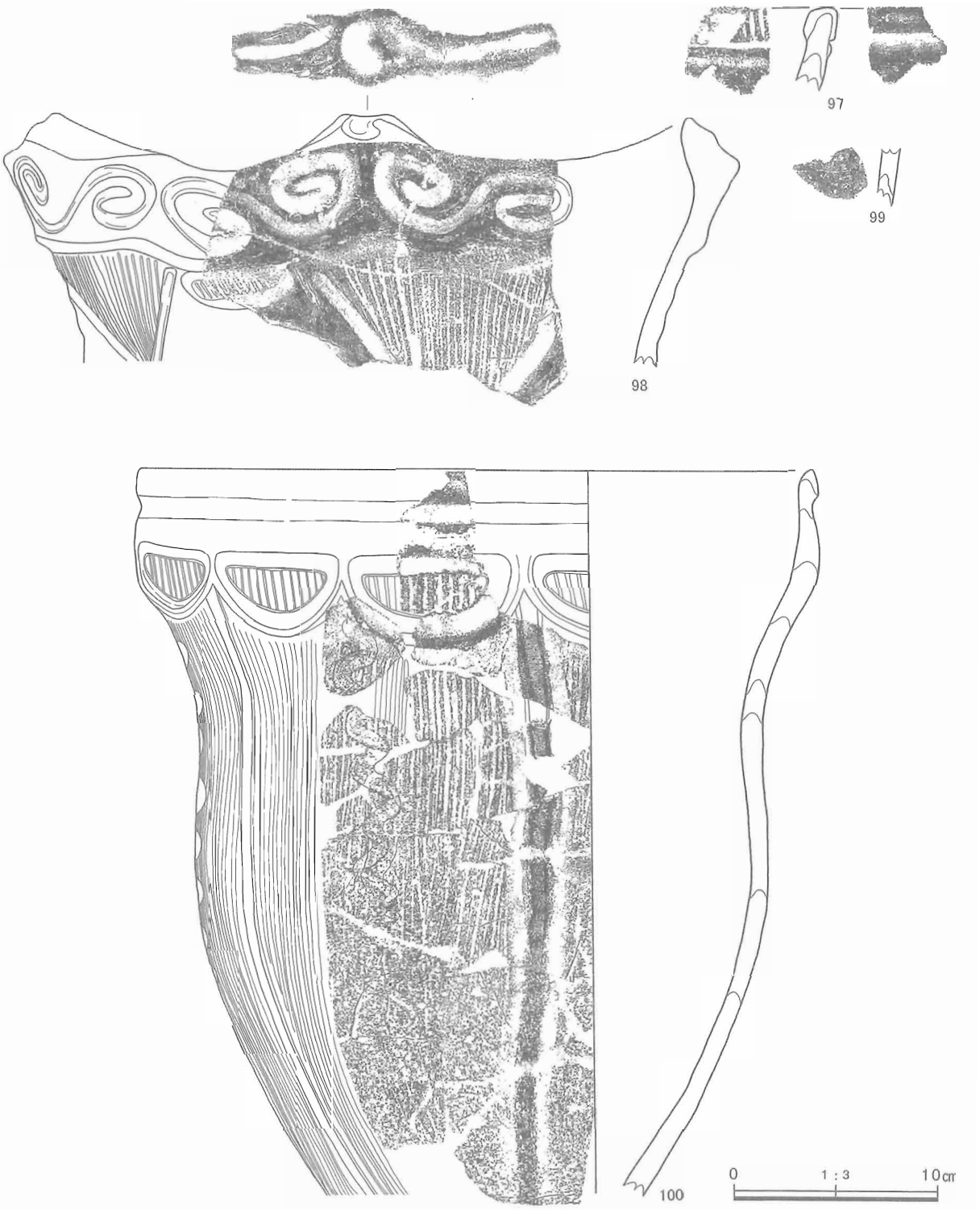


第44図　ＳＨ64659炉平面・断面図

上に遺棄されたものと考えられる。また、柱穴ＳＰ64907の東隣には台石103が置かれていた。これらの高さから、住居の床面は標高110.7～８m程度にあったものと考えられる。

【遺物：土器】文様などがわかる土器４点（第45図97～100）が出土している。（第45図97）は口縁部から竹管状工具で縦位に連続刺突を付けた勝坂式土器である。（第45図98）は波状口縁に沿って波頂部と口縁の有段部に指頭状の渦巻きを付け、胴部に隆帯区画し中に半截竹管状工具で沈線を入れた曽利Ⅲ式土器である。（第45図99）は無文で時期不明である。（第45図100）は口縁部に沿って横位の隆帯を付け、口縁部と胴部の境を隆帯で半月状に区画し、中に半截竹管状工具で縦位沈線を施す。胴部は縦位の隆帯で区画し、区画内に半截竹管状工具で縦位沈線を入れ、指頭状で縦波状沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。埋甕に使用されていた。

【遺物：石器】（第47図104）は主柱穴ＳＰ64907から、（第47図103）はＳＫ64661の上位から出土した中粒砂岩製の台石片で、平らな広い面を磨り・敲打面として使用していた。（第47図103）は敲打痕がより

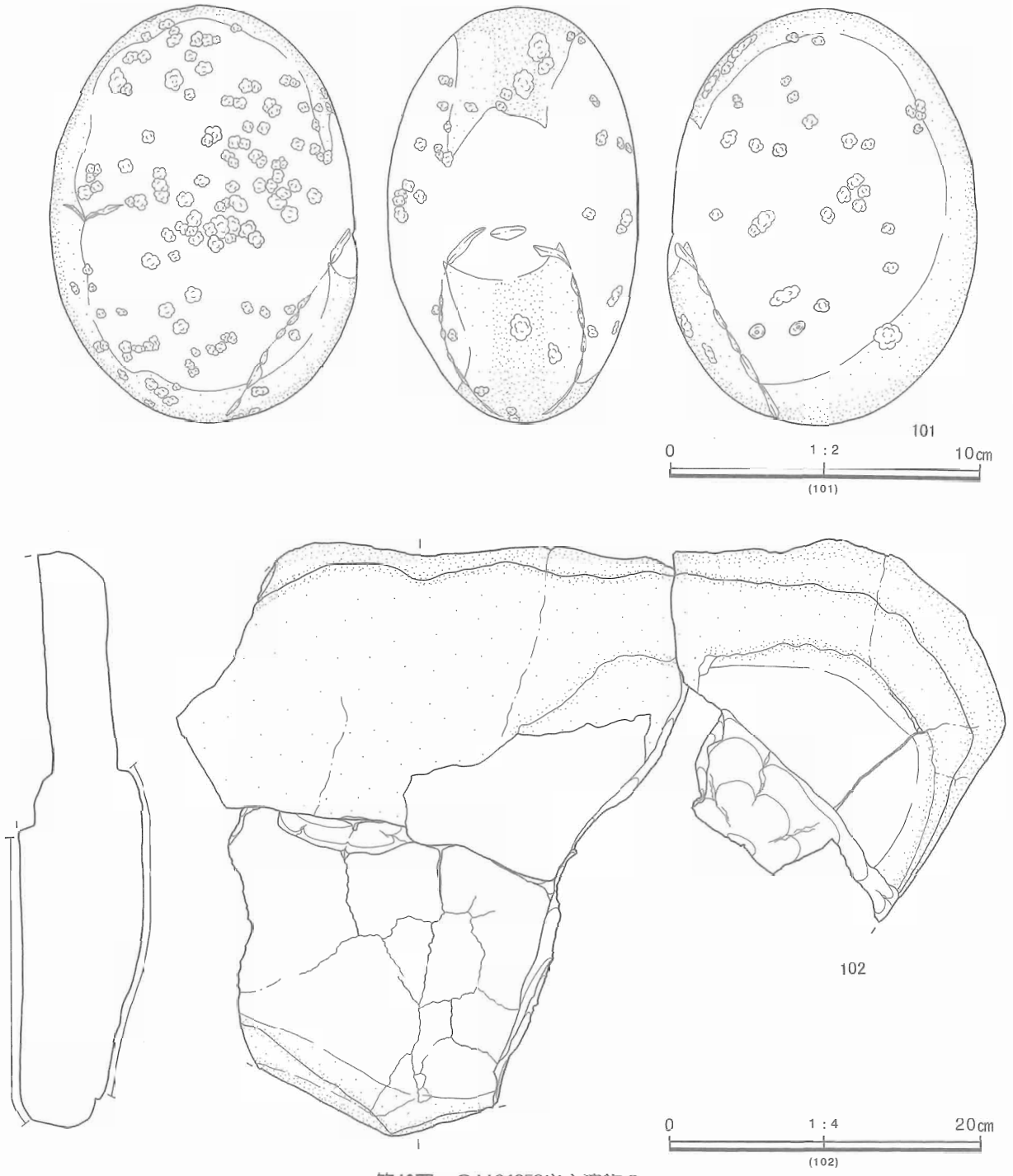


第45図　ＳＨ64659出土遺物１

顕著であり、敲打で穿たれた穴は直径約1.5cm程度とはっきりしている個所もある。

（第46図101）は炉64659から出土した磨敲石である。使用石材は天竜川水系の花崗岩で石の粒子は粗いがよく使い込まれて磨面はたいへん滑らかである。

（第46図102）は炉64659の炉石の一部である。横長の形で炉に埋め込まれ石囲いの一辺を成していたものである。厚さ約８cmの板状細粒砂岩で、広い扁平面が磨面として使用された形跡があるため、台石と



第46図　ＳＨ64659出土遺物２

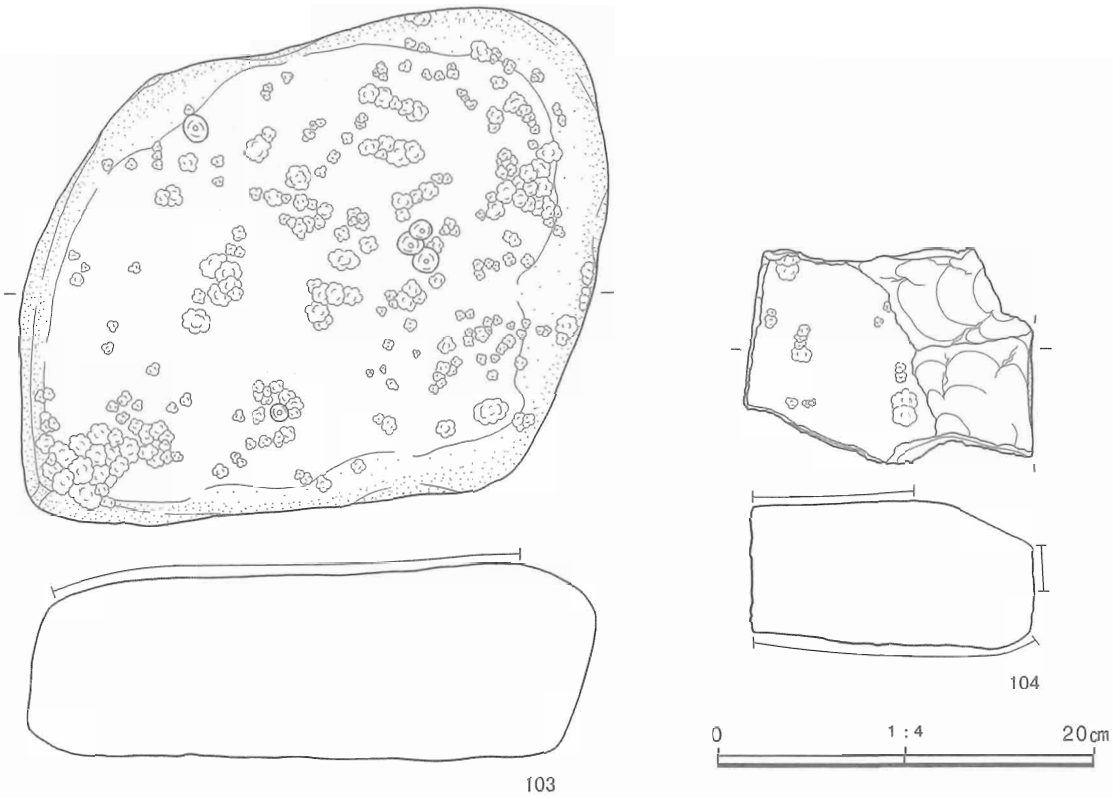
して使用していたものを炉石に転用した可能性がある。

ＳＨ61978（第48図～第50図）

【遺構】Ｌ・M21グリッドで検出された。幅20～40cm弱、深さ４～10cmの壁溝と考えられる溝が周囲を巡る、直径5.7mの円形を呈する住居である。

柱穴は外側を巡る主柱穴５か所、その内側のより小規模な柱穴４か所の都合９か所を確認した。

外側の柱穴は五角形状の配置がなされる。ＳＰ64477のみ直径70～80cmと大型で土坑状を呈するが、外は直径50cm前後の同規模な円形となる。底面はＳＰ62393がやや深く掘りこまれるように見えるが、いずれも標高111.04～02m付近と近似した位置にある。



第47図　ＳＨ64659出土遺物３

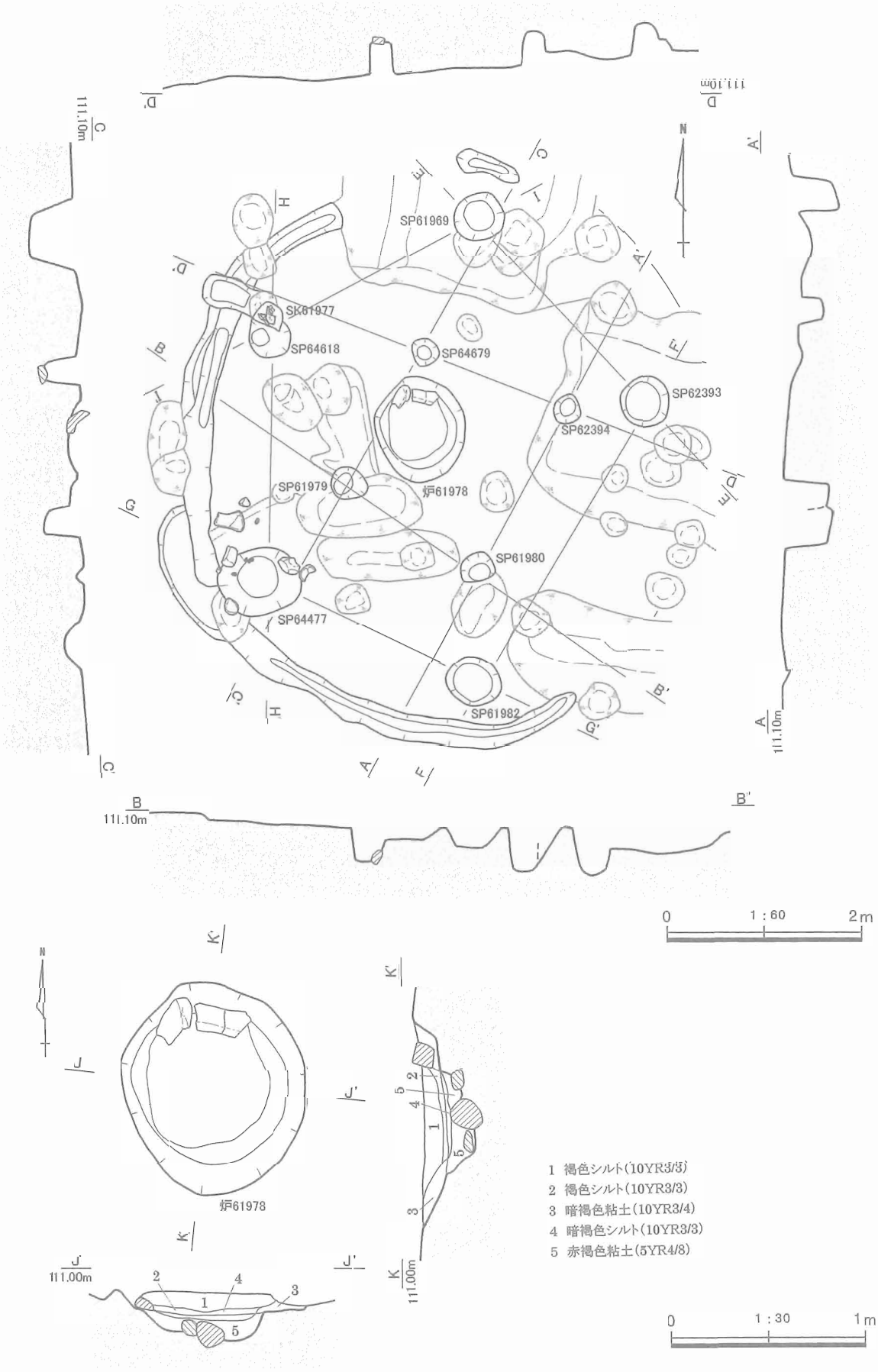
内側の柱穴は外側に比べ小規模である。Ａ－Ａ′断面が外側の柱穴Ｆ－Ｆ′断面とほぼ平行すること、４本が住居のほぼ中央に納まることなどから外側の柱穴と同時に存在するものと考えた。各々の間隔は南東辺が広く芯々で1.9m、他は1.6mほどとなり一定している。柱穴の規模は直径30cm前後、深さ25～45cmであるが、ＳＰ61980が深いほかはほぼ一定の深さに収められる。

中央やや北西よりに石囲炉61978がある。炉石は北側の一部にしか残存していなかったが、角柱状の礫を直交させて配置していることから、内部は方形であったと考えられる。内部には赤褐色に焼けた粘土が認められた。ＳＨ64659と同様に、住居が廃棄される際に破壊されているものと考えられる。

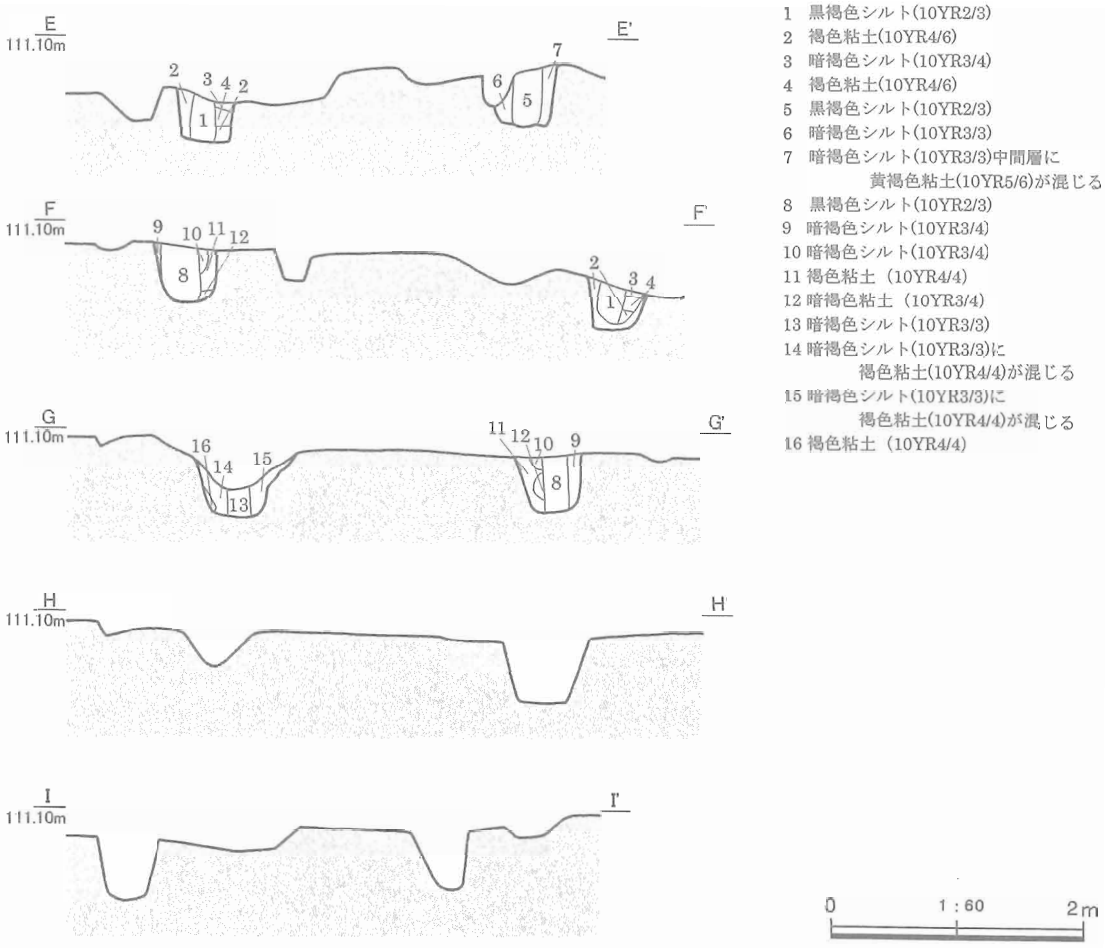
住居の北西縁、柱穴ＳＰ64618の北側に接して埋甕がある。これは、切り合いや位置関係から柱が立てられた後に設けられたものである。直径30cm程度、深さ20cm程の円形の掘方内には同一個体の深鉢から縦方向に割り取った複数の破片が、内部に三角形状の空間ができるように立てられて埋め込まれていた。検出面ですでに破片の上部が露出していたので、本来の掘方はもう少し高い位置から掘り込まれていたと考えられる。また、ＳＰ64477の北側には台石114が近接して置かれていた。

【遺物：土器】文様などがわかる土器９点（第50図105～113）が出土している。（第50図105）は口縁部に条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具で連弧文を施した咲畑式土器である。（第50図106）は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、棒状工具で沈線を施した咲畑式土器である。（第50図107・108）は無文土器であるが咲畑式土器の胴部破片の可能性がある。（第50図109）は口縁部に沿って太い沈線を付け、条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を施した咲畑式土器である。（第50図110）は縦位に沈線を付け、連弧文状の沈線を施した東鎌塚原式土器である。（第50図111）は無文土器で時期不明である。（第50図112・113）は底部破片である。

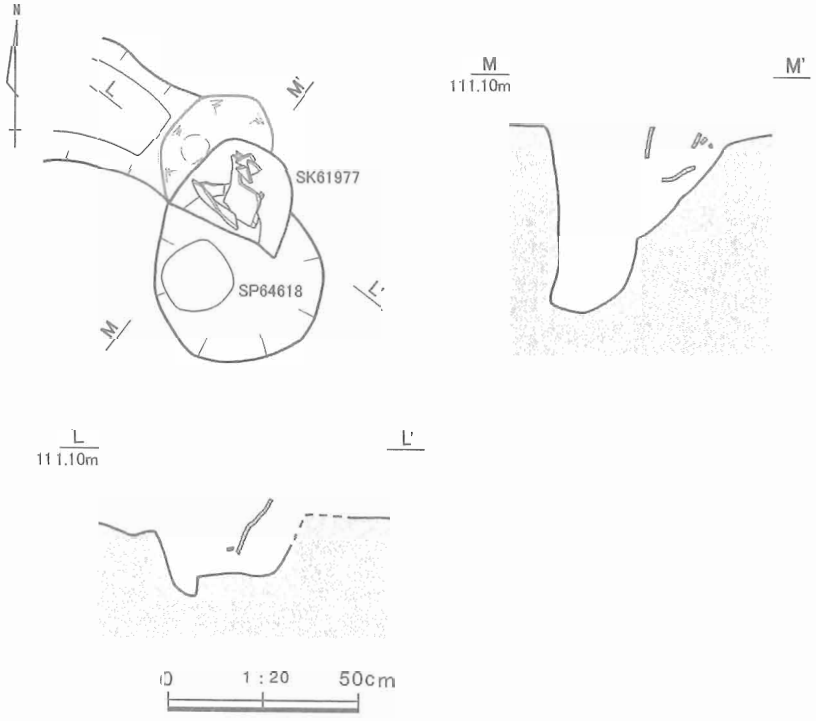
【遺物：石器】石器は、台石が２点出土した。いずれも板状の平らな裏表に磨り・敲打用の作業面をもつ。（第50図114）はＳＰ64477直上ＳＫ61986から出土した粗粒砂岩製で側縁を粗く敲打し成形されてい



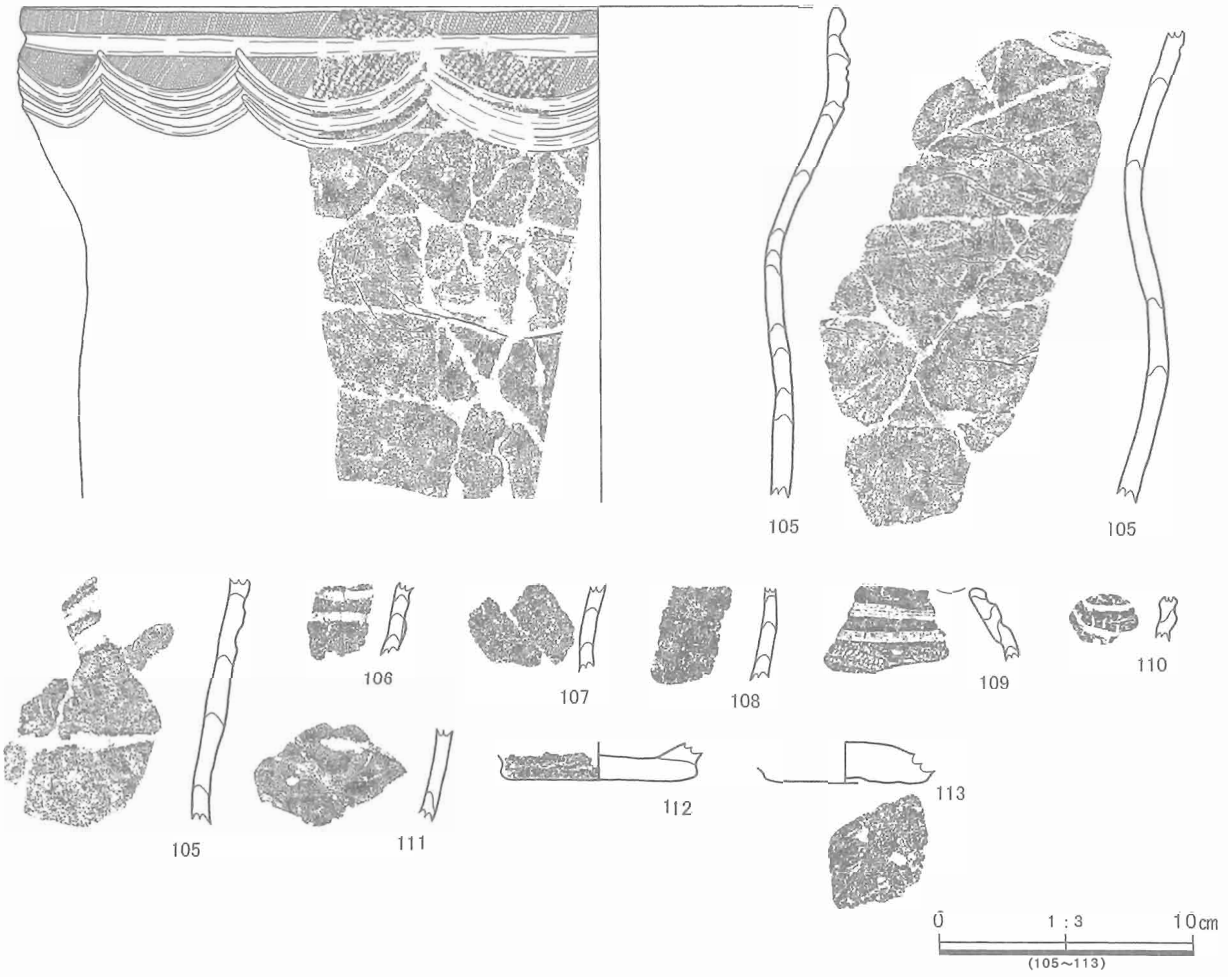
第48図　ＳＨ61978平面・断面図１

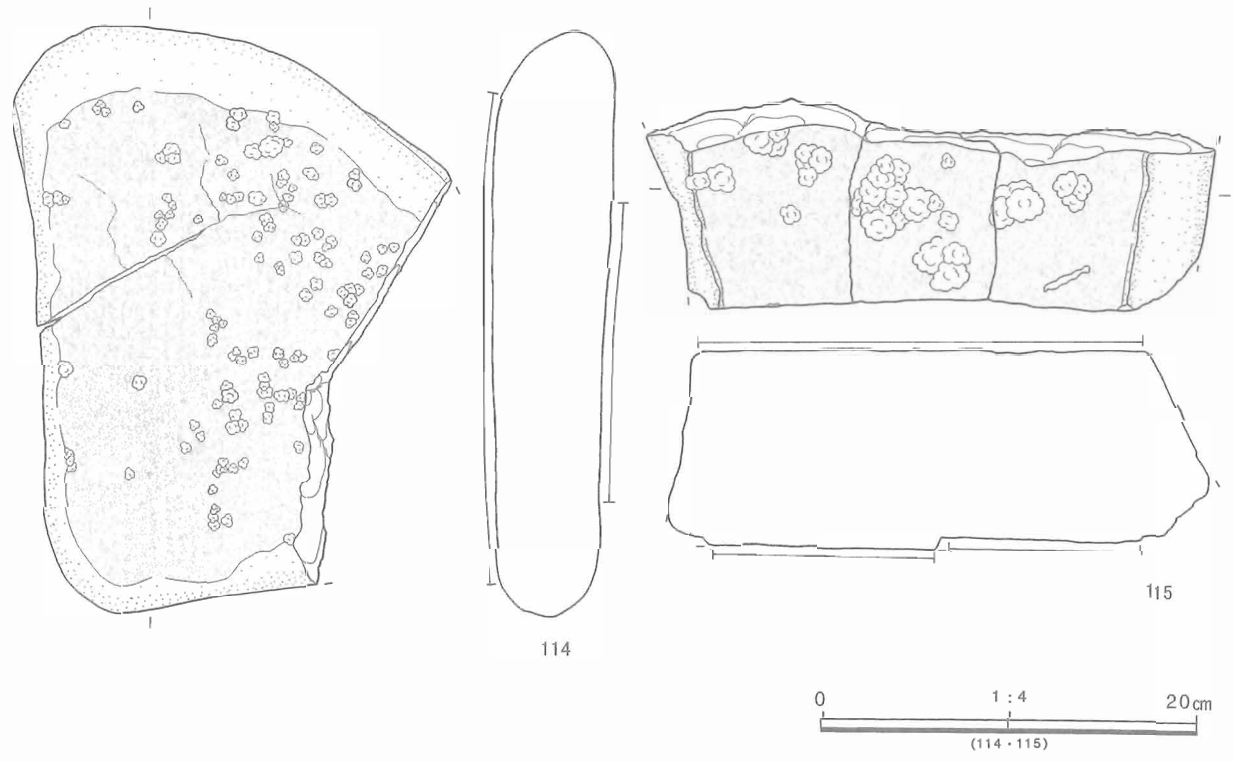


1 黒褐色シルト(10YR2/3)
2 褐色粘土(10YR4/6)
3 暗褐色シルト(10YR3/4)
4 褐色粘土(10YR4/6)
5 黒褐色シルト(10YR2/3)
6 暗褐色シルト(10YR3/3)
7 暗褐色シルト(10YR3/3)中間層に
黄褐色粘土(10YR5/6)が混じる
8 黒褐色シルト(10YR2/3)
9 暗褐色シルト(10YR3/4)
10 暗褐色シルト(10YR3/4)
11 褐色粘土 (10YR4/4)
12 暗褐色粘土 (10YR3/4)
13 暗褐色シルト(10YR3/3)
14 暗褐色シルト(10YR3/3)に
褐色粘土(10YR4/4)が混じる
15 暗褐色シルト(10YR3/3)に
褐色粘土(10YR4/4)が混じる
16 褐色粘土 (10YR4/4)



第49図　ＳＨ61978平面・断面図２





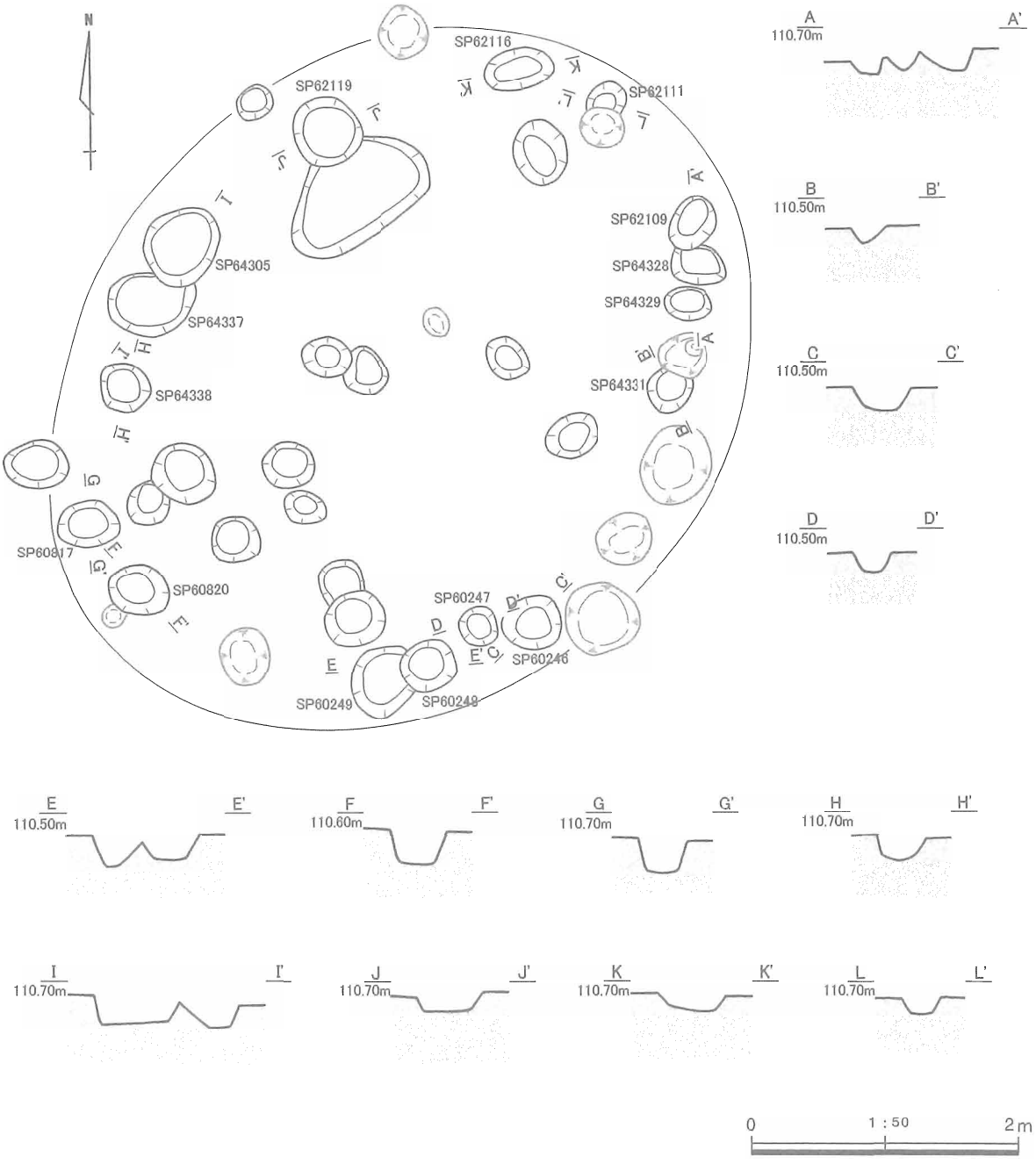
第50図　ＳＨ61978出土遺物

る。（第50図115）は中粒砂岩製で炉61978の覆土から出土した。

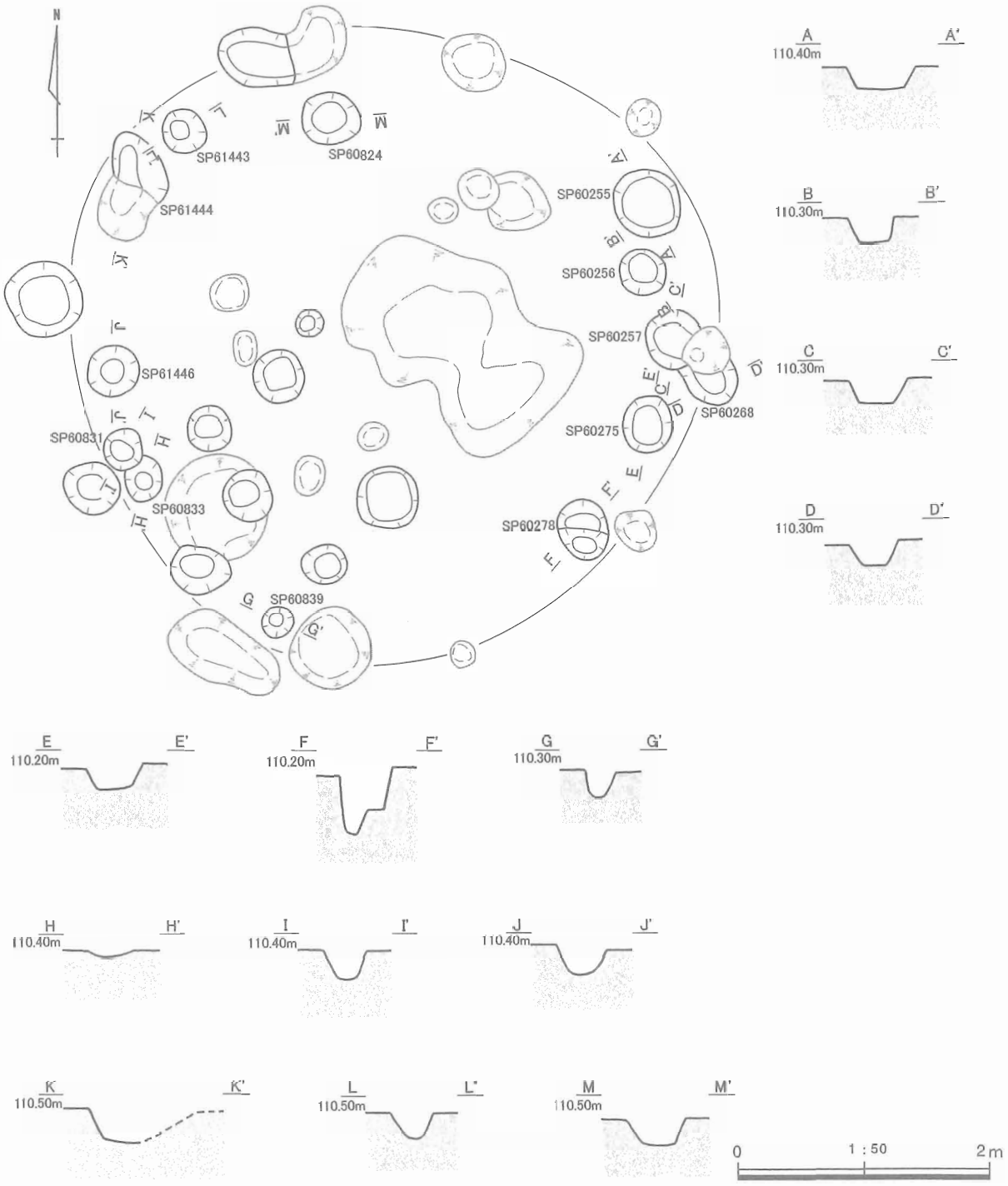
ＳＨ64918（第51図）

【遺構】Ｎ23グリッドで検出された。楕円形の円周上に乗る16か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。

小穴は直径30～50㎝台の円形を呈するものが主体で、深さは10～20㎝台となる。東側に直径20～30㎝台のＳＰ62109～62331が密に接する場所がある。一方、北西側には直径50～60㎝台の土坑状を呈するＳＰ62119～64337が偏っている。中央から南側に掛けて直径30～40㎝の小穴が密になる傾向があり、あるいは住居の中心はもう少し南側にあったのかもしれない。



第51図　ＳＨ64918平面・断面図

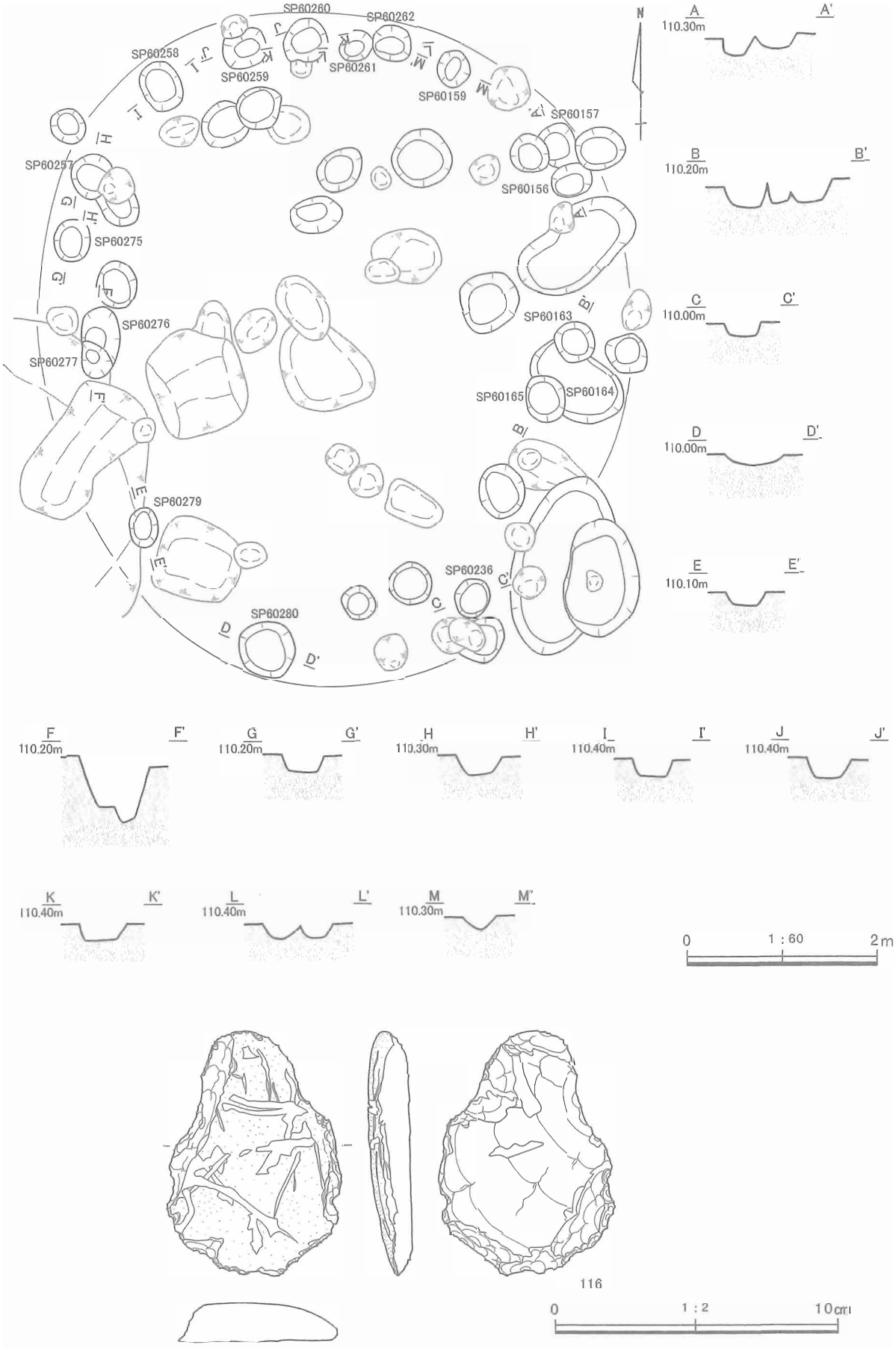


第52図　ＳＨ64919平面・断面図

ＳＨ64919（第52図）

【遺構】Ｎ・Ｏ23グリッドで検出された。中央やや東よりに木痕と思われる不定形な撹乱が入る。円形の円周上に乗る14か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。

小穴は、直径25～52cmの円形で、深さはＳＰ60833が５cm程度と浅く、ＳＰ60278が46cm程とより深く、他は15～20cmの間となっている。小穴は東側・西側に多く分布し、北側・南側には比較的少ない。また、南西側の内側よりにも小穴が分布する。柱穴となる可能性もあるが、対になるものが検出されていない。



第53図　ＳＨ64920平面・断面図、出土遺物

ＳＨ64920（第53図）

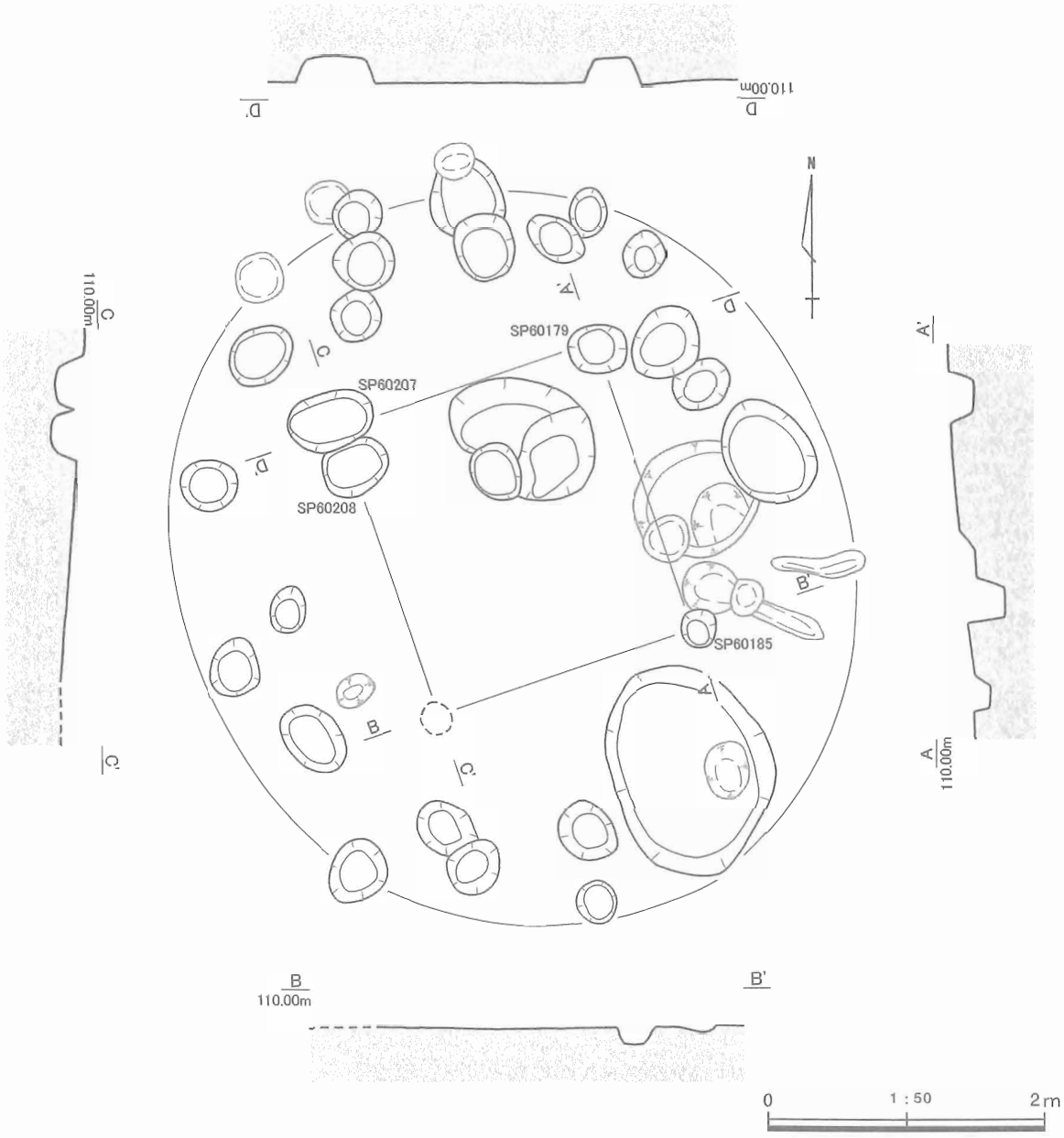
【遺構】Ｎ22～Ｏ23グリッドで検出された。円周上に乗る18か所の小穴が見出せたので、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。想定範囲の中央部分から南西に掛けて茶畑の改植による撹乱を受ける。

小穴は直径30～50㎝程の円形あるいは楕円形で、深さはＳＰ60280・60159が10㎝程度と浅く、ＳＰ60276・60277が50㎝以上と深く、他は15～25㎝の間にある。北側に分布が多く南側が比較的希薄である。

【遺物：石器】打製石斧１点（第53図116）が出土した。使用石材は砂質粘板岩で、撥形を呈し刃部や縁辺に細かい調整を加え原礫面を多く残している。

ＳＨ64921（第54図）

【遺構】Ｏ22グリッドで検出された。中心部に直交する位置関係にある小穴が認められるので、４本の主柱穴で建ち上がるものと考えられる。また、周囲の円周上にもほぼ同規模の小穴が認められるので、何らかの柱が存在した可能性があるだろう。



第54図　ＳＨ64921平面・断面図

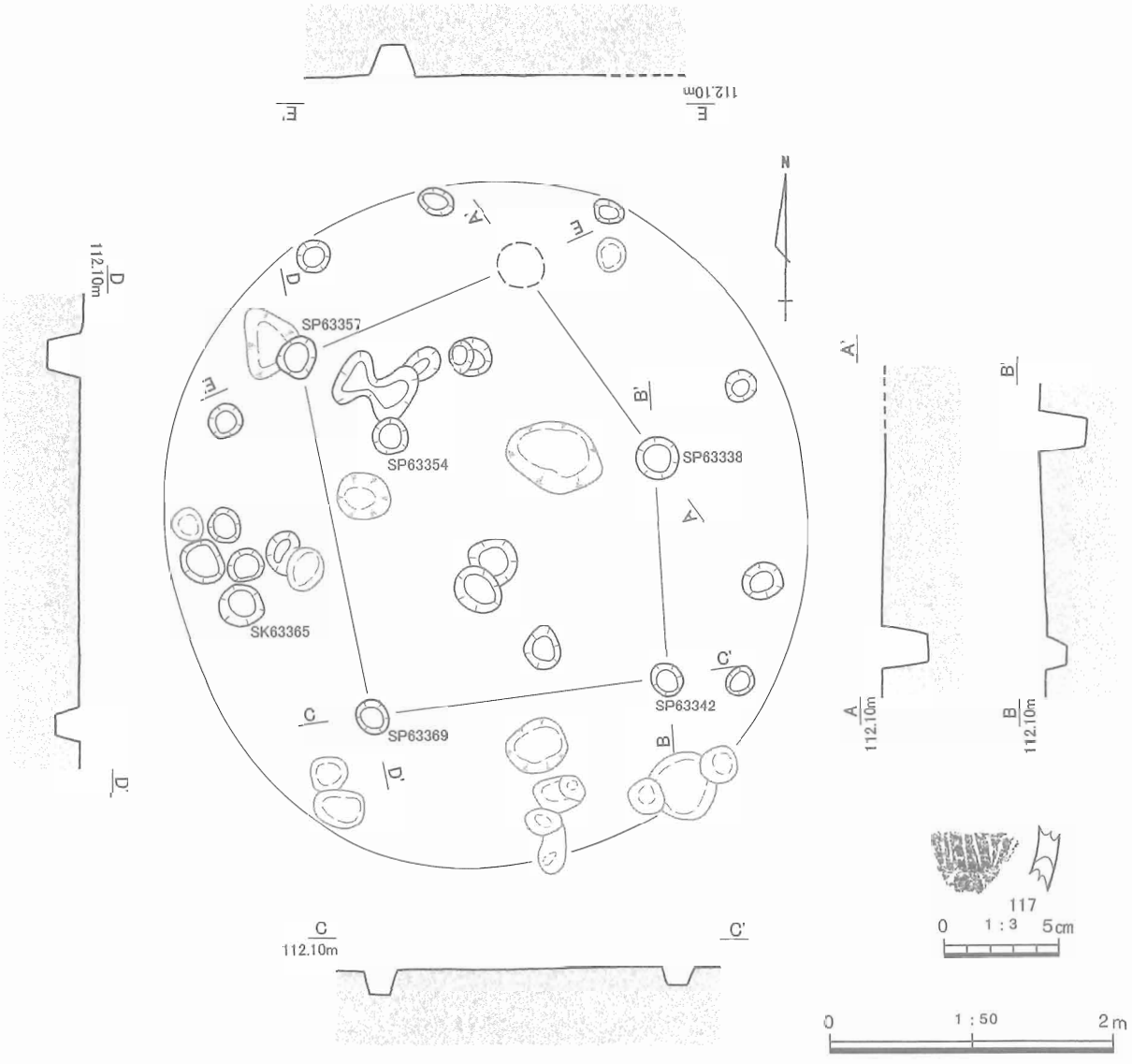
主柱穴と考えた小穴は3か所で、南西側のひとつは想定される位置になく明らかでない。ＳＰ60185・60179は直径25～44cmの円形状をなし、深さは10～16cmと前者がやや小規模となる。この並びに対応するＳＰ60207は長軸60cm、短軸40cmの楕円形でやや形状が異なるものの、深さは18cm程度とＳＰ60179と近似する。

周囲の小穴はＳＰ60179と近似した規模のものが多く、北側にやや多く分布し南東側には希薄である。

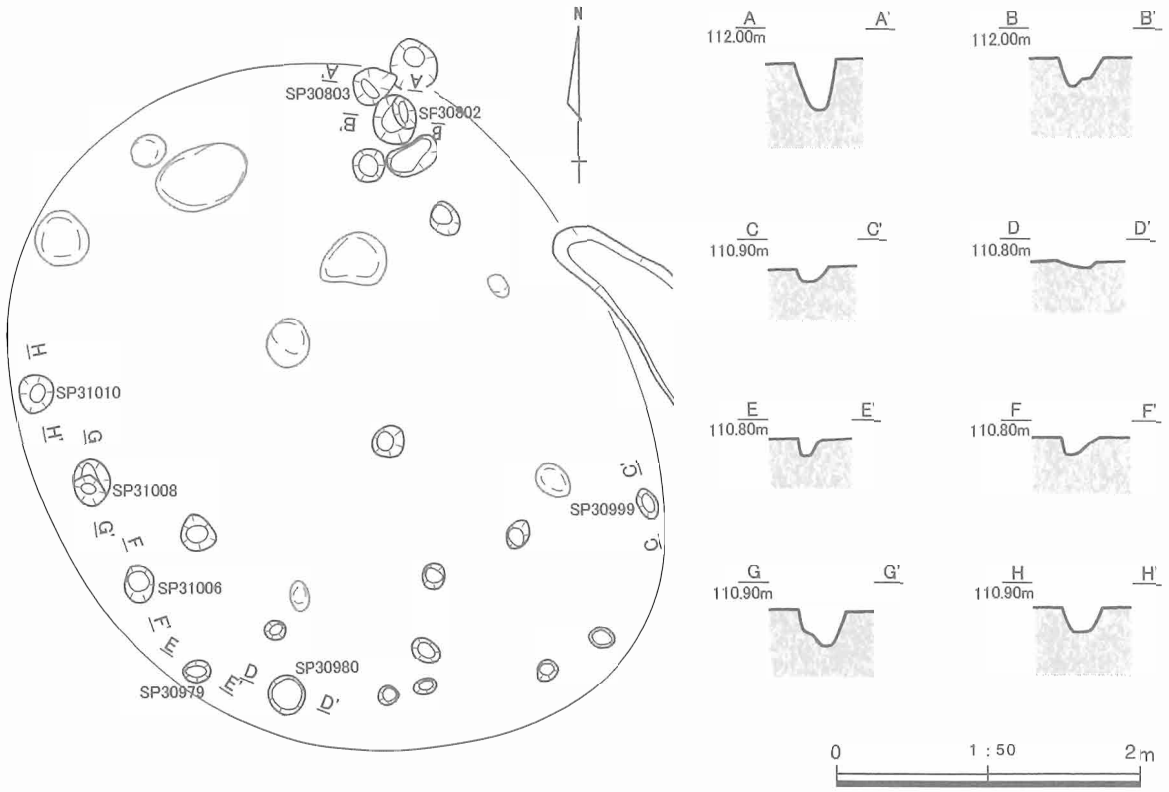
ＳＨ64922（第55図）

【遺構】Ｊ26グリッドで検出された。中心部に直行する位置関係にある小穴が認められる。ＳＰ63338と63357間が著しく開くので5本の主柱穴で建ち上がるものと考えたが、これらの間の小穴は確認されなかった。あるいは、ＳＰ63354・63338・63342・63369の4か所が主柱穴であるのかもしれない。一方で、周囲の円周上にもほぼ同規模の小穴が認められるので、何らかの柱が存在した可能性があるだろう。

主柱穴と考えられる小穴は、いずれも直径20～30cmの円形で、深さはＳＰ63342が最も浅く13cm、他は17～30cmとなる。柱穴の間隔は、5本で建ち上がる場合、ＳＰ63338・63342間が芯々で1.55m、ＳＰ63342・63369間が2.1m、ＳＰ63369・63357間が2.6mとなる。4本で建ち上がる場合は、ＳＰ63369・63354間が2m、ＳＰ63354・63338間が1.9mとなる。



第55図　ＳＨ64922平面・断面図



第56図　ＳＨ33015平面・断面図

【遺物:土器】文様などがわかる土器１点（第55図117）が出土している。（第55図117）は篦状工具で斜位に沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。

ＳＨ33015（第56図）

【遺構】Ｋ27グリッドで検出された。規模の小さな小穴がまばらに分布するので、住居であるが定かでない。あくまで可能性としてここに掲載した。

小穴は、想定した範囲の北側と南西側に集中する傾向がある。南西側では直径20cm前後の小穴が60～70cmおきに分布する。深さは５～24cmで、ＳＰ30980が著しく浅い。北側ではＳＰ30802・30803が隣接している。直径30cm前後、深さ18～30cmの円形状を呈し、ＳＰ30802では内部にさらに小さな小穴が切りこんでいる。

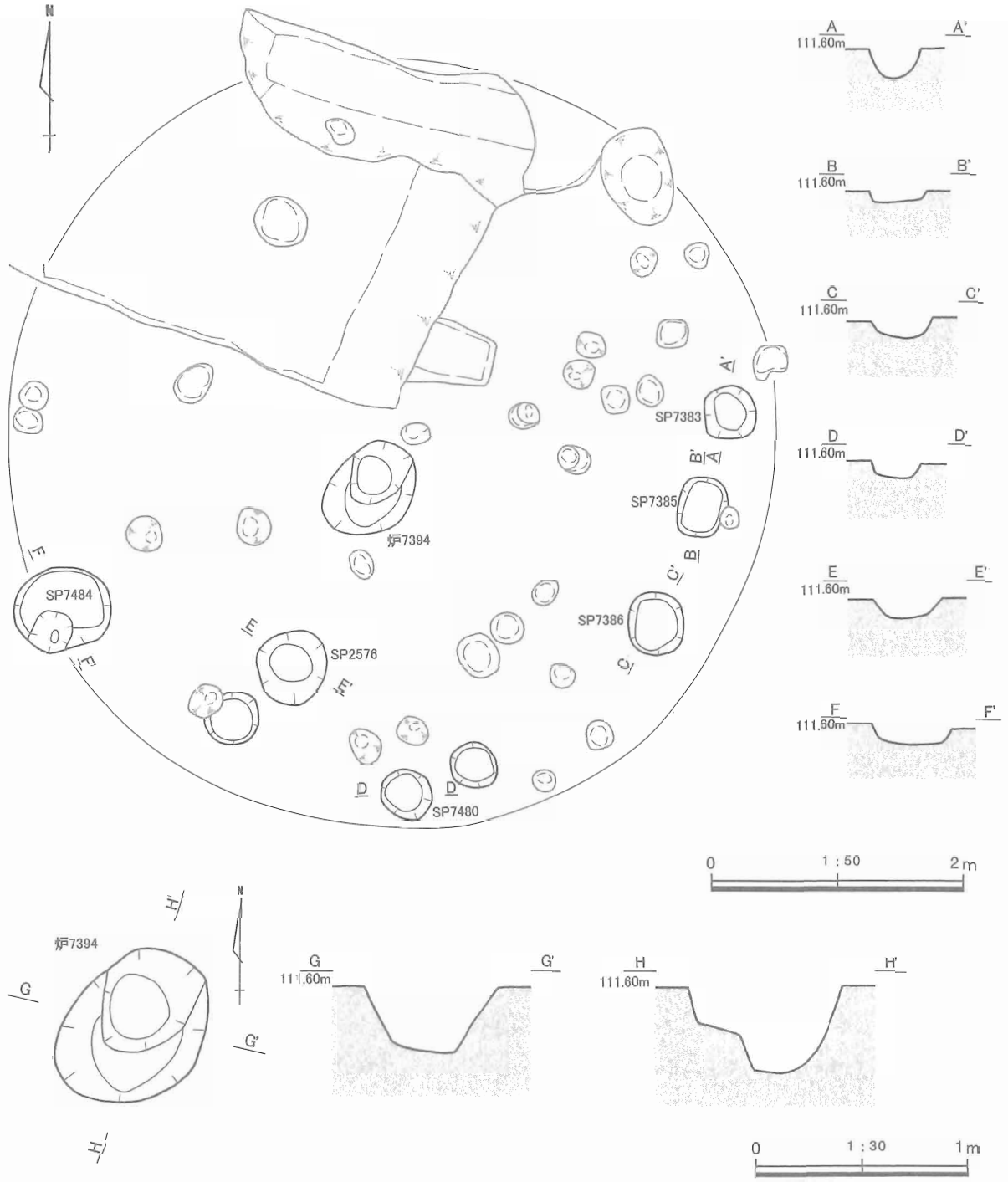
ＳＨ7394（第57図・第58図）

【遺構】Ｌ31グリッドで検出された。炉7394を中心として周囲に４か所の小穴、２か所の土坑が分布する。小穴は東～南側に分布しており、そのほかの部分では見当たらない。なお、北西側は茶畑の改植によって、1/4程度が撹乱されている。

小穴は直径30cm台～40cm程度の円形あるいは隅丸方形状をなし、ＳＰ7383が22cmとやや深いものの他は８～10cm台と浅くなる。

土坑は想定される範囲の南～南西側にある。ＳＫ2576は直径52～60cmの円形状で深さ15cmほどである。この土坑からはほぼ同時期とみられる土器と磨石が出土している（第58図126）。ＳＫ7484は直径65～78cm、深さ14cm程の円形の土坑で、南側に小穴が重複する。

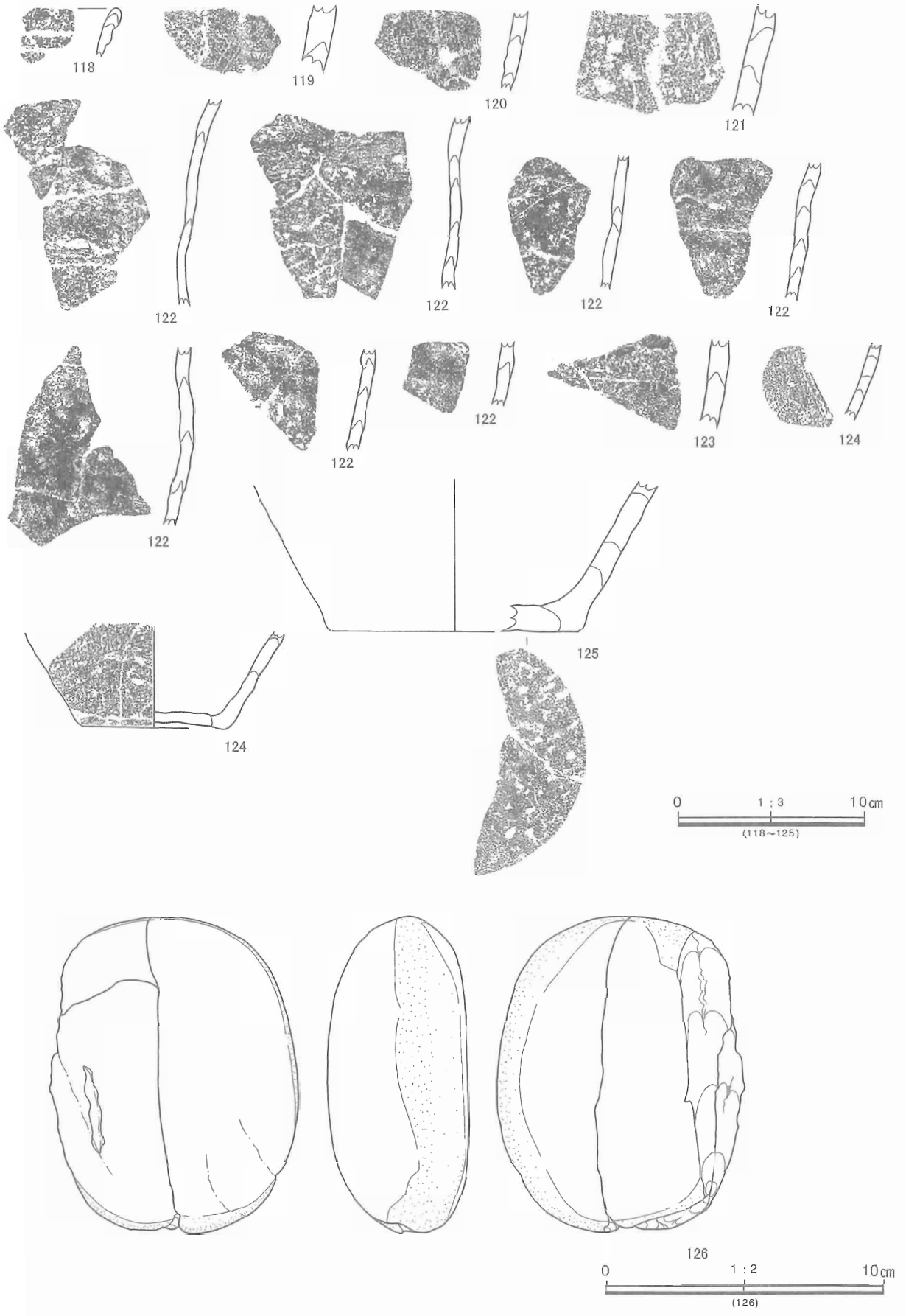
炉7394は炉石等の施設は認められなかったが、内面が焼けており、炭化物を含む褐色シルトが覆土となっていたため、炉と判断した。長軸約80cm、短軸62cm、深さ25cm程度の楕円形を呈する土坑に長軸54



第57図　ＳＨ7394平面・断面図

cm、短軸44cm、深さ40cmの円形を呈する小土坑が切りこんでいる。元来の炉は前者であり、炉床を掘りぬく後者は廃棄する炉を破壊するために掘られた可能性があろう。

【遺物：土器】文様などがわかる土器８点（第58図118～125）が出土している。（第58図118）は器面が風化している口縁部破片で、横位に沈線を付けている。北裏Ｃ式土器と思われる。（第58図119～121）は器面が風化しているが、沈線が斜位に付いた曽利Ⅲ式土器である。（第58図122）は薄手土器の胴を無文にした東鎌塚原式土器である。（第58図123）は無文土器で時期不明である。（第58図124）は胴部に櫛歯状工具で縦位に沈線を付け、底部を上底風に作っており北裏Ｃ式か東鎌塚原式土器である。（第58図



第58図　ＳＨ7394出土遺物

125）は底面に網代痕がある。

【遺物:石器】石器は、ＳＰ2576から磨石が１点（第58図126）出土している。中粒砂岩の扁平円礫を使用し、表裏に磨面をもつ。

ＳＨ33016（第59図）

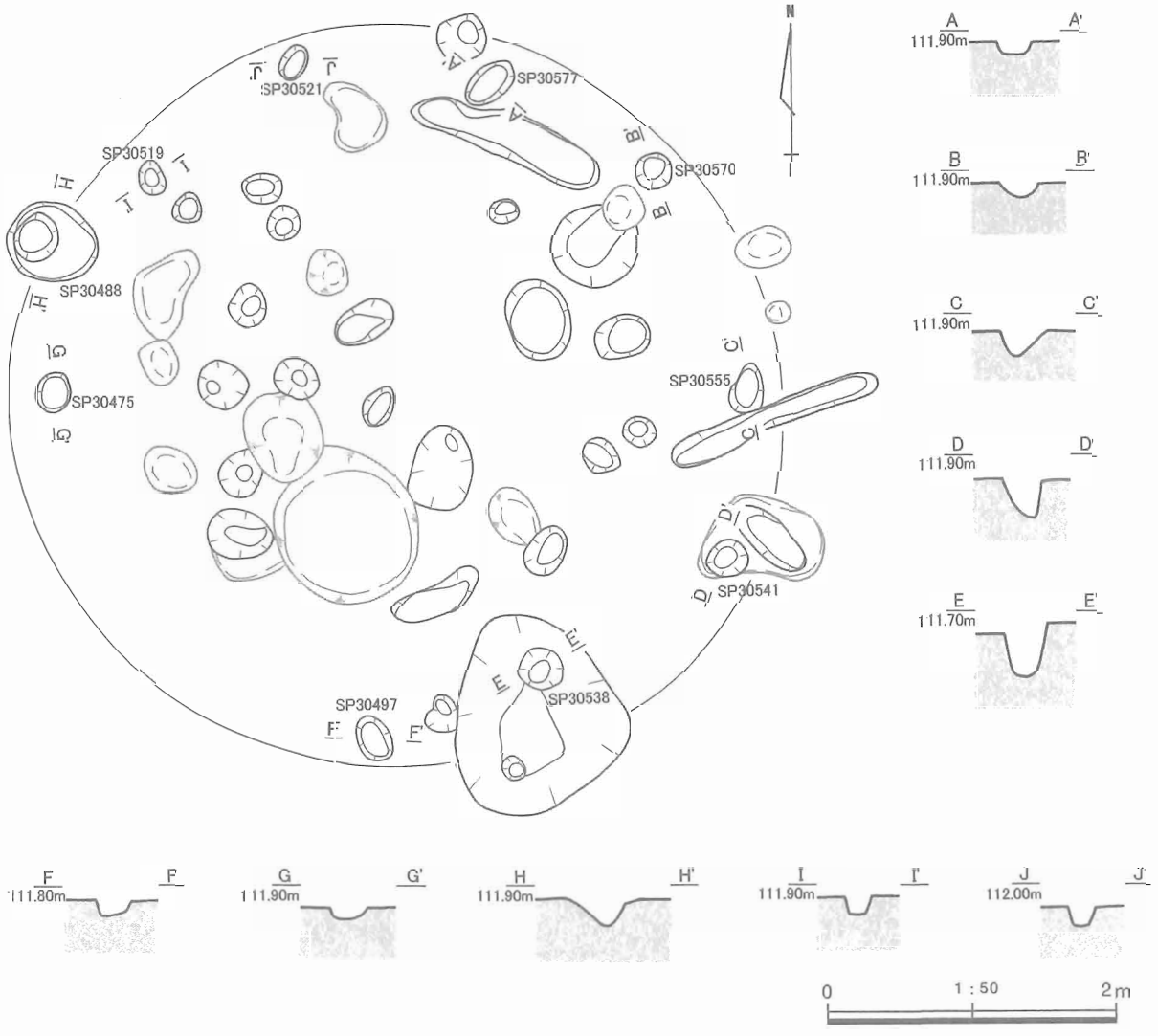
【遺構】Ｋ28グリッドで検出された。円周上に乗る10か所の小穴が見出せたので、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。南西側のＳＰ30475・30497間には該当する柱穴が見当たらない。他の部分では芯々で1.2～1.7mおきに分布する。

小穴は直径24～52cmの円形あるいは楕円形を呈し、深さはＳＰ30541・30538が28～36cmと比較的深いほかは、５～18cmと浅くなる。想定範囲の中心部にもこれらに類した小穴が少数分布しているが、対になるものが特定できない。

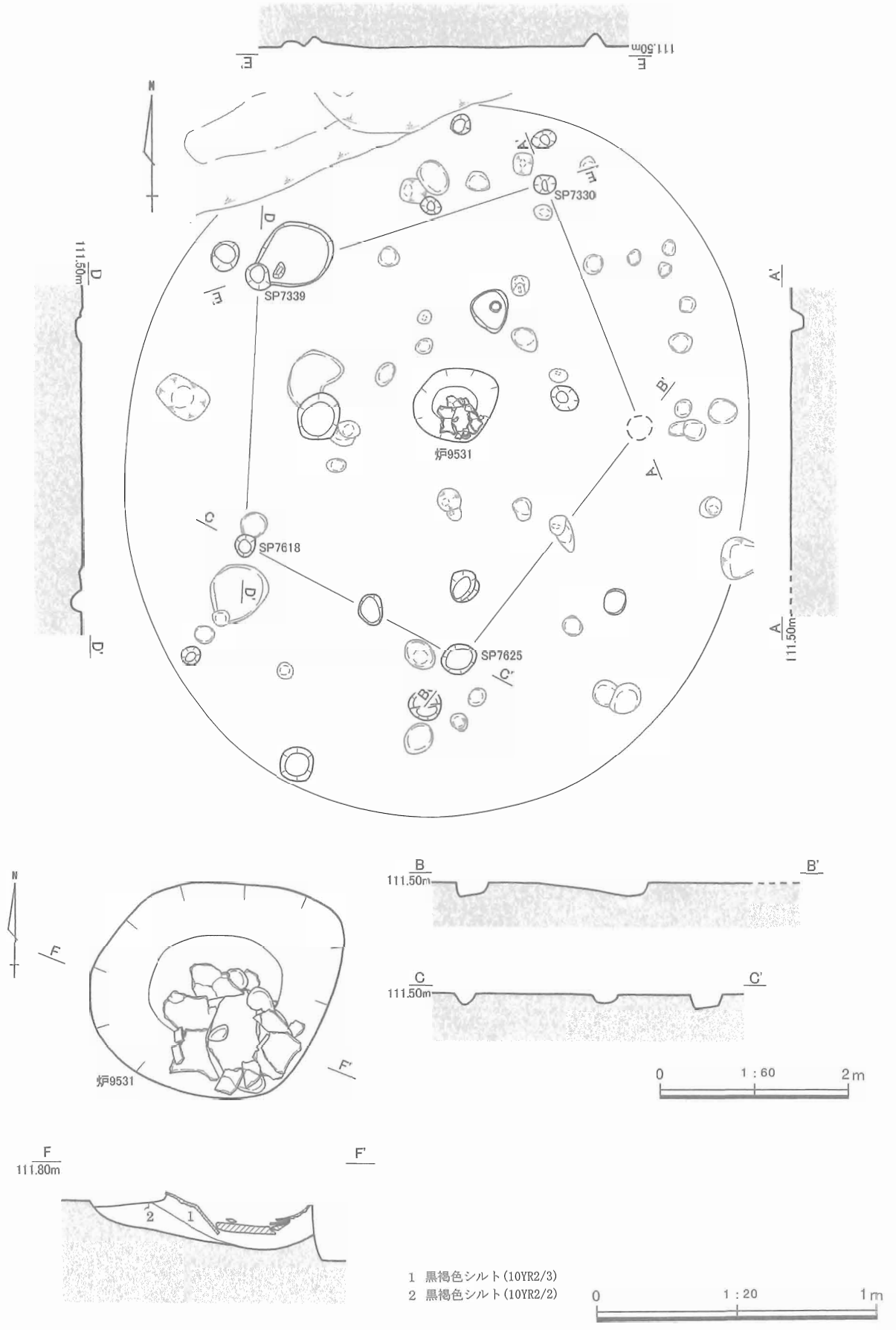
ＳＨ9542（第60図～第62図）

【遺構】M30・31から検出された。炉9531を中心とする住居であり、柱穴と考えられる小穴を４か所で確認した。並びからすると東側にもう一か所柱穴が存在するはずであるが検出できなかった。

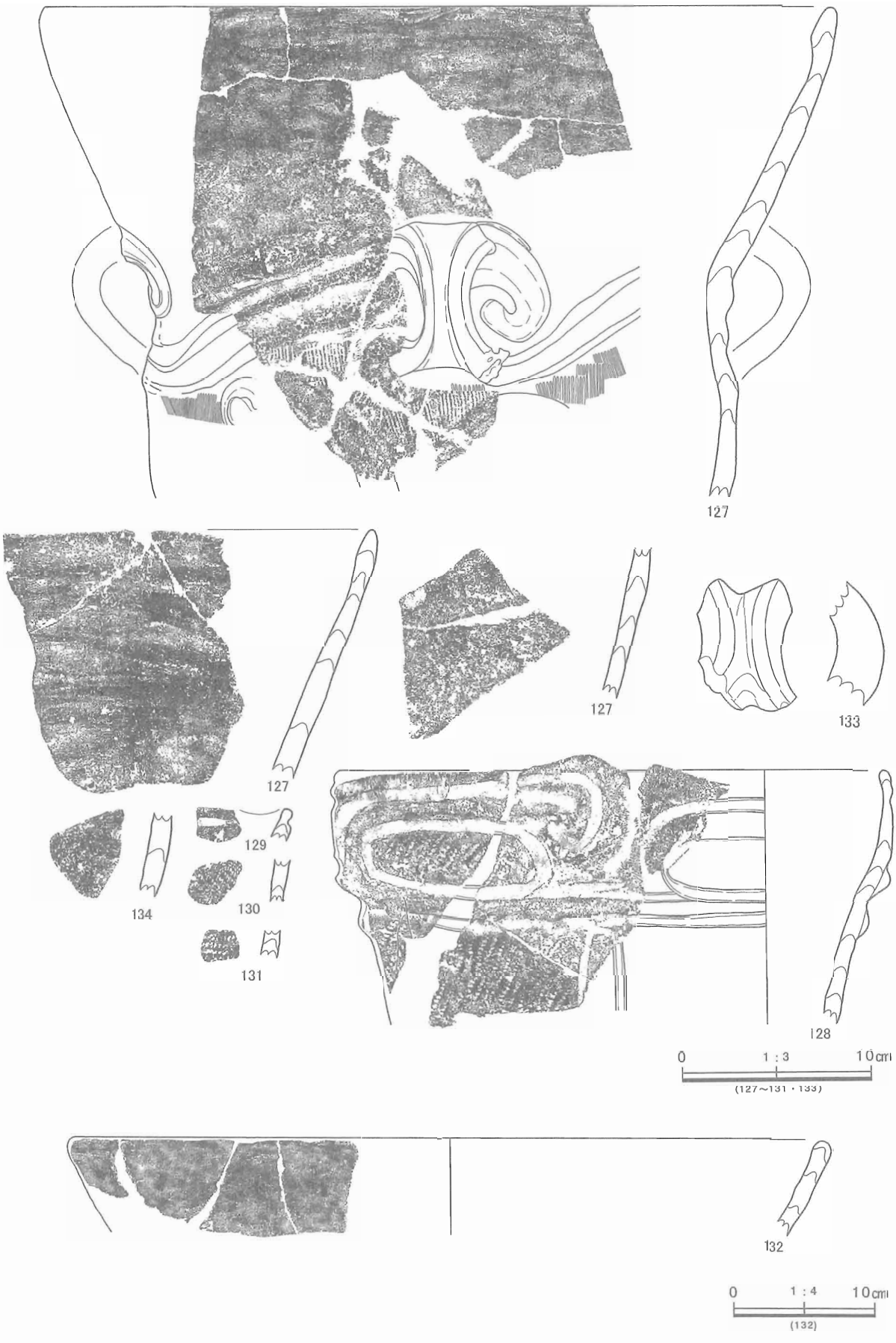
柱穴は直径20～30cm台の円形を呈し、深さは10～15cm程度と浅い。ＳＰ7330と7625間には柱穴の存在が想定できるが明らかでない。いずれも検出面が床面より下がった位置にある影響だろう。



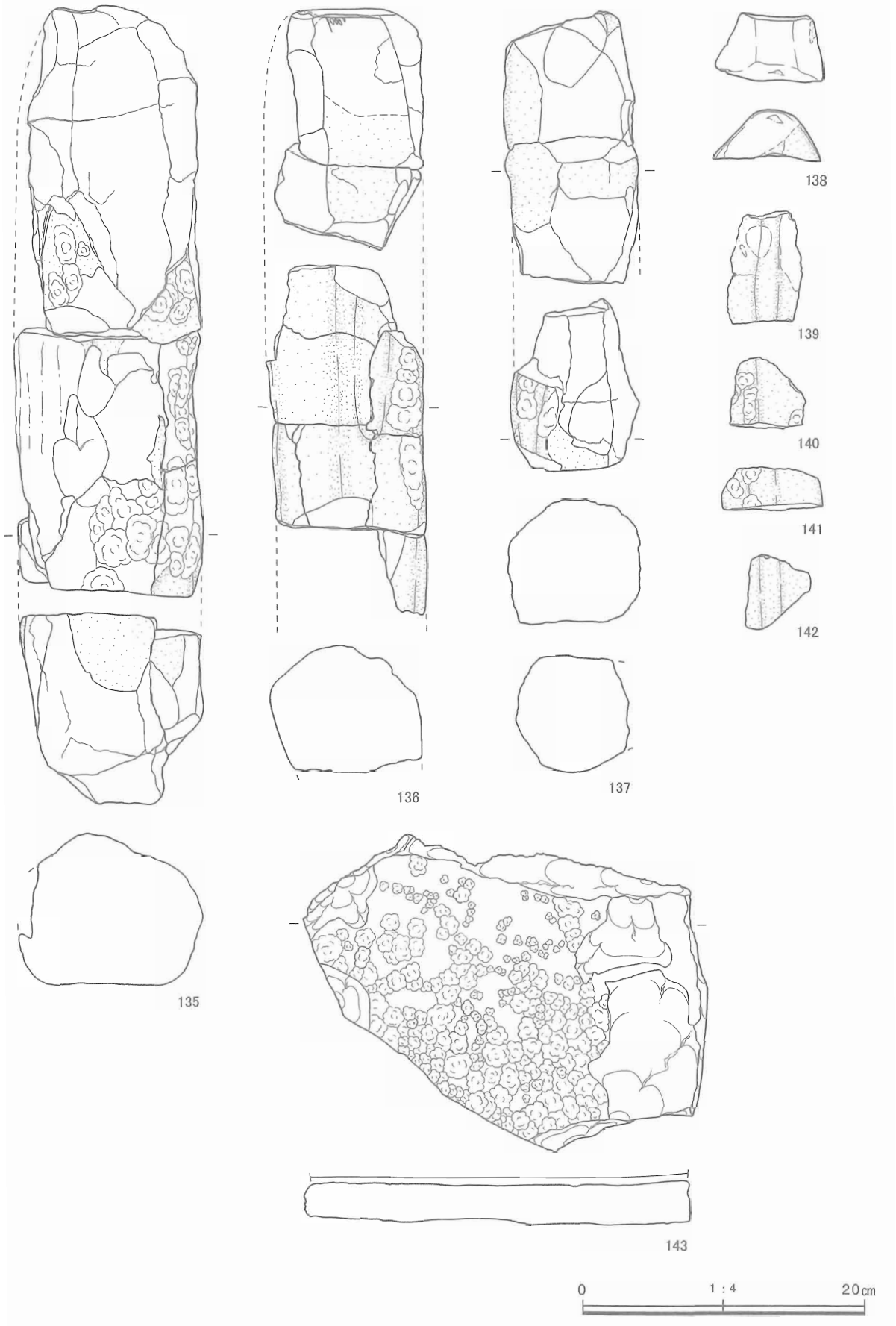
第59図　ＳＨ33016平面・断面図



第60図　ＳＨ9542平面・断面図



第61図　ＳＨ9542出土遺物１



第62図　ＳＨ9542出土遺物２

炉は柱穴の中央部にある。直径75～95cm、深さ20cm程度の円形状の掘方内に台石の破片（第62図143）を水平に置き。その周囲に同一個体の深鉢（第61図127）から割り取った大破片を花弁状に並べている。これらは掘方の南側に偏っている。炉の内側は土器辺の末端の距離から50cm程の円形になるものと思われる。

住居の範囲内にあたる土坑ＳＫ7339からは石棒が出土している(第62図135～137)。３個体が粉々に折れた状態で土坑の中に放棄されていた。住居に前後する時期の遺構である可能性もあるが、今回は住居に含めて記載した。

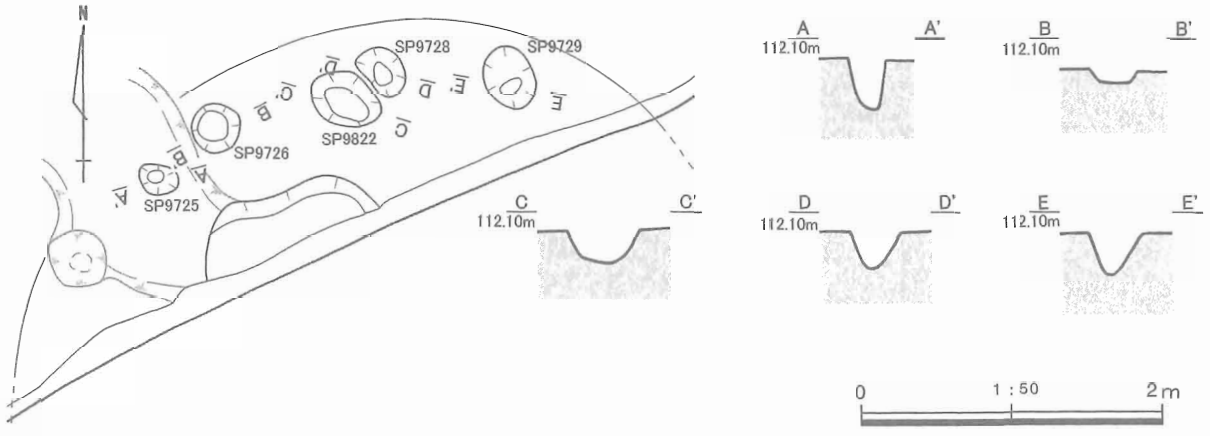
【遺物：土器】文様などがわかる土器８点（第61図127～134）が出土している。(第61図127）は口縁部と胴部の境にＸ状の大形把手を付け、下に渦巻き状の隆帯区画をし、その中に櫛歯状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。炉に敷き詰められていた。(第61図128）は口縁部を波状口縁にして、そこを楕円や渦巻きに隆帯区画し、区画内に条の太さ約0.3cm、長さ約２cmのＲＬ縄文を付け、隆帯に沿って指頭状沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第61図129）は口縁に沿って沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第61図130)は条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を付けている。(第61図131)は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けている。(第61図132）は口縁部で中期末の土器である。(第61図133）はＸ状把手で曽利Ⅲ式土器と思われる。(第61図134）は型式不明である。

【遺物：石器】土坑ＳＫ7339からは、石棒が出土している。土坑の中には同一石材がバラバラに折れて投げ込まれたような状態で検出され、接合の結果、３個体の石棒が存在した(第62図135～137)。伊豆半島産の多孔質安山岩を使用し、敲打により柱状に成形した後に表面を研磨して作られたと思われるが、調整が粗いためか横断面の形状は円形を成さずむしろ多角形で、角柱状の無頭石棒であったと考えられる。(第62図135）は頭部～底部までが55cm以上、(第62図136）は底部が欠損しており長さが42cm以上、(第62図137）は頭部～底部まで32cm以上あり、いずれも被熱して表面がもろくなり剥がれている個所も多い。(第62図138～140）も同じ土坑から出土している石棒破片で（第62図135～137）のいずれかと同一個体であると考えられるが、接合しなかった。(第62図141・第62図142)はＳＨ9542の上層から出土しているが、ＳＫ7339出土石棒と同一石材であるためここに掲載した。

（第62図143）は炉9531の底に敷くようにして据えられた炉石である。その周辺を囲うように、口縁～胴部を打ち欠いた土器（第61図127）が並べられており、炉9531は埋甕炉の可能性もある。(第62図143）は板状の粗粒砂岩で周縁は打ち欠かれたようになっており、平面には磨面と著しい敲打の痕が残るため、台石を転用したものではないかと考えられる。

ＳＨ9848（第63図）

【遺構】Ｓ29グリッドで検出された。円形状の円周上に乗る５か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘



第63図　ＳＨ9848平面・断面図

方のみが残存する住居跡と考えたが、南側のおよそ3/4は調査区外となり判断が難しい。

小穴は、直径20～50cm台の円形あるいは楕円形を呈し、ＳＰ9726が10cm程度と浅いものの、他は20～30cm台と一定の深さを保っている。

ＳＨ33017（第64図）

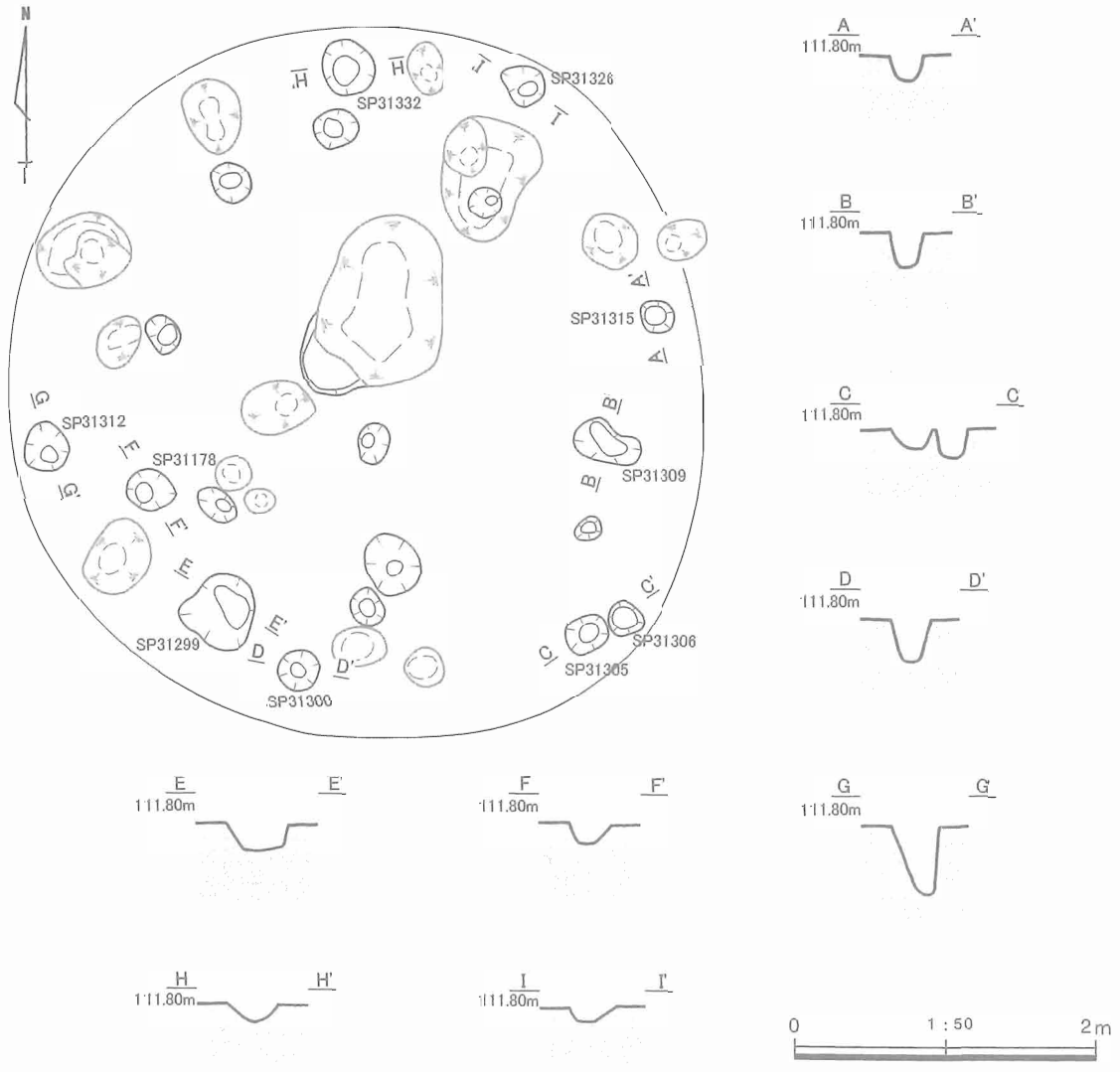
【遺構】Ｋ・Ｌ29グリッドで検出された。円周上に乗る10か所の小穴が見出せたので、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。小穴は北西側にあたるＳＰ31332・31312間には見当たらないが、他の場所では0.9～1.9mおきに分布している。

小穴は、直径20～48cmの円形あるいは不定形で、深さはＳＰ31326が８cm程度と浅く、ＳＰ31312が45cmと深くなる。他は12～23cmの間に収まる。

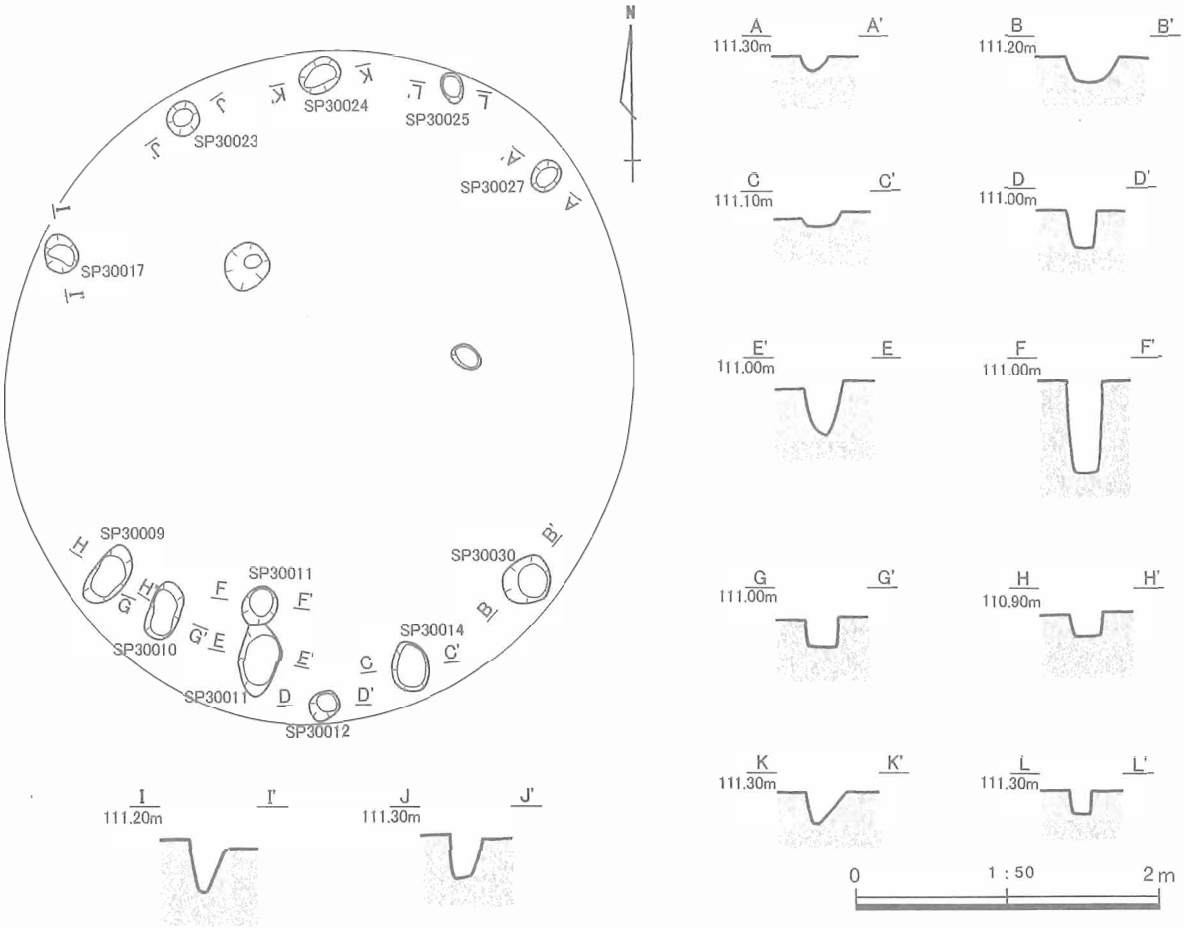
ＳＨ33018（第65図）

【遺構】Ｌ33グリッドで検出された。円形の円周上に乗る12か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えたが、中央から東西にかけて茶畑の改植による撹乱が入るので、その部分の遺構は定かでない。

小穴は北側が比較的小さく、南側が大きい。北側では直径10～20cm台の円形で、深さは10～30cm台であり、特にＳＰ30017・30023が深い。南側ではＳＰ30011・30012は小ぶりであるが、直径30cm台の円形



第64図　ＳＨ33017平面・断面図



第65図　ＳＨ33018平面・断面図

あるいは楕円形を呈するものが主体である。深さはＳＰ30014が著しく浅いが、他は20cm台となり、特にＳＰ30011は60cmと著しく深い。

ＳＨ8029（第66図～第68図）

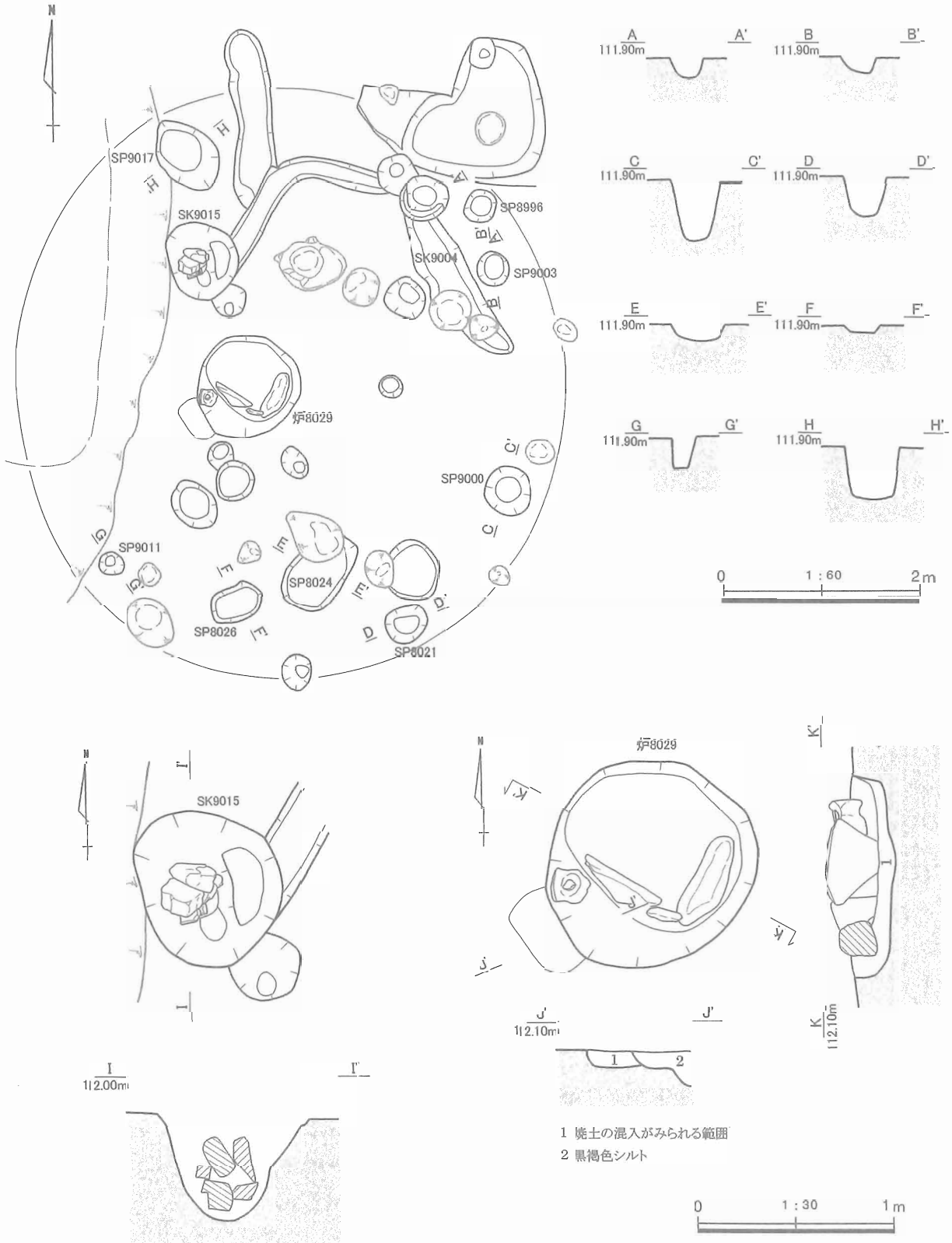
【遺構】Ｏ30～Ｐ31グリッドで検出された。西側の1/3程度は方形周溝墓で破壊されて明らかでない。住居の掘方も検出されなかったが、炉を中央付近に持つ円形の住居であろう。

柱穴の可能性のある小穴は６か所で確認された。円形を主体とし、直径は20～80cm台と開きがある。深さはＳＰ8021・9000・9017が比較的深く40～60cm台となる。他は５～20cm程度と浅い。

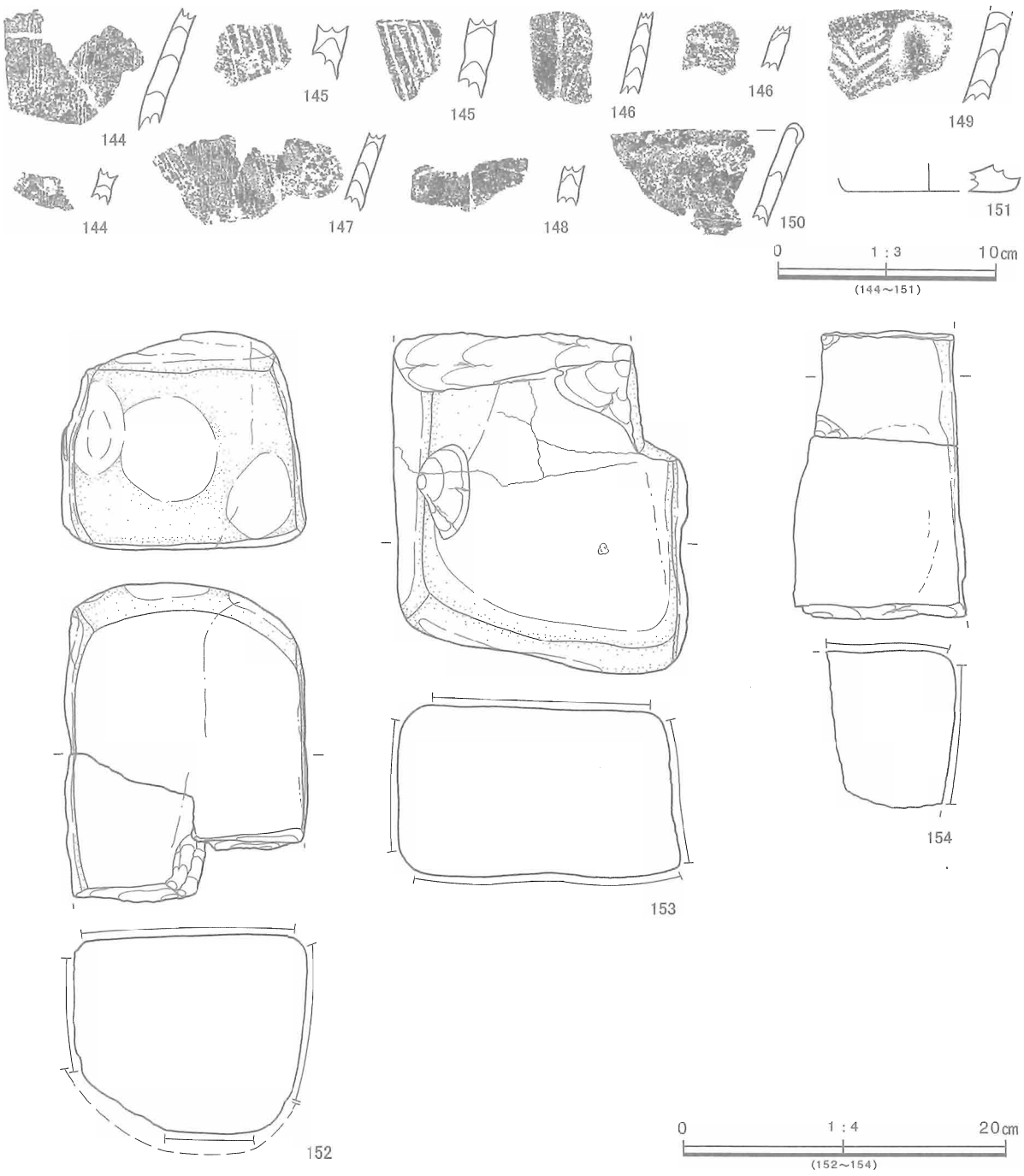
炉は直径１ｍ程度、深さ20cm前後の円形の掘方に扁平（台石からの転用品）あるいは角柱状の礫を配置する石囲炉である。礫の配置は北側にやや偏っており、内面は40cm四方程度の四角形を呈するものとみられる。北面・西面の礫は抜き去られており、住居の廃絶に伴って破壊されたものとみられる。また、炉石の外側にあたる南西隅には、内側が空洞になった筒状の礫が埋め込まれていた。この空洞は人為的なものではなく、礫に含まれるより柔らかな部分が淘汰されて自然と抜けたものとみられる。住居を建てた人は、この礫に何らかの思いを託していたのであろうか。

炉の北北西側には、長軸10～15cm程の台石を複数入れる土坑ＳＫ9015が検出された。下位には平らに、上位では立てられていたことからも、住民が何らかの意図を持って埋めたものと思われる。

【遺物：土器】文様などがわかる土器８点（第67図144～151）が出土している。（第67図144）は胴部に櫛歯状工具で縦位沈線を付けた中期前葉から中葉土器である。（第67図145）は胴部に密接蒲鉾状平行沈



第66図　ＳＨ8029平面・断面図

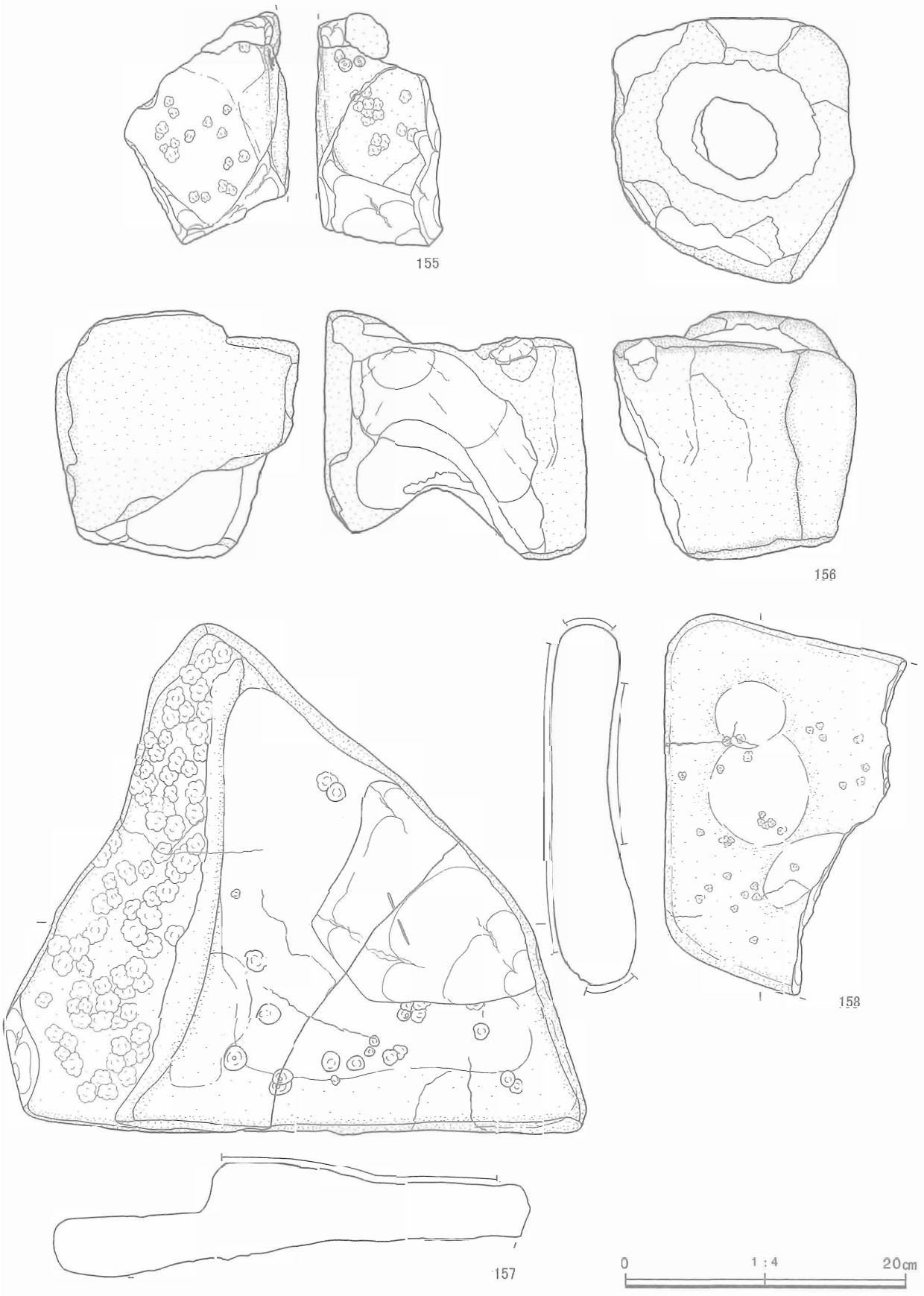


第67図　ＳＨ8029出土遺物１

線を斜位に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第67図146)は胴部を太い沈線で区画した後、条の太さ約0.3㎝のＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第67図147・148)は胴部に櫛歯状工具で縦位や斜位に沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第67図149)はハ状沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第67図150)は口縁部を無文土器にした型式不明土器である。(第67図151) は底部破片である。

【遺物：石器】土坑ＳＫ9015からは、中粒砂岩・粗粒砂岩製の台石の一部が４点出土した。接合するものはなくそれぞれ別個体である。(第67図152～154)はもともとは直方体の台石だったと思われ、各面に磨面を有する。(第68図155) は表面に磨面・敲打痕を有し、側面は粗い敲打痕のみが見られる。

(第68図156～158)は石囲炉8029の炉石である。(第68図157)は逆三角形のような向きで、(第68図158)



第68図　ＳＨ8029出土遺物２

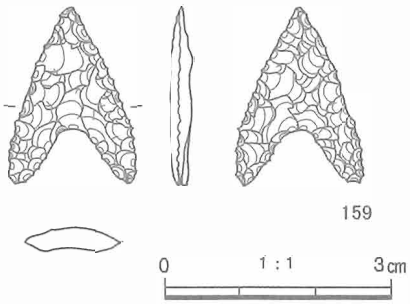
は縦長になる向きで並べられた状態で地面に埋め込まれ、方形石囲い炉の一辺を構成している。(第68図157)は板状の中粒砂岩で平面に磨り・敲打痕が見られるため、台石を炉石に転用したものと考えられる。(第68図158) は平面にやや窪んだ部分をもつ細粒砂岩で、窪み部は磨りが見られるため石皿を転用したものと考えられる。(第68図156) は方形の石囲いに外接する位置に置かれており炉の一部を構成する石である。自然状態で中空になった筒状の石を何らかの用途で炉脇に設置したと考えられるが、現段階ではどのように使われていたかは不明である。

ＳＨ9543（第69図、第70図）

【遺構】Ｐ29～Ｑ30グリッドで検出された。円形状の円周上に乗る８か所の小穴が見出せたことから、柱穴掘方のみが残存する住居跡と考えた。

小穴は、直径20～40cmの円形で大小差がある。特に20cm台の小ぶりなものは東側に多く認められる。深さは10～60cm台と差が著しいが、浅く底面が丸くなるＳＰ9131・9217以外は深さ20cm前後が多い。一方、ＳＰ9136・9197は深さ50cmを超える。

【遺物:石器】遺物は、長脚の石鏃（第69図159）が１点出土した。諏訪星ヶ台産の黒曜石製で、表裏とも縁辺が細かく調整された精緻な製品である。

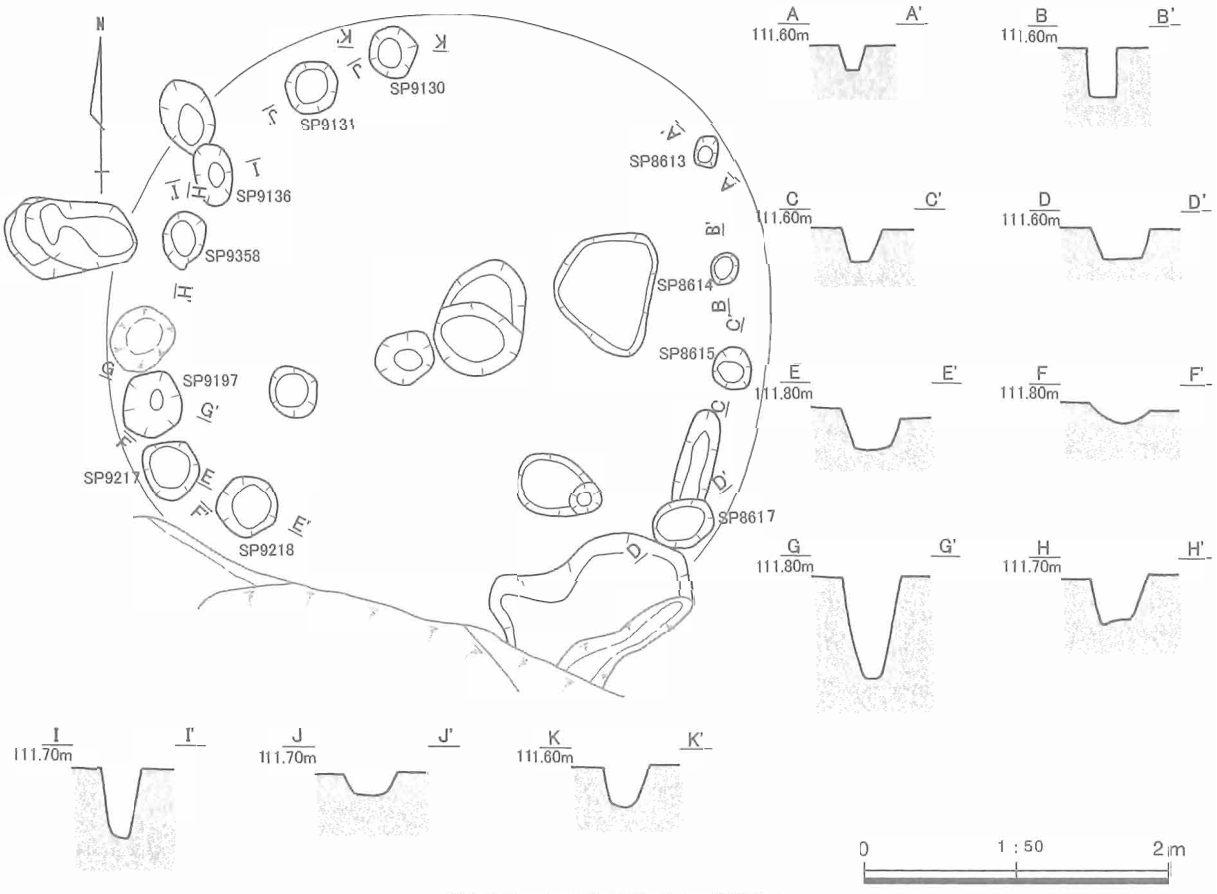


第69図　ＳＨ9543出土遺物

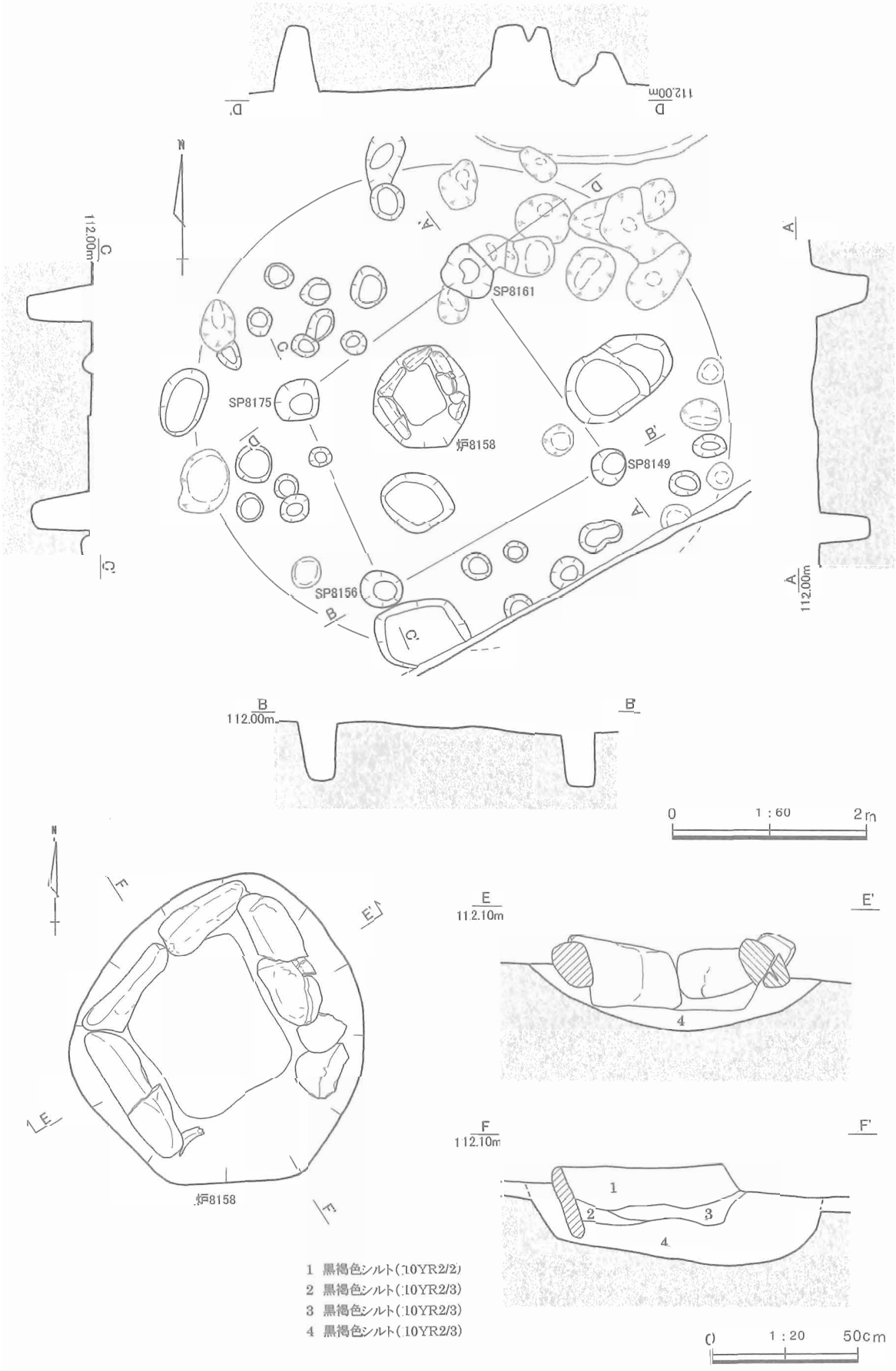
ＳＨ8158（第71図・第72図）

【遺構】Ｒ・Ｓ29で検出された。南東側のおよそ1/5は調査区外となり検出されていない。柱穴４か所と炉を検出した。

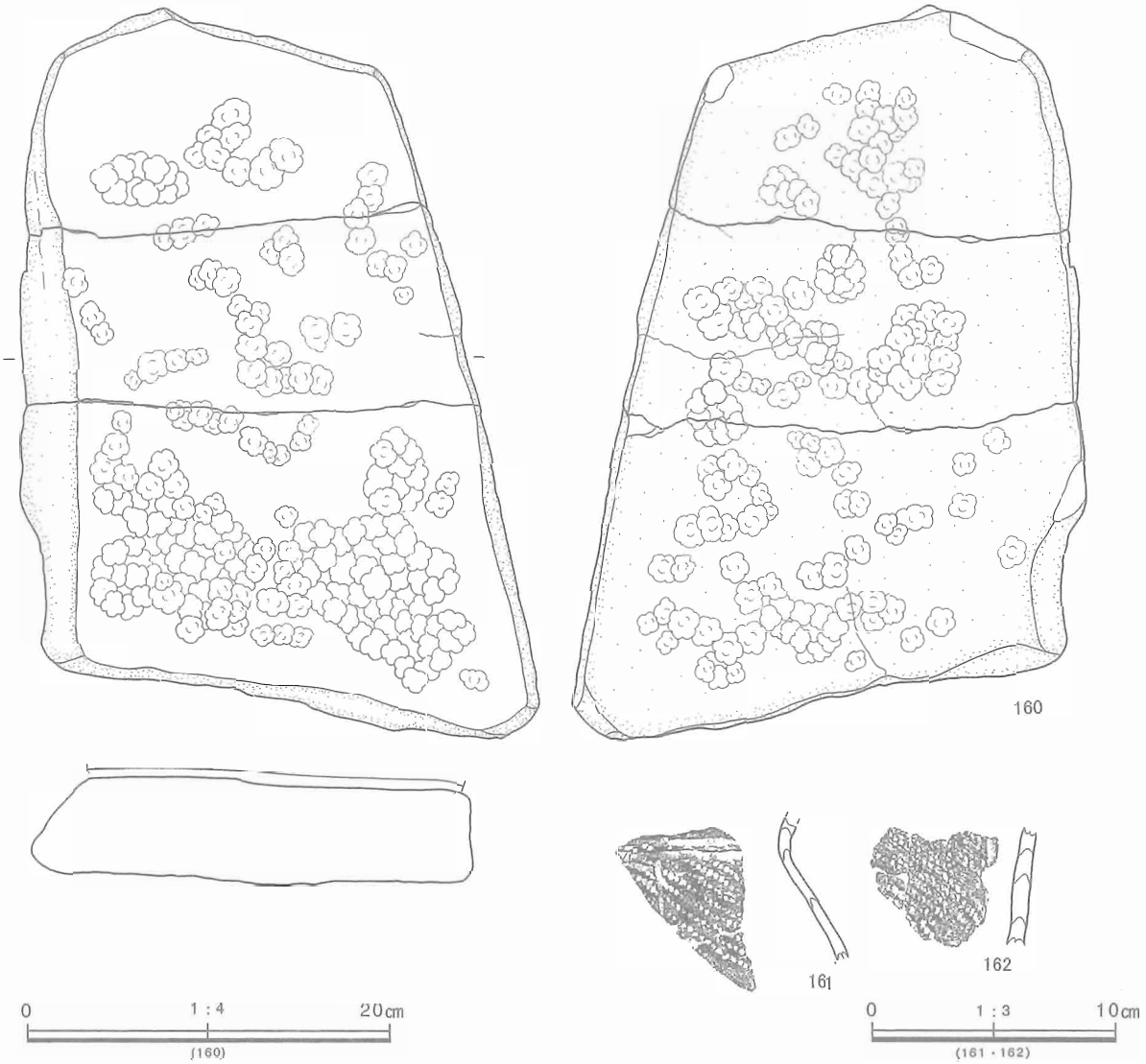
柱穴はほぼ正方形に配置されており、直径35～55cmの円形を呈する。深さは60cm程度で、底面はいずれも標高



第70図　ＳＨ9543平面・断面図



第71図　ＳＨ8158平面・断面図



第72図　ＳＨ8158出土遺物

111.3mにあって一定している。柱の間隔は南東側と北東側が2.5～2.7mとやや広く、他は2.2m前後となる。

炉は柱で囲まれた空間の北西よりにある。幅１m、深さ25cm程度の隅丸方形状の掘方内に扁平あるいは円柱状の礫を複数個用いて、内部に50cm四方ほどの炉を設える。この礫の中には、他にも見られるように台石を転用する個所もある。南東側の礫は抜き去られており、住居が廃絶される際に破壊されているものと考えられる。

【遺物：土器】文様などがわかる土器２点（第72図161・162）が出土している。（第72図161）は条の太さ約0.4cm、長さ約2.3cmのＲＬ縄文を付け、横位と縦位に沈線を施した中期前葉から中葉土器である。（第72図162）は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、縦位沈線で区画した後期前半土器と思われる。

【遺物：石器】（第72図160）は石囲炉8158の炉石である。横長の状態で地面に埋め込まれ、方形炉の一辺を構成していた。厚さ6.0cmの板状の粗粒砂岩で、平面を成す表裏に磨面と敲打痕を有するため、台石を炉石に転用したものと考えられる。

２　土坑墓と出土遺物

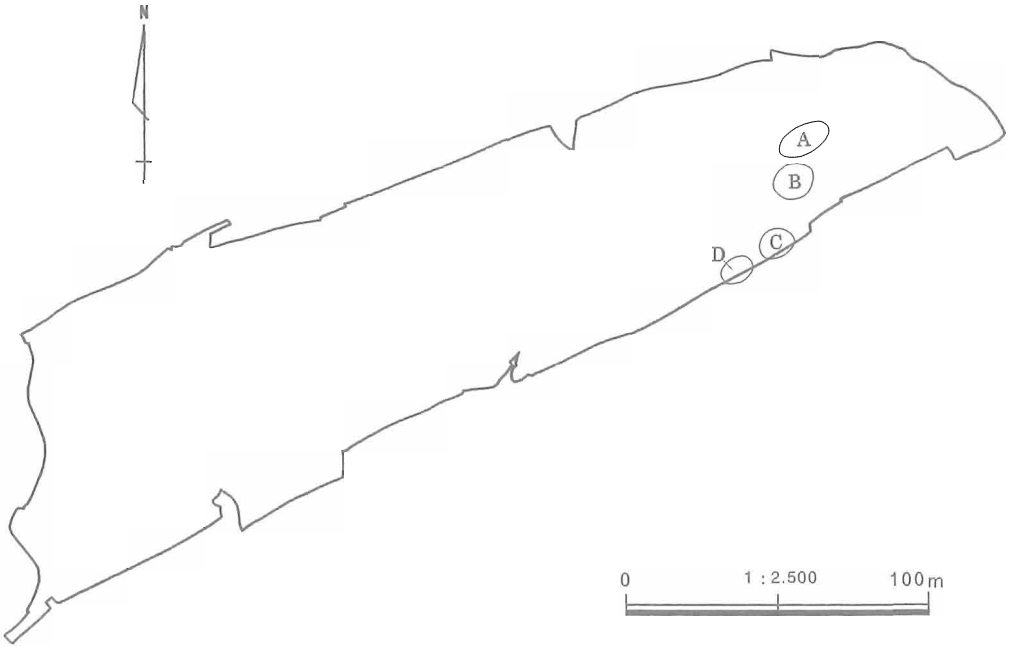
調査区東寄り、Ｅ７グリッドからＪ11グリッドにかけて土坑が密集して分布する地域がある。形状や出土遺物から土坑墓と考えられるが、同様な土坑の分布は他の地域には見当たらない。

こられは大きく分けて４つに群集して、密になる部分は相互が連鎖的に切り合っている。ここでは北東から順にエリアＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄという名称で呼ぶこととする。なお、掲載した図は紙面の都合でそれぞれのエリアの中をさらに細分化してある。

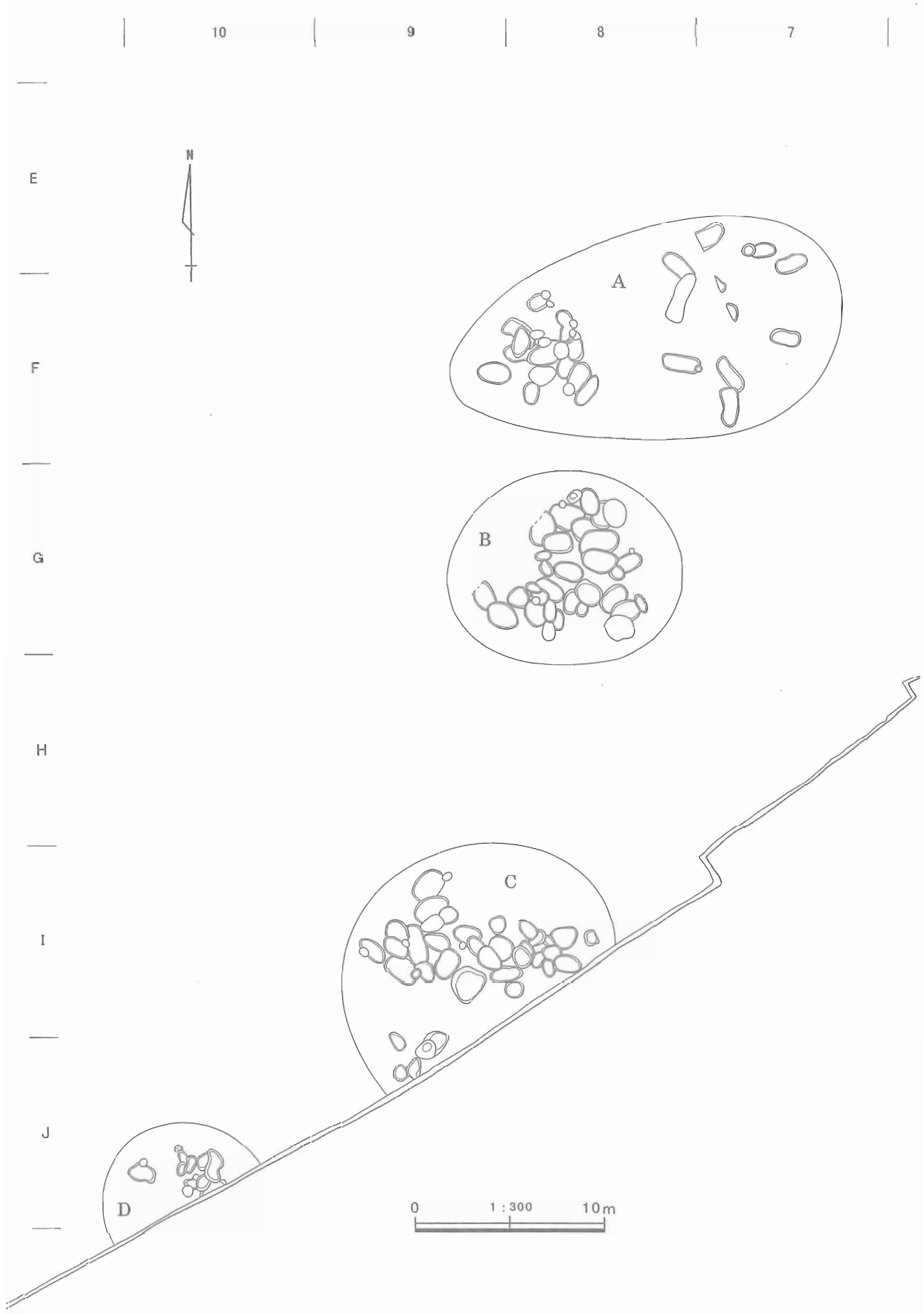
土坑墓は大きく分けて楕円形と円形状の２種があり、それぞれで近似した規模に掘られている。楕円形のものは長軸1.5m、短軸0.8m前後がよくみられ、ひざを伸ばすあるいはやや曲げて入ってみると頃合な大きさである。深さは10cm以下の場合が多数を占めている。これは検出面をより遺構検出の確実な下位に設定したことによるものである。礫が検出面より上位で検出されることからも、元来はさらに深いものであったと考えられる。一方、直径１m前後の円形状を呈するものもみられる。楕円形の土坑よりも深い傾向がある。楕円形の土坑と同様に礫を含むものがあるので同様に土坑墓と考えているが、葬法などに差があるものと考えられる。用いられる礫は自然礫の場合が多いが、台石や磨石などを転用している場合がある。転用されたこれらの道具は被熱しているものが目立つ。

遺物を伴うものはごく限られるが、中には、ＳＫ70625・20837のように身につけていたと考えられるヒスイ製の大珠を出土したものもある。この他に意図的に副葬されたものは見当たらない。また、埋甕を伴う単独の土坑はＳＫ23122のみに限られる。

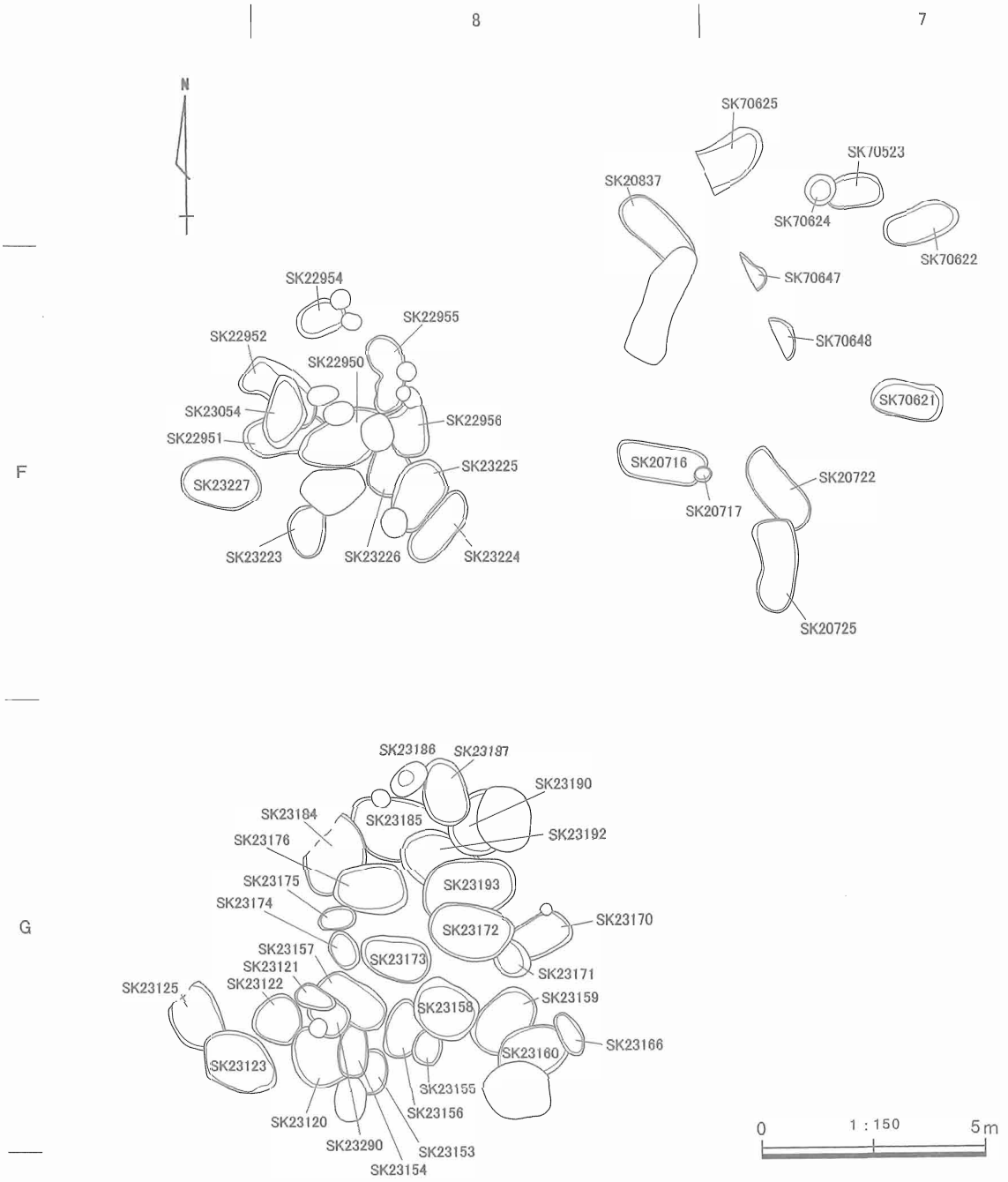
出土土器片と形状の差異から４つの土坑墓群にはある程度の時期差が存在し、比較的狭い時期差で土坑墓が形成されるエリアが徐々に南下していったと考えられる。住居跡と土坑墓の関係性は判然としないが、中期末頃は土坑墓をある程度囲むような位置に住居が配されており、後期に入ると必ずしも住居は土坑墓周辺に位置せず散在する場所に住居が配されるようになったと想像される。



第73図　土坑墓位置図１



第74図　土坑墓位置図 2



第75図　土坑墓位置図３

（１）エリアＡの土坑墓

Ｆ８グリッド西側からＦ９グリッド東側にかけて12基の土坑が密集する個所と、3.5mの間隔を置いた東側に12基の土坑が散在する個所の２か所に集中域をもつ。今回の調査では他に土坑が散在する個所が見当たらなかったので、この部分までを含めてエリアＡとした。

土坑の形状は長方形に近い長楕円形を呈するものが主体で、短軸に幅を持たせた楕円形を呈するものが若干含まれる。前者はエリアの3/4を占めヒスイ製大珠・玉を包括し、後者はエリアの西端1/4程度を占めるのみである。土坑墓の長軸は1.6mを超え、伸展葬が十分可能な長さのものを含む。長軸の長さと短軸の長さの比率を比較すると、長楕円形を呈するものは大体10：４程度、楕円形を呈するものは大

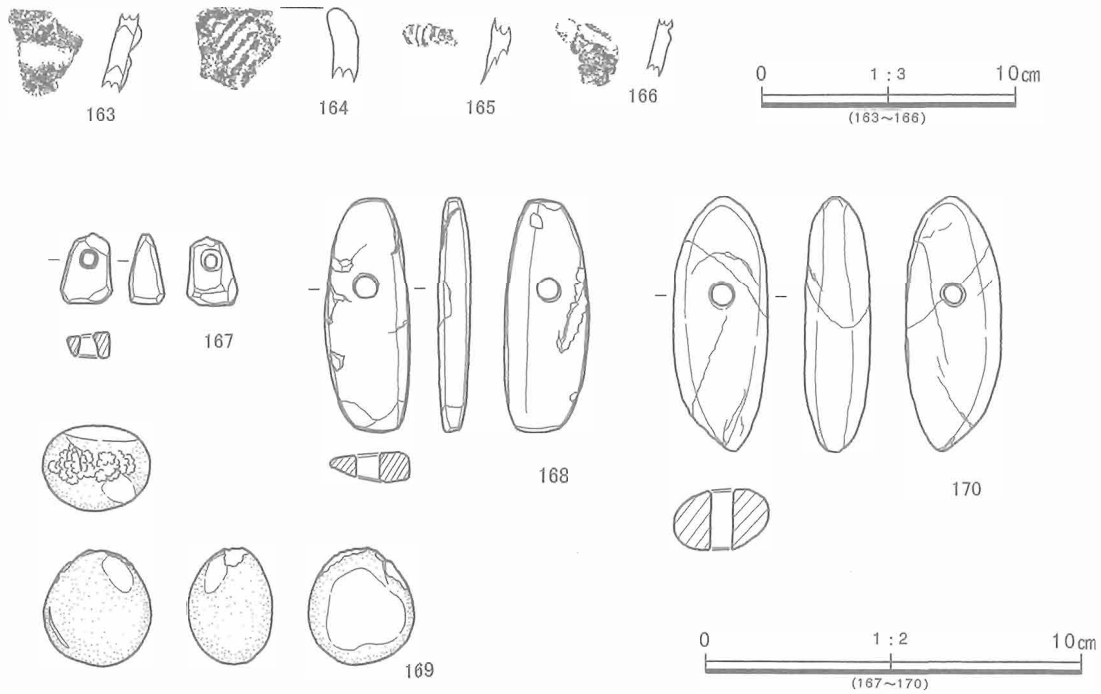
第76図　土坑墓エリアＡ（１）平面・断面図

体10：６程度で、前者の方が長軸に対して短軸が幅狭な規格となっている。

出土した土器は加曽利Ｅ３～Ｅ４式土器が主で、曽利Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ式土器、北裏Ｃ式土器、咲畑式土器を若干含む。したがってこれらは中期末の土坑墓群と考えられる。

土坑墓エリアＡ（１）

【遺構】ＳＫ70625はＡ区の最西端で検出された土坑墓で、西端はトレンチによって切られている。短軸１ｍ、深さ21㎝で、長軸は1.5m以上になるものと考えられる。土坑の北東端には直径45㎝程度の円形



第77図　土坑墓エリアＡ（１）出土遺物

の小穴が切り合っている。土坑の掘削以前の遺構である可能性が高い。土坑からは珠が出土している。いずれもヒスイ製で底面からやや浮いた位置にあり、薄型の大珠１、小玉１がおよそ16cm隔たった位置から出土している。墓の中に埋葬された人が身につけていたものであろう。また、これらの南側からは赤色の塊が出土している。科学分析の結果、赤鉄鉱であることが明らかになった。

ＳＫ20837は、ＳＫ70625におよそ１ｍの間隔を置いて直交する位置にある。長軸は後世の土坑によって一部切られるため確かではないが、およそ1.95m、短軸は0.84m、深さ12cmを測る。この土坑からも鰹節形を呈するヒスイ製の大珠が出土している。土坑のほぼ中央付近にあり、遺構の検出段階で出土しているので、少なくとも底面からは12cm浮いた位置にあった。

【遺物：土器】ＳＫ70625からは文様などがわかる土器４点（第77図163～166）が出土している。（第77図163）は口縁部に横隆帯を付けた曽利Ⅲ式か曽利Ⅳ式土器と思われる。（第77図164）は口縁部から条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。（第77図165）は爪形を連続刺突した北裏Ｃ式土器である。（第77図166）は沈線による連弧文を付けた咲畑式土器である。

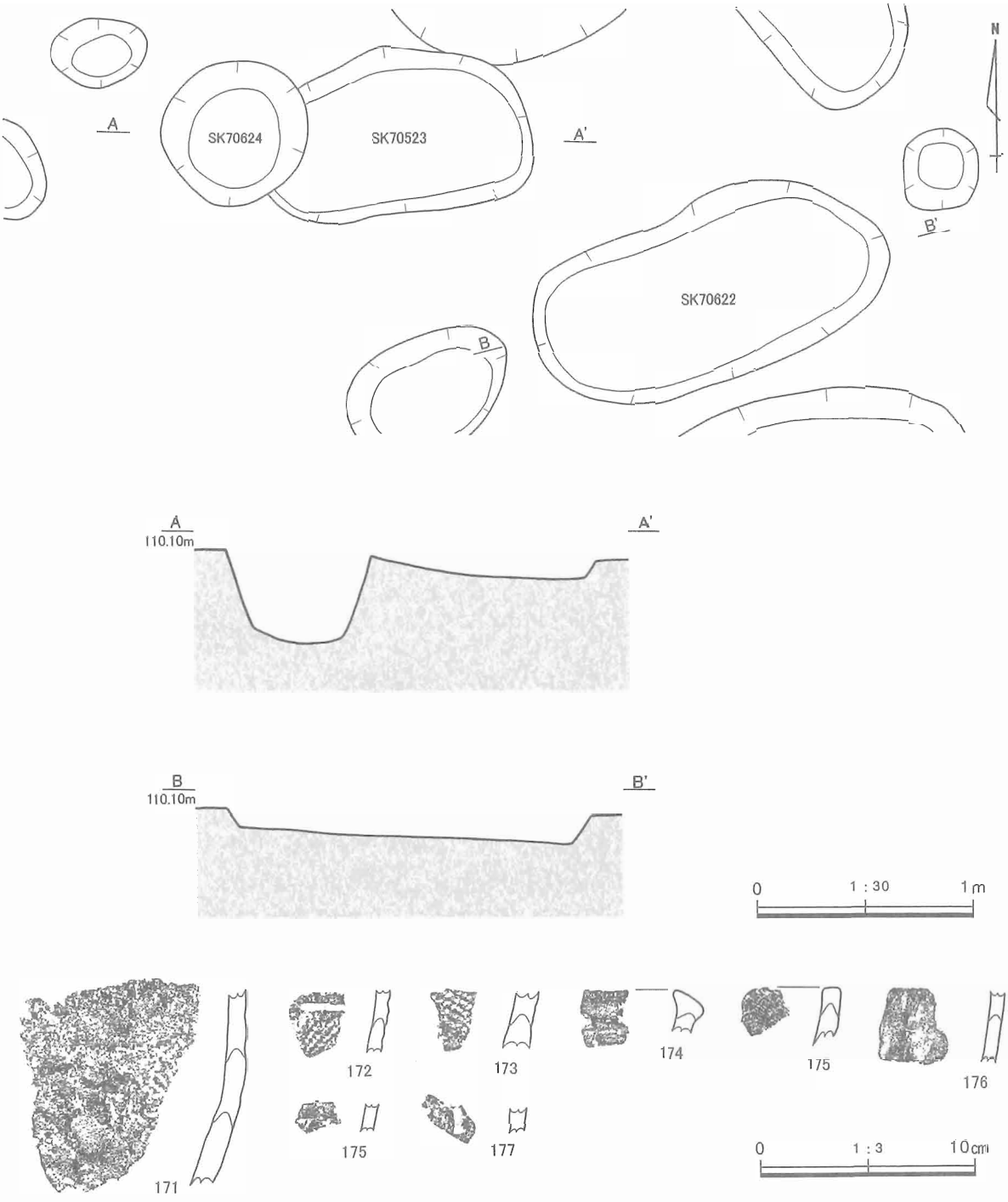
【遺物：石器】（第77図167～169）はＳＫ70625から出土した。（第77図167）は台形状のヒスイ製の小玉で、表裏両面から穿孔して孔を貫通させてある。（第77図168）もヒスイ製で、長さ6.1cm・幅2.2cmの薄型の大珠である。（第77図169）は中粒砂岩製で小形の磨敲石である。混入した可能性がある。

ＳＫ20837からは、鰹節形のヒスイ製大珠（第77図170）が出土した。長さ6.7cm・幅2.5cmで厚みもあり重量も51.4ｇと、本遺跡から出土したヒスイ製品の中で最大のものである。

土坑墓エリアＡ（２）

【遺構】ここは、エリアＡの内でも最も東側に突出した部分である。楕円形の二つの土坑とこれに切り合う円形の土坑を土坑墓と考えた。

ＳＫ70622は長軸1.71m、短軸0.79m、深さ18cmの長楕円形を呈する土坑である。ＳＫ70523は長軸およそ1.26m、短軸0.75m、深さ９cmの同じく楕円形を呈する土坑である。これら二つの土坑は規模的に

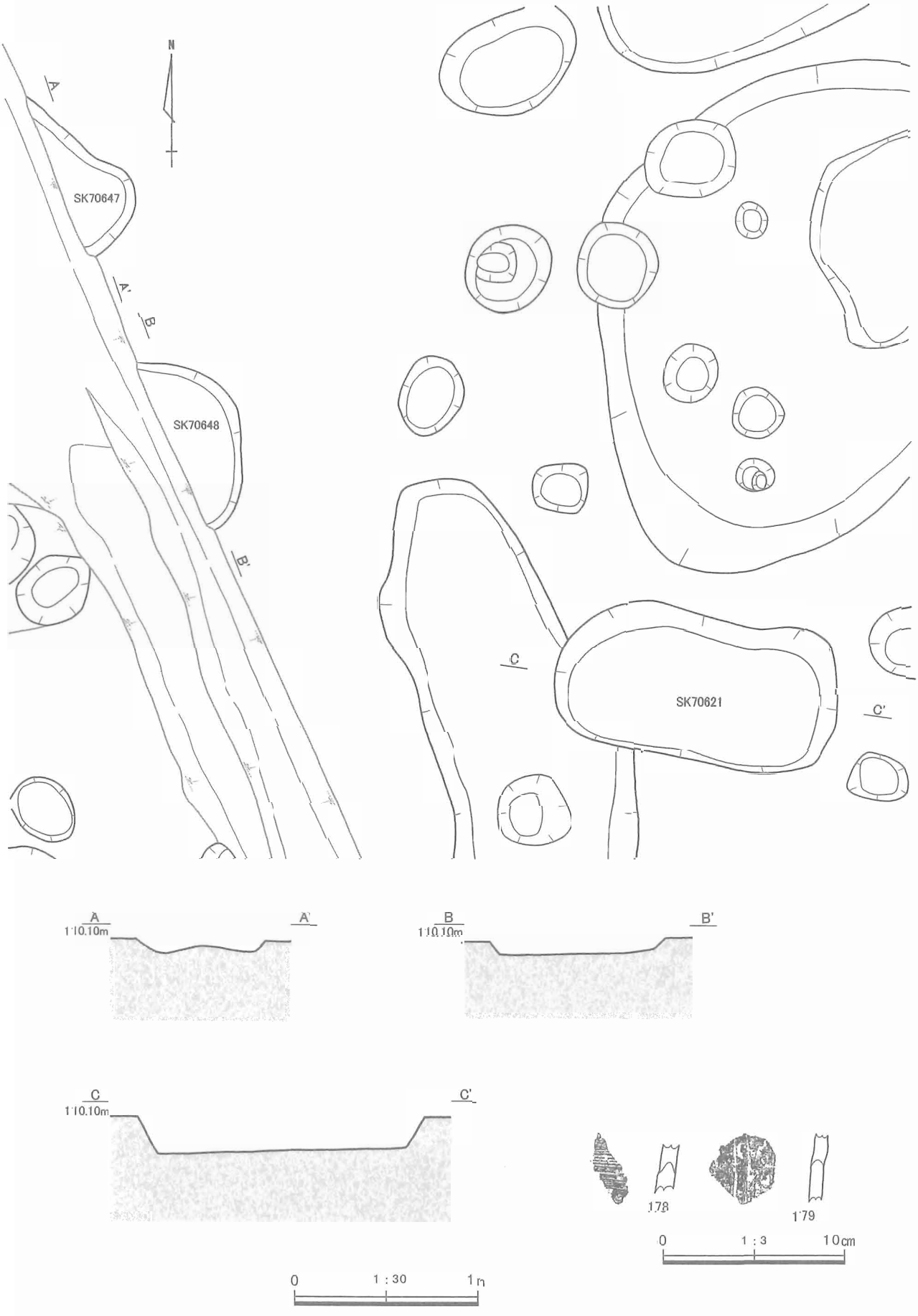


第78図　土坑墓エリアＡ（２）平面・断面図、出土遺物

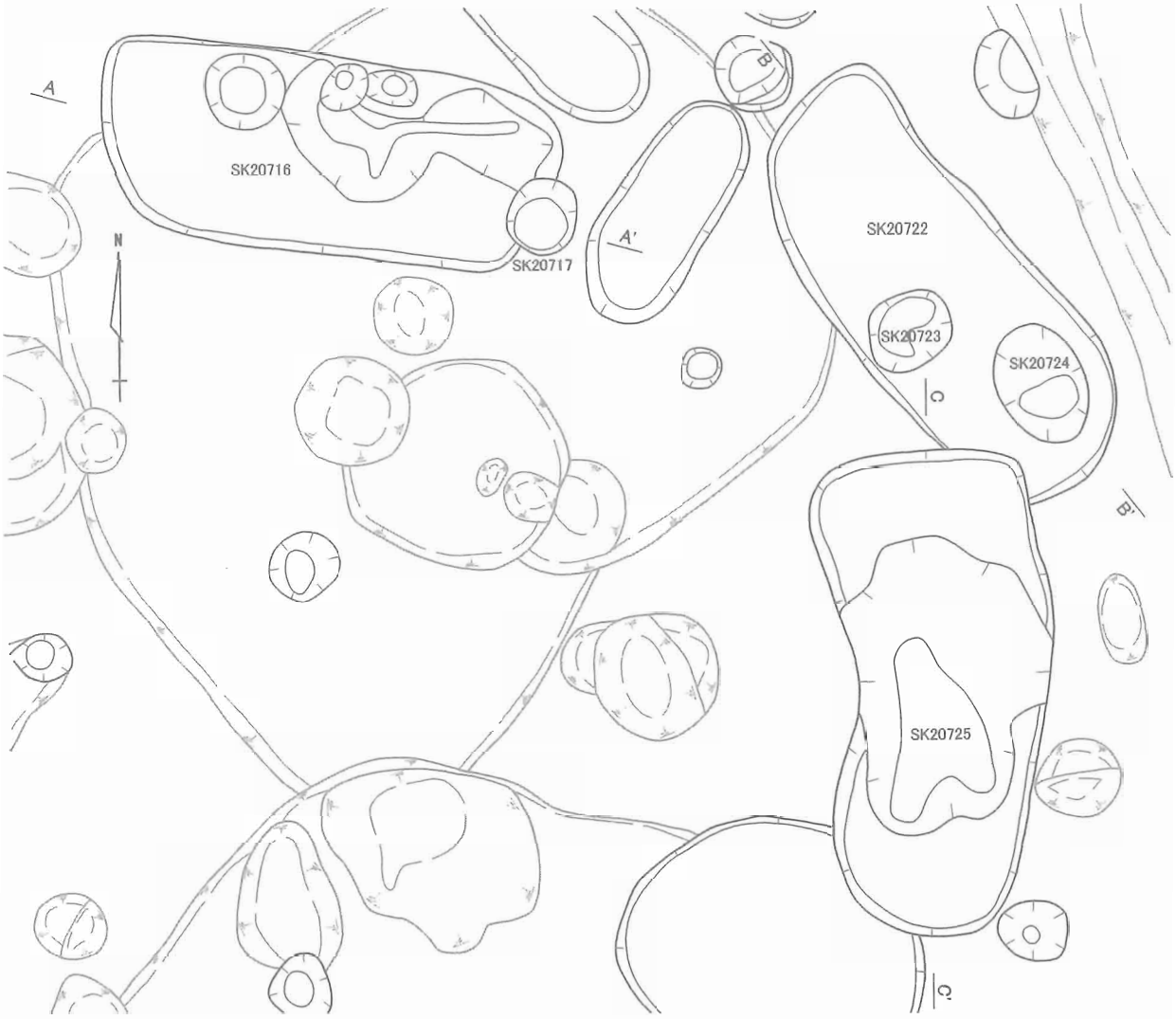
も似通っており、両者はそれぞれを意識するかのようにおよそ40cmの間隔を保ってややずれたかたちで平行している。

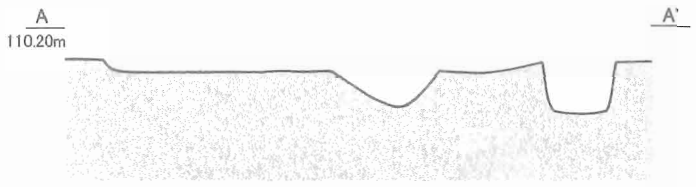
ＳＫ70624はＳＫ70523の西端を切る位置に掘削された、直径0.66～69m、深さ43.5cmを測る円形の土坑であり、今回検出された中でも最も深いものとなる。

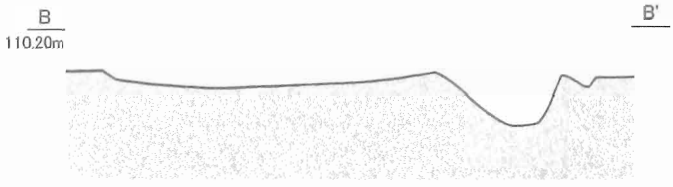
【遺物：土器】ＳＫ70624からは文様などがわかる土器７点（第78図171～177）が出土している。（第78図171）は風化している無文の胴部破片である。（第78図172）は沈線で区画した中にＲＬの縄文を付けており加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。（第78図174）は口縁を三角に作っており、加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。（第78図176）は無文土器である。（第78図177）は沈線の付い

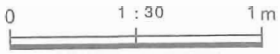


第79図　土坑墓エリアＡ（３）平面・断面図

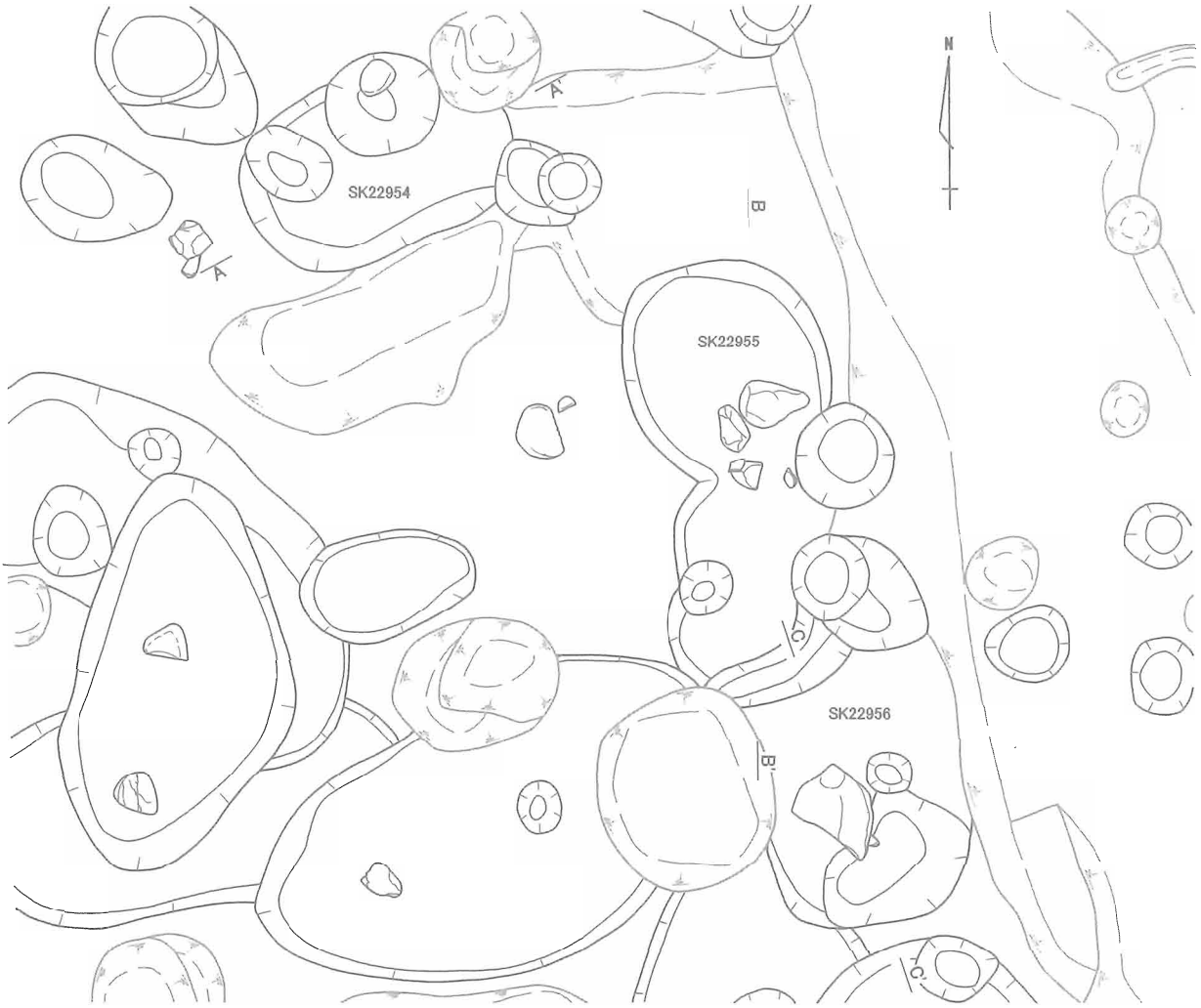


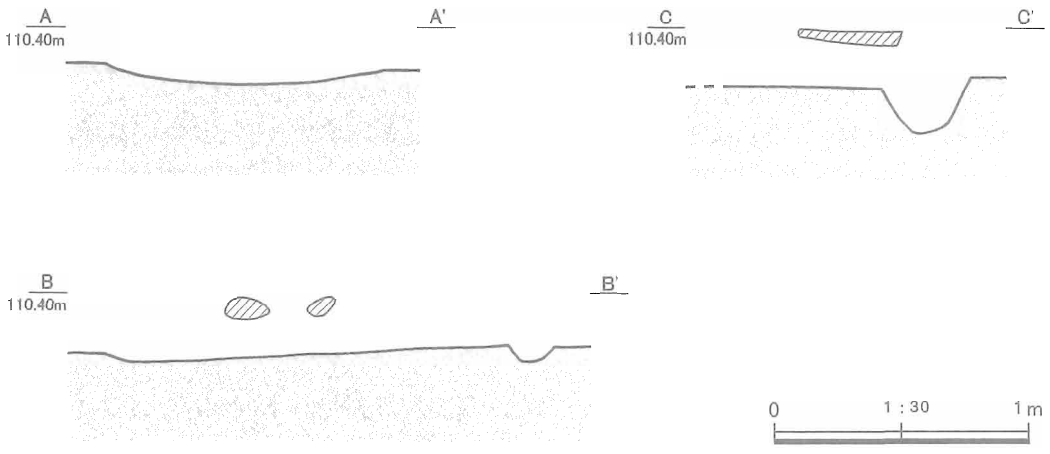


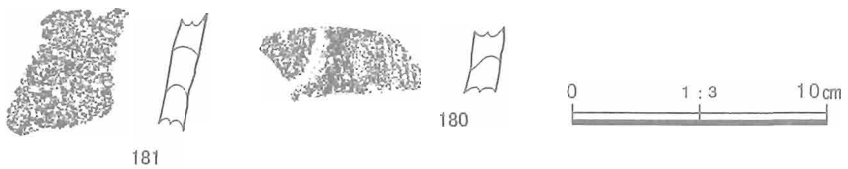




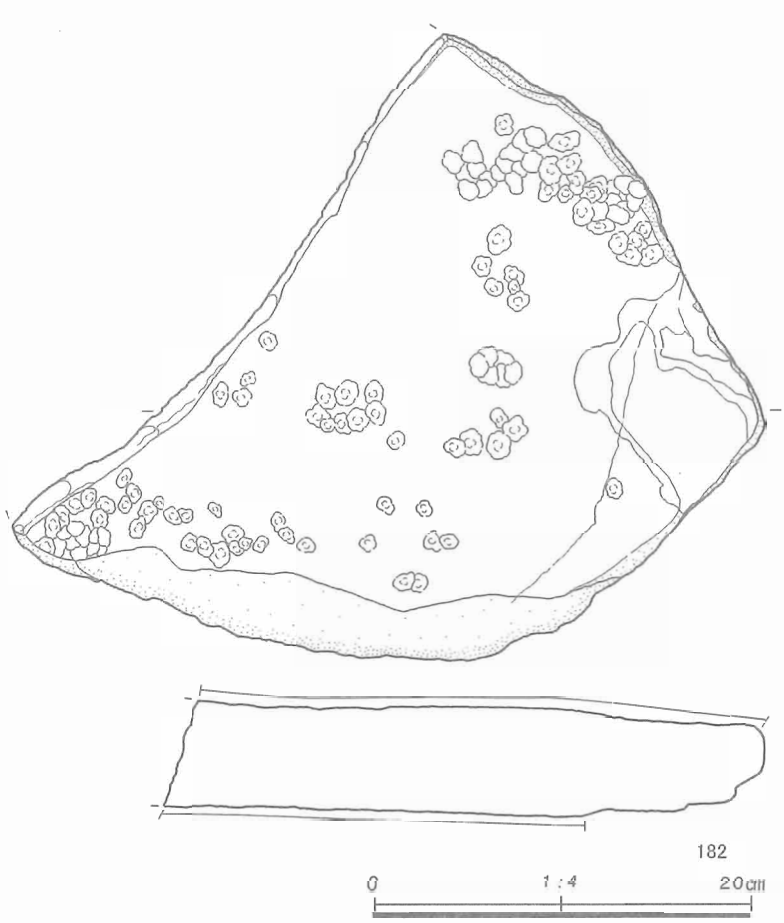
第80図　土坑墓エリアＡ（４）平面・断面図







第81図　土坑墓エリアＡ（５）平面・断面図



第82図　土坑墓エリアＡ（５）出土遺物

た加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。

土坑墓エリアＡ（３）

【遺構】ＳＫ70647・70648は西側を撹乱によって切られている。撹乱の対岸に土坑の一端が確認できないことから、これらは円形あるいは円形に近い不定形になるものと思われる。ＳＫ70621は長軸1.59m、短軸0.79m、深さ19cmの長楕円形を呈する土坑である。

【遺物：土器】ＳＫ70621からは文様などがわかる土器２点（第79図178・179）が出土している。（第79図178）は沈線を横位に付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第79図179）は沈線を縦位に付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

土坑墓エリアＡ（４）

【遺構】この部分には長楕円形を呈する同規模な土坑が掘られている。ＳＫ20722は長軸1.95m、短軸0.81m、深さ６cmの長楕円形を呈する土坑である。中央付近と南東側に二つの小土坑ＳＫ20723・20724が切り合うが、いずれもＳＫ20722より新しい遺構である。この南端に切り合うＳＫ20725はＳＫ20722より新しい土坑で長軸2.01m、短軸0.81m、深さ６cmを測る北側隅がやや角張った長楕円形を呈する。内部には深さ34.5mの不定形な土坑がある。２段に掘られた可能性がある。

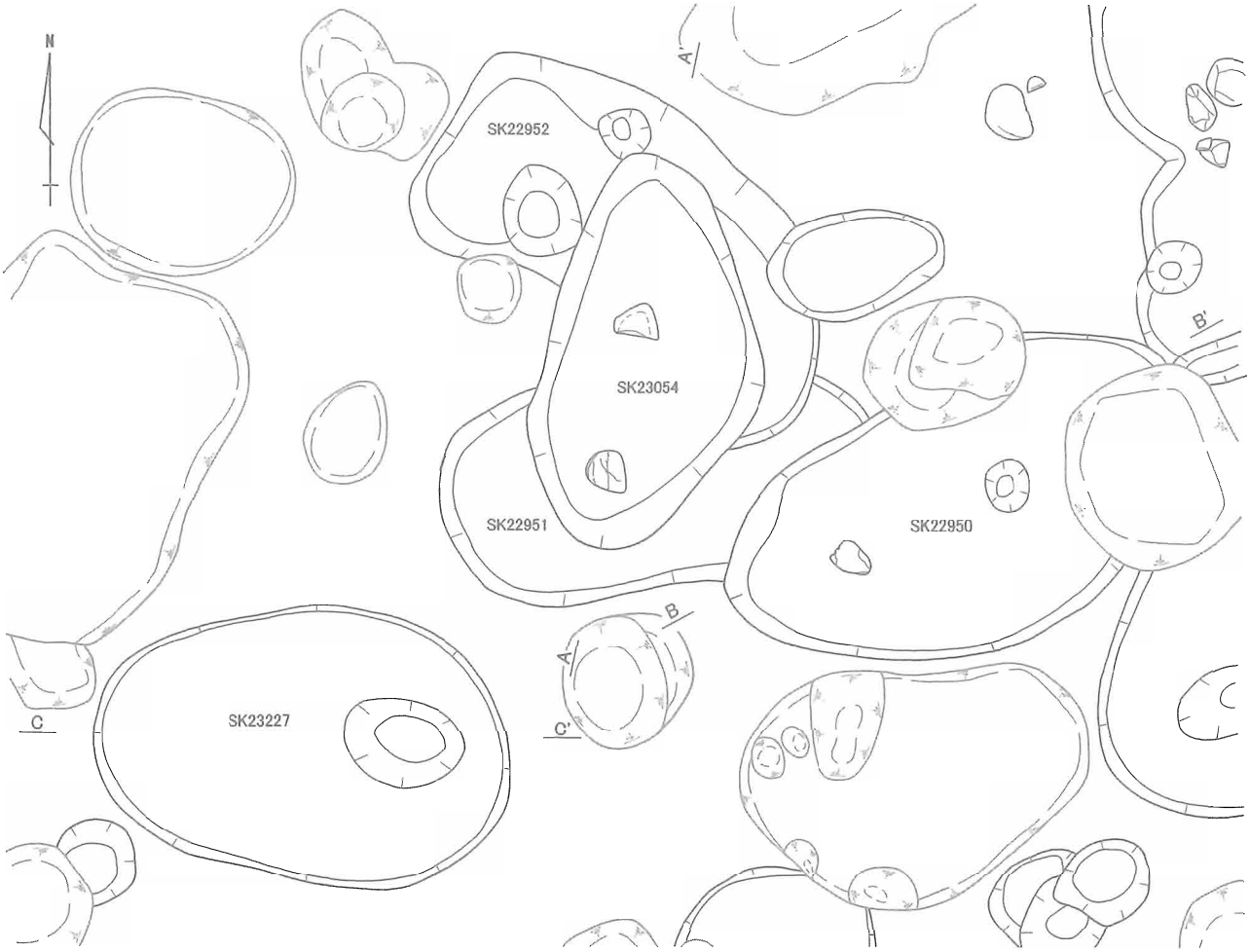
ＳＫ20716は長軸1.89m、短軸0.82m、深さ６cmを測る長楕円形の土坑である。東側で切り会う小土坑ＳＫ20717はこれより新しく、内部で検出された不定形の土坑や小土坑はＳＫ20716を検出した際には明らかでなかったので、さらに古い時期となる可能性がある

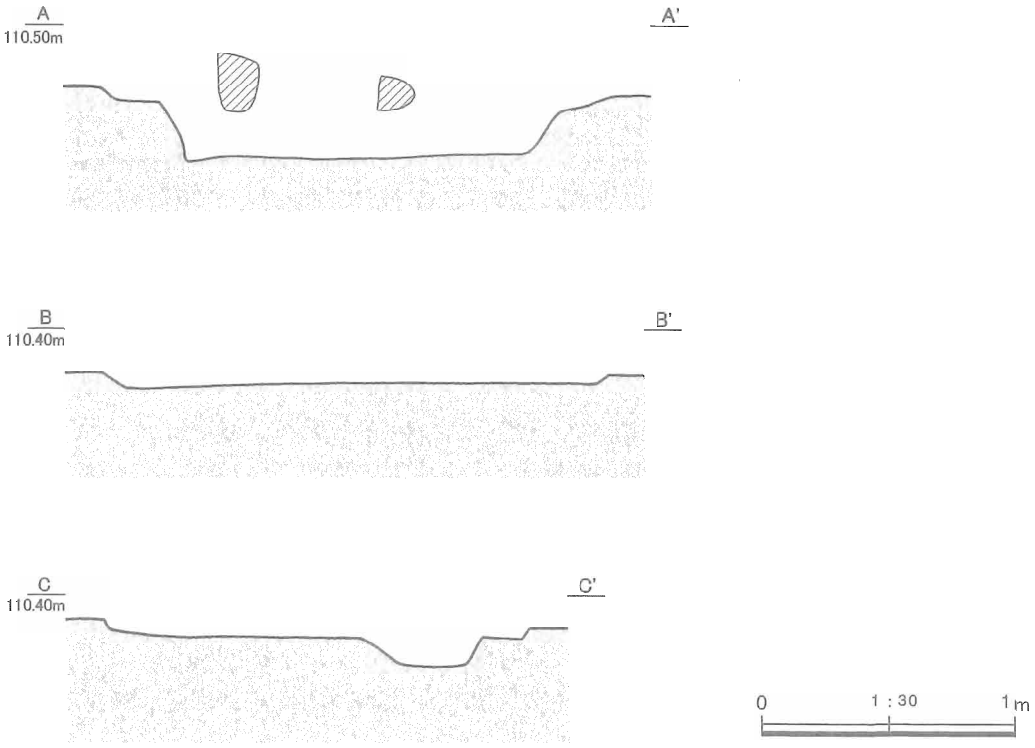
【遺物：土器】遺物は出土していない。

土坑墓エリアＡ（５）

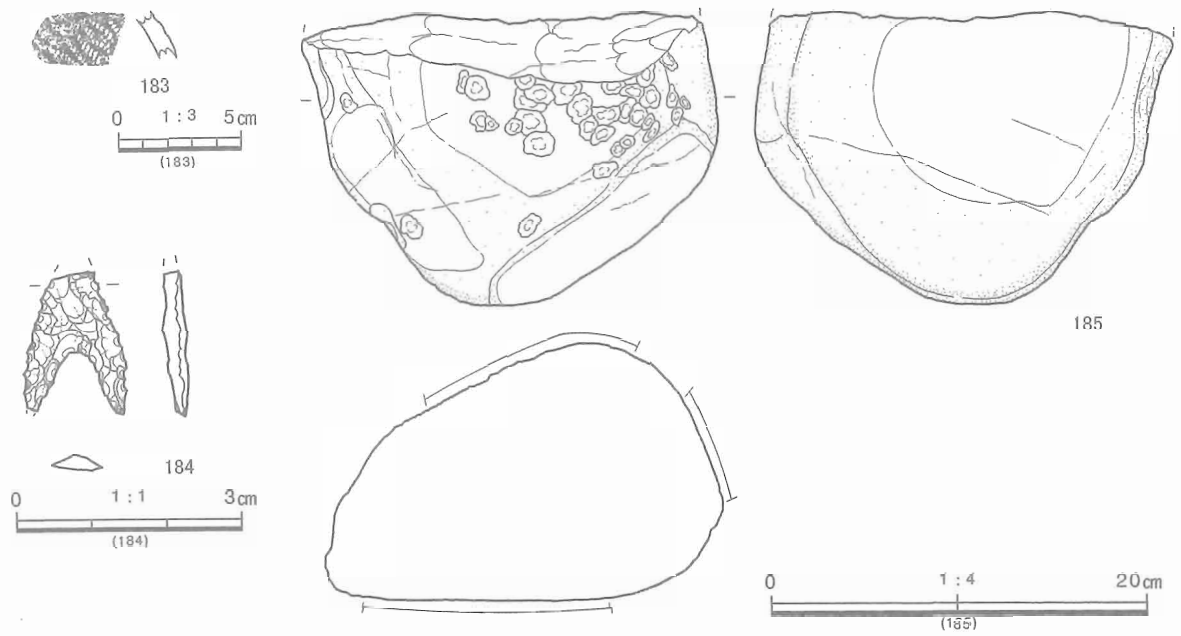
【遺構】Ｆ８～９グリッドに密集する土坑群の内、北側にあたる部分である。ＳＫ22954は長軸1.11m、短軸0.63m、深さ７cmの楕円形を呈する土坑である。東側の上端の一部は撹乱によって不確かであり、北側で二つの小土坑と切り合う。この小土坑は遺構を検出した際には明らかでなかったので、さらに古い時期となる可能性がある。これと南東側に直交する位置にあるＳＫ22955は一見不定形にも見えるが、南側で別の土坑と切り会う直径0.82～１m程度の円形の土坑であろう。南側には底面からやや浮いた位置に拳大～人頭大の自然礫が入れられている。

ＳＫ22956は北側をＳＫ22955南側の土坑に、東側を撹乱に切られている。元来は長軸1.5m程度の長楕円形の土坑であったろう。内部の南端に長軸0.67m、深さ20cm程度の不定形な小土坑が掘られている。土坑底面との差が著しいので、さらに古い時期の切り合う遺構である可能性が高い。土坑内の南よりに





第83図　土坑墓エリアＡ（６）平面・断面図



第84図　土坑墓エリアＡ（６）出土遺物

は台石を転用した扁平な礫が水平に置かれている。

【遺物：土器】ＳＫ22955からは文様などがわかる土器２点（第81図180・181）が出土している。（第81図180）隆帯を曲線に貼り付け区画し、縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第81図181）は風化しており時期不明である。

【遺物：石器】ＳＫ22956の覆土からは厚さ６㎝・30㎝四方以上の台石（第82図182）が出土し、板状の細粒砂岩製で平坦面に磨面と敲打痕を有する。使用した台石を土坑墓の墓石として転用した可能性もある。

土坑墓エリアＡ（６）

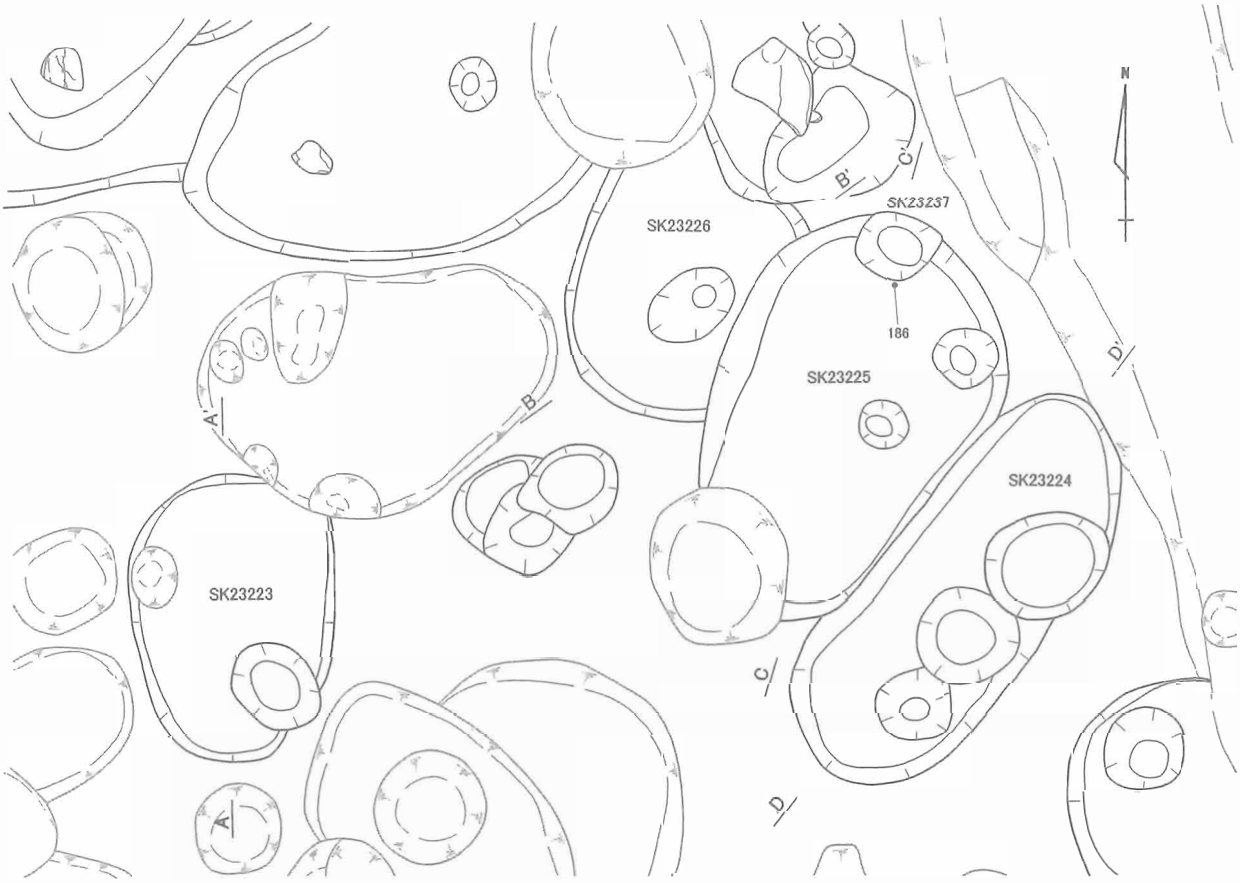
【遺構】Ｆ８～９グリッドに密集する土坑群の内、中ほどにあたる部分であり、やや大型の土坑が目立つ。最も新しい可能性があるのはＳＫ23054で、長軸1.62m、短軸0.9m、深さ28㎝を測る中央付近でやや東に張り出す長楕円形を呈する。ＳＫ22951・22952に切り合っている。中央部分と南よりの底面よりやや浮いた位置に人頭大の礫を１個ずつ入れている。これらは台石の転用品である。ＳＫ22950も22951と切り合うので、あるいは23054と近似した時期である可能性がある。長軸2.04m程度、短軸1.05m、深さ６㎝の楕円形を呈する。ここにも西よりに人頭大の礫が１個入れられている。

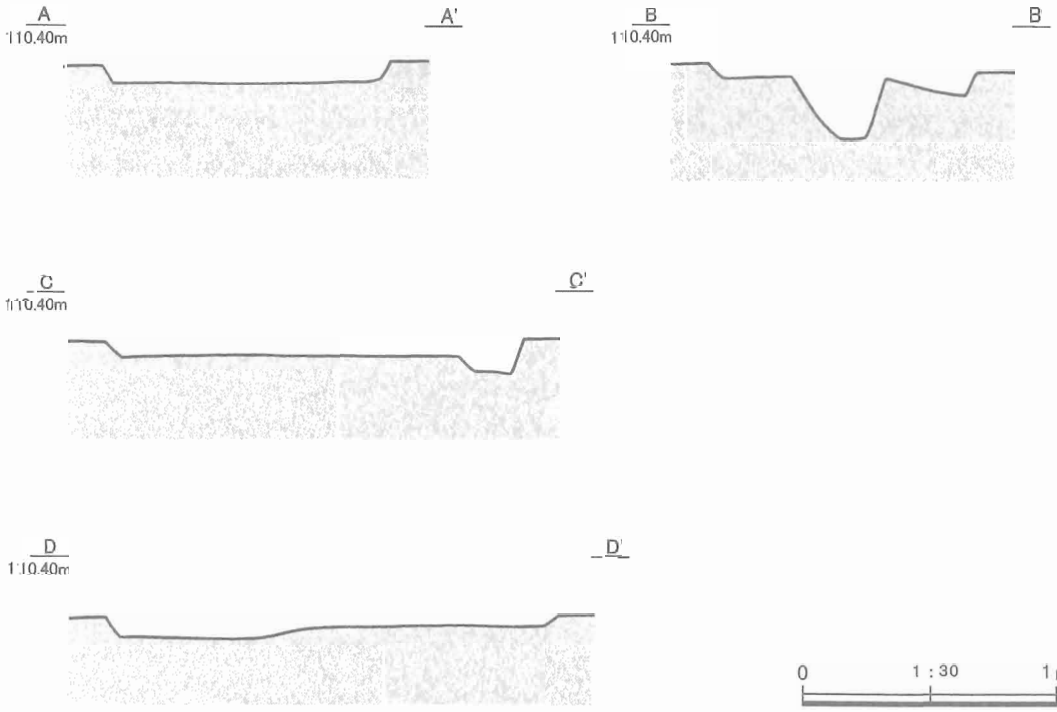
ＳＫ22952は長軸1.86m、短軸0.87m、深さ６㎝を測る西側でやや角張る長楕円形の土坑で、ＳＫ22951を切り、23054に切られている。内面には小穴が掘られているが、遺構検出時には明らかでなかったのでさらに古い時期の遺構である可能性がある。ＳＫ22951は前３者に切られる関係にあるので、この中では最も古い。長軸1.8m程度、短軸0.93m、深さ６㎝を測る長楕円形を呈する。

ＳＫ23227は切り合う４つの土坑の南西側にやや離れており、エリアＡで最も西側にある。長軸1.71m、短軸1.11m、深さ４㎝の東側でやや幅を持たせる楕円形を呈する。内面には小穴が掘られているが、遺構検出時には明らかでなかったのでさらに古い時期の遺構である可能性がある。

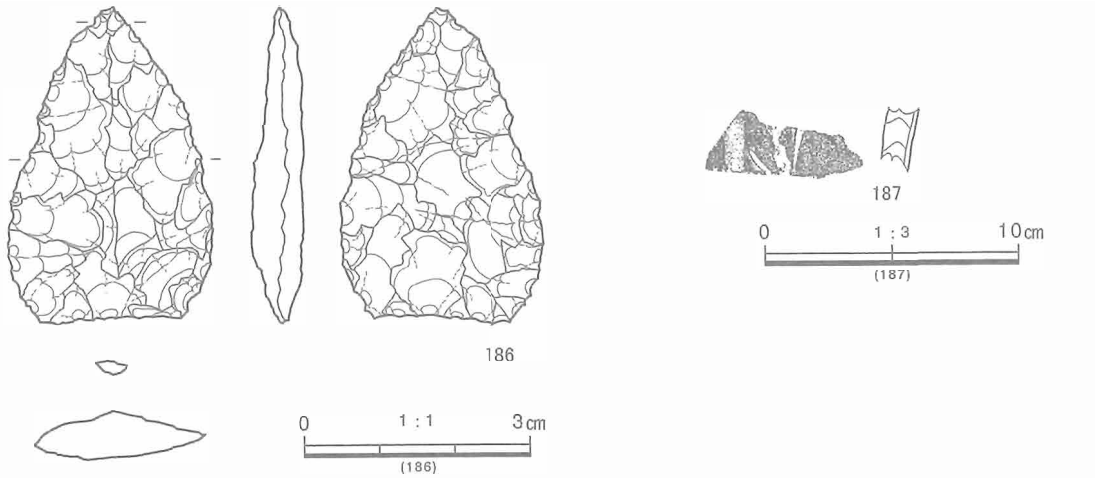
【遺物:土器】ＳＫ22952からは文様などがわかる土器１点（第84図183）が出土している。（第84図183）は条の太さ約0.3㎝のＲＬ縄文を付けた土器である。

【遺物:石器】（第84図184）はＳＫ22952から出土した長脚の石鏃で、凝灰質頁岩製で縁辺に細かい調整





第85図　土坑墓エリアＡ（７）平面・断面図



第86図　土坑墓エリアA（7）出土遺物

を加えているが、先端部は欠損している。

また、SK23054の上部からは中粒砂岩製の台石（第84図185）が出土した。厚みのある礫の表裏と共に側面も磨り・敲きの作業面として使用していたようである。台石として使用後、土坑墓の墓石として転用した可能性もある。

土坑墓エリアA（7）

【遺構】F8～9グリッドに密集する土坑群の内、南側にあたる部分であり、やや大型の土坑が目立つ。

SK23224は南東側の上端で切り合う3つの土坑の最も南側にあり、より新しい。長軸1.8m、短軸0.72mの長楕円形を呈し、深さは北東側3/5程度が4㎝、南西側2/5程度が7㎝と一部を深く掘り窪めている。南縁に小穴が3個所連続して検出されている。最も東側のひとつは土坑検出段階から把握されていたもので、後に掘り込まれたものである。他の二つは遺構検出時には明らかでなかったのでさらに古い時期の遺構である可能性がある。これに南側上端を切られるSK23225は長軸1.74m、短軸0.96m、深さ7㎝を測る、北東側でやや幅を持たせる楕円形を呈する。東側に小穴が3個切り合っている。東側のふたつは土坑検出段階から把握されていたもので、後に掘り込まれたものである。中央よりのひとつは遺構検出時には明らかでなかったのでさらに古い時期の遺構である可能性がある。もっとも北側で切り会うSK23226はこの3者の中では最も古い。さらに東側は先に述べたSK22956に切られている。規模と形態は判然としないが、円形状になるのだろうか。深さは13㎝と他よりもやや深くなっている。内部中央付近で検出された小穴は遺構検出時には明らかでなかったのでさらに古い時期の遺構である可能性がある。

SK23223はエリアAの南西隅に位置する。他の土坑との切りあいは見られない。長軸1.14m、短軸0.84m、深さ9㎝を測る楕円形で、エリアAの中では比較的小規模である。南東側で切り合う小穴は土坑検出段階から把握されていたもので、後に掘り込まれたものである。

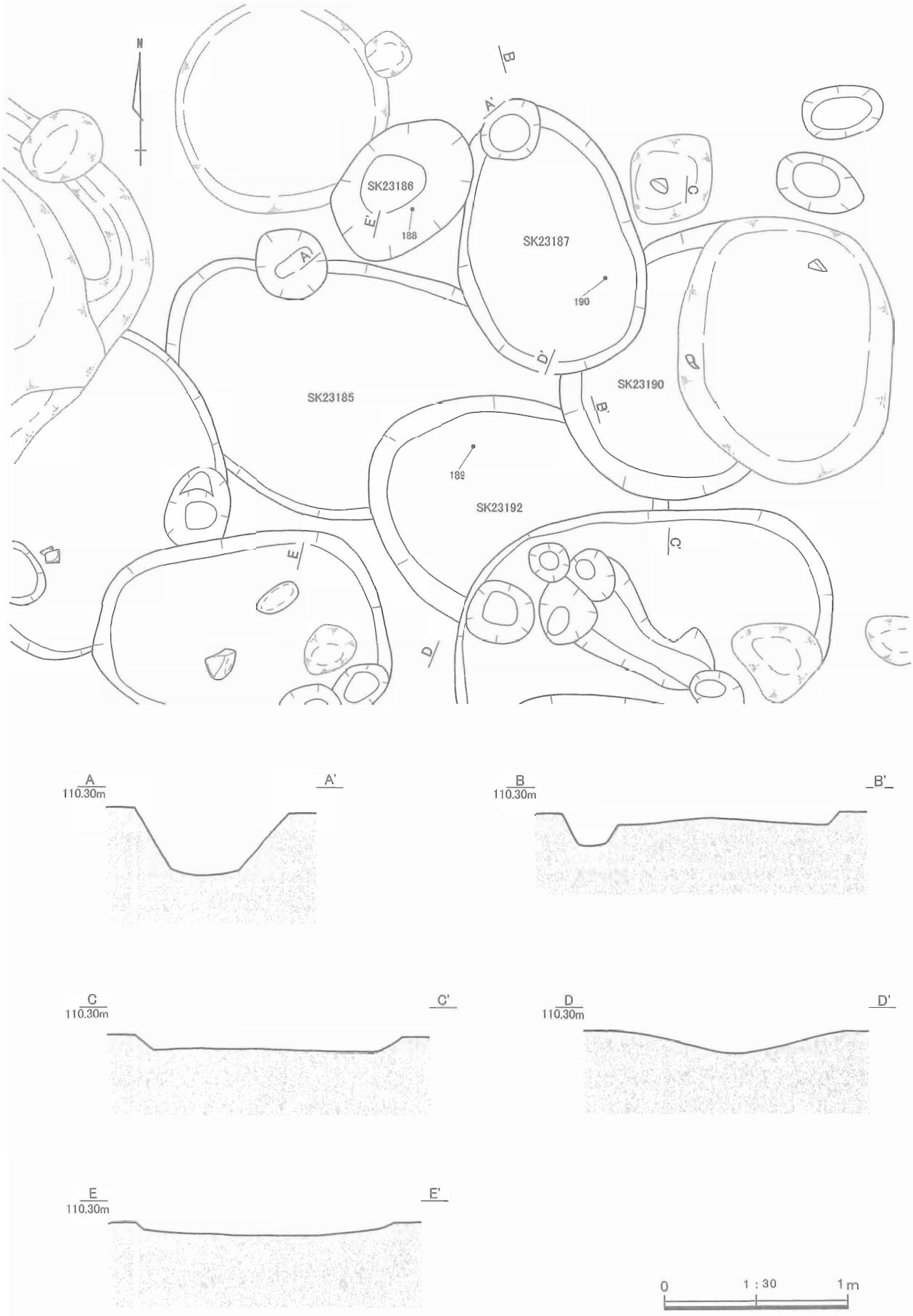
【遺物:土器】SK23238からは文様などがわかる土器1点（第86図187）が出土している。（第86図187）は縦に隆帯を貼り付け、区画内にハの字状の沈線を施した曽利V式土器である。

【遺物：石器】SK23225からは石鏃1点（第86図186）が出土した。珪質頁岩製平基無茎鏃の完形品で、長さ4.15㎝・幅2.7㎝を測り本遺跡出土石鏃の中で最も法量の大きいものである。

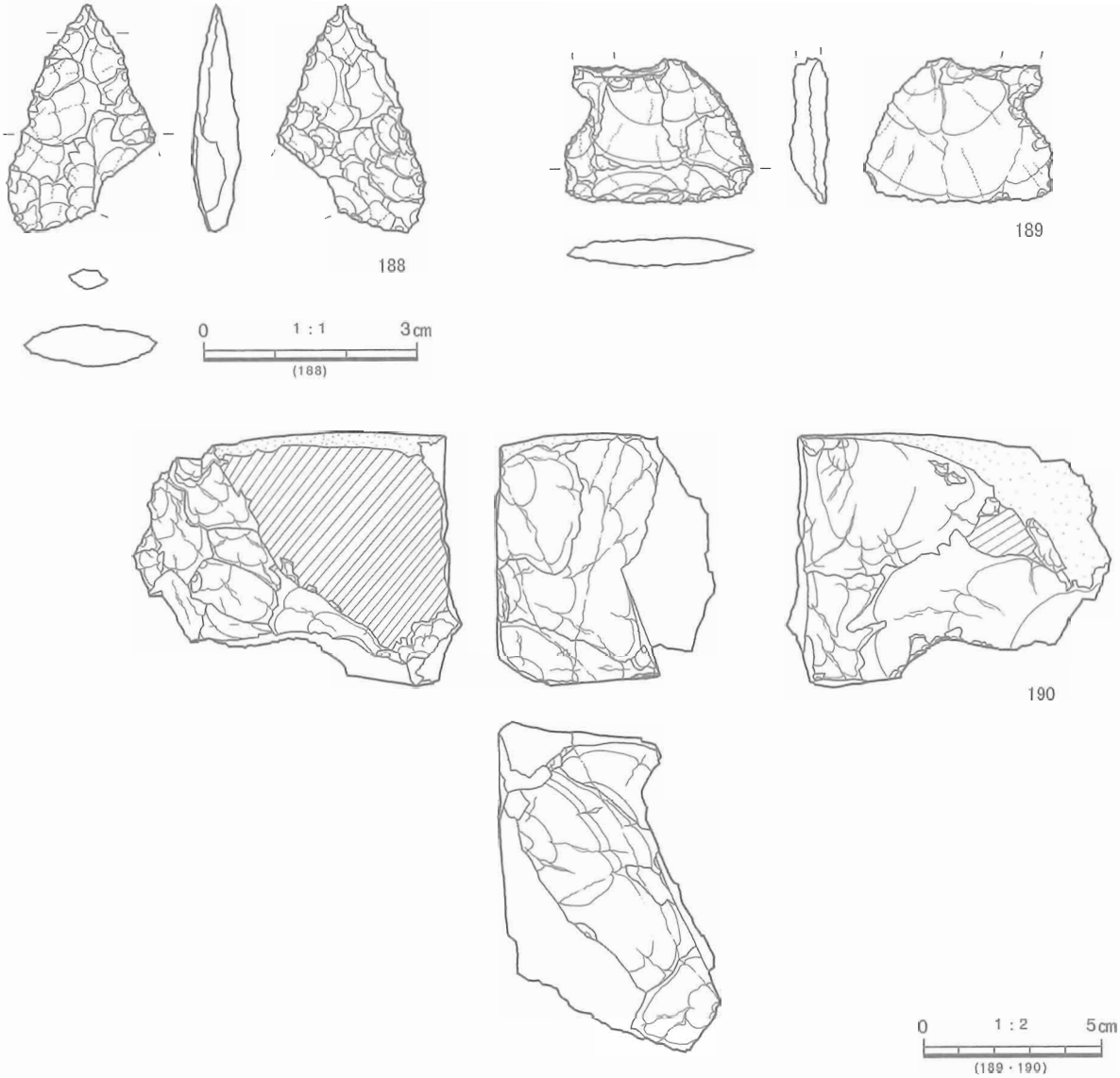
（2）エリアBの土坑墓

G8～9グリッドに長楕円形を中心とした土坑28基が密集する部分がある。ここをエリアBとした。

土坑の形状は、短軸に幅を持たせた楕円形を呈するものが主体である（長軸：短軸＝10：7程度）。長



第87図　土坑墓エリアＢ（１）平面・断面図



第88図　土坑墓エリアＢ（１）出土遺物

軸の長さにばらつきが見られ、1.4～1.8m程度の比較的大型のものと、１m以下の比較的小型のものが混在する。大型のものは伸展葬が可能な長さであろう。小型のものは、被葬者の体格などが大型のものとは異なるか、あるいは埋葬姿勢が屈葬位であるなどの相違が推測できる。

出土した土器は中期末を示す加曽利Ｅ３～Ｅ４式土器が主体で、これに中期前半～中期中葉の北屋敷式土器、勝坂式土器が数点と後期初頭の中津式土器１点が含まれる。これ以外に、不定形を呈するものが２基あり、一つは中期前半～中期中葉の土器を含み一つは後期初頭の土器を含んでいた。エリアＡより新しい時期の中期末頃の土坑墓群と考えたい。

土坑墓エリアＢ（１）

【遺構】Ｇ８～９グリッドに密集する土坑群の内、北側にあたる部分であり、やや大型の土坑が目立つ。ここでは、ＳＫ23170から23193までが連鎖的に切り合っている。

切り合いから最も古く位置付けられるのはＳＫ23185で、このエリアでは最も規模の大きな土坑である。東側でＳＫ23192などが重複するため長軸は明らかでないが、２mを超えるものであったろう。短軸は1.41m、深さ７cmの楕円形を呈する。北側で切り合う小穴は土坑検出段階から把握されていたもの

で、後に掘り込まれたものである。ＳＫ23185を切る土坑は２基あるが、南側の23192がより古い。東側と南側をＳＫ23190と23193に切られるために規模は正確でないが、長軸1.6m、短軸1.3m程度の楕円形を呈するものであろう。深さは12cmと他に比べやや深い。

ＳＫ23190は23192の北東端を切り、北西側の一部を23187に、東側を撹乱に切られる。規模は明らかでないが、長軸1.65m、短軸1.2m、深さ７cmの楕円形を呈するものと思われる。これに重複するＳＫ23187は長軸1.53m、短軸1.02m、深さ７cmの楕円形を呈する。西側の一部をＳＫ23186に切られている。北端で検出された小穴は遺構検出時には明らかでなかったので、さらに古い時期の遺構である可能性がある。

ＳＫ23186は長軸0.87m、短軸0.63m、深さ37cmを測る、楕円形を呈する土坑である。エリアＡのＳＫ70624に次ぐ深さであり、浅い土坑と比べて埋葬対象・方法に何らかの差があるのだろう。

【遺物：石器】ＳＫ23186の覆土からは（第88図188）が出土した。凝灰質頁岩製の凹基無茎鏃で縁辺からの比較的広い剥離によって調整され、一方のかえし部が欠損している。

ＳＫ23192からは凝灰岩製の横形石匙が出土した(第88図189)。表面からの調整が主であり、縁辺を細かく剥離して成形している。

ＳＫ23187からは細粒砂岩の石核（第88図190）が出土した。

土坑墓エリアＢ（２）

【遺構】Ｇ８～９グリッドに密集する土坑群の内、中ほど西側にあたる部分であり、ＳＫ23184・23176は先に述べたＳＫ23185と連鎖的に切り合っている。

ＳＫ23184はより西側に掘削された土坑で、北東側の一部がＳＫ23185を切っている。また、南東側でＳＫ23176に切られている。長軸1.8m程度、短軸1.38m。深さ９cmを測る楕円形の土坑である。南西側には拳大の礫が底面から21cm浮いた位置に検出されている。内面からは東側と西側に小穴を検出した。これらは遺構検出時には明らかでなかったので、さらに古い時期の遺構である可能性がある。この南側にあるＳＫ23176は長軸1.65m、短軸1.05m、深さ９cmの楕円形を呈する土坑である。底面は東側がやや深くなる。この中からは人頭大の自然礫と割り取られた角礫が１個ずつ検出されている。いずれも底面から22cm程度浮いた位置にある。南東隅には二つの小穴が並んで検出されている。これらは遺構検出時には明らかでなかったので、さらに古い時期の遺構である可能性がある。この南西側には、上端の一部を切ってＳＫ23175がある。長軸0.87m、短軸0.51m、深さ７cmと小型で、小児の墓である可能性を感じさせる。ここからも同様に拳大の礫が１個検出された。底面から21cm浮いた位置にあり、先の例と近似している。

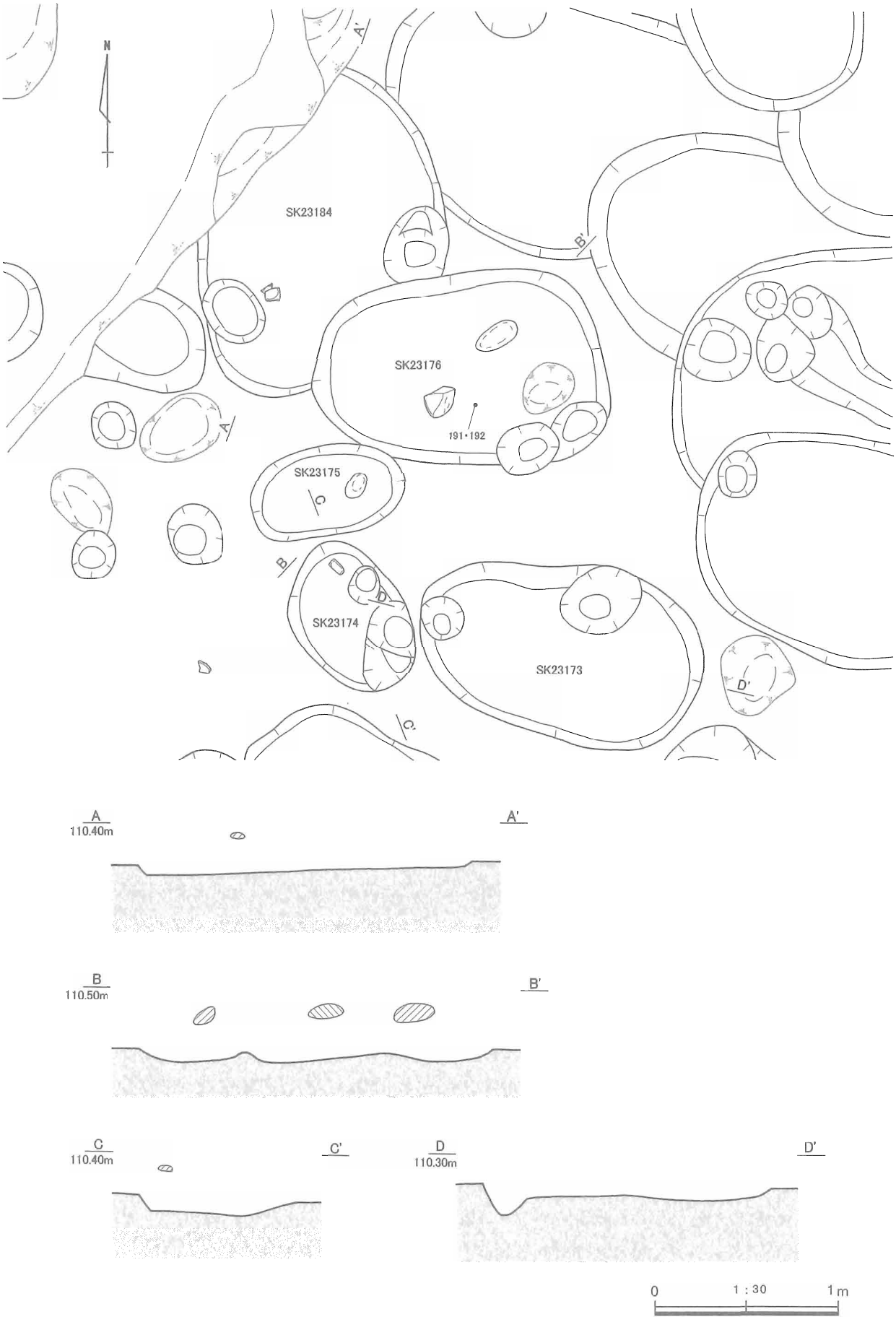
ＳＫ23174は23175の南側にある切り合いのない土坑である。長軸0.87m、短軸0.6m、深さ12cmを測る楕円形の土坑である。ＳＫ23176と同様に小型であり、他との差を感じさせる。北よりの底面から24cm浮いた位置で砥石と思われる角柱状の礫が出土している。

【遺物：土器】ＳＫ23176からは文様などがわかる土器２点（第90図191・192）が出土している。（第90図191）は沈線で区画した中にＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第90図192）は微隆起で区画した中にＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。

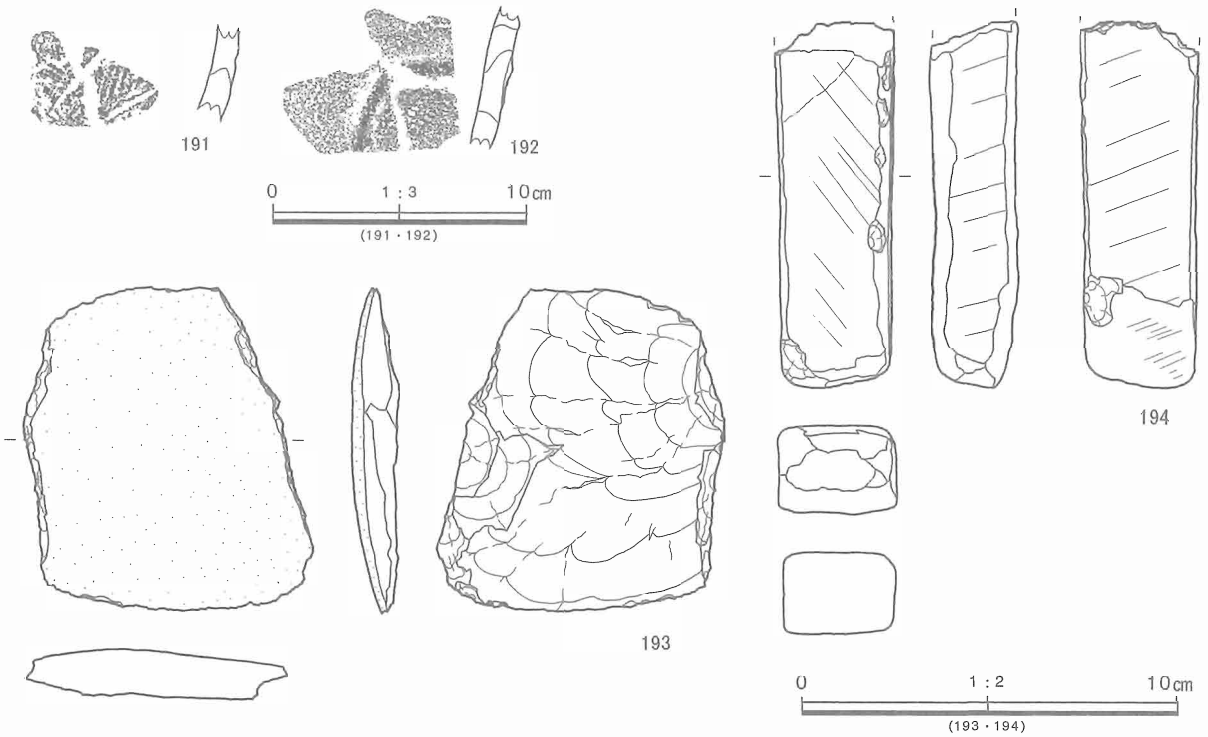
【遺物：石器】ＳＫ23184からは砂質粘板岩製の打製石斧（第90図193）が出土した。撥形を呈し、側縁をわずかに調整して表全面に原礫面を残すものである。ＳＫ23174からは角柱状の礫が出土している。各面がつややかなので砥石である可能性がある（第90図194)。粘板岩製で粒子は細かく、節理の部分の摩滅がより少ないことから各面が波打っているように見える。

土坑墓エリアＢ（３）

【遺構】Ｇ８～９グリッドに密集する土坑群の内、中ほど西側にあたる部分であり、ＳＫ23185から連鎖的に切り合う南東端にあたる。



第89図　土坑墓エリアB（2）平面・断面図



第90図　土坑墓エリアＢ（２）出土遺物

ＳＫ23193は北側で23192を切り、南側で23172に切られている。長軸2.13m、短軸1.17m、深さ18cmと大型で楕円形を呈する。内面からは中央部に不定形の落ち込みとその両端に小穴が５基検出されている。これらは遺構検出時には明らかでなかったので、さらに古い時期の遺構である可能性がある。

ＳＫ23170は最も東側にあたるひとつで、西側をＳＫ23171・23172に切られるために長軸は不確かであるが、1.4m程度になると思われる。短軸は0.9m、深さは９cmを測る楕円形を呈する。ＳＫ23171は23170を切り、23172に切られる、それぞれの接点となる位置に掘られている。長軸は23172のために不確かであるが、0.87m程度と思われる。短軸は0.75m、深さ13cmで楕円形を呈する。南東側に小穴が２基重複する。これらは遺構検出時には明らかでなかったので、さらに古い時期の遺構である可能性がある。

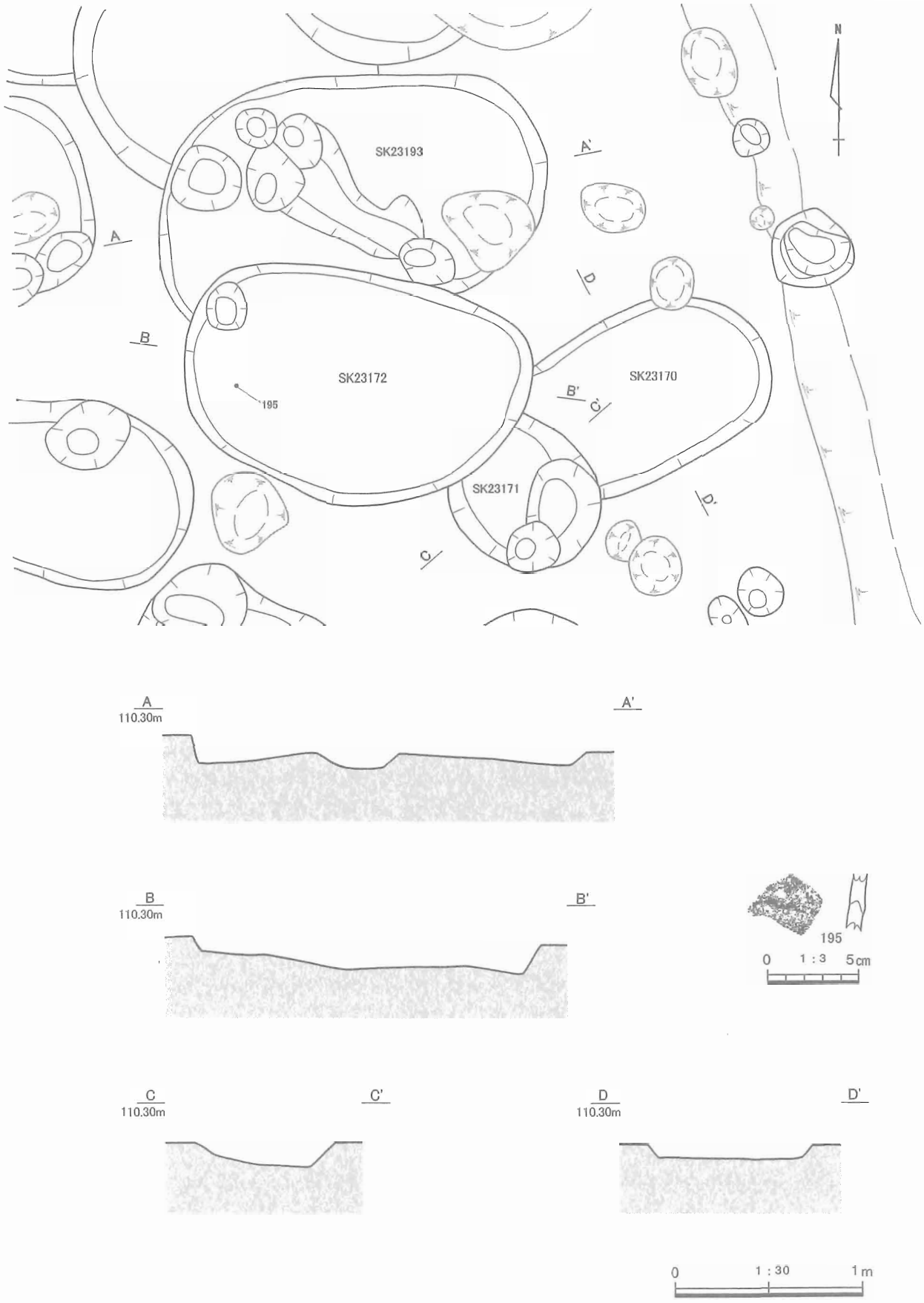
この部分で最も新しく位置付けられるのはＳＫ23172である。長軸1.86m、短軸1.26m、深さ21cmを測る楕円形を呈する。長軸が２m近くなる土坑の中では最も深い。西端で小穴と切り合っているが、遺構検出時には明らかでなかったので、さらに古い時期の遺構である可能性がある。

【遺物：土器】ＳＫ23172からは文様などがわかる土器１点（第91図195）が出土している。（第91図195）は横位に粘土紐を付けているが、器面が風化しており時期不明である。

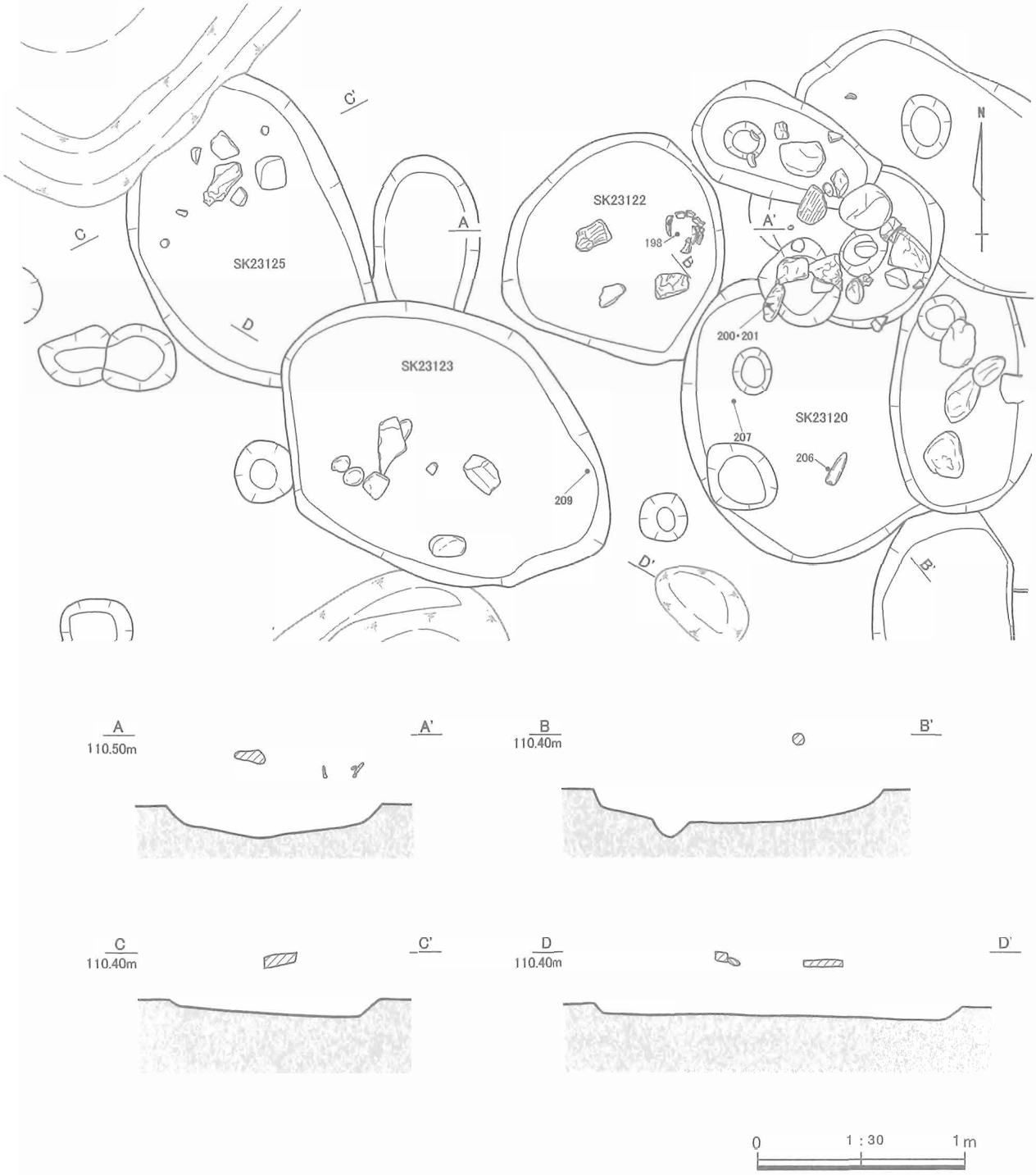
土坑墓エリアＢ（４）

【遺構】Ｇ８～９グリッドに密集する土坑群の内、南より西側にあたる部分であり、ＳＫ23120周辺は連鎖的に切り合っている。

ＳＫ23122は、連鎖的に切り合う土坑の中でも古く位置付けられるひとつである。直径1.05～1.08m、深さ16cmを測る南西側がやや突出する円形状を呈する。南東側の一部がＳＫ23120によって切られている。内部からは拳大～人頭大の礫や台石、東側には埋甕と思われる深鉢（第93図198）が検出された。これらは底面から34cm浮いた位置にある。ＳＫ23120は北～東側をＳＫ23290・23154によって切られている。長軸1.41m、短軸1.26m程度、深さ16cmの円形状を呈するものとみられる。内面の東よりに小穴が２基検出されているが、遺構検出時には明らかでなかったので、さらに古い時期の遺構である可能性がある。中央南よりでは底面から37cm浮いた位置で石斧が１点出土している（第93図206）。



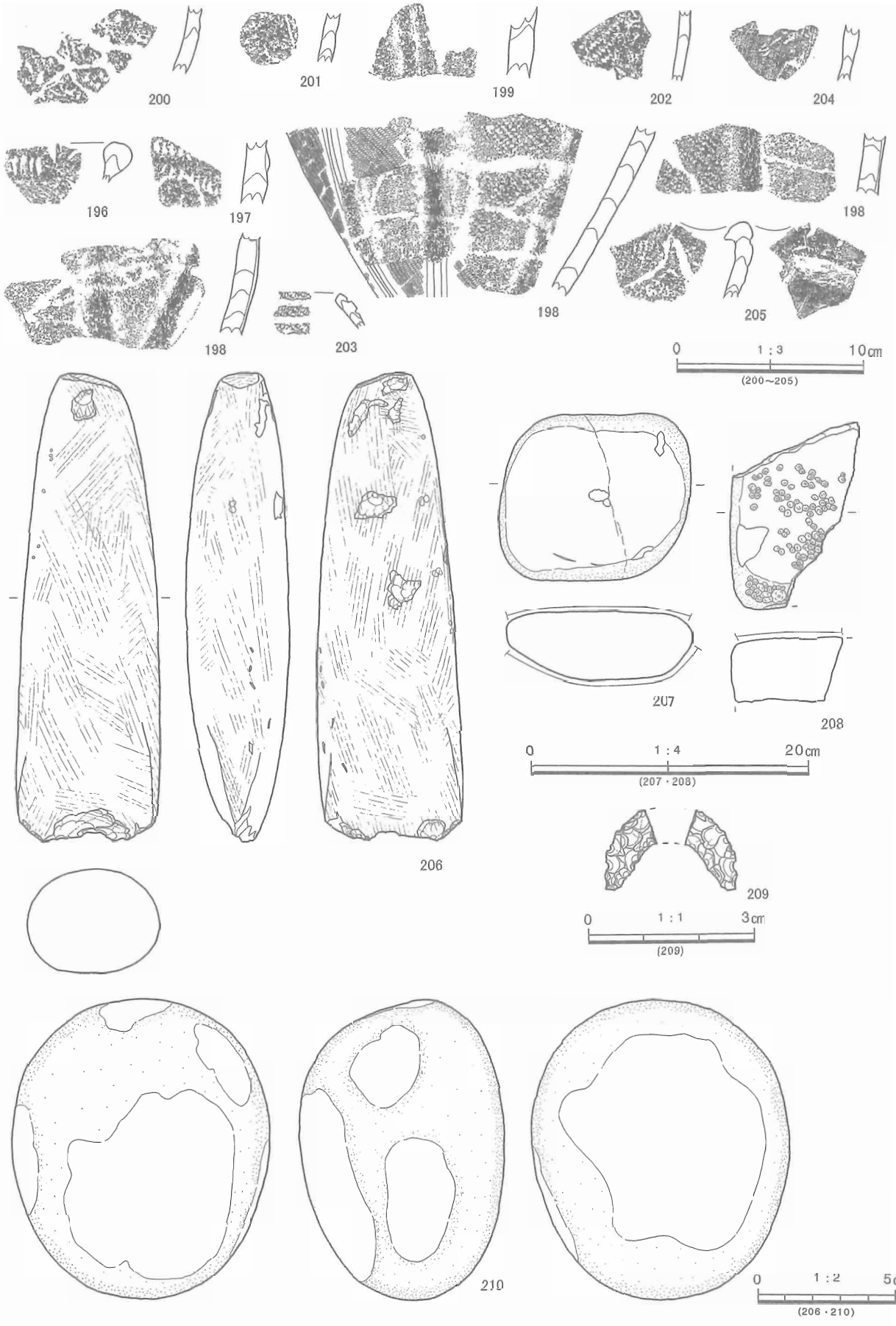
第91図　土坑墓エリアB（3）平面・断面図



第92図　土坑墓エリアＢ（４）平面・断面図

ＳＫ23125はエリアＢの中では最も西側にあたる土坑である。北西側を撹乱によって切られているが、長軸1.65m、短軸1.08m。深さ７㎝の楕円形を呈するものと思われる。中央やや北よりには人頭大の自然礫が底面から24㎝程の位置から検出された。これを南東側で切るＳＫ23123は長軸1.8m、短軸1.27m、深さ９㎝の南側がやや張る楕円形を呈する。中央から南西側にかけて拳大～人頭大の礫が検出されている。この内のひとつは磨石の転用品である。

【遺物：土器】ＳＫ23123からは文様などがわかる土器３点（第93図199・202・204）が出土している。（第93図199）は隆線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第93図202）は条の太さ約0.3㎝のＲＬ縄文



第93図　土坑墓エリアB（4）出土遺物

を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第93図204）は櫛歯状工具で沈線を付けた東鎌塚原式土器である。

ＳＫ23122からは文様などがわかる土器５点（第93図196～198・203・205）が出土している。（第93図196）は口縁部に爪形を連続刺突した北屋敷式土器である。（第93図197）は隆帯に沿って連続刺突を付け、ＲＬの多条の縄文を施し、口縁部にＲＬの多条の縄文を施した後、横位沈線を施した咲畑式土器である。（第93図198）は底部近くの破片で、縦位に隆帯で区画して、条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第93図203）は口縁部から条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を付け、横位沈線で区画した咲畑式土器である。（第93図205）は波状口縁部に沿って条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた後、沈線で区画している中津式土器である。

【遺物：石器】（第93図206・207）はＳＫ23120から出土した。（第93図206）は凝灰質砂岩を使用した乳棒状磨製石斧で、全体が良く研磨され敲打による調整痕をほとんど残さない端正な作りである。（第93図207）は中粒砂岩製の磨石の完形品で平坦部に磨面を有する。

ＳＫ23122からは、粗粒砂岩製の台石の一部が出土した（第93図208）。平坦部に磨面と敲打痕を有する。

ＳＫ23123からは、凝灰質頁岩製石鏃の脚部（第93図209）と、中粒砂岩の円礫を使用した磨石（第93図210）が出土した。磨石は両面と側面を利用するもので、手ごろな場所を持ち替えながら使っていたものと想像される。

土坑墓エリアＢ（５）

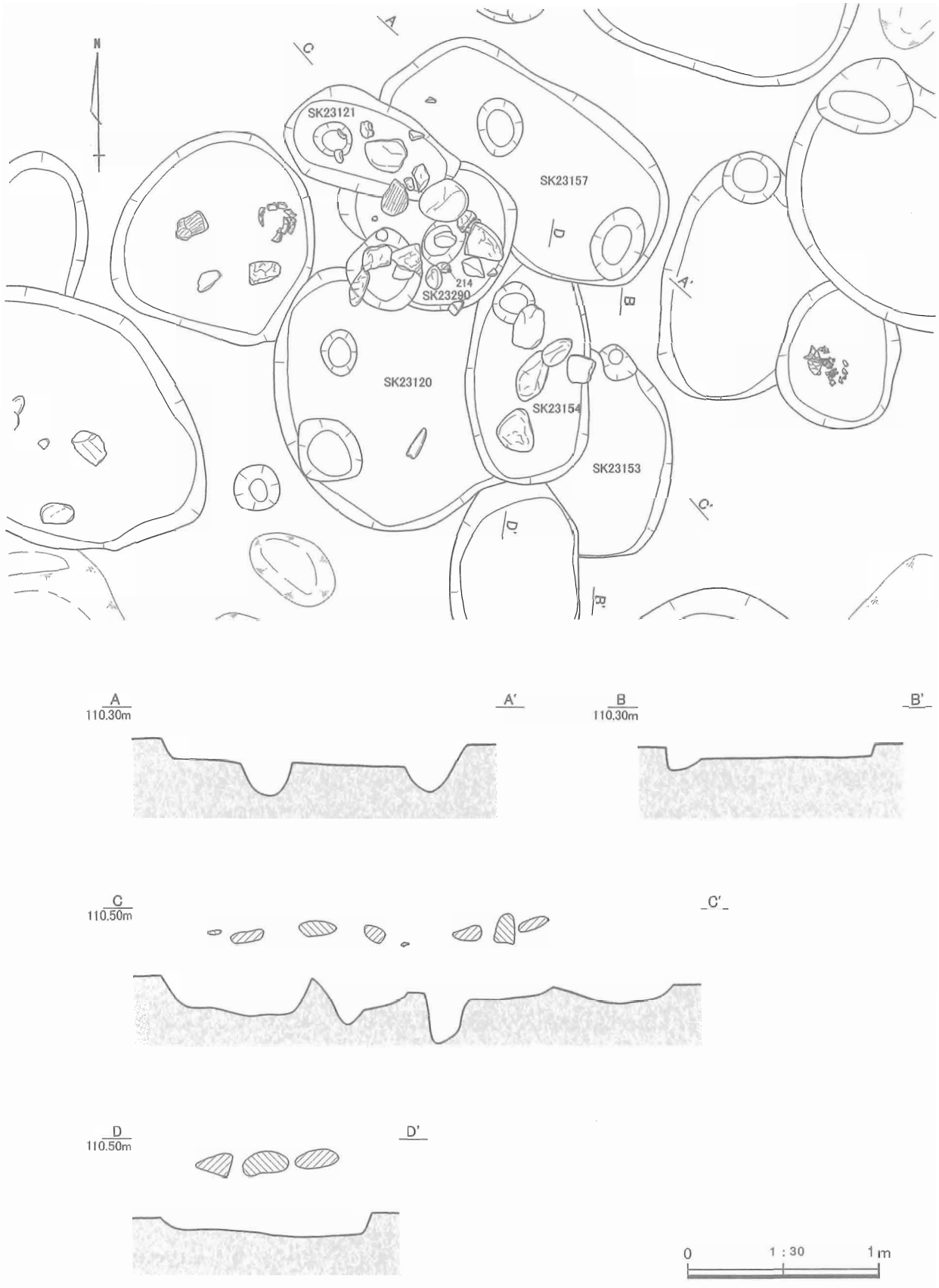
【遺構】Ｇ８～９グリッドに密集する土坑群の内、南より西側にあたる部分であり、ＳＫ23120周辺から連鎖的に切り合う東側の一部である。

ＳＫ23153は西側をＳＫ23154に切られる。いずれかの軸は1.08mで、深さ７cmを測る。周囲の状況からすると楕円形になると思われる。北側で小穴と切り合うが、遺構検出時には明らかでなかったので、さらに古い時期の遺構である可能性がある。これの西側で切り合うＳＫ23154は、北側でＳＫ23157に切られるため不確かであるが、長軸は1.2m程度、短軸0.66m、深さ13cmを測る楕円形の土坑である。内部には人頭大の礫が５個、底面から31cm浮いた状態で検出されている。また、北よりで小穴と切り合うが、遺構検出時には明らかでなく礫と重複することからも、さらに古い時期の遺構である可能性がある。

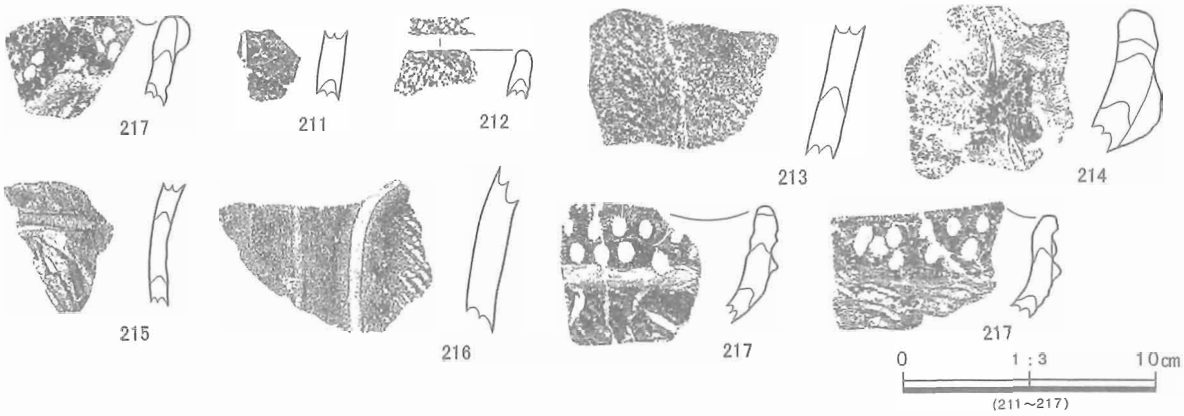
ＳＫ23290は南東側でＳＫ23154を切り、北西側でＳＫ23121に切られる位置にある。長軸は0.96m、短軸0.75m程度、深さ24cmを測る楕円形の土坑である。内部には人頭大の礫が、底面から42cm浮いた位置に集中して配置されている。これらのうちの３点は台石の転用品である。内面には小穴が検出されたが、礫と重複する位置にあることからもさらに古い時期の遺構である可能性がある。これの北西側に切り合うＳＫ23121は、この部分では最も新しく位置付けられる。長軸0.93m、短軸0.48m、深さ21cmを測る楕円形状を呈する。内部には東側を中心として拳大～人頭大の礫を集中して配置している。内面からは小穴が検出されているが、遺構検出段階には把握できなかったものなので、さらに古い時期に遡る可能性がある。

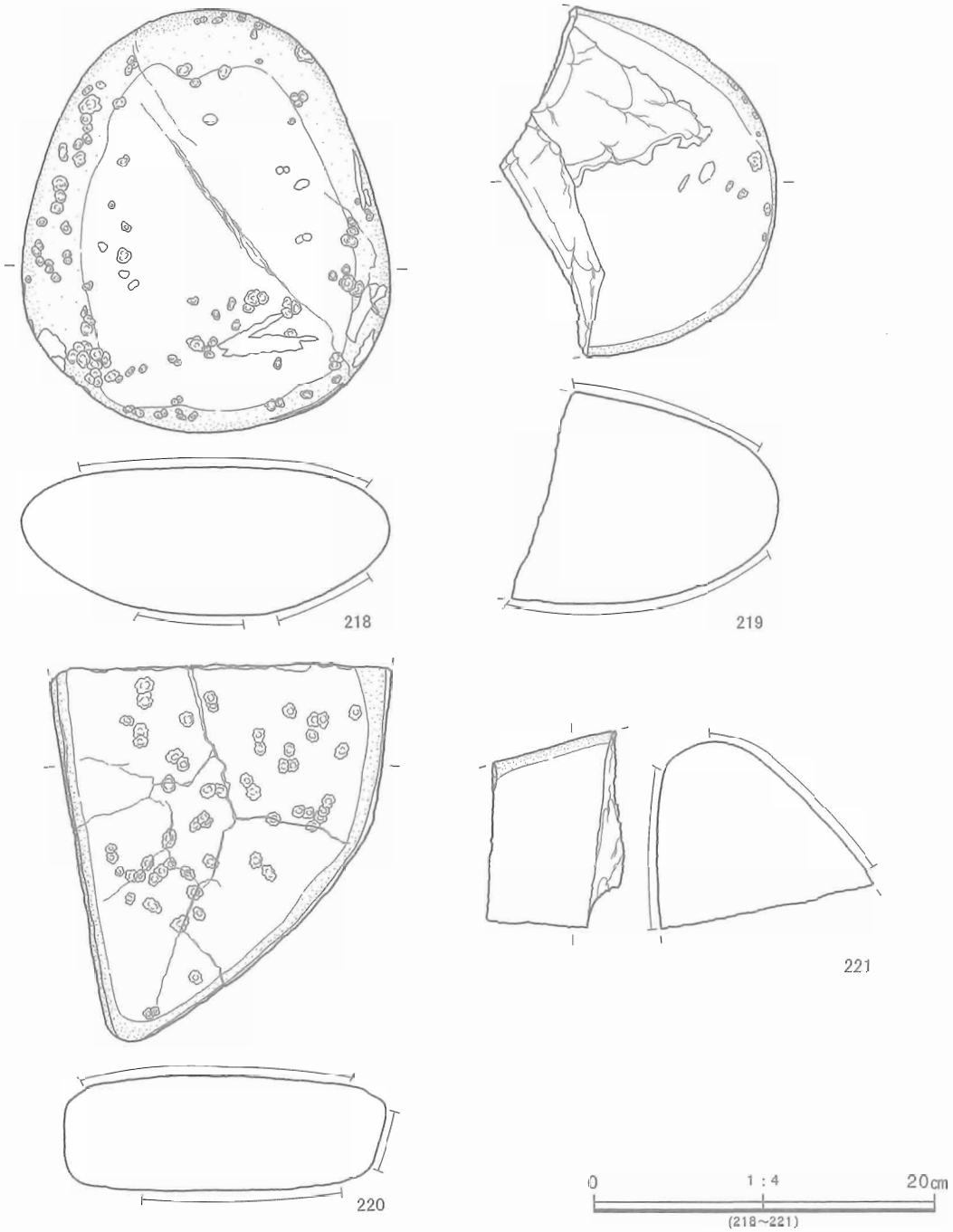
【遺物：土器】ＳＫ23290からは文様などがわかる土器５点（第95図211～214・217）が出土している。（第95図211）は縄文を付け、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第95図212）は口唇部に条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付け、口縁部に同一原体で縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第95図213）は風化しており胴部に縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第95図214）は口縁部にＸ状把手を付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第95図217）は波状口縁に沿って棒状工具で刺突し、下に沈線で区画した中に撚りの甘いＲＬの条の太さ約0.4cmの縄文原体付けた伊那系土器である。

ＳＫ23157からは文様などがわかる土器２点（第95図215・216）が出土している。（第95図215）は沈線



第94図　土坑墓エリアB（5）平面・断面図

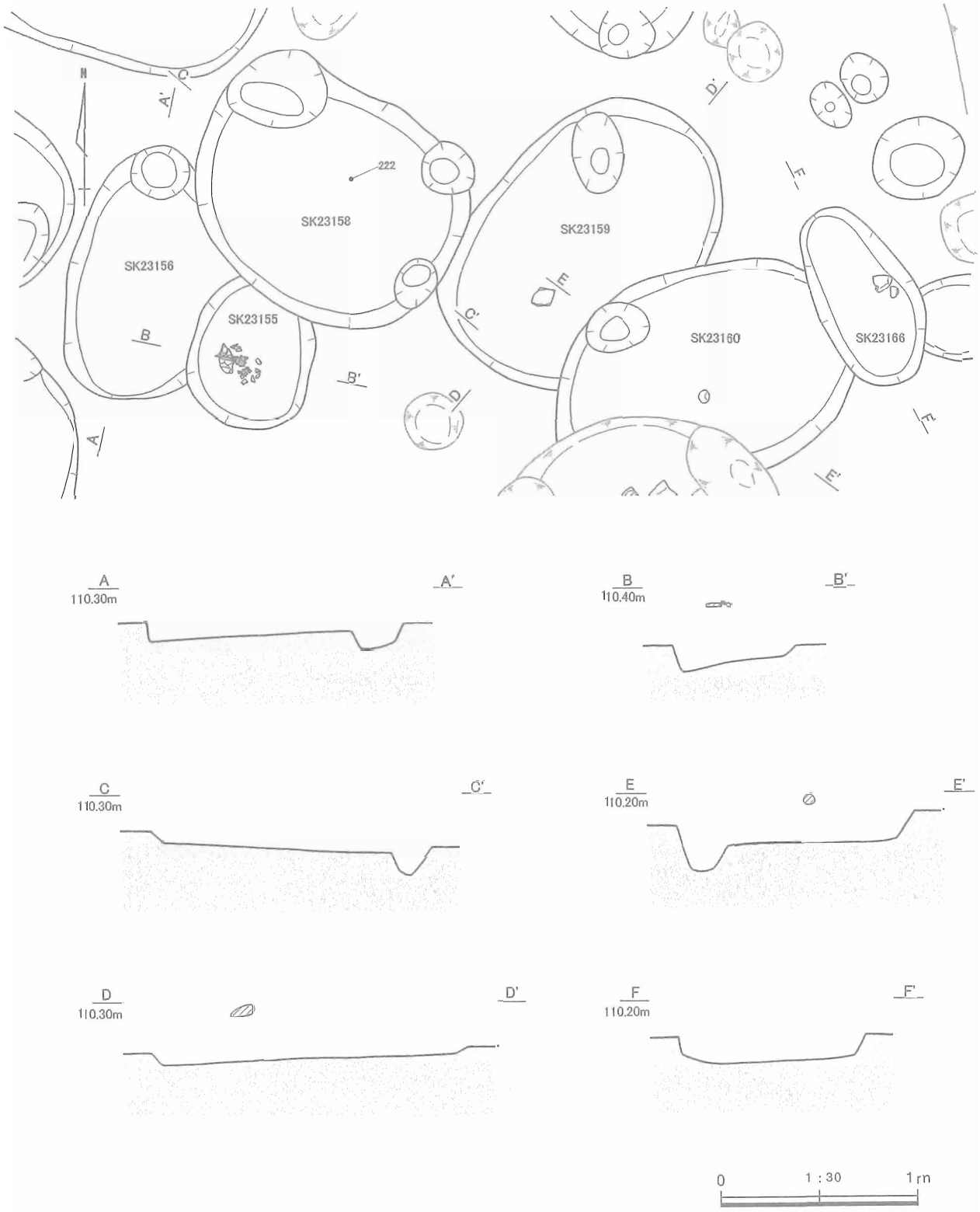




第95図　土坑墓エリアＢ（５）出土遺物

で区画した中に、条の太さ約0.3㎝のＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第95図216）は条の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で弧状に区画した加曽利Ｅ４式土器である。

【遺物:石器】ＳＫ23290からは台石３点（第95図218・220・221）が出土した。（第95図218・221）は中



第96図　土坑墓エリアＢ（６）平面・断面図

粒砂岩・含礫中粒砂岩の円礫を使用し平部に磨面・敲打痕をもつ。（第95図220）は板状の細粒砂岩を使用し表裏に磨面・敲打高を有すると共に、側面も滑らかに磨滅している。

ＳＫ23154からは、含礫中粒砂岩で磨面を持つ台石（第95図221）の一部が出土した。

いずれの台石も、墓石に転用された可能性がある。

土坑墓エリアＢ（６）

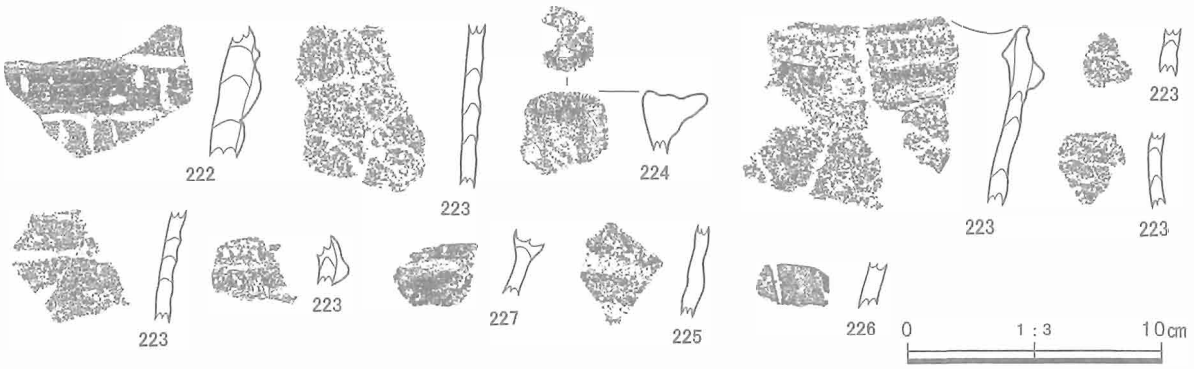
【遺構】Ｇ８～９グリッドに密集する土坑群の内、南より東側にあたる部分であり、ＳＫ23156から東側にかけて連鎖的に切り合っている。

ＳＫ23156は、東側をＳＫ23155・23158によって切られる。長軸1.32m、短軸0.9m程度、深さ10cmを測る楕円形を呈するものと思われる。北側で小穴と切り合うが、遺構検出段階には把握できなかったものなので、さらに古い時期に遡る可能性がある。ＳＫ23155は北側をＳＫ23158に切られる。長軸は0.78m程度、短軸0.63m、深さ13cmを測る円形状の土坑である。中央付近、底面から33cm浮いた状態で深鉢片がまとまって出土している。

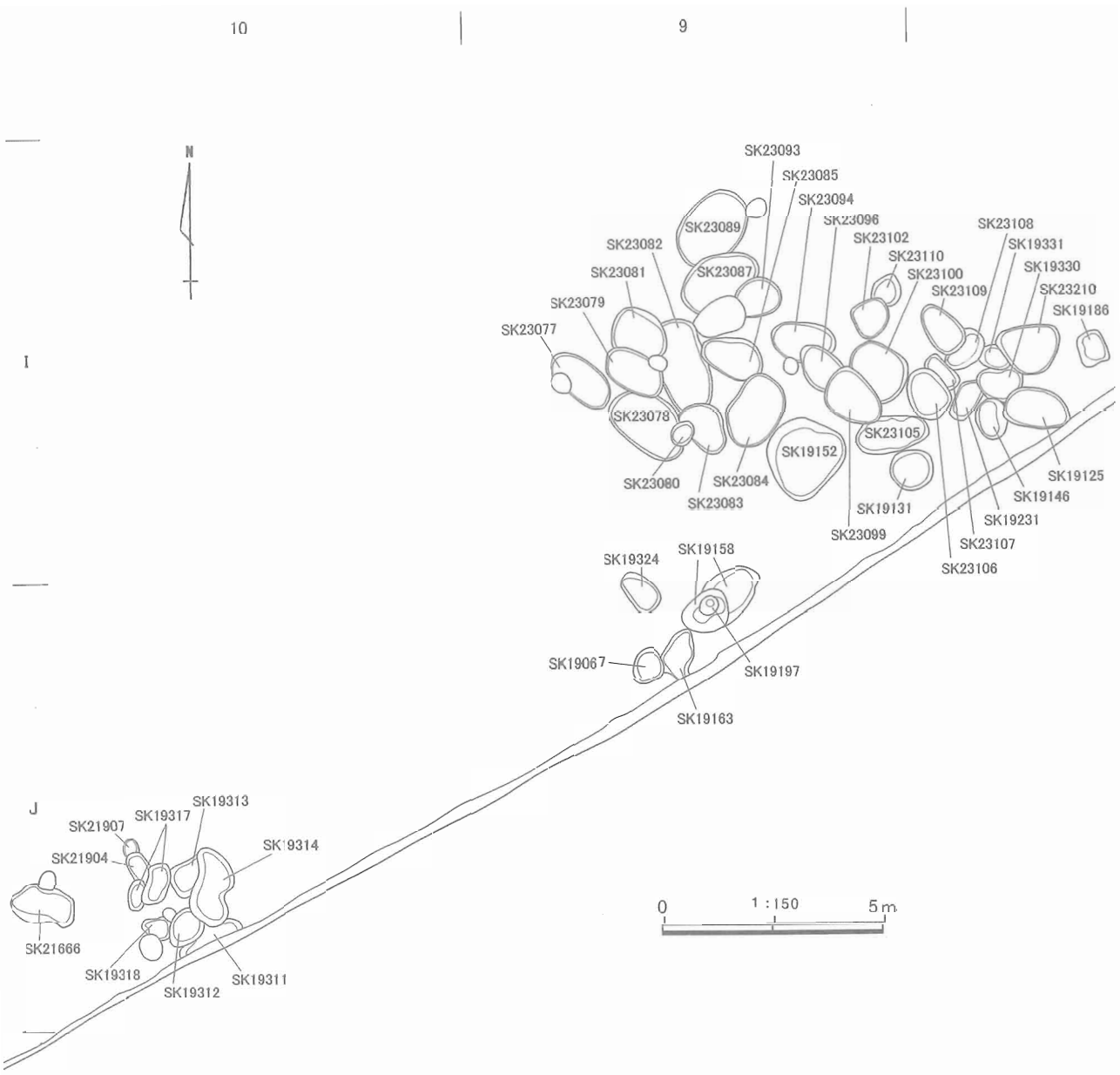
ＳＫ23159は、西側をＳＫ23158に、南東側をＳＫ23160に切られている。長軸1.62m、短軸1.08m、深さ９cmを測る楕円形を呈する。中央からやや南西よりの、底部から25cm浮いた位置に拳大の礫が検出された。内面北側には小穴が切り合っているが、遺構検出段階には把握できなかったものなので、さらに古い時期に遡る可能性がある。この、西側の上端を切るような形でＳＫ23158が掘られている。長軸1.47m、短軸1.2m、深さ12cmの楕円形を呈する。上端にそって３基の小穴と切り合っている。いずれも遺構検出段階では切り合いが明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。

ＳＫ23160は南側を撹乱に、東側をＳＫ23166に切られている。長軸1.6m程度、短軸1.11m、深さ15cmを測る楕円形を呈する。中央付近に拳大の礫を検出した。１個だけであるが、底面から21cm浮いた状態という他の土坑にも見られるような傾向があるので、この土坑に伴うものと解釈した。ＳＫ23166はエリアＢの最も東側にあたる長軸0.99m、短軸0.52m、深さ15cmを測る楕円形を呈する。他に比べて小ぶりであり、やや深い。中央東よりから拳大の礫が出土している。

【遺物：土器】ＳＫ23158からは文様などがわかる土器１点（第97図222）が出土している。（第97図222）は横位に隆帯を貼り付け、隆帯に沿って沈線や楔状刺突を施した勝坂式土器である。ＳＫ23155からは文様などがわかる土器５点（第97図223～227）が出土している。（第97図223）は波状口縁部に沿って粘土紐を貼り付け、区画した中に篦状工具で刺突を施した北屋敷式土器である。（第97図224）は口縁部に沿って粘土紐を垂下し、刺突を付けた北屋敷式土器である。（第97図225）は横位に粘土紐を貼り付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第97図226）は縦位に沈線を付け区画している加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第97図227）は口縁部と胴部の境に横位の粘土紐を貼り付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。



第97図　土坑墓エリアＢ（６）出土遺物



第98図　土坑墓位置図４

（３）エリアＣの土坑墓

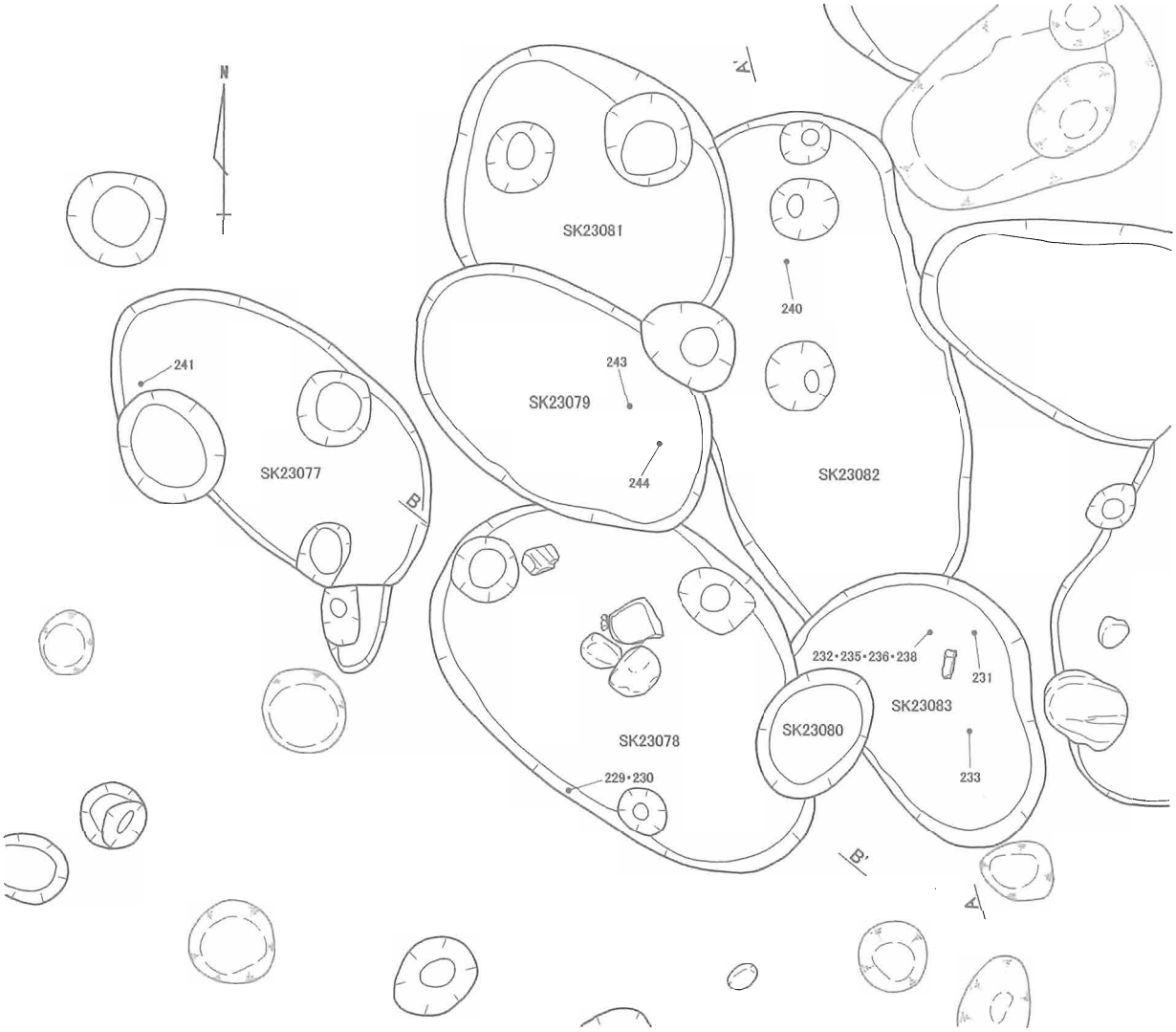
Ｉ８～Ｊ９グリッドに長楕円形を中心とした土坑36基が密集する部分がある。ここをエリアＣとした。

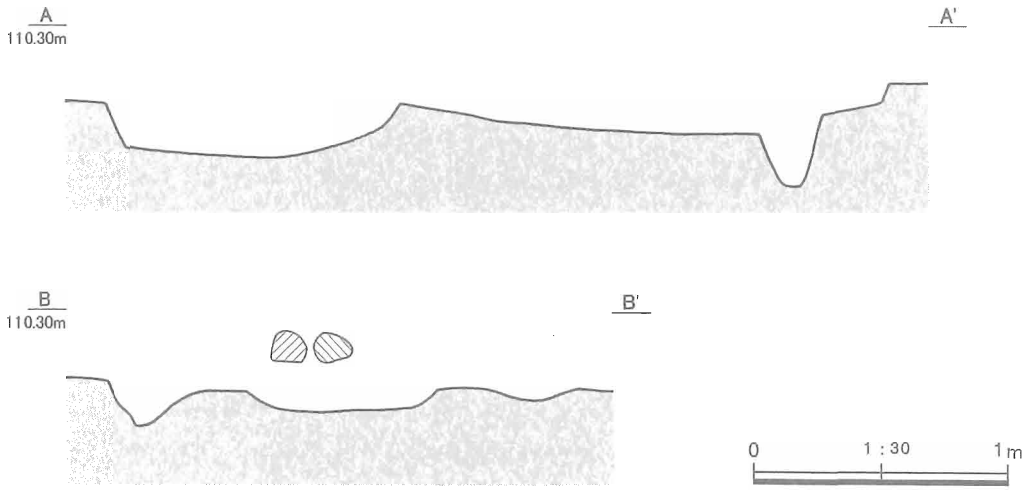
土壙の形状は、長軸の長さのばらつきはエリアＢのものに近似しながら、短軸に幅を持たせた楕円形を呈するものが主体であるが、不定円形を呈する大小の土壙も目立っている。不定円形の土壙は後期の土器を含むものもあり、分布の中央付近から東側にかけて大きな礫を敷きこむ墓上配石の残存が他のエリアと異なる部分である。

出土した土器はやはり加曽利Ｅ３～Ｅ４式土器が主体であるが、中津式土器、称名寺式土器、林ノ峰式土器など後期初頭～前半を示す土器が若干含まれる。中期末～後期前半頃の土坑墓群と考えたい。

土坑墓エリアＣ（１）

【遺構】Ｉ８～Ｊ９グリッドに密集する土坑群の内、中央西側にあたる部分であり、ＳＫ23082から西側にかけて連鎖的に切り合っている。西側にあるＳＫ23078～23079の３基の土坑は同方向を志向して掘ら





第99図　土坑墓エリアＣ（１）平面・断面図

れているように見える。

ＳＫ23082は、西側でＳＫ23079・23081、南側でＳＫ23083、東側で23085に切られ、この部分で最も古く位置付けられる。長軸およそ2.16m、短軸1.08m、深さ19cmの長楕円形を呈する。内面から３基の小穴が検出されているが、いずれも遺構検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。南側で切り合うＳＫ23083は、長軸1.2m、短軸0.78m、深さ21cmの北西側がやや膨らむ楕円形を呈する。中央やや北東よりで角柱状の礫などが出土している。

ＳＫ23081は、南側をＳＫ23079に切られる。長軸1.35m、短軸1.17m、深さ７cmを測る円形状を呈する。内面からは２基の小穴が検出されている。いずれも遺構検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。これに南側で切り合うＳＫ23079は、長軸1.41m、短軸0.87m、深さ８cmの楕円形を呈する。

ＳＫ23078はＳＫ23083を切り、23079に切られている。長軸1.89m、短軸1.2mの楕円形を呈し、深さは中央部分が12cmと周囲に比べて３cm程度深くなる。中央付近には底面から19cm浮いた位置に人頭大の礫が３個まとめて据えられている。この内のひとつは台石の転用品である。内面からは３基の小穴が検出された南側のひとつは土坑が埋められた後に掘られたものである。他の二つは遺構検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。

ＳＫ23078と23083を切るＳＫ23080は楕円形の土坑ですこぶる小さい。小児の墓であろうか。

ＳＫ23077はいずれの土坑とも切り合わない。長軸1.56m、短軸0.82m、深さ６cmの楕円形を呈する。内面からは２基の小穴が検出されている。これらは遺構検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。西側で切り合う小穴は、土坑が埋められた後に掘られたものである。

【遺物:土器】ＳＫ23077からは文様などがわかる土器１点（第100図228）が出土している。（第100図228）は半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた後期前半の土器である。

ＳＫ23078からは文様などがわかる土器２点（第100図229・230）が出土している。（第100図229）は口縁部から条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で横位の沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第100図230）はヘラ状工具でハの字沈線を付けた曽利Ｖ式土器である。

ＳＫ23083からは文様などがわかる土器９点（第100図231～239）が出土している。（第100図231）は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で縦位の沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第100図232・233）は隆帯を渦巻きに貼り付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第100図234）は胴部に隆帯を縦位に貼り、ヘラ状工具で沈線を入れた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第100図235・237～239）は無文土器で時期不明である。（第100図236）は口縁部に沿って横位に粘土紐を貼り、条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた時期不明土器である。

ＳＫ23082からは無文土器１点（第100図240）が出土しており時期不明である。

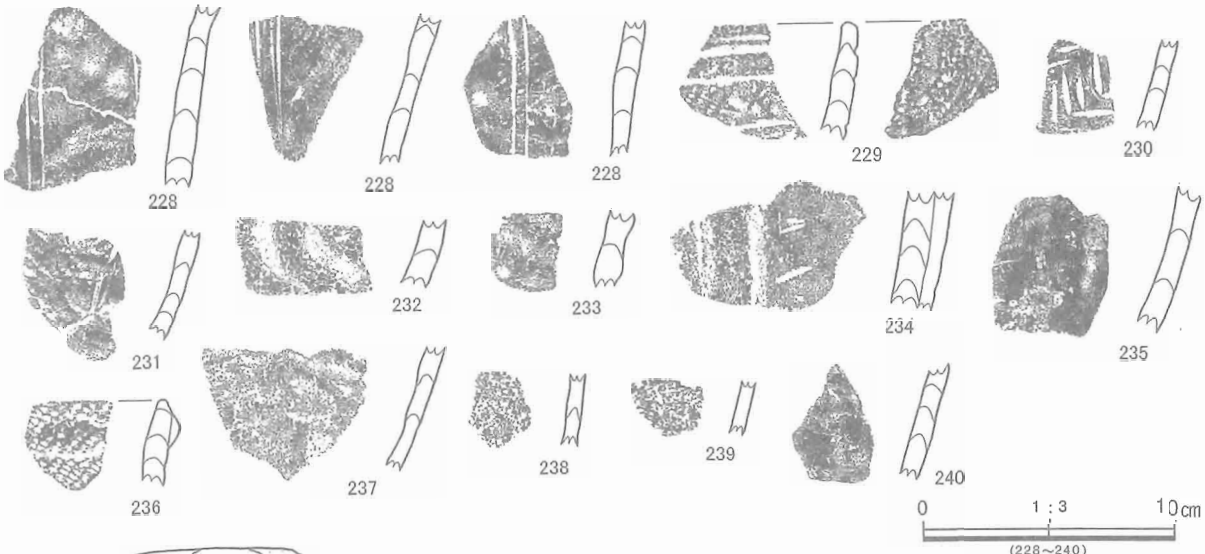
【遺物:石器】ＳＫ23077からは（第100図241・242）が出土した。（第100図241）は扁平な粘板岩を用い縄掛け部を３か所作り出した打欠石錘である。（第100図242）は砂質粘板岩製の打製石斧で頭部が欠損している。短冊形を呈し、側縁を加工調整するのみで原礫面を多く残すものである。

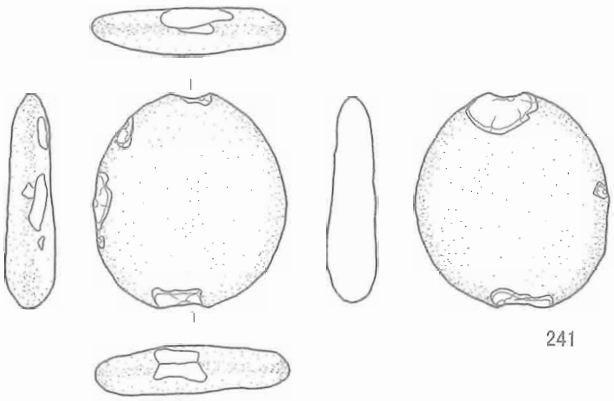
ＳＫ23079からは（第100図243・244）が出土した。（第100図243）は砂質粘板岩を使用した凹基無茎の石鏃で脚部が欠損している。側縁の細かい調整は表面からなされている。（第100図244）は、粘板岩製のスクレイパーで、調整の成された一辺と未調整の一辺を刃部として使用していたと見られる。

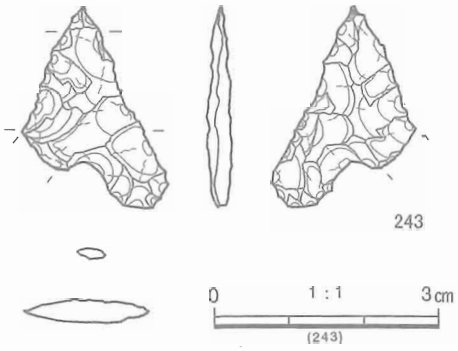
（第100図245）は、ＳＫ23078から出土した粗粒砂岩の台石である。厚さ７cmほどの板状を成し平坦部に磨面と敲打痕を有する。台石として使用後、墓石に転用された可能性がある。

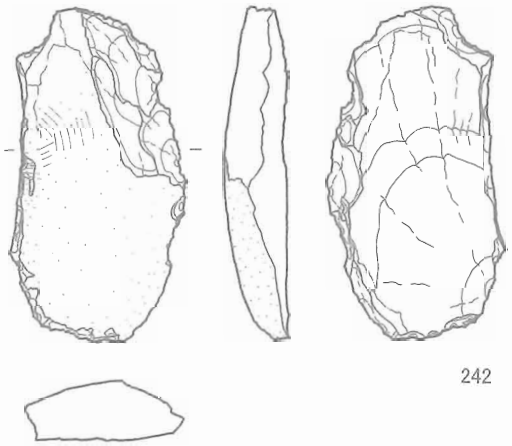
土坑墓エリアＣ（２）

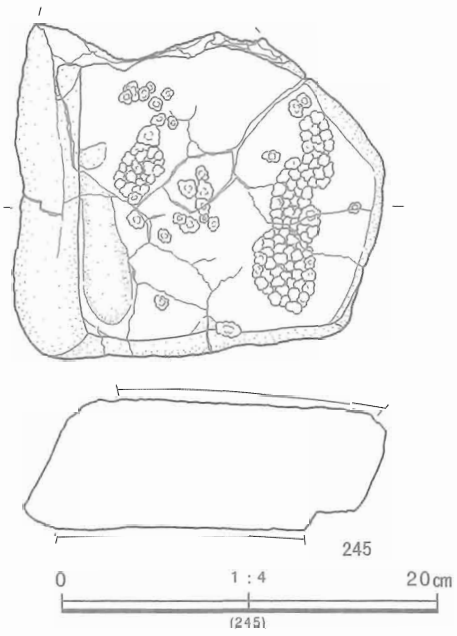
【遺構】Ｉ８～Ｊ９グリッドに密集する土坑群の内、中央北側にあたる部分であり、ＳＫ23089から南側

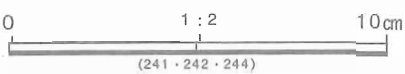




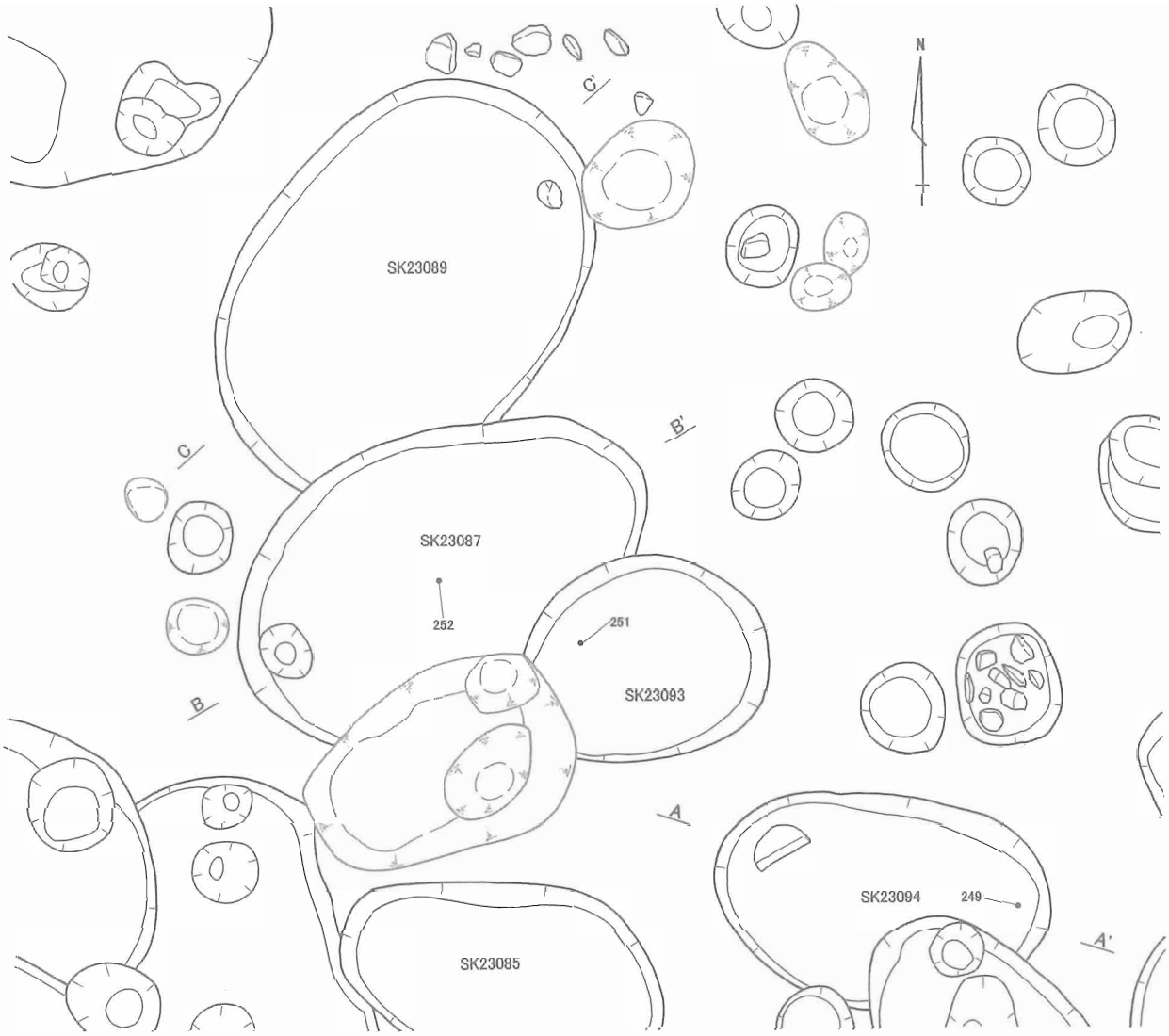


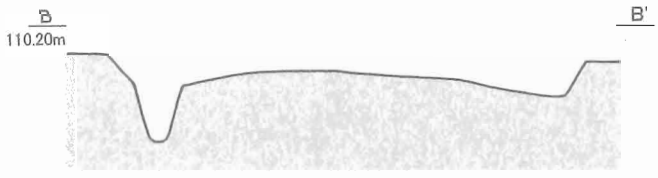


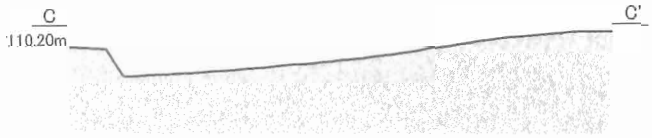




第100図　土坑墓エリアC（1）出土遺物







第101図　土坑墓エリアC（2）平面・断面図

にかけて連鎖的に切り合っている。

ＳＫ23089は長軸1.89m、短軸1.32m、深さ18cmを測る楕円形を呈する。これを南側で切るＳＫ23087もほぼ同等の規模で、長軸1.89m、短軸1.2m、深さ18cmとなる。内面西側で小穴を検出したが遺構検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。ＳＫ23093は23087の南東側を切る。前２者に比べて小ぶりで、長軸およそ1.05m、短軸87cm、深さ10cmを測る楕円形を呈する。西側は撹乱により壊されている。

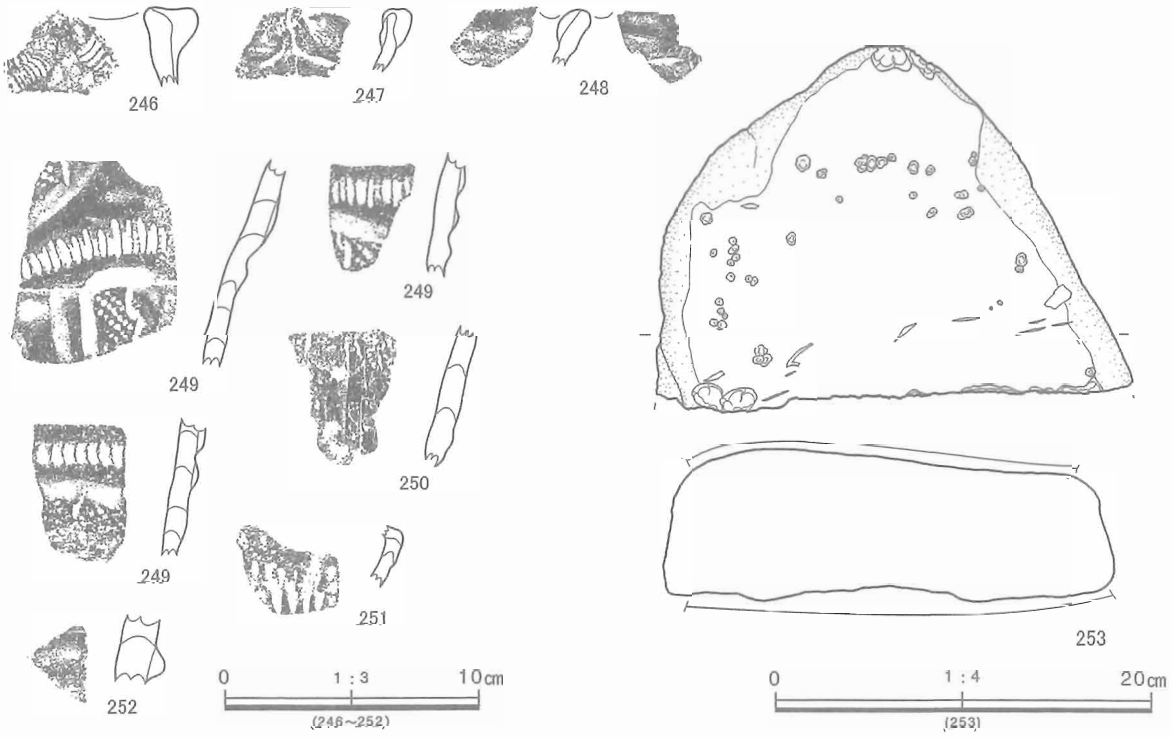
ＳＫ23094は、長軸1.44m、短軸0.91m、深さ９cmを測る楕円形を呈する。南側をＳＫ23096等に切られている。内部からは台石の転用品である人頭大の礫が底面から９cm浮いた位置に検出された。

【遺物：土器】ＳＫ23094からは文様などがわかる土器４点（第102図246～249）が出土している。（第102図246）は波状口縁の隆帯部に連続爪形を付けた北屋敷式土器である。（第102図247）は波状口縁に沿って粘土紐を貼り、指頭で波頂部を摘んだ北屋敷式土器である。（第102図248）は波状口縁に沿って粘土紐を付け、下に擦痕が付く北屋敷式土器である。（第102図249）は隆帯に沿って幅1.3cmの親指爪状による連続刺突を付け、隆帯と沈線で区画した中に条の太さ約0.3cm、ＬＲの開いた端の端部に結節を作って、縦位に回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。

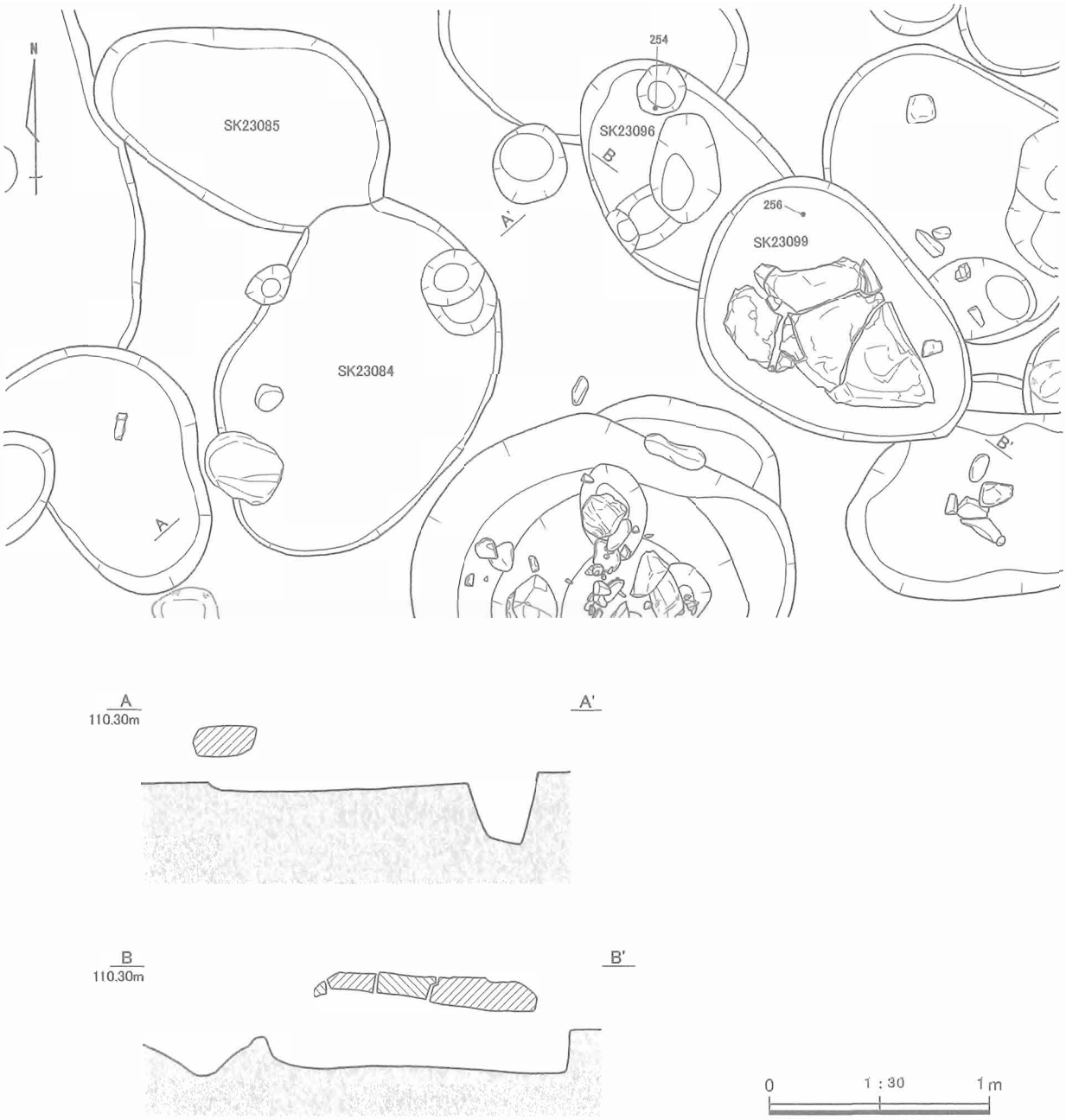
ＳＫ23093からは文様などがわかる土器２点（第102図250・251）である。（第102図250）は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けて、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。（第102図251）は竹管状工具で刺突を入れた北裏Ｃ式土器である。

ＳＫ23087からは文様などがわかる土器１点（第102図252）は隆帯を横位に付けた加曽利Ｅ３式土器と思われる。

【遺物：石器】ＳＫ23094からは、粗粒砂岩の台石（第102図253）が出土した。平坦部に磨面と若干の敲痕をもち、欠損した状態であった。墓石に転用されていた可能性がある。



第102図　土坑墓エリアＣ（２）出土遺物



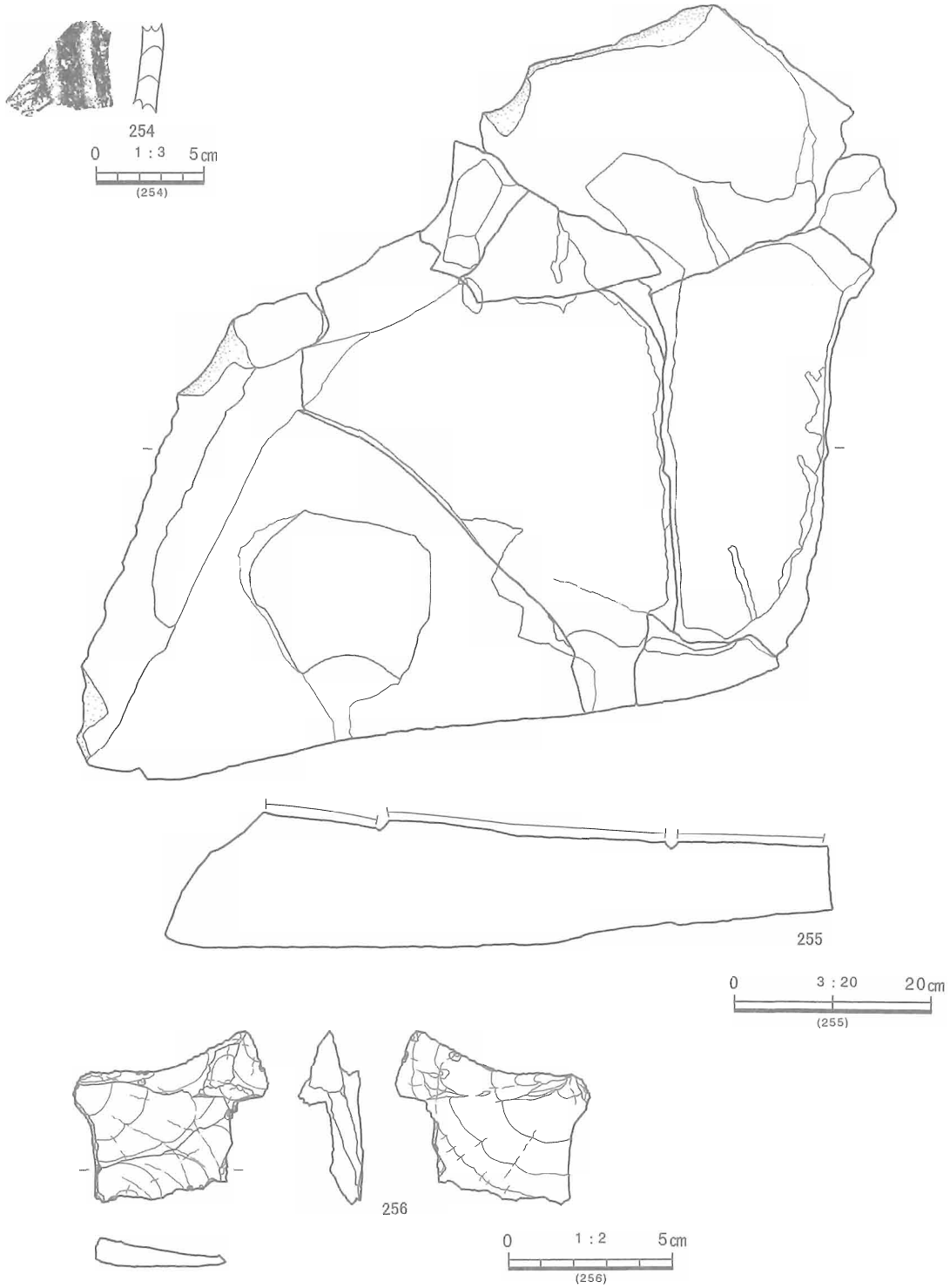
第103図　土坑墓エリアＣ（３）平面・断面図

土坑墓エリアＣ（３）

【遺構】Ｉ８～Ｊ９グリッドに密集する土坑群の内、ほぼ中央にあたる部分であり、ＳＫ23099付近で連鎖的に切り合っている。

ＳＫ23084は長軸1.69m、短軸1.14m、深さ９cmを測り楕円形を呈する。内面北東側で２基の小穴が切り合って検出された。これらは遺構検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。南西隅からは底面から15cm浮いた位置に扁平な人頭大の礫を検出した。北側でこれに切られるＳＫ23085は、長軸1.41m、短軸0.86m、深さ11cmを測り、楕円形を呈する。西側でＳＫ23082の上端を切る。

ＳＫ23096は、長軸1.14m程度、短軸0.81m、深さ21cmとやや深い楕円形を呈する。内面からは４基の小穴を検出したが、いずれも遺構検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。これを南側で切るＳＫ23099は、長軸1.41m、短軸0.99m、深さ19cmを測り、円形状を呈する。

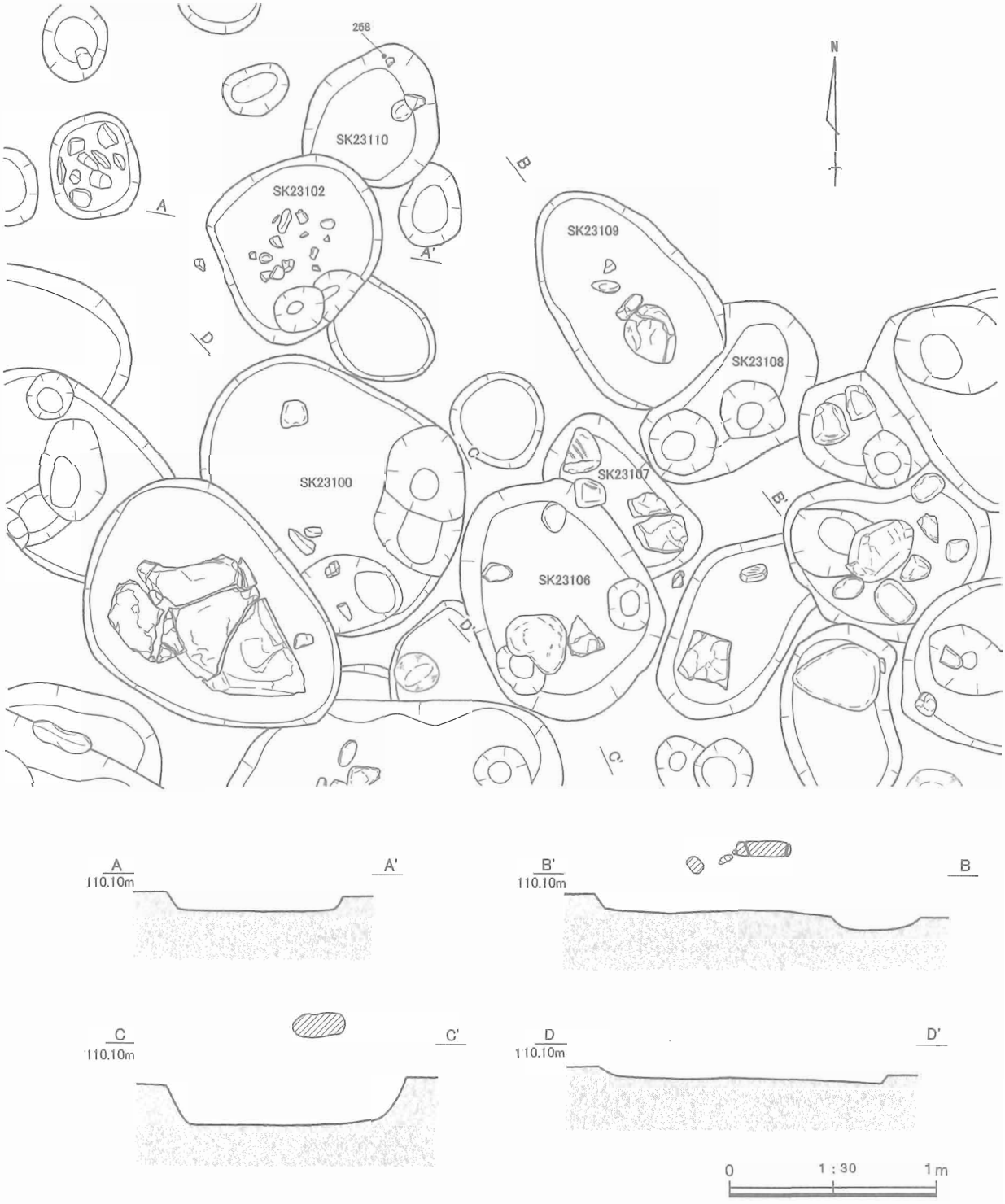


第104図　土坑墓エリアＣ（３）出土遺物

土坑の中央部の底面から28㎝前後浮いて水平に、扁平で一辺が0.7m以上ある巨大な礫を土坑に覆い被せるように配置している。この礫は台石あるいは敷石の転用品で、被熱して４破片以上に割ている。割れた状態で運ばれて再配置されたのであろうか。

【遺物：土器】ＳＫ23096からは文様などがわかる土器１点（第104図254）が出土している。（第104図254）は指状の沈線で区画した中に、撚りの堅い原体で条の太さ約0.3㎝のＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。

【遺物：石器】ＳＫ23099からは台石（第104図255）と石匙（第104図256）が出土した。(第104図255)は中粒砂岩で長さ77.3cm・幅83.3cm厚さ13.6cmの板状三角形を呈し、本遺跡で最大の台石である。表面の剥がれが広いが平坦部はほぼ全域にわたって磨面だったと思われるため台石としたが、敷石だった可能性もある。ＳＫ23099の上部2/3程を覆う大きさであり、最終的に墓石として土坑墓に配されたものと思われる。(第104図256)は左側縁が欠損した石匙とした。鋭利な粘板岩剥片の一辺を未調整のまま刃部として使用していたと思われる。



第105図　土坑墓エリアＣ（４）平面・断面図

土坑墓エリアＣ（４）

【遺構】Ｉ８～Ｊ９グリッドに密集する土坑群の内、中央東よりにあたる部分で、やや小ぶりな土坑が密集している。その多くには礫が配置されている。

ＳＫ23100は南西側でＳＫ23099に切られる。長軸1.42m、短軸およそ1.08m、深さ９㎝を測る円形状を呈する。中央より北側と南側の２か所の底面から32㎝程度浮いた位置から拳大の礫が複数個検出された。この内のひとつは磨き石を兼用する敲石を転用している。また、内面南側と東側から３基の小穴が検出された。いずれも遺構検出段階では明らかでなく、南側のひとつは礫と重複するのでさらに古い時期に遡る可能性がある。この北側にあるＳＫ23102は直径0.87～96mを測る円形状を呈する。中央部分の底面から25㎝前後浮いた位置に10㎝程度の小礫が密集している。これに切られるＳＫ23110は、直径0.66～69mを測る円形状を呈し、東側の底面から36㎝前後浮いた位置から拳大の磨敲石と礫が二つ並んで検出された。

ＳＫ23107は南西側をＳＫ23106に切られている。長軸0.87m、短軸0.45m程度、深さ15㎝の楕円形を呈するものと考えられる。内面には、底面から36㎝浮いた位置に人頭大の礫を４個配置している。この内のひとつは台石の転用品である。この南西側にあるＳＫ23106は、長軸1.17m、短軸0.9m、深さ22㎝を測る円形状を呈する。底面から42㎝浮いた位置に拳大～人頭大の礫を複数個配置し、南側の一角には円礫と角礫を並べて置く。内面からは小穴が２基検出された。いずれも遺構検出段階では明らかでない上、南側のひとつは礫と重複するのでさらに古い時期に遡る可能性がある。

ＳＫ23108は、北西側をＳＫ23109に切られている。長軸1.02m、短軸0.6m程度、深さ６㎝を測り、楕円形を呈するものと思われる。内面からは小穴が２基検出されているが、いずれも遺構検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。この北西側に重複するＳＫ23109は長軸1.11m、短軸0.72m、深さ９㎝の楕円形を呈する。中央から南東側にかけて複数の礫が、底面から18㎝浮いた位置で列状に検出されている。特に南東端に配置される礫は人頭大と最も大きい。

【遺物：土器】ＳＫ23102からは文様などがわかる土器３点（第106図259・260・264）が出土している。（第106図259）は隆帯を縦位に付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第106図260）は条の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第106図264）は波状口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、区画内に条の太さ約0.1㎝のＬＲ縄文を付けた中津式土器である。

ＳＫ23107からは文様などがわかる土器１点（第106図263）が出土している。（第106図263）は口縁部の下に隆帯を付け、条の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。

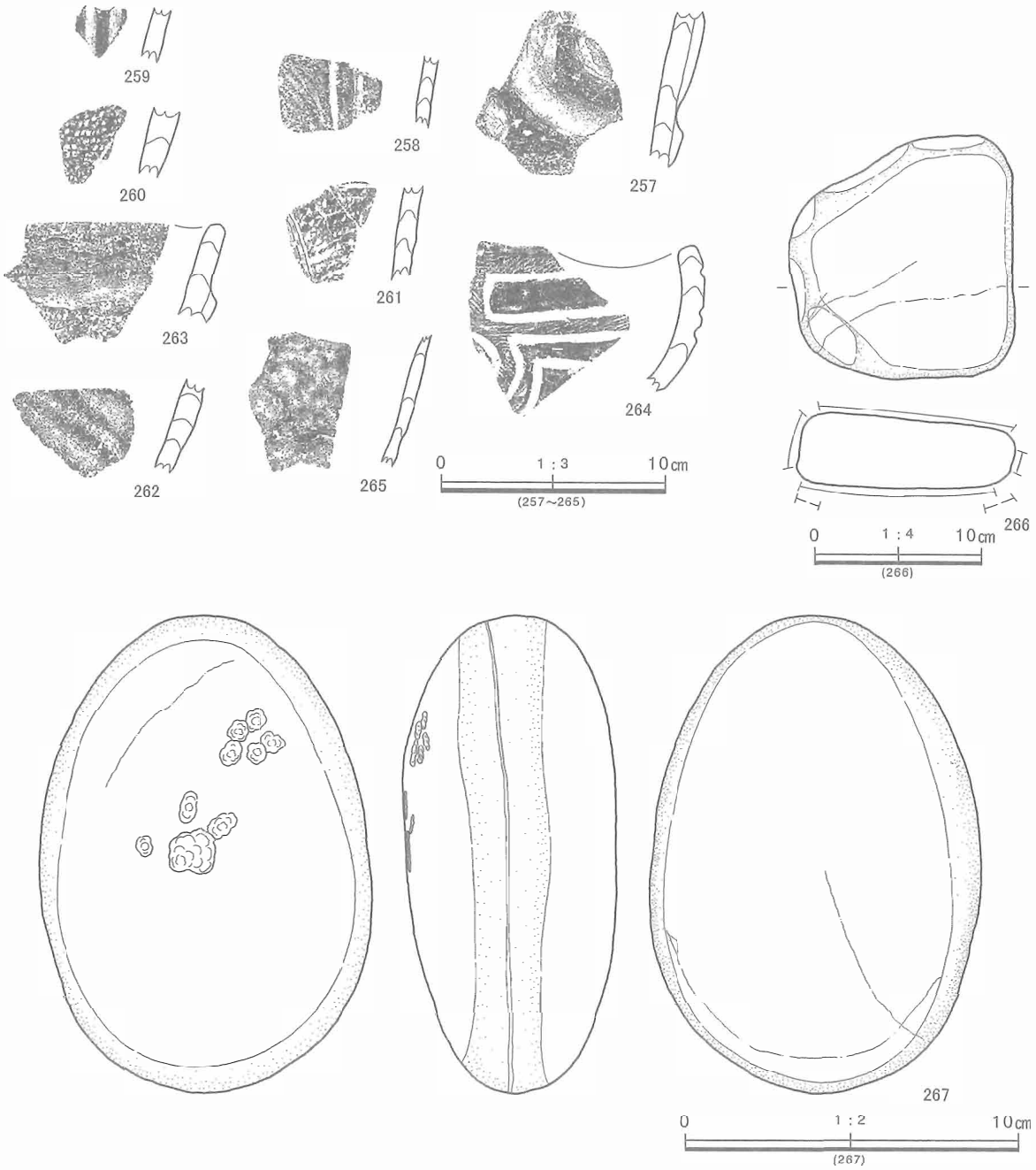
ＳＫ23109からは文様などがわかる土器１点（第106図261）が出土している。（第106図261）は条の太さ約0.4㎝でＬＲの繊維の硬い縄文を付け、半截竹管状工具で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ23106からは文様などがわかる土器１点（第106図257）が出土している。（第106図257）は隆帯を渦巻き状に付けた加曽利Ｅ３式土器である。

ＳＫ23110からは文様などがわかる土器２点（第106図262・265）が出土している。（第106図262）は粘土紐を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第106図265）は無文土器の胴部破片で時期不明である。

【遺物：石器】ＳＫ23110からは、中粒砂岩の扁平円礫を用いた磨敲石（第106図267）が出土した。扁平な両面を磨面として使用し、一方には若干の敲打痕を残す。

ＳＫ23107からは、中粒砂岩の扁平礫を用いた台石（第106図266）が出土した。扁平な両面を広く磨面として使用しているほか、側面にも幅３～５㎝程度の磨面を有する。台石の中では法量が小さいので、側面は磨石として利用されていたかもしれない。その後、墓石に転用されたとも考えられる。



第106図　土坑墓エリアＣ（４）出土遺物

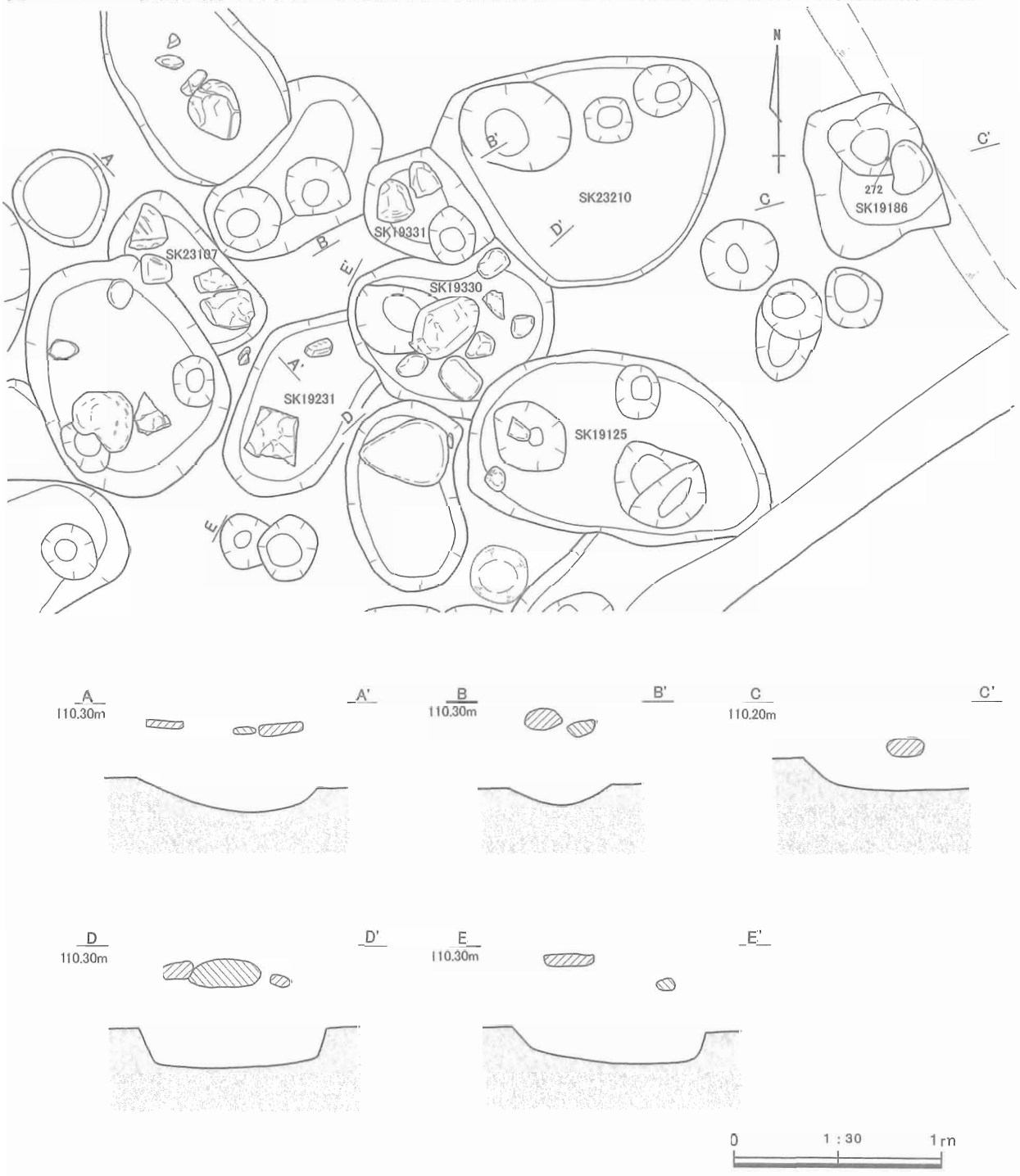
土坑墓エリアＣ（５）

【遺構】Ｉ８～Ｊ９グリッドに密集する土坑群の内、東よりにあたる部分で、西側にやや小ぶりな土坑が、東側に大型の土坑が密集している。その多くには西側から継続して礫が配置されている。

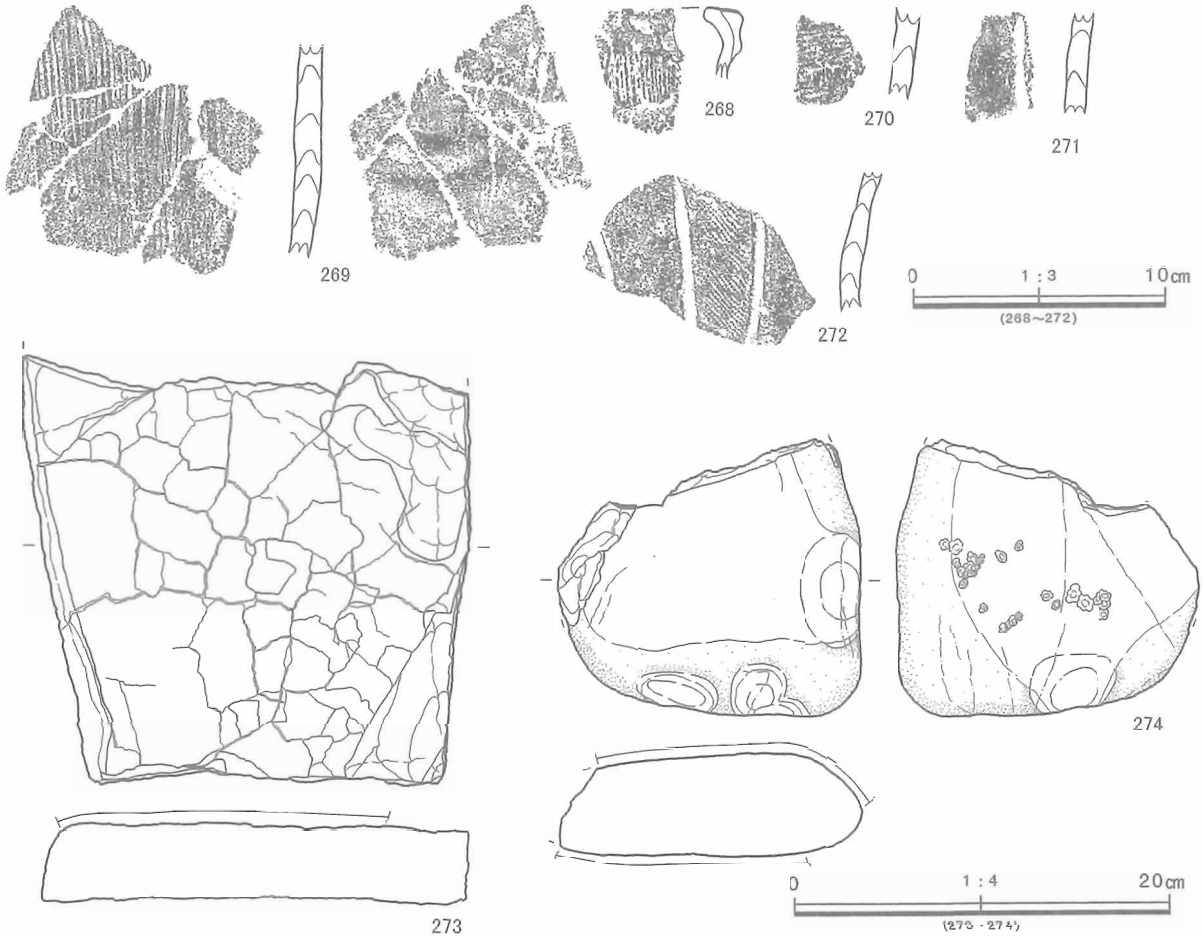
ＳＫ19231は北東側をＳＫ19330に切られ、長軸1.02m程度、短軸0.55m、深さ16cmとやや深い括れを持つ楕円形を呈する。南西側では底面から34cm浮いた位置に矩形で板状の礫を検出した。これは台石の転用品である。これに北東側で重複するＳＫ19330は、長軸１m、短軸0.72m、深さ18cmを測る円形状を呈する。底面から37cm浮いた位置に水平に置かれる拳大～人頭大の複数の礫を検出した。特に人頭大の礫を中心に据えるのが特徴である。内面からは小穴が検出されたが、礫と重複する位置にあることからさらに古い時期の遺構である可能性がある。これを北側で切る位置にあるＳＫ19331は、長軸0.66m、

短軸0.45m、深さ10cmを測る小型の円形上を呈するものと思われる。北側縁の底面から33cm浮いた位置に並んだ状態にある人頭大の礫を二つ検出した。ひとつは台石の転用品である。

ＳＫ19125は、ＳＫ19330の南東側を切る。長軸1.5m、短軸0.87m、深さ10cmを測る楕円形を呈する。西よりには底面から40cm浮いた位置に拳大の礫二つを検出した。また、内面には３基の小穴があるが、いずれも遺構検出段階では明らかでなく、西側の１基は礫と重複するので、さらに古い時期に遡る可能性がある。ＳＫ23210はＳＫ19330・19331と西側の上端が切り合い、19331より古く19330より新しい。長軸1.29m、短軸1.08m、深さ９cmを測る円形状を呈する。内面底部から３基の小穴を検出したが、西側のひとつは検出段階で切り合いが把握されたより新しいものである。他のふたつは検出段階では把握



第107図　土坑墓エリアＣ（５）平面・断面図



第108図　土坑墓エリアC（5）出土遺物

できなかったもので、さらに古く遡る可能性がある。

【遺物:土器】SK23210からは文様などがわかる土器1点（第108図269）が出土している。（第108図269）は胴部縦位に沈線を付けた加曽利E3式から加曽利E4式土器である。

SK19186からは文様などがわかる土器3点（第108図268・270・272）が出土している。（第108図268）は口縁部を波状にして、連続爪形文を付けた北屋敷式土器である。（第108図270）は縄文を付けた加曽利E3式から加曽利E4式土器である。（第108図272）は沈線で区画した中に、条の太さ約0.1cmのLR縄文を付けた称名寺I式土器である。

SK19125からは文様などがわかる土器1点（第108図271）が出土している。（第108図271）は胴部に半截竹管状工具で縦位状線を付けた加曽利E3式から加曽利E4式土器である。

【遺物:石器】SK19231からは台石（第108図273）が出土した。一部欠損した板状の中粒砂岩で平坦部が磨面となっている。土坑墓の墓石として配された可能性がある。

（第108図274）はSK19331から出土した中粒砂岩製の台石で、平坦な両面に磨面・敲痕を有する。一部欠損をしているが元々の法量は手のひらより少し大きいくらいであると推測され、側面の窪みを持つ磨面は磨石としての機能を有していた可能性も示す。最終的に、墓石として転用されたとも考えられる。

土坑墓エリアC（6）

【遺構】I8～J9グリッドに密集する土坑群の内、中央から南東側にあたる部分で、大小の土坑が混在する。北側の一部には継続して礫が配置されている。

SK23105はSK23099に北西側を切られる。長軸1.66m、短軸0.84m、深さ25cmとやや深い楕円形を

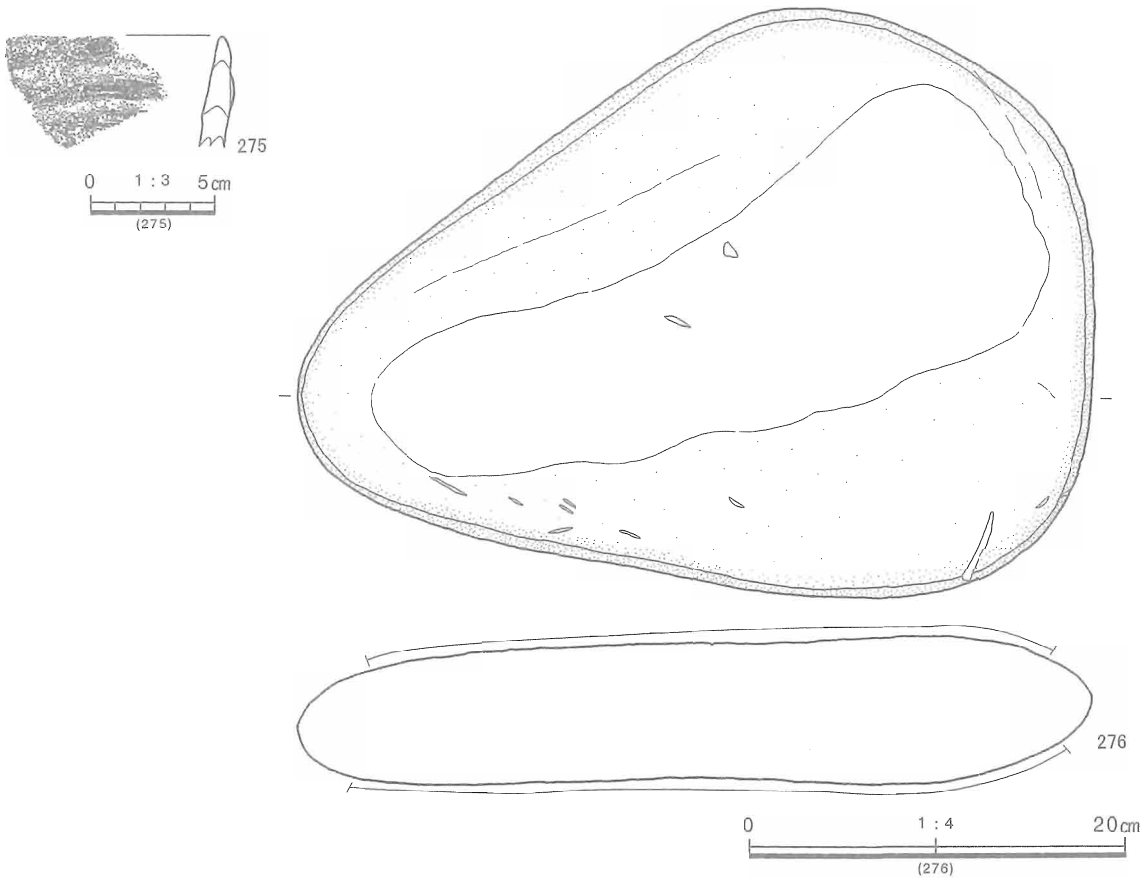
呈する。中央西よりに５個の礫が集中して検出された。この礫は底面から37㎝浮いた位置にある。内面東端には小穴を１基検出した。遺構検出段階には見出せなかったもので、さらに古く遡る可能性がある。ＳＫ19131はＳＫ23105の南側にある。直径0.87～96ｍの円形状を呈し、深さは８㎝である。内面には小穴を２基検出したが、遺構検出段階には見出せなかったもので、さらに古く遡る可能性がある。

ＳＫ19146はＳＫ19330の南側を切る。長軸0.9m、短軸0.54m、深さ30㎝の楕円形を呈する。底面から42㎝浮いた位置に一抱え大程度の扁平な礫が置かれている。これは台石の転用品である。

【遺物:土器】ＳＫ19131からは文様などがわかる土器１点（第110図275）が出土している。（第110図275）は口縁に沿って隆帯を付けた加曽利Ｅ３式土器である。

【遺物：石器】（第110図276）はＳＫ19146から出土した粗粒砂岩の台石で、扁平な楕円礫の平坦部を磨面に利用している。土坑墓底部から約42㎝の高さに平らに位置し、墓石として転用された可能性がある。

第109図　土坑墓エリアＣ（６）平面・断面図



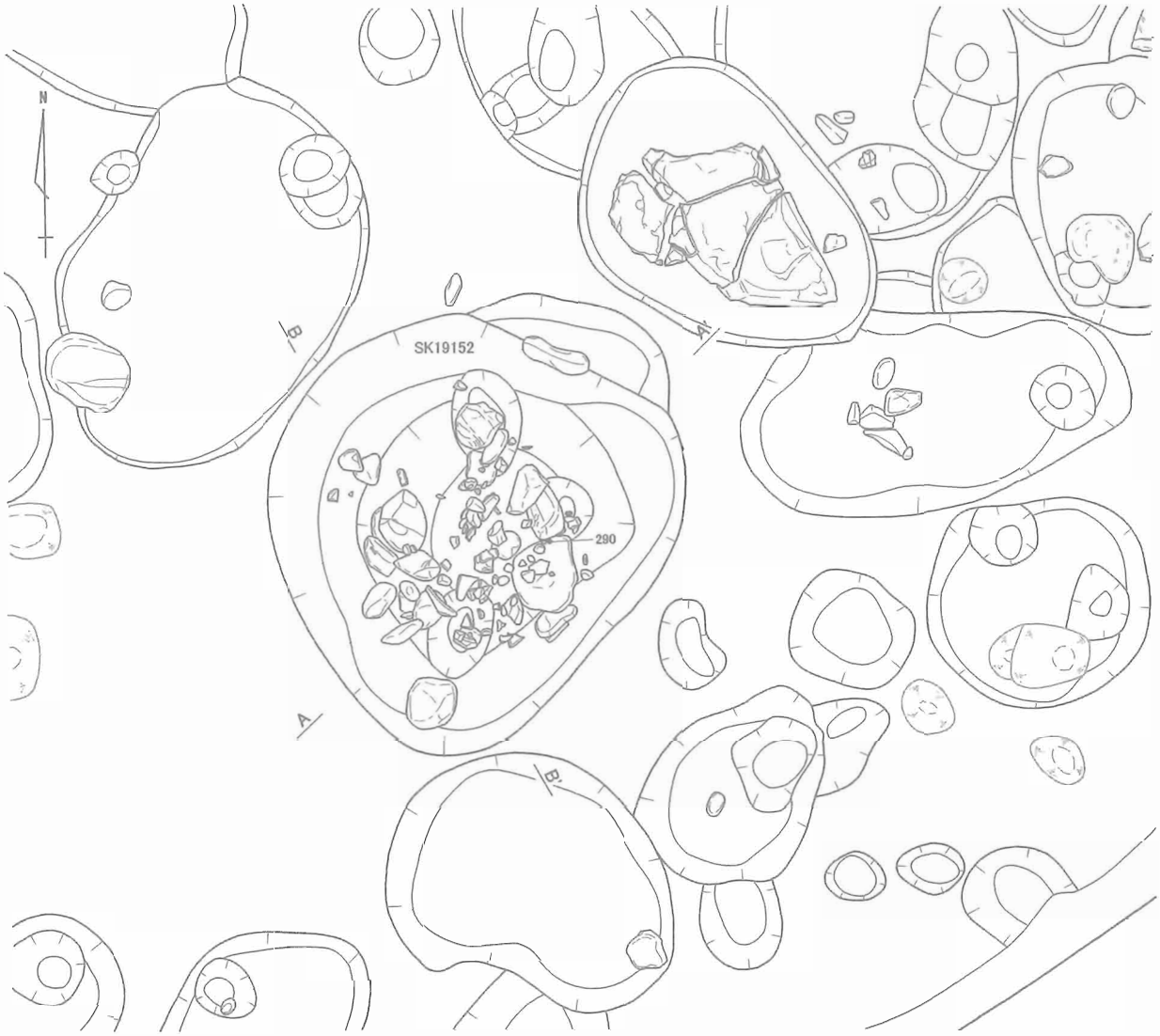
第110図　土坑墓エリアＣ（６）出土遺物

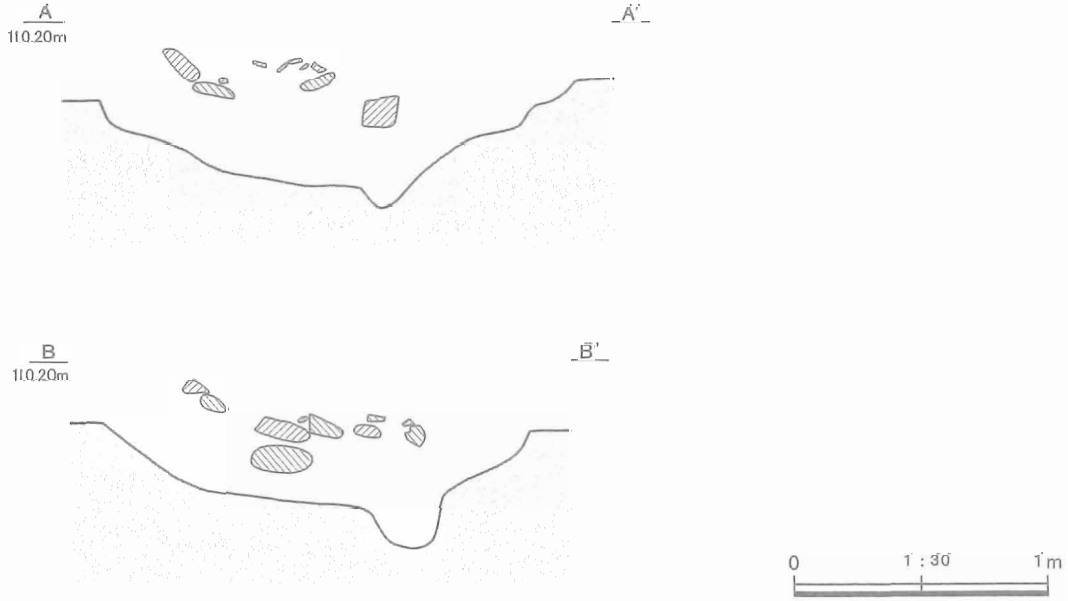
土坑墓エリアＣ（７）

【遺構】Ｉ８～Ｊ９グリッドに密集する土坑群の内、中央から南西側にあたる部分で、大小の土坑が混在する。他の部分に比べれば切り合いはさほど激しくない。

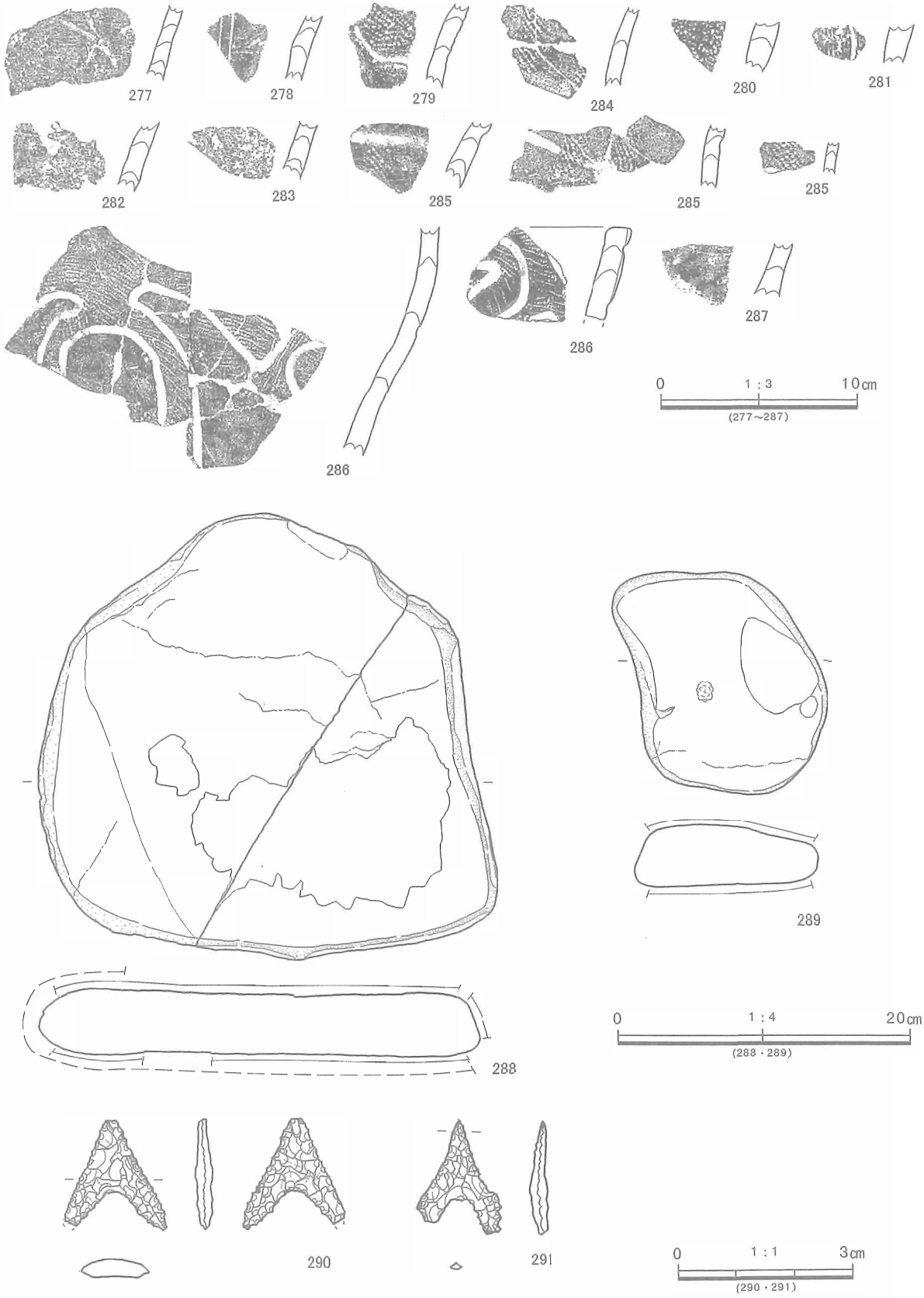
ＳＫ19152は北東側で他の土坑を切るが、ほぼ重複する状態なので切られた土坑の状況は明らかでない。長軸1.86m、短軸1.77mの円形状を呈する。深さは最大で42cmあるが、他の土坑の多くは底面が平らであるのに比べ、これは中央にいくに従って深くなる。内面には、底面から10～37cm浮いた位置に大小の礫が集中して配置されている。これらの内の二つは台石の転用品である。平面的な配置では中央部付近に多く、外縁部では比較的少ない。内面からは３基の小穴が検出された。覆土からは石鏃が出土しているが、混入品であろう。遺構検出段階では把握できず、礫とも重複するのでさらに古い遺構である可能性がある。

【遺物：土器】ＳＫ19152からは文様などがわかる土器11点（第112図277～287）が出土している。（第112図277）は器面が風化しているが、沈線で曲線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第112図278）は半截竹管状工具で縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第112図279）は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第112図280）は風化しているが条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文が付いた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。（第112図285）は半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた称名寺式土器である。（第112図281）は沈線と縄文が付いた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。（第112図283）は風化しているが縄文が付いた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。（第112図286）は胴部に条の太さ約0.1cm、長さ約2.1cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具

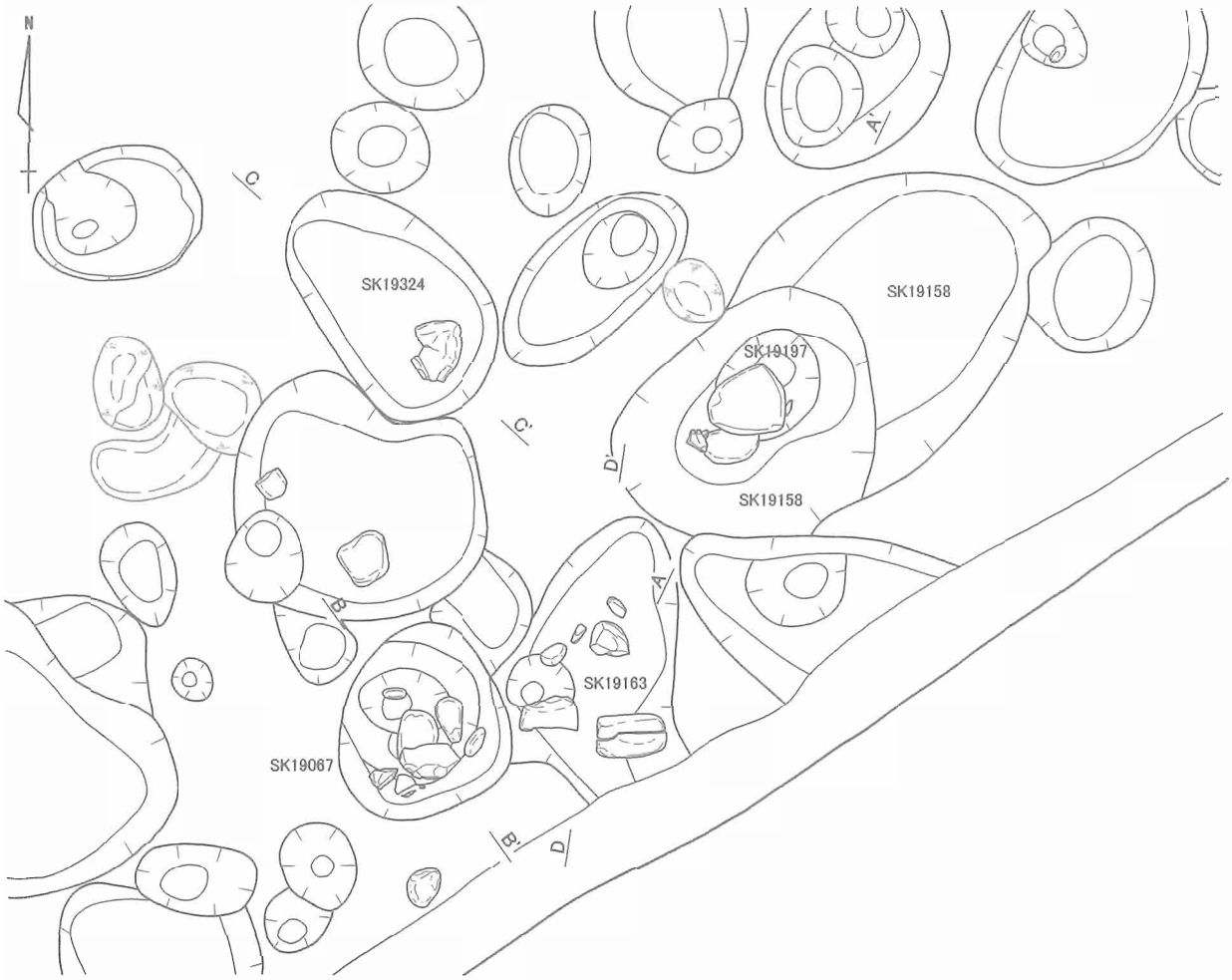


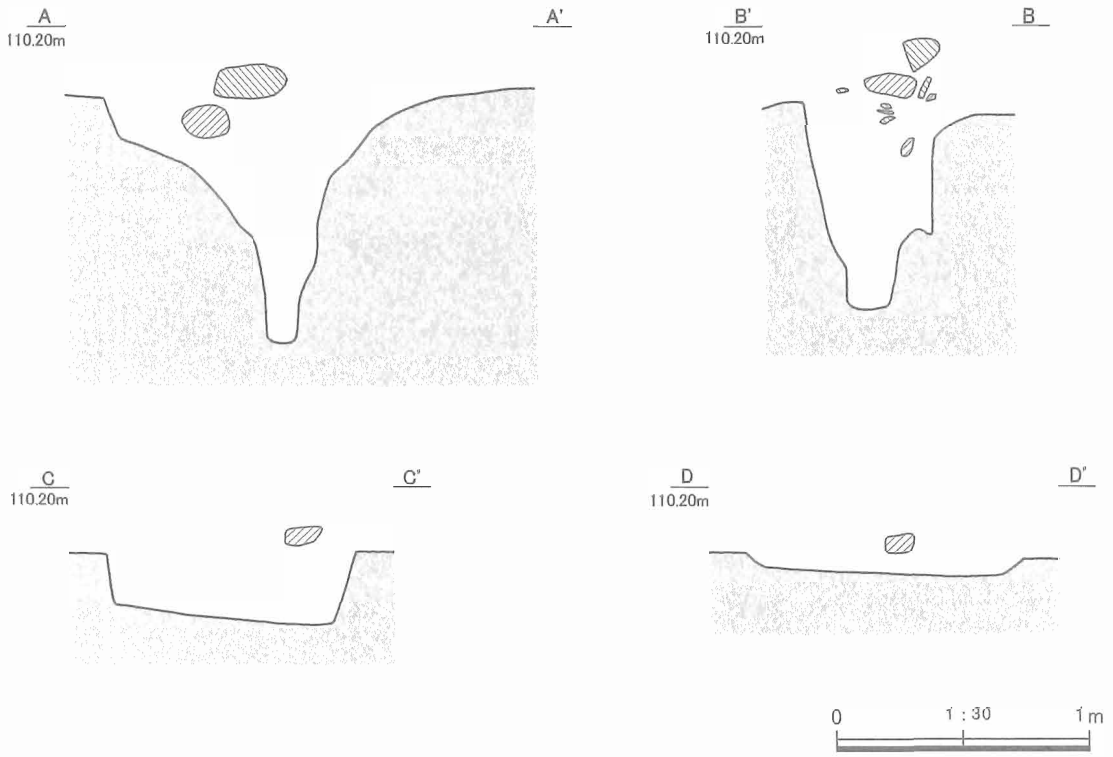


第111図　土坑墓エリアC（７）平面・断面図

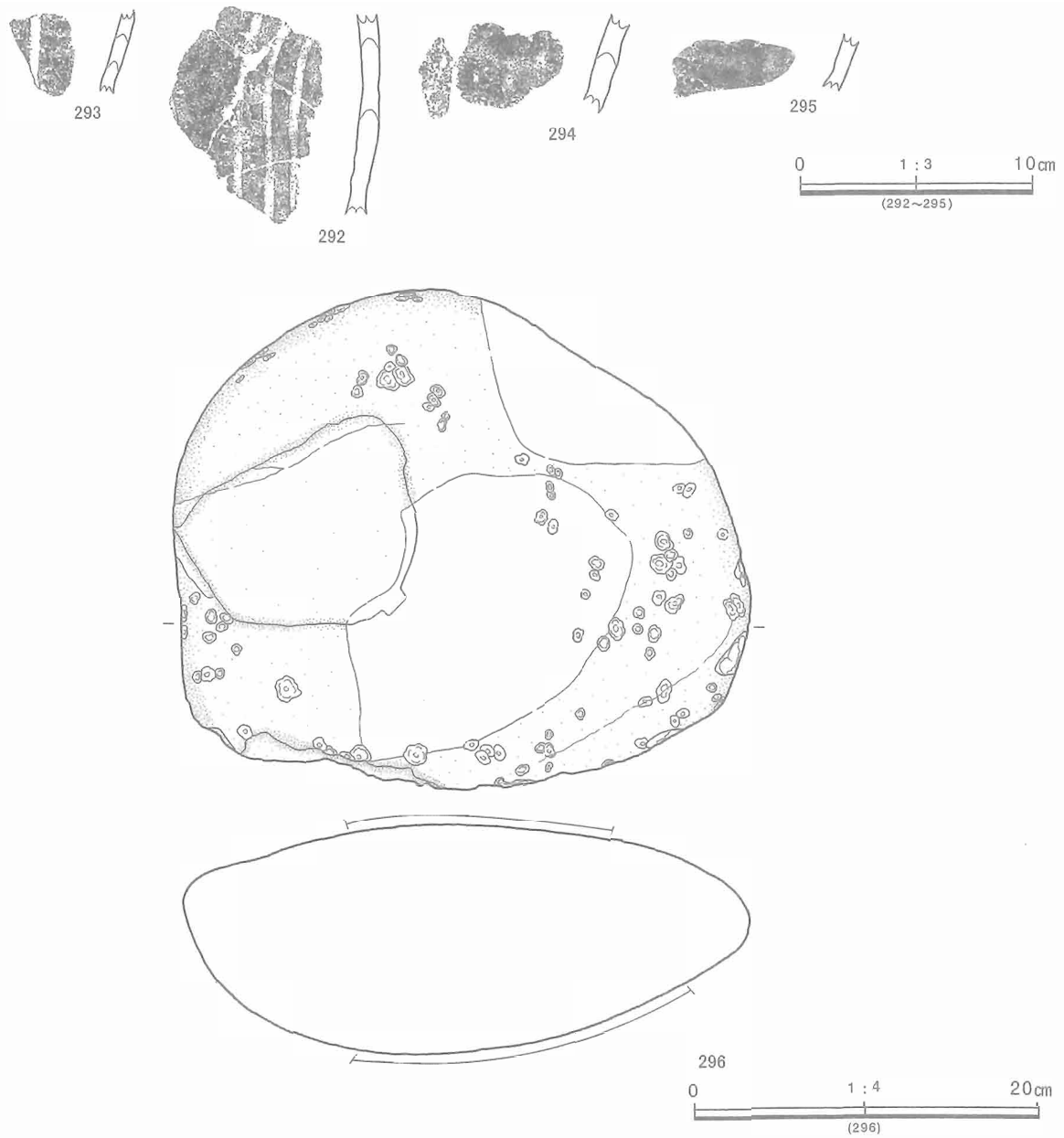


第112図　土坑墓エリアC（7）出土遺物





第113図　土坑墓エリアＣ（８）平面・断面図



第114図　土坑墓エリアＣ（８）出土遺物

で区画した称名寺式土器である。（第112図287）は無文土器で型式不明である。（第112図284）は条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた称名寺式土器である。

【遺物：石器】（第112図288～291）はいずれもＳＫ19152から出土している。

（第112図288・289）は扁平な細粒砂岩を使用した台石で、平坦な表裏面に磨面を有する。いずれも、台石として使用した後に土坑墓の墓石として配されたものと思われる。

（第112図290）は凝灰質頁岩製の石鏃である。側縁・脚部共に縁辺は細かい調整がなされた長脚鏃である。また、覆土からは凹基無茎の石鏃（第112図291）が出土した。諏訪星ヶ台産の黒曜石を使用し、側縁に細かい調整を加えた丁寧な仕上がりになっている。

土坑墓エリアＣ（８）

【遺構】Ｉ８～Ｊ９グリッドに密集する土坑群の内、南側にややはずれて存在する。さらに南側へ広がる一群の一端である可能性があるが、調査区外となり明らかでないので今回は便宜的にエリアＣに含め

た。大小の土坑の切り合いが激しく、礫を配置するものが複数含まれるのが特徴である。

ＳＫ19158は、切り合いからもより古く位置付けられる土坑である。本来は北東側と南西側の別土坑で、切り合いから南西側の土坑がより新しい。短軸1.05m、長軸は総延長で1.98m、深さ20cmの楕円形を呈する。南西側の新土坑には、底面から10～20cm浮いた位置に人頭大の礫を二つ一部が上下となるよう配置されている。この下側のひとつは台石の転用品である。内側の土坑ＳＫ19197は著しく深い。礫と重複する位置にあるのでさらに古い遺構である可能性がある。

ＳＫ19163は西側でＳＫ19067に切られる。短軸0.6mで長軸は調査区外となり定かでない。深さは９cmと浅く、底面から７cm前後浮いた位置に拳大～人頭大の礫を複数個配置する。ＳＫ19067はこれを西側で切る土坑で、長軸0.66～75mの円形状を呈する。内面に別土坑が重複し深さは判然としない。内面の、検出面から５cm程度浮いた位置に人頭大の礫を配置する。更に検出面から20cm程度下位までに拳大の礫が複数個検出されている。

ＳＫ19324は長軸1.02m、短軸0.63mの楕円形を呈し、深さは28cmとやや深い。南東側の底面から30cm浮いた位置に人頭大の礫を配置する。

【遺物：土器】ＳＫ19158からは文様などがわかる土器３点（第114図292～294）が出土している。（第114図292）は胴部に半截竹管状工具で縦位の弧状沈線が付く林ノ峰Ⅱ式土器である。（第114図293）は胴部に半截竹管状工具で縦位の沈線が付く林ノ峰Ⅱ式土器である。（第114図294）は胴部に半截竹管状工具で縦位沈線が付く林ノ峰Ⅱ式土器である。

ＳＫ19067からは土器１点（第114図295）が出土している。（第114図295）は無文土器で時期不明である。

【遺物：石器】ＳＫ19158からは細礫岩を使用した台石（第114図296）が出土した。扁平な円礫の表裏に磨面・敲打痕を有する。側面へと向かう傾斜部の一部にも磨面がある。台石として利用後、墓石として配された可能性がある。

（４）エリアＤの土坑墓

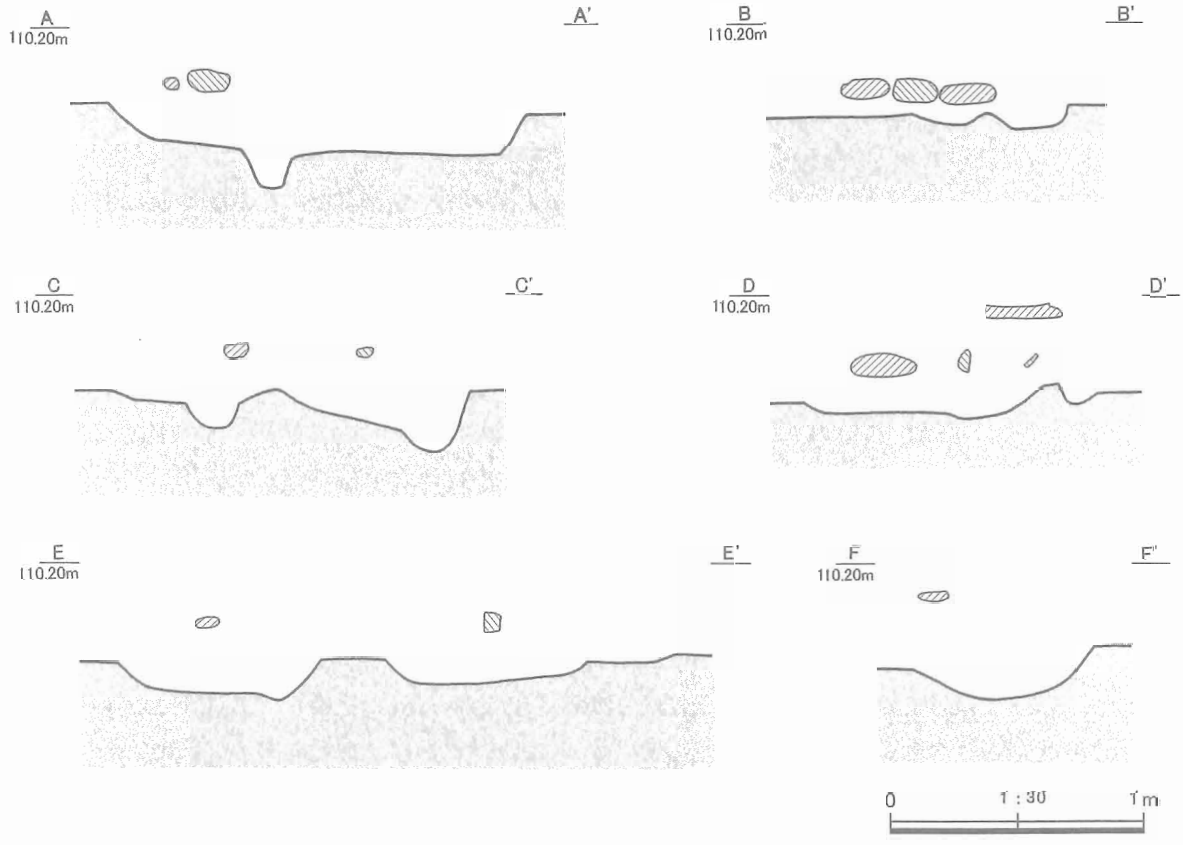
土坑は全体的に小型で、形状は楕円形を呈するものが若干量ある他は、不定円形や円形を呈するものがほとんどであり、群の中心は調査区外に広がるものと思われる。

出土した土器はエリアＣと同じく、加曽利Ｅ３～Ｅ４式が主体で後期初頭の中津式が数点含まれる。中期末～後期前半の時期と考えたい。

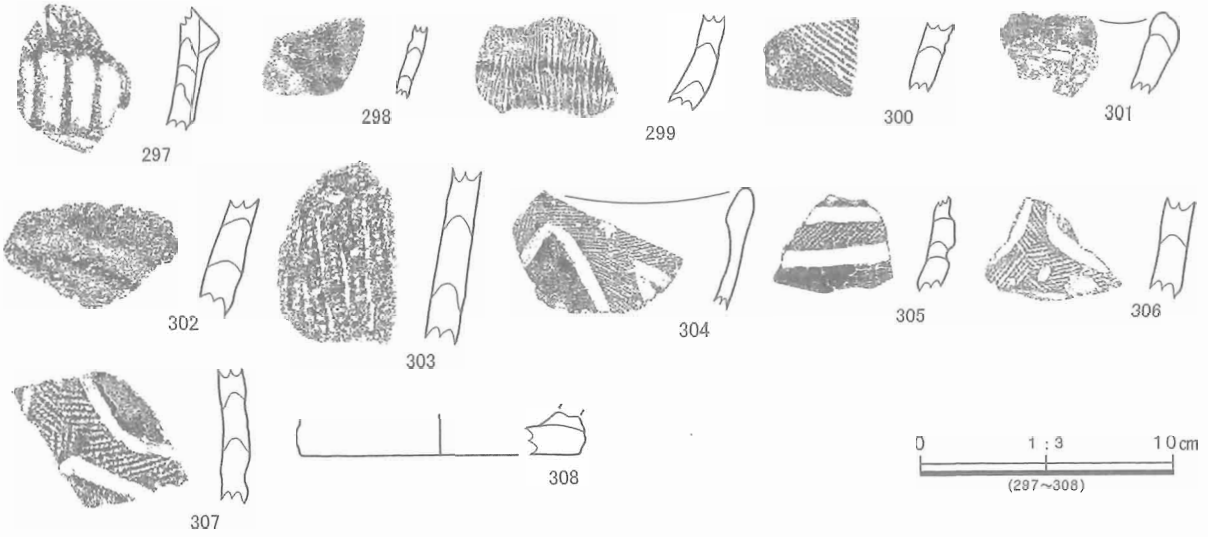
土坑墓エリアＤ

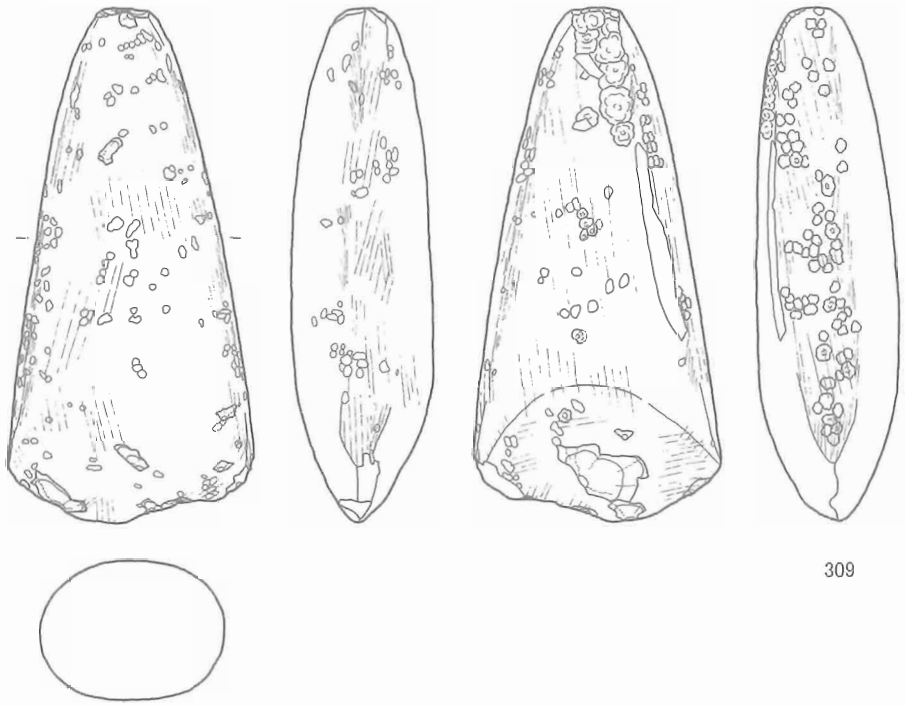
【遺構】Ｊ10～11グリッドに密集する土坑群の内、東側がより密になる。大小の土坑が切り合い、内部に礫を伴うものが多い。

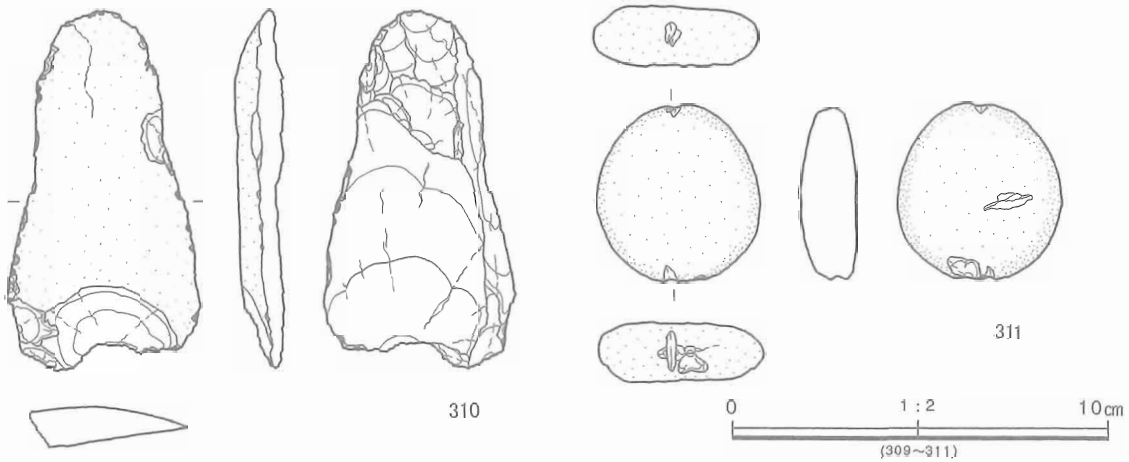
ＳＫ19314は長軸1.65m、短軸0.69m、深さ21cmを測る不定形を呈する。あるいは本来は北側・南側で二つの楕円形状の土坑が切り合っているのかもしれない。内面には３基の小穴が検出されたが、土坑検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。内部には拳大～人頭大の礫が複数個散らばった状態で、底面から25cm浮いた位置に配置されている。比較的南側で密に分布する。この南側で切られる土坑ＳＫ19312は、長軸およそ0.96m、短軸0.75m、深さ15cmを測る円形状を呈する。内面には２基の小穴が検出されたが、土坑検出段階では明らかでなかったので、さらに古い時期に遡る可能性がある。内部には拳大の礫が複数個と打製石斧が散らばった状態で、底面から21cm浮いた位置に配置されている。ＳＫ19312に東側の一部を切られるＳＫ19318は、長軸およそ0.69m、短軸0.51m、深さ６cmと浅い円形状を呈する。東よりの底面から18cm浮いた位置に拳大の礫を複数個配置する。これらは内面中央部で検出された小穴に重複するので、小穴はさらに古く遡る可能性がある。ＳＫ19311は、北側をＳＫ19314・19312に切られ、南側は調査区外で規模、形状は確かでない。



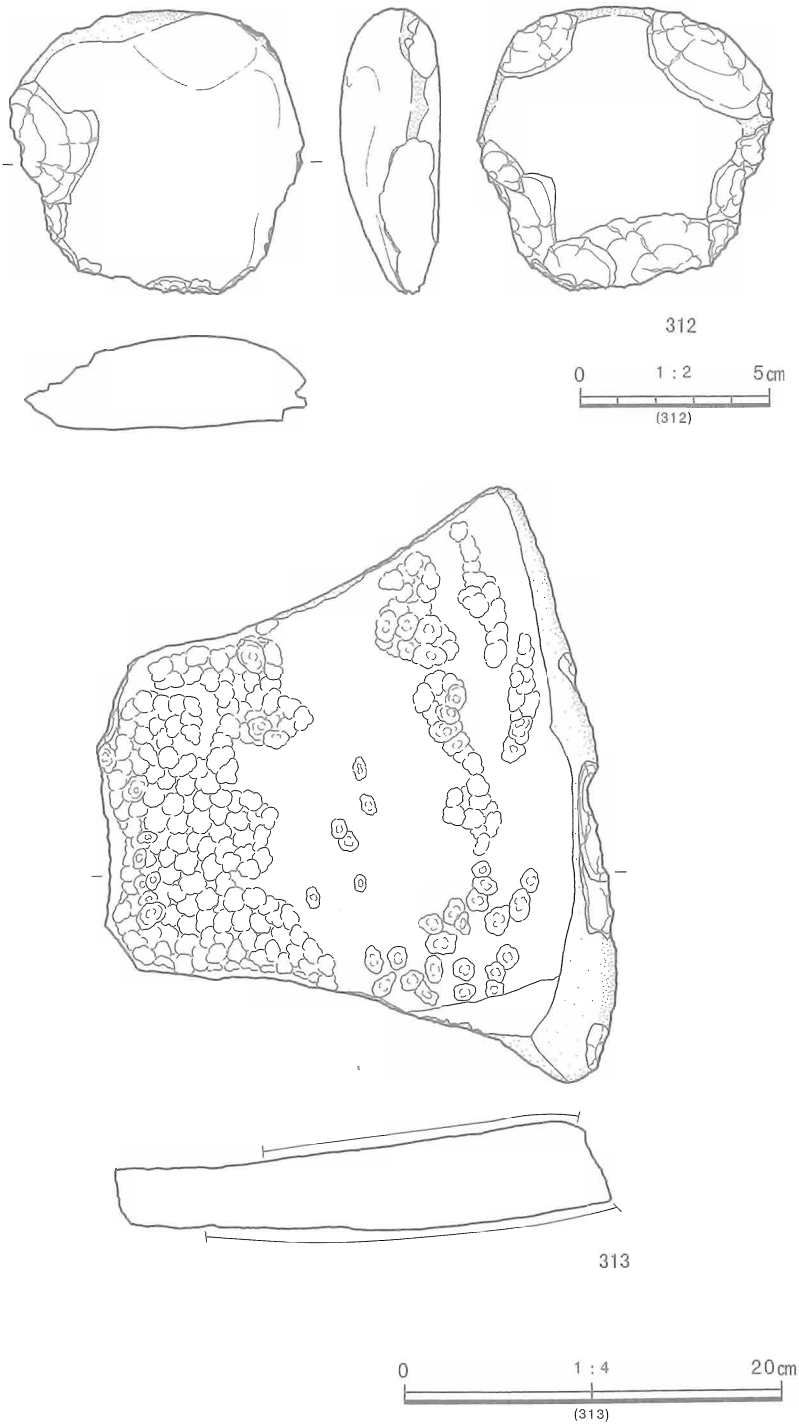
第115図　土坑墓エリアD







第116図　土坑墓エリアD出土遺物



第117図　土坑墓エリアＤ出土遺物

ＳＫ19317は、長軸0.99ｍ、短軸0.46ｍ、深さ21㎝の楕円形を呈する。北よりと南縁の底面から15～25㎝浮いた位置に、人頭大～一抱え大の礫を二つ、水平に据えている。南側のひとつは台石の転用品である。これに北西側で切られるＳＫ21904は、長軸短軸は不確かであるが、深さ９㎝を測る、楕円形を呈するものと思われる。西縁に３個の人頭大～一抱え大の礫を配置する。ＳＫ21907はこれに南端を切られる。直径0.33～36ｍを測る円形状を呈する。

ＳＫ19313はＳＫ19314と19317に切られるため、長軸・短軸ともに定かでない。深さは12㎝あり、中央から西側にかけての底面から21㎝浮いた位置に拳大の礫を複数個配置する。

ＳＫ21666は、このエリアの最も西側に位置する。長軸1.4ｍ、短軸0.74ｍ、深さ17㎝を測る不定形を呈する。南縁から磨製石斧が検出されている。

【遺物：土器】ＳＫ21909からは文様などがわかる土器１点（第116図297）が出土している。（第116図297）は口縁部と胴部の境に太い横位隆帯と細い横位隆帯で区画して、その中に縦位の細い隆帯を貼り付けた北裏Ｃ式土器である。

ＳＫ19318からは文様などがわかる土器１点（第116図298）が出土している。（第116図298）は薄い胴部破片で北屋敷式土器と思われる。

ＳＫ19317からは文様などがわかる土器４点（第116図299・300・303・307）が出土している。（第116図299）は胴部に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第116図300）は胴部に半截竹管状工具で斜位沈線を付け、太い沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第116図303）は胴部にＬのまばらな撚糸文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第102図307）は太い沈線で区画した中に、ＬＲ縄文を付けた中津式土器である。

ＳＫ19311からは文様などがわかる土器１点（第116図301）が出土している。（第116図301）は口縁に

横位の隆帯を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ19314からは文様などがわかる土器４点（第116図302・304～306）が出土している。（第116図302）は太い粘土紐を付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第116図304）は波状口縁に竹管状工具で沈線区画し、その中に縄文を付けた中津式土器である。（第116図305）は太い沈線で区画した中に、条の太さ約0.1cmのＬＲで縄文を付けた中津式土器である。（第116図306）は太い沈線で区画した中に、条の太さ約0.1cmのＬＲで縄文を付けた中津式土器で、表面に木の実の圧痕がある。

ＳＫ19312からは土器１点（第116図308）が出土している。（第116図308）は土器の底部である。

【遺物:石器】ＳＫ21666からは凝灰質礫岩を使用した磨製石斧１点（第116図309）が出土した。形状は乳棒状で、敲打により頭部を平らに成形しているが主面との境の稜は明瞭ではない。左側面には敲打後研磨した痕がよく残っている。刃部には使用による欠けが見られるがその部分もかなり磨耗しているため、欠けた後もそのまま使用されていたのであろう。

ＳＫ19312からは砂質粘板岩製の打製石斧（第116図310）が出土した。撥形を呈し、頭部と側縁に少し調整を加えただけで原礫面を多く残すものである。

ＳＫ19242からは（第116図311・第117図312）が出土した。（311）は細粒砂岩製で端部２か所に擦切による縄掛け部をもつ切目石錘である。一方は原礫に直接擦切を施し、他方は敲打後に擦切を施している。（312）は中粒砂岩の礫器としたが、原礫面の様子から磨石の転用品と考えられる。ＳＫ19242はエリアＤの南西隅に位置する。調査区外にかかる等で規模は明らかでない。位置は付図を参照されたい。

ＳＫ19317からは細粒砂岩製の台石（第117図313）が出土した。30cm四方ほどの板状礫を使用し、台形状の平面には磨面・敲打痕を残す。台石として使用後、墓石として配された可能性がある。

第２表　土坑墓一覧表

エリア	遺構番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm) 検出面から	深さ(cm) 石から	時期
A (1)	ＳＫ70625	長楕円形	－	100	21		中期末
	ＳＫ20837	長楕円形	(195)	84	12	12	
A (2)	ＳＫ70624	円形	69	66	43		中期末
	ＳＫ70523	楕円形	(126)	75	9		
	ＳＫ70622	長楕円形	171	79	18		中期末
A (3)	ＳＫ70647	不明	－	－	7		
	ＳＫ70648	不明	－	93	9		
	ＳＫ70621	長楕円形	159	79	19		中期末
A (4)	ＳＫ20716	長楕円形	189	82	6		
	ＳＫ20722	長楕円形	195	81	6		
	ＳＫ20725	長楕円形	201	81	6～34		
A (5)	ＳＫ22954	楕円形	111	63	7		
	ＳＫ22955	円形	(100)	(82)	7	18	中期末
	ＳＫ22956	長楕円形	－	84	4	16	
A (6)	ＳＫ22951	長楕円形	(180)	93	6		
	ＳＫ23054	楕円形	162	90	28	18	
	ＳＫ22952	長楕円形	186	87	6		
	ＳＫ22950	楕円形	(204)	105	6		
	ＳＫ23227	楕円形	171	111	4		
A (7)	ＳＫ23223	楕円形	114	84	9		
	ＳＫ23226	不明	－	－	13		
	ＳＫ23225	楕円形	(174)	96	7		
	ＳＫ23224	長楕円形	180	72	4～7		
B (1)	ＳＫ23186	楕円形	87	63	37		
	ＳＫ23187	楕円形	153	102	7		
	ＳＫ23190	楕円形	(165)	(120)	7		
	ＳＫ23192	楕円形	(160)	(130)	12		
	ＳＫ23185	楕円形	－	141	7		
B (2)	ＳＫ23184	楕円形	(180)	138	9	21	
	ＳＫ23175	楕円形	87	51	7	21	
	ＳＫ23176	楕円形	165	105	9	22	中期末
	ＳＫ23174	楕円形	87	60	12	24	
	ＳＫ23173	楕円形	159	93	12		
B (3)	ＳＫ23193	楕円形	213	117	18		
	ＳＫ23172	楕円形	186	126	21		
	ＳＫ23171	楕円形	(87)	75	13		
	ＳＫ23170	楕円形	(140)	90	9		
B (4)	ＳＫ23122	円形状	108	105	16	34	後期初頭～後期前半
	ＳＫ23120	円形状	141	(126)	16	37	中期末
	ＳＫ23125	楕円形	(165)	108	7	24	
	ＳＫ23123	楕円形	180	127.5	9	27	中期末
B (5)	ＳＫ23157	楕円形	162	90	15		中期末
	ＳＫ23153	楕円形	108	－	7		
	ＳＫ23121	楕円形	93	48	21	39	
	ＳＫ23290	楕円形	96	(75)	24	42	中期末
	ＳＫ23154	楕円形	(120)	66	13	31	
B (6)	ＳＫ23156	楕円形	132	(90)	10		
	ＳＫ23155	円形状	(78)	63	13	33	中期末
	ＳＫ23158	楕円形	147	120	12		中期前半～中期中葉
	ＳＫ23160	楕円形	(160)	111	15	21	

エリア	遺構番号	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm) 検出面から	深さ(cm) 石から	時期
B (6)	ＳＫ23159	楕円形	162	108	9	25	
	ＳＫ23166	楕円形	99	52	15		
C (1)	ＳＫ23083	楕円形	120	78	21		中期末
	ＳＫ23082	長楕円形	(216)	108	19		
	ＳＫ23078	楕円形	189	120	9～12	19	中期末
	ＳＫ23081	円形状	135	117	7		
	ＳＫ23080	楕円形	59	44	15		
	ＳＫ23079	楕円形	141	87	8		
	ＳＫ23077	楕円形	156	82	6		後期初頭～後期前半
C (2)	ＳＫ23094	楕円形	144	91	9	6	中期末
	ＳＫ23087	楕円形	189	(120)	18		中期末
	ＳＫ23089	楕円形	189	132	18		
	ＳＫ23093	円形状	(105)	87	10		中期末
C (3)	ＳＫ23084	楕円形	169	114	9	15	
	ＳＫ23085	楕円形	141	86	11		
	ＳＫ23096	楕円形	(114)	81	21		中期末
	ＳＫ23099	円形状	141	99	19	28.5	
C (4)	ＳＫ23102	円形状	96	87	9	25	後期初頭～後期前半
	ＳＫ23109	楕円形	111	72	9	18	中期末
	ＳＫ23108	楕円形	102	(60)	6		
	ＳＫ23106	円形状	117	90	22	42	中期末
	ＳＫ23100	不定円形	142.5	(108)	9	32	
	ＳＫ23110	不定円形	(69)	66	15	36	中期末
C (5)	ＳＫ23107	楕円形	87	(45)	15	36	中期末
	ＳＫ19331	円形状	66	45	10	33	
	ＳＫ19186	円形状	72	60	15	15	後期初頭～後期前半
	ＳＫ19330	円形状	100	72	18	37	
	ＳＫ19231	楕円形	(102)	55	16	34	
	ＳＫ23210	円形状	129	108	9		中期末
	ＳＫ19125	楕円形	150	87	10	40	中期末
C (6)	ＳＫ23105	楕円形	166.5	84	25	37	
	ＳＫ19146	楕円形	90	54	30	42	
	ＳＫ19131	円形状	96	87	8		中期末
C (7)	ＳＫ19152	円形状	186	177	42	10～37	後期初頭～後期前半
	ＳＫ19148	円形状	93	69	19		
	ＳＫ19151	円形状	129	90	15		
C (8)	ＳＫ19158	楕円形	198	105	(36)	10～20	後期初頭～後期前半
	ＳＫ19067	円形状	75	66	80		
	ＳＫ19324	楕円形	102	63	28.5	30	
	ＳＫ19163	不明	－	60	9	7	
D	ＳＫ19314	不定形	165	69	21	25	後期初頭～後期前半
	ＳＫ19318	円形状	(69)	51	6	18	中期前半～中期中葉
	ＳＫ19312	円形状	(96)	75	15	21	
	ＳＫ19317	楕円形	99	46	21	15～25	後期初頭～後期前半
	ＳＫ19313	不明	－	－	12	21	
	ＳＫ19311	不明	153	－	5		中期末
	ＳＫ21907	円形状	(36)	33	9		
	ＳＫ21904	楕円形	－	－	9		
	ＳＫ21666	不定形	140	74	17		
	ＳＫ21909	小楕円形	45	36	8		中期前半～中期中葉

3　土坑と出土遺物

土坑は調査区内の各所に散在して検出されている。ここでは、遺物がまとまって出土している土坑、あるいは遺物の出土状況に何らかの意図を感じるものを図化し、詳述することとした。一方で図化できる遺物が数点含まれる土坑も多数検出されている。それらについては混入の可否を判別しがたいので、遺物の記載のみとした。遺構については煩雑ではあるが、付図で位置等をご確認いただきたい。

また、ＳＫ60918については埋甕の項を起こして記述するべきかもしれないが、単独で検出された唯一の例なので、便宜的に土坑に含めることとした。

（１）主要な土坑と出土遺物

ＳＫ60918（第118図）

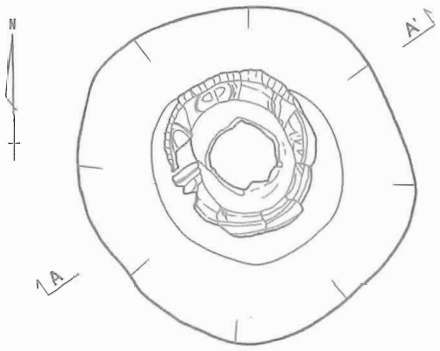
【遺構】M20グリッドで検出された内部に埋甕をもつ土坑である。周囲に住居を構成する柱穴が見当たらなかったので、屋外に単独で設けられたものと考えた。規模は直径0.45m、深さ16cmを測る円形を呈する。検出段階ですでに埋甕の一部が露出していたので、本来はさらに深いものであったろう。内面には底部を打ち欠いた深鉢が逆位で埋納されていた。

【遺物】（第118図314）は口唇部直下に沿って半截竹管状工具の横位連続爪形文を付け、下に同一工具で横位沈線を施し、４か所に縦位沈線を付けて区画する。口縁部と胴部の境に段を付けて一部に半截竹管状工具で刺突を施している。胴部上半は隆帯で半円形や楕円形に４区画して、区画内に半截竹管状工具の縦位沈線を付け、小三角の刻目とそこから弧状の細い沈線を施している。中原段階の五領ヶ台新式併行の土器である。

ＳＫ70601（第119図～第122図）

【遺構】Ｆ３グリッドで検出された礫と土器を含む土坑である。規模は直径0.8～９mの円形状を呈する。調査においては掘り込み面が不明確だったので底面まで落として構造を考えた。礫は人頭大程度の扁平なものを主体とし、底面の一部に敷いた後に周囲の掘方壁面に持掛けるように配置して、内面に空間を作り出しているようである。この内面からは多量の土器片が出土したが、中には底面の礫に水平に接するものや、底を水平に置く底部が見えるので、何らかの意図を持って据え置いた可能性もあろう。

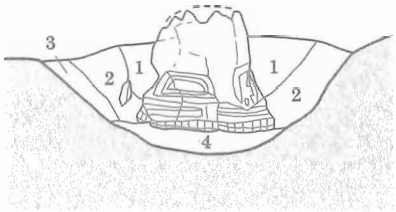
【遺物】ＳＫ70601からは文様などがわかる土器13点（第120図315～327）が出土している。（第120図315）は条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文が付く北屋敷式と思われる土器である。（第120図316）は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文が付く北屋敷式と思われる土器である。（第120図317）は条の太さ約0.4cmのＲＬ多条縄文を付け縦位の沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第120図318）は条の太さ約0.4cmの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第120図319）は条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第120図320・321）は無文である。（第120図322）は斜位沈線が付いた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第120図323）は底部に網代痕がある加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第120図324）は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第120図325）は口縁部から条の太さ約0.4cm、長さ約2.5cmのＲＬ多条縄文原体の末端を結束し縦位に付け、指頭状の沈線で縦位に区画した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。（第120図326・第121図326）は波状口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.3cm、長さ約1.7cmのＲＬ縄文を付け指頭状で縦位に磨り消し、半截竹管状工具の沈線区画した加曽利Ｅ４式土器である。（第120図327・第121図327）は波状口縁部に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.3cm、長さ約1.7cmのＲＬ縄文を付け指頭状で縦位に磨り消し、半截竹管状工具の沈線区画した加曽利Ｅ４式土器である。



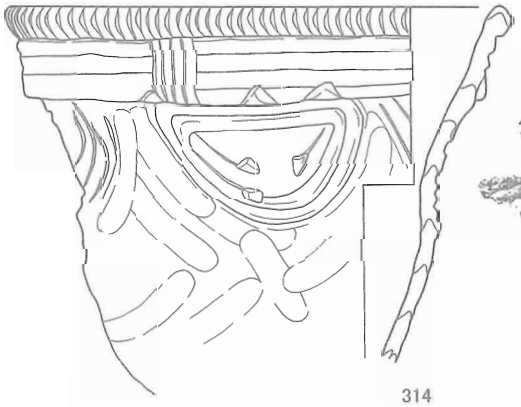
A
111.00m

A'

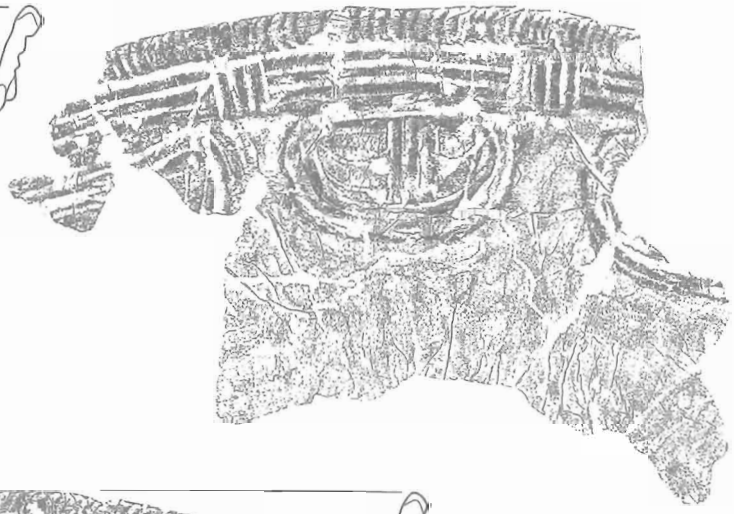
1 暗褐色シルト(10YR3/3)
2 暗褐色シルト(10YR3/4)
3 褐色粘土(10YR4/6)
4 褐色シルト(10YR4/4)

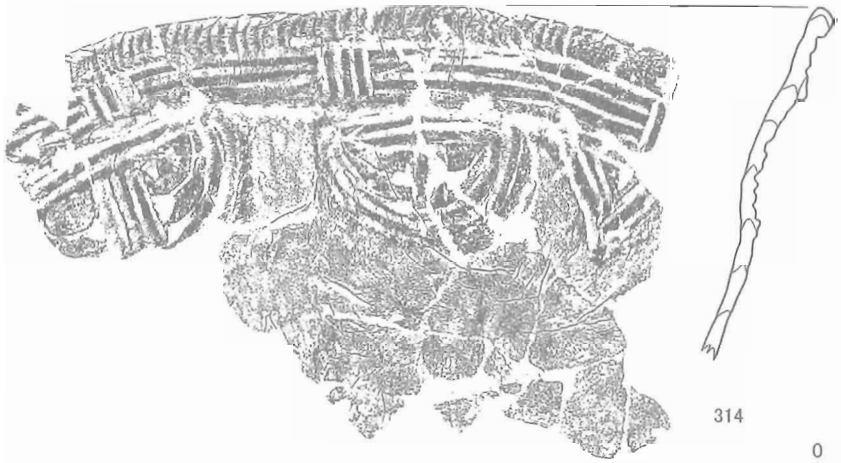


0　1：10　30cm



314

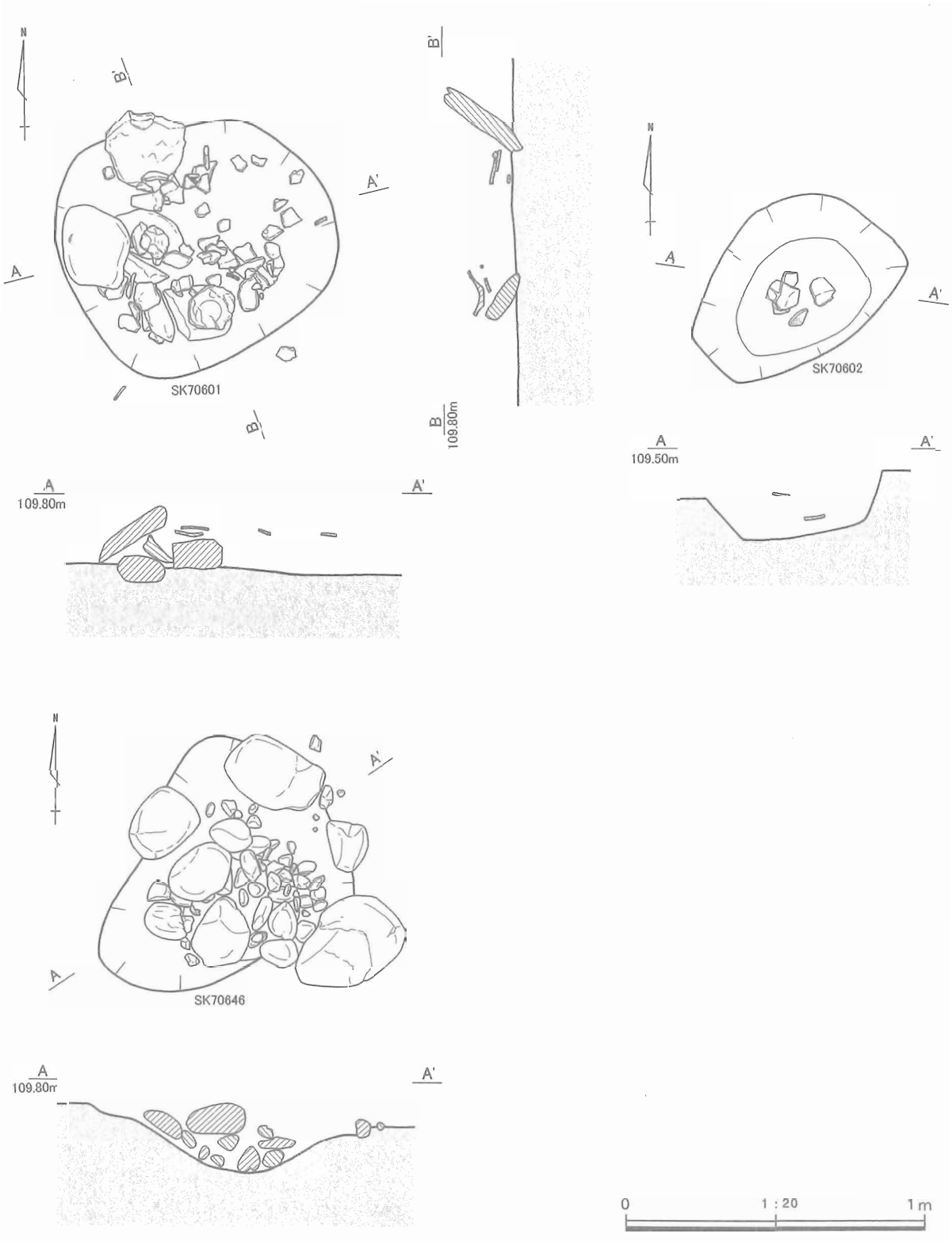




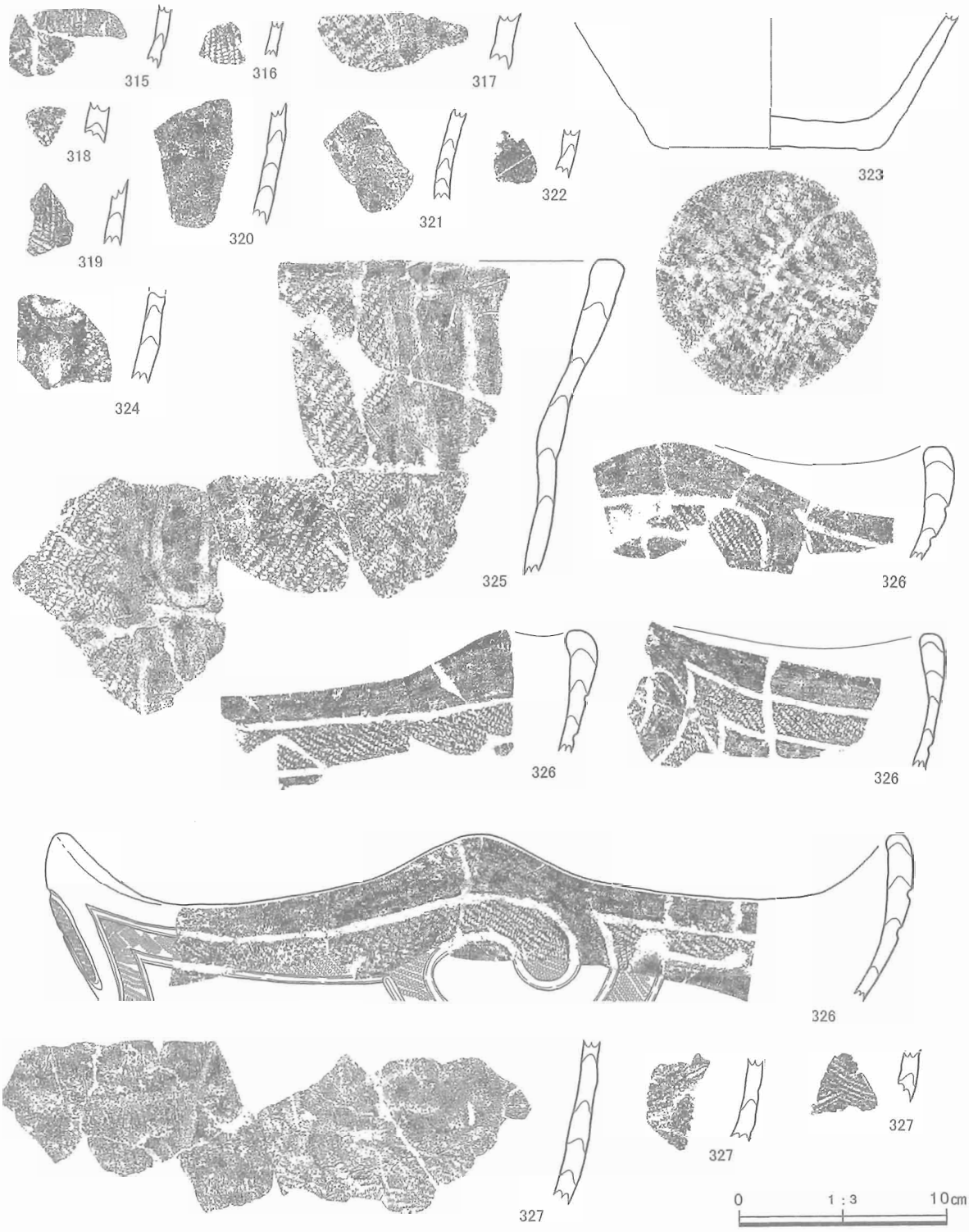
314

0　1：3　10cm

第118図　ＳＫ60918平面・断面図、出土遺物



第119図　ＳＫ70601・70646・70602平面・断面図

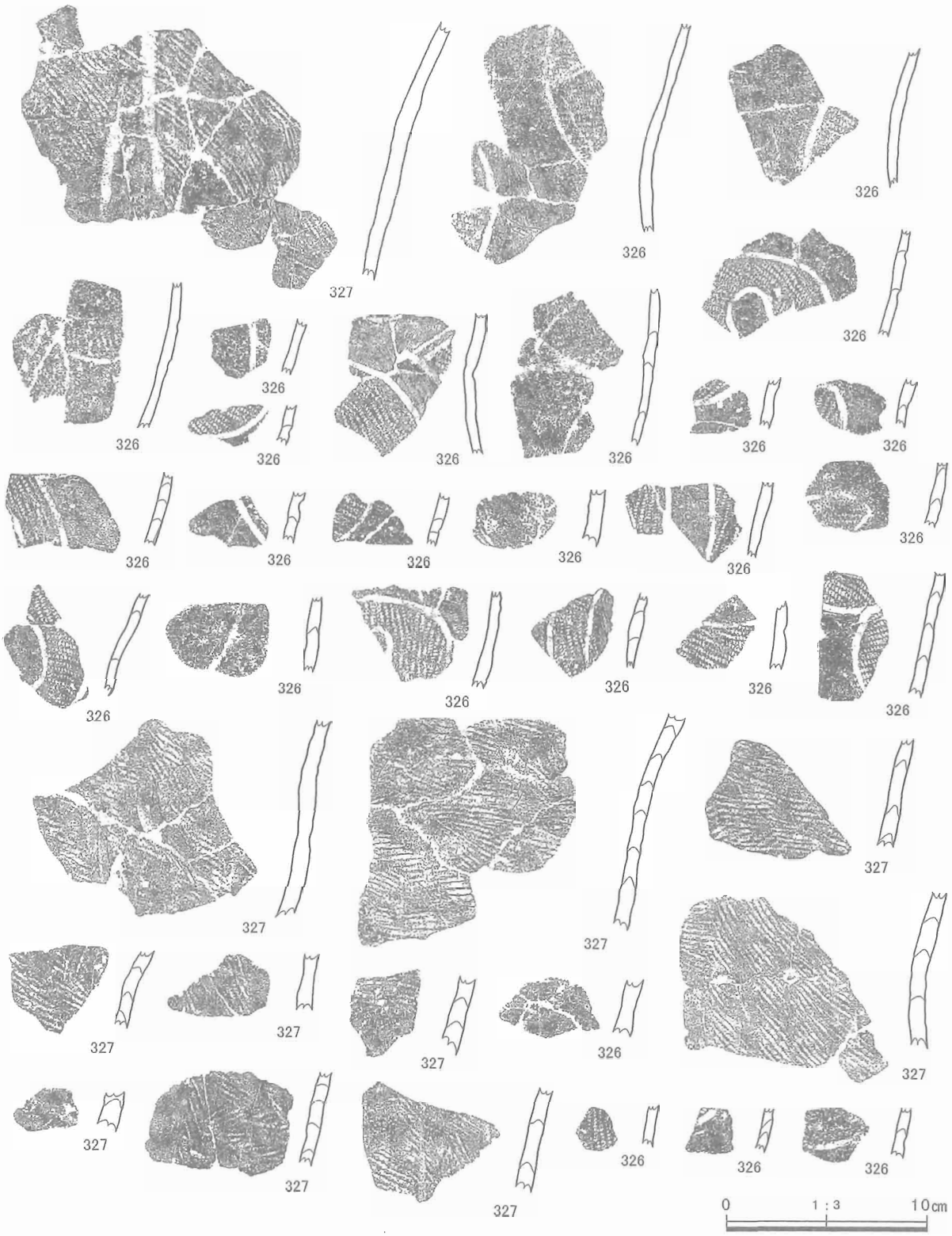


第120図　ＳＫ70601出土遺物１

ＳＫ70602（第119図・第122図）

【遺構】Ｄ・Ｅ２グリッドで検出された。長軸0.7m、短軸0.52m、深さ25cmの楕円形状を呈する土坑である。中央部から集中して土器片が出土している

【遺物】ＳＫ70602からは文様などがわかる土器２点（第122図331・332）が出土している。（第122図331）は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を自身で結節を作って、撚りを止めた原体を縦位に施文し、指頭状の沈

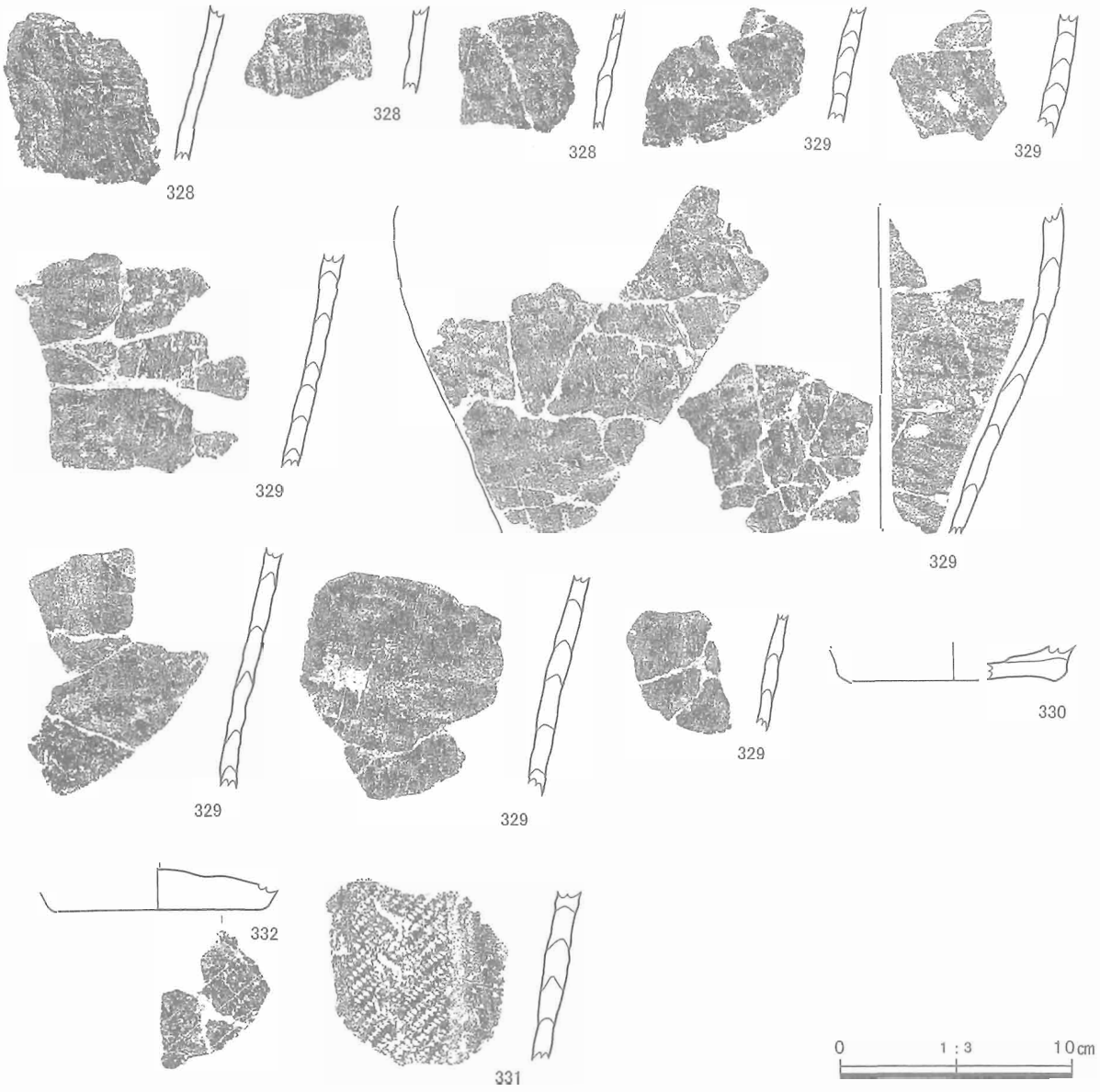


第121図　ＳＫ70601出土遺物２

線で縦位に区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第122図332)は土器の底部で葉脈痕が付いた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ70646（第119図）

【遺構】Ｃ５グリッドで検出された。長軸１ｍ、短軸0.6ｍ、深さ22㎝の三角形状を呈する。内面には拳



第122図　ＳＫ70601・70602出土遺物

大～一抱え大の礫が充満していた。小ぶりな礫は内面中央部に比較的多く、その上に大ぶりな礫を配置する傾向がある。

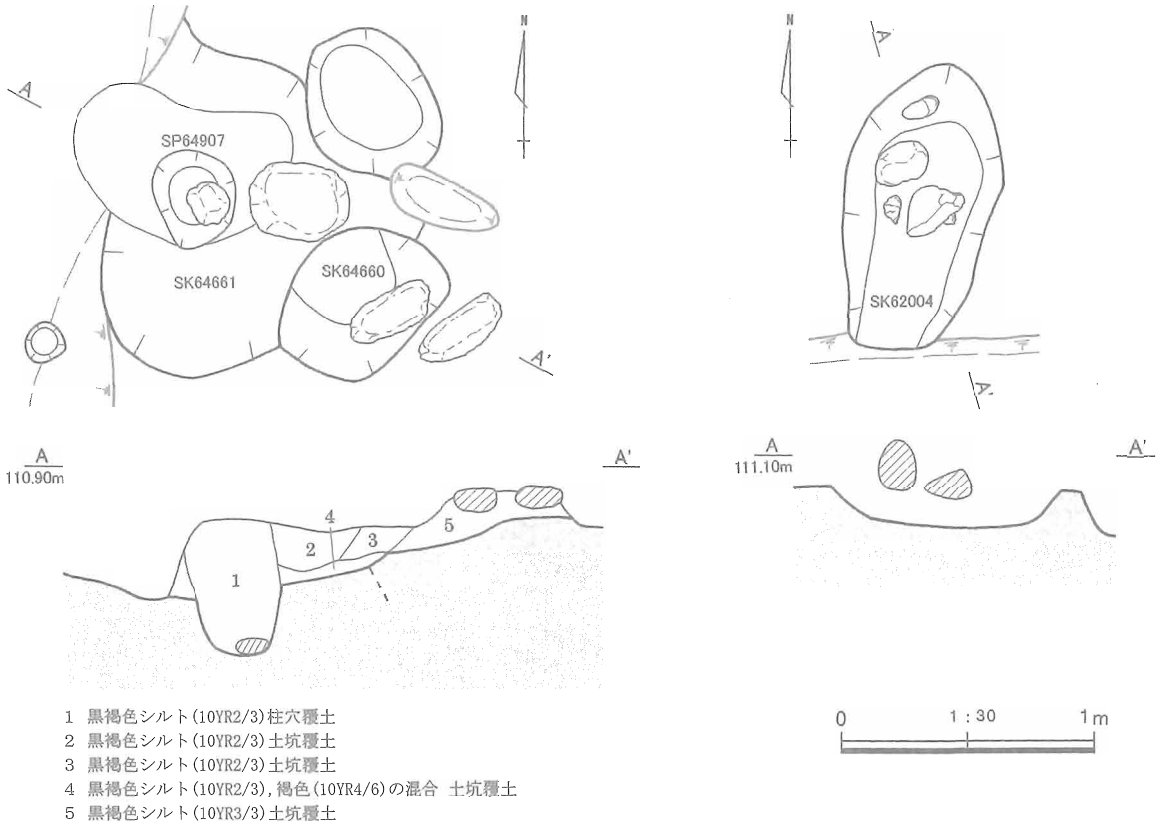
【遺物】出土していない。

ＳＫ64907・64660・64661（第123図）

【遺構】Ｋ20グリッドで検出された。３基の小型の土坑が切り合っている。東側のＳＫ64660が最も古く、64661・64907の順で新しくなる。これらの土坑はいずれにも礫が埋め込まれている。あるいは先に説明した土坑墓のひとつなのかもしれない。

ＳＫ64660は平面では長軸0.45m、短軸0.35m、深さ18cm程度の楕円形状を呈する。平面では捉え切れなかったために検出面を下げて調査したため小型土坑に見えるが、ほぼ同じ大きさの掌大の礫が二つ並んで検出され、その下位にある覆土も途切れがないことから本来はさらに南東側へ広がる土坑であったことが分かる。

ＳＫ64661は直径0.8m、深さ20cm程の円形状を呈する。内面に人頭大の礫を水平に置いている。



1 黒褐色シルト(10YR2/3)柱穴覆土
2 黒褐色シルト(10YR2/3)土坑覆土
3 黒褐色シルト(10YR2/3)土坑覆土
4 黒褐色シルト(10YR2/3),褐色(10YR4/6)の混合 土坑覆土
5 黒褐色シルト(10YR3/3)土坑覆土

第123図　ＳＫ64907・64660・64661・62004平面・断面図

ＳＫ64907は64661の中央部に切りこむ小土坑である。直径0.22～25m、深さ35cmの円形状を呈する。中央南東よりに拳大の礫を埋め込んでいる。

【遺物】出土していない。

ＳＫ62004（第123図）

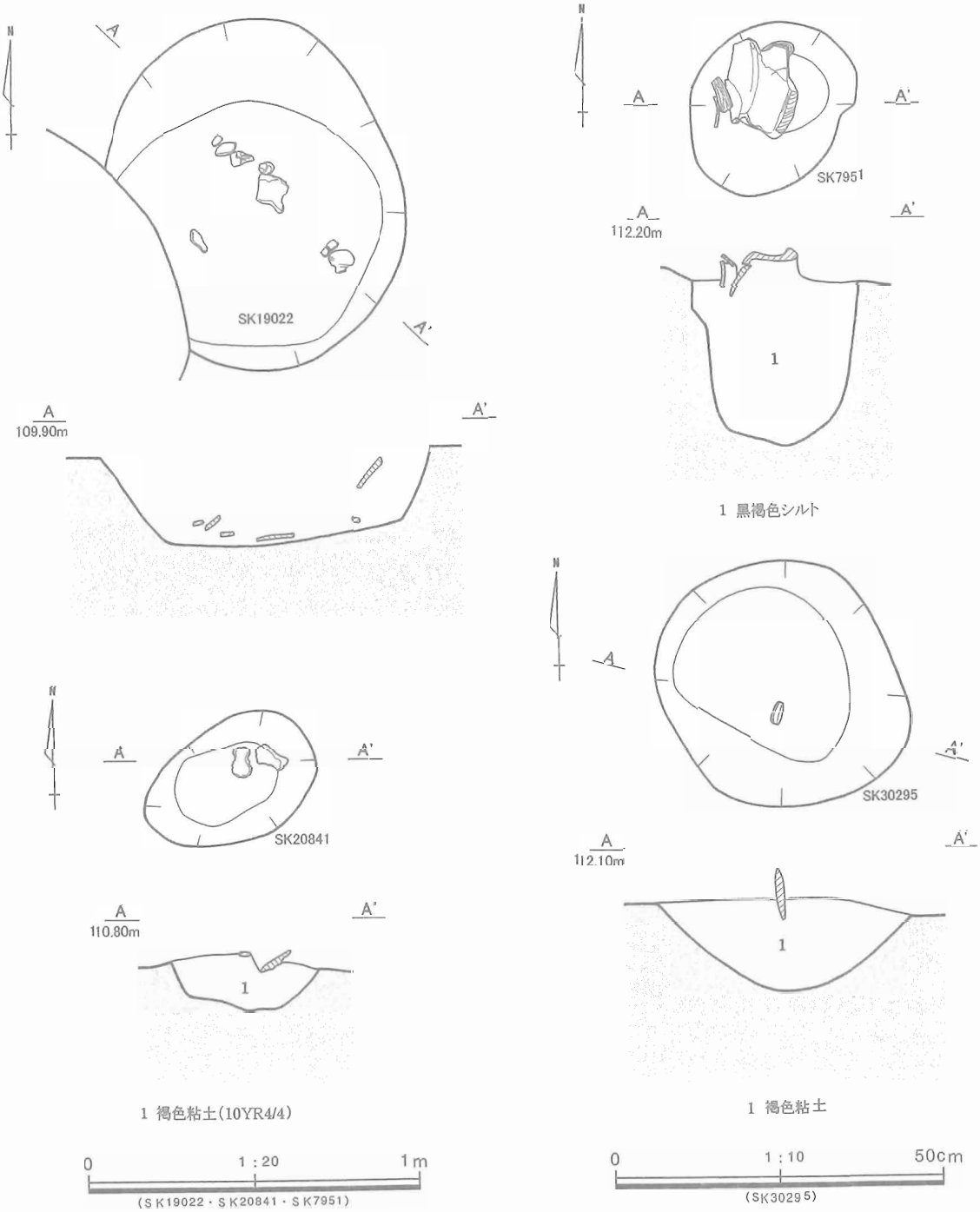
【遺構】M21グリッドで検出された。長軸0.75m以上、短軸0.4m、深さ11cmを測る。この土坑にも北よりに拳大～一握り大の礫が複数個配置されている。これも、あるいは先に説明した土坑墓のひとつなのかもしれない。

【遺物】出土していない。

ＳＫ19022（第124図）

【遺構】Ｈ７グリッドで検出された。長軸1.05m、短軸0.9m程度、深さ30cmを測る円形状を呈する。内部の、底面あるいはやや浮いた位置から土器片が比較的密に出土している。

【遺物:土器】ＳＫ19022からは文様などがわかる土器12点（第125図333～344）が出土している。（第125図333）は半截竹管状工具で渦巻き沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第125図334）は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、横位の沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第125図335）は条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付け、縦位の沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第125図336）は半截竹管状工具で波状沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第125図337）は縄文を施し縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第125図338）は条の太さ約0.3cmＬＲの多条縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第125図339）は半截竹管状工具の爪形を横位に付けて区画した中に、条の太さ約0.2cmのＲＬ多条縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第125図340）は波状



第124図　ＳＫ19022・20841・7951・30295平面・断面図

口縁を区画した中に、条の太さ約0.2cmのＲＬ多条縄文を付けた称名寺式土器である。(第125図341) は沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第125図342)は風化しているが胴部付近に半截竹管状工具でℓ状に沈線を入れ、条の太さ約0.1cmのＬＲ縄文を付けた中津式土器である。(第125図343) は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた後期前半と思われる土器である。(第125図344) は口唇部に条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線を施した後期の在地系と思われる土器である。

ＳＫ7951（第124図・第125図）

【遺構】Ｏ31グリッドで検出された。直径0.45～56mの円形を呈し、50cmと深い。検出面付近の高さか

らは1個体の深鉢から割り取られた大破片が出土している。土坑底面からはかなり浮いた位置で、あたかも内容物に蓋を掛けるようにほぼ中央に置かれている。

【遺物】文様などがわかる土器1点（第125図345）が出土している。（第125図345）は口縁部から半截竹管状工具による密接蒲鉾状平行沈線文を斜位に付け、口縁部と胴部の境に2本の隆帯波状文を貼り付ける。胴部は密接蒲鉾状平行沈線文を縦位に付け、粘土紐で渦巻きと縦波状の隆線を施した曽利Ⅱ式土器で、口径が約52cmである。

ＳＫ20841（第124図・第125図）

【遺構】H11グリッドで検出された。長軸0.55m、短軸0.36m、深さ18cmを測る楕円形を呈する。土坑内からは2本の打製石斧が近接して出土している。何らかの要件で意図的に埋め込まれたように見うけられる。

【遺物】中粒砂岩製の打製石斧が2点出土している（第125図347・348）。（第125図347）は分銅型を呈する。表面に原礫面を、裏面には剥片を割り取った際の剥離面を広く残す。調整は側縁を中心に行われ、中央部分の両側縁には対になる大きな剥離が施される。先端部分にはやや斜めに使用痕である細かな擦痕が複数条認められる。（第125図348）は撥型を呈し、表面の先端部に原礫面を、裏面の中央から先端部に剥片を割り取った際の剥離面を広く残す。基部先端とくびれ部には細かな剥離が認められ、総じて荒く大きな剥離で形作られている。先端部には表裏に使用痕とみられる細かな擦痕が認められる。

ＳＫ30295（第124図・第125図）

【遺構】Ｊ29グリッドで検出された。直径0.37～41m、深さ14cmを測る円形を呈する。中央南よりの底面からおよそ10cm浮いた位置から磨製石斧が1点出土している。刃部を上に垂直に立てられた状態であり、何らかの要件で意図的に埋め込まれたように見うけられる。

【遺物】チャート製とみられる定角式磨製石斧1点（第125図346）が出土した。ほぼ完形を成し丁寧な研磨が全体に及んでいる。長さ7.9cm、幅3.3cm、厚さ1.3cmと小形で精緻な作りのため、儀礼用の道具だった可能性がある。

ＳＫ62735（第126図）

【遺構】K25グリッドで検出された。直径0.5m、深さ22cmを測る円形の土坑である。中央部には直径12～14cm、長さ34cmの円柱状の自然礫がやや斜めに立てられた状態で埋め込まれていた。

【遺物】出土していない。

ＳＫ32047（第126図）

【遺構】Ｉ28グリッドで検出された。直径0.22～27m、深さ35cmの円形状を呈する。内部には、底面から23cm程浮いた位置に一握り大の礫が埋め込まれていた。

【遺物】出土していない。

ＳＫ9145（第126図）

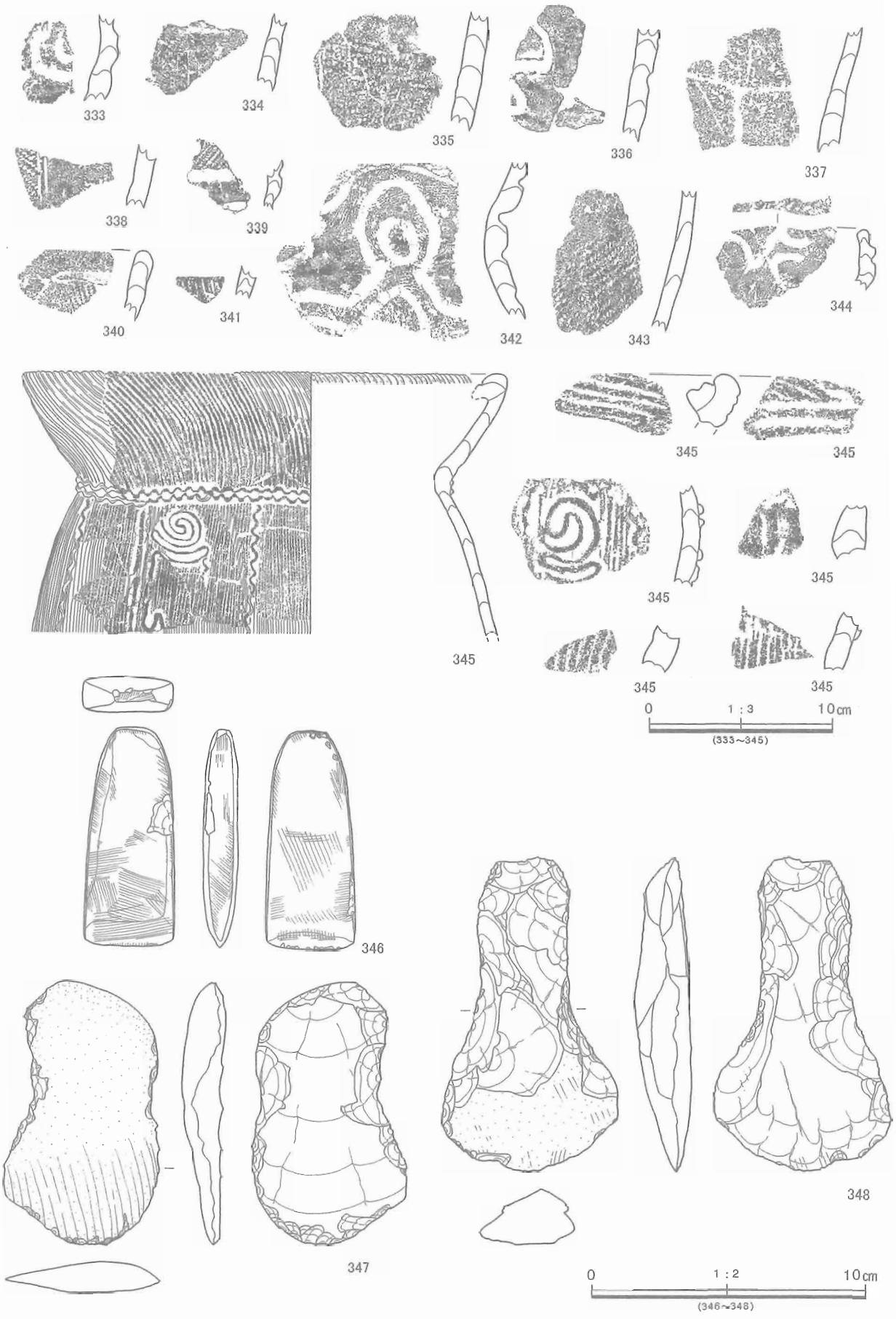
【遺構】Ｐ30グリッドで検出された。直径0.44m前後の不定形を呈し、深さは30cmを測る。内面には土坑にすっぽりと収まる程度の一抱え大となる自然礫を斜めに埋め込んでいる。さらにその上に拳大の礫を複数個乗せている。

【遺物】出土していない。

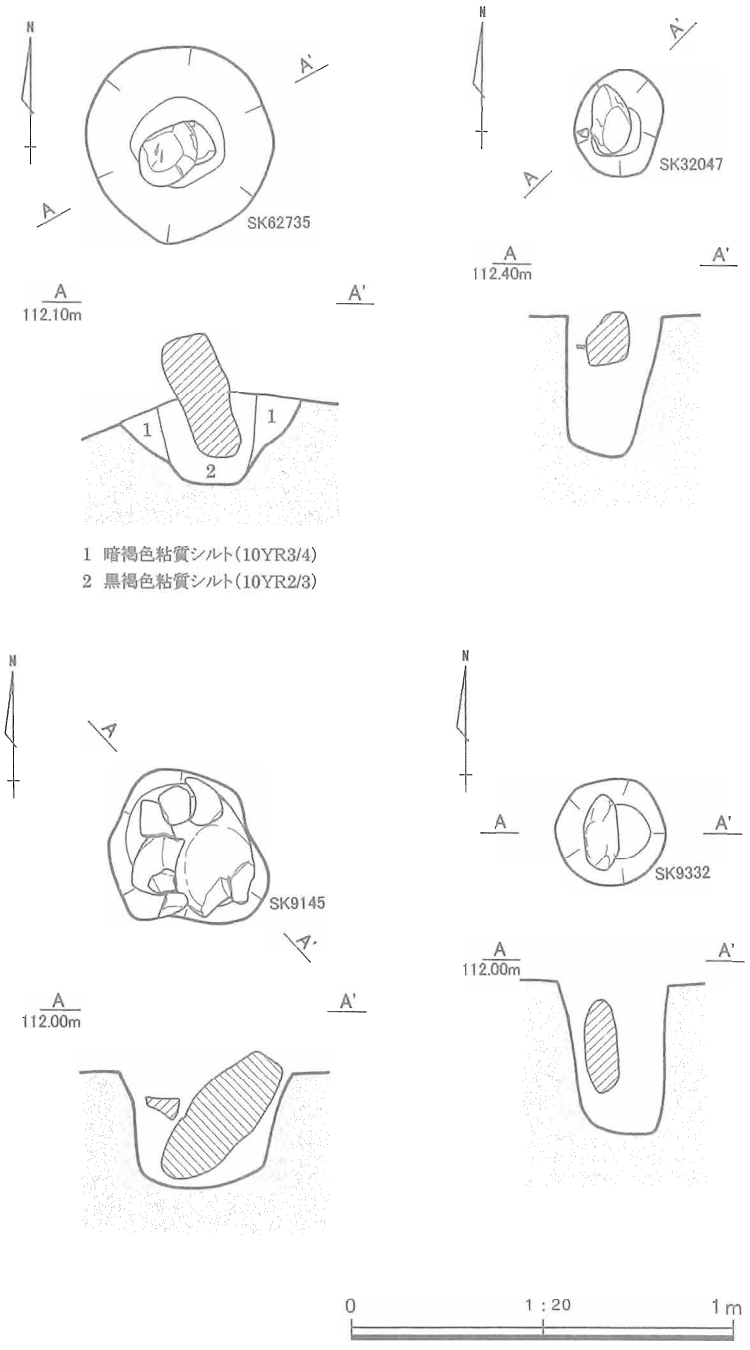
ＳＫ9332（第126図）

【遺構】Ｓ32グリッドで検出された。直径0.29m前後の円形を呈し、深さは40cmを測る。内面には底面からおよそ10cm浮いた位置に、小児頭大のやや扁平な自然礫を立てて埋め込んでいた。

【遺物】出土していない。



第125図　土坑出土遺物１



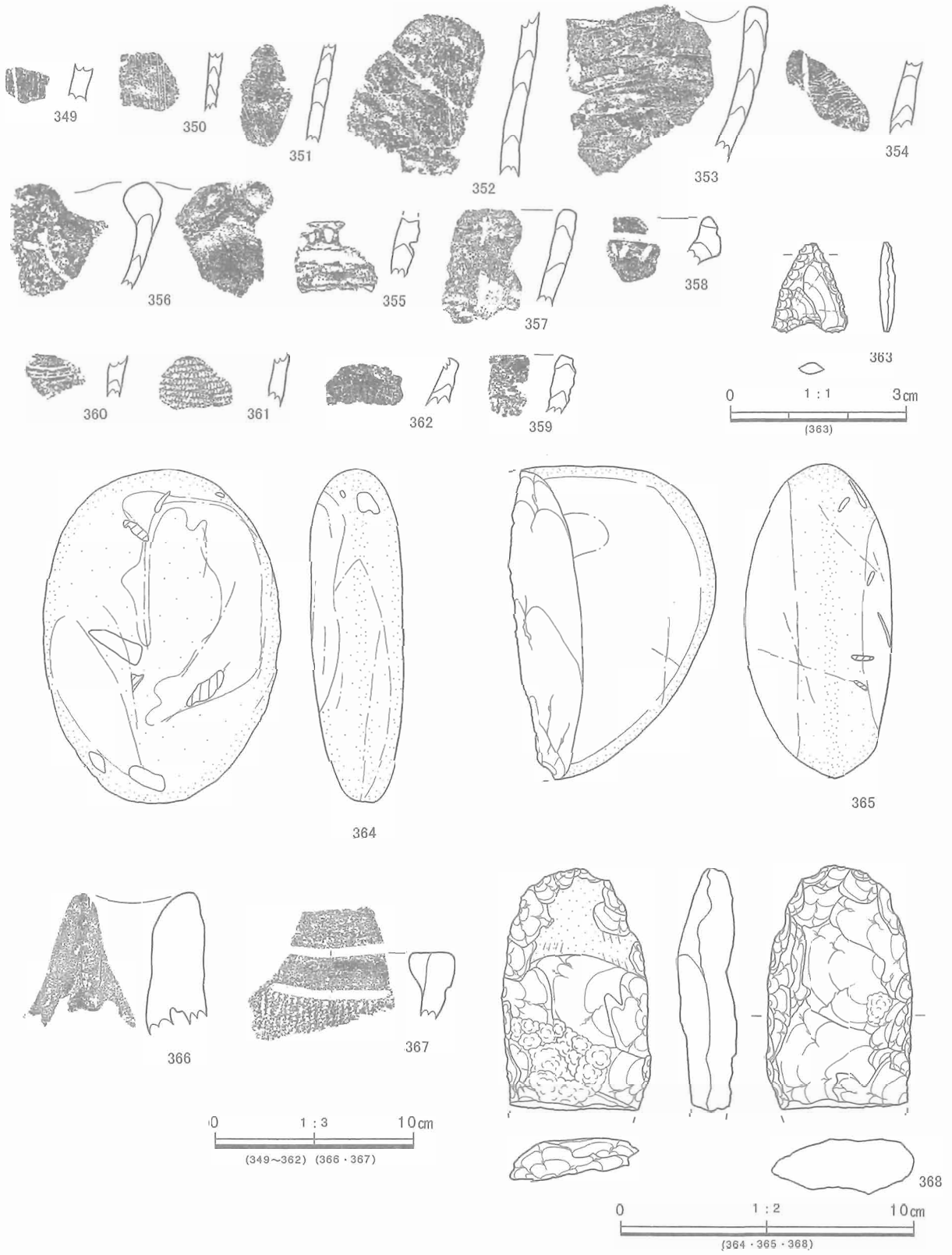
第126図　ＳＫ62735・9145・32047・9332平面・断面図

（２）その他の土坑の出土遺物

ここでは土坑内から出土した遺物でも人為的な意図が明確に窺えないものをまとめている。

土器のみが含まれる土坑と、土器・石器が出土した土坑の遺物については、およそ東から西へ遺構ごとに土器の記述の後に石器の説明を記載した。石器のみが出土した土坑の遺物は、土器が伴っていないので細かな時期を特定することができないと考え、遺構順ではなく器種ごとにまとめることとした。

ＳＫ70642からは文様などがわかる土器14点（第127図349～362）が出土している。（第127図349）は縦位に沈線を入れた曽利Ⅳ式土器である。（第127図350）は櫛歯状工具か半截竹管状工具で沈線を縦に引いた東鎌塚原式土器である。（第127図351）は櫛歯状工具で沈線を縦に引いた東鎌塚原式土器である。（第127図352）は櫛歯状工具で縦位沈線を引いた東鎌塚原式土器である。（第127図353）は波状口縁に沿って横位に指頭などの調整痕が付く中期後半の土器である。（第127図354）は胴部に縦位の沈線を付け区画し、区画内に条の太さ約0.1㎝のＲＬ縄文を付けた称名寺式土器である。（第127図355）は半截竹管状工具で横位の沈線を付け、横位に刺突した掘之内Ⅰ式土器である。（第127図356）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で弧状沈線を付け区画し、区画内に条の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を付けた後期前半の土器である。（第127図357）は口縁部破片の無文土器で後期前半と思われる。（第127図358）は口縁部を膨らめて半截竹管状工具で横位沈線と、斜位の短い沈線を付けた時期不明の土器である。（第127図359）は口縁部破片であるが、風化しており文様や型式が不明である。（第127図360）は縄文を付けた上に半截竹管状工具で弧状の沈線を施した型式不明土器である。（第127図361）は条の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を付けた型式不明土器である。（第127図362）は無文で時期不明である。



第127図　土坑出土遺物２

石器は、石鏃１点・磨石２点が出土した。(第127図363)は珪質頁岩製の凹基無茎鏃の形態を成す。剥片の縁辺のみに細かい調整を施し、基部は剥離面を広く残す剥片鏃である。(第127図364・365)はいずれも扁平な中粒砂岩の円礫を用いた磨石である。

ＳＫ22292からは文様などがわかる土器２点（第127図366・367）が出土している。（第127図366）は北屋敷式土器の角状突起である。（第127図367）は波状口縁に沿って半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、区画内に条の太さ約0.3cmでＬの撚糸文を付けた勝坂式土器である。

石器は、含礫中粒砂岩製の打製石斧１点（第127図368）が出土した。両側縁から広く剥離した後、縁辺に細かい調整を加えたもので、基部には敲打痕があり、原礫面をほとんど残さない。刃部が欠損しているが、短冊形を呈するであろう。

ＳＫ70573からは文様などがわかる土器１点（第128図369）が出土している。（第128図369）は波状口縁に沿って隆帯を貼り、隆帯上部に刺突を付けた後期前半の土器である。

ＳＫ70644からは文様などがわかる土器１点（第128図370）が出土している。（第128図370）は条の太さ約0.3cmのＬＲ多条縄文を付け、口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線を施した掘之内Ⅰ式土器である。

ＳＫ70556からは文様などがわかる土器１点（第128図371）が出土している。（第128図371）は口縁部を内反させ、櫛歯状工具で縦位に沈線を付けた後、半截竹管状工具で縦の太い沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。

ＳＫ70604からは文様などがわかる土器１点（第128図372）が出土している。（第128図372）は口唇部が欠損しているが、口縁部に半截竹管状工具で円形や弧状の沈線を付けた掘之内Ⅰ式土器である。

ＳＫ70652からは文様などがわかる土器１点（第128図373）が出土している。（第128図373）は口縁部に沿って横位に粘土紐を貼り、半截竹管状工具で区画した後期前半の土器である。

ＳＫ70627からは文様などがわかる土器１点（第128図374）が出土している。（第128図374）は表面が風化しているが、口縁を内反させ弧状沈線が付く型式不明の土器である。

ＳＫ70579からは文様などがわかる土器１点（第128図375）が出土している。（第128図375）は粘土紐を斜位に貼り付け、上部を棒状工具で押さえた勝坂式土器である。

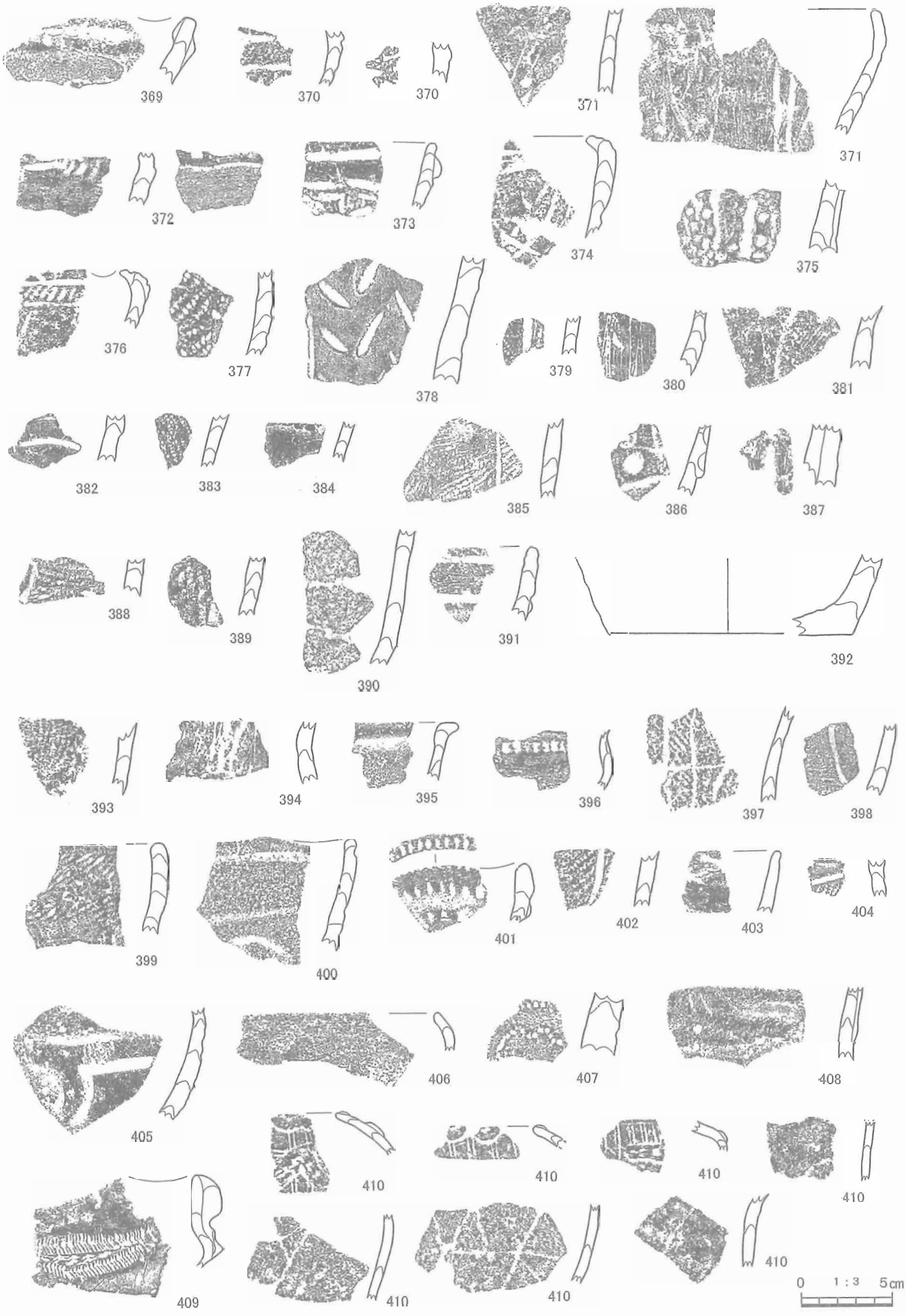
ＳＫ70628からは文様などがわかる土器２点（第128図376・377）が出土している。（第128図376）は波状口縁で口縁部を内反させ、口縁に沿って竹管状工具で横位沈線の区画をし、区画内に半截竹管状工具で沈線を付けた東鎌塚原式土器である。（第128図377）はＬＲの縄文を付けた土器で時期不明である。

ＳＫ70598からは文様などがわかる土器１点（第128図378）が出土している。（第128図378）は半截竹管状工具の沈線で縦位に区画し、竹管状工具でハの字沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である。

ＳＫ70609からは文様などがわかる土器６点（第128図379～384）が出土している。（第128図379）は半截竹管状工具で縦に区画し、条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第128図380）は半截竹管状工具で縦に沈線を付けた東鎌塚原式土器である。（第128図381）は半截竹管状工具で弧状に区画し、条の太さ約0.1cmのＬＲ縄文を付けた後期前半の土器である。（第128図382）は粘土隆帯を弧状に貼り付けた型式不明の土器である。（第128図383）は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けた型式不明の土器である。（第113図384）は沈線を付けた型式不明の無文土器である。

ＳＫ70620からは文様などがわかる土器１点（第128図385）が出土している。（第128図385）は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け、竹管状工具で縦位沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ20821からは文様などがわかる土器７点（第128図386～392）が出土している。（第128図386）は口縁部を折り返して、指頭により円形の窪みを付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第128図387）は口縁部に粘土紐を縦位に貼り付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第128図388）は条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第128図389）は条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第128図390）は表面が風化しているが加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器と思われる。（第128図391）は口縁部に半截竹管状工



第128図　土坑出土遺物３

具で細い横位沈線区画を施し、横位に粘土紐を貼り付けた後期前半の土器である。(第128図392)は底部破片で時期不明土器である。

ＳＫ19029からは文様などがわかる土器１点（第128図393）が出土している。(第128図393）は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を施した時期不明土器である。

ＳＫ19042からは文様などがわかる土器１点（第128図394）が出土している。(第128図394）は沈線が付いた加曽利Ｅ３式土器である。

ＳＫ22674からは文様などがわかる土器３点（第128図395～397）が出土している。(第128図395）は口縁部に沿って横位に粘土紐を付けた北裏Ｃ式土器である。(第128図396)は口縁部と胴部の境に竹管状工具で横位の連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第128図397）は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け、沈線で区画している称名寺式土器である。

ＳＫ22676からは文様などがわかる土器２点（第128図398・399）が出土している。(第128図399）は口縁部から条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた中期前半から中期中葉土器と思われる。(第128図398）は沈線で区画した中に条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた称名寺式土器である。

ＳＫ22757からは文様などがわかる土器１点（第128図400）が出土している。(第128図400）は風化しているが、口縁部から半截竹管状工具で沈線区画し、縄文を施していた加曽利Ｅ３式土器である。

ＳＫ19055からは文様などがわかる土器５点（第128図401～405）が出土している。(第128図401）は波状口縁の口唇部に刺突を付け、口縁部に沿って低い粘土紐を施して竹管状工具で刺突を付けた北屋敷式土器である。(第128図402）は半截竹管状工具で区画し、条の太さ約0.5cmのＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第128図403)は口縁部から沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第128図404）は半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた型式不明の土器である。(第128図405）は表面が風化しているが、半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.1cmのＬＲ縄文を付けた中津式土器である。

ＳＫ20813からは文様などがわかる土器１点（第128図406）が出土している。(第128図406）は薄手無文で北屋敷式土器と思われる。

ＳＫ20747からは文様などがわかる土器１点（第128図407）が出土している。(第128図407）は胴部に竹管状工具で刺突を付けた勝坂式土器である。

ＳＫ20706からは文様などがわかる土器１点（第128図408）が出土している。(第128図408）は表面が風化しているが、低い隆帯の上に条の太さ約0.1cmのＬＲ縄文を付けた中期前半から中期中葉と思われる土器である。

ＳＫ23036からは文様などがわかる土器２点（第128図409・410）が出土している。(第128図409）は波状口縁に沿って先端がとがった篦状工具で連続刺突を縦位と横位に付けた北屋敷式土器である。(第128図410・第129図411)は同一個体で、口縁部に沿って半截竹管状工具で縦位と横位の沈線を付け、波状に粘土紐を貼り付けた上に、半截竹管状工具で連続爪形を施した北裏Ｃ式期の土器である。(第129図412)は時期不明の底部である。

ＳＫ23163からは文様などがわかる土器１点（第129図413）が出土している。(第129図413）は半截竹管状工具で沈線を付た加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ23162からは文様などがわかる土器１点（第129図414）が出土している。(第129図414）は半截竹管状工具で沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ19185からは文様などがわかる土器１点（第129図415）が出土している。(第129図415）は波状口縁の口唇部直下から半截竹管状工具で斜位の沈線を付けた中津式土器である。

ＳＫ19145からは文様などがわかる土器１点（第129図416）が出土している。(第129図416）は条の太

第129図　土坑出土遺物４

さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた土器である。

ＳＫ23003からは文様などがわかる土器１点（第129図417）が出土している。（第129図417）は胴部に半截竹管状工具の沈線で区画し、ハの字状沈線を付けた曽利Ｖ式土器である。

ＳＫ19126からは文様などがわかる土器１点（第129図418）が出土している。（第129図418）は胴部に沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。

ＳＫ19129からは文様などがわかる土器１点（第129図419）が出土している。（第129図419）は半截竹管状工具の沈線で方形に区画した中に、竹管で円形刺突した中津式土器である。

ＳＫ23021からは文様などがわかる土器１点（第129図420）が出土している。（第129図420）は先の尖った竹管状工具の連続爪形を付け、口縁部から低い粘土紐を垂下した北屋敷式土器である。

ＳＫ22934からは文様などがわかる土器１点（第129図421）が出土している。（第129図421）は口縁部に棒状工具で刺突を付けた型式不明土器である。

ＳＫ22818からは文様などがわかる土器１点（第129図422）が出土している。（第129図422）は低い隆帯を貼り上部に刺突を施し、補修孔を付けた北裏Ｃ式土器である。

ＳＫ20223からは文様などがわかる土器１点（第129図423）が出土している。（第129図423）は微隆起を縦位に付けた加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ22785からは文様などがわかる土器１点（第129図424）が出土している。（第129図424）は微隆起で区画した中に条の太さ約0.5cmのＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ22878からは文様などがわかる土器１点（第129図425）が出土している。（第129図425）は楕円形に区画した中に先を尖らせた篦状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。

ＳＫ22555からは文様などがわかる土器１点（第129図426）が出土している。（第129図426）は条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を施し、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ19178からは文様などがわかる土器１点（第129図427）が出土している。（第129図427）は条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を施し、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。

ＳＫ18057からは文様などがわかる土器１点（第129図428）が出土している。（第129図428）は隆帯を縦位に貼り付け、隆帯上部を竹管状工具で連続圧痕や連続爪形を施して区画し、密接蒲鉾状平行沈線文を付けた勝坂式土器である。

ＳＫ19302からは文様などがわかる土器１点（第129図429）が出土している。（第129図429）は半截竹管状工具で沈線を施し、条の太さ約0.1cmのＬＲ縄文を付けた中津式土器である。

ＳＫ19235からは文様などがわかる土器１点（第129図430）が出土している。（第129図430）は口縁にそって横位沈線を付け、ハ状の沈線を施した曽利Ｖ式土器である。

ＳＫ19240からは文様などがわかる土器１点（第129図431）が出土している。（第129図431）は波状口縁の口唇部に半截竹管状工具で刺突を施し、口縁部にそって粘土紐を斜格子に貼り付け、刺突を施した北裏Ｃ式土器である。

ＳＫ19242からは文様などがわかる土器１点（第129図432）が出土している。（第129図432）は波状口縁の口唇部に刺突を付け、半截竹管状工具で沈線を施した後期前半の土器である。

ＳＫ21883からは文様などがわかる土器１点（第129図433）が出土している。（第129図433）は胴部に半截竹管状工具で弧状沈線を付けた称名寺式土器である。

ＳＫ19257からは文様などがわかる土器１点（第129図434）が出土している。（第129図434）は口縁部と胴部の境に横位の隆帯を付け、竹管状工具で連続刺突を施した中期前半から中葉の土器である。

ＳＫ22408からは文様などがわかる土器１点（第129図435）が出土している。（第129図435）は胴部の

縦位に粘土紐を貼り、条の太さ約0.3cm、ＬＲの開いた末端を結節した縄文原体を縦位に回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。

ＳＫ22375からは文様などがわかる土器１点（第129図436）が出土している。（第129図436）は半截竹管状工具で横位沈線を付けた後期前半の土器と思われる。

ＳＫ21349からは文様などがわかる土器３点（第129図437～439）が出土している。（第129図437）は口縁部に高めの隆帯を縦位に付けた北屋敷式土器である。（第129図438）は口唇部を丸く作り、条の太さ約0.2cmで長さ約1.8cmのＬＲ縄文を付け、口唇部直下に縄文を施し、竹管状工具で沈線を付けた中期前半から中葉の土器である。（第129図439）は条の太さ約0.2cmのＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。

ＳＫ21371からは文様などがわかる土器１点（第130図440）が出土している。（第130図440）は口縁部を丸くした勝坂式土器である。

ＳＫ21362からは文様などがわかる土器１点（第130図441）が出土している。（第130図441）は微隆起で区画した中に、条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。

ＳＫ21455からは文様などがわかる土器１点（第130図442）が出土している。（第130図442）は太い隆帯を付け区画した中に縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利４Ｅ式土器である。

ＳＫ21644からは文様などがわかる土器１点（第130図443）が出土している。（第130図443）は横位に粘土紐を貼り付け、粘土紐上部に刺突を施した北屋敷式土器である。

ＳＫ19275からは文様などがわかる土器２点（第130図444・445）が出土している。（第130図444）は口縁にそって半截竹管状工具で沈線を付けた咲畑式土器と思われる。（第130図445）は波状口縁から粘土紐を垂下し、半截竹管状工具で爪形文を付け、内面に粘土を貼っている北裏Ｃ式土器と思われる。

ＳＫ21745からは文様などがわかる土器１点（第130図446）が出土している。（第130図446）は粘土紐を渦巻き状に貼り、区画内に条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。

ＳＫ22288からは文様などがわかる土器１点（第130図447）が出土している。（第130図447）は口縁に沿って粘土紐を貼り付け、粘土紐の上部に連続爪形文を施し、下に半截竹管状工具で波状沈線を付けた北屋敷式土器である。

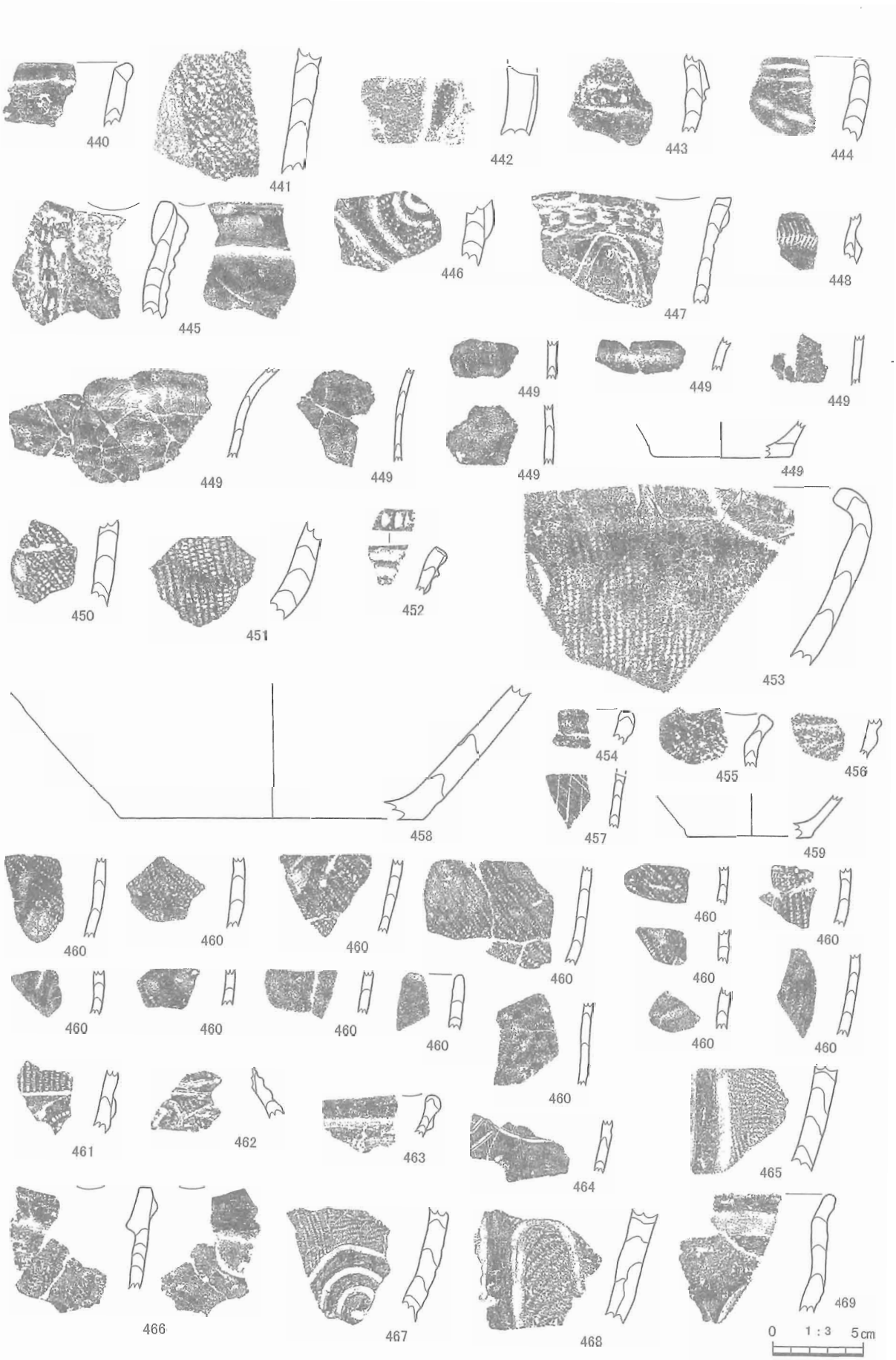
ＳＫ21745からは文様などがわかる土器１点（第130図448）が出土している。（第130図448）は先端を尖らせた竹管状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。

ＳＫ21585からは文様などがわかる土器１点（第130図449）が出土している。（第130図449）は北屋敷式土器の無文部の破片と底部である。

ＳＫ21584からは文様などがわかる土器２点（第130図450・451）が出土している。（第130図450）は条の太さ約0.3cmのＬＲ多条縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第130図451）は条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付けた土器である。

ＳＫ22304からは文様などがわかる土器１点（第130図452）が出土している。（第130図452）は口唇部にヘラ状工具の刺突を付け、横位の微隆起が付いた咲畑式土器である。

ＳＫ20111からは文様などがわかる土器７点（第130図453～459）が出土している。（第130図453）は口縁部から条の太さ約0.3cm、ＲＬの縦走する縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第130図454）は口縁部に沿って半截竹管状工具で沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利４Ｅ式土器である。（第130図455）は波状口縁にして条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利４Ｅ式土器である。（第130図456）は横位に隆帯を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利４Ｅ式土器である。（第130図457）は胴部にヘラ状工具で格子状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。（第130図458）は底部で型式不明の土器である。（第115図459）は底部で北屋敷式土器である。（第130図460）は条の太さ約0.2cm、長さ約1.8cmのＲＬ縄



第130図　土坑出土遺物 5

文を付けた中期初頭の土器である。

ＳＫ62622からは文様などがわかる土器１点（第130図461）が出土している。（第130図461）は竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。

ＳＫ60677からは文様などがわかる土器１点（第130図462）が出土している。（第130図462）は浅い櫛歯状工具の沈線を付け、半截竹管状工具で横位と渦巻き沈線を施した東鎌塚原式土器である。

ＳＫ61975からは文様などがわかる土器２点（第130図463・464）が出土している。（第130図463）は口縁部に沿って沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第130図464）は半截竹管状工具で浅い縦位沈線を施し、さらに半截竹管状工具で連弧文を付けた東鎌塚原式土器である。

ＳＫ64892からは文様などがわかる土器５点（第130図465～469）が出土している。（第130図465）は縦位の隆帯で区画し、条の太さ約0.2㎝、原体の長さ約1.8㎝のＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第130図466）は波状口縁部で口縁を折り返している。折り返し部の下に縄文が付いた中期前半から中葉の土器である。（第130図467）は半截竹管状工具で渦巻き沈線を付け、条の太さ約0.2㎝、条の長さ約2.8㎝のＬＲ縄文を施文した加曽利Ｅ３式土器である。（第130図468）は条の太さ約0.4㎝のＲＬの多条縄文を施文した後、半截竹管状工具で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第130図469）は口縁に沿って指頭で横位沈線を付け、竹管状工具で区画した後期前半の土器である。

ＳＫ30292からは文様などがわかる土器１点（第131図470）が出土している。（第131図470）は胴部に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた東鎌塚原式土器である。

ＳＫ31195からは文様などがわかる土器１点（第131図471）が出土している。（第131図471）は胴部に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた東鎌塚原式土器である。

ＳＫ30296からは文様などがわかる土器１点（第131図472）が出土している。（第131図472）は底部で型式不明である。

ＳＫ30294からは文様などがわかる土器１点（第131図473）が出土している。（第131図473）は条の太さ約0.3㎝のＬＲ縄文を付け、細い粘土紐を波状に貼り付けた曽利Ⅱ式から曽利Ⅲ式土器である。

ＳＫ30348からは文様などがわかる土器１点（第131図474）が出土している。（第131図474）は条の太さ約0.1㎝、Ｌの撚糸文を付け半截竹管状工具で縦波状の沈線を施した型式不明の土器である。

ＳＫ9075からは文様などがわかる土器１点（第131図475）が出土している。（第131図475）は胴部に低い隆帯で曲線区画した加曽利Ｅ３式土器である。

ＳＫ8794からは文様などがわかる土器１点（第131図476）が出土している。（第131図476）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線と波状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。

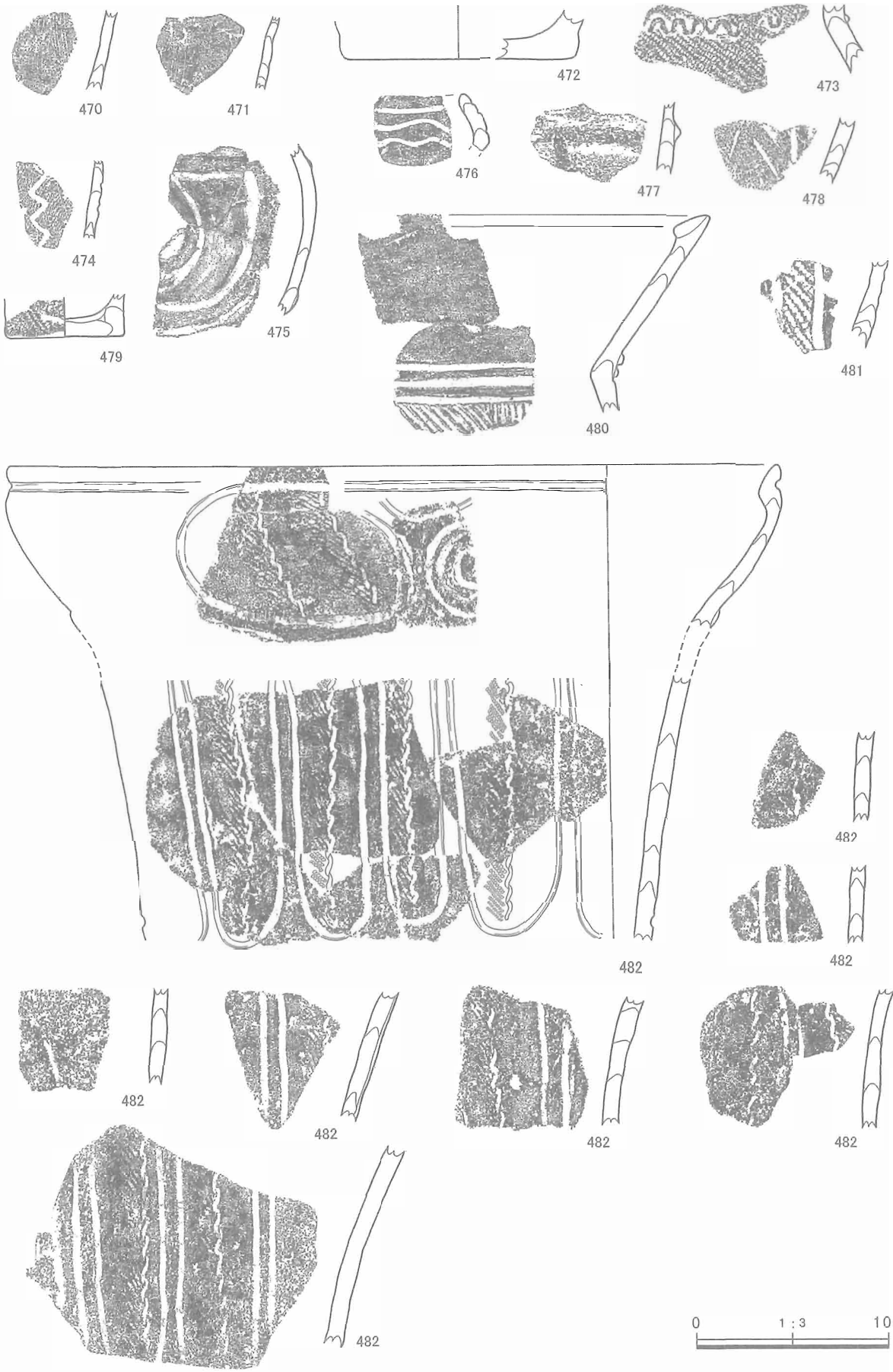
ＳＫ213からは文様などがわかる土器２点（第131図477・478）が出土している。（第131図477）は隆帯を縦位と横位に付けた北屋敷式土器である。（第131図478）はハの字状の沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。

ＳＫ8236からは文様などがわかる土器１点（第131図479）が出土している。（第116図479）は底部付近の破片で、条の太さ約0.3㎝のＲＬ縄文を付けている。

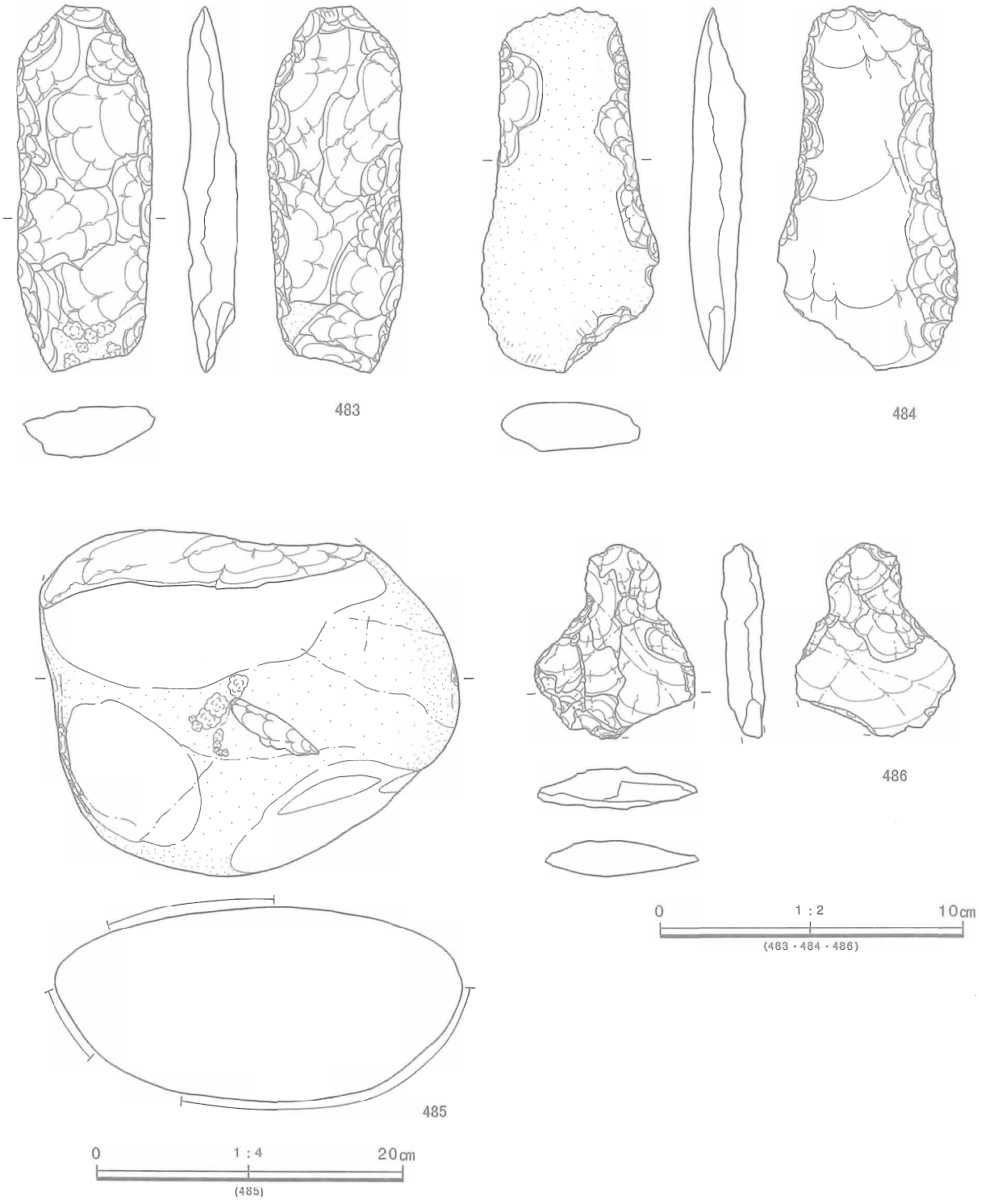
ＳＫ30107からは文様などがわかる土器１点（第131図480）が出土している。（第131図480）は外反する頸部に横位隆帯を付け、半截竹管状工具で鋸歯状沈線を入れた勝坂式土器である。

ＳＫ7960からは文様などがわかる土器１点（第131図481）が出土している。（第131図481）は半截竹管状工具で縦位区画し、条の太さ約0.4㎝のＬＲ縄文を付けた称名寺式土器である。

ＳＫ7931からは文様などがわかる土器１点（第131図482）が出土している。（第131図482）は口縁部を低い隆帯で楕円形に区画し、区画内に条の太さ約0.2㎝のＬＲ縄文で末端を結束した原体を斜位に施文し、胴部にも同一原体を縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。



第131図　土坑出土遺物 6



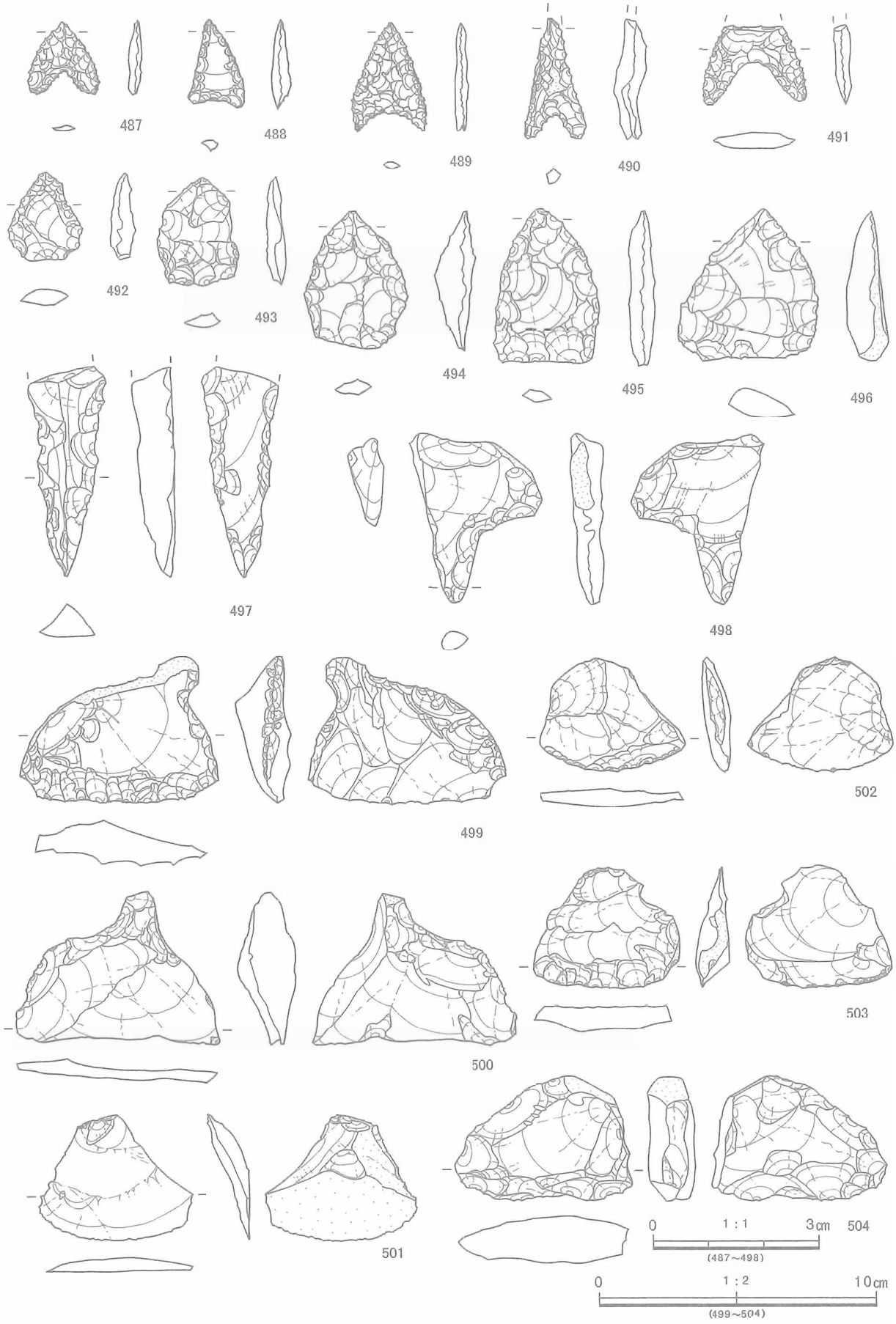
第132図　土坑出土遺物７

石器が単独で出土した土坑の遺物

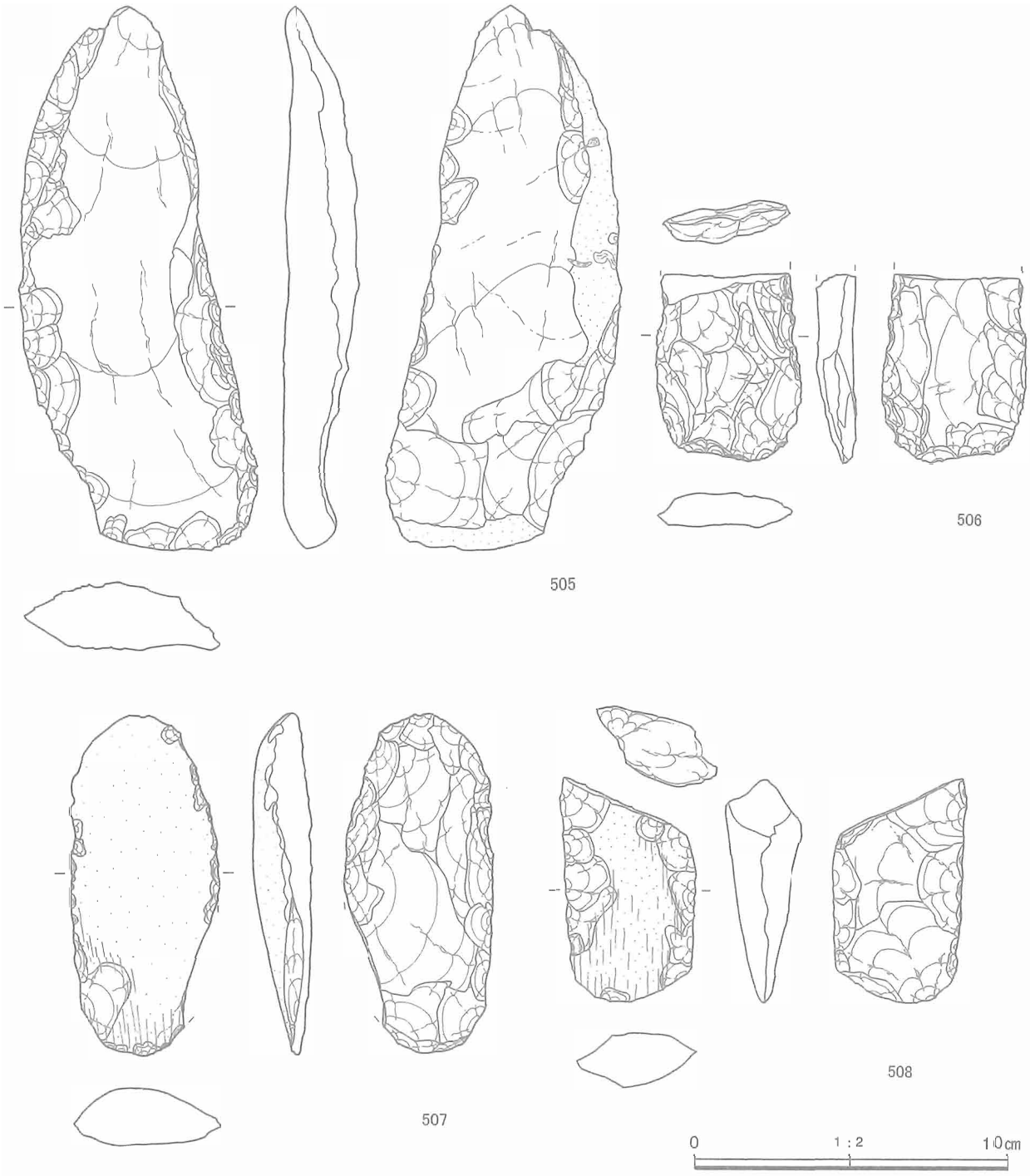
石鏃（第133図487～496）

ＳＫ70505・70662・22578・22903・23107・60680・8234・8803とＡ区不明土坑２基から石鏃が１点ずつ出土した。うち、６点が諏訪星ヶ台産の黒曜石を使用したものである。

石錐（第133図497・498）



第133図　土坑出土遺物 8



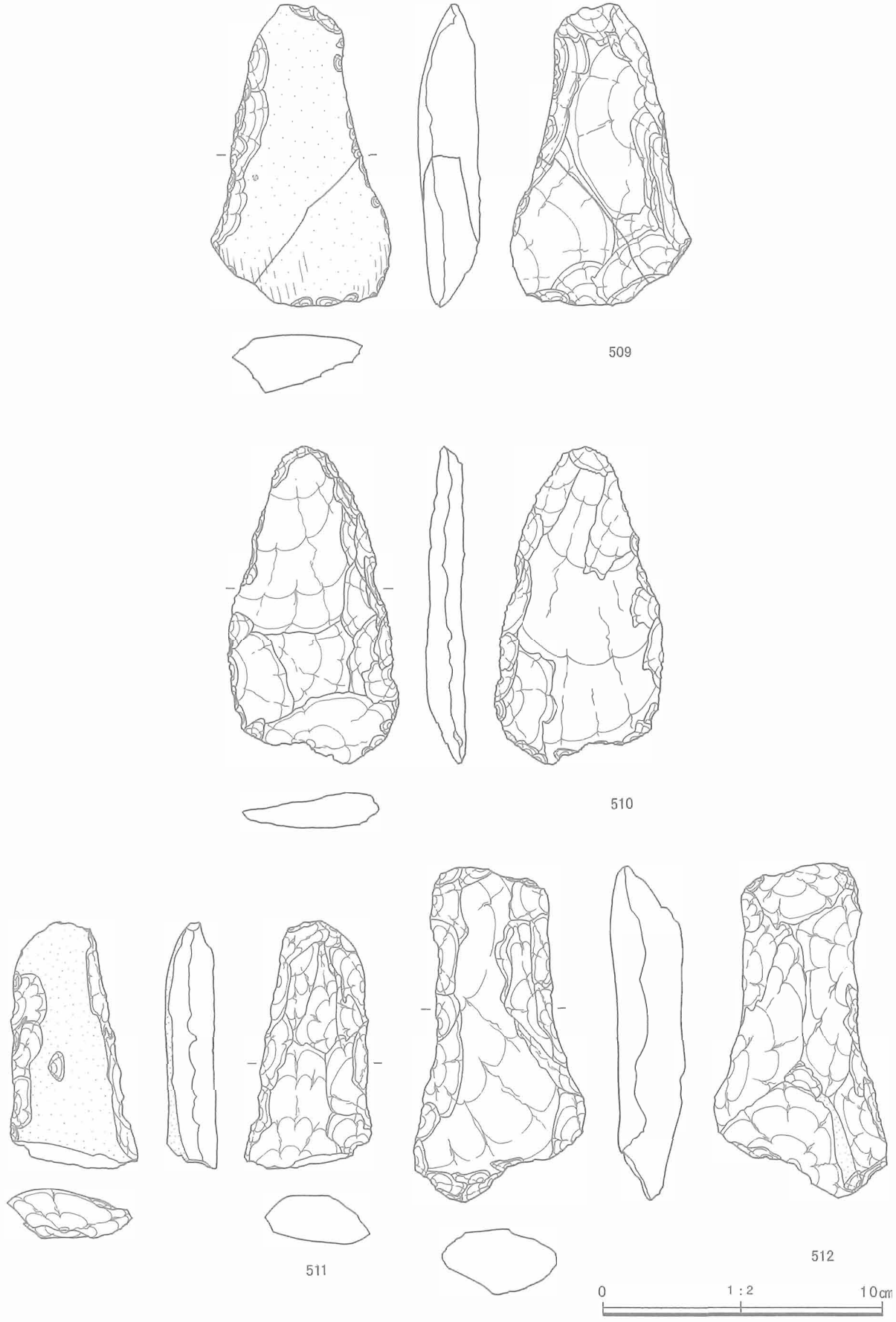
第134図　土坑出土遺物９

ＳＫ60482からは台形状のつまみをもち錐部の短い石錐（第133図498）が、ＳＫ8052からは錐部がやや長く断面三角形状の石錐（第133図497）が出土した。いずれも珪質頁岩製でつまみ部が欠損している。

石匙（第132図486、第133図499・500）

ＳＫ64076からは珪質頁岩製の石匙（第132図486）が出土している。抉り部を中心に細かい調整を加えているが、裏面に素材を割り取る際の剥離面を広く残している。刃部の一部は欠損する。

ＳＫ19095からは刃部と側縁～つまみの抉り部に細かい調整を加えた石匙が、ＳＫ21272からは抉り部の他は細かい調整は加えられていない石匙が出土した。いずれも粘板岩を使用した横形を呈している。



第135図　土坑出土遺物10

スクレイパー・二次加工剥片（第133図497・498）

ＳＫ19284からは二辺に調整を加えたスクレイパー（第133図503）が、ＳＫ20068からは一辺に調整を加えた二次加工剥片（第133図502）が、ＳＫ20249からは一辺を刃部として使用した剥片（第133図501）が、ＳＫ31465からは二辺に調整を加えた二次加工剥片（第133図504）がそれぞれ１点ずつ出土した。いずれも粘板岩製である。

打製石斧（第132図483・484、第134図505～第136図517）

ＳＫ22927・23003・61252とＢ区の不明土坑から、短冊形を呈する打製石斧が１点ずつ出土した（第134図505～508）。（505）は刃部の一部が欠損しているようにみえるが、側縁が連続していることからも調整によるものと考えられる。（506・508）は半ばで折れており、（507）は刃部から右側縁にかけて割れて失われる。これらのうち、（507・508）には使用痕とみられる細かな擦痕が刃部を中心に観察される。

ＳＫ21108・22928・60151・61140・64794・8511と不明土坑からは、撥形を呈する打製石斧が１点ずつ出土した（第135図509～第136図513・514・516）。（509・511・514・516）は、円礫の表面部分から割り取った剥片を素材としているため原礫面を多く残し、側辺のみを細かく調整することで形作られている。一方、（510・512・513）は、原礫面をほとんど残さない。原礫面を残す・残さないの差は、素材となる剥片をどこから割り取っているのかによるものと思われる。（509・510・512）は、使用により刃部を欠損している。特に（509）は欠損した際に斜め方向に大きく割れることで使用できなくなったのだろう。（511）は半ばで折れ、（512）は刃部が大きく失われている。しかし、（512）は先端部に細かな調整を加えており、折れた後も再加工して利用をもくろんだものとみられる。

ＳＫ23299・62409からは分銅形を呈すると思われる打製石斧と形状の不確かな打製石斧が１点ずつ出土した。いずれも、主に側縁に調整が加えられ原礫面を多く残すものである。（第136図515）は刃部が大きく割れて失われているが、側縁から入る広い剥離はより新しいものなので欠損した後に形を整えて再利用しているものと思われる。（第136図517）は円形状を呈する。基部の先端は折れているが、刃部には細かな調整が施されている。欠損部を繕いながら使用を続け、このような形に至ったのであろう。

ＳＫ22511からは打製石斧２点が出土した。（第132図483）は細粒砂岩製で短冊形を呈する。縁辺から広く剥離した後側縁に細かい調整を加えており、原礫面は表・裏面にわずかに残るのみである。刃部に使用に伴うとみられる割れ・頭部にわずかに使用痕を残すため、上下とも刃として使用されていたと思われる。（第132図484）は含礫中粒砂岩製の撥形を呈する。素材剥片の側縁に細かい調整を加えており、原礫面を多く残している。刃部は一部が欠損するが、使用痕とみられる細かな擦痕が観察される

これら打製石斧の多くは、住居の集中域の範囲に存在する土坑から出土しているが、住居に近接する場所だけでなく、集中域の端にあたる辺りに位置する土坑からの出土も若干目立つ。

石錘（第137図518～524）

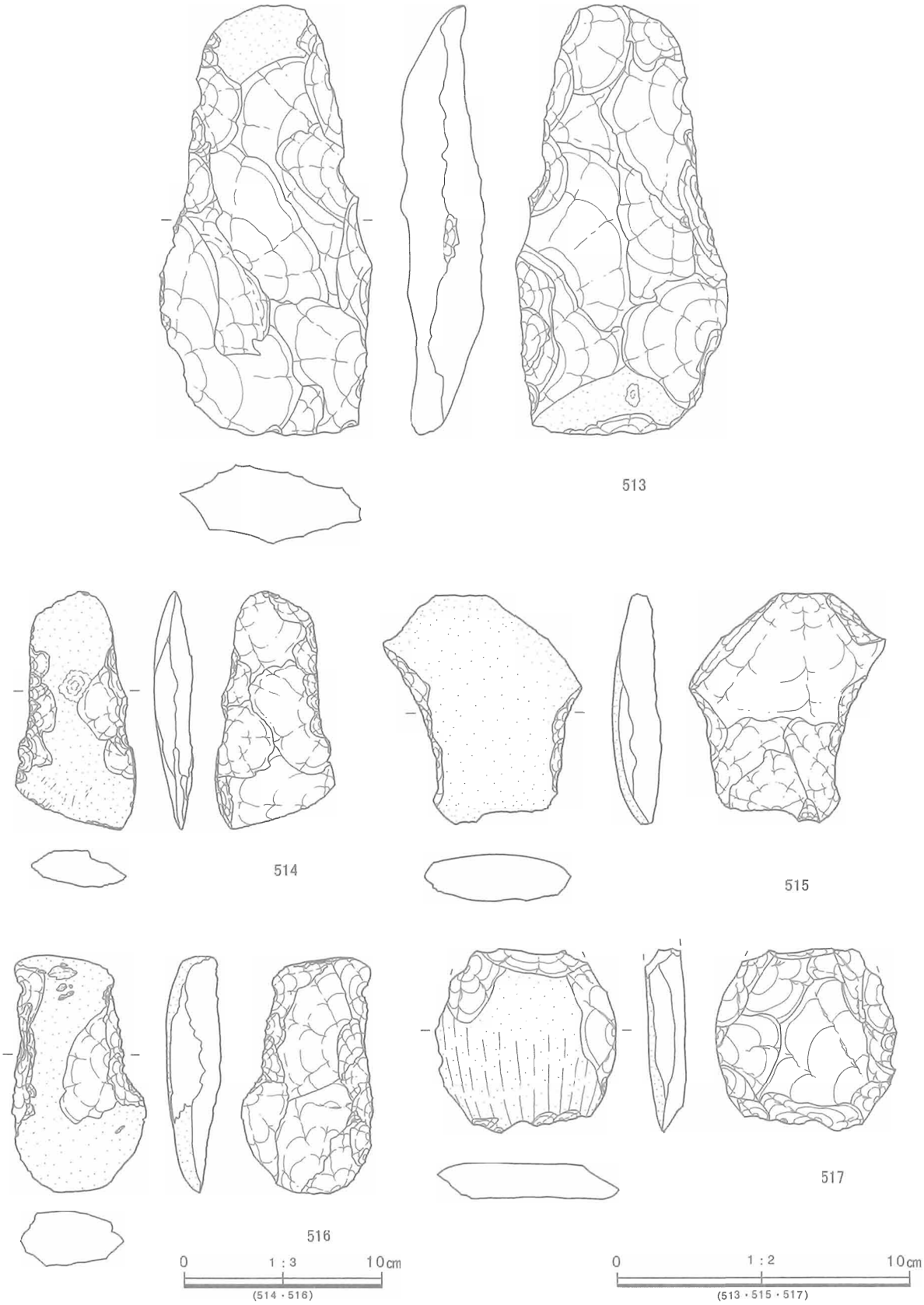
ＳＫ70583・20931・60928・8496・9821・30205・31199からは、扁平な円礫を用いた打欠石錘が１点ずつ出土している。いずれも、長軸の２箇所に縄掛け部を作り出したもので完形である。ほぼ、住居の集中域の範囲に存在する土坑から出土している。

磨石・敲石（第138図525～527）

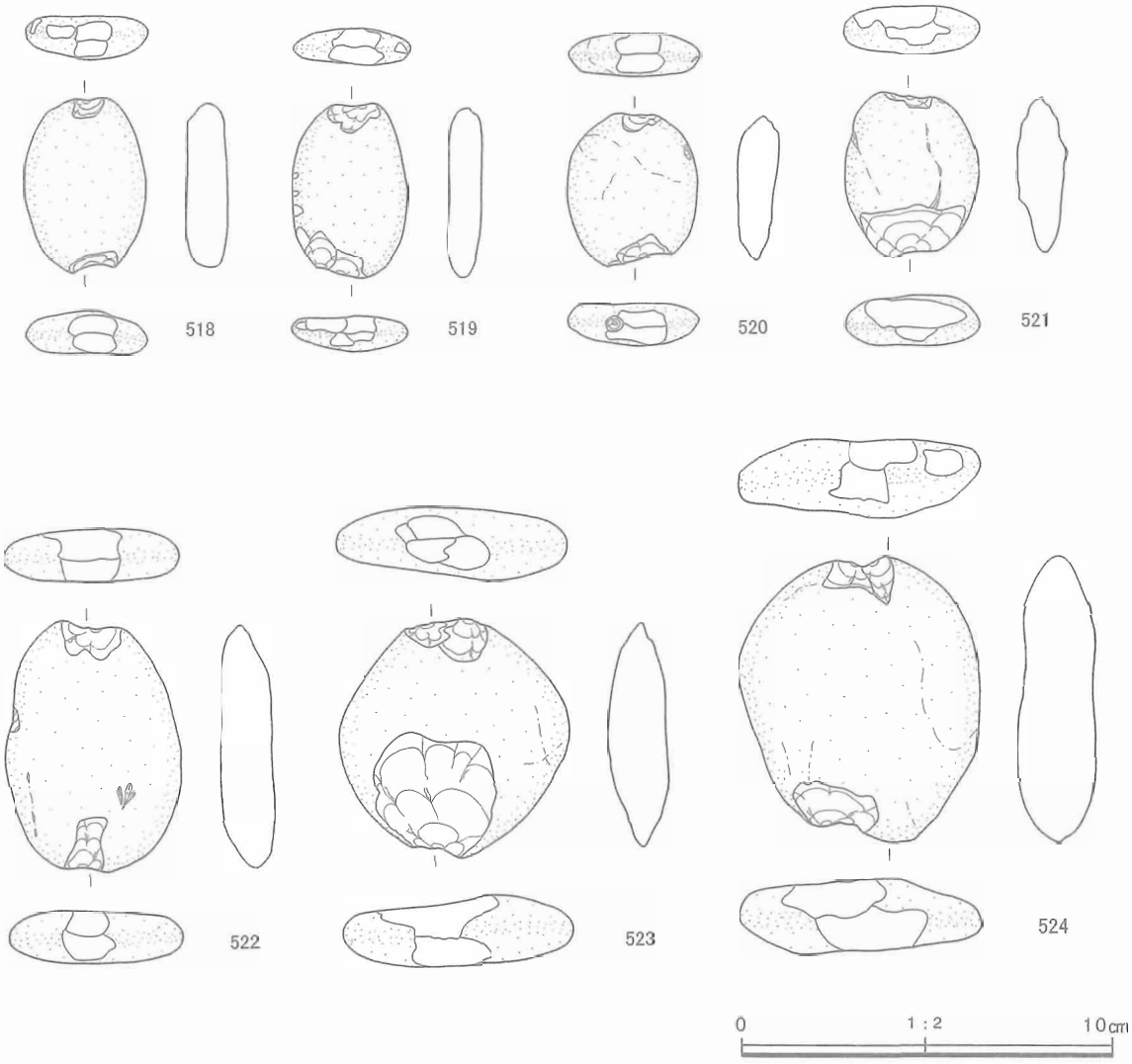
ＳＫ21480・22739・23045からは、やや扁平な長楕円～棒状の中粒砂岩を用いた磨敲石が出土している。平坦面あるいは側面を磨面とし、長軸の端部や側面を敲打面としている。ＳＫ21480出土の（第138図525）・ＳＫ22739出土の（第138図527）は敲打の際に剥離を起こしている。ＳＫ23045出土の（第138図526）は先端よりやや平坦部方向へずれた位置に敲打痕が残る。

台石・石皿（第132図485、第138図528～第139図532）

ＳＫ64076からは細粒砂岩製の台石（第132図485）が出土した。頂部の最も平らである一部に敲き痕が



第136図　土坑出土遺物11



第137図　土坑出土遺物12

残り、周囲は磨り面として利用されている。一端は大きく欠損する。

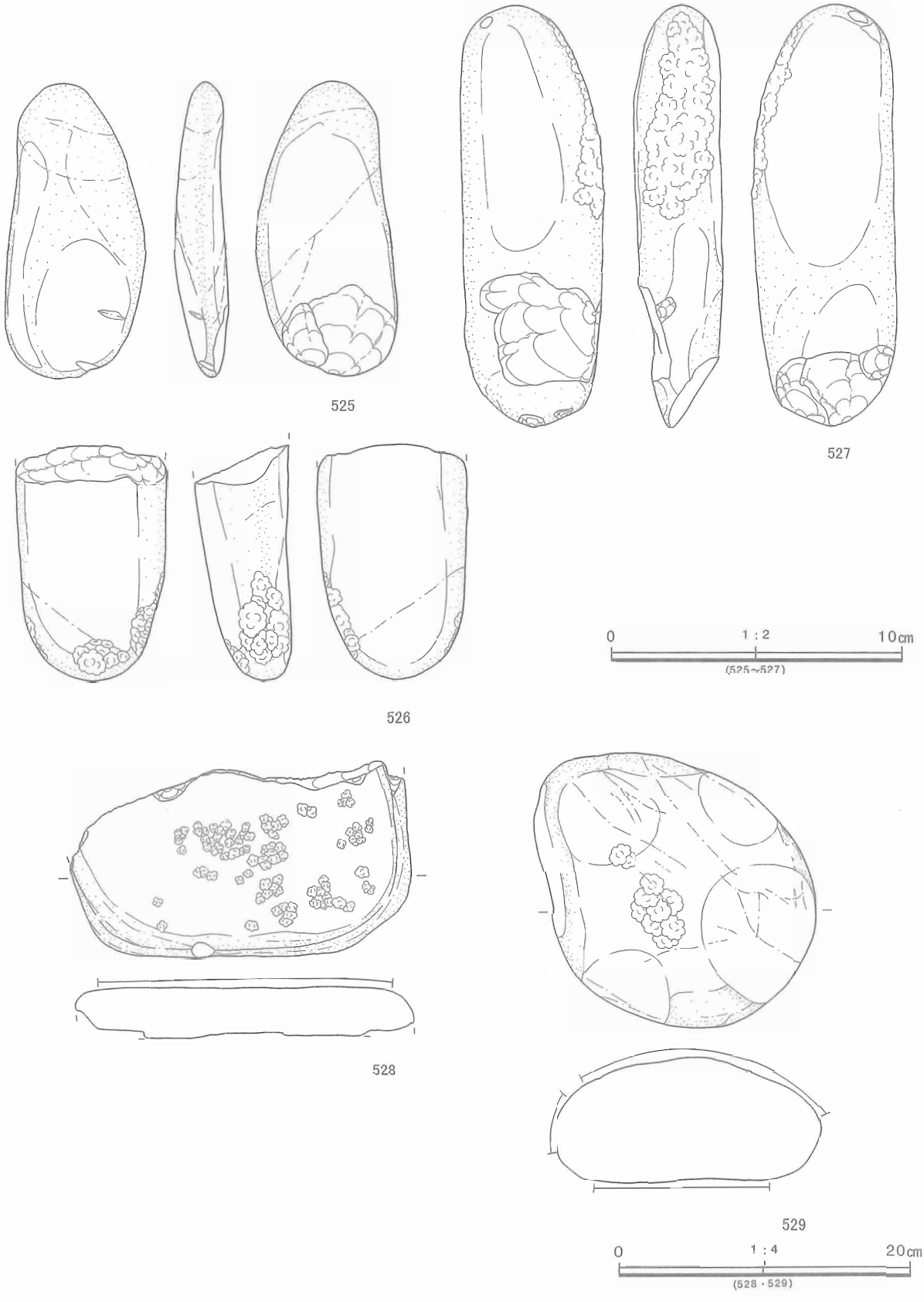
ＳＫ21926からは細礫岩製の台石（第138図529）、ＳＫ62731からは中粒砂岩製の台石（第138図528）、ＳＫ60696からは粗粒砂岩製の台石（第139図531）、ＳＫ64650からは細粒砂岩製の台石（第139図532）、ＳＫ30113からは細礫岩製の石皿（第139図530）が出土した。（第138図528・第139図531・第139図532）は板状の礫を用い平坦面に磨面・敲打痕を有するもので、住居や土坑墓から出土している台石と石質・形状も類似しており本遺跡で最も一般的なタイプのものである。

その他の石製品（第139図533～535）

ＳＫ70627からは滑石製の垂飾（第139図533）が出土した。小形品だがつやが出るまで全体を磨き込んで作られており丁寧な仕上がりとなっている。出土品と土坑の規模からＳＫ70627は土坑墓の可能性もあるが、土坑墓集中エリアから若干離れていることと不定形なことから、ここでは土坑扱いとした。

ＳＫ21237からは凝灰質砂岩の砥石（第139図534）が出土している。

ＳＫ22299から出土した（第139図535）は珪質凝灰岩で、全体が研磨されたように滑らかであり先端に研磨により面が形成されているため磨製石斧の一部としたが、磨石の可能性もある。



第138図　土坑出土遺物13

第139図　土坑出土遺物14

4　遺物集中地点と出土遺物

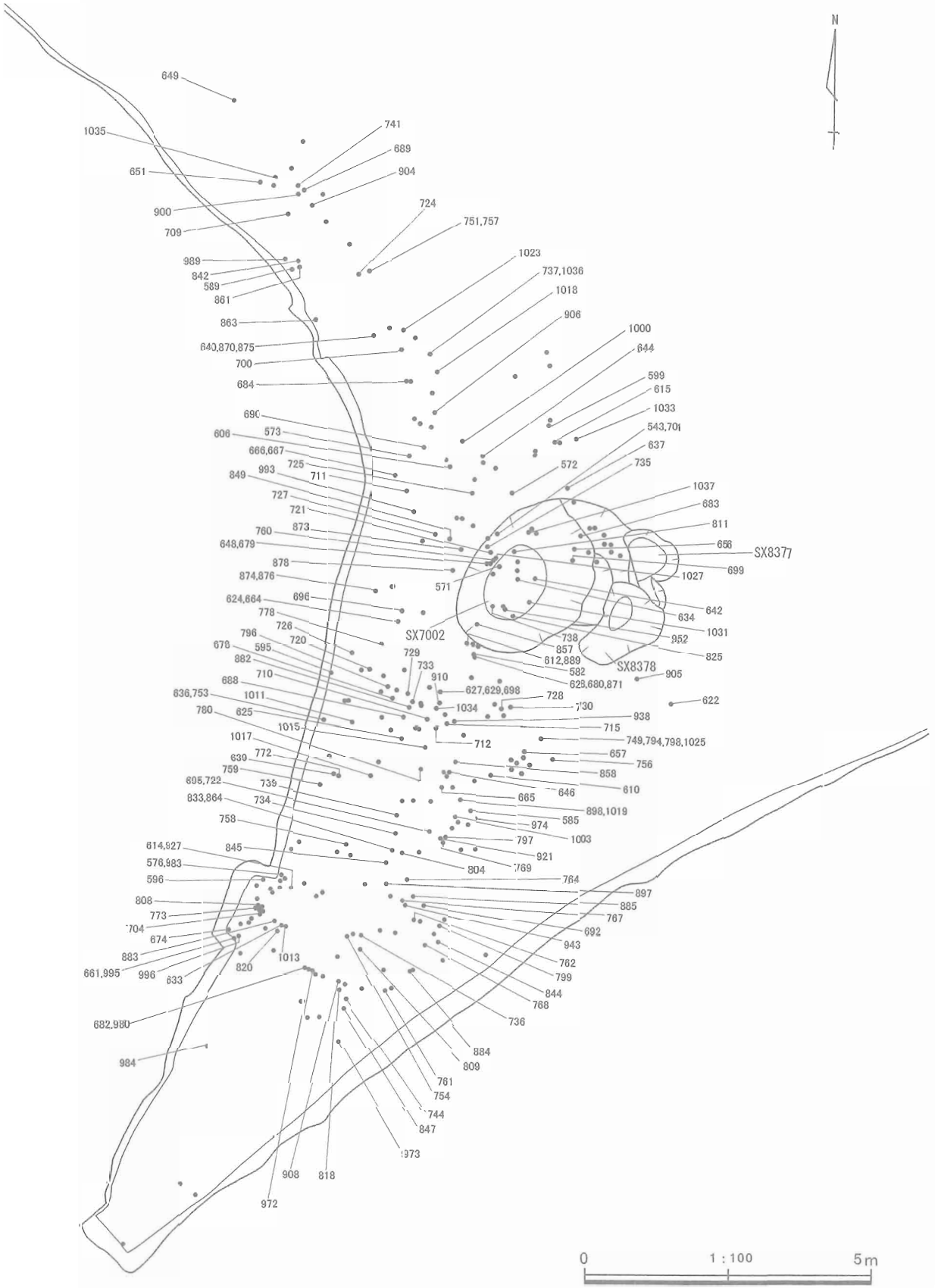
【遺構】遺物集中地点とは、調査区の南西隅にあたるS33・34～U33グリッドで検出された多量の遺物を含む包含層である。包含層を構成する土は暗褐色（10YR3/3）シルトを主体とするもので、色合いがやや濃いものの雰囲気はⅡ層に近似する。この部分は台地末端の斜面方向である西側へ10%程度で傾く緩斜面上にある。おそらく、Ⅱ層と部分的に形成されてきたⅠ層とが流出し、再堆積して構成されたものと考えらえる。また、この部分はR34グリッド付近とV34グリッド以南にみられる西側への張り出しに抱かれた小さな谷地形を形成している。つまり、山肌に近接したこの地形は、縄文時代の集落が形成される以前に形成されたことになる。

遺物の出土は、緩斜面の落ち際からおよそ3m下がった付近から濃厚になる。土器と石器の出土状況（第140・141図）は土器が南側にやや多く、石器は北側にやや多く認められる以外は、概ね重複している。土器は中期中葉～後期前葉にあたる時期のものが含まれ、582や691のような大破片は認められるが、1個体が固まって出土した例はない。従って、据え置かれた土器が自然と割れたのではなく、破片の状態でもたらされた可能性が高い。また、1022～1040のような加工円板が多いのも特徴的である。石器はさまざまな器種がある。完形品も多いので、破損した物だけが集められたわけではないようである。

この包含層の下位には、拳大～人頭大の円礫が堆積する層位がある。当初は縄文時代に人為的に集められている集石遺構と考えたが、遺物の出土は認められなかった。縄文時代の集落が形成される以前に、更新世に大井川の堆積によってもたらされ礫が洗い出されて再堆積したものであろう。

また、この範囲の半ばからはSX7002が検出されている。内容は後述する。

【遺物：土器】遺物集中区からは文様などがわかる土器565点（第142図536～第160図1040）が出土している。（第142図536）は半截竹管状工具で横位と斜位沈線を施した五領ヶ台式土器である。（第142図537）は波状口縁に半截竹管状工具で連続爪形を付け、下に沈線を施した北裏C式土器である。（第142図538）は口縁に沿って粘土紐を波状に貼り、波状沈線と三角刺突を付けた北裏C式土器である。（第142図539）は口縁に竹管状工具で円形刺突を付けた北裏C式土器である。（第142図540）は口縁部に横位の隆帯を付けて条の太さ約0.5cmのLR縄文を施した北裏C式土器である。（第142図541）は口縁部に条の太さ約0.3cmのRL縄文を施し、横位の沈線を付けた北裏C式土器である。（第142図542）は口縁部から条の太さ約0.5cmのRL縄文を付けた北裏C式土器である。（第142図543）は口唇部に条の太さ約0.2cmのRL縄文を付け、口縁部も同じ原体の縄文を付けた北裏C式土器である。（第142図544）は粘土紐を横位に付け、下にヘラ状工具で沈線を付けた北裏C式土器である。（第142図545）は粘土紐を縦位に付け、上部に刺突を施した北裏C式土器である。（第142図546）は粘土紐を横位に付け、上部に刺突を施した北裏C式土器である。（第142図547）は半截竹管状工具で横位沈線を付け、下に三角の刻目を施した北裏C式土器である。（第142図548）は条の太さ約0.3cmでRLの多条縄文を付けた北裏C式土器である。（第142図549）は条の太さ約0.3cmのLR縄文を付け、沈線を施した北裏C式土器である。（第142図550）はヘラ状工具で刺突を付け、条の太さ約0.3cmのRL縄文を付けた北裏C式土器である。（第142図551）は条の太さ約0.2cmのRL縄文を付けた北裏C式土器である。（第142図552）は条の太さ約0.2cm、長さ約0.4cmでrの絡条帯圧痕を付けた北裏C式土器。（第142図553）は縄文を付けた北裏C式土器である。（第142図554）は縄文を付けた北裏C式土器である。（第142図555）はミニチュア土器の底部付近で、条の太さ約0.2cmのRL縄文を付けた北裏C式土器である。（第142図556）は波状口縁部に沿って隆帯を付け区画し、条の太さ約0.2cmのRL縄文を施した北屋敷式土器である。（第142図557）は口縁部に沿って粘土紐を貼り、半截竹管状工具で沈線を付けた北屋敷式土器である。（第142図558）は口縁部に竹管状工具で連続爪形文を付けた北屋敷式土器である。（第142図559）は口縁部に竹管状工具で連続爪形文を付けた北屋敷式土器である。（第142図560）は口縁部に隆帯を貼り付けた北屋敷式土器である。（第142図561）は口縁部を半截竹管状

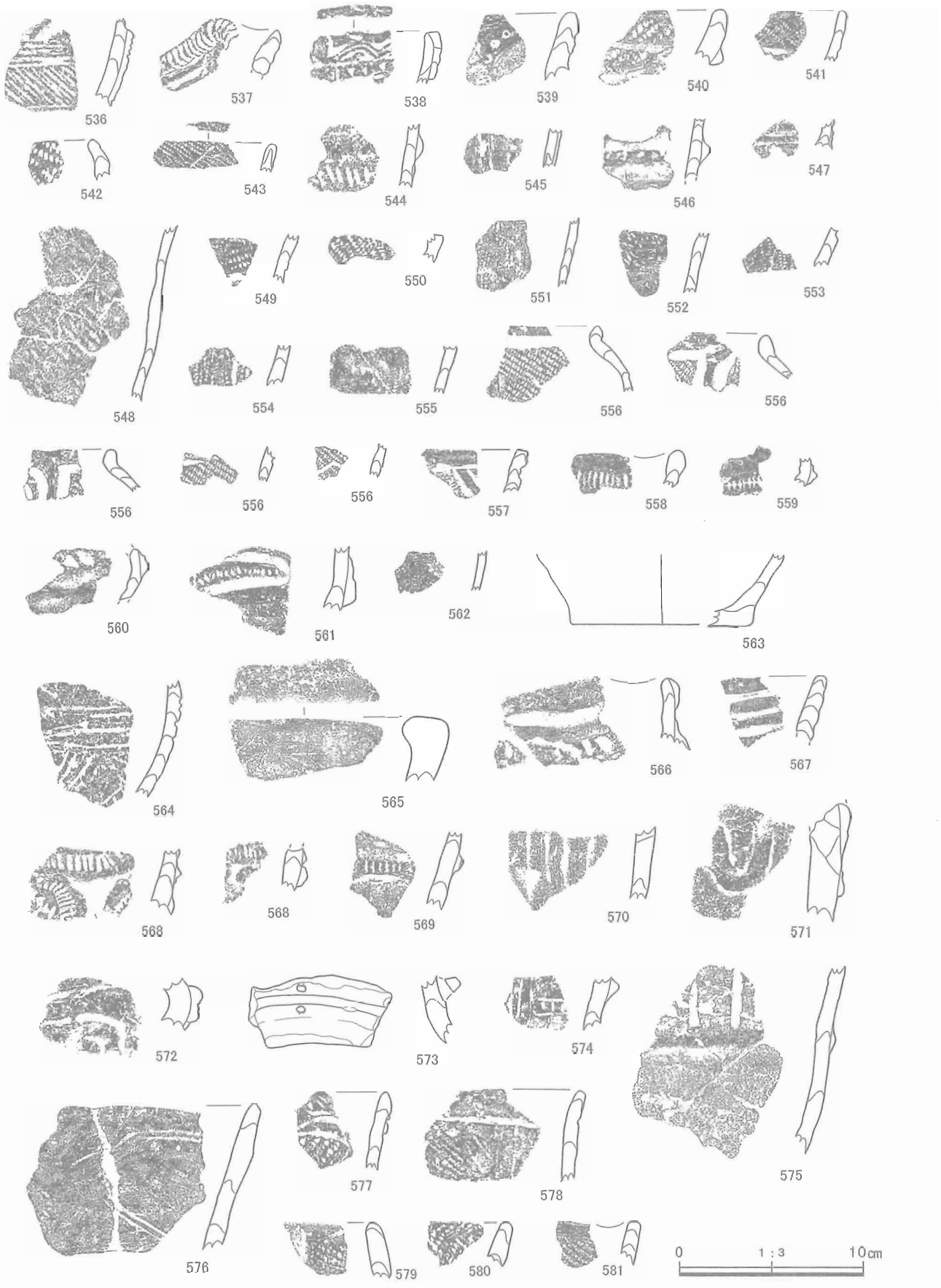


第140図　遺物集中地点遺物分布状況１（土器）

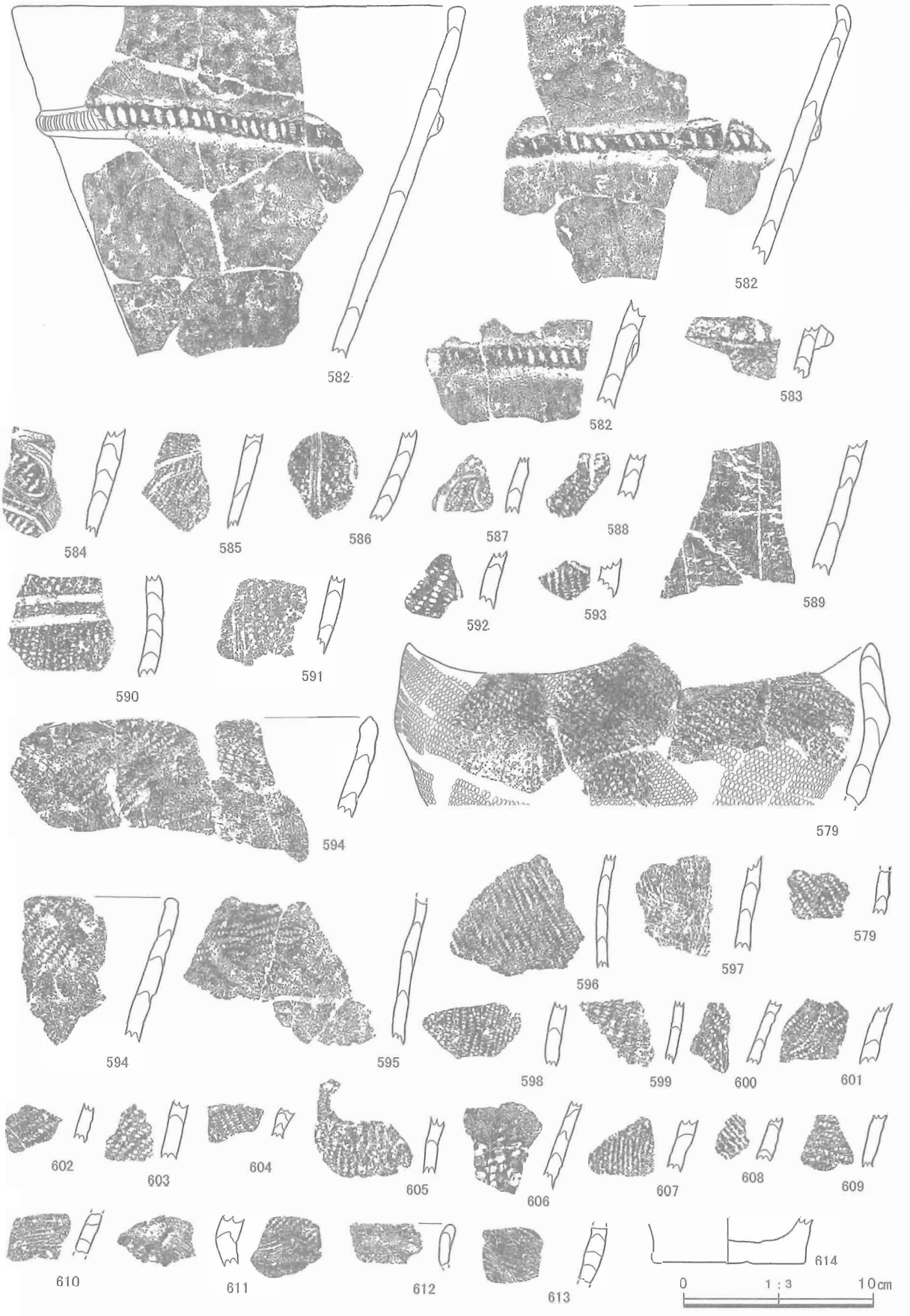
第141図　遺物集中地点遺物分布状況 2 （石器）

工具で三日月状に沈線区画し、その中に竹管状工具で刺突を施した北屋敷式土器である。(第142図562)は胴部無文の北屋敷式土器である。(第142図563)は底部で北屋敷式土器と思われる。(第142図564)は半截竹管状工具で横位と縦位沈線を付け、縄文を施さない船元Ⅲ式土器と思われる。(第142図565)は口縁部を無文にした浅鉢で勝坂式土器である。(第142図566)は波状口縁部にそって粘土紐を付け、半截竹管状工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。(第142図567)は波状口縁部に沿って半截竹管状工具で沈線を付けた勝坂式土器である。(第142図568)は粘土紐で楕円形に区画し、区画内に半截竹管状工具で連続爪形を付けた勝坂式土器である。(第142図569)は横位に粘土紐を貼り付け、粘土紐上部に刺突を付けた勝坂式土器である。(第142図570)は縦位に沈線を付けた勝坂式土器である。(第142図571)は粘土紐でU字形に貼り付けた勝坂式土器である。(第142図572)は口縁部と胴部の境に粘土紐を付けた勝坂式土器である。(第142図573)は有孔鍔付土器で勝坂式である。(第142図574)は半截竹管状工具の沈線で区画して、刻みを入れた中期前半から中葉の土器である。(第142図575)は粘土紐を横位に貼り付け、縦位に半截竹管状工具で沈線を施した中期前半から中葉の土器である。(第142図576)は口縁部に半截竹管状工具の沈線を付けた中期前半から中葉の土器である。(第142図577)は口縁に沿って条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を施し、条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付け、弧状沈線で区画した中期前半から中葉の土器である。(第142図578)は口縁部に沿って斜位の沈線を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を施した中期前半から中葉の土器である。(第142図579)は(第143図579)と同一個体で、条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を施した中期前半から中葉の土器である。(第142図580)は口縁に沿って条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付け、沈線を施した中期前半から中葉の土器である。(第142図581)は波状口縁に沿って条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。

(第143図582)は口縁部が内反する器形で口縁部文様帯を無文にして、口縁部と胴部の境に粘土紐を横位に貼り、竹管状工具で粘土紐の上部に刺突を付ける。口径は約23.6cm、隆帯の幅１cmで胴部も無文土器の中期前半から中葉の土器である。(第143図583)は横位の隆帯を貼り、隆帯上部に円形の竹管文を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付た中期前半から中葉の土器である。(第143図584)は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けて、半截竹管状工具で楕円形の沈線を施した中期前半から中葉の土器である。(第143図585)は条の太さ約0.2cmのＲＬの多条縄文を付けた後、半截竹管状工具で弧状の沈線を施した中期前半から中葉の土器である。(第143図586)は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した中期前半から中葉の土器である。(第143図587)は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線を施した中期前半から中葉の土器である。(第143図588)は条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に沈線を施した中期前半から中葉土器である。(第143図589)は条の太さ約0.3cmのＲＬの繊維の硬い材料で撚り、半截竹管状工具で縦位沈線を施した中期前半から中葉の土器である。(第143図590)は条の太さ0.4cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した中期前半から中葉の土器である。(第143図591)は(第142図579)と同一個体である。(第143図592)は縦位沈線で区画した中に条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図593)は沈線で区画した中に条の太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図594)は口縁から条の太さ約0.4cm、長さ約2.2cmのＬＲの縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図595)は条の太さ約0.4cm、長さ約2.1cmのＲＬの縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図596)は条の太さ約0.3cm、ＲＬの多条縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図597)は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図598)は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図599)は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた薄手土器の中期前半から中葉の土器である。(第143図600)は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図601)は条の太さ約0.4cm、長さ約1.6cm



第142図　遺物集中地点出土遺物１



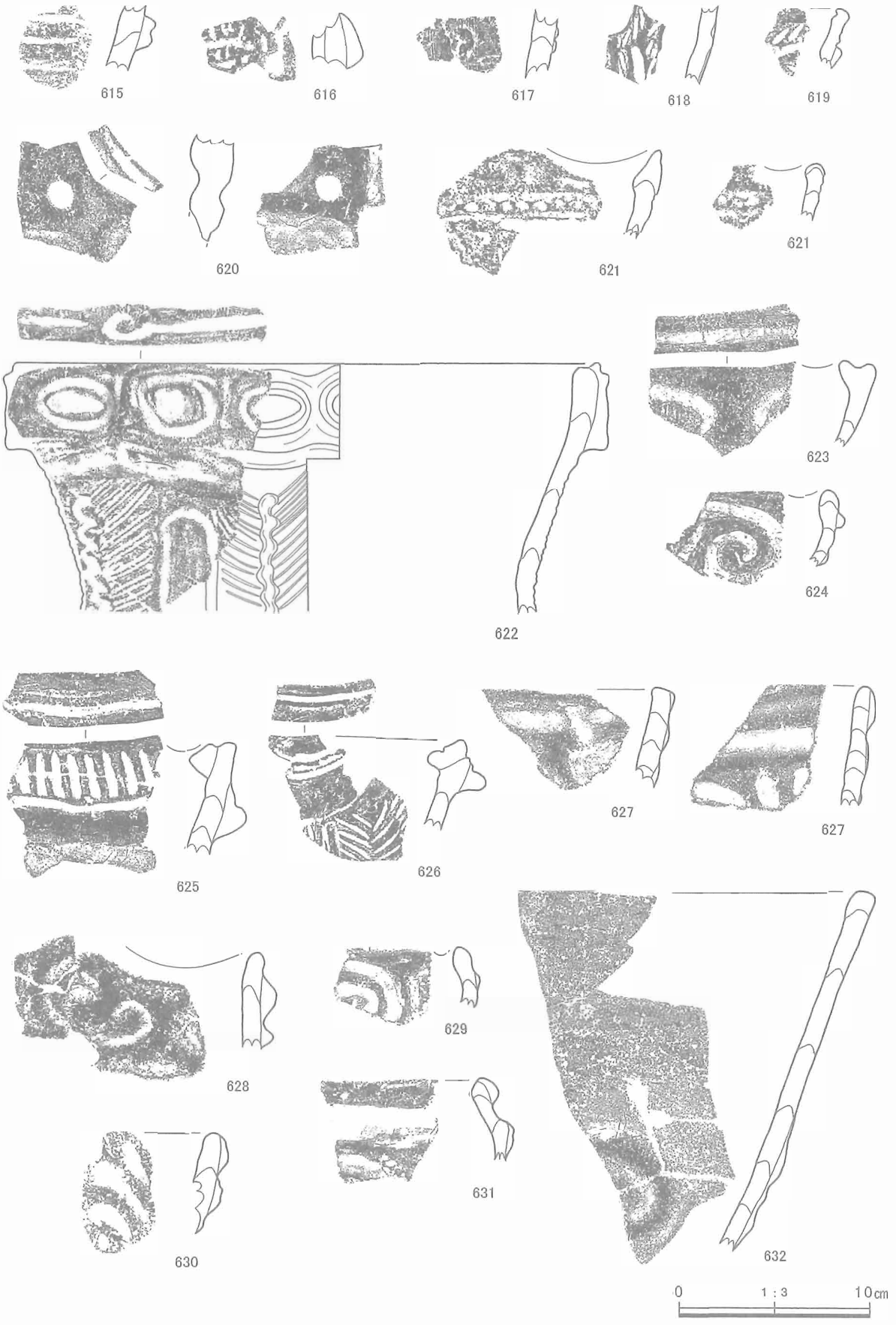
第143図　遺物集中地点出土遺物 2

のＲＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図602・603)は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図604) は薄手で条の太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図605) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図606) は条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図607) は条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図608) は条の太さ約0.3cmのＲの撚糸文を付けたと思われる中期前半から中葉の土器である。(第143図609) は条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図610) は半截竹管状工具の横位沈線を付けた中期前半から中葉の土器である。(第143図611) は条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付け、内面に条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文が付いた中期前半から中葉の土器と思われる。(第143図612) は無文土器で中期前半から中葉の土器と思われる。(第143図613) は半截竹管状工具の擦痕を付けた中期前半から中葉の土器と思われる。(第143図614)は底部の破片で中期前半から中葉の土器と思われる。

(第144図615) は粘土紐の隆帯を横位に貼り付けた曽利Ⅱ式土器である。(第144図616) は粘土紐の隆帯を横位に貼り、区画して半截竹管状工具で連続爪形文を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第144図617)は条線を縦に引き、上部に縦波状の隆帯を付ける曽利Ⅱ式土器である。(第144図618)はヘラ状工具で綾杉状に沈線を入れた曽利Ⅱ式の釣手土器の把手と思われる。(第144図619)はヘラ状工具で綾杉状に沈線を入れた曽利Ⅱ式の釣手土器の把手と思われる。(第144図620)は波状口縁で口唇部に沈線を施し、外面と内面に円形の窪みを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第144図621)は波状口縁の下に、半截竹管状工具の沈線で横位帯状に区画し、棒状工具で刺突を施した曽利Ⅲ式土器である。(第144図622)は口縁部に粘土帯を付け肥厚帯を作り楕円形と四角形のくぼみを施し、胴部の沈線区画内に半截竹管状工具で逆ハ状に沈線を入れ、波状の沈線を垂下した曽利Ⅲ式土器である。(第144図623) は口縁部に隆帯を付け肥厚させ、半截竹管状工具で楕円形区画した中に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第144図624)は口縁部に粘土帯を付け、渦巻き状に沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。(第144図625)は口縁部に沿って隆帯を付け肥厚化させ、半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。(第144図626)は口縁部に粘土帯を付け肥圧化させ、半截竹管状工具で区画した中に逆ハ状に沈線を入れた曽利Ⅲ式土器である。(第144図627) は口縁部に隆帯を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第144図628) は口縁部に隆帯を付け、渦巻きを施した曽利Ⅲ式土器である。(第144図629) は口縁部に隆帯を渦巻き状に付けた曽利Ⅲ式土器である。(第144図630) は口縁部に隆帯を渦巻き状に付けた曽利Ⅲ式土器である。(第144図631) は口縁部に隆帯を渦巻き状に付けた曽利Ⅲ式土器である。(第144図632)は口縁部を無文にし、胴部との境に隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。

(第145図633)は口縁部にＹ状の突起を付け、半截竹管状工具で弧状に沈線を入れた曽利Ⅲ式土器である。(第145図634・635) は口縁部を無文にした曽利Ⅲ式土器である。(第145図636) は把手で側面に円形刺突を付け、Ｓ状の沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。(第145図637～640・642)は双環状把手で曽利Ⅲ式土器である。(第145図641)は釣手土器の把手と思われ側面に半截竹管状工具で刺突を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第145図643) は隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第145図644～646・651・654) は隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第145図647・648) は隆帯を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第145図649) は隆帯を斜位に付けた曽利Ⅲ式土器である。(第145図650) は隆帯で縦位に区画した曽利Ⅲ式土器である。(第145図652) は隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第145図653) は隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第145図655)は隆帯で縦位に区画し、区画内に縦位の沈線を入れた曽利Ⅲ式土器である。

(第146図656) は隆帯で区画した中に、縦位の沈線を入れた曽利Ⅲ式土器である。(第146図657) は隆



第144図　遺物集中地点出土遺物3

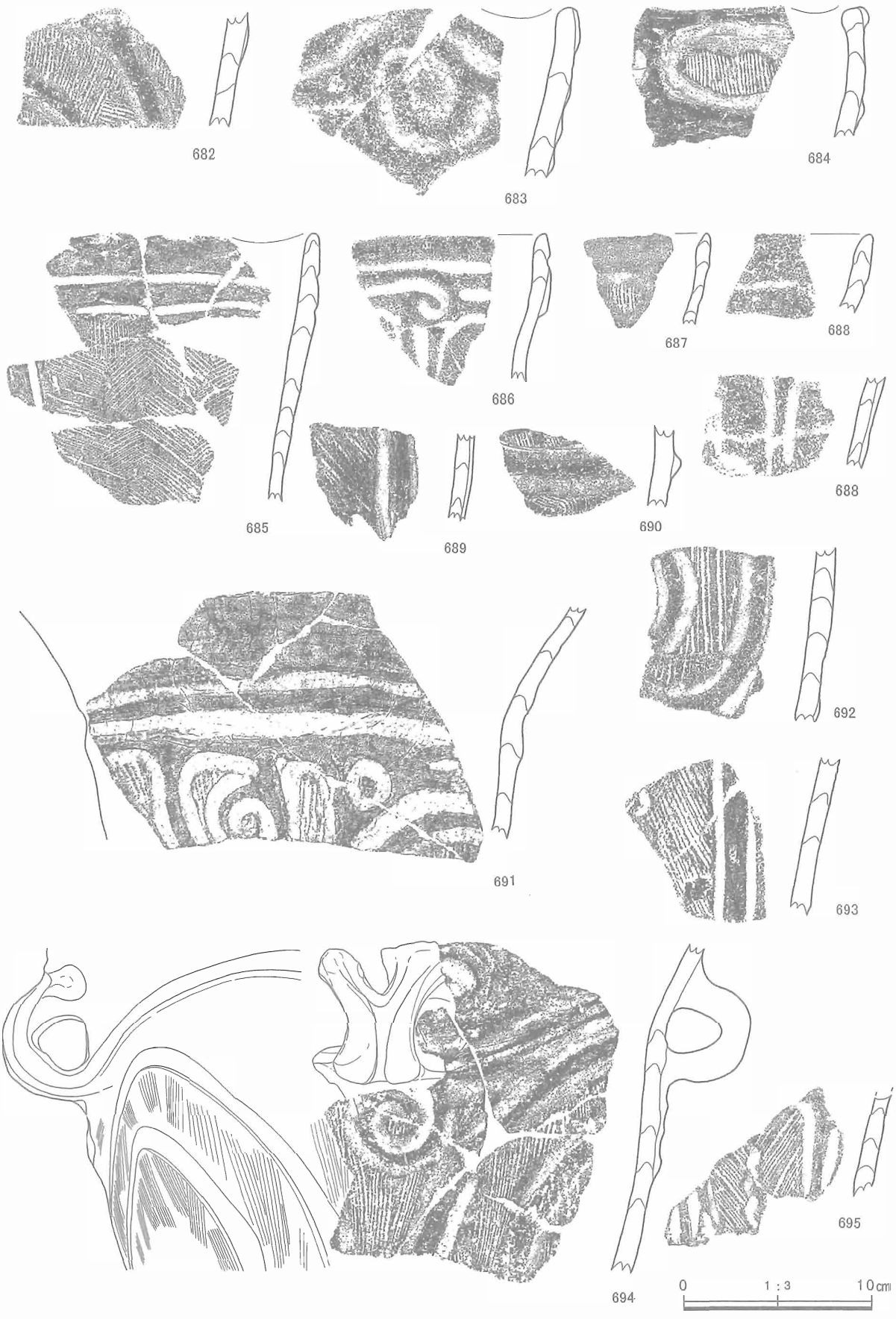
第145図　遺物集中地点出土遺物 4

第146図　遺物集中地点出土遺物 5

帯で渦巻き状に区画し、区画内に半截竹管状工具で斜位沈線とハの字の沈線を付ける曽利Ⅲ式土器である。(第146図658) は隆帯で区画した中に、ハの字の沈線を入れた曽利Ⅲ式土器である。(第146図659) は隆帯区画内に縦位の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図660)は低い渦巻き隆帯と渦巻き沈線の間に半截竹管状工具で縦位の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図661)は隆帯で渦巻きを描き、斜位の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図662)は縦位の粘土紐と斜位の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図663) は横位に隆帯で区画した中に、斜位の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図664)は低い隆帯を渦巻き状に付け、ハの字の沈線を入れた曽利Ⅲ式土器である。(第146図665) は低い隆帯を渦巻き状に貼り付け、櫛歯状工具で刺突を施した曽利Ⅲ式土器である。(第146図666・667)は半截竹管状工具の沈線で縦位区画をし、区画内に渦巻きと櫛歯状工具による沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図668)は縦位の低い隆帯を渦巻き状に貼り付け、櫛歯状工具で刺突を施した曽利Ⅲ式土器である。(第146図669) は口縁部と胴部の境に竹管状工具で刺突を施した曽利Ⅲ式土器である。(第146図670) は竹管状工具で円形沈線と弧状沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図671) は横位と弧状の細い隆帯で区画し、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図672)は把手の下に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図673) は半截竹管状工具で斜位の沈線を付けて、波状沈線を垂下した曽利Ⅲ式土器である。(第146図674)は低い隆帯と沈線を縦位に付け、中に竹管状工具で斜位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図675)は指頭で縦位に波状沈線を付け、竹管状工具の沈線も施した曽利Ⅲ式土器である。(第146図676)は半截竹管状工具で縦位に太い沈線を入れ、区画した中に竹管状工具で縦位の細い沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図677)は櫛歯状工具で波状沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図678)は胴部に半截竹管状工具の深い沈線で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図679)は太めの沈線で区画した中に、半截竹管状工具で細い縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第146図680)は底部近くに隆帯を2本垂下した曽利Ⅲ式土器である。(第146図681) は縦位沈線が付いた曽利Ⅲ式土器である。

(第147図682)は隆帯を渦巻き状に付け、区画内を櫛歯状工具で沈線を施した曽利Ⅲ式から曽利Ⅳ式土器である。(第147図683) は波状口縁に隆帯を渦巻き状に付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図684) は波状口縁に隆帯で楕円形に区画し、櫛歯状工具で縦位の沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図685)は波状口縁に沿って半截竹管状工具で横位に沈線区画し、櫛歯状工具で鋸歯状の沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図686)は横位と渦巻き隆帯を付け、区画内に櫛歯状工具で斜位の沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図687)は沈線の区画内に櫛歯状工具で縦位の沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図688) は半截竹管状工具で沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図689) は縦位に隆帯を付け、区画内に斜位の沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第147図690)は隆帯を横位に付け、櫛歯状工具で沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第147図691)は指頭状の横位沈線を付け、胴部に隆帯の渦巻と沈線で区画を施し、縦位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図692)は縦位隆帯で区画した中に、半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図693)は隆帯で渦巻き状に区画した中に、半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図694)は口縁部と胴部の境に双環状把手を付け、渦巻き隆帯や弧状隆帯で区画した中に、櫛歯状工具の沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第147図695)は隆帯で区画した中に櫛歯状工具で斜位と縦位沈線を付け、指頭状の縦波状沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。

(第148図696)は渦巻き隆帯で区画した中に、半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図697)は隆帯で区画して半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図698) は胴部に隆帯を縦位に付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図699) は縦位の隆帯を付け半截竹管状工具でハ状に沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第148図700)は隆帯を付け半截竹管状工具で縦位沈

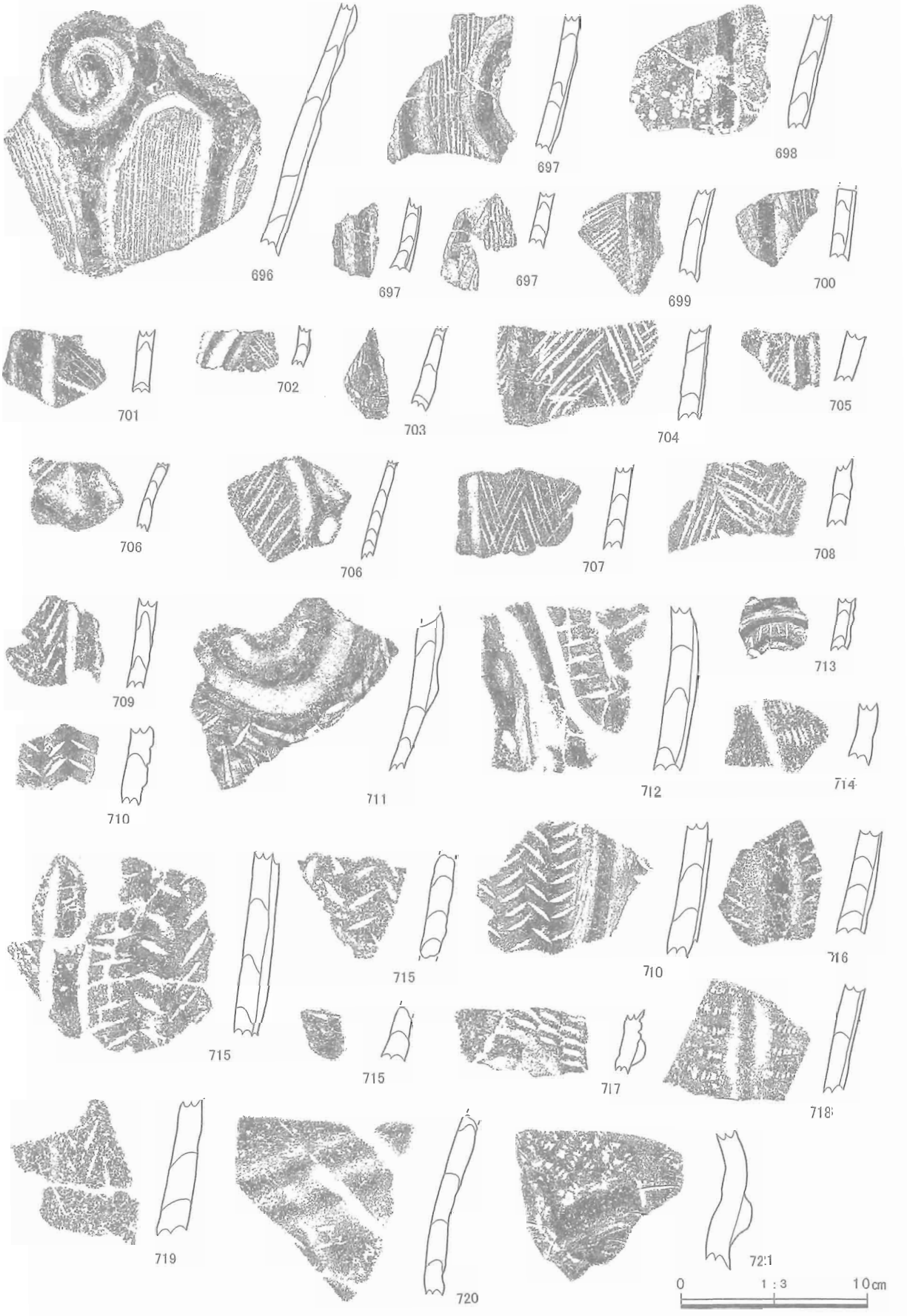


第147図　遺物集中地点出土遺物６

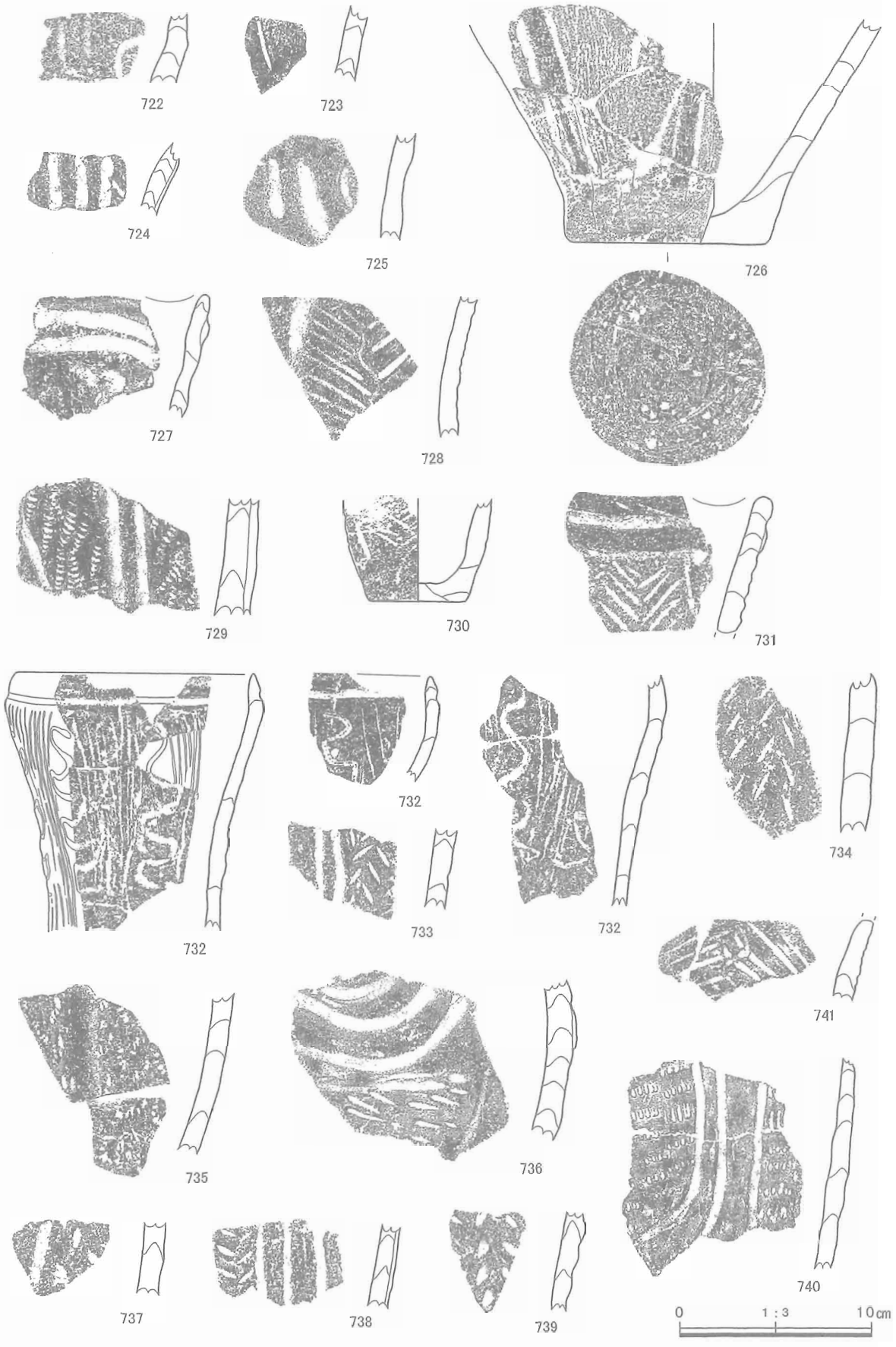
線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第148図701・702) は隆帯で区画した中に半截竹管状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図703) は沈線を縦位に付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図704～709) は胴部に隆帯を付け半截竹管状工具でハ状沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第148図710) はヘラ状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図711) は隆帯で渦巻きを付け、区画内にヘラ状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図712) はヘラ状工具で横位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図713) は渦巻き状隆帯を付けて区画した中に、ヘラ状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図714) は隆帯で区画した中にヘラ状工具で斜位に刺突を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図715) は隆帯で区画した中にヘラ状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図716) は隆帯で区画した中にヘラ状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図717) は隆帯で区画した中にヘラ状工具で横位刺突を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図718) は隆帯で区画した中に櫛歯状工具で横位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図719) はヘラ状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図720) は渦巻き状隆帯で区画した中に櫛歯状工具で刺突を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第148図721) は隆帯で区画した中に櫛歯状工具で刺突を付けた曽利Ⅳ式土器である。

(第149図722) は半截竹管状工具で縦位に沈線を付け、中に沈線の渦巻きと細い縦沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第149図723) は半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第149図724) は半截竹管状工具で縦位に太い沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第149図725) は半截竹管状工具で太い渦巻き沈線を付けたと思われる曽利Ⅳ式土器である。(第149図726) は底部付近の破片で、縦隆帯区画した中に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第149図727) は口縁に沿って指頭状で2本の弧状沈線を付け、同一工具で逆ハ状に沈線を付けた曽利Ⅳ式から曽利Ⅴ式土器である。(第149図728) は低い縦隆帯に沿って指頭で沈線を付け、半截竹管状工具で逆ハ状の沈線を施し、縦位の波状沈線を付けた曽利Ⅳ式から曽利Ⅴ式土器である。(第149図729) は縦隆帯で区画した中に、半截竹管状工具で刺突を付けた曽利Ⅳ式から曽利Ⅴ式土器である。(第149図730) は底部付近の破片で半截竹管状工具で沈線を縦位と斜位に施した曽利Ⅳ式から曽利Ⅴ式土器である。(第149図731) は波状口縁に沿って低い隆帯を貼り、ヘラ状工具でハ状に沈線を施した曽利Ⅴ式土器である。(第149図732) は口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線を付け、縦位沈線と縦波状沈線を施した曽利Ⅴ式土器である。(第149図733) は半截竹管状工具で縦位に区画し、ヘラ状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第149図734) はヘラ状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第149図735) は縦位隆帯で区画した中に、櫛歯状工具による刺突を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第149図736) は隆帯と半截竹管状工具で渦巻沈線を付けて区画し、半截竹管状工具で沈線を施した曽利Ⅴ式土器である。(第149図737) は半截竹管状工具の沈線で縦位区画し、半截竹管状工具で刺突を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第149図738) は縦位沈線で区画し、ヘラ状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第149図739) は半截竹管状工具でハ状に刺突を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第149図740) は半截竹管状工具の弧状沈線で区画した中に、櫛歯状工具で刺突を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第149図741) は胴部に半截竹管状工具でハ状に沈線を付け、同一工具で縦波状に沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である。

(第150図742) は半截竹管状工具で太い沈線を付け、下にハ状に沈線を施した曽利Ⅴ式土器である。(第150図743) は竹管状工具で縦位に区画し、ハ状沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第150図744) は縦位に隆帯で区画し、ハ状沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である。(第150図745) は底部付近の破片で、縦位隆帯で区画した中に竹管状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅴ式土器である (第150図746) は口縁に沿って条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具の横位沈線で区画している。口縁部内面に帯状の粘土帯を貼り付け段を施した在地系加曽利Ｅ2式から在地系加曽利Ｅ3式土器である。(第150図747) は波状口縁に沿って隆帯を付けて楕円形に区画し、中に条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け、口縁と胴部



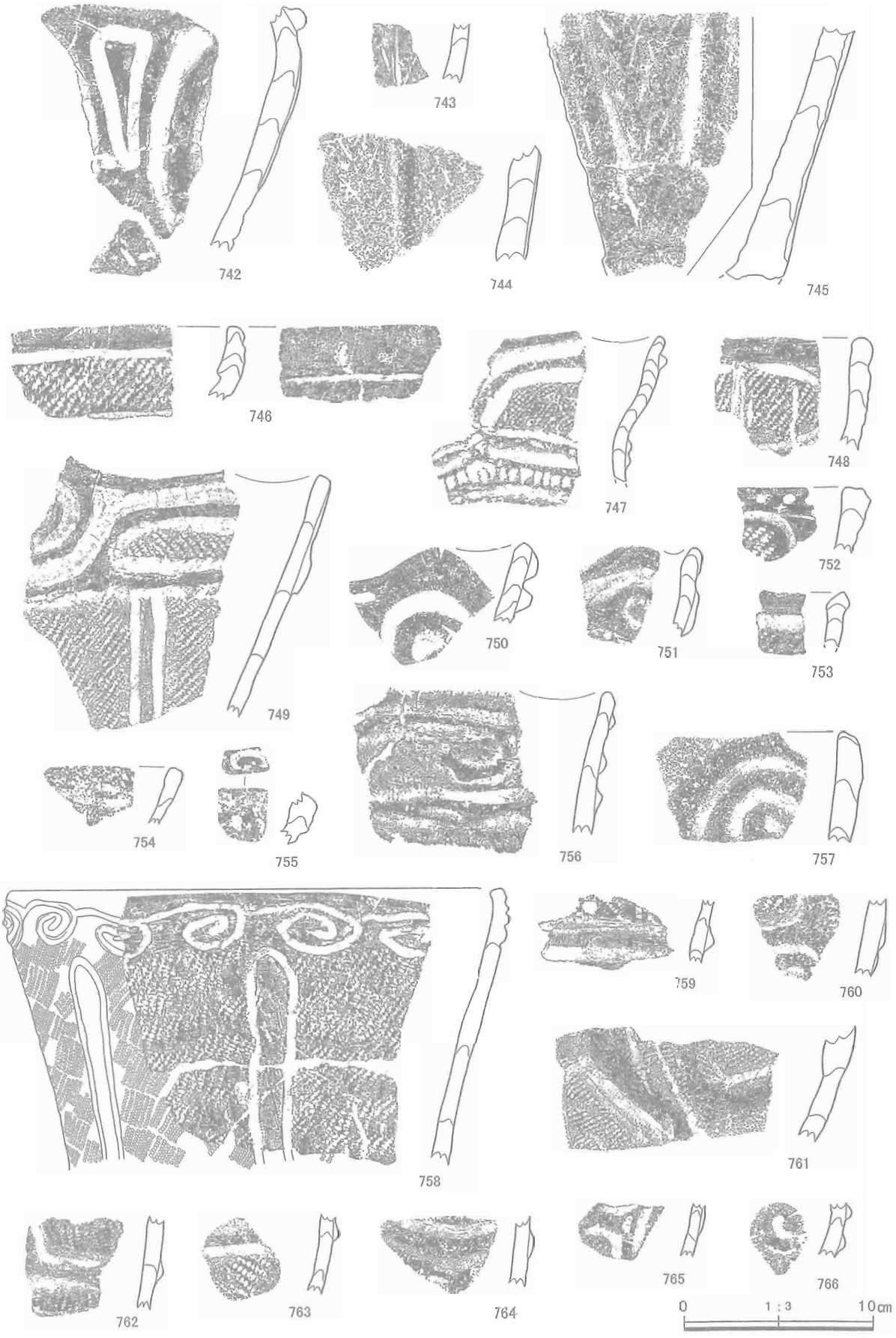
第148図　遺物集中地点出土遺物７



第149図　遺物集中地点出土遺物 8

の境の隆帯に沿って、竹管状工具で刺突を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図748)は口縁に半截竹管状工具で楕円形に区画し、中に条の太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図749) は波状口縁の波頂部に隆帯で渦巻きと楕円区画をし、区画内に条の太さ約0.3cm、長さ約2.1cmのＲＬの多条縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図750・751)は波状口縁の波頂部に隆帯で渦巻きを付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図752)は口唇部の直下に円形刺突を付け、半截竹管状工具で区画した中に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第150図753) は口縁部に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図754) は風化しているが口縁部から縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第150図755) は口唇部に沈線を付け、口縁部に刺突を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第150図756) は粘土紐隆帯で渦巻きを付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図757)は粘土紐隆帯で渦巻きを付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図758) は口縁から条の太さ約0.4cm、原体の長さ約２cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で渦巻き沈線を施し、胴部も沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第150図759)は横位隆帯を付け、条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文と竹管状工具の刺突を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図760) は半截竹管状工具で渦巻き区画し、条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図761) は隆帯で区画し、条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図762) は隆帯で区画し、条の太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図763) は隆帯で横位に区画し、条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第133図764) は隆帯を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第150図765) は低い隆帯を付け区画した中に縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第150図766)は渦巻き隆帯を付けた加曽利Ｅ３式土器である。

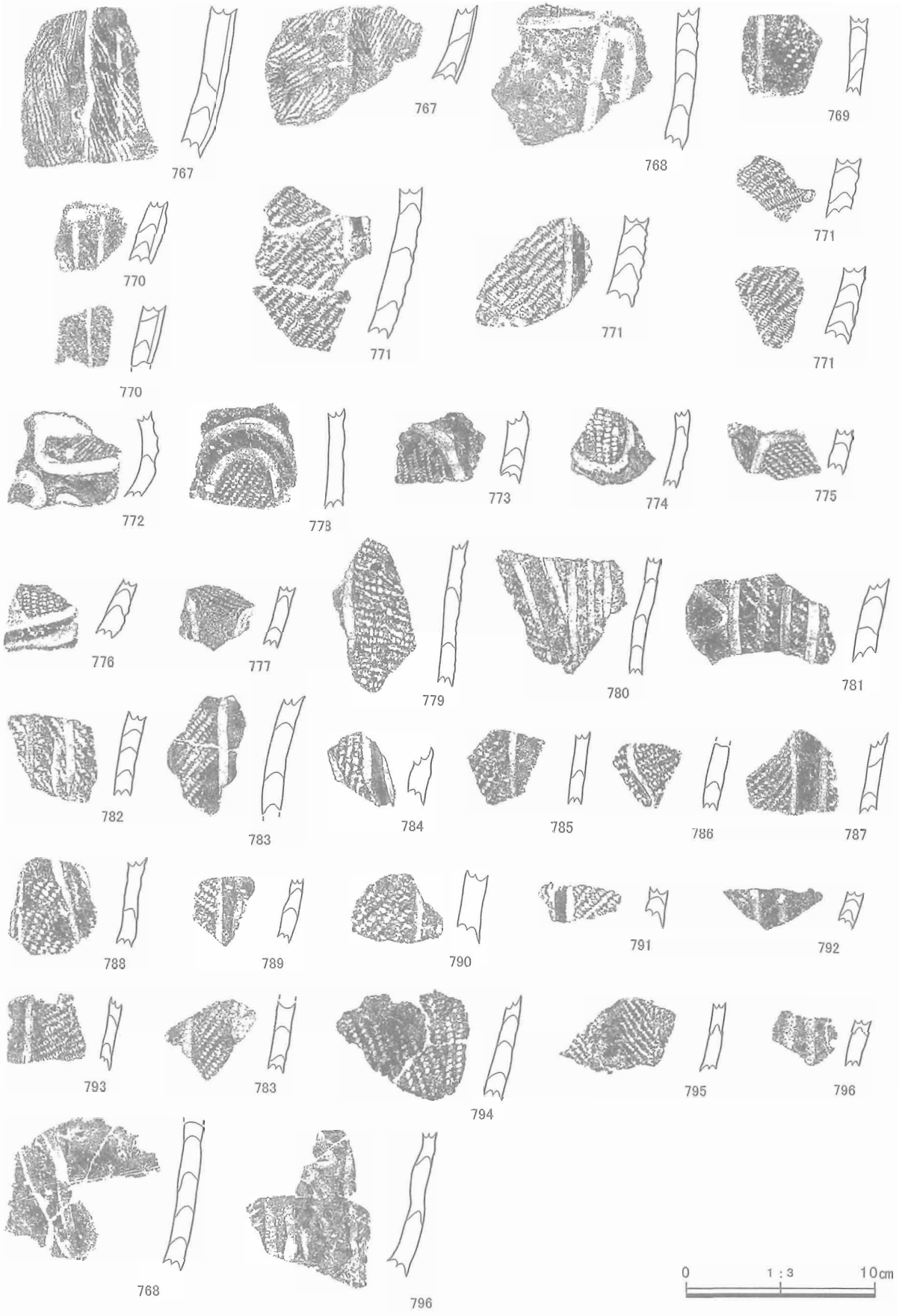
(第151図767)は隆帯を縦位に付けて条の太さ約0.4cm、長さ約1.3cmのＲＬ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図768)は半截竹管状工具の沈線と縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図769)は半截竹管状工具で縦位に区画し、条の太さ約0.3cm、長さ約1.6cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図770) は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図771) は条の太さ約0.6cmのＲＬの多条縄文を付け、半截竹管状工具により縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図772)は半截竹管状工具の沈線で方形や渦巻きに区画し、区画内に条の太さ約0.1cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図773) は半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図774) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具による沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図775) は条の太さ約0.3cmのＬＲの多条縄文を付け、半截竹管状工具による沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図776) は条の太さ約0.4cmのＲＬの多条縄文を付け、半截竹管状工具による沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図777) は条の太さ約0.4cmのＬＲの多条縄文を付け、半截竹管状工具による沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図778)は半截竹管状工具による沈線で区画し、区画内に太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図779) は条の太さ約0.4cm、長さ約２cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具による沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図780) は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具による縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図781)は半截竹管状工具による縦位と縦波状沈線を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図782) は条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を施し、半截竹管状工具の縦位と縦波状の沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図783)は条の太さ約0.4cm、長さ約2.4cmのＲＬ縄文を施し、半截竹管状工具の縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図784) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具の



第150図　遺物集中地点出土遺物 9

縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図785) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図786) は条の太さ約0.4cmのＲＬの多条縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図787) は半截竹管状工具の縦位沈線で区画し、条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図788) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具の斜位沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図789) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図790) は太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で斜位沈線区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図791) はＬの条で太さ約0.5cmと約0.3cmを撚ったＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図792) は半截竹管状工具で縦位区画し、縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図793) はＲＬの縄文を付け半截竹管状工具で縦位区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第151図794) は条の太さ約0.5cm、長さ約2.5cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第151図795) は条の太さ約0.3cm、長さ約1.7cmのＬＲの開端を自身で結節した縄文を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第151図796) は竹管状工具で縦位と縦位波状の沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。

(第152図797) は底部付近の破片で隆帯を縦位に垂下した加曽利Ｅ３式土器である。(第152図798) は底部付近の破片で条の太さ約0.3cm、長さ約２cmのＬＲの多条縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で渦巻きや区画をした加曽利Ｅ３式土器である。(第152図799) は底部付近の破片で底面に木葉痕が付いており、竹管状工具で縦位と縦波状沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第152図800) は口縁部に沿って横位の沈線を付け縄文を施して、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図801) は波状口縁直下から条の太さ約0.5cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図802) は口縁部から条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図803) は口縁に沿って半截竹管状工具の沈線を付け、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図804) は口縁に沿って断面三角の隆帯を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図805) は口縁に沿って条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図806) は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図807) は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図808) は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図809) は隆帯で渦巻きを付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図810) は隆帯上部に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図811) は隆帯を付け、半截竹管状工具で縦位沈線と楕円に区画して、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図812) は隆帯を横位に貼った加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図813) は隆帯を付け沈線で区画して縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図814) は幅広の隆帯を貼り指頭で円形に区画し、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図815) は隆帯を付け区画内に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図816) は隆帯を縦に貼り、区画内に縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図817) は条の太さ約0.3cm、長さ約1.4cmのＬＲの縄文を付け縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図818) は条の太さ約0.3cm、長さ約1.4cmのＬＲの縄文を付け縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器であり、土器の接合痕が良く残っている。(第152図819) は縄文を付けて縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図820) は

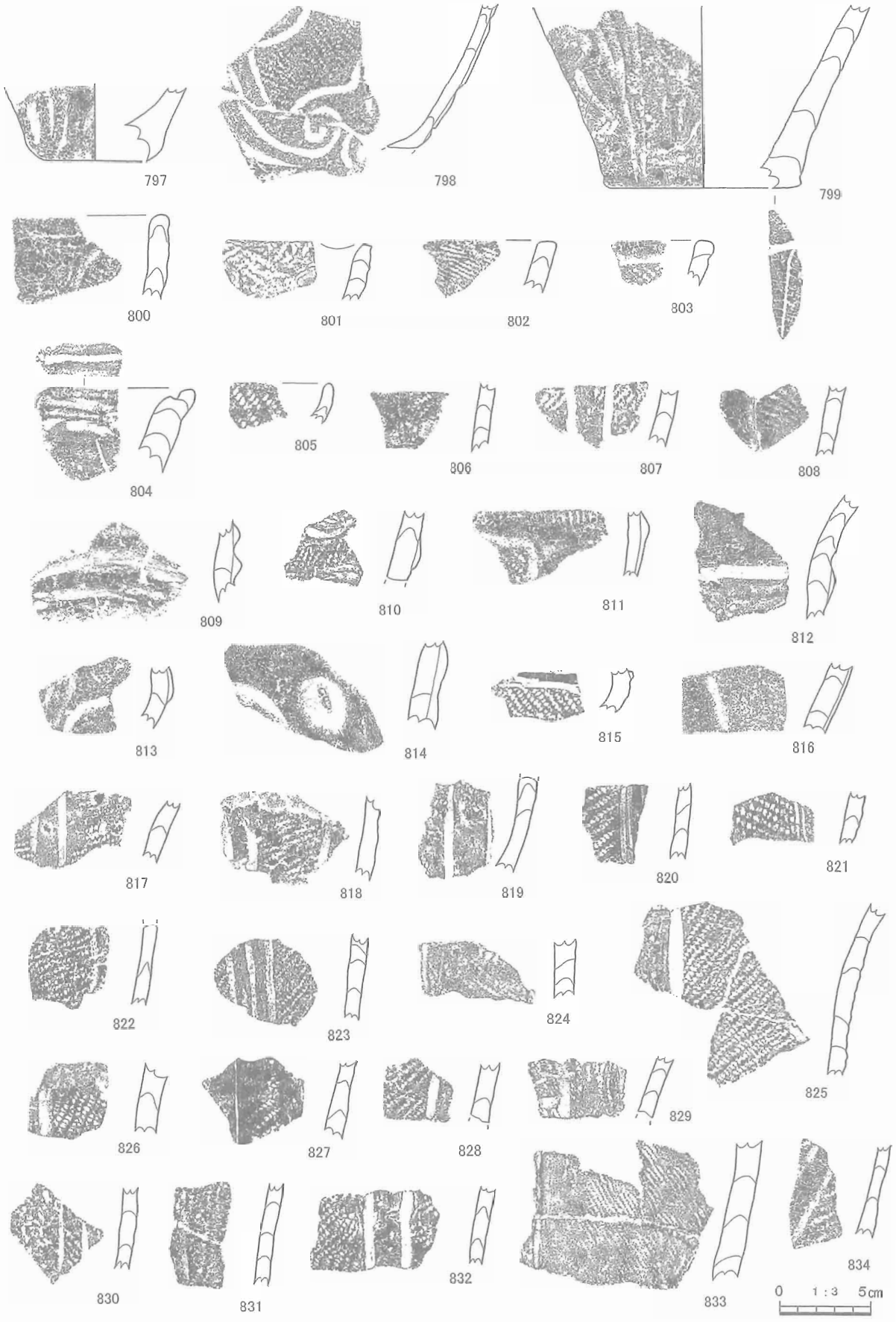


第151図　遺物集中地点出土遺物10

条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けて、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図821）は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けて、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図822）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図823）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けて、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図824)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けて、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図825)は条の太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図826）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けて、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図827)は条の太さ約0.3cm、長さ約1.2cmのＲＬの縄文を付け、ヘラ状工具で縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図828）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図829）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位と横位に沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図830)は条の太さ約0.3cmのＬＲの開端を自身で結節した縄文を縦位に回転し、縦位に沈線を施した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第152図831）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図832）は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付けて、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図833)は条の太さ約0.2cm、長さ約1.8cmのＲＬの縄文を付けて、縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第152図834）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けて、縦位に沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

(第153図835）は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け横位沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第153図836)は縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第153図837)は条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第153図838)は条の太さ約0.3cm、長さ約2.1cmのＲＬの縄文を付け縦位沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第153図839）は条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第153図840)は条の太さ約0.3cm、長さ約2.5cmのＬＲの多条縄文を付け、半截竹管状工具で隅丸方形に沈線区画した加曽利Ｅ４式土器である。

(第154図841）は波状口縁に条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、２個単位の把手が付いた加曽利Ｅ４式土器である。(第154図842)は口縁が内湾し、半截竹管状工具で横位と曲線の沈線を付け、半截竹管状工具で条線を斜位に施した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図843）は口縁部から条の太さ約0.3cmで多条のＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図844)は口縁に竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.3cm、長さ約1.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第154図845）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図846)は口縁に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第154図847）は粘土紐を横位に付け、条の太さ約0.3cm、長さ約1.6cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図848)は条の太さ約0.2cm、長さ約1.8cmのＬ縄文と縦位沈線を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第154図849）は条の太さ約0.4cmのＲＬの多条縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図850）は条の太さ約0.5cmのＲＬの多条縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図851)は縄文を付け縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図852）は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図853）は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図

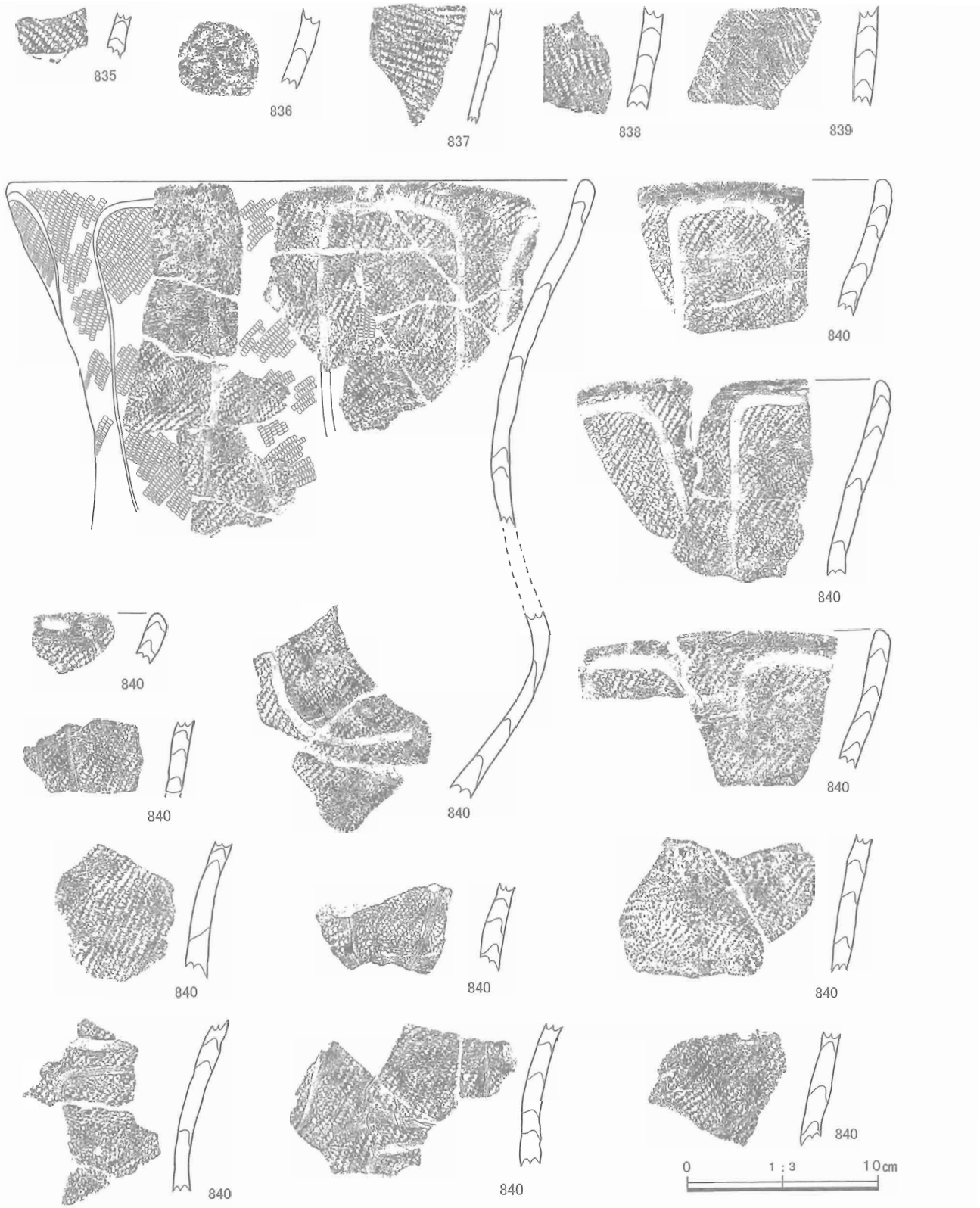


第152図　遺物集中地点出土遺物11

854)は条の太さ約0.3cmと約0.4cmの条を撚ったＲＬ縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図855) は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図856) は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図857) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図858)は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図859)は条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図860) は縦位に沈線を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第154図861) は条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第154図862) は条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第154図863)は底部付近の破片で底経7.5cmである。文様は条の太さ約0.4cmのＲＬの多条縄文を付け、縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第154図864)は浅鉢形土器の底部付近の破片で底経が約9.8cmである。文様は条の太さ約0.4cm、長さ約２cmのＲＬ縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。

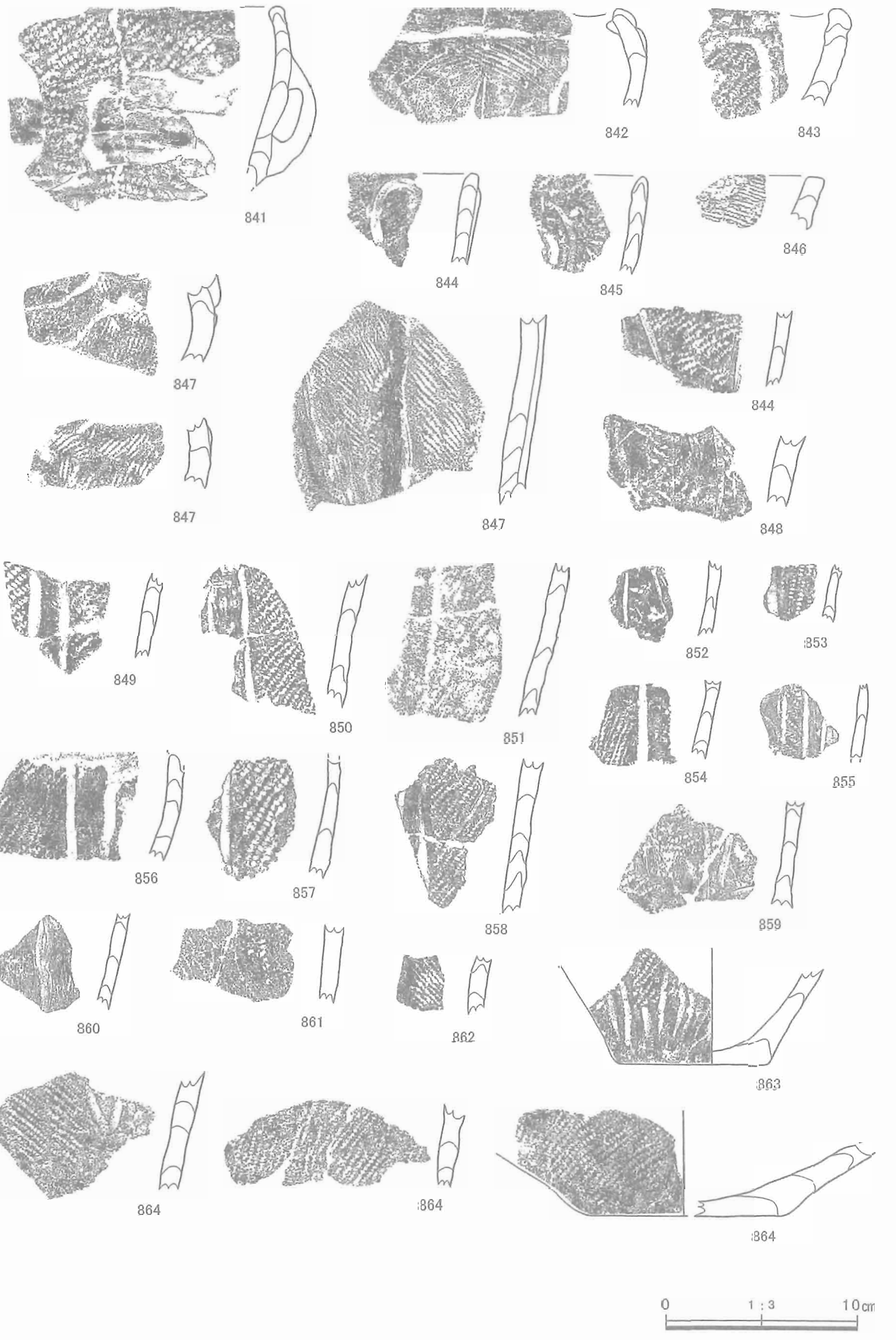
(第155図865) は (第222図2568) と同一個体で、条の太さ約0.2cm、長さ約2.0cmのＲＬの多条縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した在地系加曽利Ｅ４式土器である。(第155図866)は口縁に沿って荒い横位沈線を付け、条の太さ約0.4cm、長さ約2.0cmのＬＲ縄文を施す。胴部上半に太い半截竹管状工具で逆Ｕ状の沈線区画し、中に細い半截竹管状工具で雑に縦位や斜位沈線を付け、縄文との文様転換をした加曽利Ｅ４式と曽利Ｖ式土器の折中である。(第155図867) は条の太さ約0.2cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位に付け、沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第155図868)は縦位に半截竹管状工具で区画し、条の太さ約0.4cmのＲＬの開端の中間を自身で結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第155図869) は刺突を付けた隆帯で区画し、条の太さ約0.4cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第155図870)は条の太さ約0.3cm、長さ約2.6cmでＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位回転し、縦位の半截竹管状工具で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第155図871) は条の太さ約0.3cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、縦位の半截竹管状工具で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第155図872) は縦位隆帯で区画し、条の太さ約0.2cmのＬＲの開端を自身で結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第155図873) は条の太さ約0.3cmのＬＲの開端を自身で結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第155図874・第156図876)は縦位の渦巻き垂下隆帯で区画し、区画内に条の太さ約0.3cm、長さ約2.0cmでＬＲの開端の条を自身で結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３新式土器である。(第155図875)は波状口縁を内湾させ胴部との境に低い隆帯を付け、隆帯に沿って半截竹管状工具で刺突を施し、胴部は条の太さ約0.4cmでＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。

(第156図877) は口縁部から条の太さ約0.3cmのＬＲの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、半截竹管状工具の沈線で方形に区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図878)は口縁部から条の太さ約0.4cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、半截竹管状工具で弧状沈線を付けた伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器で補修孔を付けている。(第156図879) は口縁部から条の太さ約0.2cmのＬＲの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、半截竹管状工具で長方形に沈線を付けた伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図880)は口縁部から条の太さ約0.2cmのＲＬの開端を自身で結節し、縦位に回転施文して半截竹管状工具の縦位沈線と縦位隆帯で区画して、隆帯上はヘラ状工具でハ状の沈線を付けた伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図881) は口縁部から条の太さ約0.3cmのＲＬの原体を斜位

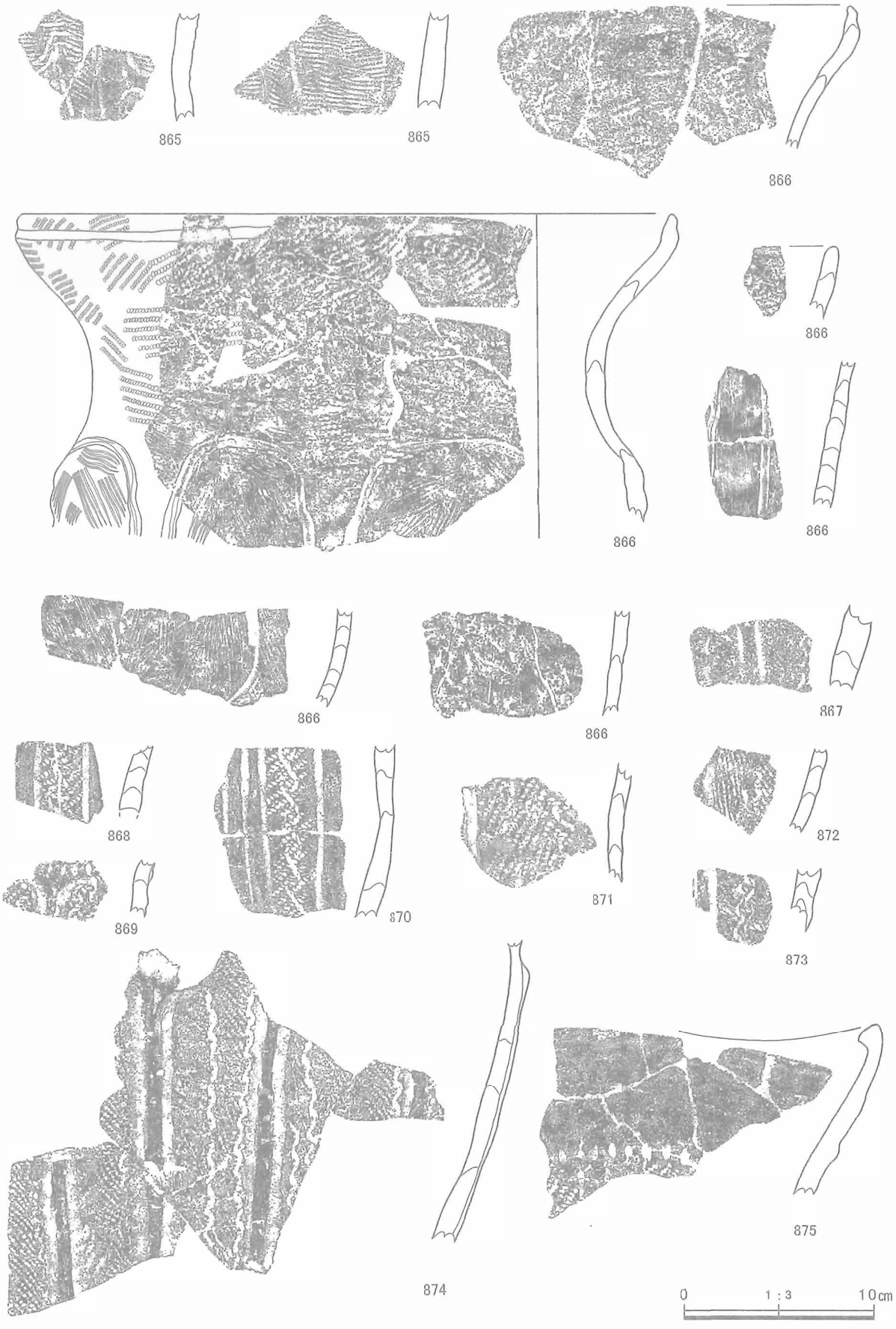


第153図　遺物集中地点出土遺物12

に付け、竹管状工具の沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。（第156図882）は口縁部に２本の横位隆帯を付け、隆帯の間に半截竹管状工具で刺突し、条の太さ約0.2cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、竹管状工具で沈線を付けた伊那系加曽利Ｅ３式か



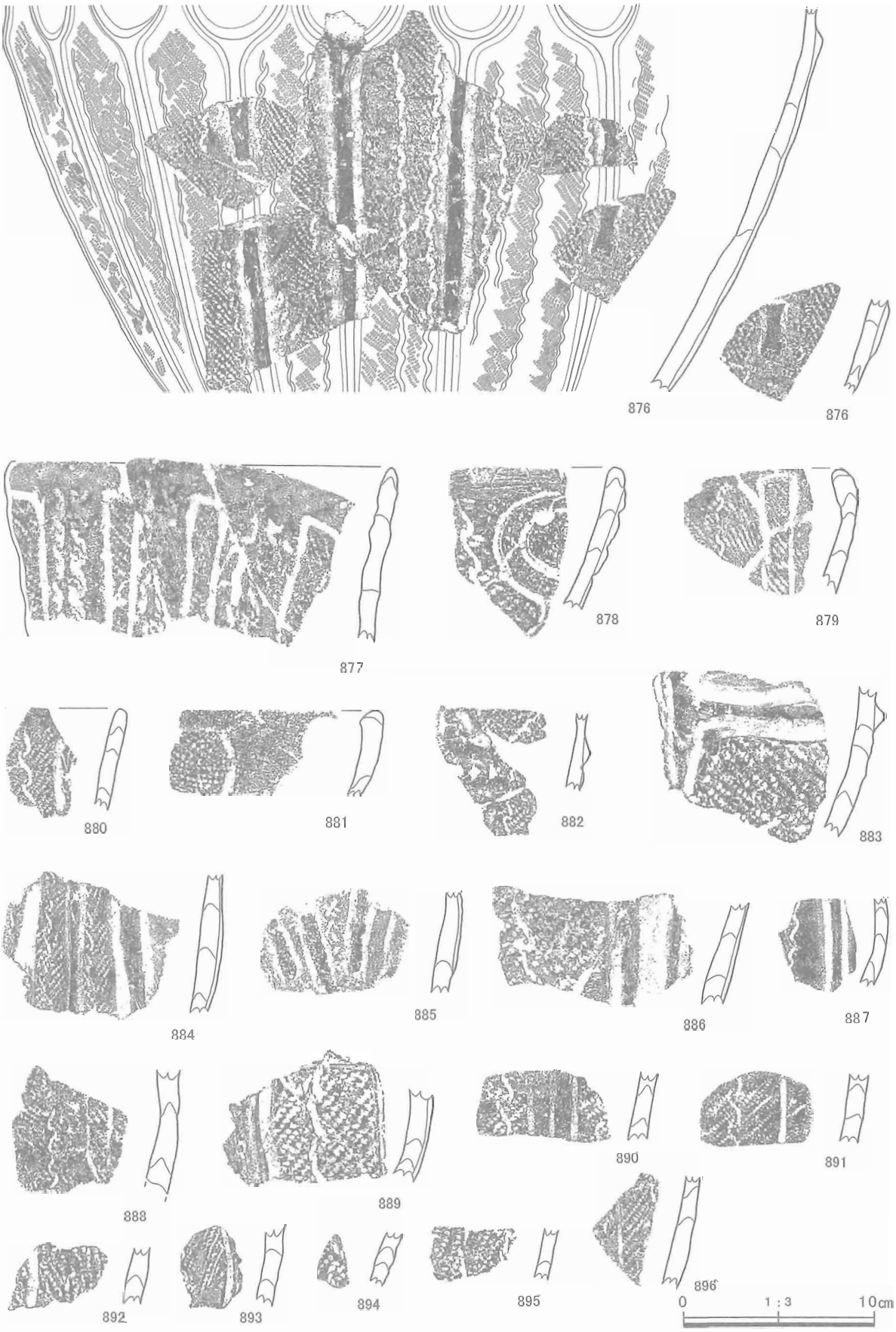
第154図　遺物集中地点出土遺物13



第155図　遺物集中地点出土遺物14

ら伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図883) は隆帯で区画して条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付け、隆帯で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図884) は条の太さ0.2cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、縦位隆帯を付けて区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図885) は条の太さ0.2cmのＬの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、隆帯で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図886) は条の太さ約0.5cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位に回転施文し、縦位隆帯で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図887) は条の太さ約0.2cmのＬＲの開端を結節した原体を縦位に回転施文し、縦位隆帯で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図888) は条の太さ約0.2cmでＬＲの開端の条を自身で結節し縦位に回転施文し、縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図889) は条の太さ約0.5cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位回転し、縦位隆帯で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図890) は条の太さ約0.4cmのＲＬの開端を自身で結節し原体を縦位回転し、縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図891) は条の太さ約0.2cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位回転し、縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図892) は条の太さ約0.3cmのＲＬの開端を自身で結節し縦位回転を付け、縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図893) は条の太さ約0.2cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位回転し、弧状沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図894) は条の太さ約0.4cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図895) は条の太さ約0.3cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第156図896) は条の太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文の開端を自身で結節した原体を縦位回転して、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。

(第157図897) は条の太さ約0.2cmのＲＬの開端の端部を２箇所で結節した原体を縦位回転し、半截竹管状工具の沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ４古式土器である。(第157図898) は口縁部を波状にして沈線で渦巻きを施し、一部に条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を付けた咲畑式土器である。(第157図899) は口縁部に半截竹管状工具の渦巻き沈線を付けた咲畑式土器である。(第157図900) は口縁部に半截竹管状工具の沈線で連弧文を付けた咲畑式土器である。(第157図901) は条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を付けて、半截竹管状工具で渦巻き沈線を施した咲畑式土器である。(第157図902) は半截竹管状工具の沈線で楕円形に区画した中に、条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けて、半截竹管状工具で渦巻き沈線を施した咲畑式土器である。(第157図903) は口縁部に隆帯を貼り付け、半截竹管状工具で太い沈線を施した咲畑式土器である。(第157図904) は縄文を付け竹管状工具で連弧状の沈線を施した咲畑式土器である。(第157図905) は半截竹管状工具で連弧状の沈線を付けた咲畑式土器である。(第157図906) は波状口縁に沿って条の太さ約0.3cmのＲ縄文を付け、半截竹管状工具で連弧状沈線を施した咲畑系土器である。(第157図907) は薄く縄文を付け、半截竹管状工具で連弧状沈線を施した咲畑系土器である。(第157図908) は口縁に高い隆帯で渦巻きを付け、中に竹管状工具で刺突を施し、下に縄文を付けた咲畑系土器である。(第157図909) は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具で渦巻き沈線を付けた咲畑系土器である。(第157図910) は縦位に波状沈線を付けた咲畑系土器である。(第157図911) は半截竹管状工具で渦巻き沈線を施した咲畑式土器と曽利Ⅲ式土器の折中型式である。(第157図912) は波状口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を引き、沈線内に竹管状工具で交互に刺突して、波状の沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第157図913・914) は口縁部に沿って竹管状工具で沈線を引き、沈線に沿って竹管状工具



第156図　遺物集中地点出土遺物15

の刺突を付け、口縁部と胴部の境に半截竹管状工具で連弧文を施した東鎌塚原式土器である。(第157図915) は口縁部と胴部の境に竹管状工具で刺突を付けた東鎌塚原式土器である。(第157図916) は口縁部から櫛歯状工具で縦位に条線を入れ、口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を付け、沈線内に交互に刺突を施した東鎌塚原式土器である。(第157図917)は波状口縁から地文として半截竹管状工具で斜位に沈線を入れ、同一工具で連弧文と弧状刺突を付けた東鎌塚原式土器である。(第157図918)は口縁部から半截竹管状工具で地文の斜位沈線を付け、竹管状工具で弧状に太い沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第157図919) は口縁から半截竹管状工具で地文の沈線を付け、同一工具で弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第157図920)は口縁から地文に半截竹管状工具の沈線を縦位に付け、沈線風の刺突で連弧文を施した東鎌塚原式土器である。(第157図921)は口縁から地文に半截竹管状工具で浅く沈線を付け、沈線を横位と弧状に施した東鎌塚原式土器である。(第157図922)は厚手で波状口縁に半截竹管状工具で沈線を付け、縦位に雑な地文の沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第157図923)は口縁が内湾して指痕が弧状付く東鎌塚原式土器である。(第157図924)は地文に竹管状工具で斜位沈線を入れ、半截竹管状工具で弧状に沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第157図925)は地文に半截竹管状工具で斜位沈線を入れ、同一工具で弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第157図926)は胴部に半截竹管状工具で縦位と弧状に沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第157図927～941) は胴部に半截竹管状工具で地文の縦位沈線や斜位沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第157図942) は胴部に条の太さ約0.2cmのＲＬの開端を自身で結節した原体を縦位回転して、半截竹管状工具の沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第157図943) は口縁部を無文にした浅鉢形で中期後半の土器である。(第157図944) は条の太さ約0.2cmのＲＬの多条縄文を口縁から付けた中期後半の土器である。(第157図945)は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた中期後半の土器である。(第157図946) は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けた中期後半の土器である。(第157図947)は条の太さ約0.2cmと約0.4cmの太さの違う条を撚り合わせたＲＬの原体を、縦位回転した中期後半と思われる土器である。

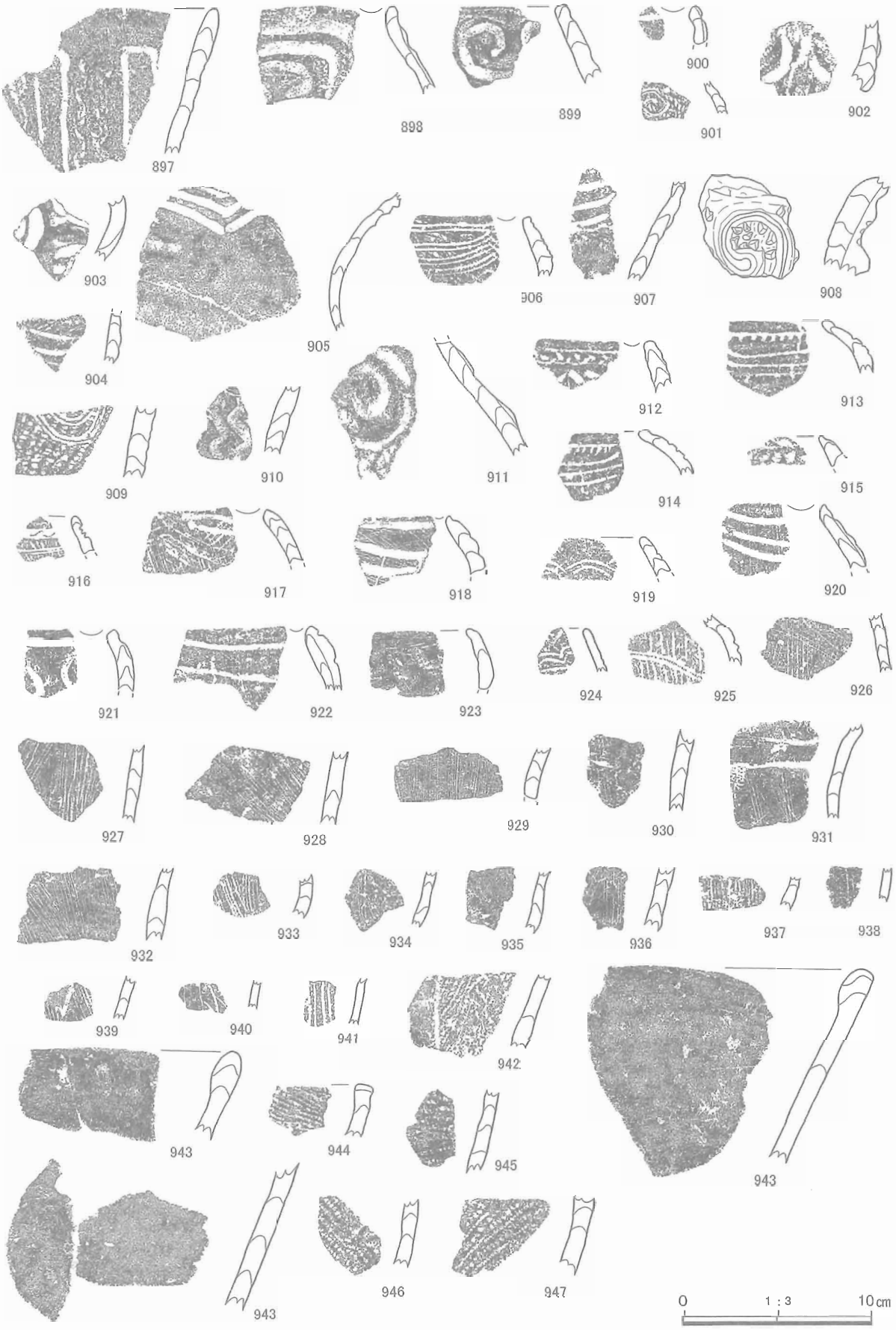
(第158図948)は口縁部と胴部の間に断面三角の隆帯を付けた鍔付土器で中期後葉と思われる。(第158図949～955) は無文の口縁部の破片であり中期末と思われる。(第158図956) は条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図957)は横位の沈線を付けた中期の土器である。(第158図958) は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図959) は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図960) は条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図961) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図961・962) は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図963) は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図964) は条の太さ約0.4cmと約0.2cmの太さの違う条を寄り合わせたＲＬの縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図965) は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図966・967)は条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた中期の土器と思われる。(第158図968) は底部で中期の土器と思われる。(第158図969) は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を付けた称名寺式土器である。(第158図970) は半截竹管状工具の太い沈線で渦巻状に区画した中に、条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を付けた称名寺式土器である。(第158図971) は縦位に沈線を付けた称名寺式土器である。(第158図972) は半截竹管状工具で楕円形と縦位沈線を付けた後期初頭土器である。

(第159図973) は縦位に沈線を付けた掘之内Ⅰ式土器である。(第159図974) は半截竹管状工具で縦位に沈線を付けて区画し、区画内に半截竹管状工具で地文に薄く斜位沈線を付けた林ノ峰Ⅱ式併行土器である。(第159図975) は半截竹管状工具で沈線を付けた後期前半土器である。(第159図976) は口縁近くに条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた後期前半と思われる土器である。(第159図977) は口縁から条

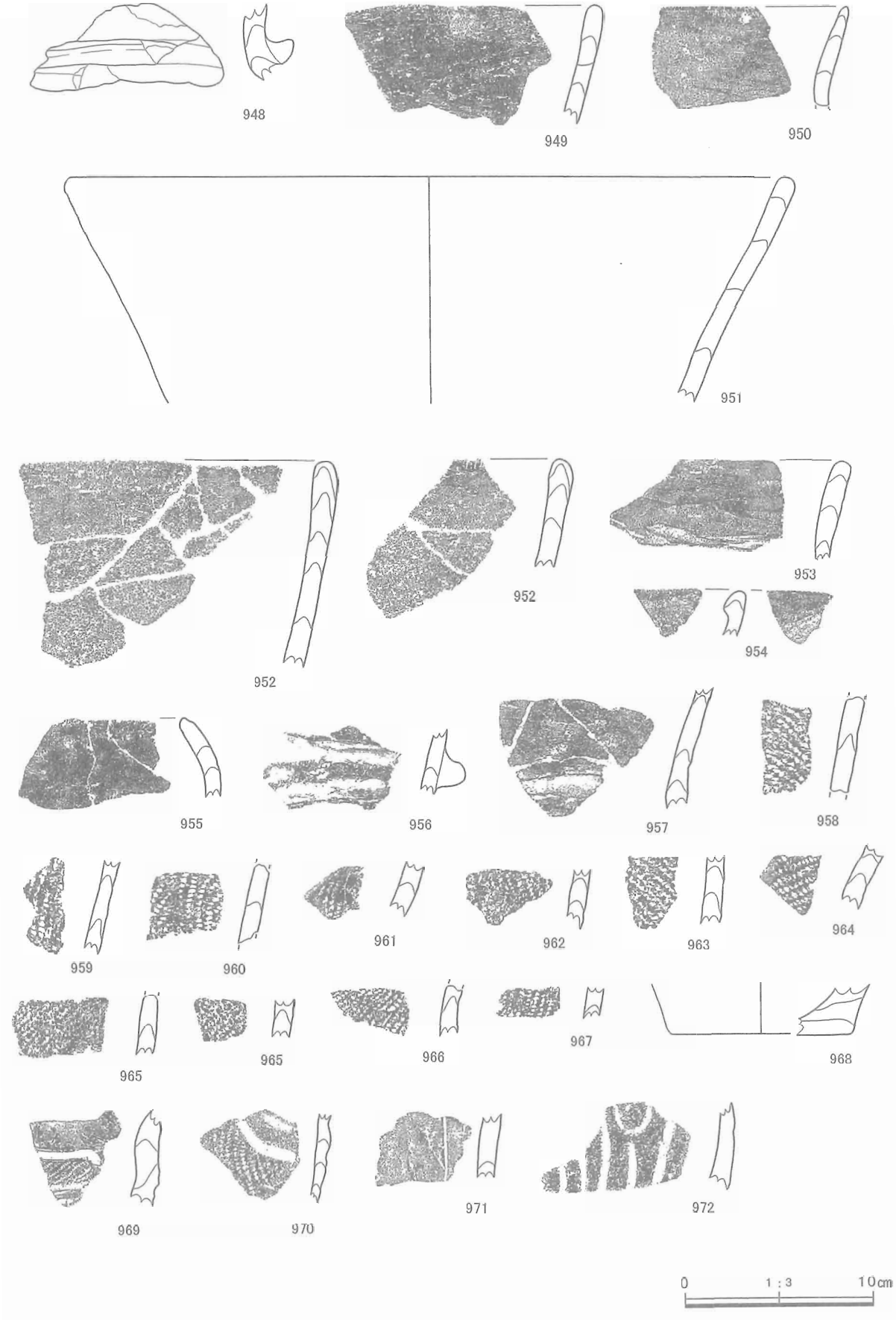
の太さ約0.5cmのＲＬの撚りのあまい縄文を付けた後期前半土器である。(第159図978)は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、縦位の半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半土器である。(第159図979)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、縦位の半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半土器である。(第159図980)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、隆線と縦位の半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半土器である。(第159図981)は条の太さ0.2cmのＬＲの縄文を付け、弧状に半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半土器である。(第159図982)は縦位に半截竹管状工具の太い沈線で区画した後期前半土器である。(第159図983)は竹管状工具の細い沈線を付けた後期前半土器である。(第159図984)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、縦位の沈線で区画した後期前半土器である。(第159図985)は縦位の沈線で区画した後期前半土器である。(第159図986)は弧状沈線で区画した後期前半土器である。(第159図987)は弧状沈線で区画した中に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた後期前半土器である。(第159図988)は縦波状の沈線を付けた後期前半土器である。(第159図989)は縦位に隆帯を付けた後期前半土器である。(第159図990)は条の太さ約0.3cm、長さ約1.8cmのＬＲの縄文を付けた後期前半土器である。(第159図991)は条の太さ約0.3cm、長さ約1.8cmのＬＲの縄文を付けた後期前半土器である。(第159図992)は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けた後期前半土器である。(第159図993)は底部付近の破片で半截竹管状工具の沈線を横波状と横位に付けた後期前半土器である。(第159図994)は底面に木葉痕のある後期前半土器である。(第159図995～997)は口縁部を無文にした時期不明土器である。(第159図998)は器面横位に隆帯を貼り付けた時期不明土器である。(第159図999)は器面横位に隆帯を貼り付け、間に縄文を施した時期不明土器である。(第159図1000)は半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた時期不明土器である。(第159図1001)は条の太さ約０.3cmのＬＲ縄文を付け、斜位の沈線を施した時期不明土器である。(第159図1002)は口縁部と胴部の境に隆帯を貼りくの字状にした時期不明の土器である。(第159図1003)は薄い沈線を縦位に付けた時期不明の土器である。(第159図1004)は縄文の条の端が撚り戻っており、条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を付けた時期不明の土器である。(第159図1005)は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文の付いた時期不明の土器である。(第159図1006)は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けた時期不明の土器である。(第159図1007)は条の太さ約0.3cmのＬＲの多条縄文を付け、半截竹管状工具の斜位沈線で区画した時期不明の土器である。(第159図1008)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた時期不明の土器である。

(第160図1009)は条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を付けた時期不明の土器である。(第160図1010)は条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた時期不明の土器である。(第160図1012)は胴部にＸ状把手を付けた鍔付き土器で中期末から後期の製品である。(第160図1011・1013～1019)は底部の破片で型式不明である。(第160図1020)は底部の破片で、条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文が付いた型式不明の土器である。(第160図1021)は底部の破片で、縦位の沈線が付いた型式不明の土器である。

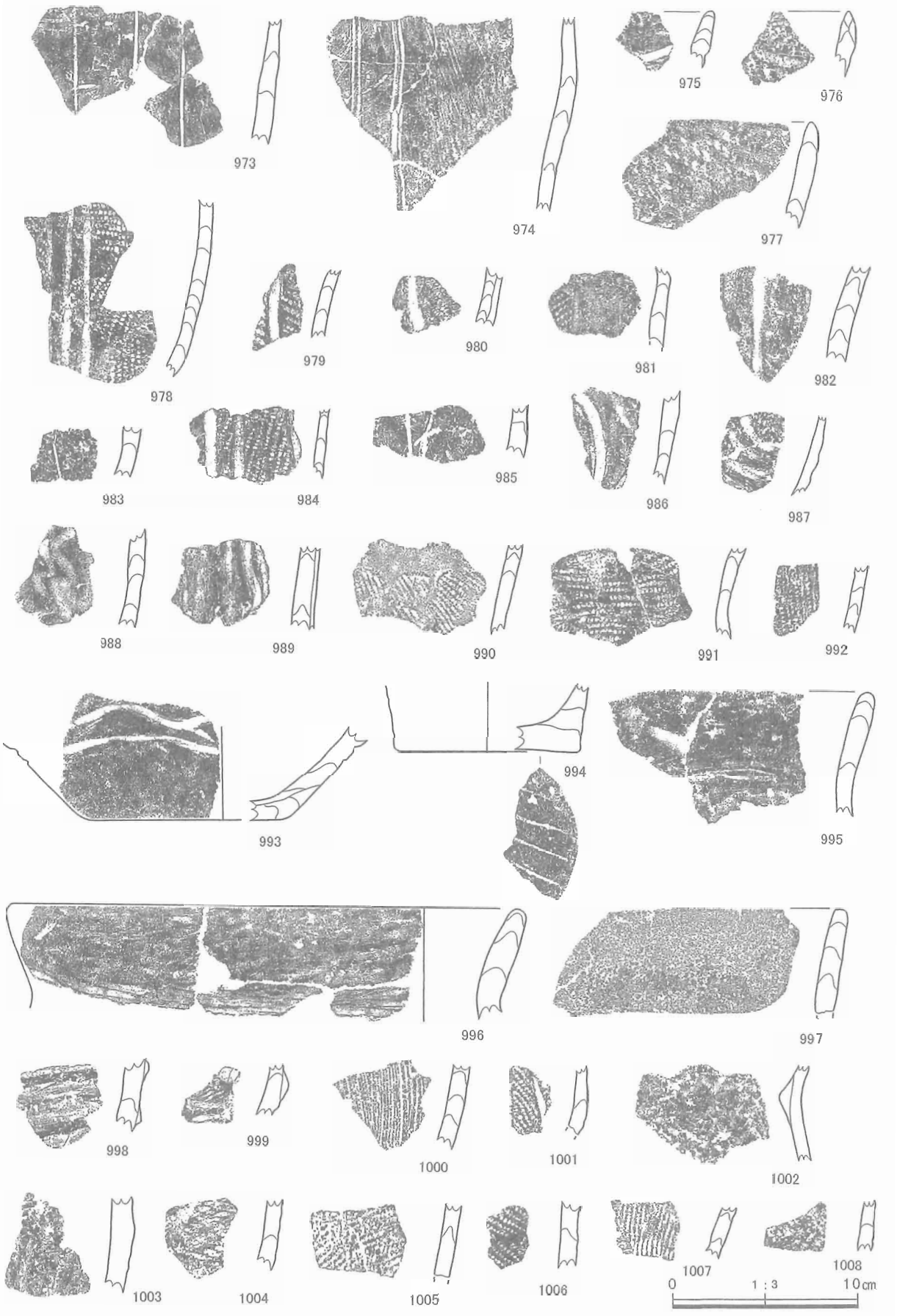
(第160図1022～1040)は遺物集中区出土の土製円盤で19点出土した。(第160図1022)は隆帯を付け半截竹管状工具で沈線を施し、形状が楕円形に近い。中期中葉の土器で周辺の研磨はない。(第160図1023)は隆帯を付けて形状が円形である。加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器で周辺部を全体的に研磨している。(第160図1024)は縦位の半截竹管状工具の沈線を付け形状が円形である。東鎌塚原式土器で周辺部全体を研磨している。(第160図1025)は隆帯を付け形状が楕円形である。中期後半の土器で周辺一部を平らに研磨している。(第160図1026)は半截竹管状工具で斜位沈線を付け形状は円形である。曽利Ⅳ式土器で周辺部全体を研磨している。(第160図1027)は隆帯が付いており形状が楕円形に近い。中期末の土器で周辺部全体を研磨している。(第160図1028)は隆帯を付け形状が不定形である。中期末の土器で周辺一部を研磨している。(第160図1029)は無文で形状が不定形であり、時期不明で周辺全体を研磨している。(第160図1030)は無文で形状が不定形である。時期不明の土器で周辺一部を研磨してい



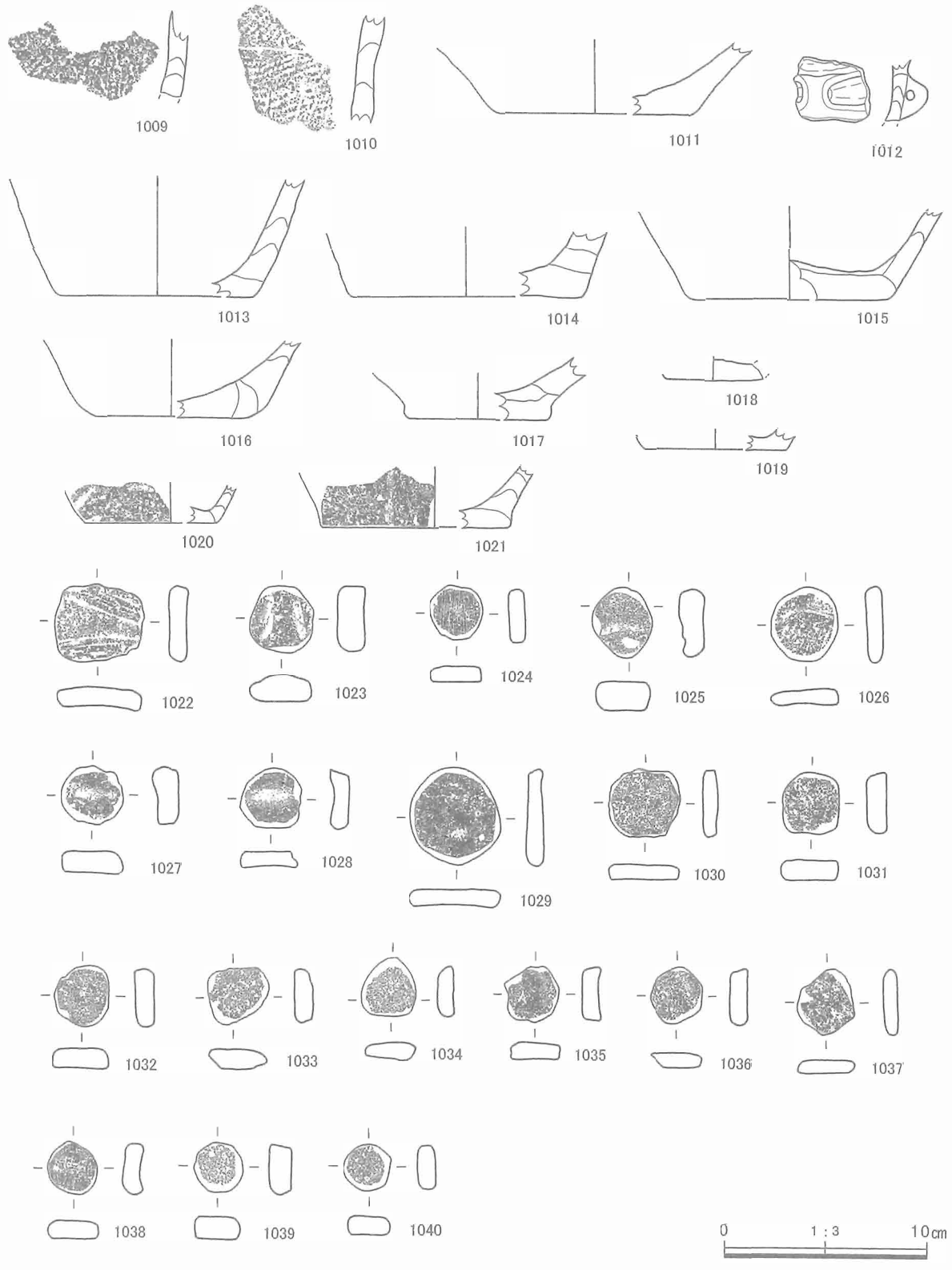
第157図　遺物集中地点出土遺物16



第158図　遺物集中地点出土遺物17



第159図　遺物集中地点出土遺物18

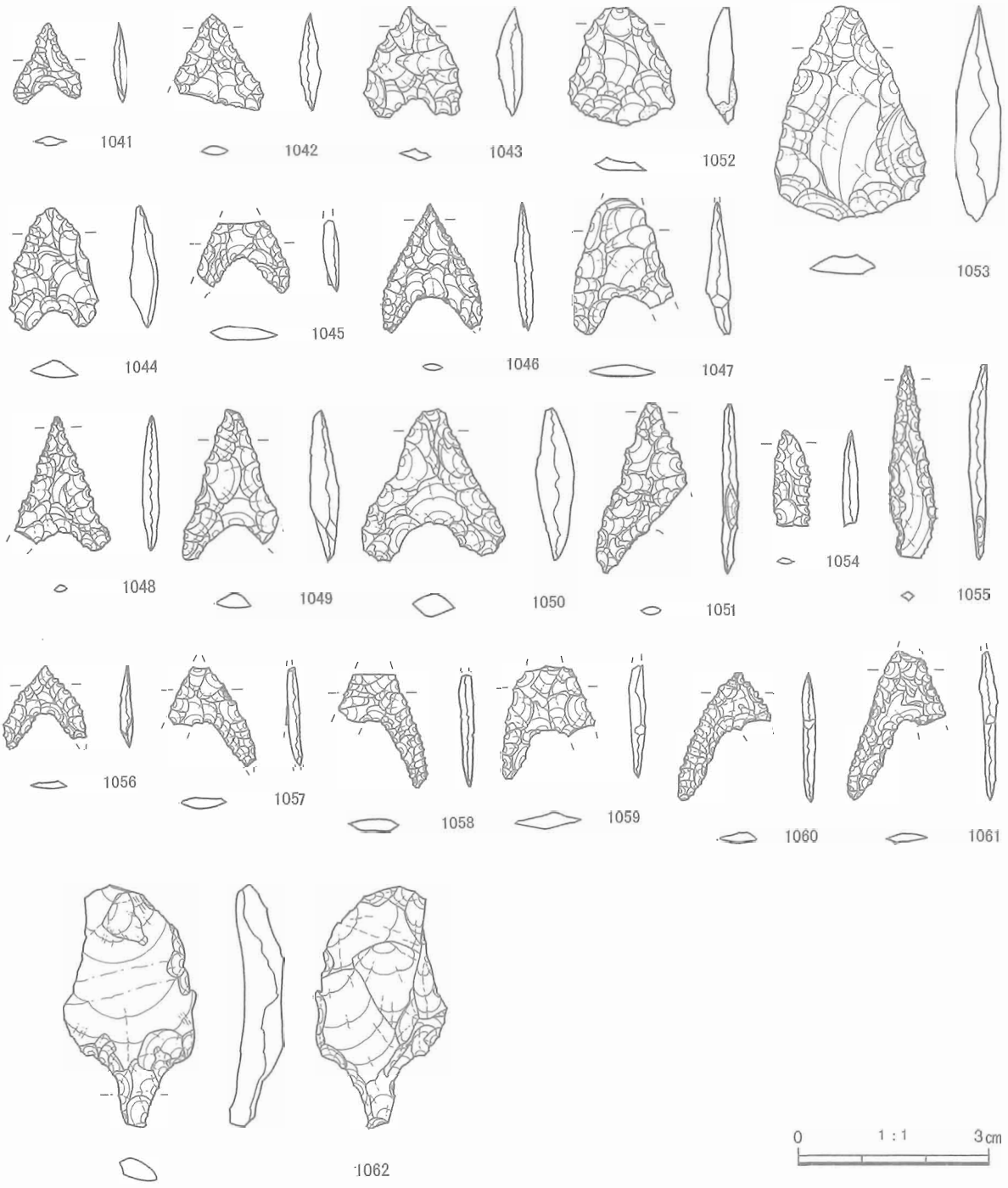


第160図　遺物集中地点出土遺物19

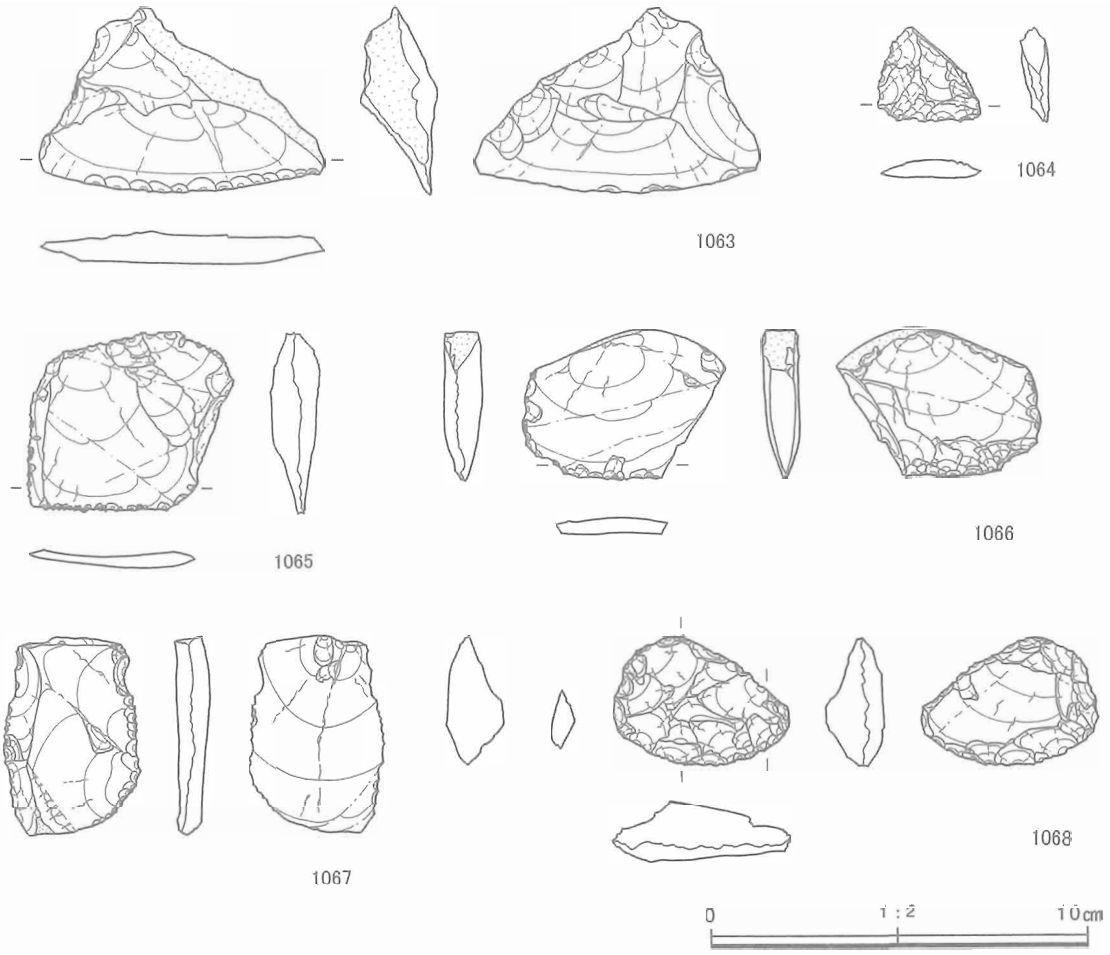
る。（第160図1031）は文様不明で形状が隅丸方形である。時期不明の土器で周辺全体を研磨している。（第160図1032）は無文で形状が不定形である。時期不明の土器で周辺一部を研磨している。（第160図1033）は文様不明で不定形である。時期不明で周辺一部を研磨している。（第160図1034）は文様不明で

形状が不定形である。時期不明で周辺一部を研磨している。（第160図1035）は無文で形状が不定形である。時期不明で周辺一部を研磨している。（第160図1036）は文様不明で形状が不定形である。時期不明で周辺全体を研磨している。（第160図1037）は縄文を付け不定形である。時期不明で周辺一部を研磨している。（第160図1038）は文様が不明で形状が円形に近い。時期不明で周辺全体を研磨している。（第160図1039）は文様不明で円形に近い。時期不明で周辺全体を研磨している。（第160図1040）は文様不明で円形である。時期不明で周辺部全体を研磨ている。（図版10、左中央）は口縁部と胴部の境に双環状把手を付け、条の太さ約0.4cmのＲＬ縄文を施し、指頭状の沈線で縦楕円形に区画する加曽利Ｅ４式土器と思われる土器で、胴部の径が約50cmになる。

【遺物：石器】石器は、石鏃、石錐、スクレイパー・二次加工剥片、打製石斧、石錘、磨石・敲石、台



第161図　遺物集中地点出土遺物20



第162図　遺物集中地点出土遺物21

石が出土している（第161図1041～第168図1097）。ここでは器種ごとにまとめて記述する。

（1）石鏃（第161図1041～1061）

半数が諏訪星ヶ台産の黒曜石製で、あとは珪質頁岩とチャートを使用している。平基無茎鏃と尖基鏃は2点ずつのみで、他は凹基無茎鏃・長脚鏃が占める。完形品は少なく先端部やかえし部が欠損しているものが多い。報告書に掲載しなかったが、欠損した先端部や脚部などの小片も多数含まれていた。

（2）石錐（第161図1062）

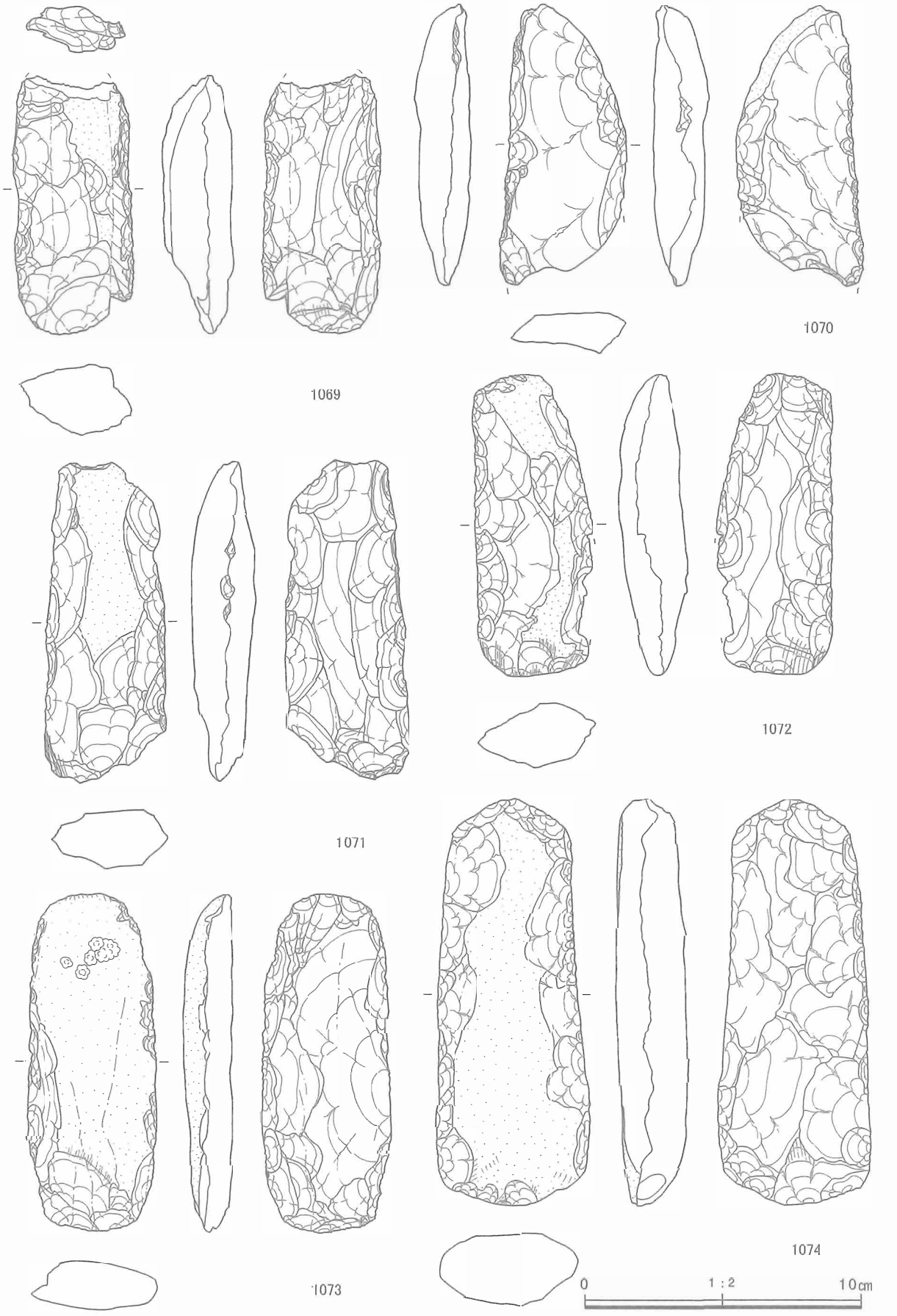
珪質頁岩製で、錐部が短く抉り部をはっきり作り出してある。つまみ部の調整は粗い。

（3）スクレイパー・二次加工剥片（第162図1063～1068）

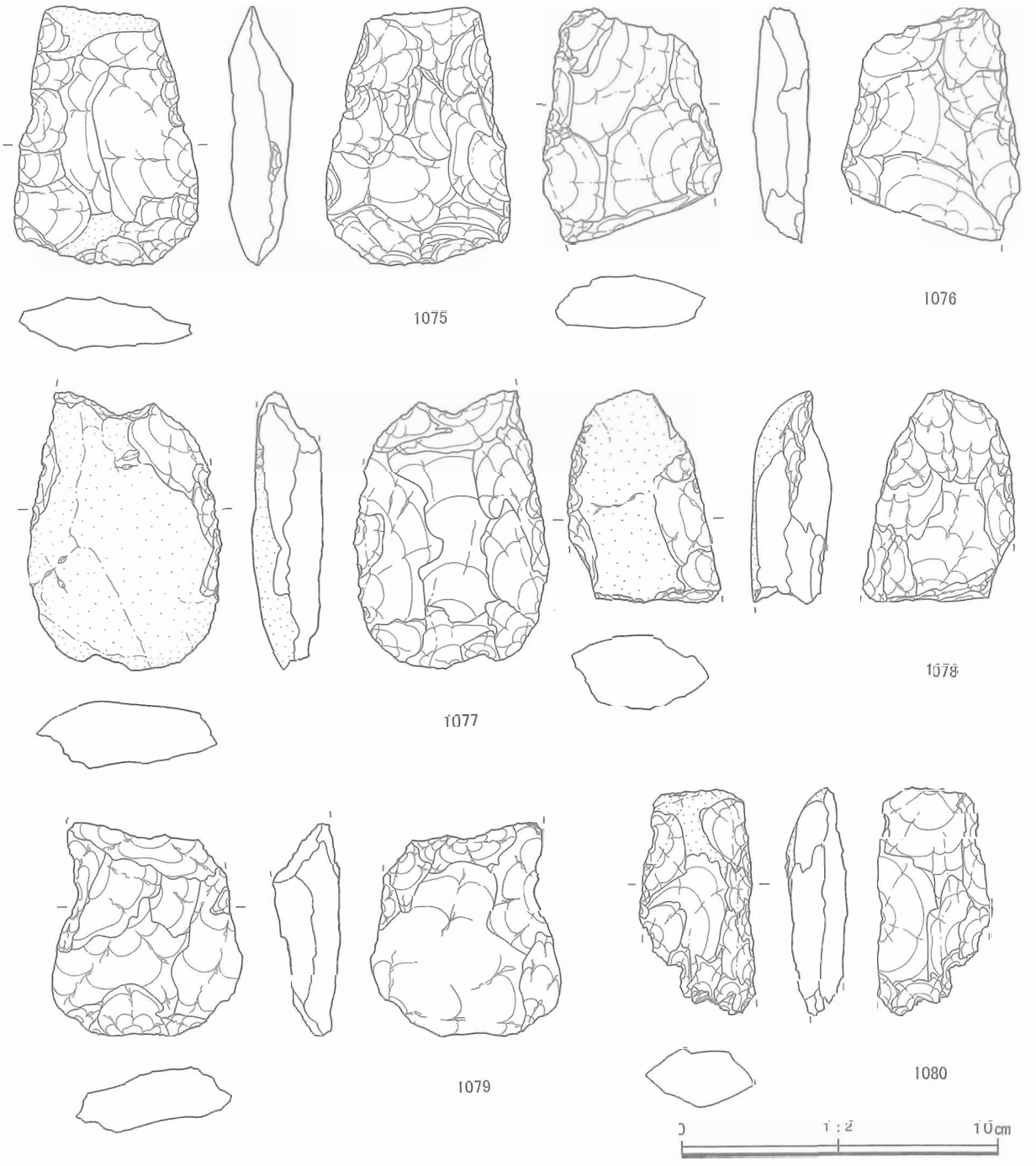
調整が細かいものをスクレイパー、粗いものを二次加工剥片とした。粘板岩・珪質頁岩・チャートを使用している。刃部が1辺のものと2辺のものに大別される。（第162図1065）は尖頭状の個所を作り出すことを意識して2辺を調整している。（第162図1068）はチャートのスクレイパーに分類したが、石鏃の未製品の可能性もある。

（4）打製石斧（第163図1069～第165図1083）

砂質粘板岩・細粒～粗粒砂岩制が主流で、粘板岩・珪質頁岩製を1点ずつ含む。短冊形(1069～1074)、撥形（1075～1078)、形態不明品（1079～1083）に分けられ、欠損品や未製品が多い。(1077～1080）は刃部に使用痕が見られ磨耗している。(1081・1082)は側縁の調整がほとんど見られないため、未製品と



第163図　遺物集中地点出土遺物22



第164図　遺物集中地点出土遺物23

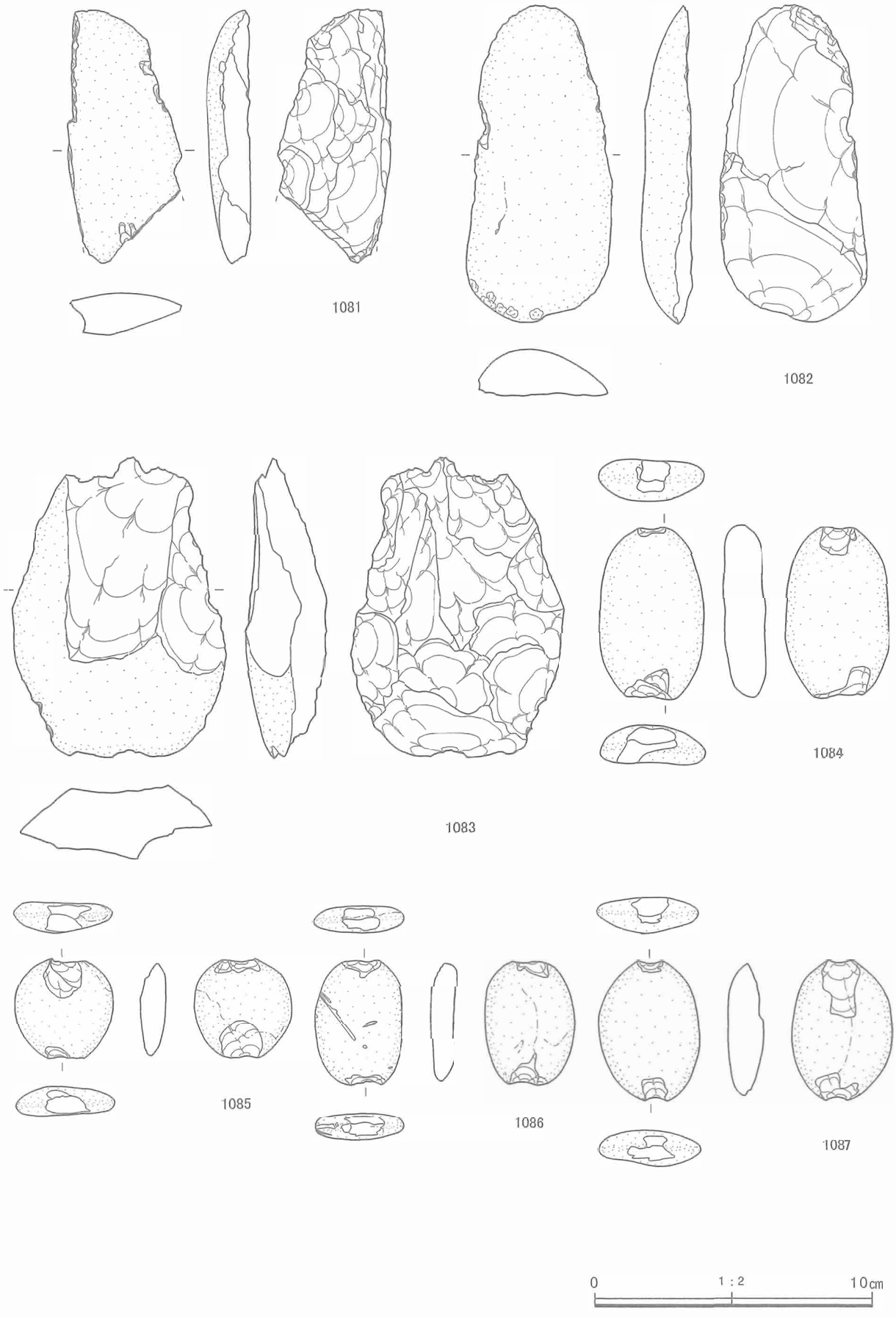
した。(1082) の下端には小さな敲打痕が複数残る。

(5) 石錘 (第165図1084～1087)

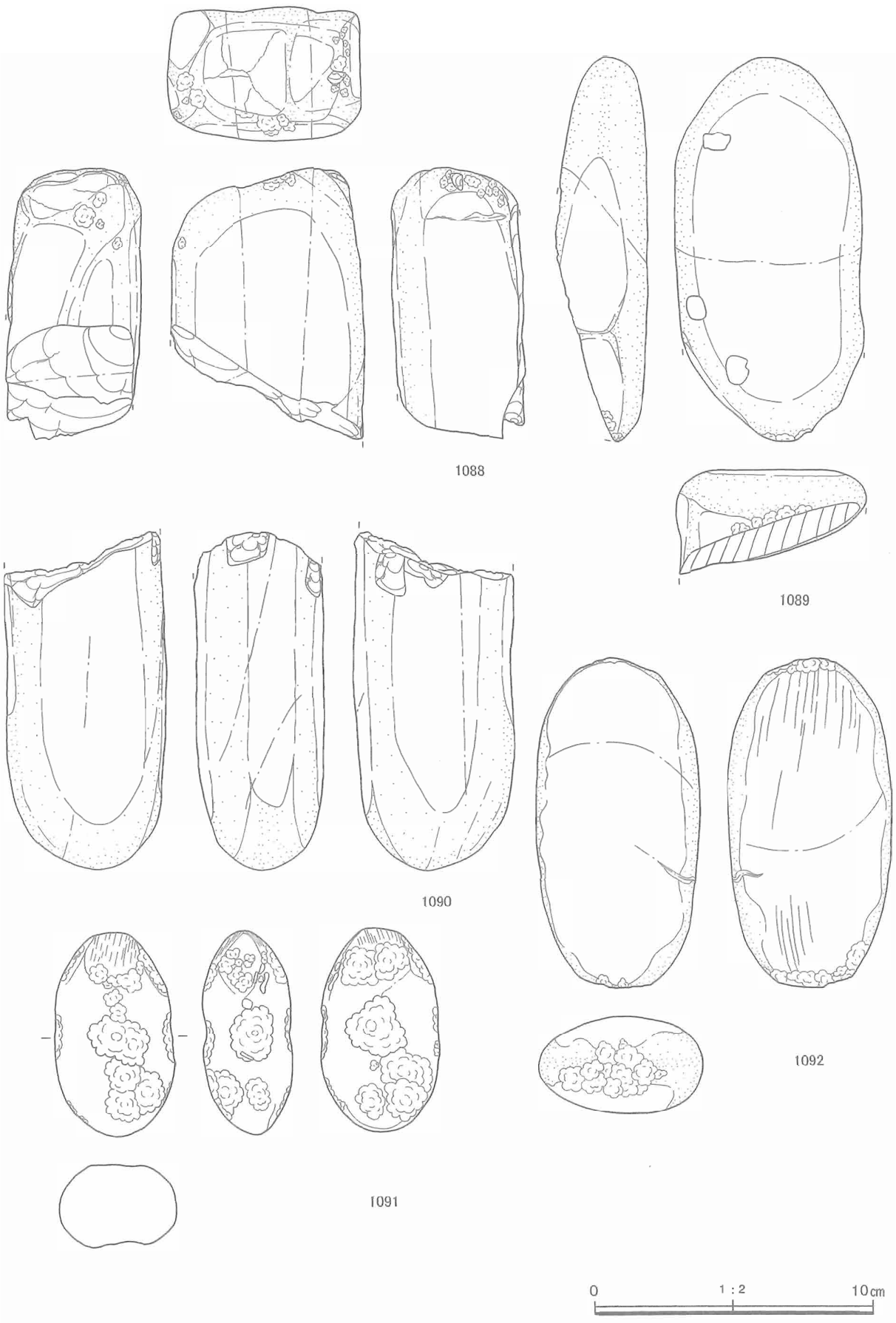
いずれも扁平な粘板岩製で縄掛け部2か所を有する打欠石錘の完形品である。(1085)は縦軸と横軸の長さが同じで重量は16.8gとやや小ぶりである。その他は長軸の両端に縄掛け部が設けられ、重量は21.1g～49.3gで本遺跡内の最も標準的なタイプに類するものである。

(6) 磨石・敲石 (第166図1088～第167図1096)

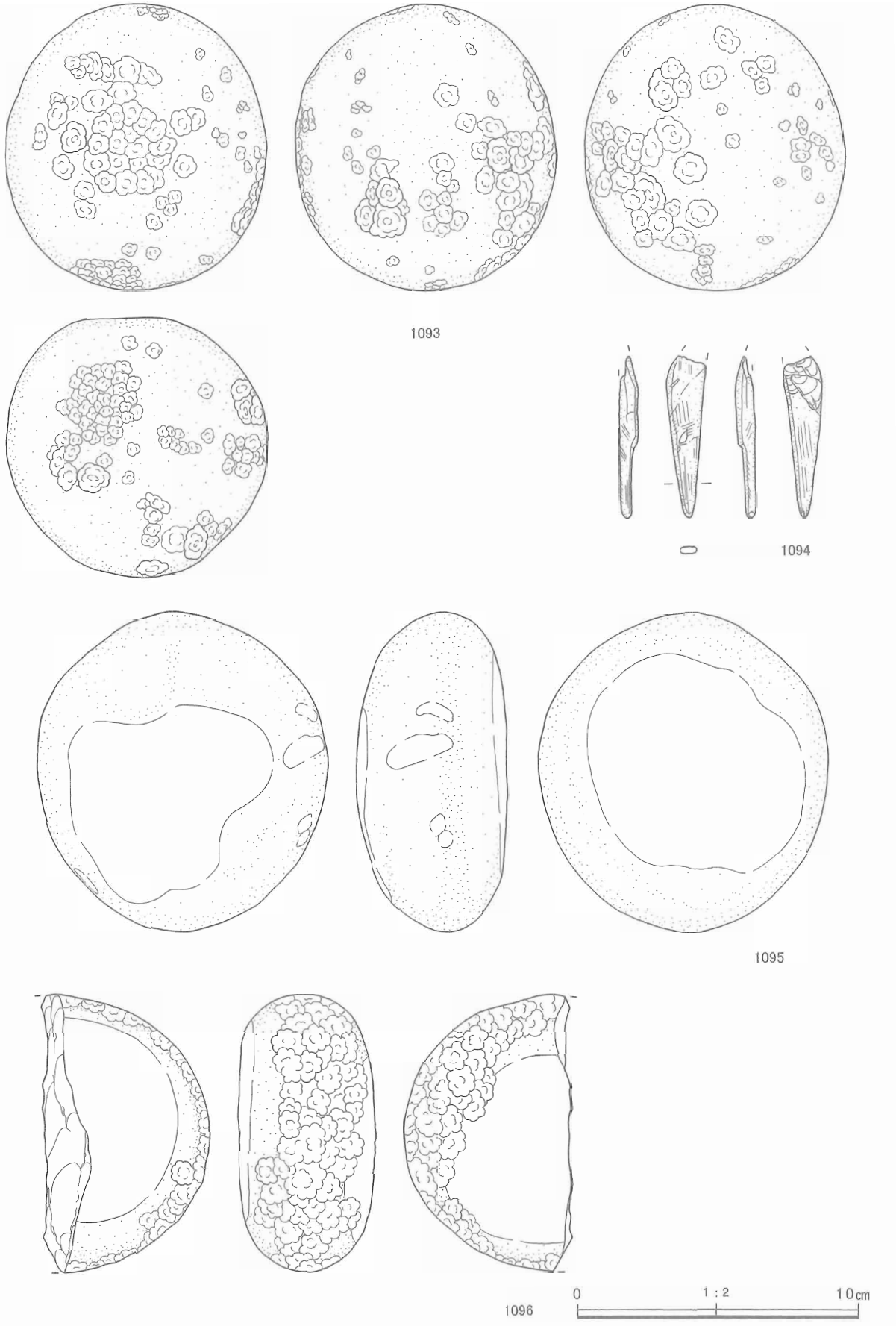
中～粗粒砂岩・砂質粘板岩・凝灰質粗粒砂岩・花崗岩が用いられ、磨りと敲きの機能を両方有しているものが目立つ。(第166図1088・1089) は直方体状で各面を磨面として、長軸の先端部を敲面として利



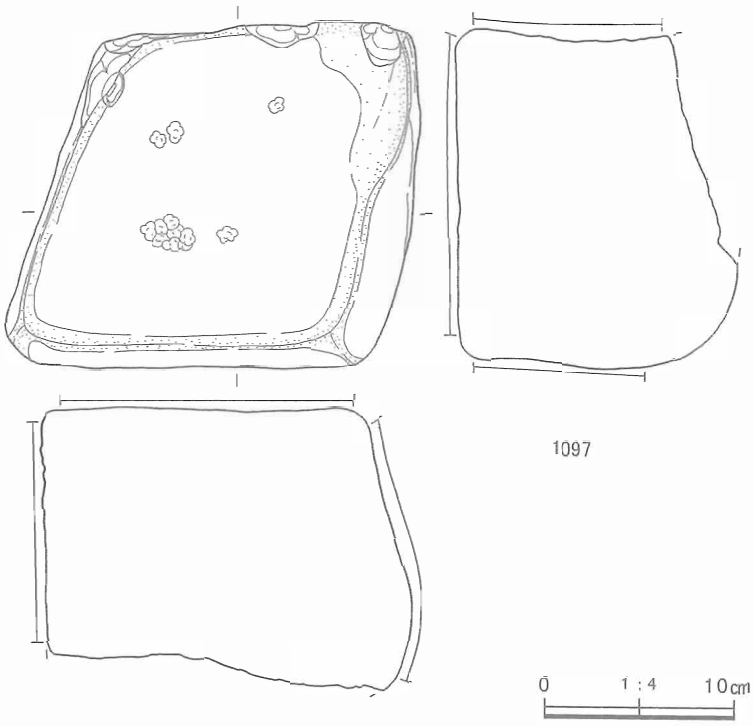
第165図　遺物集中地点出土遺物24



第166図　遺物集中地点出土遺物25



第167図　遺物集中地点出土遺物26



第168図　遺物集中地点出土遺物27

用している。(第166図1090) は棒状の磨石、(第166図1092) はやや扁平な長楕円形の磨敲石である。

(第166図1091) は粗粒砂岩製でやや小ぶりの敲石である。敲打痕は全体的に観察できるが、長軸中央付近の凹みが顕著である。全体が磨滅しているが、長軸の一端が磨面として最も顕著に使用されたらしく鏑のような稜が残る。(第167図1094) は小形で尖頭状をしており尖った部分に磨面が残るため、磨石とした。(第167図1096) は天竜川水系の花崗岩製磨敲石で、扁平円礫の平面は磨面・円周を敲面として使用している。本遺跡の中で最も粒子が粗くざらつきのある石材を利用した磨敲石である。

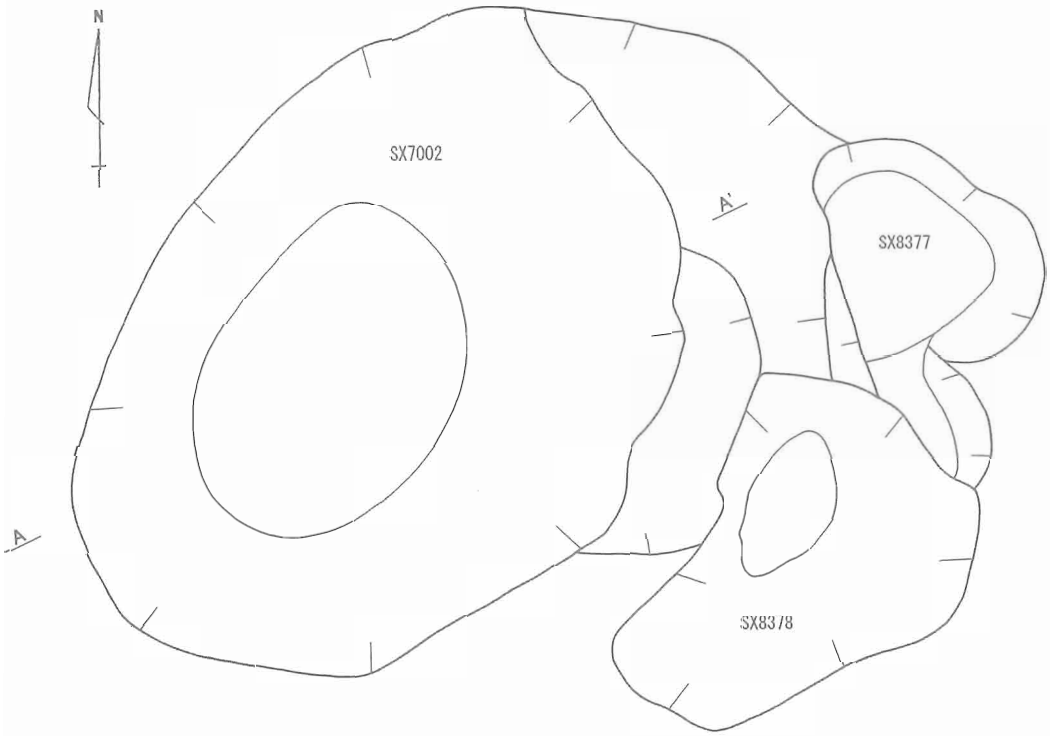
(7) 台石 (第168図1097)

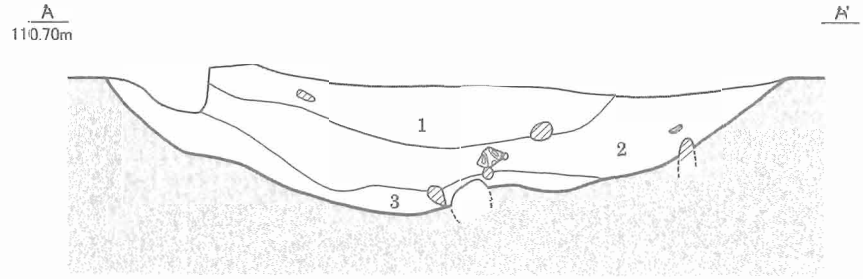
中粒砂岩製で小形の台石と思われる。底部が欠損しているが形状は立方体状で上面と側面に磨面が見られ、ともに台部として機能していたと思われる。

SX7002 (第169図)

【遺構】遺物集中地点の半ばからは土坑状のSX7002が検出された。主体となる部分は長軸2.7m、短軸2.1mの楕円形状で深さは50cmとなる。レンズ状の堆積がみられるため風倒木痕によるものとは考えにくく、人為的に掘られ自然に埋没したものと考えられる。東側には不定形な小土坑が2か所取り付いている。

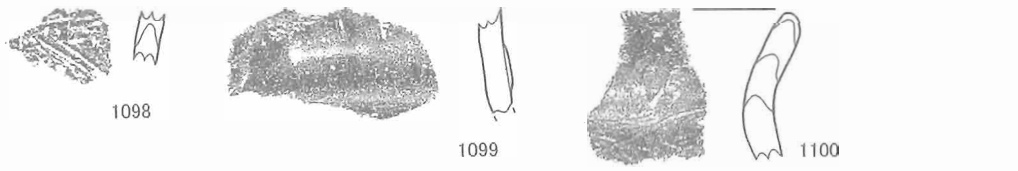
【遺物】(第169図1098) は条の太さ約0.3cmのRL縄文を付け、半截竹管状工具で斜位に沈線を施した咲畑式頃の土器と思われる。(第169図1099) は隆帯で区画し、区画内に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第169図1100) は口縁部が外反して、胴部に粗雑な条線を付けた後期前半の土器である。





1　黒褐色シルト(10YR2/2)
2　黒褐色シルト(10YR2/3)
3　黒褐色(10YR2/3)

0　1：30　1m



0　1：3　10cm

第169図　ＳＸ7002平面・断面図・出土遺物

5　風倒木痕と出土遺物

風倒木痕と考えたのは平面的には馬蹄形や半月形、あるいは不定形を呈する土坑である。馬蹄形や半月形の場合は、倒れて根が持ちあがった側に窪みができているのであろう。不定形のものは、あるいは立ち枯れているのかもしれない。底面は平らになるものは少ない。覆土がブロック状になったり、オーバーハングする場合もある。

今回図示した風倒木痕は、遺物が出土しているものを主体とした。遺物が確認できるものは稀であるが、打製石斧が含まれることがある。根や、根の間に含まれていた何かを探っていたのであろうか。土器がまとまって出土した例はＳＸ63919の１基のみである。

風倒木痕の分布は広範囲に及ぶが、Ａ区からＢ区の北側、Ｃ区の中央付近、Ｄ区の中央から北側は希薄となる。土坑墓と重複する例は認められず、竪穴式住居と重複する例も少ないので、意図的に森が伐採された部分があるのかもしれない。

ＳＸ21751（第171図）

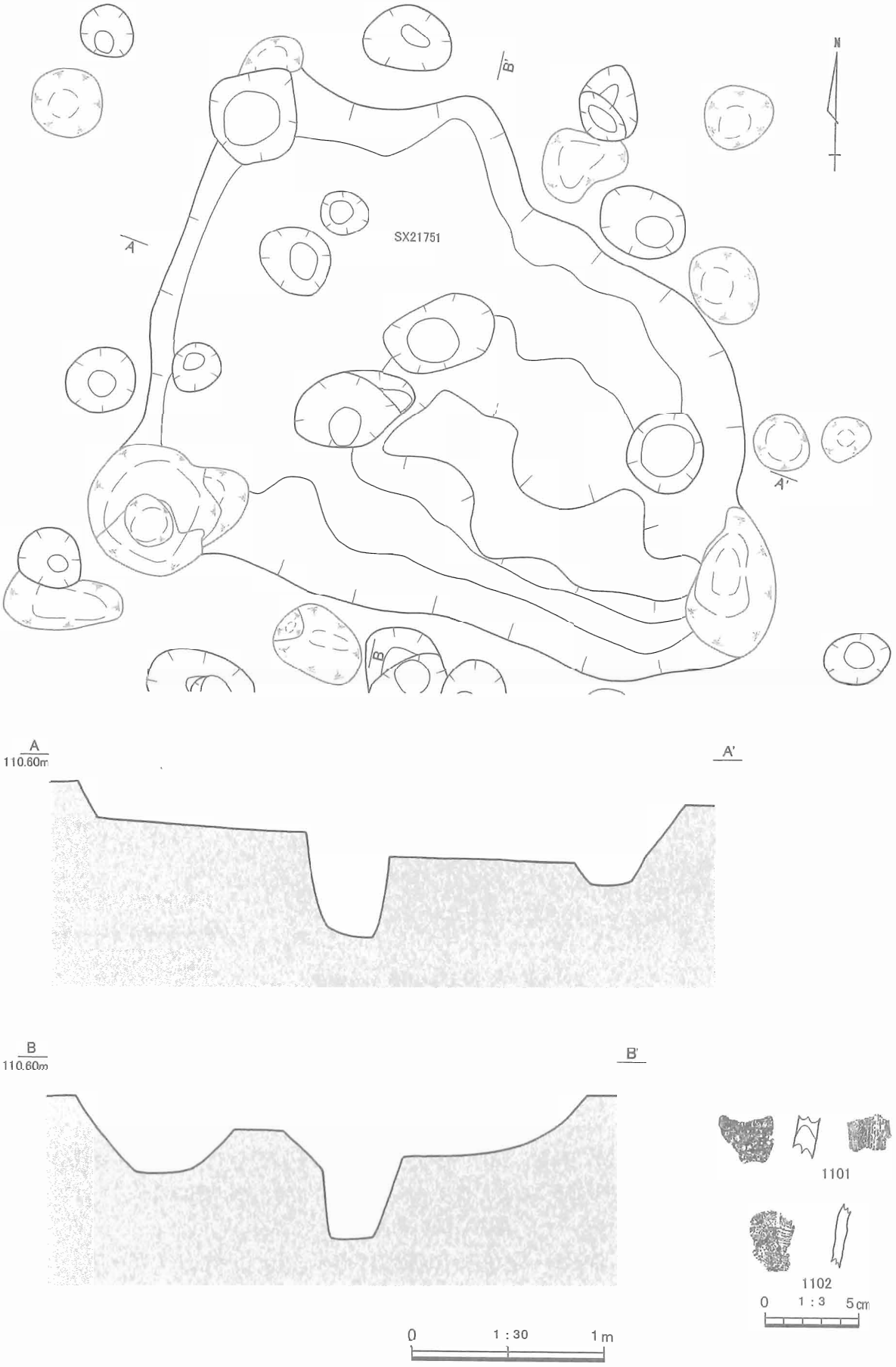
【遺構】Ｉ11グリッドで検出された。南東に開く長軸3.3m、短軸2.3mの、西側が広く窪む馬蹄形状を呈する。この木は南東側に倒れ、西側の根が抱えていた土が大きく起こされたものと考えられる。

【遺物】文様のわかる土器２点が出土した。（第171図1101）は条の太さ約0.4㎝のＬＲ縄文を付け、内面擦痕を施した型式不明の土器である。（第171図1102）は薄手の北屋敷式土器である。

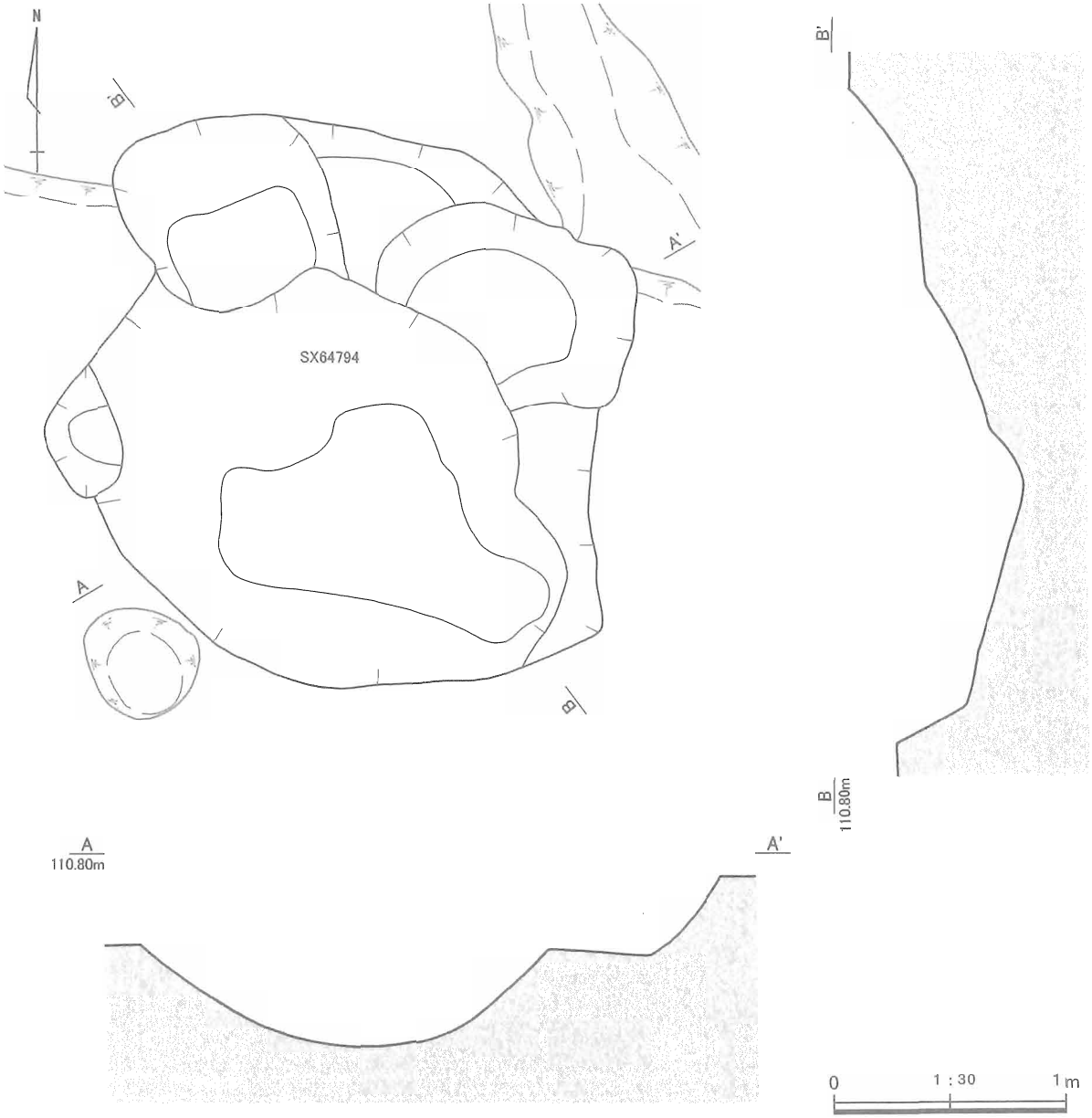
ＳＸ64794（第172図）

【遺構】M19～N20グリッドで検出された。直径2.4m前後の不定形を呈する。北側に直径0.8～１m程度の土坑状の窪みが連続し、南側が深くなるためにこの部分が段のように残されている。南側の窪みは長軸2.28m、短軸1.65mの不定形で下端が南東側に寄っている。底面は丸く、北側の段から45㎝程度の

第170図　風倒木痕分布状況



第171図　ＳＸ21751平面・断面図・出土遺物



第172図　ＳＸ64794平面・断面図

深さがある。

【遺物】出土していない。

ＳＸ63919（第173図）

【遺構】Ｉ25グリッドで検出された。長軸2.6m、短軸2.2m前後の不定形を呈する。下端は深さ28～50cmの位置にあり、南側に行くに従って深くなる。覆土は根の腐食した部分や、倒れることによって持ちあがった部分に土が流れ込んでいるようで、縦横に細かく入り組んでいる。

中央南よりの、底面からおよそ50cm浮いた位置から深鉢が１個体まとまって出土している。この土器を含む土坑上に木が発育した可能性もあるだろう。あるいは倒れて起こされた土に何らかの要件で入れこんだものかもしれない。

【遺物】文様のわかる土器が１個体出土した。（第174図1103-1）の把手頂点は皿状に窪めており、３単位の彫りの深い渦巻き沈線を付ける。把手（第174図1103-1）を横位から見ると把手に付いた左右の渦巻

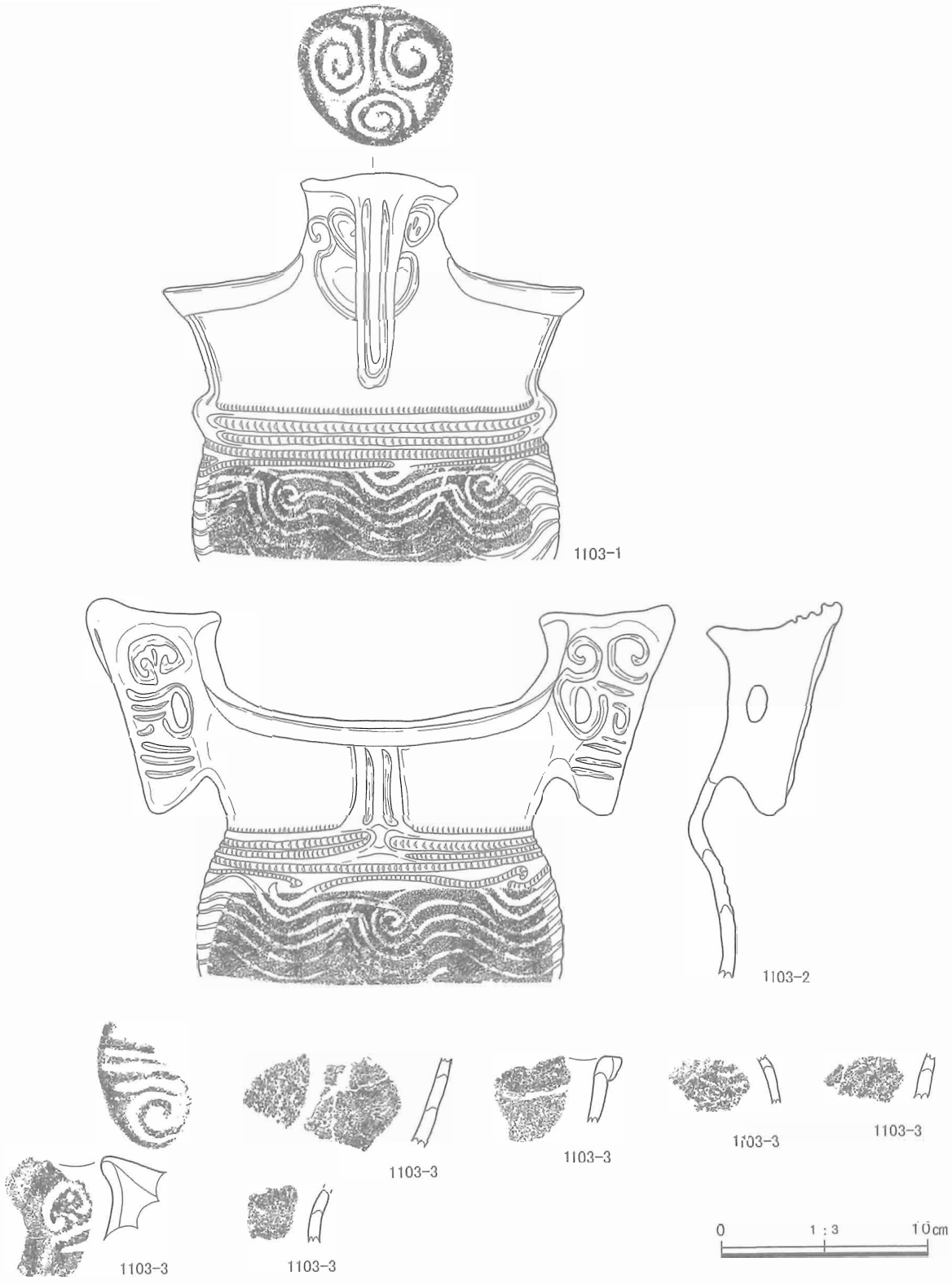
第173図　ＳＸ63919平面・断面図

き沈線が目のようになり、垂下した把手に半截竹管状工具で２本の縦位沈線を付けて、鳥の嘴状になっている。この把手を中心に置くと口唇部左右に断面三角形の隆帯を貼り付けている。口縁と胴部の境は括れて３本から４本の細い横位隆帯を付け、隆帯上に連続刺突を施している。横位隆帯の下には横位に流れるような４単位の連弧状沈線と渦巻き状沈線が付いている。(第174図1103-2) の２単位の把手は、渦巻き沈線と横位沈線を組み合わせた文様で中間に半円形の穴を穿っている。左右の把手をつなぐ口唇部は隆帯を付け、波底部と胴部括れ部の横位刻み隆帯をつなぐ３本の橋状隆帯を付ける。横位の刻み隆帯をまとめるように低いＸ状の突起を付ける。土器の口縁部を上から見ると楕円形になり、把手間の幅（第174図1103-2）が約28.5cm、別の面の口径（第174図1103-1）が約20.2cmである。把手の頭頂部の幅7.5cm、把手の長さ10.3cmであり伊那系曽利Ⅱ式から伊那系曽利Ⅲ式土器である。

ＳＸ64216（第175図）

【遺構】Q26グリッドで検出された。長軸2.75m、短軸1.64mを測る不定形を呈し、北西側に張り出し状の段を持つ。北西側の段は直径0.8m前後の不定形で、北西隅がへそ状に飛び出している。底面は平坦であるが南側に行くに従い次第に浅くなる。南東側に連続する土坑状の部分は長軸1.9m、短軸1.6mほどで、下端が南西側に開く馬蹄形状に巡っている。

【遺物】砂質粘板岩製の打製石斧が１点出土した（第175図1104)。素材剥片の長軸部に調整を加え頭部

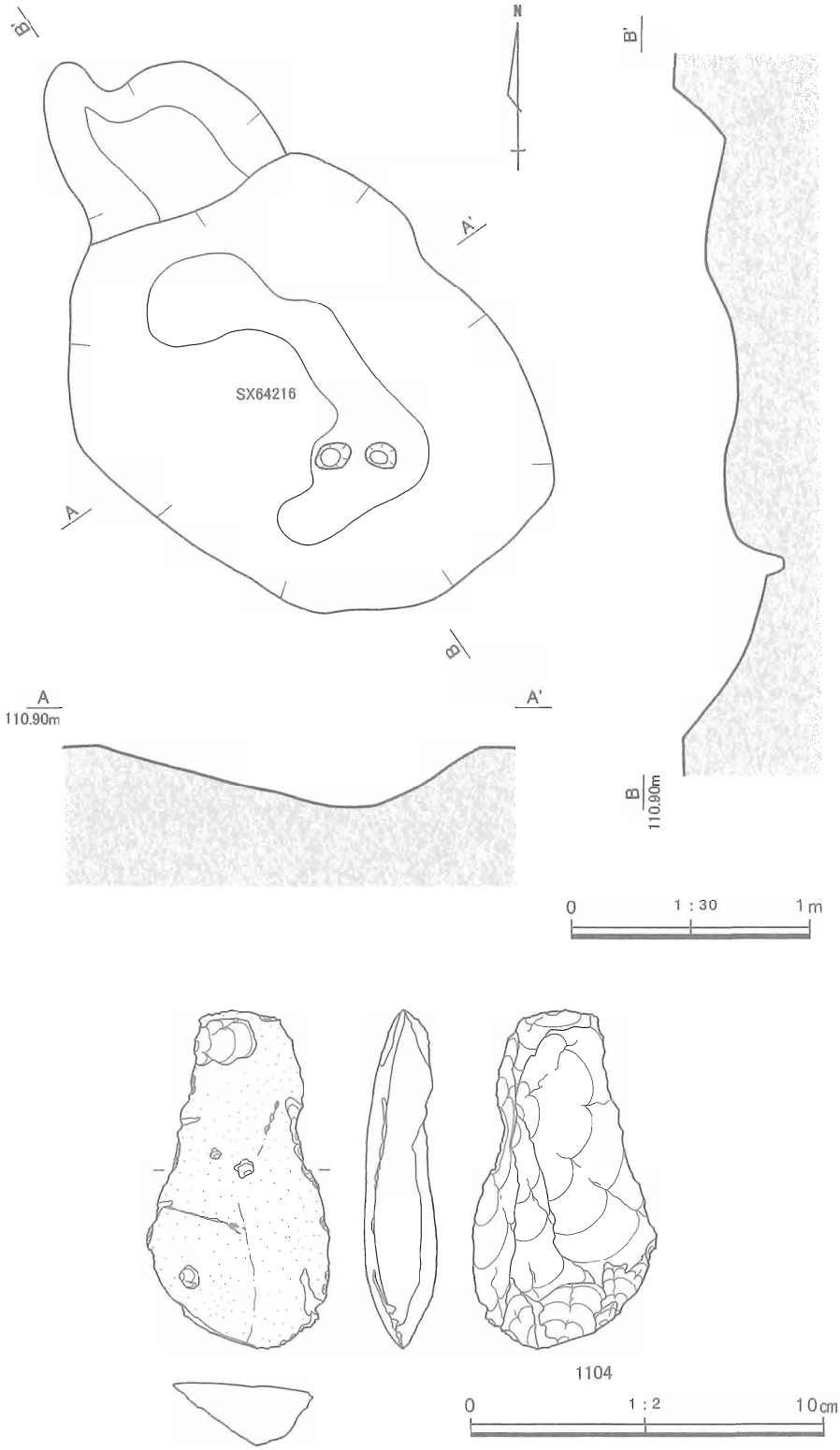


第174図　ＳＸ63919出土遺物

と刃部を作り出し、表にはほぼ全て原礫面を残した撥形である。完形品であり、風倒木を掘り起こす作業中に柄からはずれ土中に取り残されたのであろうか。

ＳＸ30322（第176図）

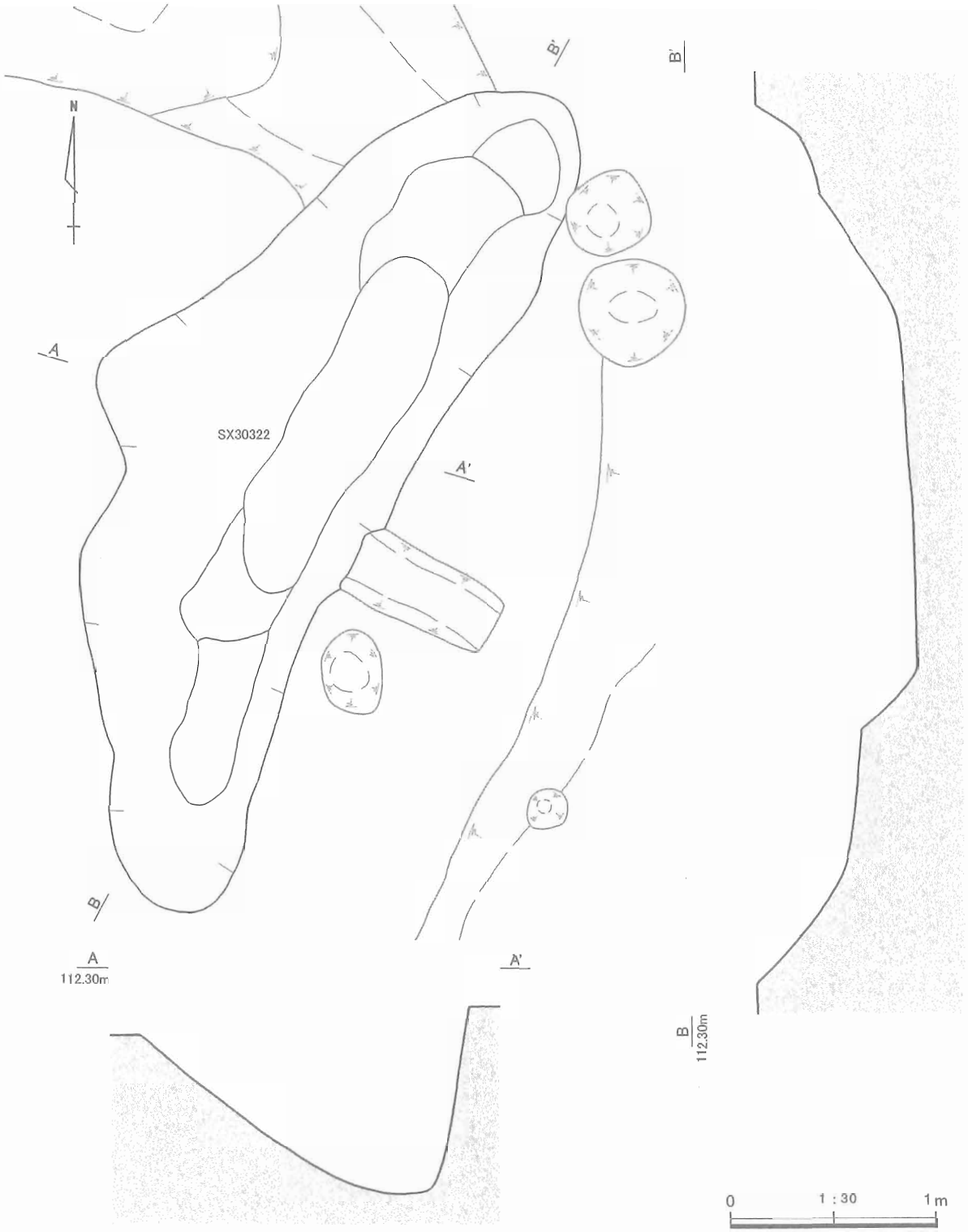
【遺構】Ｊ・Ｋ29グリッドで検出された。長さ4.4m、最大幅1.6mの半月状を呈する。下端は長細く、



第175図　ＳＸ64216平面・断面図・出土遺物

南東側に寄っている。長手方向には、中央部分が75cm前後と最も深く、両端で一段浅くなる部分がある。南東側に倒れる際に持ちあがった北西側に張った根の一部であろう。

【遺物】出土していない。

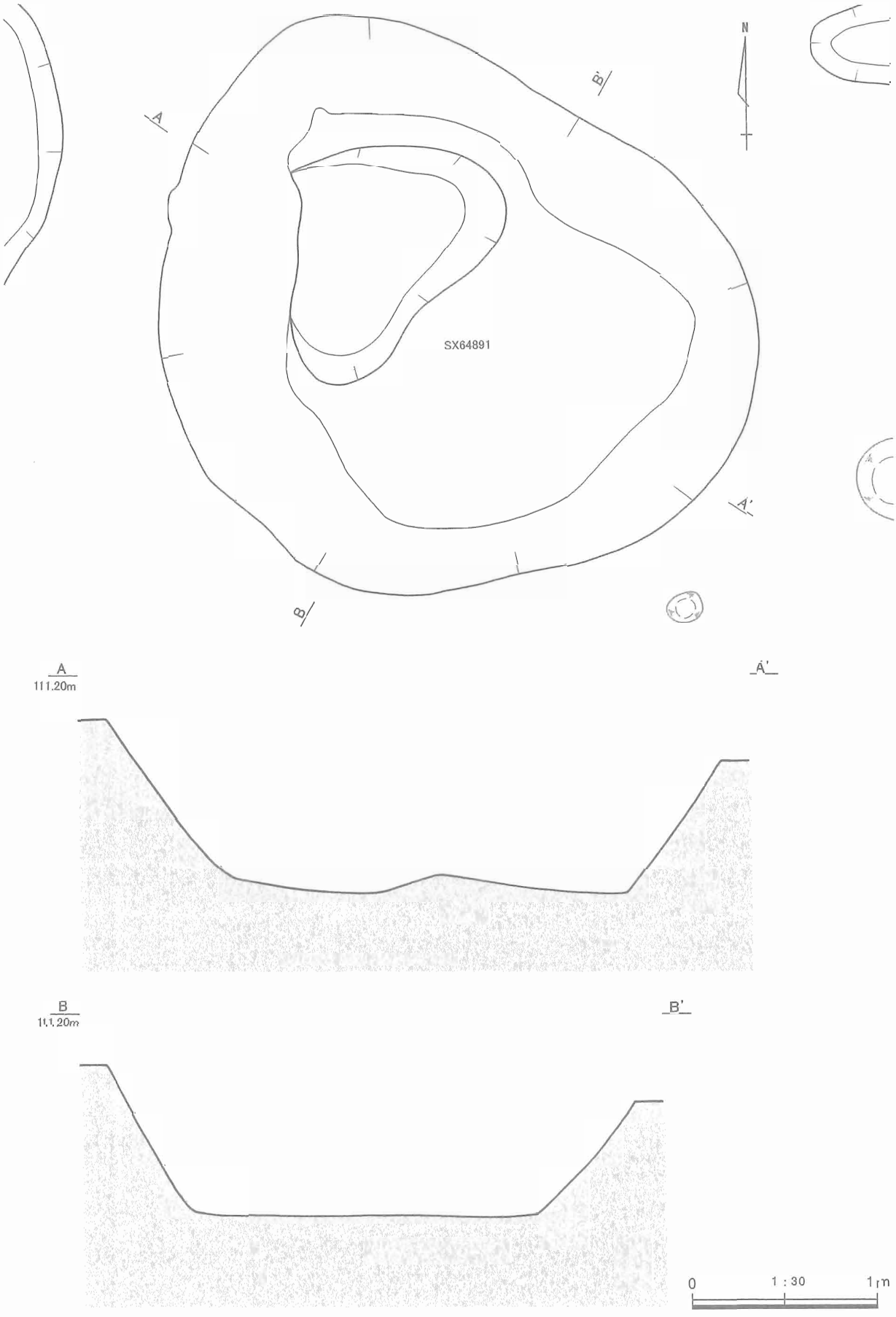


第176図　ＳＸ30322平面・断面図

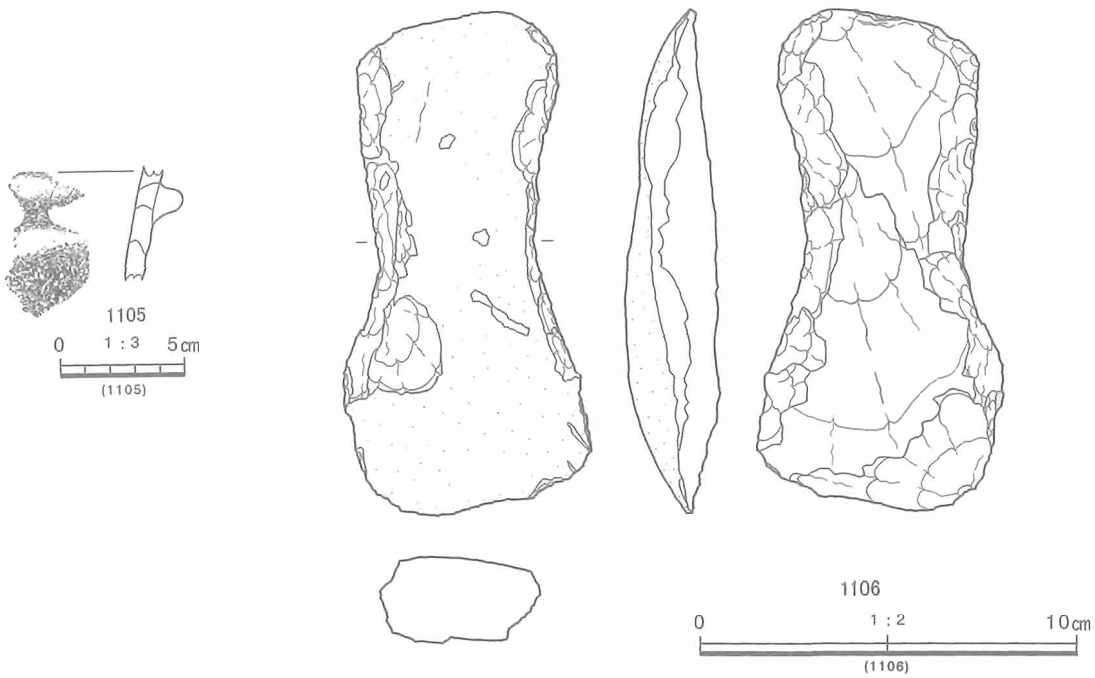
ＳＸ64891（第177図・第178図）

【遺構】Q27グリッドで検出された。長軸3.4m、短軸2.9mのややひしゃげた円形を呈する。下端は上端に沿うような位置にあり、底面は広く平坦である。北西側に長軸1.3m、短軸１m程、深さ14cmの不定形な窪みがある。

【遺物】土器は１点が出土した。（第178図1105）は粘土紐を横位に貼り付けた勝坂式土器である。



第177図　ＳＸ64891平面・断面図



第178図　ＳＸ64891出土遺物

石器は、細粒砂岩製の分銅形を呈する打製石斧１点が出土した（第178図1106）。くびれ部を中心に素材剥片の縁辺に細かい調整を加え、一方に原礫面を多く残している。基部の表面がやや磨耗しており柄の装着された痕とも考えられる。完形品であるので、穴に風倒木を掘り起こす作業中に柄からはずれ土中に取り残されたのだろうか。

ＳＸ8822（第179図）

【遺構】Ｐ28グリッドで検出された。長軸3.6m、短軸2.6m程度で、南西側に開く馬蹄形状を呈する。北側は、長軸3.2m、短軸1.9m程度、深さ22cmの土坑状を呈する。南側の部分には大きくくびれて取りついている。下端は上端に沿う位置にあり、底面は緩やかに丸くなる。この木は南西側に倒れ、東よりの根が抱えていた土が大きく起こされたものと考えられる。

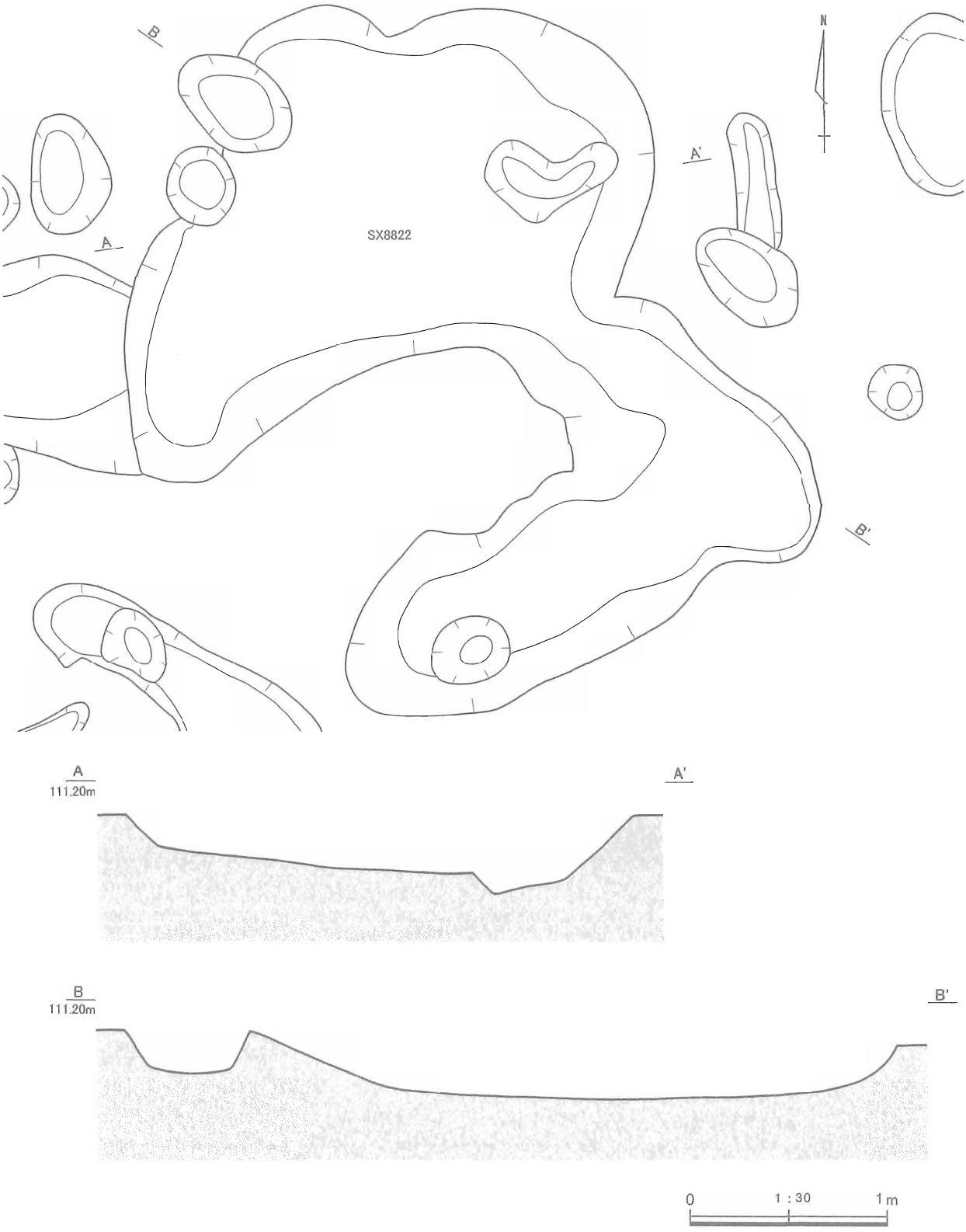
【遺物】出土していない。

ＳＸ31202（第180図）

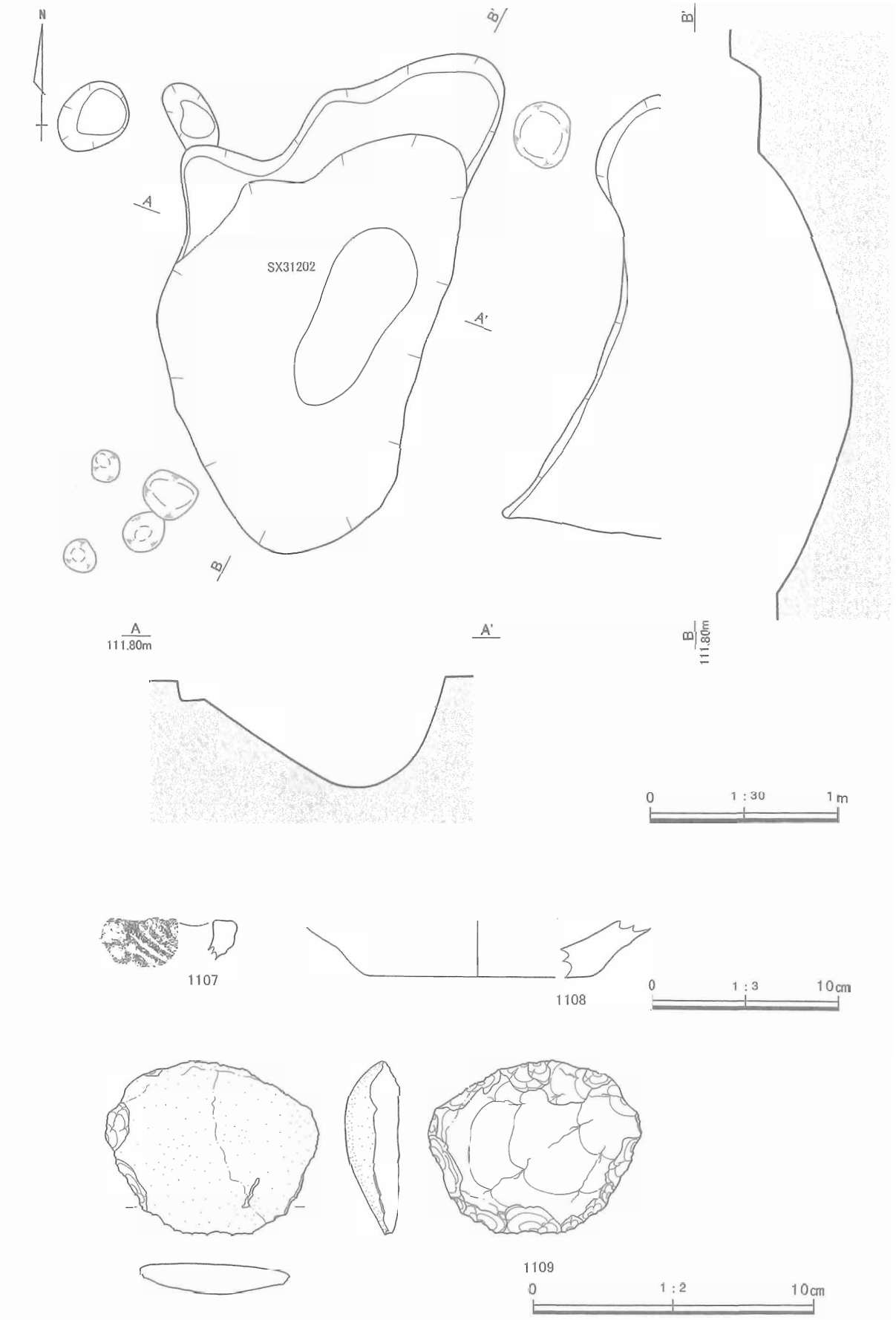
【遺構】Ｊ28グリッドで検出された。長さ2.95m、最大幅1.55mを測る半月状を呈する。北側には深さ20cm前後の不定形の浅い部分が取りついている。南側の土坑状の部分は長軸2.25m、短軸1.4mのひしゃげた楕円形状を呈する。下端は楕円形で、東側に寄っている点はＳＸ30322に類似する。底面は丸くなだらかである。

【遺物】土器は２点が出土した。（第180図1107）は口縁部から半截竹管状工具で密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付けた曽利Ⅱ式土器である。（第180図1108）は鉢形の底部と思われる。

石器は、砂質粘板岩を使用したスクレイパー１点（第180図1109）が出土した。剥片の辺縁にＵ字状に調整を加え刃部とし、刃部と向かい合う縁辺は弓なり状に刃潰し加工がされている。



第179図　ＳＸ8822平面・断面図

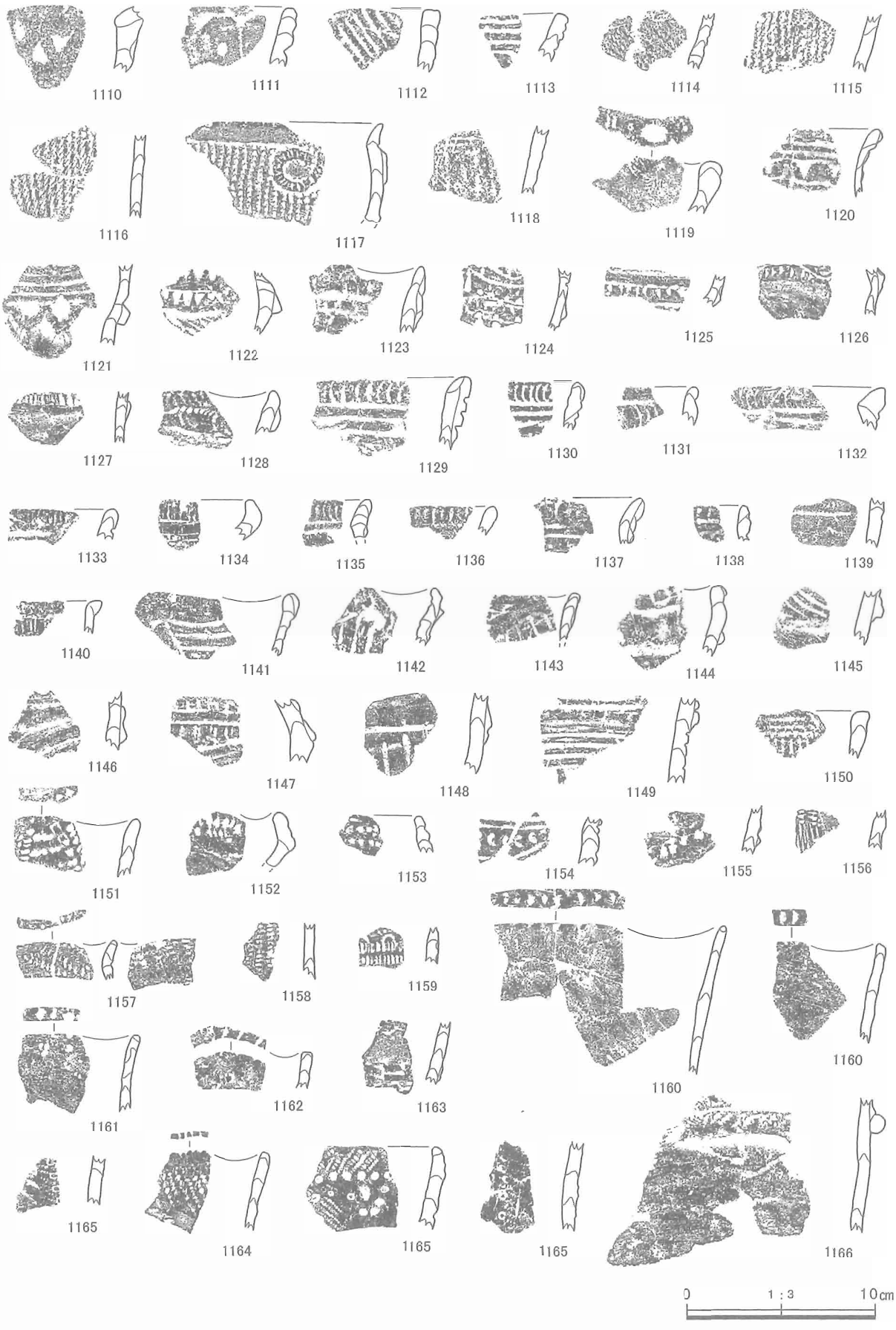


第180図　ＳＸ31202平面・断面図・出土遺物

第３節　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物には、遺物集中地点以外の包含層あるいは表土・撹乱中から出土したものをまとめている。遺物が集中して出土した包含層は、先に述べた遺物集中地点のみであり、他の部分はまばらとなる。調査範囲の至るところに茶畑の改植のために掘られた撹乱が検出され、この中にも多くの遺物が混入する。表土もまた同様である。このような状況から、ここに取り上げた遺物は縄文時代の中でも時間幅を持ち、さまざまな器種・器形のものが混在している。

【土器】（第181図1110）は口縁部と胴部の境に三角の刻目文を付けた五領ヶ台式土器である。（第181図1111）は口縁部に三角状に切り込んで中心に刺突を付けた五領ヶ台式土器である。（第181図1112）は口縁部から半截竹管状工具による斜位隆線を付けた五領ヶ台式土器である。（第181図1113）は口縁部から半截竹管状工具で横位隆線を付けた五領ヶ台式土器である。（第181図1114）は硬い繊維を条の太さ約0.2㎝のＲＬに撚った縄文を付けた鷹島式土器である。（第181図1115）は硬い繊維を条の太さ約0.3㎝のＲＬに撚った縄文を付けた関西系中期前葉土器である。（第181図1116）は硬い繊維を条の太さ約0.4㎝のＲＬに撚った縄文を付けた関西系中期前葉土器である。（第181図1117）は口縁部と胴部の間に先端の尖った竹管状工具で縦位に連続刺突して、隆帯を円形に貼り付け連続刺突を施した中期初頭土器である。（第181図1118）は半截竹管状工具で格子状の沈線を付け、下に条の太さ約0.4㎝の縄文を施した中期初頭土器である。（第181図1119）は波状口縁の波頂部を窪め、口唇部に竹管状工具で円形刺突を付け、口唇部に沿って半截竹管状工具の連続爪形文を施し、条の太さ約0.3㎝のＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1120）は口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線を付け、口縁部と胴部の境に半截竹管状工具で三角刻目を施した北裏Ｃ式土器である。（第181図1121）は半截竹管状工具で横位沈線を付け、口縁部と胴部の境に半截竹管状工具で三角刻目を施した北裏Ｃ式土器である。（第181図1122）は口縁部から半截竹管状工具で三角状の刺突を横位に付けて、斜位に半截竹管状工具で沈線を施し、条の太さ約0.3㎝のＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1123）は波状口縁の下に半截竹管状工具で爪形を付け、下に横位と縦位の粘土隆帯を施し、半截竹管状工具で爪形を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1124）は半截竹管状工具で沈線を弧状に付け、横位の三角隆帯に沿って半截竹管状工具で刺突を施し、三角の連続刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1125）は半截竹管状工具の内面を隆線風に付け、これに沿って爪形刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1126）は口縁部と胴部の境を波状沈線で区画し、区画内に竹管状工具で刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1127）は口縁部と胴部の境に竹管状工具で連続刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1128）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1129・1130・1132～1138）は口縁に沿って半截竹管状工具の連続爪形を付けて、同一工具で横位沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1131）は口縁から半截竹管状工具で連続爪形文を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1139）は半截竹管状工具で連続爪形文を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1140）は口唇部を断面三角にして、半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1141）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で弧状沈線と、縦位沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1142）は波状口縁に沿って指頭で摘んだように窪みを付け、半截竹管状工具で斜位沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1143）は波状口縁に沿って粘土紐を貼り、平らな粘土紐で区画した中に半截竹管状工具で斜位の沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1144）は波状口縁に沿って粘土紐を横位と縦位に貼り半截竹管状工具で斜位の沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1145）は口縁部と胴部の境に粘土帯を貼り有段口縁風にして、半截竹管状工具で弧状沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。（第181図1146）は断面三角

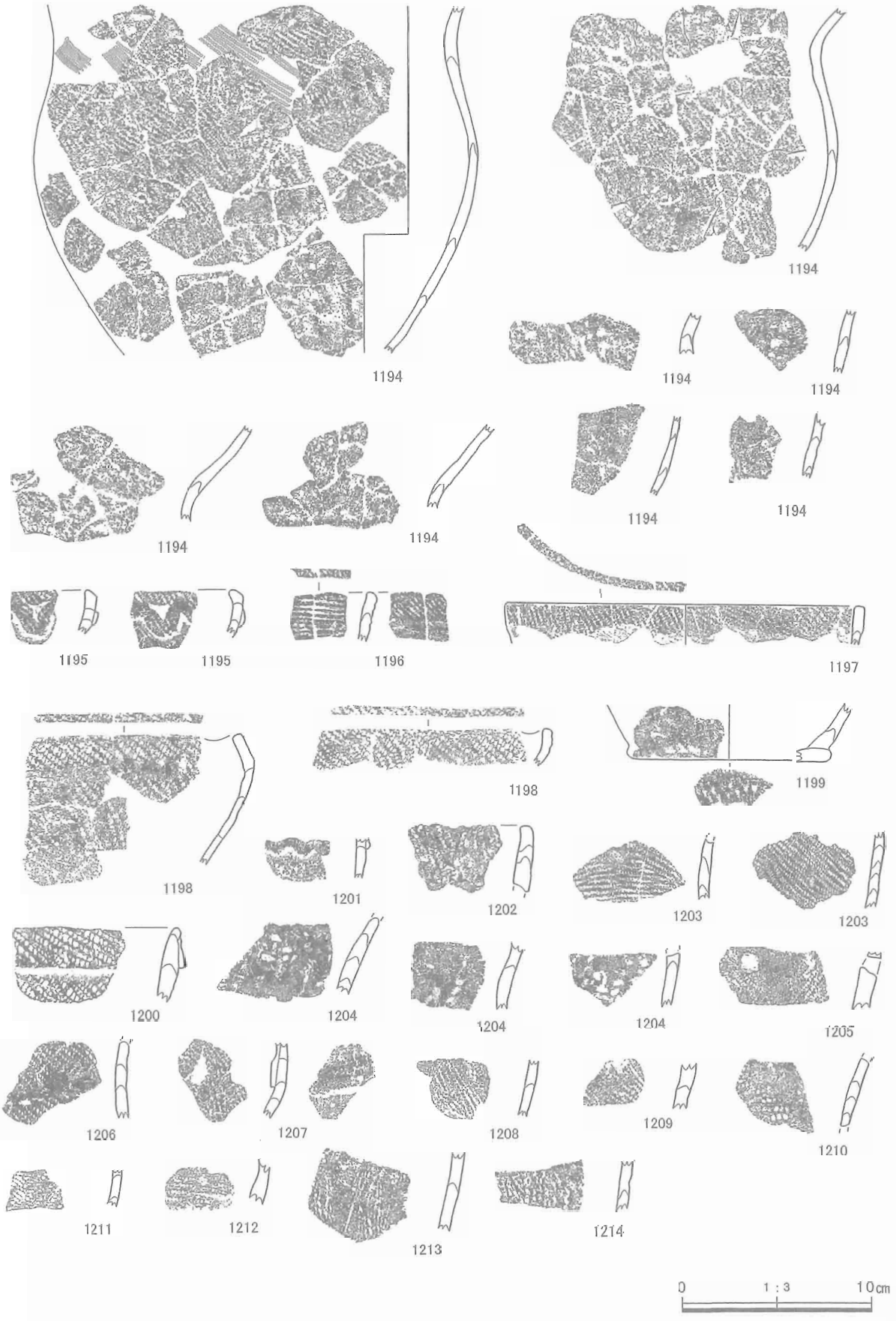


第181図　遺構外出土遺物１

の粘土紐を弧状に貼り付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1147) は口縁部と胴部の境に半截竹管状工具による縦位と横位沈線付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1148) は平らな粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐上部に横位の沈線を施し、下に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1149) は横位に隆帯を貼り、半截竹管状工具で横位の沈線を付け、横位の粘土紐に刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1150) は口縁に沿って横位に先端を尖らせた竹管状工具で連続刺突を施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1151) は半截竹管状工具の内側による刺突と、外面による刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1152) は波状口縁に先端三角の工具で刺突した北裏Ｃ式土器である。(第181図1153) は波状口縁に先端三角の工具で刺突した北裏Ｃ式土器である。(第181図1154) は半截竹管状工具で横位と斜位に沈線区画して、区画内に半截竹管状工具で刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1155) は斜位の隆帯上に竹管状工具で横位に刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1156) は半截竹管状工具で横位に押し引き、同一工具で縦位に沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1157) は口唇部に刻みを付け、半截竹管状工具で斜位と横位に刺突を付け、内面にも半截竹管状工具で刺突を施した北裏Ｃ式土器である。(第181図1158) は条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1159) は半截竹管状工具の連続爪形文と刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1160～1162) は口縁を緩やかな円形の波状にして、口唇部に竹管状工具で刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1161) は口唇部に刺突を付けて、口唇部直下に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文端部を施した北裏Ｃ式土器である。(第181図1162) は波状口縁部に沿って口唇部に刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1163) は低い幅広の隆帯を貼り付け、上部に半截竹管状工具で押し引きを付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1164) は波状口縁の口唇部に半截竹管状工具で刺突を付け、条の太さ約0.4cmと太さ約0.2cmを撚り合わせ、附加条風にした長さ約1.4cmのＲＬ原体で縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第181図1165) は口縁部から条の太さ約0.3cm、長さ約1.5cmのＬＲの縄文を付け、竹管状工具で円形刺突を施した北裏Ｃ式土器である。(第181図1166) は口縁部と胴部の境に横位の隆帯を付け、隆帯上に条の太さ約0.3cmのＬＲ原体で縄文を付け、粘土紐の上部に半截竹管状工具で横位沈線を施した北裏Ｃ式土器である。

(第182図1167) は口唇部に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付け、内面に粘土帯の貼り付け痕を残す北裏Ｃ式土器である。(第182図1168) は粘土紐を円形に貼り付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1169) は低い粘土紐を貼りヘラ状工具で刺突を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1170) は低い粘土紐を縦位に貼り付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1171～1173) は縦位の粘土紐と横位の粘土紐を貼り付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1174) は地文に縄文を施し、粘土紐を貼り付けて、粘土紐に沿って半截竹管状工具で沈線を施した北裏Ｃ式土器である。(第182図1175) は半截竹管状工具の沈線で横位に区画した中に、波状の沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1176・1177) は半截竹管状工具で縦位と斜位の沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1178) は竹管状工具で縦位の沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1179) は半截竹管状工具の縦位沈線で区画した北裏Ｃ式土器である。(第182図1180) は半截竹管状工具の沈線で厂状に付け区画した北裏Ｃ式土器である。(第182図1181) は指頭状で浅い縦位沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1182) は半截竹管状工具で弧状の沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1183) は半截竹管状工具で横位沈線を施し、低い横位隆帯を貼り付け、隆帯上部を指頭で押さえた北裏Ｃ式土器である。(第182図1184) は鋸歯状の沈線を付け、竹管状工具の円形刺突を施した北裏Ｃ式土器である。(第182図1185) は口縁部に条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を地文に付け、半截竹管状工具で斜位に沈線を施し、内面に条の太さ約0.4cmのＬＲの原体で縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1186) は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した北裏Ｃ式土器である。(第182図1187) は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管

第182図　遺構外出土遺物 2

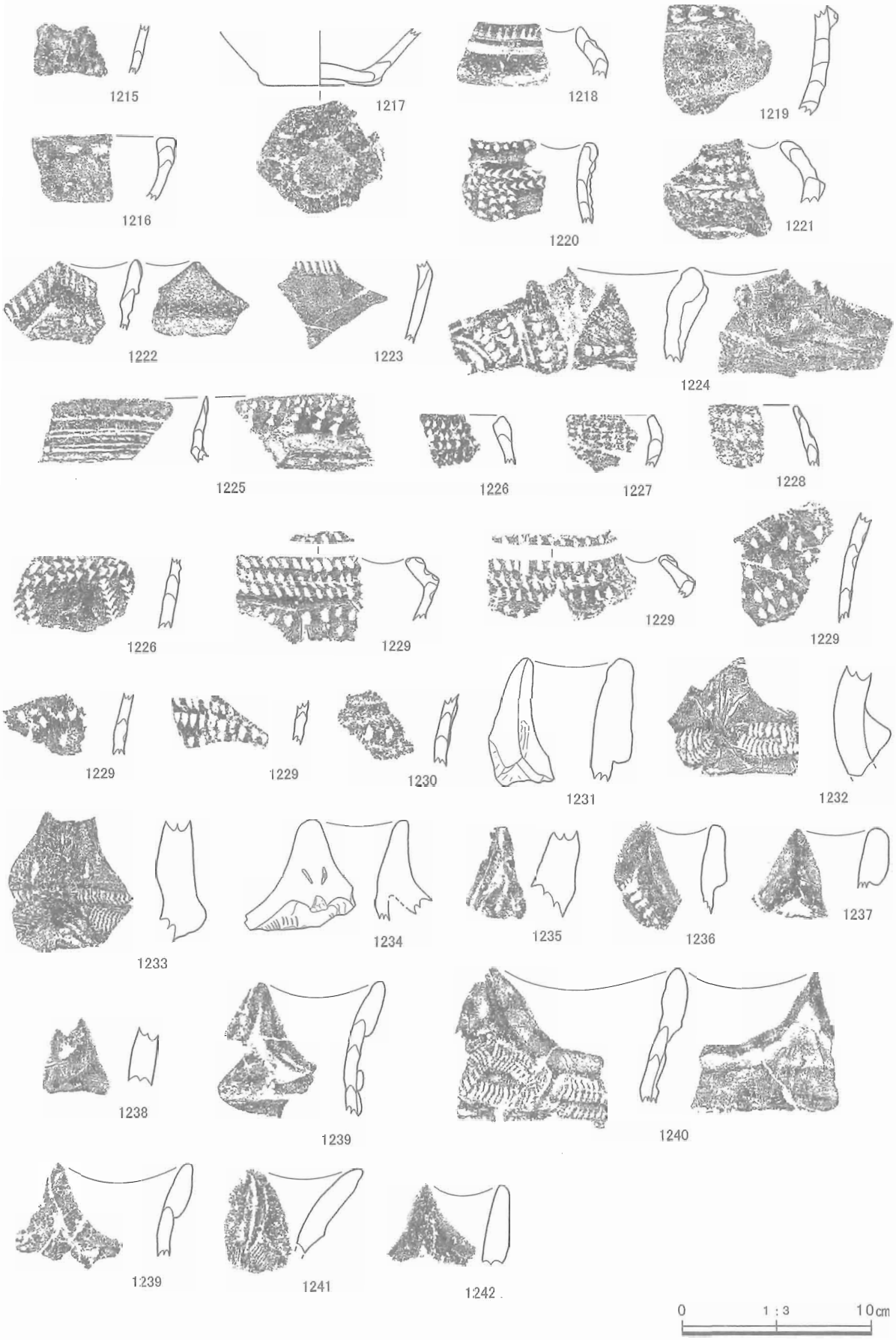


第183図　遺構外出土遺物３

状工具で横位沈線と弧状沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1188)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した北裏Ｃ式土器である。(第182図1189)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した北裏Ｃ式土器である。(第182図1190)は口縁部に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付け、横位沈線を施した北裏Ｃ式土器である。(第182図1191)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、指頭で横位に摘んで爪形文を施し、半截竹管状工具で横位沈線を付けた北裏Ｃ式土器である。(第182図1192)は折り返し口縁にして、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、細い隆帯を波状に貼り付け、胴部に条の太さ約0.2cm、長さ約2.1cmの縄文を付け、底部を指頭で摘んでいる北裏Ｃ式土器で、口径約21cm、底経7.6cmである。(第182図1193)は口唇部に条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、口縁部から条の太さ約0.2cm、長さ約1.7cmのＲＬの多条縄文を施し、内面口縁部にも同一の縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。

(第183図1194)は口縁部から胴部にかけて条の太さ約0.3cm、長さ約2.3cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1195)は口縁をくの字に内反させ、内反部に条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施し、波状隆帯を貼り付けて上部に同一のＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1196)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した北裏Ｃ式土器である。(第183図1197)は口唇部に条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、口縁部から条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施し、内面にも同一の原体を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1198)は口唇部に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、口縁を内湾させ、口縁部から条の太さ約0.3cm、長さ約1.8cmの縄文を付け、指頭状の圧痕を施した北裏Ｃ式土器である。(第183図1199)は底部を指で摘んでおり、底面に網代痕のある北裏Ｃ式土器である。(第183図1200)は折り返し口縁にして、口縁直下から条の太さが約0.4cmと約0.2cmの２本の条を撚ったＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1201)は波状の粘土紐を付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した北裏Ｃ式土器である。(第183図1202)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1203)は条の太さ約0.2cm、長さ約1.8cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器と思われる。(第183図1204)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器と思われる。(第183図1205)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、補修孔を施した北裏Ｃ式土器と思われる。(第183図1206)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器と思われる。(第183図1207)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け三角刻目文を施し、内面に貼り付け痕のある北裏Ｃ式土器である。(第183図1208)は条の太さ約0.2cm、長さ約1.6cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器と思われる。(第183図1209)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、鋸歯状に沈線を入れた北裏Ｃ式土器である。(第183図1210)は条の太さ約0.4cm、長さ約1.5cmのＬＲの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1211)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1212)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1213)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。(第183図1214)は条の太さ約３㎜のＲＬの縄文を付けた北裏Ｃ式土器である。

(第184図1215)は無文の北裏Ｃ式土器と思われる。(第184図1216)は口唇部を平らにして、口縁部を無文にした北裏Ｃ式土器と思われる。(第184図1217)は底部を上げ底風にした北裏Ｃ式土器と思われる。(第184図1218)は波状口縁に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付け、同一工具で横位沈線を施した北屋敷式土器である。(第184図1219)は横位に隆帯を付け、隆帯上に半截竹管状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第184図1220)は波状口縁の隆帯に沿って先端を尖らした竹管状工具で連続刺突を付け、同一工具で弧状と縦位に連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第184図1221)は山形口縁にして半截竹管状工具で沈線を付け、下に先端を尖らせた竹管状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第184図1222)は波状口縁に沿ってヘラ状工具で連続刺突を付け、下に棒状工具で刺突を施した北屋敷式土器である。(第184図1223)は口縁と胴部の境にヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土



第184図　遺構外出土遺物４

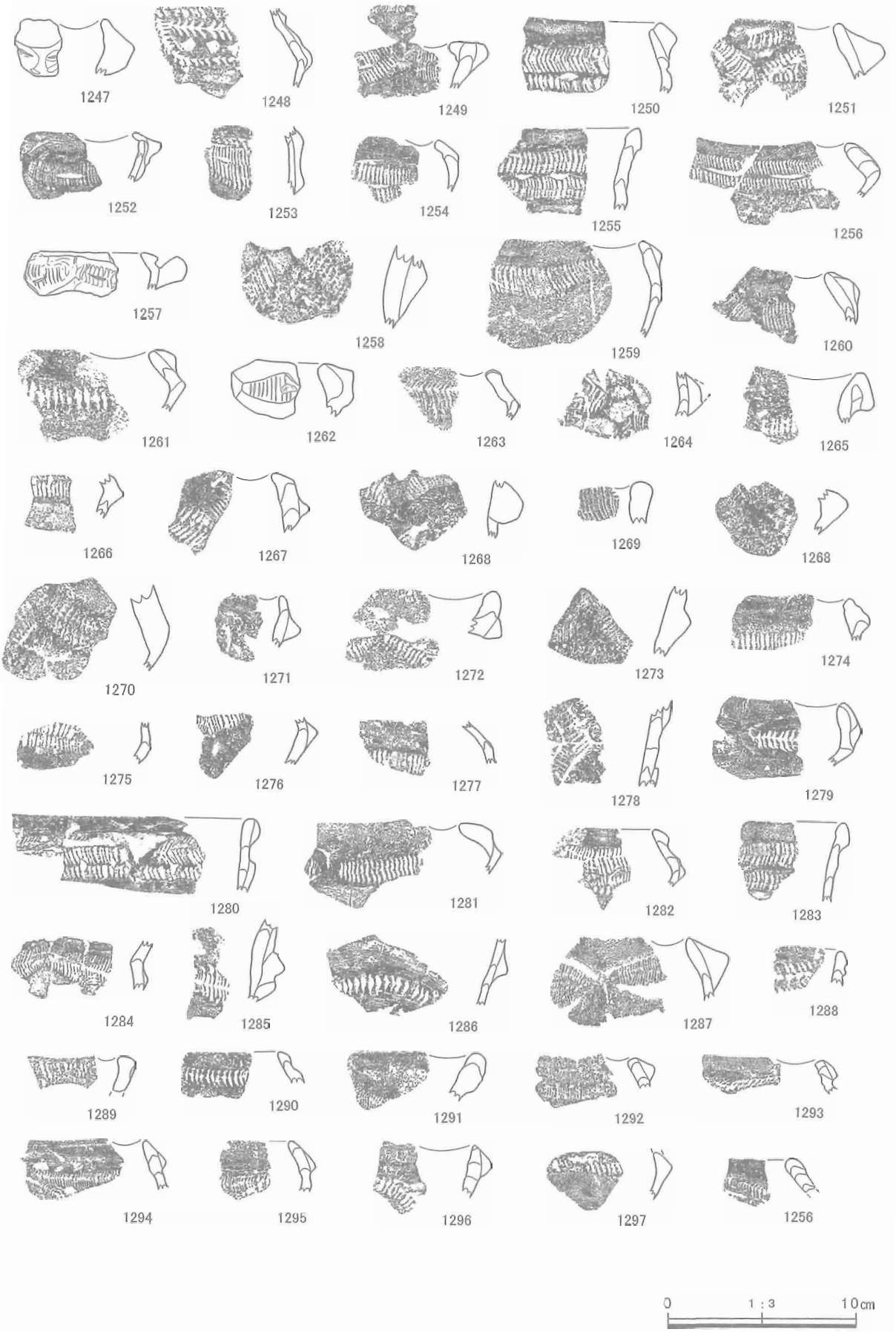
器である。(第184図1224) は波状口縁の波頂部を挟むように粘土帯をY状に折り曲げ、半截竹管状工具による沈線と連続爪形文を斜位に付けた北屋敷式土器である。(第184図1225) は口縁部がくの字に開き、口縁に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施し、内面には竹管状工具で横位と斜位に刺突を施した北屋敷式土器である。(第184図1226) は口縁に沿ってヘラ状工具の先端を尖らせた施文具で連続刺突を付け、胴部にも先端を尖らした工具で連続刺突を縦位と横位に施した北屋敷式土器である。(第184図1227) は口縁を内湾させ、それに沿って半截竹管状工具の端部で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第184図1228) は口縁に沿って先端を尖らしたヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第184図1229) は口縁部がくの字に内湾する波状口縁に沿って、半截竹管状工具で連続刺突を付け、胴部にも同一工具で斜位や横位にまばらな連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第184図1230) は低い隆線の間に半截竹管状工具の先端の丸い施文具で刺突を斜めに付けた北屋敷式土器である。(第184図1231・1235) は尖頭状突起を付けた北屋敷式土器である。(第184図1232) は尖頭状突起の根本にこぶを付け、楕円形に区画した中に先端の丸いヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第184図1233) は尖頭状突起の根本にこぶを付け、平らでヘラの先端を台形にした工具の三角の部分の連続刺突を施し、区画内に同一工具の先端で平らの台形工具の連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第184図1234) は角状の突起の根本に先端を丸いヘラ状工具で刺突を付け、下の区画内に同一工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第184図1236) は低い角状突起の下に半截竹管状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第184図1237) は低い角状突起を付けた北屋敷式土器である。(第184図1238) は低めの尖頭状突起を付けた北屋敷式土器である。(第184図1239) は左右から隆帯を貼り付け角状突起にし、下にも横位隆帯を付け区画した北屋敷式土器である。(第184図1240) は低い角状突起の稜線に沿って縦弧状の沈線を付け、下に半截竹管状工具の台形状の先端で連続爪形を施した北屋敷式土器である。(第184図1241) は尖頭状突起の下にヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第184図1242) は低い角状突起を付けた北屋敷式土器である。

(第185図1243) は小波状口縁の三日月状区画に横に出る小突起が付き、先端三角のヘラ状工具で連続刺突を施し、区画内に同一工具で三角の押し引きを斜位に施した北屋敷式土器で口径が約42cmである。(第185図1244) は小波状口縁の三日月状区画に横に出る小突起が付き、先端三角のヘラ状工具で連続刺突を施し、区画内に同一工具で三角の連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第185図1245) は小波状口縁の三日月状区画の横に出る小突起が付き、先端三角のヘラ状工具で連続刺突を施し、区画内に同一工具で斜位の三角連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第185図1246) は小波状口縁の三日月状区画に小突起が付き、先端三角のヘラ状工具で連続刺突を施し、区画内に同一工具で斜位に三角の連続刺突を付けた北屋敷式土器である。

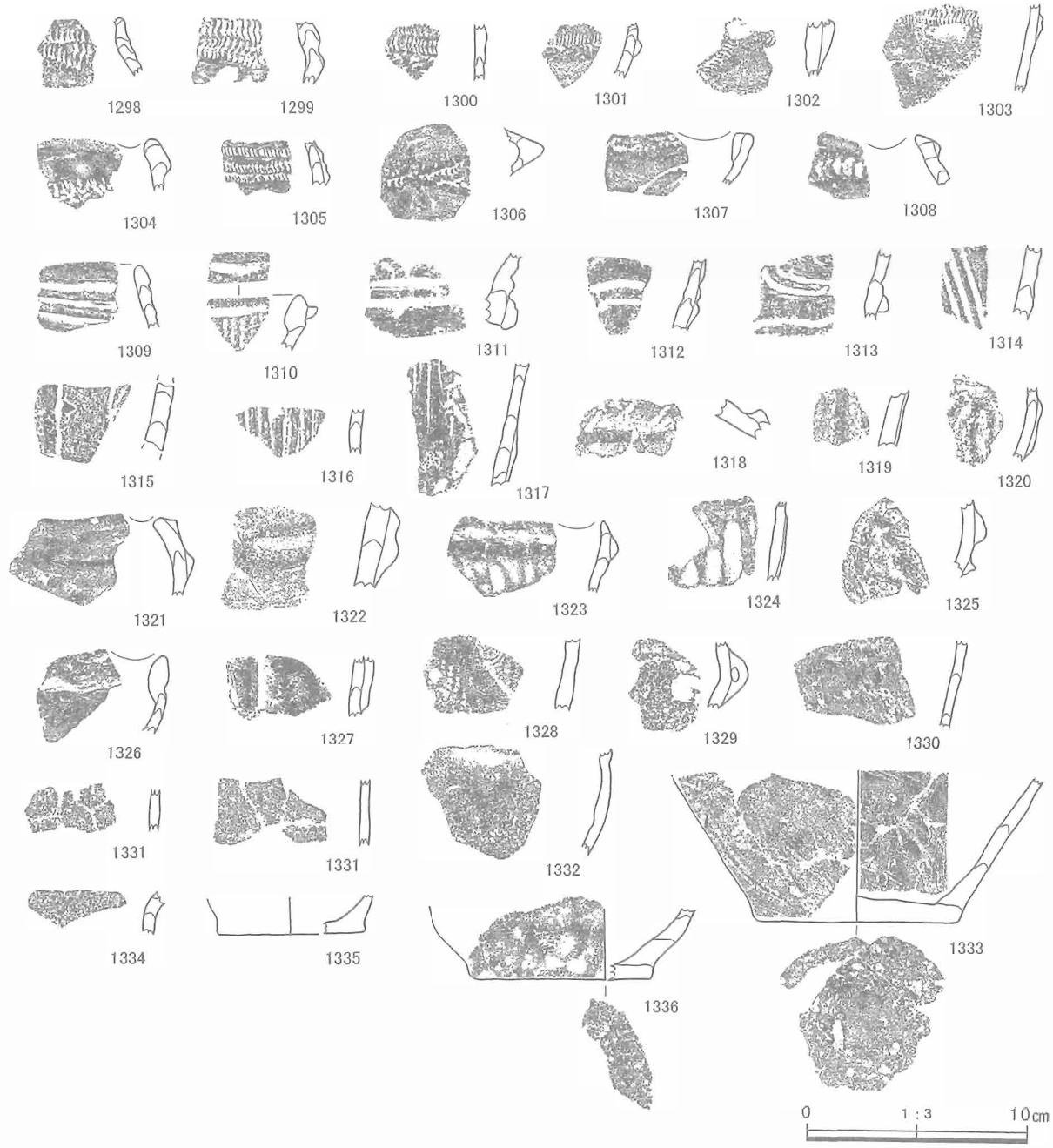
(第186図1247) は小波状口縁の三日月状区画に横に出る小突起が付き、区画内に先端三角のヘラ状工具で連続刺突を付け、その中間に同一工具で横位の刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1248) は口縁部に隆帯で区画した中に、区画に沿って先端三角のヘラ状工具で連続刺突を付け、その中に同一工具で横位の刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1249) は口縁部に横位につまみ上げたような突起を付け、三日月状にヘラ状工具で連続刺突を施し、中に同一工具で横位の刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1250) は波状口縁に隆帯を付け、区画内に沿って先端を三角にしたヘラ状工具で連続刺突を施し、連続刺突の境に同一工具で横位の刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1251) は三日月状の区画の接点につまみ上げたような突起を付け、区画に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を施し、中に同一工具で横の弧状刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1252) は三日月状区画の接点につまみ上げたような突起を付け、ヘラ状工具の先端で連続刺突と横位刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1253) は口縁に隆帯で三日月状に区画して、区画内にヘラ状工具の先端で連続刺突と横

第185図　遺構外出土遺物5

位刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1254) は口縁に沿って隆帯を三日月状に貼り区画し、区画内にヘラ状工具の先端で連続刺突と横位刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1255) は波状口縁に沿って隆帯を付け区画し、区画内に先端の尖ったヘラ状工具で連続刺突と横位刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1256) は波状口縁に沿って区画し、区画内に先端三角のヘラ状工具の先端で連続刺突と横位刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1257) は口縁に沿って三日月状に隆帯を施して横位の突起を付けて区画し、区画の接点につまみ上げたような突起を付ける。区画内に先端の尖ったヘラ状工具で連続の刺突文と横に弧状の刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1258) は角状突起の先端が欠損している。突起の根本の三日月状の区画の接点につまみ上げたような突起を付け、先端の丸いヘラ状工具か半截竹管状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1259) は波状口縁部に沿って三日月状に隆帯を付け、先端の丸い幅広のヘラ状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1260) は口縁部に三日月状に隆帯を付け、先端の丸い幅広のヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1261) は口縁部に沿って隆帯を貼り付け区画し、区画の中に先を尖らせた幅広のヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1262) は口縁部に沿って隆帯を貼り区画しつまみ上げたような突起を付け、区画内に幅広のヘラ状工具でC状の連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1263) は波状口縁に沿って隆帯を付け、区画内に幅広の先端三角のヘラ状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1264) は口縁に隆帯を貼り区画し、接点につまみ上げたような突起を付け、区画内に幅広の先端の平らなヘラ状工具で横位刺突施した北屋敷式土器である。(第186図1265) は口縁に沿って隆帯を貼り区画し、接点につまみ上げたような突起を付け、区画内に先端三角のヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1266) は隆帯を貼り区画内にヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1267) は波状口縁に隆帯を貼り区画し、接点につまみ上げたような突起を付け、区画内に先端の丸い幅広のヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1268) は口縁部に横位の突起を付け、区画内に先端を三角に尖らせたヘラ状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1269) は口縁部に平らなヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1270) は角状突起の角部が欠損しているが、隆帯で三日月状に区画し、接点につまみ上げたような突起を付け、中に先端のささくれたヘラ状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1271) は口縁横位につまみ上げたような突起を付けた北屋敷式土器である。(第186図1272) は波状口縁に三日月状に隆帯を付け、接点につまみ上げたような突起を施し、区画内に先端の三角のヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1273) は角状突起の先端が欠損しており、根本にこぶ状の突起を付け、先端の平らな幅広のヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1274・1275・1277・1292・1293・1297) は波状口縁に隆帯を貼り区画し、区画内に先端三角のヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1276) は隆帯で区画し、接点につまみ上げたような突起を付け、区画内に先端の平らなヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1278) は平らなヘラ状工具で縦位にく状に連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1279) は波状口縁に隆帯で楕円形に区画し、その中に先端三角の平らなヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。(第186図1280) は口縁部に隆帯を貼り付け区画した中に、先端三角形の幅広のヘラ状工具で連続刺突を付け、中間でV状の粘土隆帯を貼った北屋敷式土器である。(第186図1281) は口縁部に隆帯で楕円形の区画を付け、接点をつまみ上げX状にし、区画内に先端を少し尖らせた幅広のヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1282・1283) は口唇部に隆帯を付け区画し、先端を三角にした幅広のヘラ状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。(第186図1284) は隆帯で区画した中に、ヘラ状工具の先端を尖らせ連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1285) は隆帯で区画した中に、ヘラ状の先端を三角に尖らせた工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。(第186図1286) は隆帯を



第186図　遺構外出土遺物６



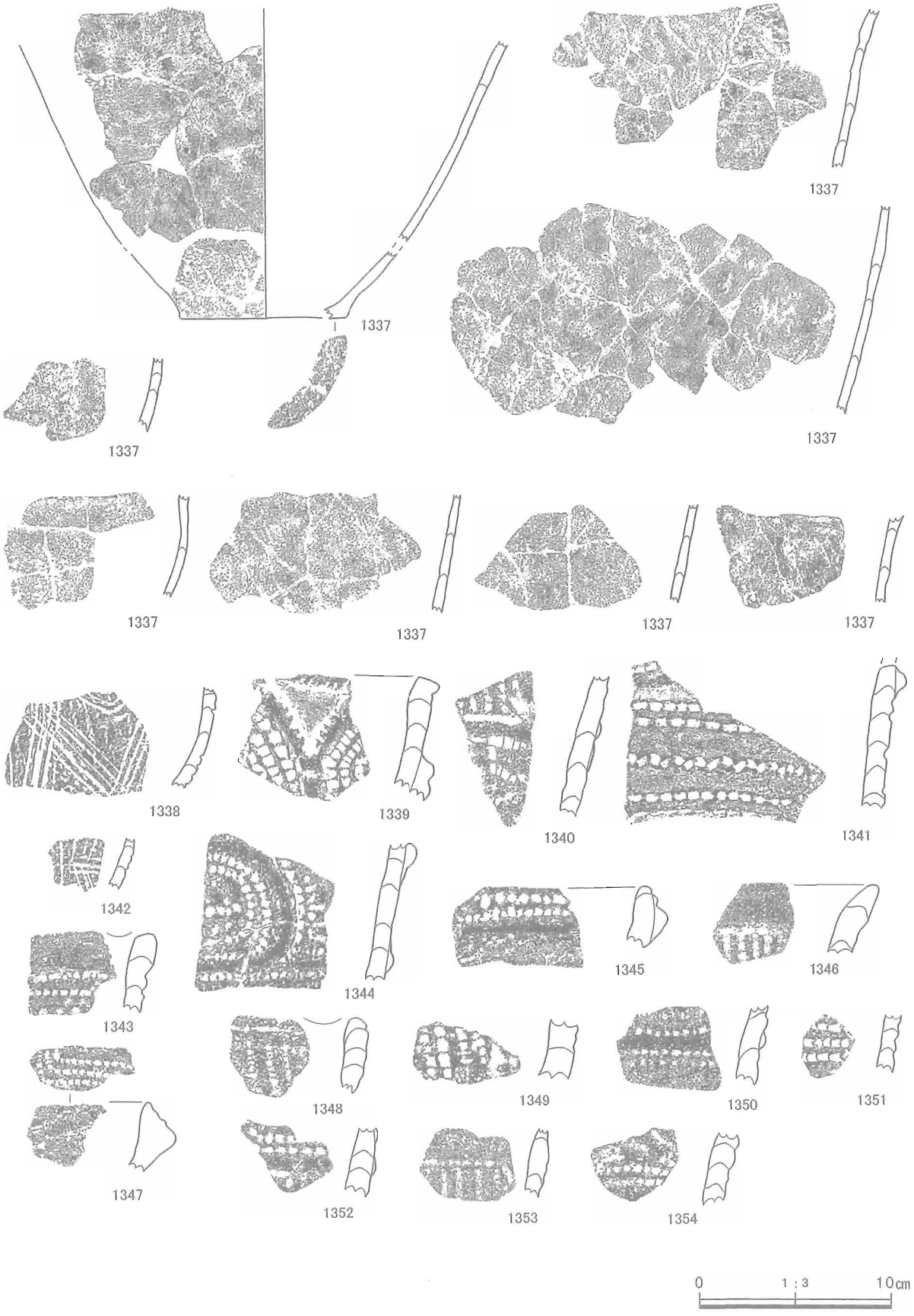
第187図　遺構外出土遺物７

弧状に貼り、先端を三角にしたヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。（第186図1287・1296）は角状突起の先端が欠損しており、下の区画内に先端を三角にした工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。（第186図1288）は口縁に隆帯を付け区画し、区画内にヘラ状工具と半截竹管状工具で刺突を施した北屋敷式土器である。（第186図1289）は波状口縁に沿ってヘラ状工具で連続刺突した北屋敷式土器である。（第186図1290）は隆帯を貼り付け区画した中に、先端を丸くした竹管状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。（第186図1291）は波状口縁に幅広の隆帯を貼り区画した中に、ヘラ状工具の先端を尖らせた施文具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。（第186図1294）は波状口縁に沿って隆帯で区画し、区画内に先端三角のヘラ状工具で斜位や横位に連続刺突を付けた北屋敷式土器である。（第186図1295）は波状口縁の下の区画内に、先端三角のヘラ状工具で連続刺突を付け、同一工具

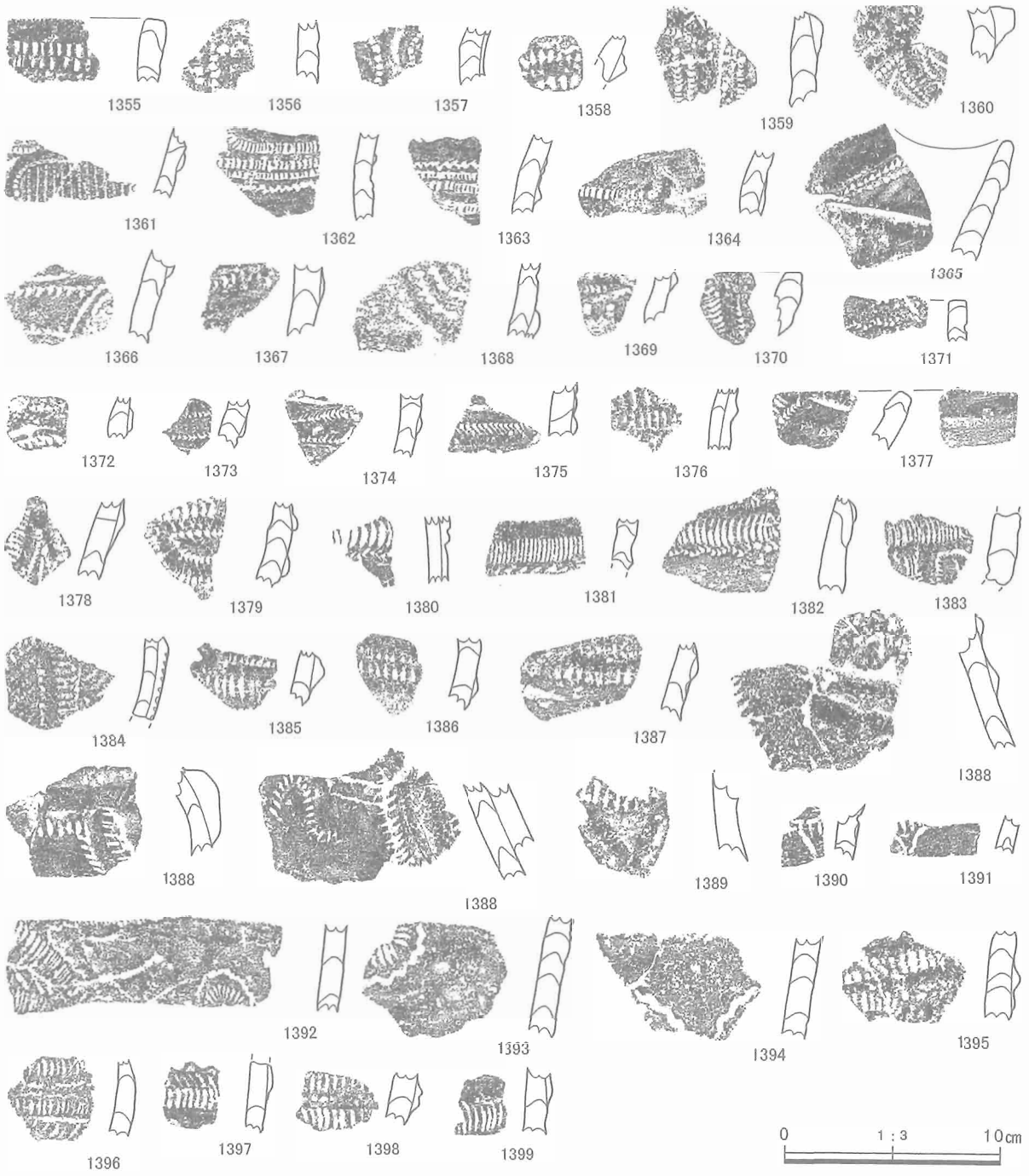
で圧痕を施した北屋敷式土器である。

（第187図1298・1299・1301～1303・1305）は隆帯区画内に先端三角のヘラ状工具で連続刺突を付けた北屋敷式土器である。（第187図1300）は口縁部区画内に先端三角にしたヘラ状工具で横位と斜位に連続刺突を付けた北屋敷式土器である。（第187図1304）は波状口縁の隆帯区画内にヘラ状工具で横位と斜位の連続刺突を付けた北屋敷式土器である。（第187図1306）は隆帯で三日月状の区画を施し交点をつまみ上げ、区画内に半截竹管状工具で連続爪形文を付けた北屋敷式土器である。（第187図1307）は波状口縁に隆帯を付け、竹管状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。（第187図1308）は波状口縁に沿って隆帯を付け、隆帯に沿って先端三角のヘラ状工具で連続刺突を施した北屋敷式土器である。（第187図1309）は口縁部に沿って半截竹管状工具で横位沈線を付けた北屋敷式土器である。（第187図1310）は口縁部に隆帯を付けて口唇部に沈線を施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付け、内面にも粘土帯を貼り付けた北屋敷式土器である。（第187図1311）は口縁部と胴部の境に隆帯を貼り、半截竹管状工具で横位沈線を付け、三角の刻目を施した北屋敷式土器である。（第187図1312）は半截竹管状工具で弧状沈線を付けた北屋敷式土器である。（第187図1313）は横位隆帯で区画した中に、半截竹管状工具で弧状沈線を付けた北屋敷式土器である。（第187図1314）は半截竹管状工具で斜位の沈線を付けた北屋敷式土器である。（第187図1315）は半截竹管状工具の縦位沈線で区画した北屋敷式土器である。（第187図1316）は半截竹管状工具の縦位沈線を付けた北屋敷式土器である。（第187図1317）は隆帯を垂下しヘラ状工具で刻みを付け、竹管状工具で縦位沈線を施した北屋敷式土器である。（第187図1318）は横位隆帯を付け、半截竹管状で斜位に沈線を施した北屋敷式土器である。（第187図1319）は粘土紐を斜位に貼り付けた北屋敷式土器である。（第187図1320）は薄手の口縁に粘土紐を斜位に付けた北屋敷式土器である。（第187図1321）は波状口縁に沿って隆帯を付けた北屋敷式土器である。（第187図1322）は隆帯を付け、隆帯の交差点をつまみ上げた北屋敷式土器である。（第187図1323）は薄手の波状口縁部に沿って横位隆帯を付け、横位隆帯から斜位に隆帯を貼り付けた北屋敷式土器である。（第187図1324）は口縁部から断面三角の縦位隆帯を貼り付けた北屋敷式土器である。（第187図1325）は隆帯を斜位に付けた北屋敷式土器である。（第187図1326）は口縁部に沿って隆帯を貼り付けて無文にした北屋敷式土器である。（第187図1327）は隆帯を縦位に貼り付けた北屋敷式土器である。（第187図1328）は条の太さ約0.3㎝のＬＲの縄文を付け、一部沈線で区画した北屋敷式土器である。（第187図1329）は胴部に把手を付けたミニチュアで北屋敷式土器と思われる。（第187図1330・1331・1334）は無文の北屋敷式土器と思われる。（第187図1332）は横位沈線を付けた北屋敷式土器と思われる。（第187図1333・1335・1336）は北屋敷式土器の底部である。（第187図1336）は底部近くまで指頭痕が施され、底面に網代痕が付いている。

（第188図1337）は口縁部を欠いた無文の胴部と底部で北屋敷式土器である。（第188図1338）は胴部の地文に条の太さ約0.3㎝のＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で斜格子状と弧状沈線を付けた船元Ⅲ式土器である。（第188図1339）は口縁から三角形に粘土紐を貼り垂下して、粘土紐に沿って半截竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。（第188図1340）は隆帯を付け半截竹管状工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。（第188図1341）は横位隆帯を貼り、区画した中に半截竹管状工具で横位沈線を付け、同一工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。（第188図1342）は条の太さ約0.2㎝のＬＲの縄文を地文に付け、半截竹管状工具で縦位、斜位、横位に沈線を付けた船元Ⅲ式土器である。（第188図1343）は波状口縁部に沿って、半截竹管状工具で横位に連続刺突した勝坂式土器である。（第188図1344）は隆帯で楕円形に区画した中に、隆帯に沿って半截竹管状工具の連続刺突を付けた勝坂式土器である。（第188図1345・1347）は浅鉢形土器で口唇部に沿って半截竹管状工具の連続刺突を付けた勝坂式土器である。（第188図1346・1348）は口縁の区画内に半截竹管状工具で縦位の連続刺突を付けた勝坂式土器である。（第188図1349）は隆帯を斜位に貼り付け、半截竹管状工具で斜位の連続刺突を付けた勝坂式土器



第188図　遺構外出土遺物 8



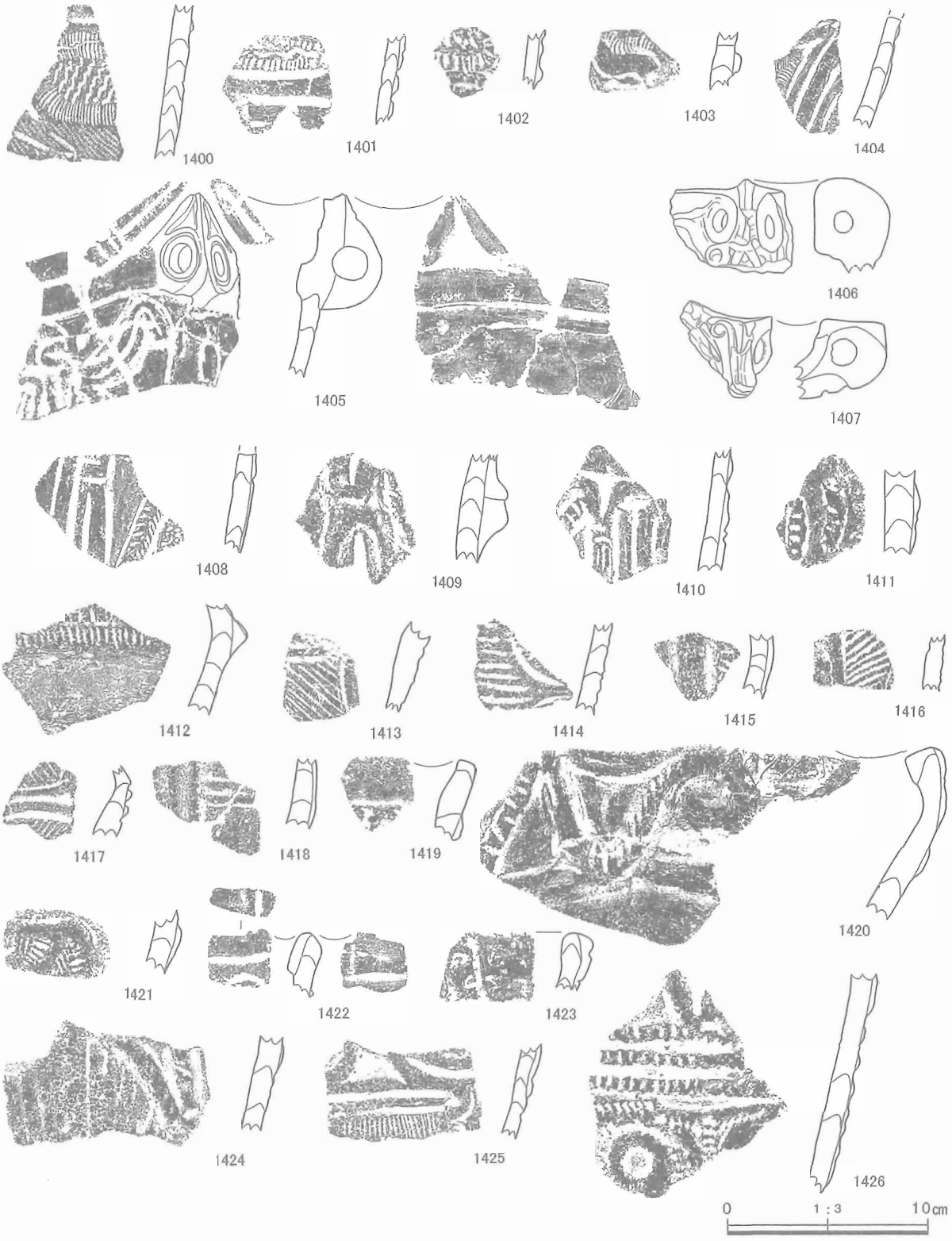
第189図　遺構外出土遺物９

である。（第188図1350）は横位隆帯に沿って半截竹管状工具を連続刺突した勝坂式土器である。（第188図1351）は半截竹管状工具の横位連続刺突した勝坂式土器である。（第188図1352）は横位隆帯を付け、隆帯に沿って半截竹管状工具の連続刺突を施した勝坂式土器である。（第188図1353）は半截竹管状工具の横位連続刺突で区画した中に、連続刺突を付けた勝坂式土器である。（第188図1354）は隆帯を貼り、隆帯に沿って半截竹管状工具の連続刺突を付けた勝坂式土器である。

（第189図1355）は口縁に沿って半截竹管状工具の横位の連続刺突を付けた勝坂式土器である。（第189図1356）は先端三角の竹管状工具で縦位と横位に連続刺突を付けた勝坂式土器である。（第189図1357）は隆帯で楕円形区画し、先端三角の半截竹管状工具で連続刺突を付け、隆帯に沿って竹管状工具の連続

刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1358) は隆帯に沿って先端三角の竹管状工具で刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1359) は隆帯で横位と縦位に区画し、隆帯に沿って先端三角の半截竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1360) は横位と弧状の隆帯を交差して、それに沿って、細い先端三角の半截竹管状工具で連続刺突と沈線を付けた勝坂式土器である。(第189図1361) は隆帯で楕円形に区画し、それに沿って細い半截竹管状工具で刺突し、区画内に細い半截竹管状工具で縦位の連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1362・1363) は横位の隆帯に沿って、半截竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1364) は隆帯に沿って半截竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1365) は波状口縁に沿って粘土帯を貼り、先端三角の竹管状工で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1366) は隆帯に沿って先端三角の工具で連続刺突した勝坂式土器である。(第189図1367) は隆帯上部に半截竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1368) は隆帯に沿って細い竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1369) は隆帯に沿って細い竹管状工具で連続刺突を横位、縦位に付けた勝坂式土器である。(第189図1370) は口縁から隆帯を斜位に付け、隆帯に沿って半截竹管状工具の爪形刺突と先端三角の竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1371) は先端三角の工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1372) は先端三角の竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1373) は先端三角の竹管状工具で弧状の連続刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1374・1375) は横位隆帯に沿って先端三角の竹管状工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1376) は横位隆帯に沿って半截竹管状工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1377) は波状口縁から斜位に隆帯を貼り、隆帯上に連続爪形文と先端三角の連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1378) は隆帯を貼り付け、隆帯に沿って連続爪形文と先端三角の工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1379) は隆帯を楕円形に貼り付け区画し、それに沿って先端三角の半截竹管状工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1380) は隆帯に沿って半截竹管状工具と先端三角の竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1381) は半截竹管状工具で横位に連続爪形文を付け、それに沿って先端三角の竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1382) は隆帯に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付け、それに沿って細い三角の竹管状工具で波状に連続刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1383) は隆帯を貼り付け、隆帯に沿って半截竹管状工具と先端三角の細い竹管状工具で連続爪形を付けた勝坂式土器である。(第189図1384) は半截竹管状工具による連続刺突と、先端三角の竹管状工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1385・1386) は半截竹管状工具と先端三角の半截竹管状工具による連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1387) は隆帯を横位に付け、半截竹管状工具で連続爪形文を施した勝坂式土器である。(第189図1388・1389) は隆帯を横位や波状、Ｖ状に付け、隆帯に沿ってヘラ状工具で刺突を施した勝坂式土器である。(第189図1390・1391・1393・1394) は半截竹管状工具の爪形をつなげて区画し、区画内に爪形を付けた勝坂式土器である。(第189図1392) は先端を三角にした竹管状工具の連続刺突で区画し、半截竹管状工具の連続爪形文を付けた勝坂式土器である。(第189図1395・1398) は横位隆帯を挟んで上下に半截竹管状工具の連続爪形を付けた勝坂式土器である。(第189図1396) は半截竹管状工具の連続爪形と先端三角の竹管状工具の連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第189図1397・1399) は隆帯上部や隆帯に沿って半截竹管状工具の連続爪形を付けた勝坂式土器である。

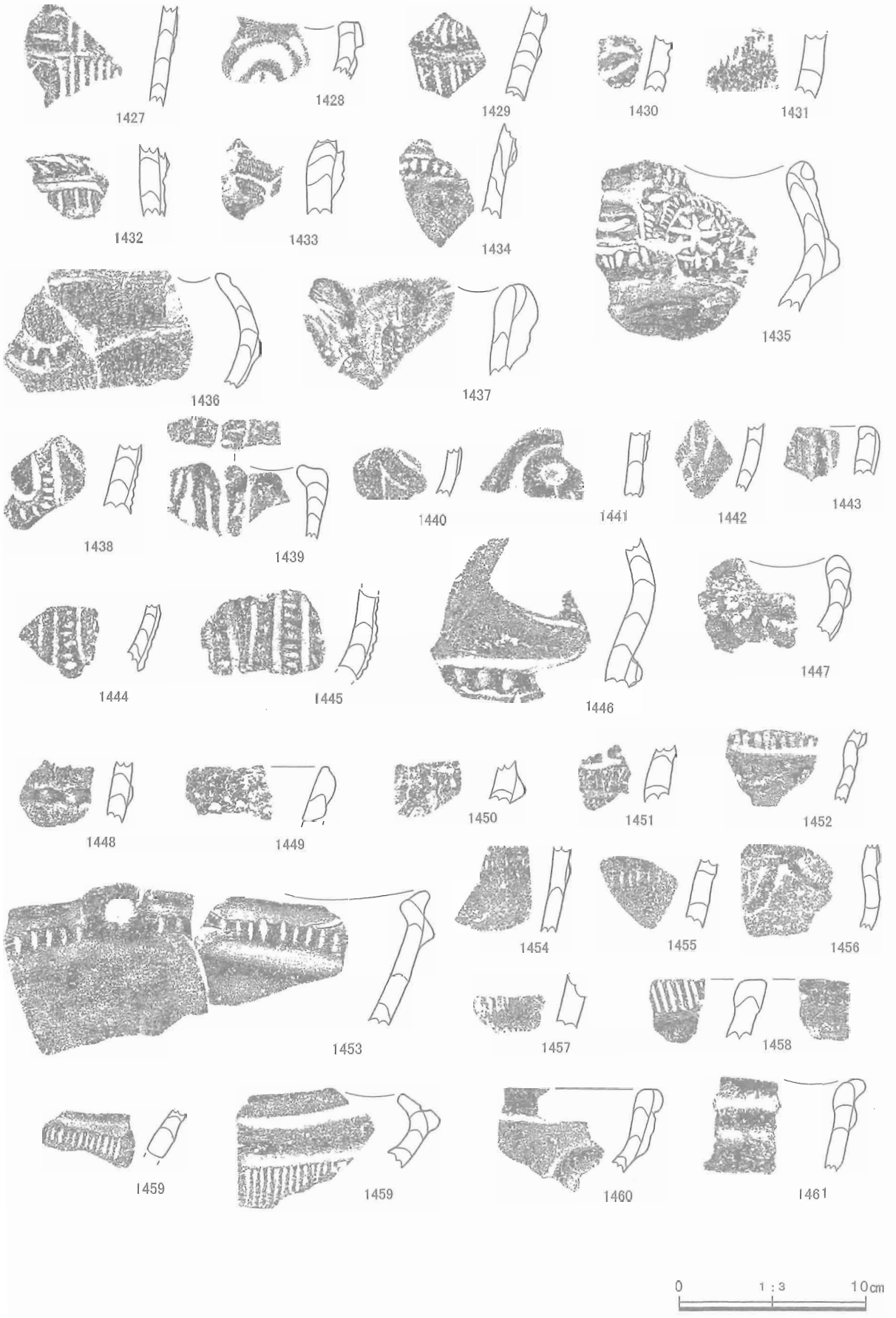
(第190図1400) は半截竹管状工具の連続爪形文で楕円形に区画し、中に細い先端三角の竹管状工具の連続刺突を斜位の波状に入れ、外に条の太さ約0.1㎝のＲＬの縄文を付けた勝坂式土器である。(第190図1401) は隆帯で区画した中に半截竹管状工具で楕円形に連続爪形文を付け、中に細い竹管状工具の連続刺突を波状に入れた勝坂式土器である。(第190図1402) は隆帯で区画した中に竹管状工具で連続刺突



第190図　遺構外出土遺物10

を付け、中に細い三角の竹管状工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。(第190図1403) は隆帯を波状に貼り付け、隆帯にそって竹管状工具で連続爪形を付けた勝坂式土器である。(第190図1404) は隆帯で区画した中に、半截竹管状工具の連続爪形を付けた勝坂式土器である。(第190図1405) は頭頂部を三角にし三叉状の刻みを入れ、双環状把手を施して把手の下に弧状に隆帯を付ける。内面も三叉状の文様を付けた勝坂式土器である。(第190図1406) は口縁に粘土紐を付け双環状把手の下に隆帯を施した勝坂式土器である。(第190図1407) は口縁に粘土紐を付け双環状把手の下に隆帯を付けた勝坂式土器である。(第190図1408) は縦位と斜位に隆帯を付け、一部隆帯上部に沈線と連続爪形を施した勝坂式土器である。(第190図1409) は縦位に隆線を貼り付け、中に縦位沈線を施した勝坂式土器である。(第190図1410) は縦位に隆線を貼り付け、中に縦位沈線を施した勝坂式土器である。(第190図1411) は粘土紐を貼って上部に竹管状工具で刺突を付けた勝坂式土器である。(第190図1412) は胴部と口縁部の境に竹管状工具で刺突を付けた勝坂式土器である。(第190図1413・1416・1417) は横位隆帯や半截竹管状工具の沈線で区画した中に、半截竹管状工具で斜位の沈線を付けた勝坂式土器である。(第190図1414) は半截竹管状工具の横位沈線と弧状沈線を付けた勝坂式土器である。(第190図1415) は隆帯を付けた勝坂式土器である。(第190図1418) は隆帯を縦位と横位に貼り付けた勝坂式土器である。(第190図1419) は口縁に横位の隆帯を付け、隆帯上に半截竹管状工具で刺突を施した勝坂式土器である。(第190図1420) は口縁に沿って竹管状工具で刺突した渦巻きや斜位の隆帯を付けて区画し、区画内に三叉状の沈線を施した勝坂式土器である。(第190図1421) は隆帯を貼り付け区画した中に、隆帯に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を施した勝坂式土器である。(第190図1422) は波状口縁に沿って沈線を施し、内面にも隆帯を貼り付けた勝坂式土器である。(第190図1423) は波状口縁に沿って斜位に隆帯を貼り付け、粘土紐上部に竹管状工具で円形刺突を施した勝坂式土器である。(第190図1424) は隆帯の上に竹管状工具で刺突施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた勝坂式土器である。(第190図1425) は隆帯を貼り付け区画し、区画内に半截竹管状工具で縦位沈線を施した勝坂式土器である。(第190図1426) は隆帯を横位や円形などに貼り付け、隆帯上部に半截竹管状工具で刺突を施した勝坂式土器である。

(第191図1427) は半截竹管状工具で縦位と横位沈線を付け区画した勝坂式土器である。(第191図1428) は波状口縁に沿って隆帯を弧状に付けた勝坂式土器である。(第191図1429) は隆帯を横位に貼り、半截竹管状工具で連続爪形文を付け、下に縦位沈線を施した勝坂式土器である。(第191図1430) は沈線を弧状に付けた勝坂式土器である。(第191図1431) は半截竹管状工具の爪形文を付けた勝坂式土器である。(第191図1432) は竹管状工具で隆帯上に沈線区画した中に、半截竹管状工具で縦位沈線を施した勝坂式土器である。(第191図1433) は隆帯を付けて三叉状沈線を施した勝坂式土器である。(第191図1434) は隆帯上部に半截竹管状工具で刺突を付け、条の太さ約0.3cmＬＲの縄文を施した勝坂式土器である。(第191図1435) は波状口縁でくの字に内湾する中に、縦位隆帯で区画して隆帯とヘラ状工具、竹管状工具で米状などの文様を付けた勝坂式土器である。(第191図1436) は条の太さ約0.5cmのＲＬの多条縄文を施し、隆帯を円形に付けて竹管状工具で刺突を施した勝坂式土器である。(第191図1437) は波状口縁から隆帯を波状に付け垂下し区画を施し、区画内に半截竹管状工具で刺突を施した勝坂式土器である。(第191図1438・1444・1445) は隆帯上部に竹管状工具で刺突を付け沈線を施した勝坂式土器である。(第191図1439) は口縁部に沈線を付け、口縁部から隆帯を垂下した勝坂式土器である。(第191図1440) は低い隆帯を貼り付け、竹管状工具で沈線を施した勝坂式土器である。(第191図1441) は隆帯を円形に貼り付け、沈線と円形の窪みを施した勝坂式土器である。(第191図1442) は低い隆帯を弧状に付けた勝坂式土器である。(第191図1443) は口縁部から隆帯を垂下した勝坂式土器である。(第191図1446) は口縁部と胴部の境に横位隆帯を貼り、隆帯上部を棒状工具で圧痕した勝坂式土器である。(第191図1447) は波状口縁に隆帯を貼り、棒状工具で刺突を施した勝坂式土器である。(第191図1448) は隆帯の上を棒状工

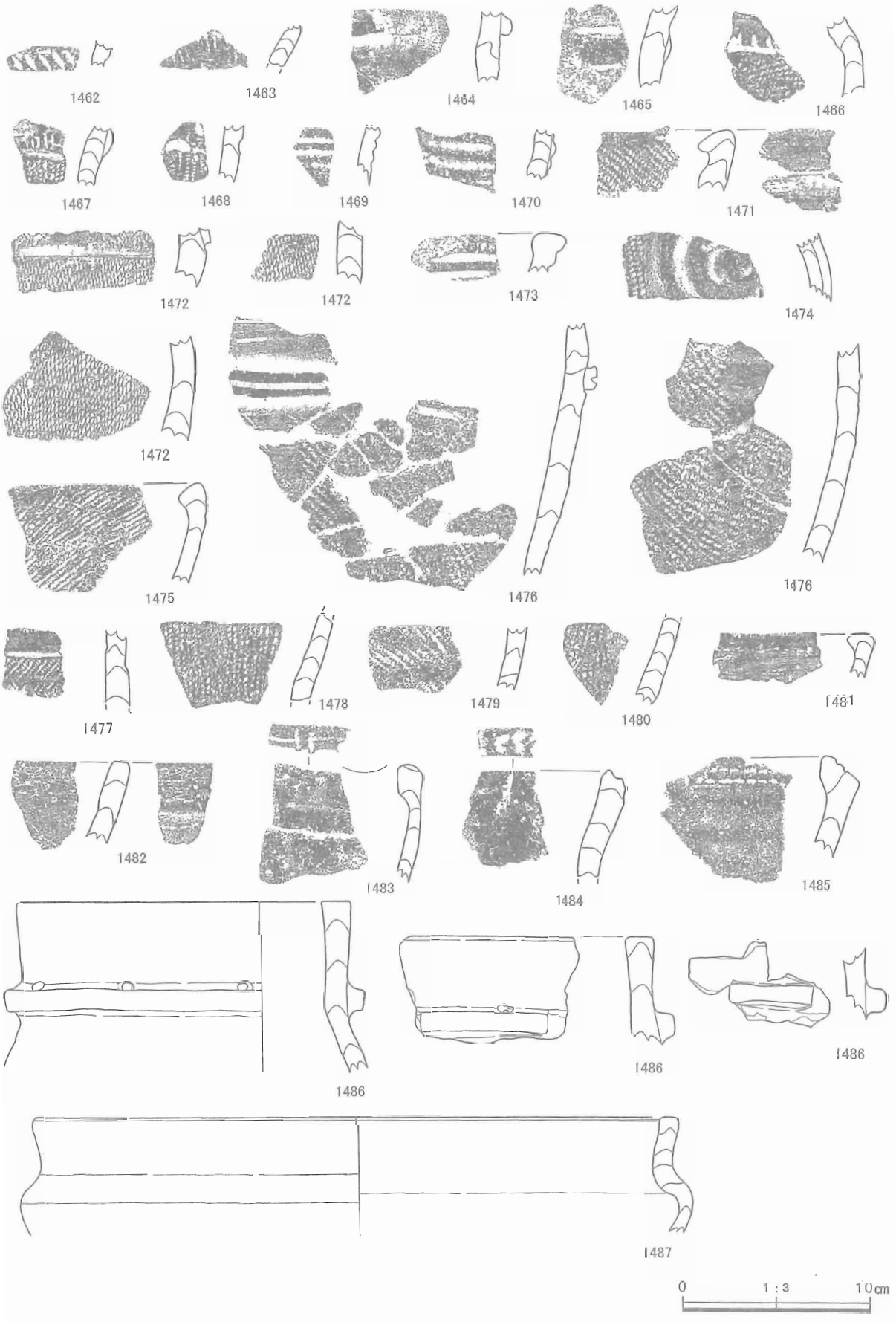


第191図　遺構外出土遺物11

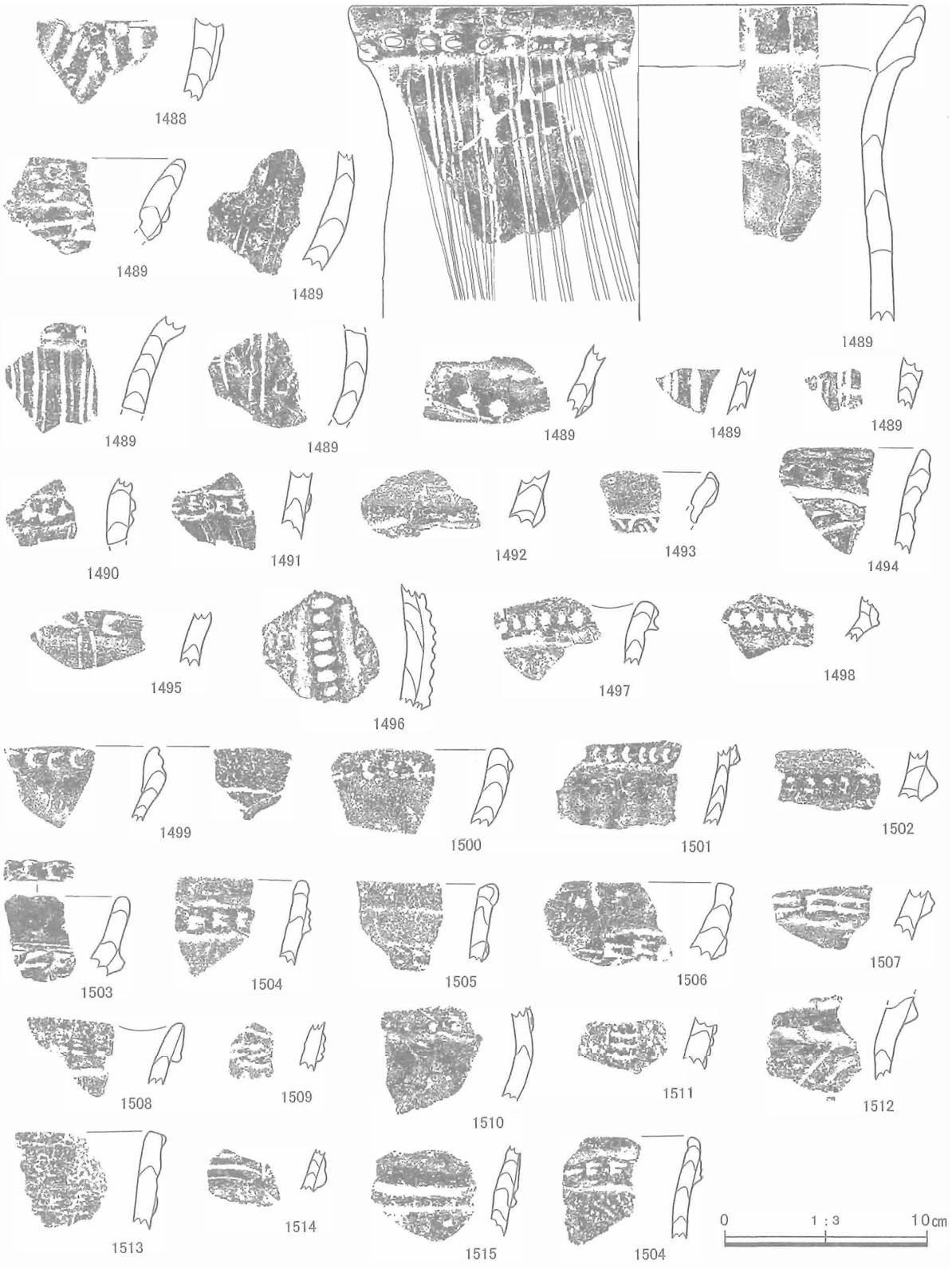
具で押さえた勝坂式土器である。(第191図1449) は横位に隆帯を付け、隆帯に沿って半截竹管状工具で刺突を施した勝坂式土器である。(第191図1450)は隆帯を貼り付けた勝坂式土器である。(第191図1451)は隆帯を付けて沈線で区画した勝坂式土器である。(第191図1452) は口縁部と胴部の境に半截竹管状工具で縦位に刻みを入れた勝坂式土器である。(第191図1453) は浅鉢形土器の口縁部に沿って隆帯を横位と円形に貼り付け、横位隆帯に半截竹管状工具で刻みを入れた勝坂式土器である。(第191図1454) は横位隆帯を付け、半截竹管状工具で縦位に刻みを入れた勝坂式土器である。(第191図1455) は横位隆帯に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付けた勝坂式土器である。(第191図1456) は隆帯を弧状に付け、区画内に半截竹管状工具で縦位の沈線を施した勝坂式土器である。(第191図1457) は縦位に半截竹管状工具で沈線を付けた勝坂式土器である。(第191図1458) は口縁に沿って斜位に半截竹管状工具で沈線を付けた勝坂式土器である。(第191図1459) は波状口縁を内反させ、口縁部に隆帯と半截竹管状工具の弧状沈線を付け、隆帯区画内に半截竹管状工具で縦位沈線を施した勝坂式土器である。(第191図1460) は口縁部に横位と弧状隆帯を付けた勝坂式土器である。(第191図1461) は口縁部に沿って横位隆帯を２本付けた勝坂式土器である。

(第192図1462) は半截竹管状工具で斜位の沈線を付けた勝坂式土器である。(第192図1463) は条の太さ約0.2cmのＲの撚糸文を付けた勝坂式土器である。(第192図1464)は横位に隆帯を貼り、沈線を付けた勝坂式土器である。(第192図1465) は横位に隆帯を貼り、沈線を付けた勝坂式土器である。(第192図1466)は沈線で区画し、沈線に沿って竹管状工具で刻みを入れ、区画内に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた勝坂式土器である。(第192図1467) は横位隆帯を付け条の太さ約0.2cmのＬの撚糸文を施して、半截竹管状工具で横位の沈線を付けた勝坂式土器である。(第192図1468)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で爪状に刺突を施した勝坂式土器である。(第192図1469) は半截竹管状工具で横位の沈線を付けた勝坂式土器である。(第192図1470) は隆帯を弧状に貼り付け、隆帯に沿って竹管状工具で連続刺突を施した勝坂式土器である。(第192図1471)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた勝坂式土器である。(第192図1472)は隆帯を横位に付け条の太さ約0.2cmのＬの撚糸文を施した勝坂式土器である。(第192図1473) は口縁部に棒状工具で圧痕し、半截竹管状工具で横位の隆線を付けた勝坂式土器である。(第192図1474)は隆帯を円形に貼り付け、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施した勝坂式土器である。(第192図1475) は口縁部から条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた勝坂式土器である。(第192図1476)は横位に隆帯を貼り付けて隆帯上に横位沈線を施し、条の太さ約0.4cm、長さ約1.6cmのＬＲの縄文を付けた勝坂式土器である。(第192図1477) は条の太さ約0.2cmと約0.3cmのＬＲ原体を撚った縄文を施した勝坂式土器である。(第192図1478)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた勝坂式土器である。(第192図1479) は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた勝坂式土器である。(第192図1480) は縄文を付けた勝坂式土器である。(第192図1481) は口縁部が無文の型式不明の土器である。(第192図1482) は口縁部を無文にして内面に段を付けた型式不明の土器である。(第192図1483) は口唇部に沈線で文様を付けた勝坂式土器である。(第192図1484) は口唇部に半截竹管状工具で爪形文を付けた勝坂式土器である。(第192図1485) は口唇部に竹管状工具で連続刺突を付けた勝坂式土器である。(第192図1486) は無文の有孔鍔付土器で鍔の上部から内面に孔を貫通させた勝坂式土器である。(第192図1487) は口縁部ら胴部をふくらめた勝坂式土器である。

(第193図1488) は隆帯を付け一部を削り取り、隆帯上に竹管状工具で円形刺突と沈線を施した中期中葉土器である。(第193図1489) は口縁部に沿って横位に幅約1.0cmの隆帯を付け、この隆帯上部に約0.5cmの半截竹管状工具で刺突を施し、隆帯直下から同一工具で縦位に沈線を付けている。内面には約3.5cm幅の段を施した中期前葉から中期中葉土器であり、口径は約20cmである。(第193図1490・1491) は口縁部と胴部の境に隆帯を横位に貼り付け、隆帯上部に半截竹管状工具で押し引きを付け、以下に縦位沈



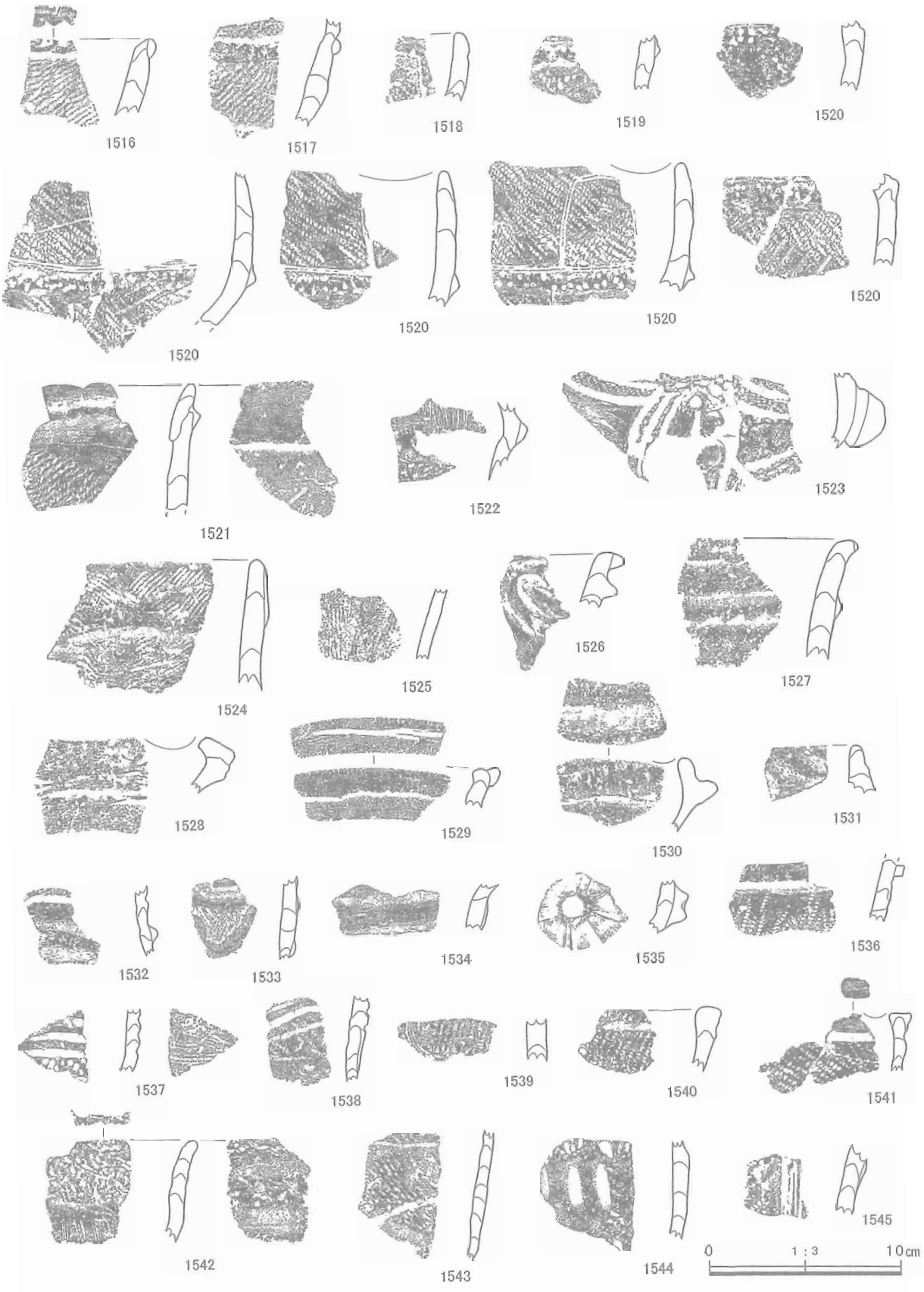
第192図　遺構外出土遺物12



第193図　遺構外出土遺物13

線を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1492）は口縁部と胴部の境に横位隆帯を貼り付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1493）は口縁部と胴部の境に隆帯を横位に貼り付け、隆帯上部に竹管状工具で刺突を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1494）は口縁から沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1495）は横位隆帯を付け隆帯上部に半截竹管状工具で押し引きを施し、以下に同一工具で縦位沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1496）は隆帯を縦位に垂下し、粘土紐の上部を竹管状工具で刺突した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1497・1498）は波状口縁に沿って隆帯を付け、隆帯上に半截竹管状工具で刺突を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1499）は口唇部直下から半截竹管状工具で爪形を付け、内面に段を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1500）は口唇部に沿って横位に隆帯を付け、隆帯上部に半截竹管状工具で爪形を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1501・1502・1510）は口縁部と胴部の境に横位隆帯を付け、半截竹管状工具で爪形を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1503）は口唇部に半截竹管状工具で爪形を施し、口縁横位に隆帯を貼り付け、半截竹管状工具で隆帯上に刺突を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1504）は口縁横位に隆帯を貼り付け、半截竹管状工具で隆帯上に刺突を施し、下に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1505）は口縁に沿って横位に隆帯を貼り付け、下にも横位隆帯を貼り半截竹管状工具で隆帯上に刺突を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1506・1507）は口唇部の下に指頭痕を付け、横位に隆帯を施し隆帯上に半截竹管状工具で連続爪形文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1508）は複合口縁にして口縁部に細い半截竹管状工具で押し引きを付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1509）は隆帯を横位に付け、半截竹管状工具で連続刺突を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1511）は隆帯を縦位に貼り付け、隆帯上に竹管状工具で連続刺突を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1512）は断面三角の高い横位隆帯を貼り付け、下に斜位と弧状の沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1513）は口唇部に沿って粘土紐を横位に貼り付け、下に低い横位隆帯を施し、隆帯上に竹管状工具で連続刺突を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1514）は半截竹管状工具で弧状沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第193図1515）は口縁に粘土帯を貼り付け、それに沿って半截竹管状工具で横位の沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。

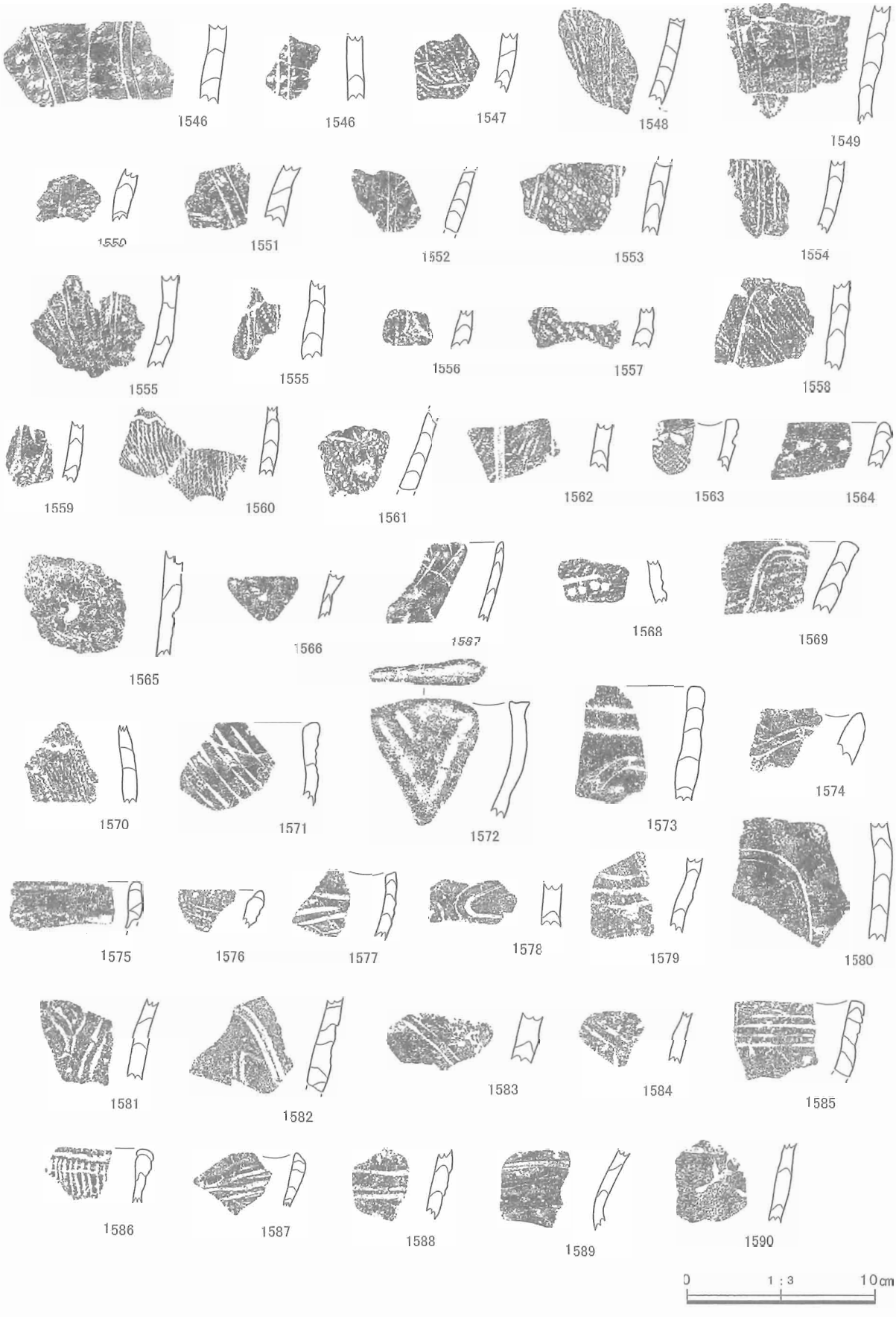
（第194図1516・1517）は口唇に沿って隆帯を貼り、隆帯上に半截竹管状工具で連続刺突を施す。下に条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第194図1518）は口縁部に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中期前葉から中期中葉土器である。（第194図1519）は横位に隆帯を貼り、上部に半截竹管状工具で連続爪形を付け、下に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した中期前葉から中期中葉土器である。（第194図1520）は口縁部を横位隆帯で区画し、隆帯上部に円形刺突を付け、区画内に条の太さ約0.3cm、長さ約2.1cmのＲＬの縄文を施し、半截竹管状工具で横位と逆Ｕ字に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第194図1521）は口縁部に横位隆帯を貼り付け、下に条の太さ約0.3cm、長さ約1.7cmのＬＲの縄文を施し、内面にも帯状の段を付けた中期前葉から中期中葉土器である。（第194図1522）は口縁部と胴部の境に粘土帯を接合して、横位隆帯の上に竹管状工具で刺突を施している。胴部には半截竹管状工具で縦位に沈線を付け、内面に段が付いた中期前葉から中期中葉土器である。（第194図1523）は胴部破片で縦位に楕円形の玉状突起を付けている。この突起には竹管状工具で上下に径約0.7cmの穴が貫通しており、玉状突起の上部中央に竹管状工具で１本の縦位沈線を施している。玉状突起の回りに条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、突起に沿って３重の楕円沈線を施す。玉状突起を中心に左右の弧状沈線が付き、中にＲＬの同一原体で縄文を施している。この土器は後期前葉の関西系土器である。（第194図1524）は口縁部に粘土帯を貼り付け、



第194図　遺構外出土遺物14

直下から条の太さ約0.2cm、長さ約1.5cmのＬＲ縄文を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1525) は条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1526) は口縁部に断面三角形の高い隆帯を弧状に貼り付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第194図1527)は口縁部に沿って断面三角形の隆帯を２本横位に貼り付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第194図1528) は土器の表面が風化しているが、口縁部を内湾させた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第194図1529) は口唇部に沿って横位隆帯を貼り、口唇に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1530) は口縁に沿って横位の高い断面三角の隆帯を貼り付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1531) は口縁部を無文にして指頭痕を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第194図1532) は竹管状工具で沈線を弧状に付け、下に横位隆帯が付いた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第194図1533) は隆帯を波状に貼り付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第１94図1534)は口縁部と胴部の間に隆帯を貼り付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第194図１535)は胴部に円形の突起を付け、突起の上部を窪めた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第１94図1536)は横位の高い隆帯を付け、下に条の太さ約0.2cm、長さ約1.7cmのＲＬの縄文を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1537)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1538) は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の押し引きで横位沈線風にした中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1539)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、竹管状工具で弧状沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1540)は口縁部から条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、竹管状工具で横位沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1541) は口唇部を平らの波状口縁にして、条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、竹管状工具で横位沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1542)は口縁部を低い隆帯で区画し条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、さらに半截竹管状工具で斜位と縦位沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1543) は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、横位に沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第194図1544) は縄文を付け縦位に沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第194図１545) はＲＬの縄文を付け、縦位に沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。

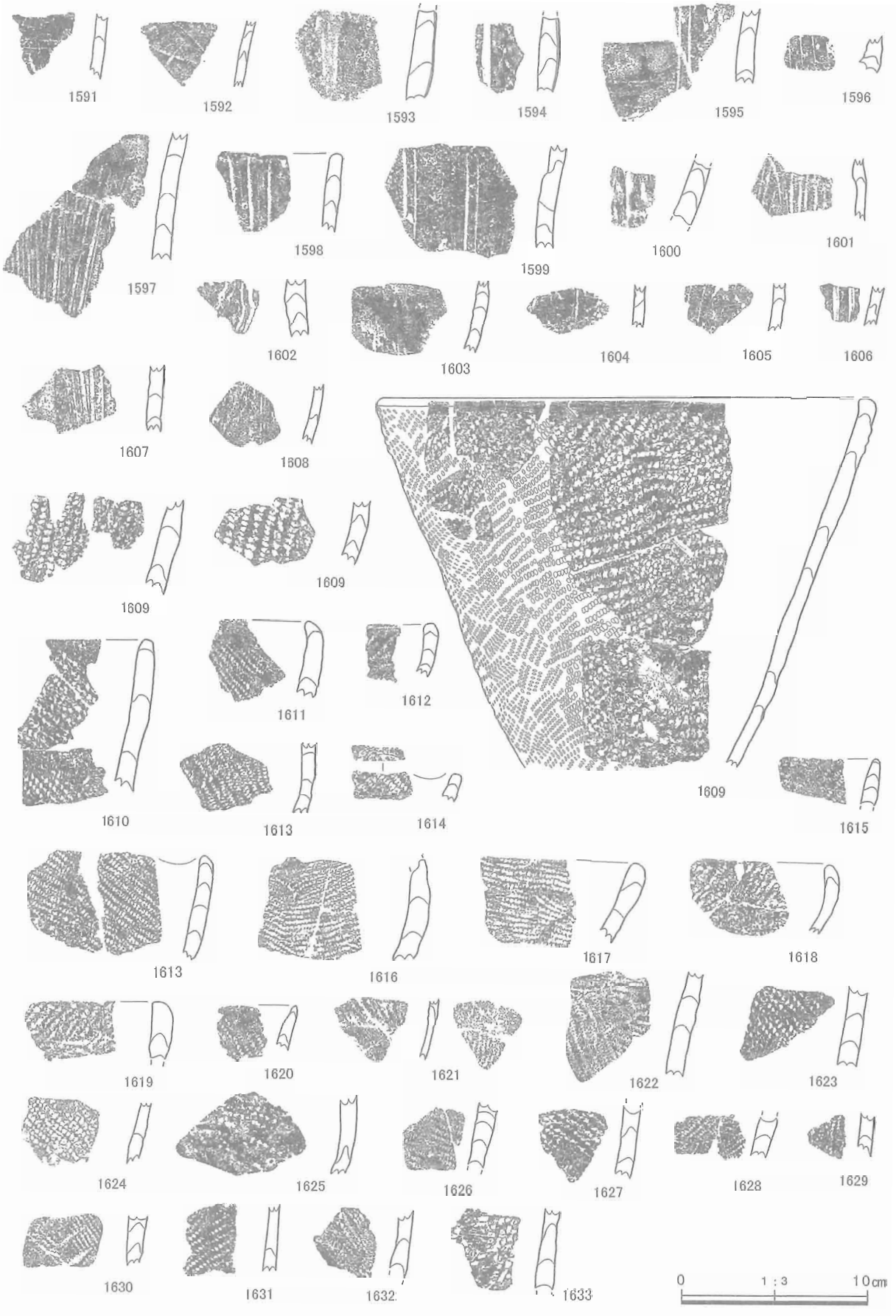
(第195図1546) は条の太さ約0.5cm、長さ約2.5cmで硬い繊維を撚り、条の太さを均等に撚っていないＬＲの縄文を付け、弧状に半截竹管状工具で沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1547)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、竹管状工具の沈線で区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1548) は縄文を付けて半截竹管状工具で沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1549)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けて半截竹管状工具で沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1550)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けて半截竹管状工具の沈線で区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1551)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けて半截竹管状工具の沈線で区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1552)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けて、半截竹管状工具の沈線で区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1553) は条の太さ約0.6cmと約0.4cmの原体を撚ったＲＬの縄文を付けて、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1554)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位の沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1555)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1556)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、沈線を縦位と弧状に付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1557)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、竹管状工具で縦位沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1558)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、竹管状工具の弧状沈



第195図　遺構外出土遺物15

線で区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1559)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、竹管状工具で縦位に区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1560)は条の太さ約0.1cmのＬの撚糸文を付け、竹管状工具で鋸歯状沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1561)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施し、半截竹管状工具で沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1562)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施し、竹管状工具の縦位沈線で区画した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1563)は口縁部に沈線を付け爪状か竹管状工具で刺突を施し、下に条の太さ0.2cmのＲＬの縄文を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1564)は口縁に沿って竹管状工具で刺突を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1565)は一部に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施し、木の実の圧痕が付いた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第195図1566)は一部に条の太さ約0.6cmのＬＲの縄文を薄く付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第195図1567)は口唇と口縁部からヘラ状工具で斜位に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1568)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、竹管状工具で横位沈線と円形刺突を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1569)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で波状沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1570)は条の太さ約0.1cmのＬの撚糸文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1571)は口縁部に半截竹管状工具で斜位沈線を入れた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1572)は口唇部を窪めて、一部に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、口縁に半截竹管状工具で連続刺突風にＶ状の沈線を入れた中期前葉から中期中葉土器と思われる。(第195図1573)は口縁部に沿って半截竹管状工具で横位と波状沈線を付け、下に半截竹管状工具で波状沈線を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1574)は波状口縁の下に半截竹管状工具で波状沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1575)は半截竹管状工具で横位の波状に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1576)は半截竹管状工具で弧状沈線と縦位沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1577)は半截竹管状工具で斜位の沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1578)は半截竹管状工具で弧状沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1579～1584)は半截竹管状工具で弧状沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第195図1585・1587～1590)は竹管状工具で横位に沈線を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第195図1586)は口縁部から半截竹管状工具で横位沈線を付け、半截竹管状工具の連続爪形文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。

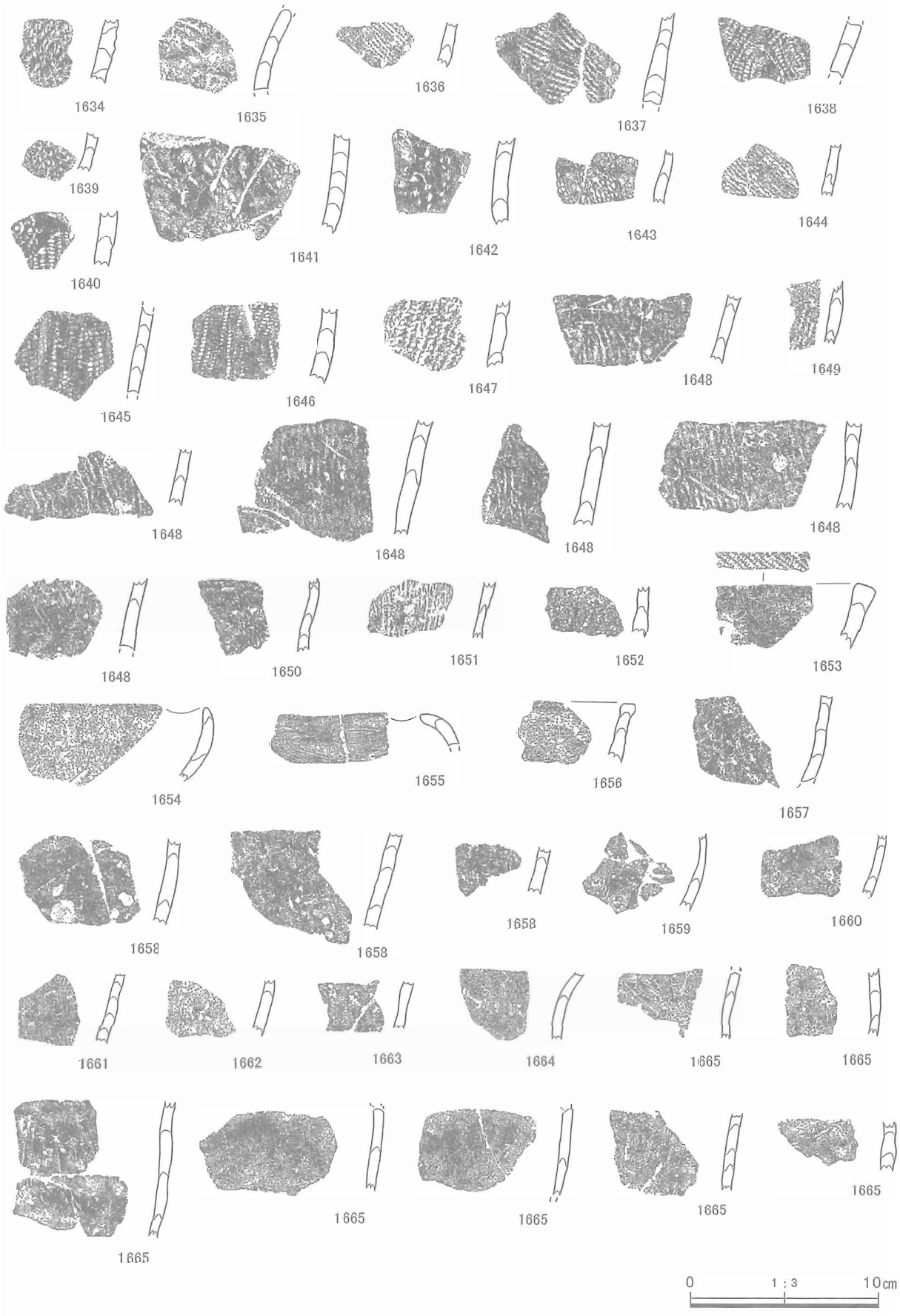
(第196図1591)は半截竹管状工具で横位沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1592)はヘラ状工具で沈線を交差させた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1593～1595)は竹管状工具で縦位沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1596)は半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1597・1607)は半截竹管状工具で縦位に条線風の沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1598)は口縁から半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1599)は半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1600)は半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1601)は半截竹管状工具で縦位と斜位沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1602)は半截竹管状工具で縦波状の沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1603～1605)は縦位や斜位に細い沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1606)は半截竹管状工具で太い縦位沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1608)は縦位に沈線を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1609)は条の太さ約0.5cm、長さ約2.8cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1610・1623)は条の太さ約0.3cmのＲＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1611)は口縁部から条



第196図　遺構外出土遺物16

の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第196図1612)は口縁部から条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1613)は波状口縁に条の太さ約0.3cm、長さ2.3cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1614)は波状口縁で口唇部に縄文を付け、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1615)は口唇部に刺突を付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1616)は条の太さ約0.2cmの条の横走するＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1617) は条の太さ約0.3cm、長さ約２cmのＲＬの縄文を付け、条が横走するように施文した中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1618)は口縁部から条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1619)は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1620)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1621)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、内面にもＲＬの縄文を施した中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1622)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉思われる土器である。(第196図1624)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1625)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉土器と思われる。(第196図1626)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1627)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1628・1629)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1630)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1631)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1632)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第196図1633)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。

(第197図1634) は胴部に縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1635)は条の太さ0.3cmのＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1636)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1637)は条の太さ約0.2cm、長さ約1.5cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1638・1639) は条の太さ約0.3cmでＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1640) は条の太さ0.4cmのＬＲの縄文と、条の太さ0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1641) は縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1642)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1643)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1644)は縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1645)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を縦位走行させた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1646) は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を縦位走行させた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1647) は条の太さ約0.5cmと約0.3cmを撚り合せたＲＬの繊維の粗い縄文を付けた中期前葉から中期中葉の土器である。(第197図1648)は条の太さ約0.3cmの縄文を付けた中期前葉から中期中葉土器である。(第197図1649)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1650) は薄手の無文で中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1651) は縦位に沈線の付いた中期前葉から中期中葉土器である。(第197図1652) は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1653) は口唇部に条の太さ約



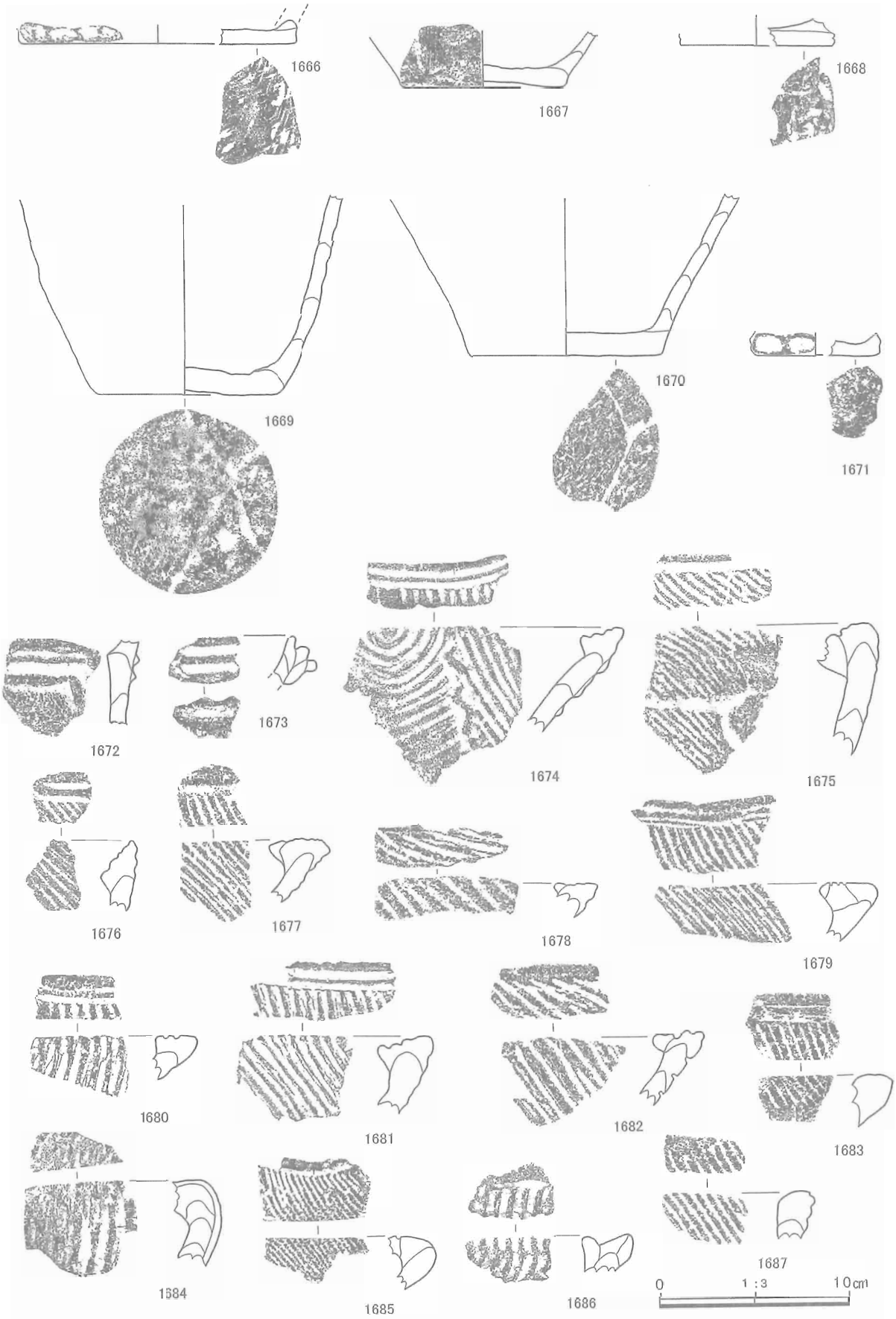
第197図　遺構外出土遺物17

0.4㎝のＲＬの縄文を付け、口縁部を無文にした中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1654・1655) は波状口縁が内反し、無文の中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1656) は口唇部を平らにした中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1657・1658・1660～1664) は薄手の胴部で無文にした中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1659) は棒状工具で刺突を斜位に付けた中期前葉から中期中葉と思われる土器である。(第197図1665) は薄手で一部に条線が付く中期前葉から中期中葉と思われる土器である。

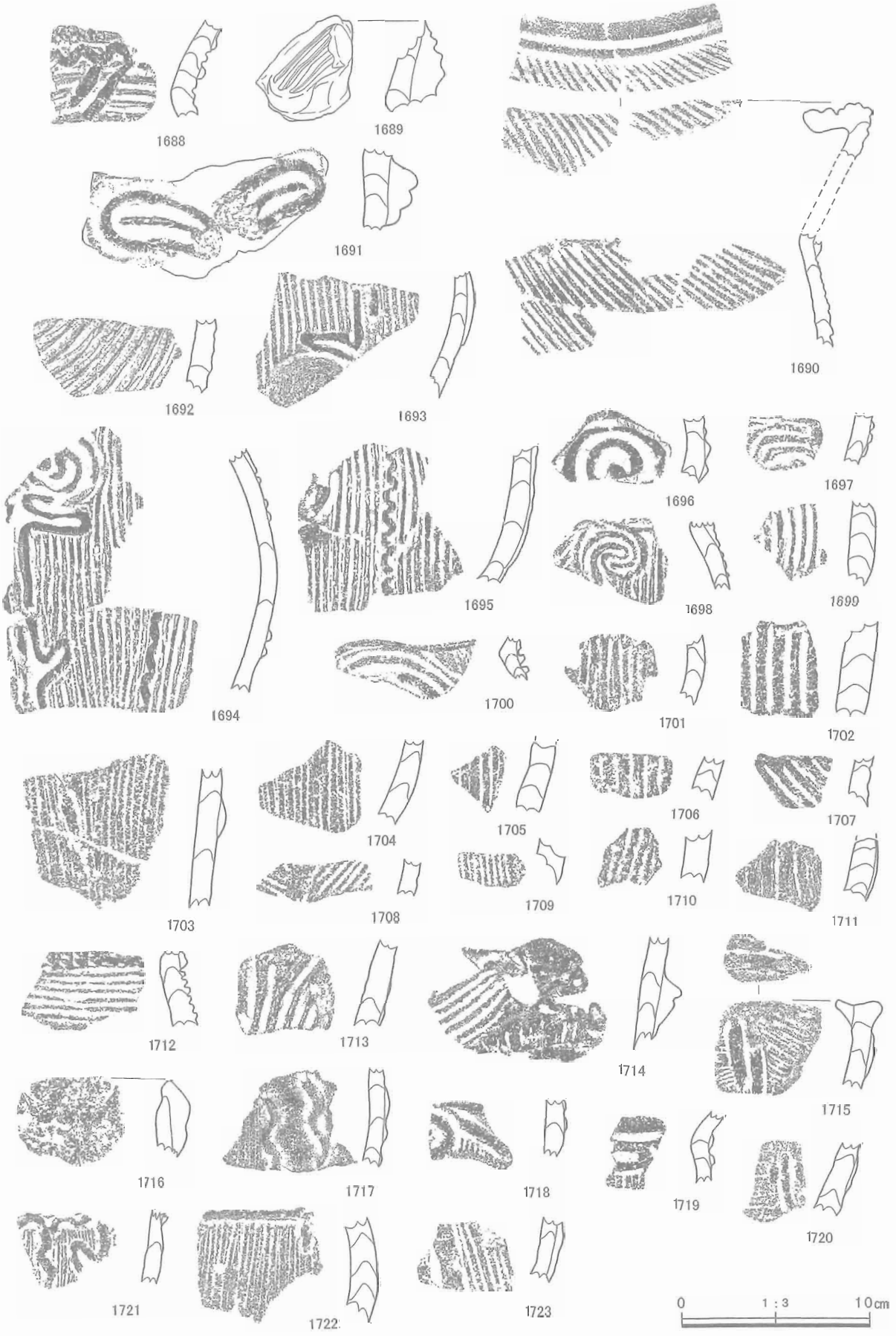
(第198図1666・1671) は底面に網代痕が付き、底部の境に指頭痕を施した中期前葉から中期中葉土器である。(第198図1667) は薄手で底面を無文にして、底部に縦位の沈線が付いた中期前葉から中期中葉土器である。(第198図1668) は薄手の底面に網代痕が付いた中期前葉から中期中葉土器である。(第198図1669) は薄手の底部の中期前葉から中期中葉土器である。(第198図1670) は底部を無文にして薄手の底面に網代痕が付いた中期前葉から中期中葉土器である。(第198図1672) は胴部に隆帯を貼り付けた曽利Ⅰ式土器である。(第198図1673) は口唇部と口縁部に密接蒲鉾状平行沈線を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第198図1674) は口唇部に密接蒲鉾状平行沈線を付け、口縁部に密接蒲鉾状平行沈線を弧状に施し、縦位に波状隆帯を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第198図1675～1687) は口唇部や口縁部に密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付けた曽利Ⅱ式土器である。

(第199図1688) は口縁部と胴部の境に密接蒲鉾状平行沈線を横位に付け、隆帯を波状と斜位に施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1689・1691) は口縁部と胴部の境にＸ状の把手を付け、密接蒲鉾状平行沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1690) は口唇部に密接蒲鉾状平行沈線を付け、口縁部にも密接蒲鉾状平行沈線を斜位に施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1692) は密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1693～1695・1703) は密接蒲鉾状平行沈線を縦位に付け、隆帯で渦巻きや縦波状を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1696) は隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1697) は隆帯を弧状に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1698) は密接蒲鉾状平行沈線を付け渦巻き隆帯を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1699) は密接蒲鉾状平行沈線を弧状に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1700) は密接蒲鉾状平行沈線で弧状を付け、縦位に半截竹管状工具で沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1701・1702) は密接蒲鉾状平行沈線を弧状や縦位に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1704～1710) は密接蒲鉾状平行沈線を斜位や縦位に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1711) は密接蒲鉾状平行沈線を縦位に施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1712) は口縁部と胴部の境に隆帯を貼り、隆帯上部に半截竹管状工具で連続刺突を施し、下に密接蒲鉾状平行沈線を横位に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1713) は密接蒲鉾状平行沈線を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1714) はＸ状把手に密接蒲鉾状平行沈線を付け、下部に半截竹管状工具の沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1715) は口唇部に沈線を付け、口縁部に隆帯を施し半截竹管状工具で斜位に沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1716) は刺突と沈線を斜位に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第199図1717) は半截竹管状工具で縦位沈線を付け、波状隆帯を縦位に施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1718) は渦巻き、横位、斜位に隆帯を付け区画した中に、半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1719) は隆帯を横位に付け半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1720) は隆帯を縦位に付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1721・1722) は隆帯を横位、波状、縦位、斜位に付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第199図1723) は隆帯を弧状に付けて半截竹管状工具で斜位沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。

(第200図1724) は隆帯をＵ字状に貼り付け、半截竹管状工具で点状に沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第200図1725～1729・1734) は隆帯を縦波状や縦位に付け、半截竹管状工具で縦位に沈線を施した



第198図　遺構外出土遺物18

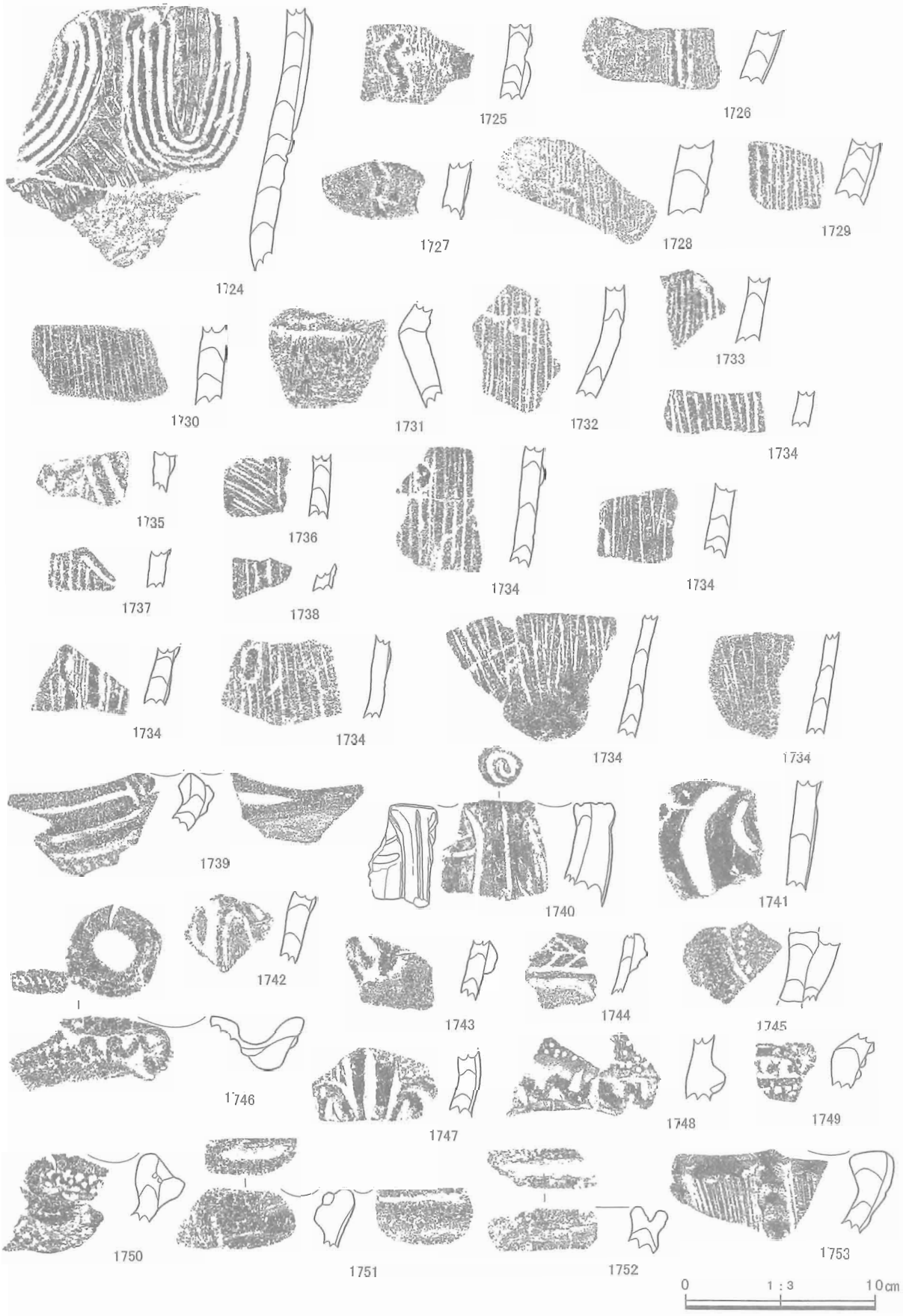


第199図　遺構外出土遺物19

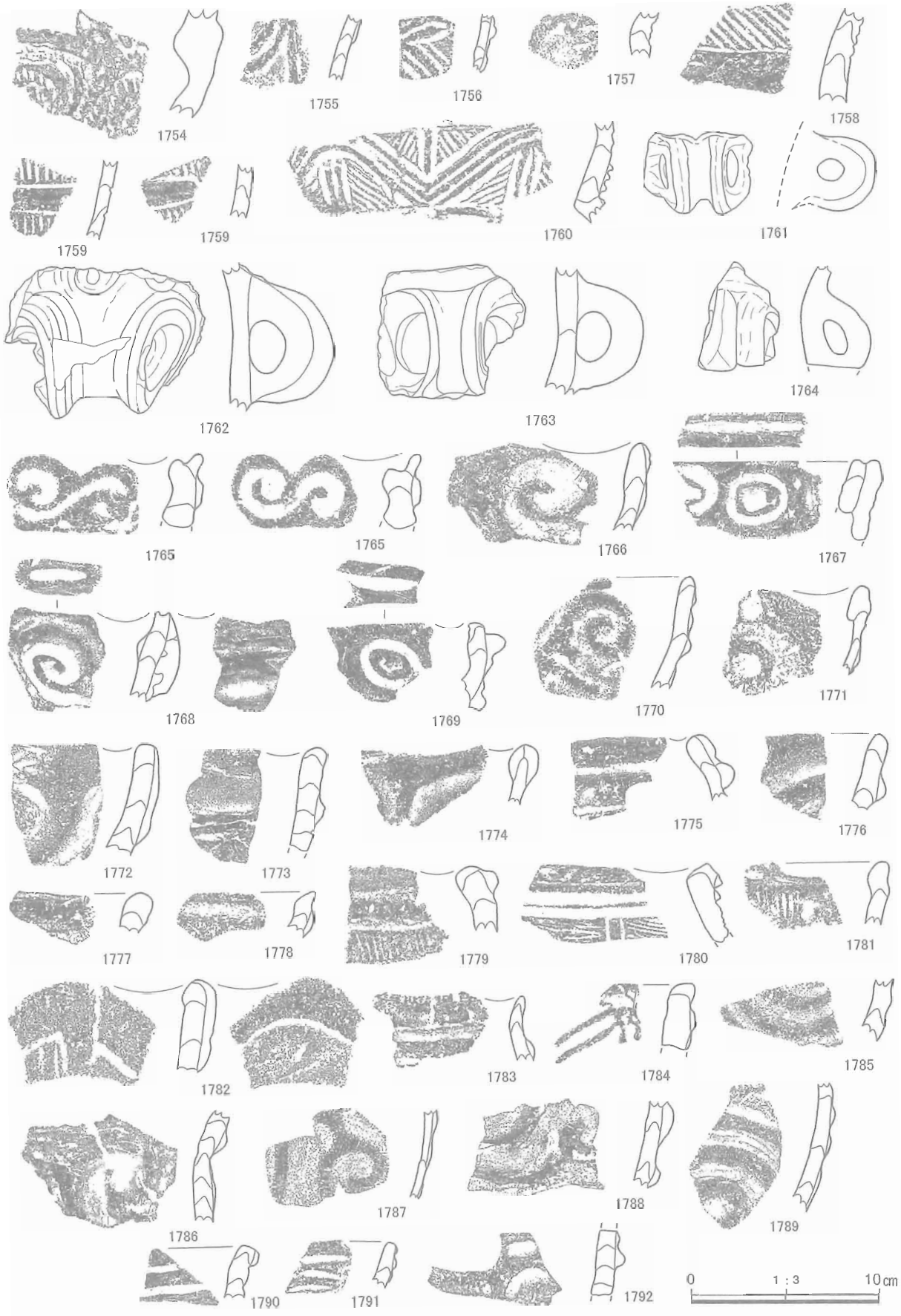
曽利Ⅱ式土器である。(第200図1730・1732・1733) は半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第200図1731) は隆帯を横位に貼り付け半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第200図1735・1737) は隆帯で区画した中に半截竹管状工具の沈線を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1736) は半截竹管状工具で縦位や斜位の沈線を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1738) は隆帯を縦位に付けて、沈線を縦位に施した曽利Ⅱ式土器である。(第200図1739) は波状口縁に沈線を付け、口縁部に沿って沈線で区画した中に、密接蒲鉾状平行沈線を縦位に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1740) は口縁部の把手上部に渦巻き沈線を付け、縦位沈線と弧状の沈線を施した曽利Ⅱ式土器である。(第200図1741) は指頭などによる幅広の沈線を弧状に入れた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1742) は隆帯を弧状に貼り付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1743) は隆帯を縦位と横位に貼り付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1744) は隆帯を横位の三つ編み状に貼り付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1745) は隆帯で楕円形に区画し、区画に沿って竹管状工具で刺突を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1746) は口唇部の突起に円形の凹みを付け、半截竹管状工具で刺突を施し、口縁部に隆帯で横波状と刺突を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1747) は隆帯を縦位とU状に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1748) は隆帯を横波状に付けて、竹管状工具で円形刺突を施した曽利Ⅱ式土器である。(第200図1749) は蒲鉾状平行沈線を横位に付けて、半截竹管状工具で連続刺突を施した曽利Ⅱ式土器である。(第200図1750) は口縁部の渦巻きに沿って、竹管状工具で刺突を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1751) は波状口縁の口唇部に沿って沈線を付け、縦位に隆帯を施した曽利Ⅱ式土器である。(第200図1752) は口唇部に沿って沈線を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第200図1753) は口縁部から半截竹管状工具で縦位沈線を付け、縦位隆帯を施して竹管状工具で連続刺突を付けた曽利Ⅱ式土器である。

(第201図1754) は口唇部の把手が破損しており、口縁部から隆帯で区画した中にヘラ状工具で刺突を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第201図1755・1756) は隆帯で縦位や弧状に区画した曽利Ⅱ式土器である。(第201図1757) は半截竹管状工具の沈線を付け、隆帯を波状に施した曽利Ⅱ式土器である。(第201図1758) は密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付けた曽利Ⅱ式土器である。(第201図1759) は横位区画した中に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第201図1760) は縦位と波状に密接蒲鉾状平行沈線で区画し、区画内に半截竹管状工具で斜位沈線を付けた曽利Ⅱ式土器である。(第201図1761～1764) は双環状把手を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1765) は口縁部に隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1766～1772・1774・1776・1786～1789・1792) は口縁部に隆帯で区画したり、渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1773) は口縁部に隆帯を横位に付け沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。(第201図1775・1777・1778) は口縁部に隆帯を横位に付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1779) は口縁部に沿って隆帯で区画した中に、半截竹管状工具で沈線を斜位に付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1780) は波状口縁に沿って隆帯で区画した中に、半截竹管状工具で縦位に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1781) は口縁部に沿って沈線で区画した中に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1782) は波状口縁の波頂部から隆帯を垂下して区画し、その中に半截竹管状工具で縦位沈線を施し、内面にも隆帯を付けた曽利Ⅲ式併行土器である。(第201図1783) は波状口縁のに沿って隆帯を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1784) は口縁部から隆帯を斜位と縦位に付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1785) は隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。(第201図1790・1791) は口縁に沿って隆帯と沈線を横位に付けた曽利Ⅲ式土器である。

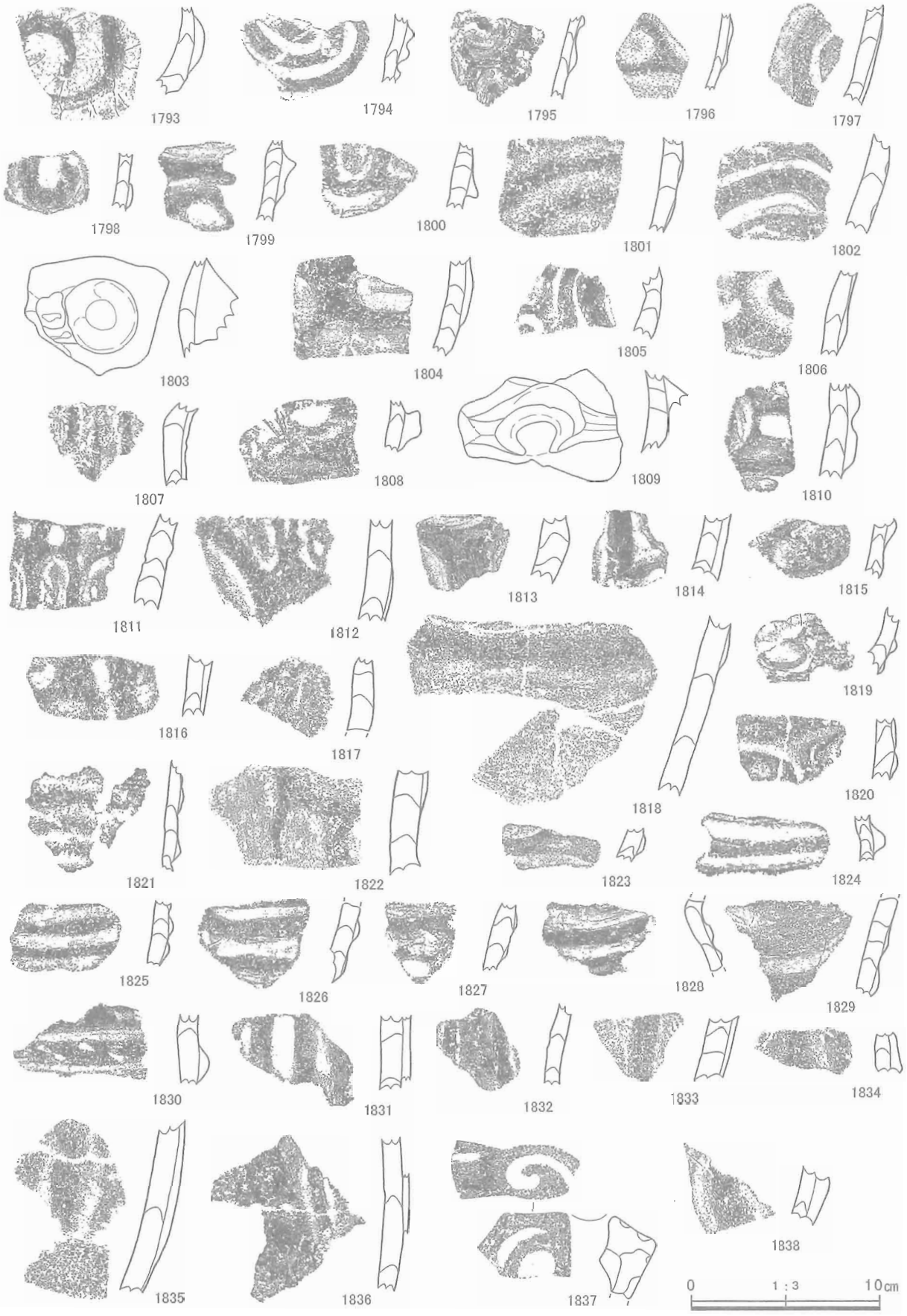
(第202図1793～1795・1798～1800・1806・1808～1810・1814～1816・1818・1823～1828・1830・1831・1833～1835・1838) は口縁部に高い隆帯で渦巻きや縦位、楕円形に貼り付けた曽利Ⅲ式土器である。(第202図1796・1797・1801・1802・1804・1805・1819～1822・1829・1832) は比較的低い隆帯を渦巻き状に貼り付けた曽利Ⅲ式土器である。(第202図1803) は隆帯で把手が付いた曽利Ⅲ式土器である。



第200図　遺構外出土遺物20



第201図　遺構外出土遺物21



第202図　遺構外出土遺物22

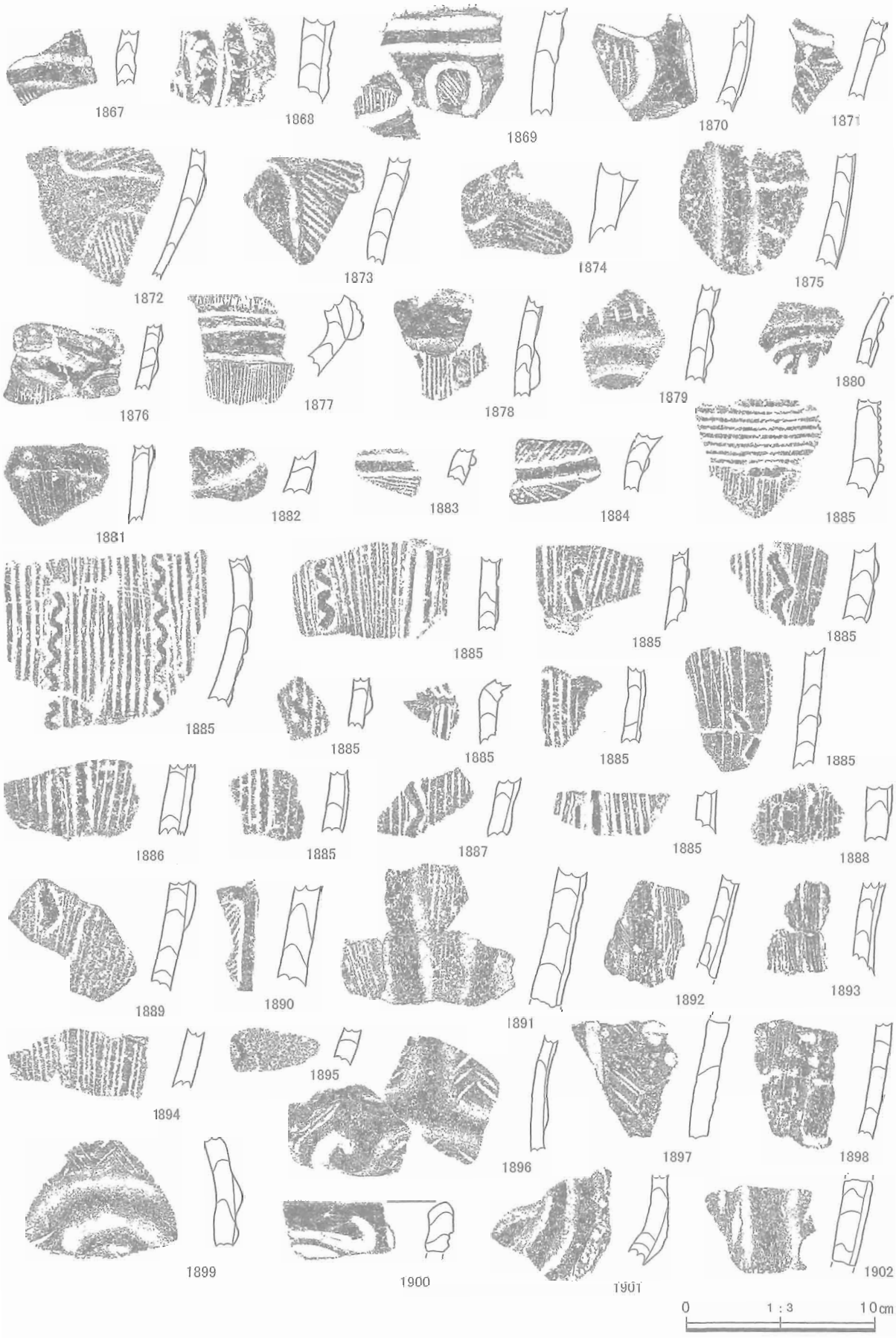
（第202図1807）は隆帯を弧状と縦位に貼り付けた曽利Ⅲ式土器である。（第202図1811～1813）は低い隆帯を弧状や縦位、楕円形に貼り付けた曽利Ⅲ式土器である。（第202図1817）は半截竹管状工具で縦位に沈線を施し、隆帯を縦位波状に貼り付けた曽利Ⅲ式土器である。（第202図1836）は細い隆帯を斜位に貼り付けた曽利Ⅲ式土器である。（第202図1837）は口唇部に半截竹管状工具で渦巻き沈線を付け、口縁部から円形の凹みを施した曽利Ⅲ式土器である。

（第203図1839・1840）は波状口縁を隆帯で区画し、区画内に半截竹管状工具で縦沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第203図1841・1853）は高い隆帯で円形や斜位、渦巻きに区画し、下に縦位や斜位に半截竹管状工具で沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第203図1842）は口縁から横位隆帯で区画した中に、半截竹管状工具で沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第203図1843）は隆帯で渦巻きを付け、櫛歯状工具で縦位に沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。（第203図1844～1849）は低い隆帯で渦巻きや楕円区画し、区画内に半截竹管状工具で縦位や横位の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第203図1850）は高い隆帯で渦巻きや楕円形を付け、半截竹管状工具で沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。（第203図1851）は隆帯の下に沈線で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。（第203図1852）は隆帯で渦巻きを付けた曽利Ⅲ式土器である。（第203図1854・1856～1862・1864～1866）は低い隆帯で渦巻きを付け区画した中に、半截竹管状工具で縦位に沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。（第203図1855）は渦巻き沈線を付け、楕円形に沈線区画した中に半截竹管状工具で縦位に沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。（第203図1863）は横位の隆帯で区画した中に半截竹管状工具で横位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。

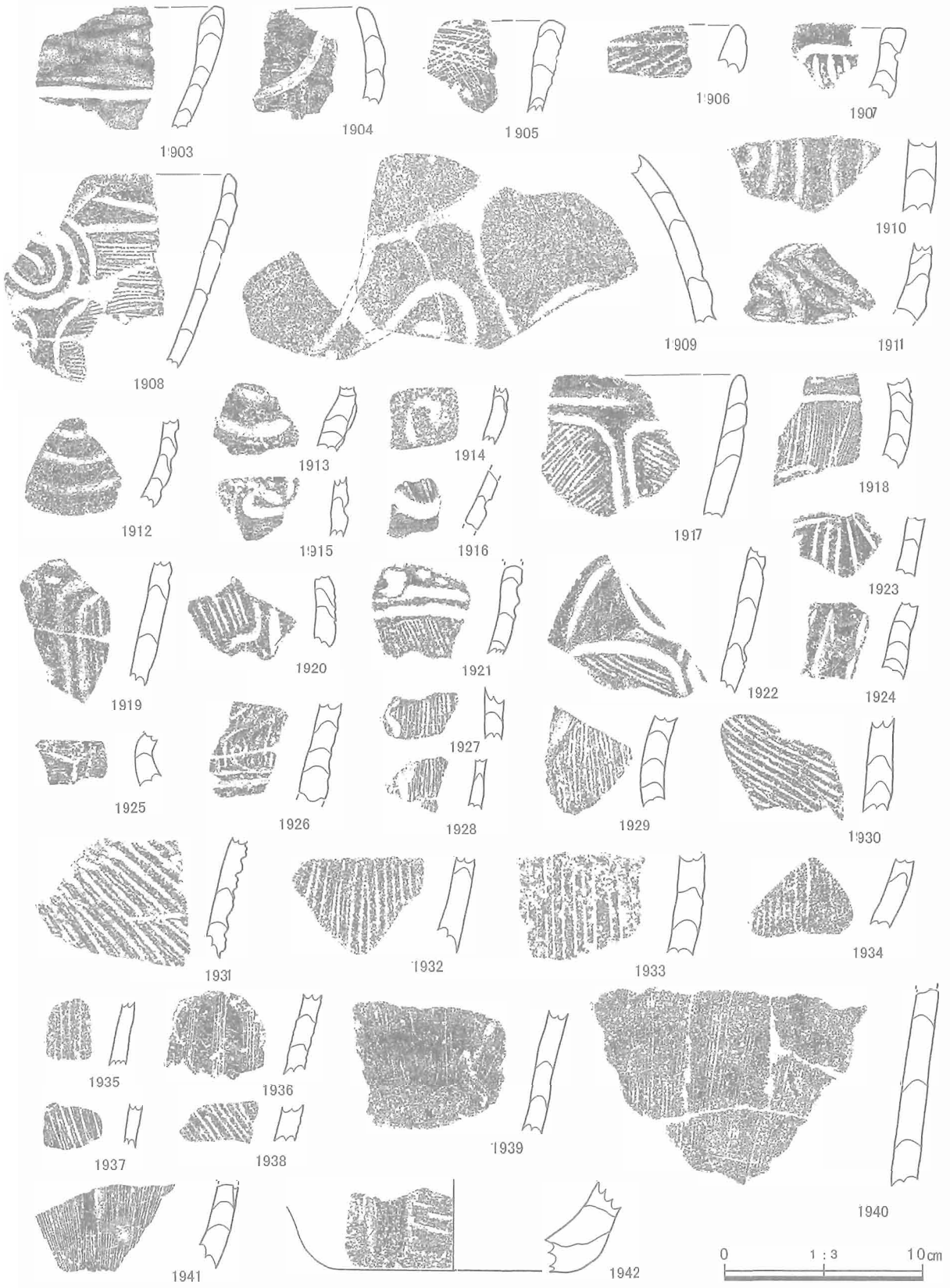
（第204図1867）は低い隆帯で区画した中に半截竹管状工具で斜位に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1868）は隆帯を弧状に貼り付け、隆帯上部に刺突をした曽利Ⅲ式土器である。（第204図1869）は横位の沈線と半截竹管状工具の沈線で区画した中に、半截竹管状工具で斜位や縦位に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1870・1872・1873）は隆帯で区画した中に半截竹管状工具の縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1871）は隆帯を渦巻き状に貼り、沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1874）は双環状把手が欠損しており、半截竹管状工具の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1875）は隆帯区画し中に半截竹管状工具の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1876～1878）は隆帯区画した中に半截竹管状工具の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1879）は隆帯区画した中に半截竹管状工具で刺突を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1880）は隆帯と沈線で区画した中に半截竹管状工具の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1881・1882）は隆帯で区画した中に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1883・1884）は隆帯を横位に付け、横位や斜位の沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。（第204図1885）は胴部に密接蒲鉾状平行沈線と波状隆帯を横位に付け、以下に密接蒲鉾状平行沈線を縦位に施し、縦位波状隆帯を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1886）は半截竹管状工具で縦位に沈線を施し、隆帯上部に竹管状工具で連続爪形文を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1887～1889・1895）は半截竹管状工具の縦位沈線を付け、縦波状の隆帯を施した曽利Ⅲ式土器である。（第204図1890）は縦位隆帯で区画した中に半截竹管状工具の斜位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1891～1893・1898）は隆帯で縦位区画した中に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1894）は半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1896・1897・1899・1902）は渦巻きや縦位隆帯などで区画した中に、ヘラ状工具や半截竹管状工具でハ状沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1900）は口縁部に半截竹管状工具で横位の弧状沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第204図1901）は渦巻隆帯を施し、半截竹管状工具で刺突を付けた曽利Ⅲ式土器である。

（第205図1903・1904）は口縁部から半截竹管状工具で横位や弧状に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第205図1905・1906）は口縁部から半截竹管状工具で斜位や弧状に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。

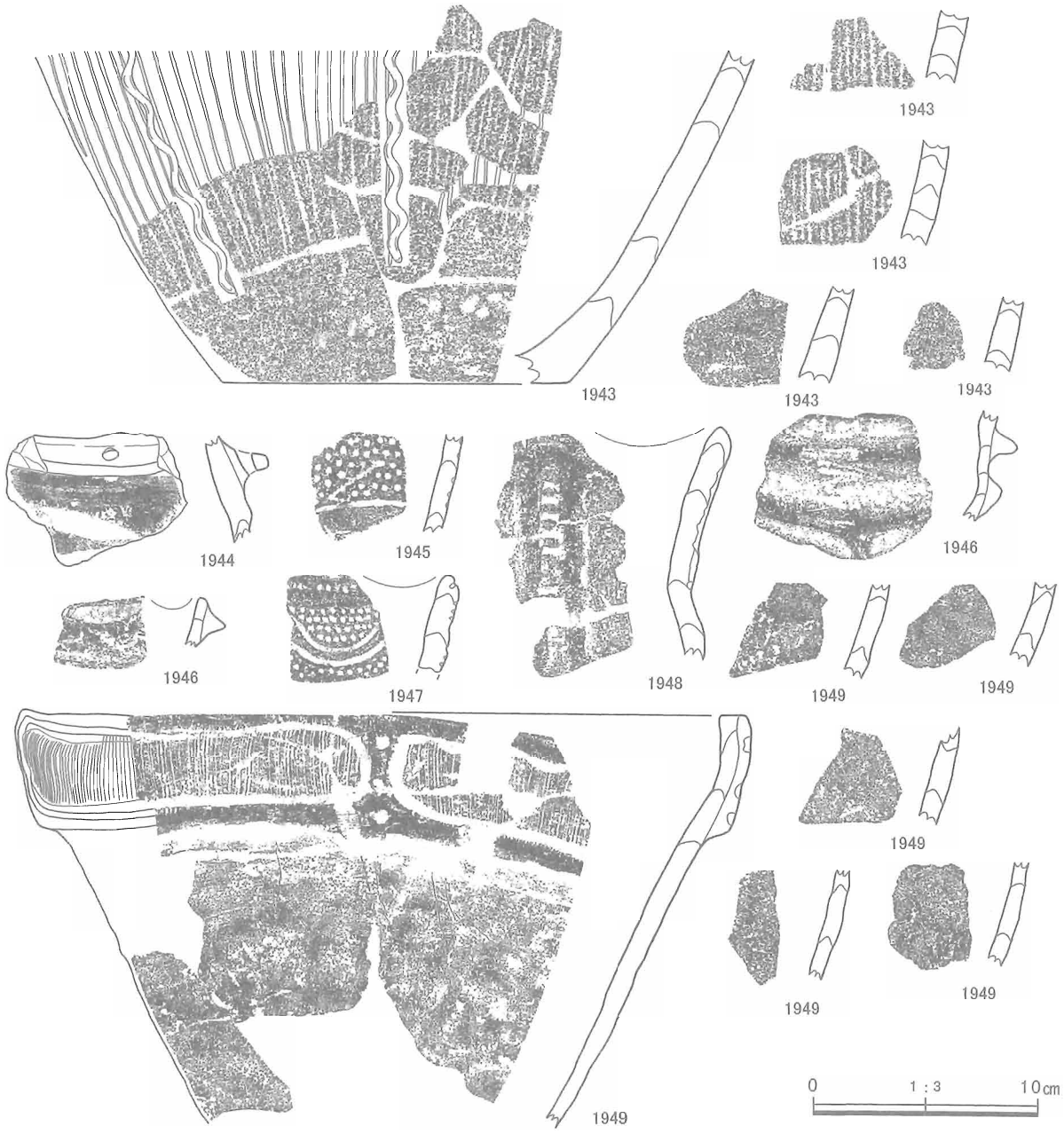
第203図　遺構外出土遺物23



第204図　遺構外出土遺物24

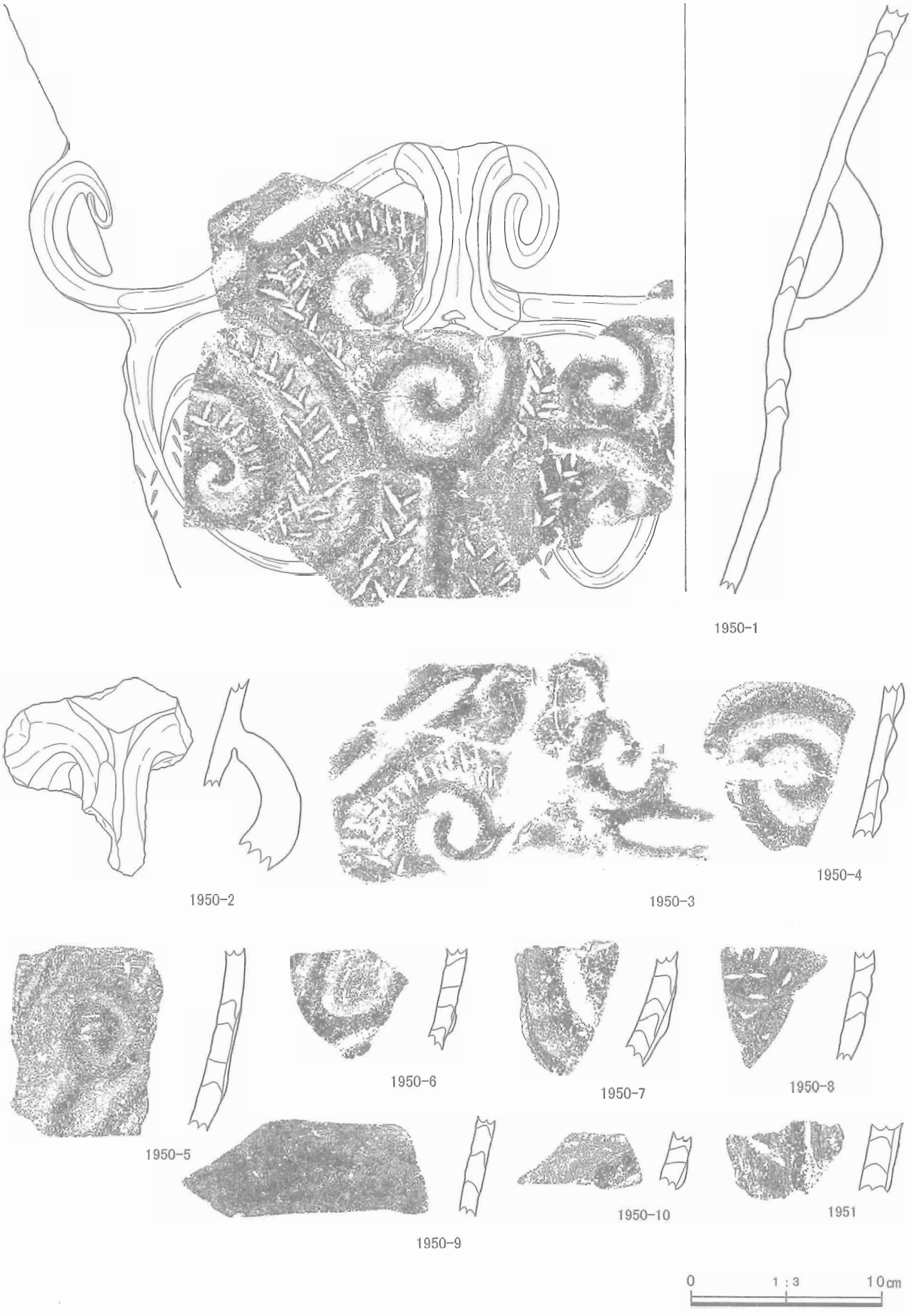


第205図　遺構外出土遺物25



第206図　遺構外出土遺物26

（第205図1907）は口縁部から半截竹管状工具で区画し、区画内に同一工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第205図1908・1909）は口縁部から半截竹管状工具で渦巻き、横位、弧状沈線を付け区画し、中に半截竹管状工具で横位や斜位に沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。（第205図1910～1915）は渦巻きや弧状沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第205図1916～1922）は半截竹管状工具の太めの沈線で区画した中に、半截竹管状工具で細い縦位や斜位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第205図1923～1925）は半截竹管状工具で沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第205図1926）は半截竹管状工具で横位、弧状、縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第205図1927～1929）は半截竹管状工具で縦位沈線を付け、太い波状沈線を施した曽利Ⅲ式土器である。（第205図1930・1937・1938）は半截竹管状工具で斜位に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。（第205図1931）は密接蒲鉾状平行沈線を斜位に付けた曽利Ⅲ式土器である。（第205図1932～1935・1939・1940）は縦位に半截竹管状工具の沈線を付けた曽利Ⅲ式土器で



第207図　遺構外出土遺物27

ある。(第205図1936) は半截竹管状工具で縦位にまばらな沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第205図1941) は低い隆帯を垂下し、半截竹管状工具の縦位沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第205図1942) は底部で隆帯を垂下し、半截竹管状工具で横位に沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。

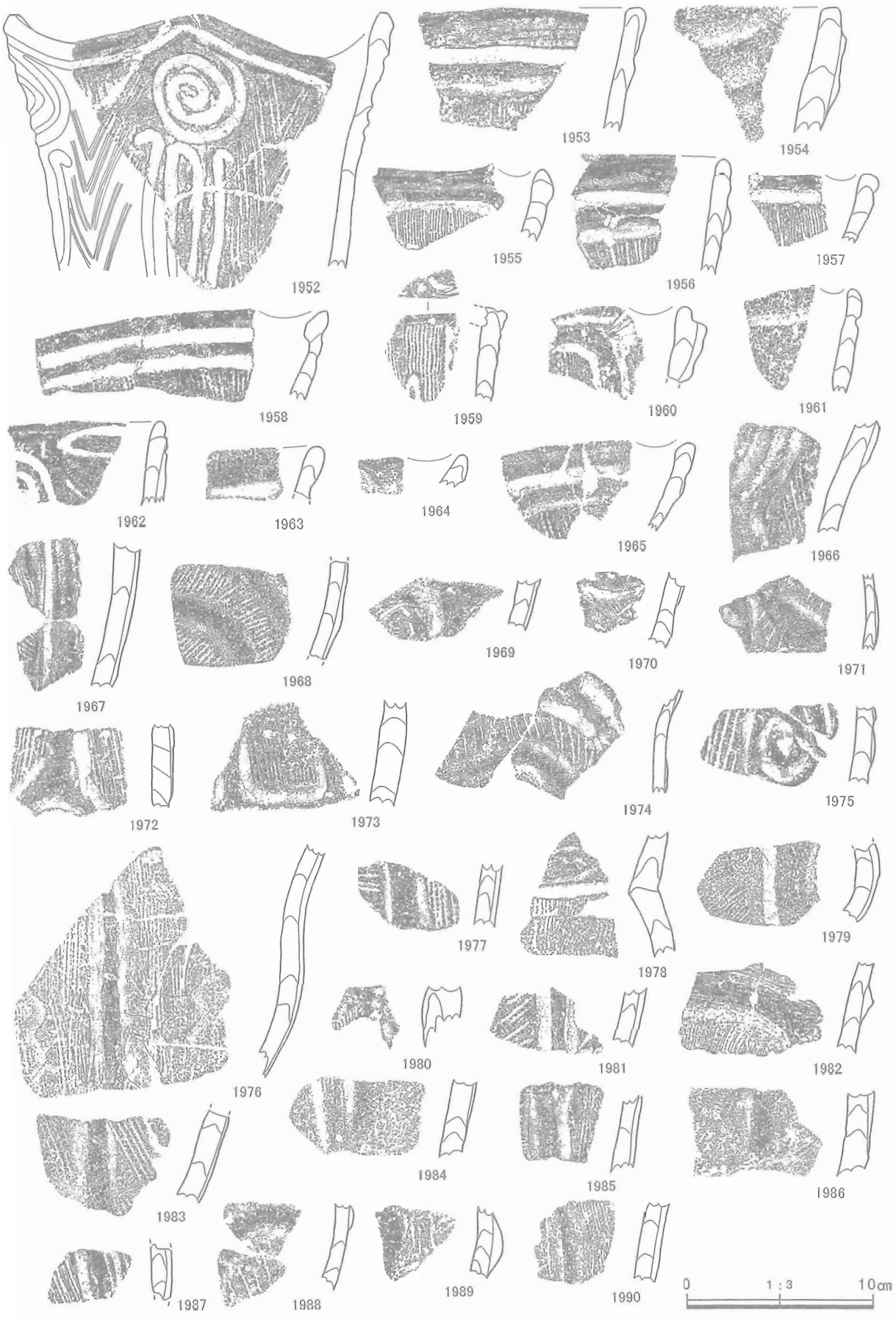
(第206図1943) は胴部下半から底部に半截竹管状工具の縦位沈線を付け、波状隆帯を垂下した曽利Ⅲ式土器である。(第206図1944)は有孔鍔付土器で、鍔の部分に0.5㎝の穴をあけており文様は弧状沈線を付けた曽利Ⅲ式土器である。(第206図1945・1947) は口縁部に沿って沈線で弧状区画し、棒状工具で刺突を付けた加曽利Ｅ３式併行在地系土器である。(第206図1946) は口縁に沿って高い隆帯を付けた加曽利Ｅ３式併行在地系土器である。(第206図1948) は波状口縁から隆帯を２本縦位に垂下して、区画内に竹管状工具で連続刺突を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅲ式併行在地系土器である。(第206図1949) は口縁部に沿って隅丸方形に隆帯区画し、隆帯上部に円形刺突を付け、区画内に半截竹管状工具で細い縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式併行土器と思われる。

(第207図1950-1～10) は口縁部を無文にして、胴部と口縁部の境にＸ状の把手が４個付く、隆帯で渦巻きを作り、その区画した中に逆ハ状の沈線を付けた曽利Ⅲ式から曽利Ⅳ式土器である。(第207図1950-3) はＸ状の把手が破損した下に、Ｘ状のヘラ描き沈線が現れている。土器作りをする際に予め割り付けし把手を付ける位置にＸ状のヘラ描きの印を施し、把手の位置を中心に隆帯で渦巻きを作った制作過程がわかる土器である。(第207図1951) は隆帯を縦位に付けて区画し、区画内にヘラ状工具でハの字状沈線を付けた曽利Ⅲ式から曽利Ⅳ式土器である。

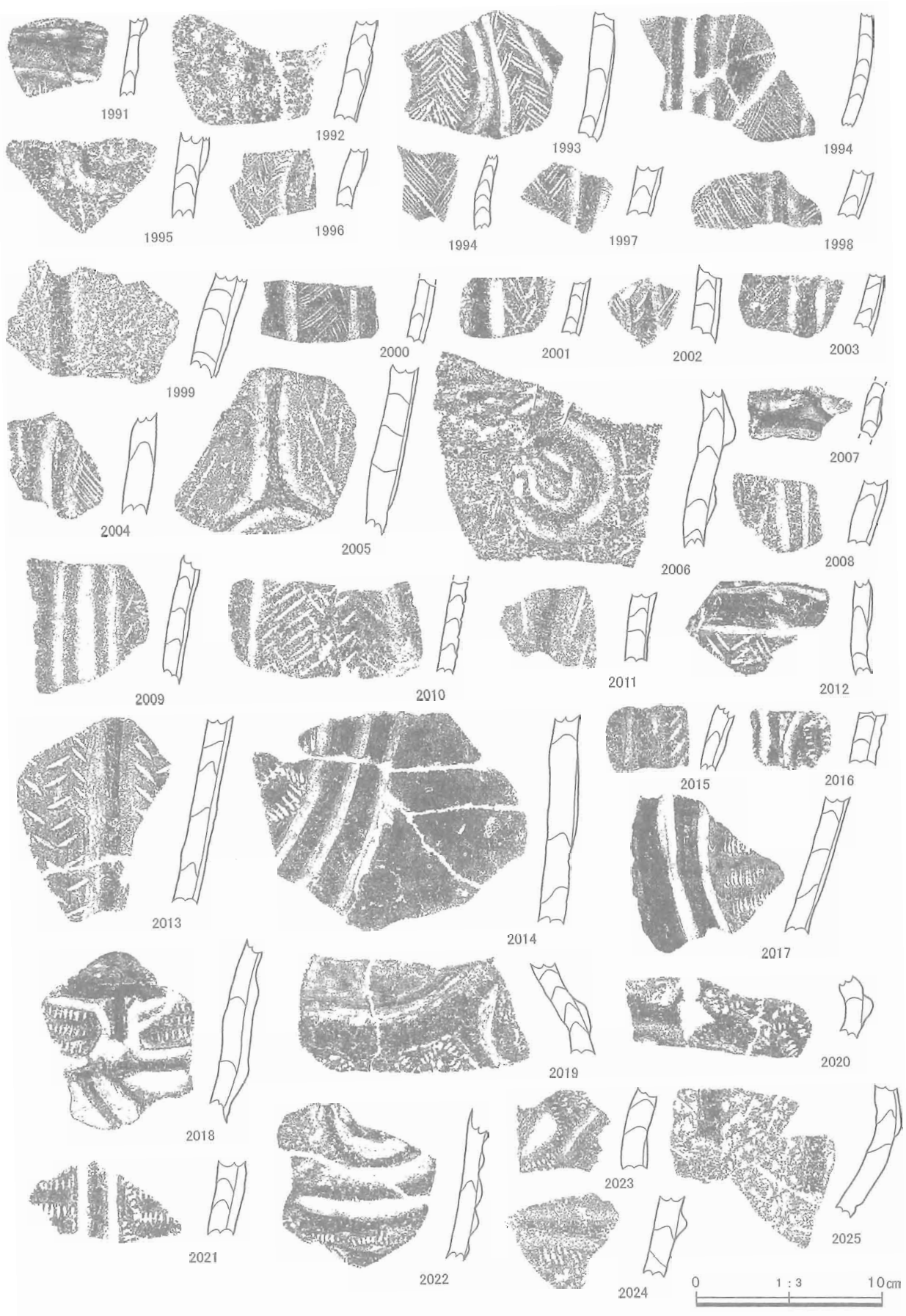
(第208図1952) は波状口縁に沿って半截竹管状工具で太めの沈線を付け、波の山の下に渦巻き沈線を施し、下に楕円やワラビ状沈線を付けて区画し、区画内に半截竹管状工具でＶ状の沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第208図1953・1955・1961) は口縁に沿って横位の沈線を付け、下に半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第208図1954) は口縁に弧状の隆帯を２本付けた曽利Ⅳ式土器である。(第208図1956) は口縁部に横位隆帯で区画し、区画内に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第208図1957・1958・1965) は口縁部を沈線で区画し、区画内に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第208図1959) は口唇部に沈線を付け、口縁部を太い沈線で区画し、中に半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第208図1960) は口唇部に沈線を付け、隆帯で区画した中に半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第208図1962) は口縁部に半截竹管状工具で弧状と楕円沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第208図1963・1964) は口縁部に横位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第208図1966～1968・1970～1974・1976・1979・1981～1990) は隆帯区画内に半截竹管状工具で沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第208図1969) は隆帯を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第208図1975) は隆帯渦巻きを付け、区画内に半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第208図1977) は隆帯を垂下し、半截竹管状工具で縦位と横位の沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第208図1978) は口縁と胴部の境に沈線を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第208図1980) は角状突起を施した北屋敷式土器である。

(第209図1991～2013・2015) は弧状、渦巻き、縦位、横位に隆帯で区画した中に、半截竹管状工具でＶ状やハ状沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第209図2014・2016～2025) は弧状、渦巻き、縦位隆帯で区画した中に半截竹管状工具や櫛歯状工具の刺突を付けた曽利Ⅳ式土器である。

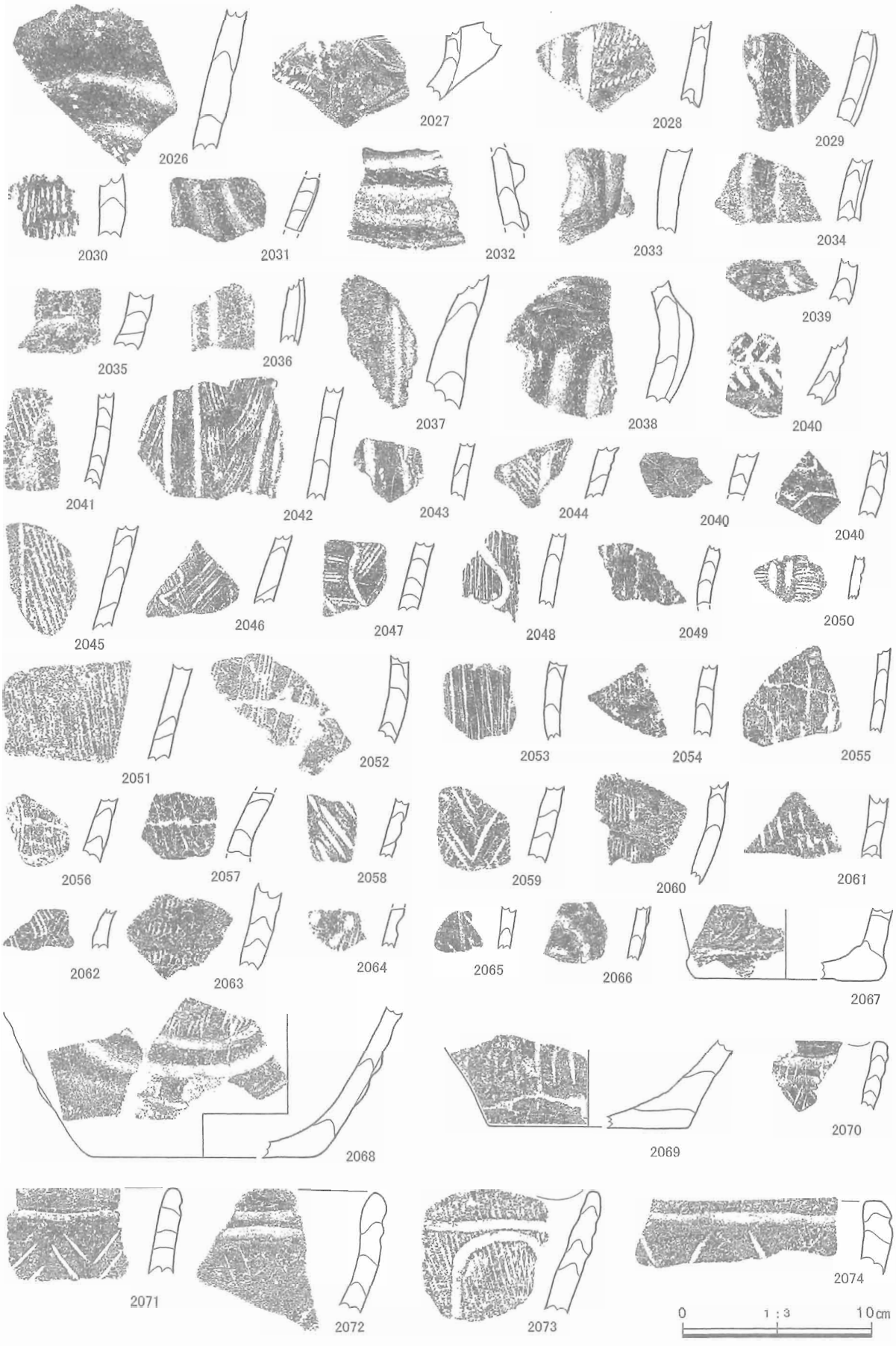
(第210図2026～2030・2038) は弧状や縦位、横位隆帯で区画した中に、半截竹管状工具や櫛歯状工具工具の刺突を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第210図2031～2035・2037・2039・2066) は弧状や縦位隆帯の中に弧状沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第210図2040) は半截竹管状工具で矢羽根状に沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第210図2036・2041～2044・2045～2050・2064) は沈線や低い隆帯で区画した中に半截竹管状工具の矢羽根状や縦波状沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第210図2051～2059) は



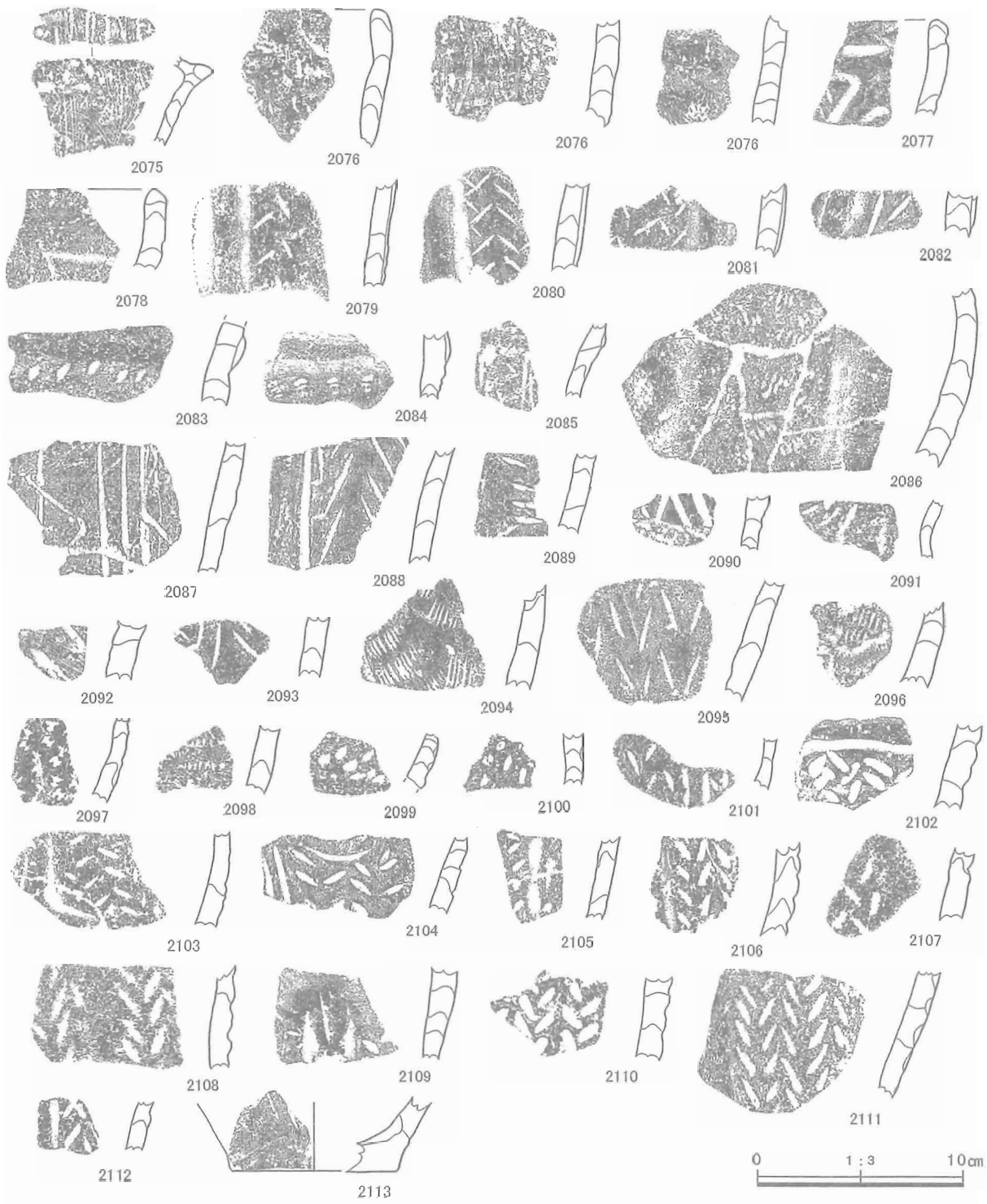
第208図　遺構外出土遺物28



第209図　遺構外出土遺物29



第210図　遺構外出土遺物30

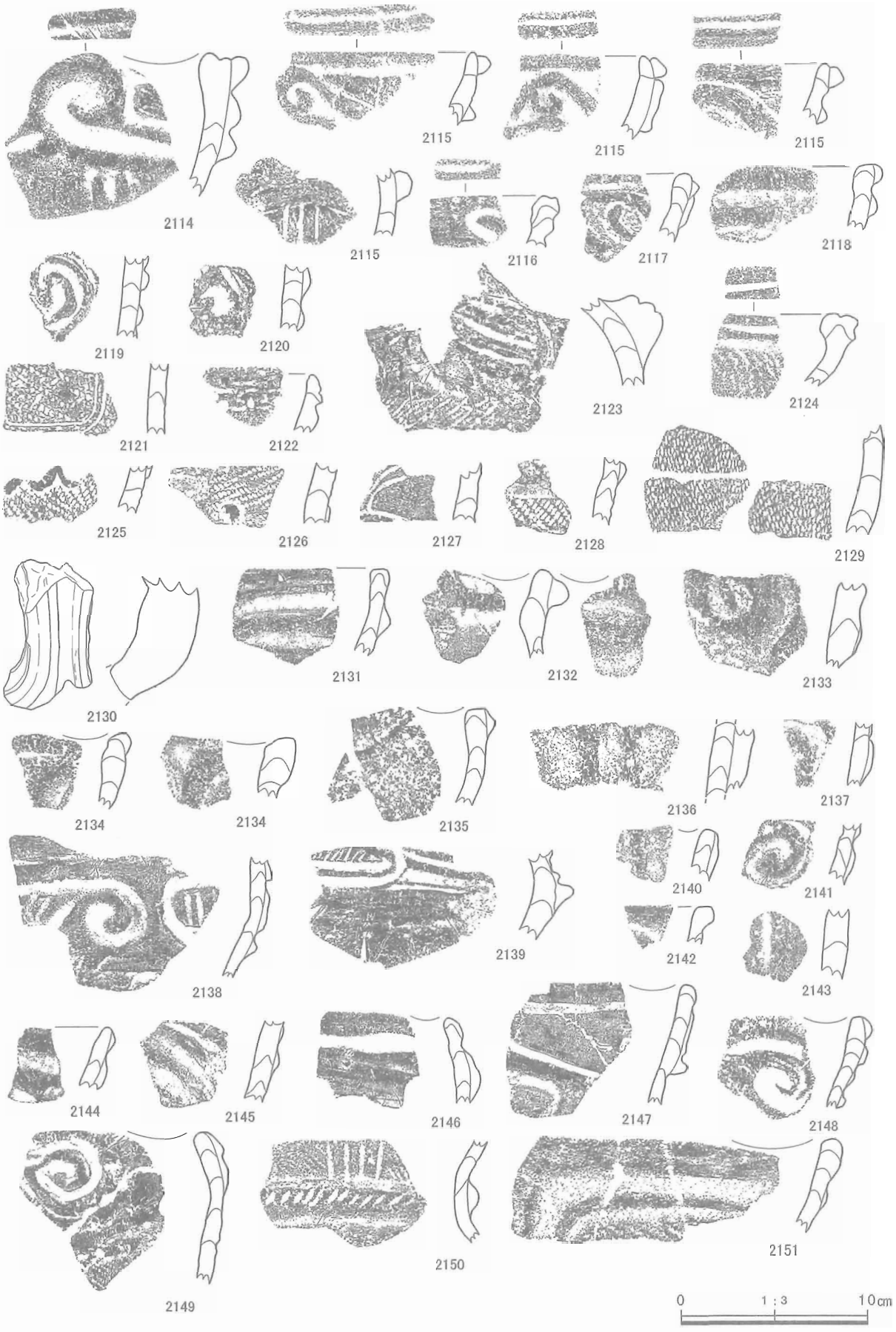


第211図　遺構外出土遺物31

半截竹管状工具で縦位、斜位、Ｖ状に沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第210図2060～2063) は半截竹管状工具で沈線風に押し引いたり、刺突を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第210図2065) は竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第210図2067) は底部付近に半截竹管状工具で沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第210図2068) は底部付近に弧状隆帯を付け、区画内に半截竹管状工具で沈線を施した曽利Ⅳ式土器である。(第210図2069) は底部付近に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた曽利Ⅳ式土器である。(第210図2070～2072・2074) は口縁に沿って沈線を付け、ヘラ状工具でＶ状やハ状の沈線を施した曽利Ｖ式土器である。(第210図2073) は波状口縁から半截竹管状工具で縦位に沈線を付け、半截竹管状工具の沈線で横位や楕円に区画した曽利Ｖ式土器である。

(第211図2075) はくの字状に内反させ、半截竹管状工具で細い沈線を縦位と斜位に付けた曽利Ｖ式土器である。(第211図2076) は口縁部から雑な沈線を付けた曽利Ｖ式土器である。(第211図2077・2078) は口縁部から沈線で区画した曽利Ｖ式土器である。(第211図2079～2082) は縦位や斜位隆帯を付け、ヘラ状工具でハ状の沈線を施した曽利Ｖ式土器である。(第211図2083) は隆帯を横位に付け、指頭で刺突した曽利Ｖ式土器である。(第211図2084・2086) は横位や渦巻き隆帯で区画した中に半截竹管状工具で刺突を付けた曽利Ｖ式土器である。(第211図2085) は横位隆帯と縦位沈線で区画した中に竹管状工具で短い沈線を付けた曽利Ｖ式土器である。(第211図2087) は半截竹管状工具で沈線を縦位に付け、縦波状沈線を施した曽利Ｖ式土器である。(第211図2088) は半截竹管状工具で縦位沈線を付け区画し、区画内にハ状の沈線を施した曽利Ｖ式土器である。(第211図2089～2093・2095) は半截竹管状工具やヘラ状工具でハ状沈線を施した曽利Ｖ式土器である。(第211図2094・2096) は半截竹管状工具でずらしながら沈線を施した曽利Ｖ式土器である。(第211図2097・2098) は半截竹管状工具で刺突を付けた曽利Ｖ式土器である。(第211図2099・2100) は半截竹管状工具やヘラ状工具で刺突を施した曽利Ｖ式土器である。(第211図2101～2112) はヘラ状工具や半截竹管状工具でハ状に沈線を付けた曽利Ｖ式土器である。(第211図2113) は底部の破片で沈線を付けた曽利Ｖ式土器である。

(第212図2114) は口縁部に渦巻き隆帯や縦位隆帯を付け、区画内に縄文を施した加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2115・2117) は口縁部に渦巻き隆帯や横位、縦位隆帯を付け、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施し、縦位と山形沈線を付けた加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2116) は口縁部に渦巻き沈線を付けた加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2118) は口縁部から横位隆線を付けた加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2119・2120) は渦巻き隆帯と縄文を付けた加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2121) は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ２式と思われる土器である。(第212図2122) は口縁に沿って沈線で区画し、棒状工具で相互刺突を付けた加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2123) は半截竹管状工具で沈線を施した把手を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2124) は口唇部に沈線を付け、口唇から横位隆帯を施し、太さ約0.4cmのＲＬの多条縄文を施した加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2125・2126) は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施し、波状隆帯を付けた加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2127) は縄文を付けて半截竹管状工具で弧状沈線を施した加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2128) は条の太さ約0.6cmのＲＬの縄文を付け、隆帯を横位に施した加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2129) は条の太さ約0.2cmのＬの撚糸文を付けた加曽利Ｅ２式土器である。(第212図2130) はＸ状把手の加曽利Ｅ３式土器である。(第212図2131～2134・2136・2137・2140～2146) は渦巻きや横位、弧状、縦位隆帯と沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第212図2135) は波状口縁に沿って低い隆帯を付け、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施し、沈線で区画した加曽利Ｅ４新式土器である。(第212図2138) は隆帯と半截竹管状工具で渦巻きと縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第212図2139) は口縁部と胴部の境を隆帯で区画し、半截竹管状工具で斜位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第212図2147) は口縁部に沿って沈線を付け、隆帯



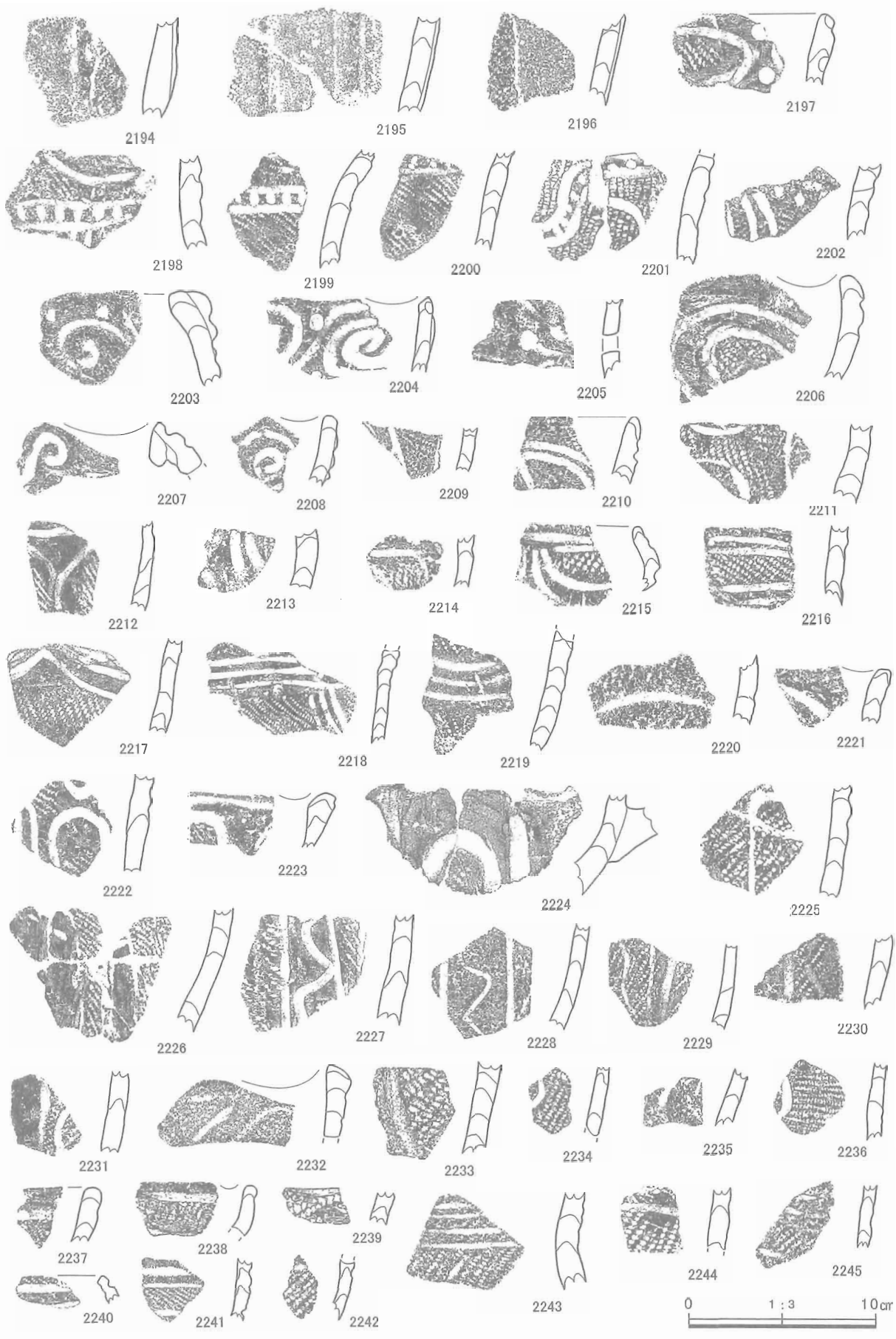
第212図　遺構外出土遺物32

で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第212図2148・2149) は波状口縁に隆帯と沈線で渦巻きを付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第212図2150)は口縁部と胴部の間に横位隆帯を付け、隆帯上部に沈線を施し、条の太さ約0.1cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第212図2151) は口縁部に沿って隆帯を付け、弧状隆帯で区画し、中に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。

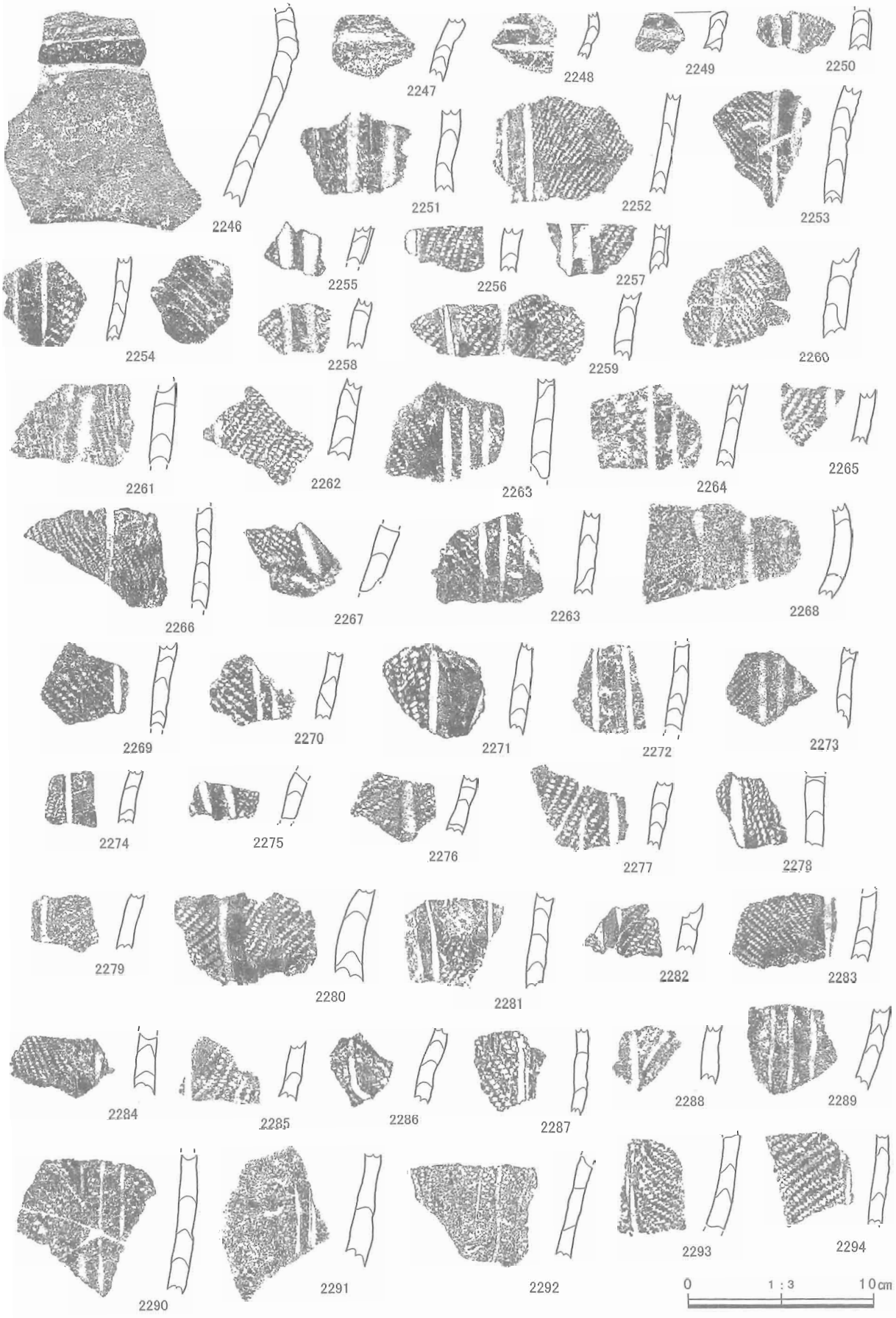
(第213図2152) は隆帯を貼り付け、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を施し、指頭で太い弧状沈線を付け、下に楕円形の窪みを施した中にＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2153) は波状口縁で隆帯渦巻きを付け、縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2154) は口縁部を隆帯で区画し、区画内に条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2155)は隆帯を弧状に付け、隆帯上部に弧状沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2156) は隆帯で弧状区画した中に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2157)は口唇部に条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、隆帯で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2158)は口唇部の下に横位沈線を付け、縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2159・2176) は隆帯で区画した中に条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2160) は口縁に沿って横位の隆帯を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2161)は波状口縁部に沿って隆帯で区画し、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2162)は口縁から隆帯で区画して、区画内に条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2163)は口縁から隆帯で区画して、区画内に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2164) は口縁から隆帯を付け、縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2165)は口唇部に沈線を入れ、口縁部の区画内に条の太さ約0.3mmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2166)は弧状隆帯を付け区画し、区画内に条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2167・2171) は隆帯で区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2168)は隆帯と半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2169) は口縁部に沿って隆帯を付け、隆帯と沈線で区画した中に縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2170・2172) は縦位、弧状、横位隆帯で区画した中に、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文が付いた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2173)は把手が欠損しており、下に条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2174)は隆帯を貼り付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2175・2178・2181・2182)は隆帯区画し隆帯上と区画内に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2177) は隆帯を横位とＶ状に付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2179) は隆帯を横位に貼り、縦位沈線で区画した中に縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2180・2187) は隆帯で区画した中に、条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2188・2189・2193) は横位の隆帯を貼り付け、下に縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2183) は隆帯を弧状に貼り付け、下に縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2184) は隆帯を貼り付け、下に条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2185)は隆帯を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2186)は低い隆帯を貼り付け、条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2190)は隆帯を斜位に貼り付け、条の太さ約0.5cmのＲＬ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2191)は隆帯を斜位に貼り付け、条の太さ約0.3cmのＬＲ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2192)は隆帯を縦位に貼り付け、条の太さ約0.2cmのＲＬ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第213図2193)は隆帯を横位に貼り付け、縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。

第213図　遺構外出土遺物33

（第214図2194）は隆帯を縦位に貼り区画した中に、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2195）は隆帯を縦位に貼り区画した中に、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2196）は隆帯を縦位に貼り付け、隆帯の上に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2197）は口縁部縦位に円形刺突を付け、半截竹管状工具で楕円沈線を施し、中に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2198～2200・2202）は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線と刺突を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2201）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で波状沈線を付け刺突を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2203・2204）は口縁部に円形刺突を付け、半截竹管状工具で渦巻き沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2205）は補修孔を付け、竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2206）は波状口縁部に沿って半截竹管状工具の沈線を付け、沈線で区画した中に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2207・2208）は波状口縁で半截竹管状工具の渦巻き沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2209）は縄文を付けて沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2210）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けて、半截竹管状工具で弧状沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2211・2213）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2212）は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2214）は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2215）は口縁部から半截竹管状工具の沈線で弧状区画し、条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2216）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2217）は半截竹管状工具で弧状沈線を付け、条の太さ約0.3cm、長さ約1.8cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2218）は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.2cm、長さ約1.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2219）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2220）は縄文を付けて半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2221）は半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2222）は半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2223）は口縁に沿って半截竹管状工具の沈線を付け、沈線で区画した中に条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2224）は把手の部分が欠損しており、太い沈線で区画した中に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2225）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2226）は半截竹管状工具で沈線区画し、区画の中にＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2227）は条の太さ約0.4cmと約0.2cmの繊維の硬いＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位と縦波状沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2228）は半截竹管状工具の縦位沈線で区画した中に、縦波状沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2229～2231）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線で区画し、縦波状沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2232）は半截竹管状工具の沈線で区画し中に縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2233）は縦位沈線で区画した中に、条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2234）は条の太さ約０.3cmのＬＲの縄文を付け、沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2235・2236）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、弧状沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2237）は口縁部に沿って横位沈線を付け、条の太さ約0.3cmのＲＬ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第214図2238）は口縁部に沈線で区画した中に条の



第214図　遺構外出土遺物34

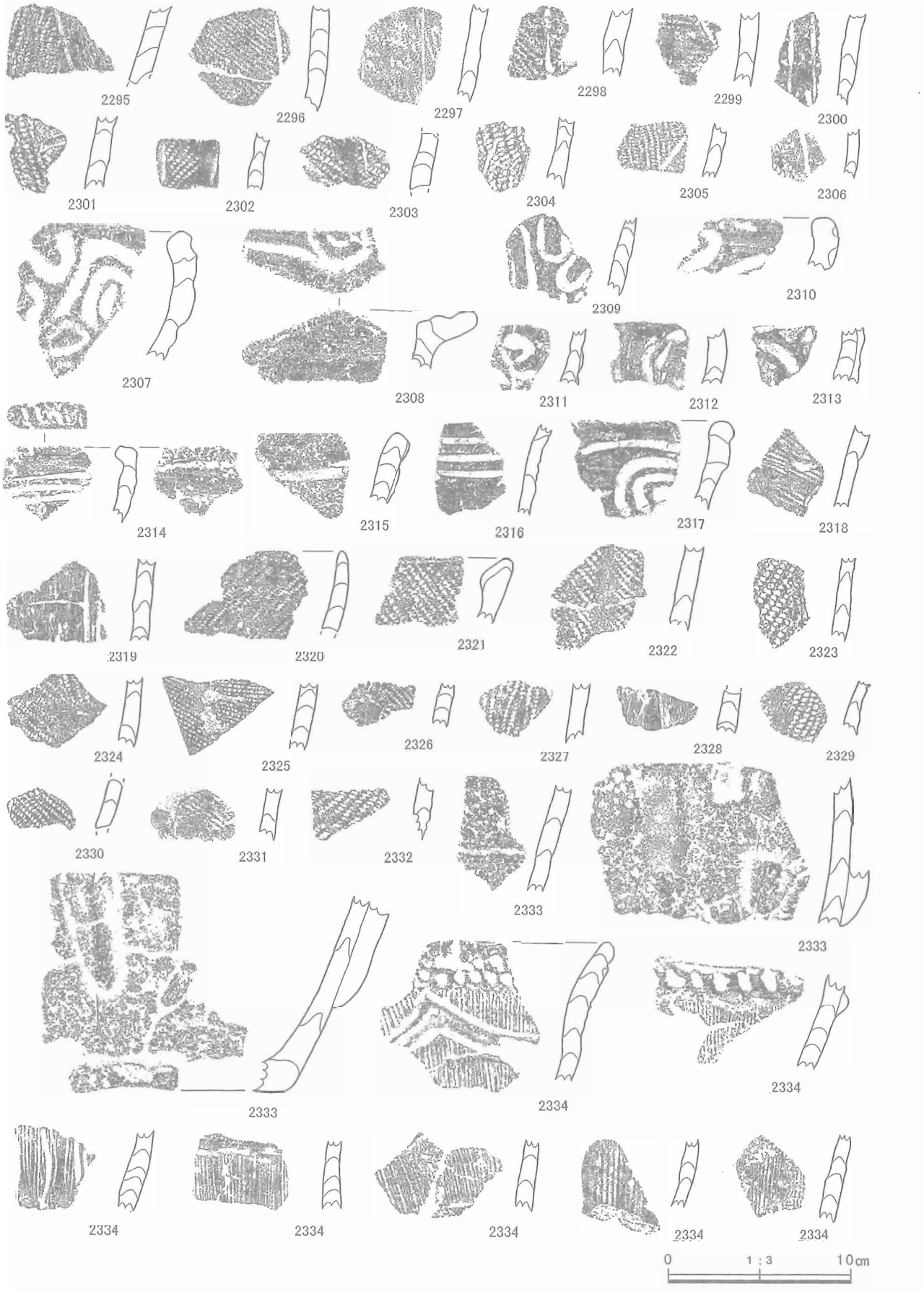


第215図　遺構外出土遺物35

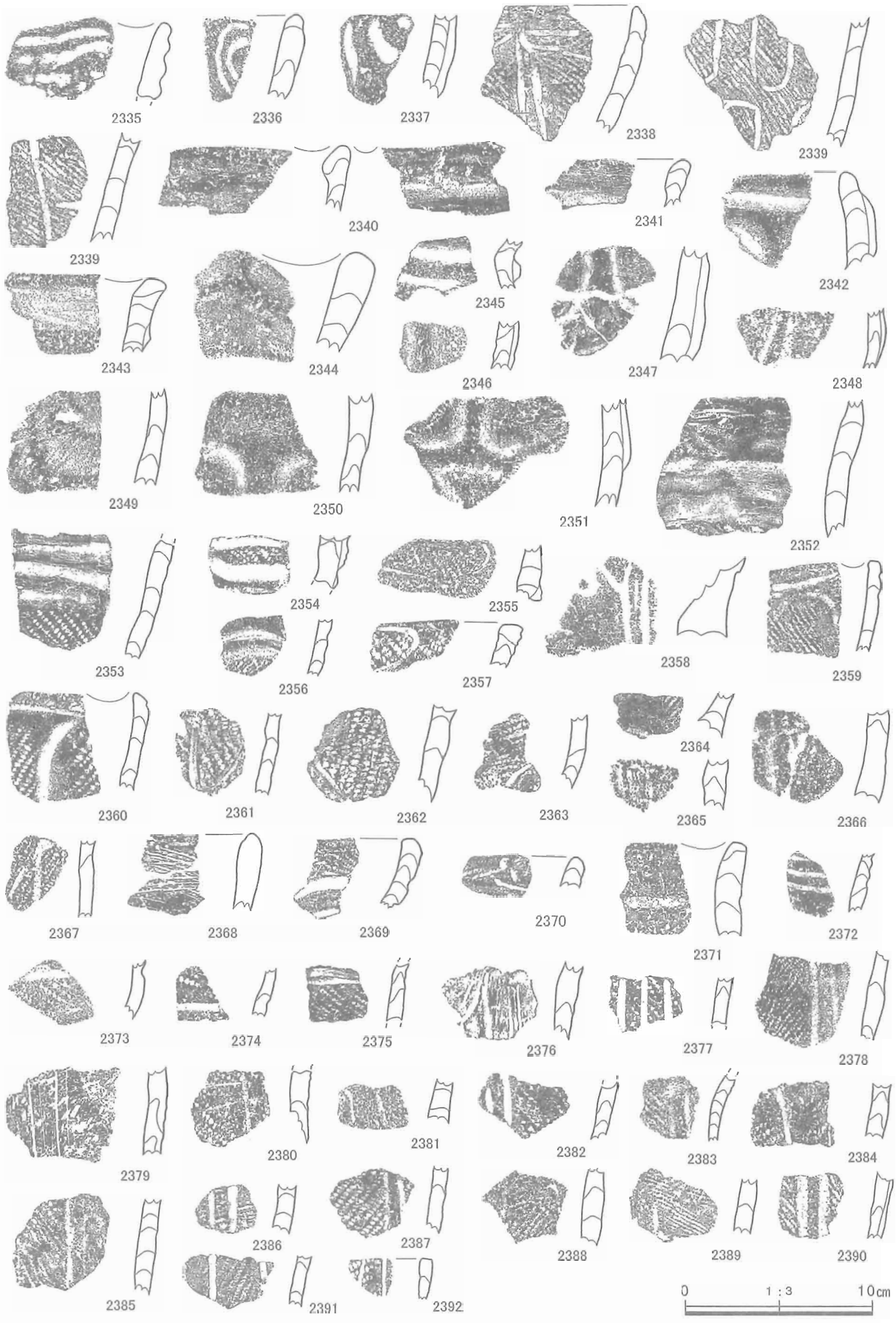
太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第214図2239) は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第214図2240) は口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第214図2241)は半截竹管状工具で沈線を付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第214図2242)は半截竹管状工具で沈線を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第214図2243)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第214図2244) は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第214図2245)は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。

(第215図2246)は条の太さ約0.4cmのＬの縄文を付け、隆帯に沿って横位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2247・2248) は横位に沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2249) は口縁から半截竹管状工具の横位沈線で区画し、中に条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2250)は縦位隆帯で区画し、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2251・2256・2259・2265・2266・2282・2285)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2252) は半截竹管状工具で縦位沈線を付け、条の太さ約0.3cmで長さ約2.1cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2253～2255・2257・2258・2260・2267・2270・2283・2287) は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施したり、低い隆帯を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(2254)は内面に斜位の調整痕を付けた土器である。(第215図2261・2288) は縦位隆帯を付けて縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2262・2273・2275～2279・2294) は条の太さ0.3cmのＲＬの縄文を施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2263・2269・2293) は条の太さ0.4cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(2264) は縄文を付けて斜位区画した加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2268・2272・2289～2291) は縦位の低い隆帯や沈線を付け、縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2271)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2274)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2280・2281・2286・2292)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位や弧状に沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第215図2284)は半截竹管状工具で縦位に沈線を付け、条の太さ約0.2cmのＬＲ縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。

(第216図2295・2297・2298・2302・2306・2327・2328)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2296・2325)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2299) は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2300)は縄文を付け半截竹管状工具で縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2301)は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2303)は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を施し、半截竹管状工具の沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2304)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2305)は条の太さ0.3cmのＲＬの縄文と沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2307・2310・2317) は口縁部から半截竹管状工具で渦巻きや弧状沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2308) は鉢形の口唇部に半截竹管状工具で弧状沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2309・2311) は半截竹管状工具で縦位とＵ状沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。(第216図2312・2313) は弧状沈線に付けた加曽利Ｅ３式土器である。



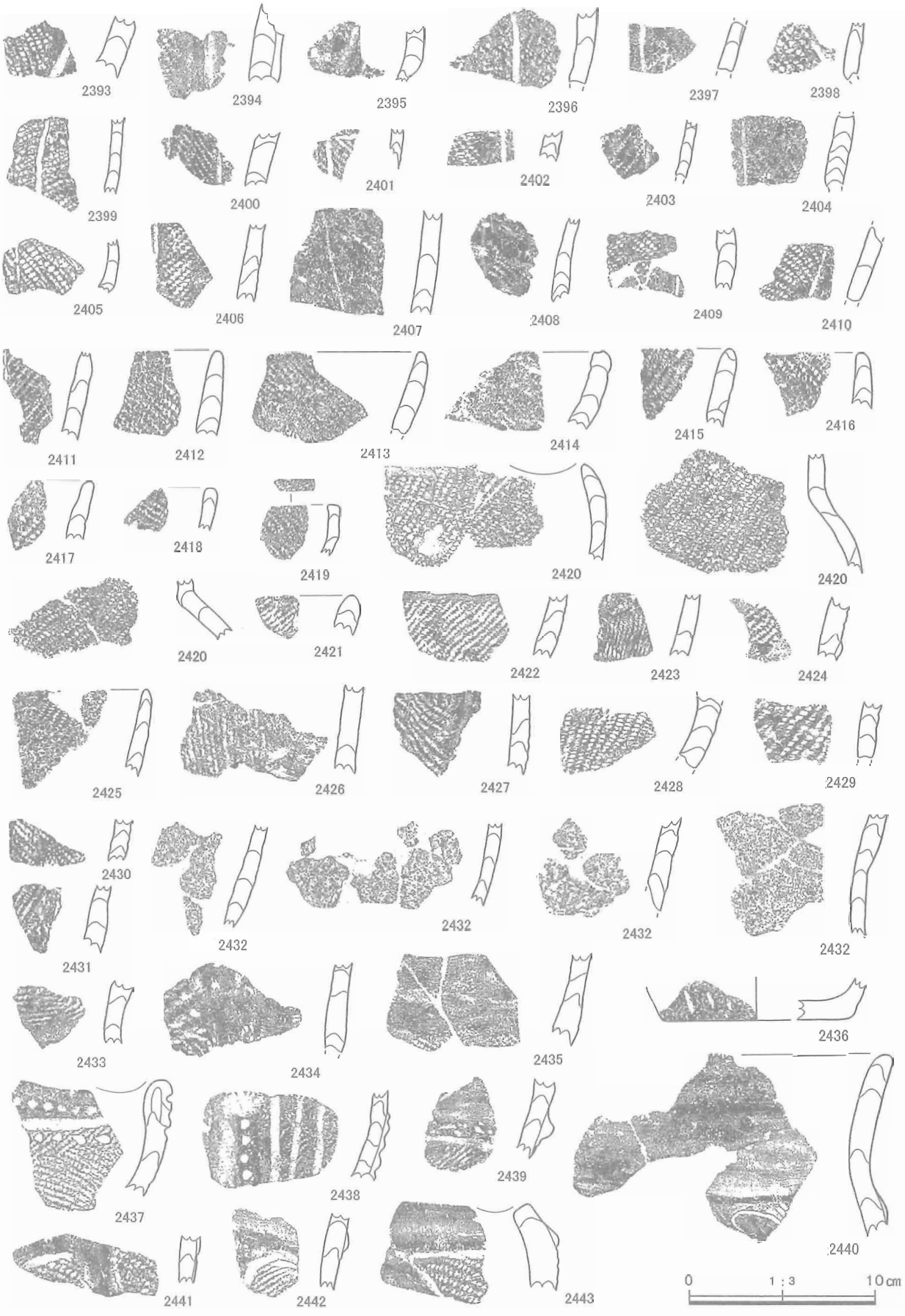
第216図　遺構外出土遺物36



第217図　遺構外出土遺物37

（第216図2314）は口唇部に半截竹管状工具で沈線を付け、横位沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2315）は口縁部に半截竹管状工具の横位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2316）は半截竹管状工具で横位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2318）は条の太さ約0.2cmのＲの縄文を付け、沈線を施した加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2319）は縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2320）は口縁部から条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2321）は口縁部から条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2322）は条の太さ約0.3cm、長さ約1.8cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2323）は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2324）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2326）は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2329・2330）は条の太さ約０.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2331）は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式と思われる土器である。（第216図2332）は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2333）は風化しているが底部付近に隆帯を垂下した加曽利Ｅ３式土器である。（第216図2334）は口縁部に沿って棒状工具で刺突を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を地文風に施し、半截竹管状工具で連弧状沈線を付け、胴部との境に横位隆帯を付けて半截竹管状工具で刺突を施した加曽利Ｅ２式から加曽利Ｅ３式併行土器である。

（第217図2335）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で沈線と刺突を付けた在地系加曽利Ｅ３式土器である。（第217図2336・2337）は口縁部に半截竹管状工具で渦巻きを付けた在地系加曽利Ｅ３式土器である。（第217図2338）は口縁から条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の横位、縦位、弧状沈線を施し区画した加曽利Ｅ３新式土器である。（第217図2339）は口縁から条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で楕円沈線を施した加曽利Ｅ３新式土器である。（第217図2340・2341）は無文で加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2342）は口縁部に隆帯を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2343）は波状口縁に横位隆帯を付け、隆帯上部に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2344）は波状口縁から隆帯を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2345）は口縁と胴部の境に弧状隆帯を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2346～2348・2351）は隆帯を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2349）は条の太さ約0.3cm、長さ約２cmのＬの縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2350）は縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2352）は横位沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2353・2354・2366）は沈線を付けて、条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2355）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の細い沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2356）は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2357・2360）は口縁から条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2358）は半截竹管状工具で縦位沈線と渦巻き沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器で、把手の可能性がある。（第217図2359）は条の太さ0.2cmのＬの縄文を付け、口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線と弧状沈線に区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2361・2362）は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2363）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。（第217図2364）は底部近くで条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４



第218図　遺構外出土遺物38

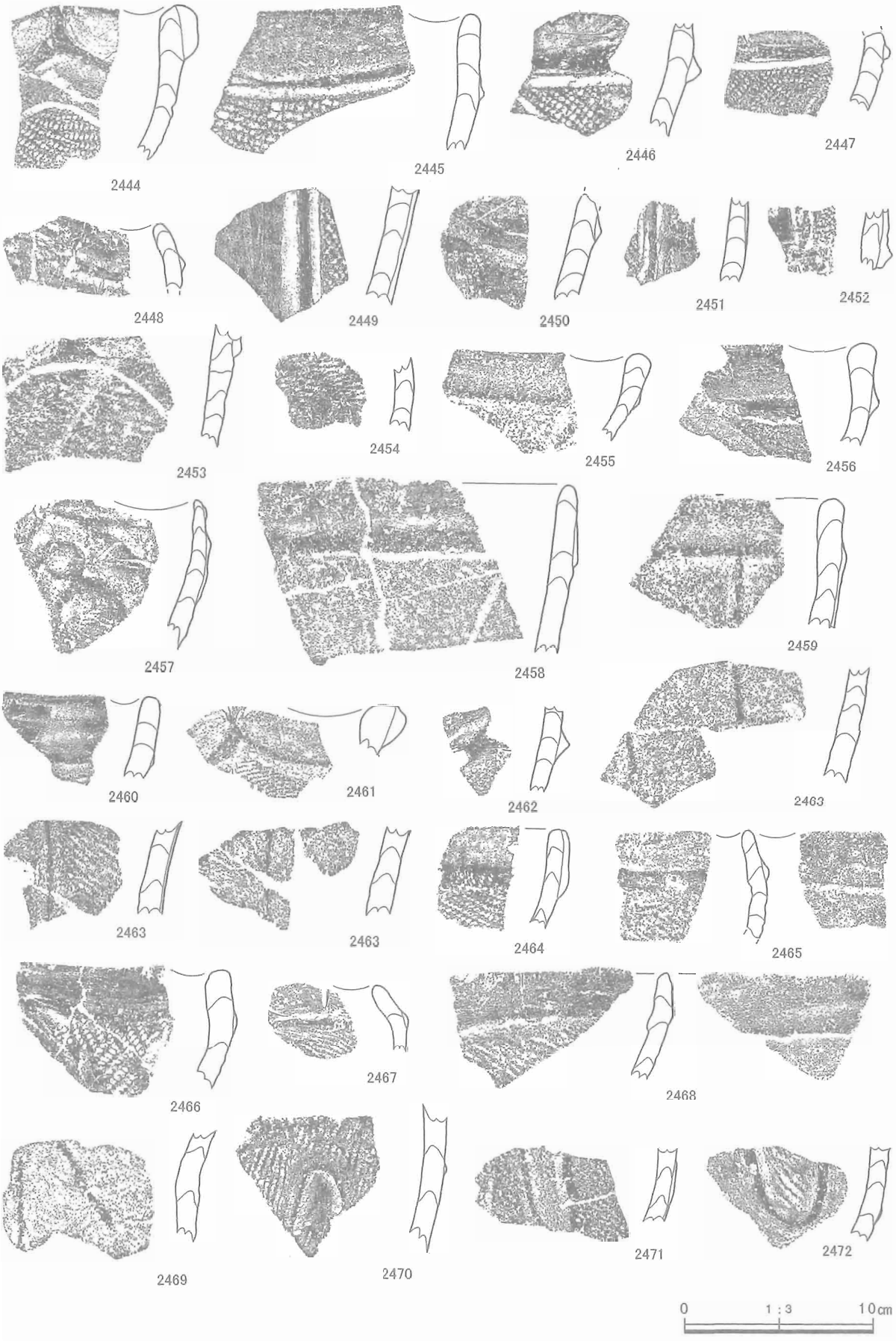
式土器である。(第217図2365) は沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2367・2387)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2368) は口縁から縄文を付け、半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2369)は口縁から条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2370) は口縁から条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付け、沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2371)は口縁から半截竹管状工具で横位沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2372) は弧状沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2373・2376・2377・2391)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2374) は口縁に沿って竹管状工具で横位、縦位、弧状沈線を付け、条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2380・2392)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2375・2378)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けて、半截竹管状工具で沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2379)は条の太さ約0.4cmの繊維の硬いＲＬの縄文を施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2381・2385・2386・2388) は縄文を施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2382～2384)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2389)は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第217図2390)は縦位隆帯を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。

(第218図2393) は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2394)は隆帯を付け、条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2395・2397・2407) は縄文を付け沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2396・2401)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2398・2399・2402・2403・2405・2409・2410)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2400・2408)は隆帯で区画した中に条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2404・2406・2411・2430) は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、縦位沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2412) は口縁から条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2413) は口縁から縄文を付け沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2414・2416)は口縁から条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付た加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2415)は口縁から条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2417)は口縁から条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2418・2425)は口縁から条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2419)は口唇部に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けて、口縁部にもＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2420) は口縁部から条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2421)は口縁部から条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2422) は条の太さ約0.3cm、長さ1.7cmのＲＬの縄文を付け、横位沈線を施した加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2423)は条の太さ約0.2cmのＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４

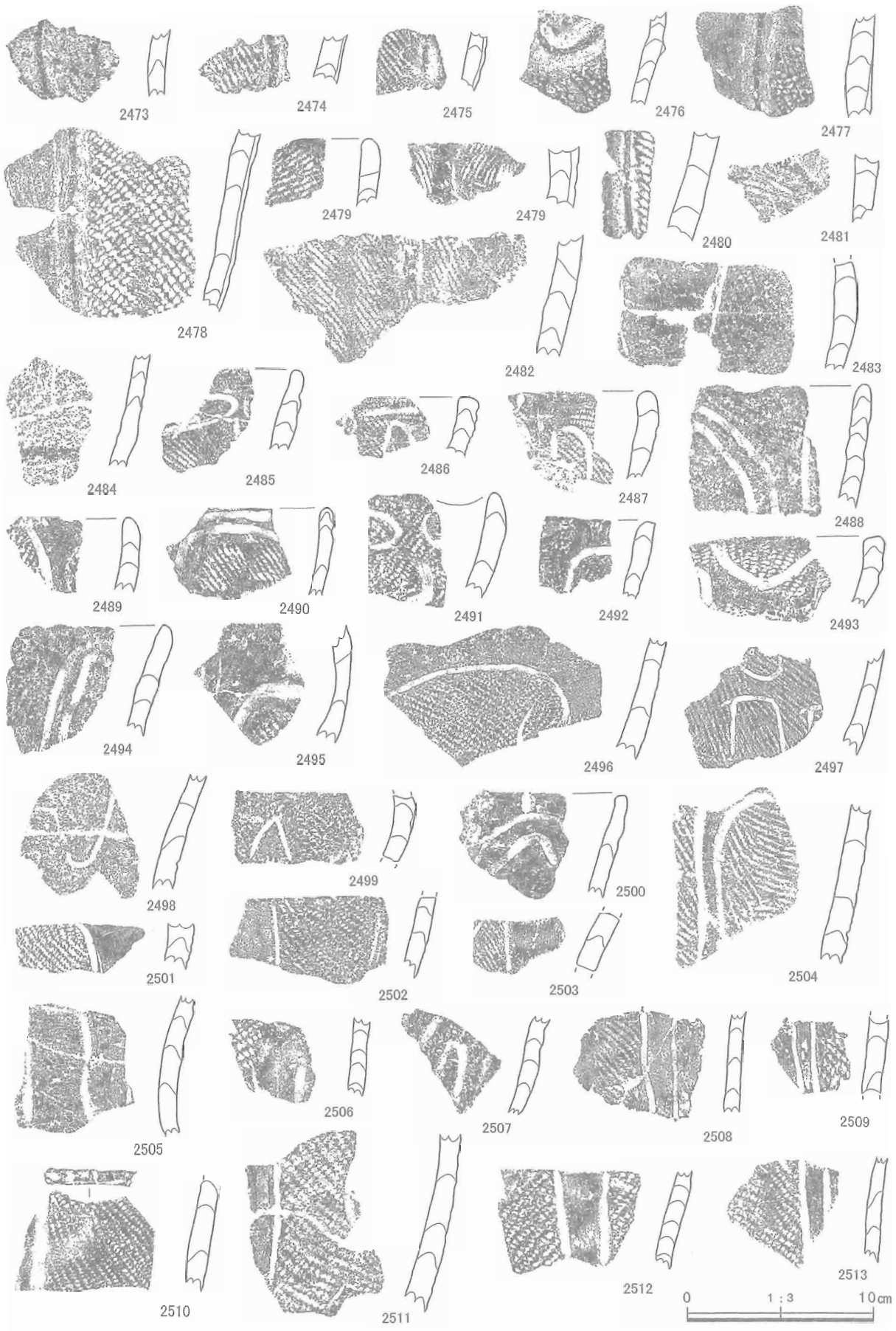
式土器である。(第218図2424・2431・2435)は隆帯で区画した中に、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2426)は条の太さ約0.3cmのＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2427)は条の太さ約0.4cmのＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2428・2429)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2432)は縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2433)は条の太さ約0.3cmで、長さ約1.4cmのＬの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2434)は条の太さ0.4cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2436)は底部で半截竹管状工具の縦位沈線を付けた加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2437)は波状口縁で棒状工具の刺突と半截竹管状工具の沈線を付け、条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2438)は隆帯を縦位に貼り、棒状工具で刺突を施し、竹管状工具で縦位に沈線を付け、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2439)は隆帯を横位に貼り、上部に棒状工具で刺突を施し、条の太さ約0.2cmのＬの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2440)は低い隆帯を弧状に付け、条の太さ約0.3cmのＬの縄文を施し、竹管状工具で弧状沈線を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2441)は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、竹管状工具で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2442)は隆帯と沈線で区画した中に、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第218図2443)は波状口縁に沿って低い隆帯を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。

(第219図2444)は波状口縁に微隆起を付け、条の太さ約0.5cmのＬＲの縄文を施し、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2445)は波状口縁に低い隆帯を付け、条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2446・2450)は隆帯と沈線で区画し、条の太さ約0.4cmのＬＲ縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2447)は隆帯と沈線で区画し、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2448)は低い隆帯を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2449)は縦位隆帯を付け、縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2451)は隆帯と沈線で区画し、条の太さ約0.4cmのＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2452・2467)は隆帯を付け、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2453)は隆帯を付け縄文を施し、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2454)は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2455・2456・2458)は隆帯を貼り付け縄文と沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2457)は円形などに隆帯区画した中に、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2459・2460・2462・2463・2465・2468・2469・2472)は微隆起を貼り付け、縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(2465)は口縁部の内面に貼り付け痕がある。(第219図2461)は口縁に沿って微隆起を付け、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2464)は口縁部に沿って微隆起を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2466)は口縁部の微隆起の下に、条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第219図2470・2471)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、微隆起を逆Ｕ字やＵ字状に貼り付けた加曽利Ｅ４式土器である。

(第220図2473・2474・2484)は微隆起を付け縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(2474)は微隆起を付けて、条の太さ約0.3cmのＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2475)は微隆起を付けて、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2476・2477)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、微隆起を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2478)は条の太さ約0.5cmで長さ約2.6cmのＬＲの縄文を付け、微隆起を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2479・



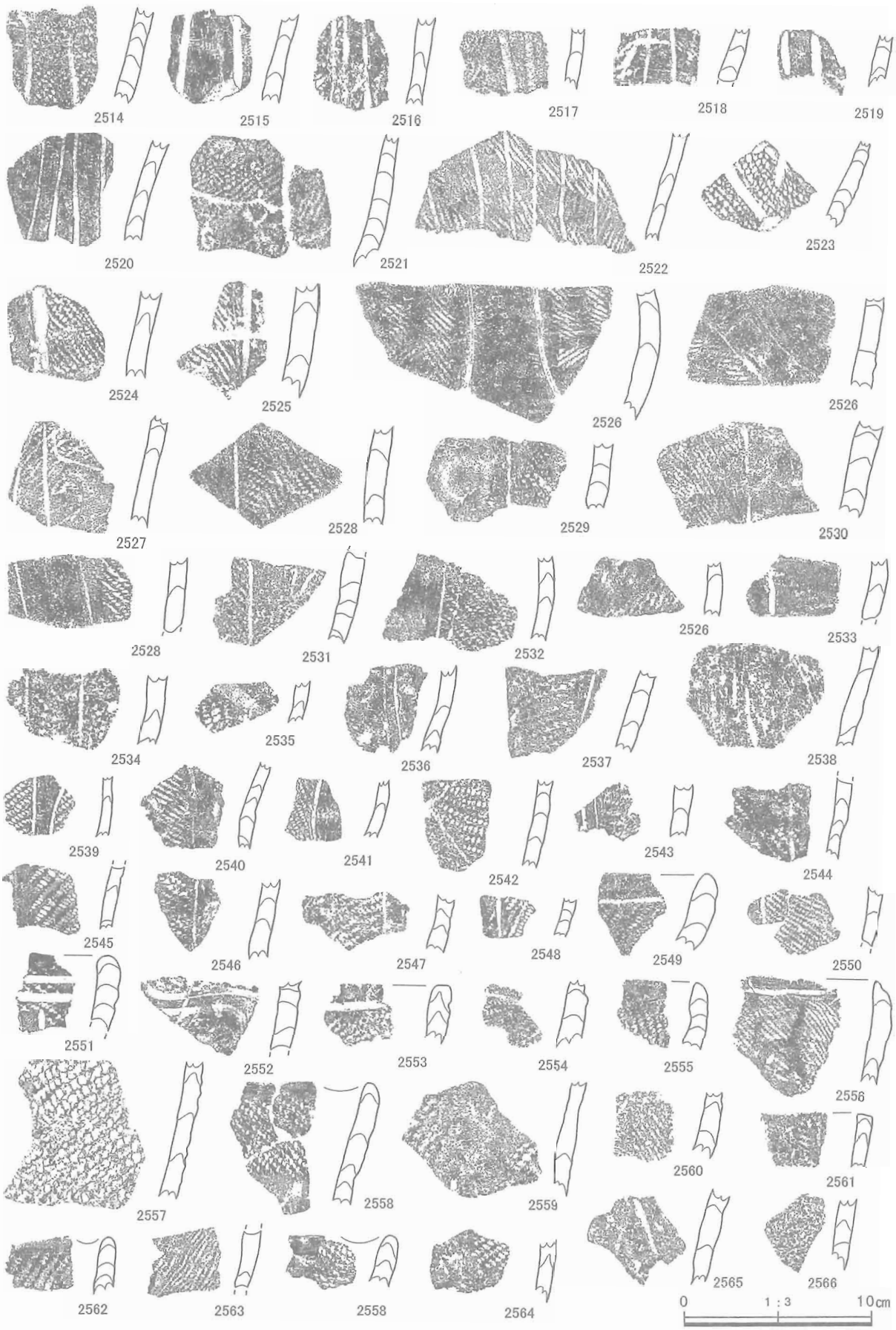
第219図　遺構外出土遺物39



第220図　遺構外出土遺物40

2480・2482)は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付け、微隆起を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2481）は条の太さ約0.3cmのＲの縄文を付け、微隆起を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2483)は縄文を付けて沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2485）は口縁から楕円沈線を付け、条の太さ約0.3cmのＬの縄文を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2486・2487・2491)は口縁部から条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を施し、半截竹管状工具で横位や楕円沈線を付た加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2488・2493・2494)は口縁部から条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2489)は口縁部から条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施し、半截竹管状工具で弧状沈線を付た加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2490)は条の太さ約0.3cm、長さ約2.1cmのＬＲの縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2492)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2495）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2496・2501・2504)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2497）は条の太さ約0.3cmのＲＬの多条縄文を付け、沈線で楕円形に区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2498)はU状の沈線を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2499)は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2500）は半截竹管状工具の弧状の沈線を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2502)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2503）は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2505)は半截竹管状工具の弧状沈線を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2506・2512)は条の太さ0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2507）は縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2508）は条の太さ約0.3cm、長さ約2.0cmのＬＲ縄文を付け、沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2509)は条の太さ約0.3cmのＲＬＲの縄文を施し、半截竹管状工具で縦位沈線を付た加曽利Ｅ４式土器である。(第220図2510）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線区画した加曽利Ｅ４式土器で、胴部の接合部に竹管状工具で刺突を施している。(第220図2511・2513)は条の太さ約0.5cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。

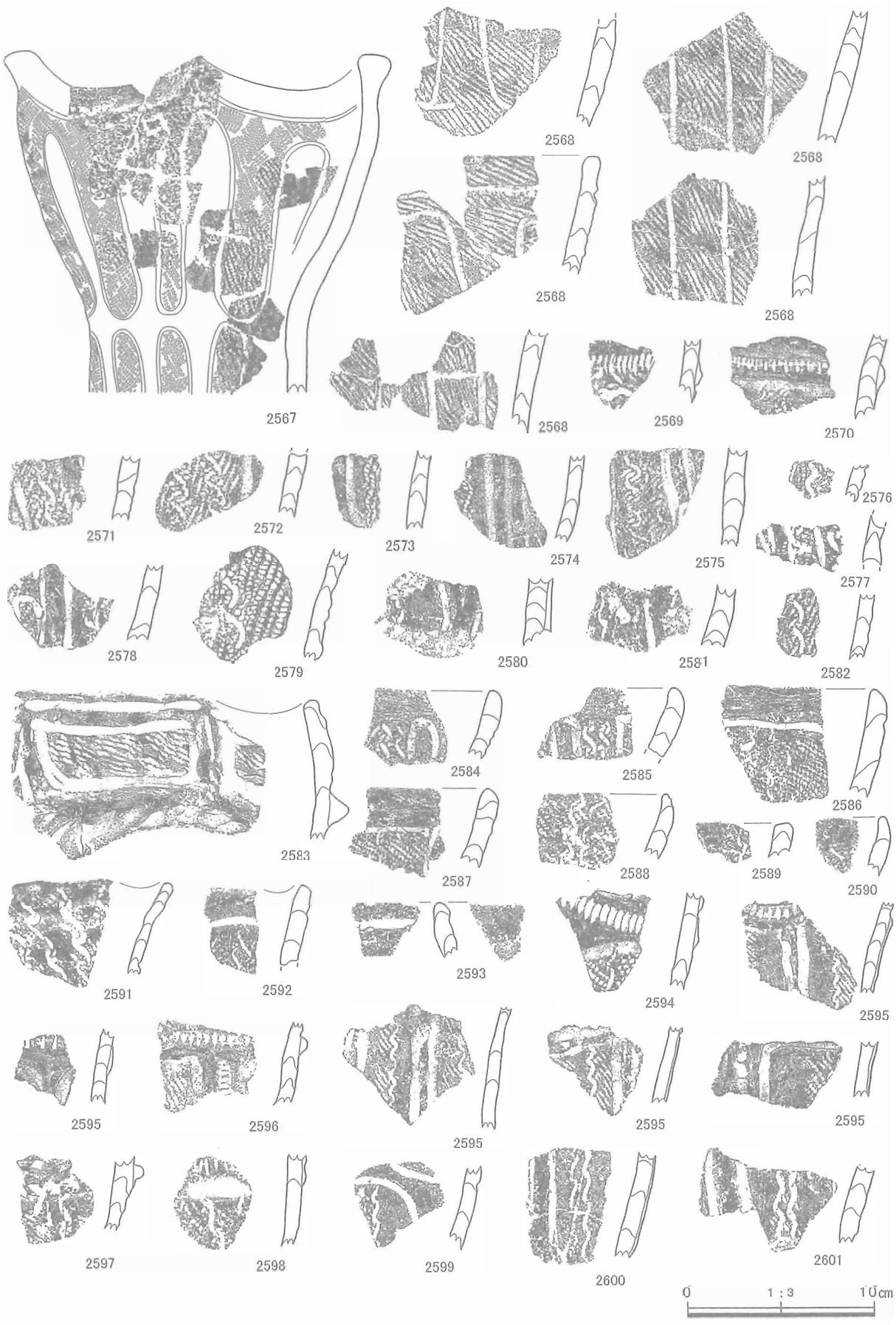
(第221図2514・2547）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2515・2519・2520・2536）は半截竹管状工具の縦位沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2516・2517・2522～2524・2537・2539・2548)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2518・2532・2541～2544・2546・2550)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2521・2529・2530）は縄文を付け縦位沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2525）は条の太さ約0.3cm、長さ約1.8cmのＬの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2526・2540)は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2527・2554)は条の太さ約0.2cmでＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位、横位、弧状沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2528)は条の太さ約0.3cmで長さ約2.0cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2531)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けて半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2533・2534・2538・2561・2565）は縄文を付け半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2535・2545)は条の太さ約0.5cmのＲＬの多条縄文を付けて、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式と思われる土器である。(第221



第221図　遺構外出土遺物41

図2549・2553)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、口縁部に沿って半截竹管状工具で横位沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2551)は口縁から条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の横位や縦位沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2552)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線を施した加曽利Ｅ４式土器である。(第２21図2555)は口縁から条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2556)は口縁から条の太さ約0.3cm、長さ約2.0cmのＬの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2557)は条の太さ約0.6cmのＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2558)は波状口縁に条の太さ約0.3cmのＲＬＲの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。(第221図2559)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けて、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した加曽利Ｅ４式と思われる土器である。(第221図2560・2566) は縄文を付けた加曽利Ｅ４式と思われる土器である。(第221図2562・2564)は口縁から条の太さ0.4cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ４式と思われる土器である。(第221図2563)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた加曽利Ｅ４式土器である。

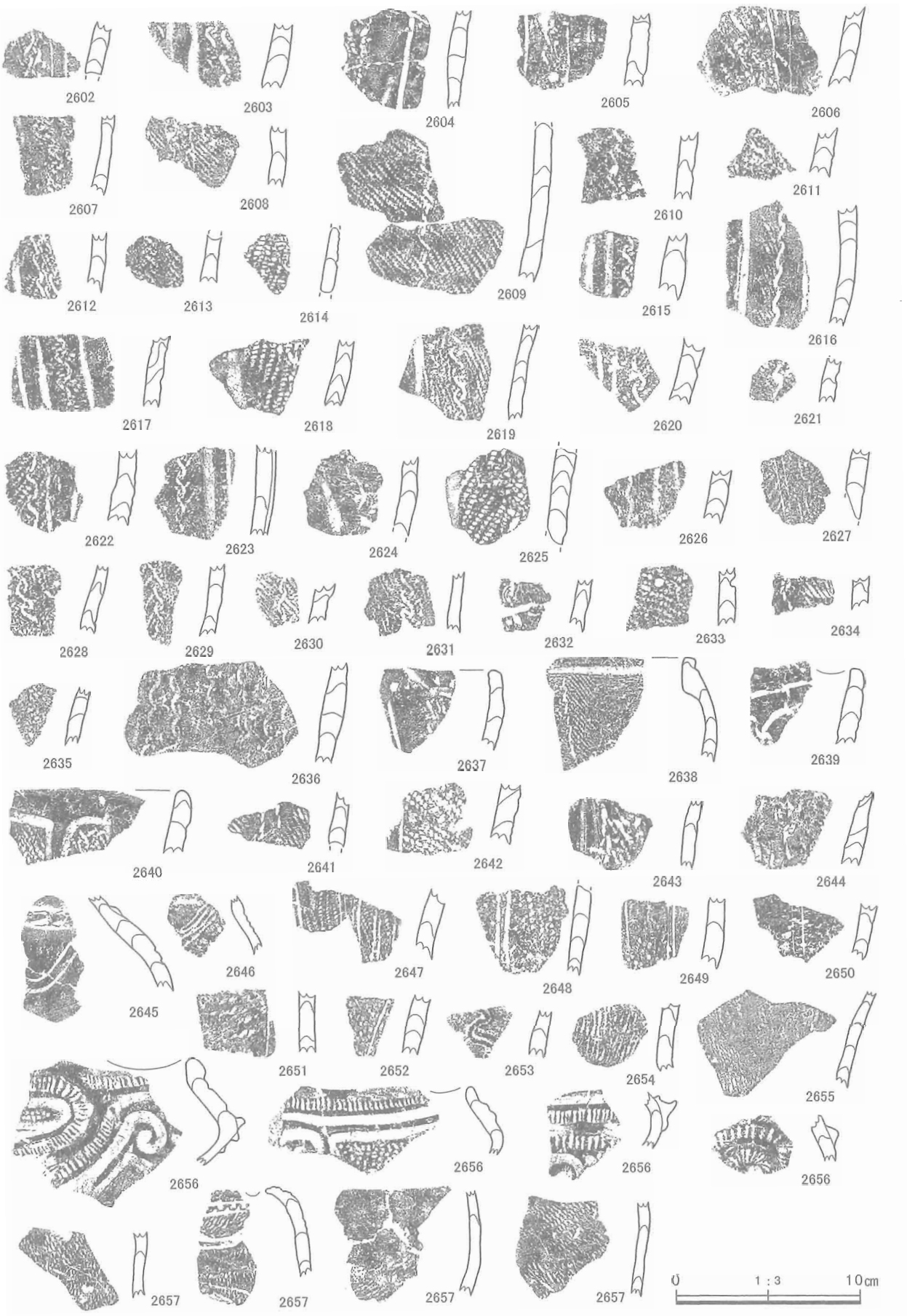
(第222図2567) は波状口縁に沿って口縁部から微隆起を付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で区画した加曽利Ｅ４式新段階の土器である。(第222図2568) は (第138図865) と同一個体である。条の太さ約0.4cmのＲＬの多条縄文を付け、半截竹管状工具で隅丸方形と楕円形に区画した加曽利Ｅ４式在地系土器である。(第222図2569) は隆帯に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付け、鋸歯状沈線を施した伊那系曽利Ⅲ式土器である。(第222図2570)は条の太さ約0.3cmのＲの開いた端を自身で結節した原体を作り、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2571・2572) は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を途中で結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2573・2574) は条の太さ約0.2cmのＬＲの開いた端部を結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2575)は条の太さ約0.2cmのＲＬの開いた端を途中で２連結節した原体を縦位回転し、隆帯で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2576)は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を途中で結節した原体を縦位回転し、隆帯で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2577) は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端の途中を結節をした原体を縦位回転し、縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2578)は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を自身で結節をした原体を縦位回転し、縦位沈線と弧状沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2579) は条の太さ約0.4cmのＲＬの開いた端を結節した原体を、縦位に回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2580)は隆帯で区画した中に条の太さ約0.4cmのＲＬの開いた端を自身で結節をした原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2581)は条の太さ約0.2cmのＬＲの開いた端を結節した原体を縦位回転し、縦位と弧状沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2582) は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を途中で結節をした原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式土器である。(第222図2583) は波状口縁部に沿って半截竹管状工具の沈線と隆帯で区画し、中に条の太さ約0.3cmのＲの縄文を施した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2584) は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を途中で２連結節した原体を縦位回転し、半截竹管状工具の沈線を付けた伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2585) は条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を途中で２連結節した原体を縦位回転し、半截竹管状工具の沈線を付けた伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2586・2587) は同一個体で口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線を付け、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、ＬＲの開いた端を２連結節をした原体を縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2588)は口縁部から条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を途中で２連結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2589)は口縁部から条の太さ約0.2cmのＬ



第222図　遺構外出土遺物42

Ｒの開いた端を途中で結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2590)は口縁部から条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2591)は口縁から条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を２連結節した原体を、斜位に回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図２592) は口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線を付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの開いた端をゆるく結節した原体を縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2593) は口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線を付け、縄文を施した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2594) は隆帯に沿って半截竹管状工具で連続爪形を付け、条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を結節し、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2595) は縦位と横位に区画し横隆帯上に刺突を付け、隆帯区画内に条の太さ約0.2cmのＬＲの開いた端を結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2596) は隆帯区画に沿って半截竹管状工具で縦位と横位に刺突を付け、隆帯区画内に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2597)は隆帯に沿って刺突を付け区画し、画内に条の太さ約0.3cmのＬの開いた端を２連結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2598)は隆帯に沿って刺突を付け区画し、画内に条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を２連結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第222図2599～2601) は隆帯で区画し、区画内に条の太さ約0.2cmのＬの開いた端を２連結節し、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。

(第223図2602) は条の太さ約0.2cmのＬの開いた端を２連結節した原体を縦位回転し、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2603～2606・2612)は条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を２連結節した原体を縦位回転し、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2607) は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を２連結節し、原体を縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2608)は条の太さ約0.2cmのＬＲの開いた端を２連結節した原体を縦位回転し、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2609) は条の太さ約0.3cm、長さ約1.6cmのＲＬの原体を横位回転した後、結節した原体の結節部を縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2610) は条の太さ約0.4cmのＬＲの開いた端を結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2611)は条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を２連結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2613) はＬＲの原体の開いた端を結節し縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2614) は条の太さ約0.4cmのＲＬの開いた端を結節し、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2615・2617・2620・2622)は条の太さ約0.3cmのＲＬ原体の開いた端を結節した原体を縦位回転し、竹管状工具で縦位に区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2616) は条の太さ約0.3cmのＬＲの原体の開いた端を結節し縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2618)は条の太さ約0.4cmのＲＬの開いた端を結節した原体を、縦位回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2619) は条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を結節した原体を、縦位回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2621・2632)は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を結節し、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2623) は隆帯を縦位に付けて区画し、



第223図　遺構外出土遺物43

中に条の太さ約0.2cmのＲＬの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2624)は沈線で縦位に区画し、中に条の太さ約0.2cmのＬの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2625)は縦位の沈線で区画した中に条の太さ約0.4cmのＲＬの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2626)は縦位の沈線で区画した中に条の太さ約0.3cmの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2627)は条の太さ0.3cmのＲの開いた端を２連結節した原体を縦位に回転施文し、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2628)は条の太さ約0.3cmのＲＬの開いた端を結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2629・2631)は条の太さ約0.2cmのＲＬの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2630)は条の太さ約0.2cmのＬＲの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2633)は条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を２連結節した原体を、斜位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2634)は条の太さ約0.3cmのＬの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2635)は縄文の開いた端を結節した原体を、縦位回転した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2636)は条の太さ約0.3cmのＬの開いた端を２連結節した原体を、縦位に何回も回転施文した伊那系加曽利Ｅ３式から伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2637)は口縁部に沿って竹管状工具の刺突を付けて、さらに沈線で縦位区画し、条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を２連結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2638)は口縁部に沿って竹管状工具で横位沈線を付け、条の太さ約２cmのＬＲの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2639)は波状口縁に沿って沈線を付け、条の太さ約0.3cmのＲの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2640)は口縁から沈線で区画した中に、条の太さ約0.3cmのＬＲの開いた端を結節した原体を、縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2641)は条の太さ約0.3cmのＬの開いた端を結節した原体を縦位に回転施文し、Ｌを縦位に圧痕して区画した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2642)は条の太さ約0.4cmのＲＬを縦位に付け、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2643)は条の太さ約0.4cmのＬＲの開いた端を結節した原体を縦位に回転施文し、縦位沈線で区画した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2644)は条の太さ約0.3cmのＬの開いた端を結節した原体を縦位に回転施文した伊那系加曽利Ｅ４式土器である。(第223図2645)は口縁部と胴部の境に横位隆帯を付け、隆帯の上部に半截竹管状工具で連続爪形を施し、同一工具で下に弧状沈線を付けた里木系土器である。(第223図2646)は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線を施した里木系土器である。(第223図2647)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した里木系土器である。(第223図2648・2649)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した里木系土器である。(第223図2650・2651)は繊維の硬い条で太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した里木系土器である。(第223図2652)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を施した里木系土器である。(第223図2653)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、縦位に波状沈線を施した里木系土器である。(第223図2654・2655)は条の太さ約0.2cmのＲの撚糸文を付けた里木系土器である。(第223図2656)は口縁部を大きく内反させ、波状口縁に沿って隆帯で渦巻と楕円形に区画し、区画内に棒状工具の刺突と半截竹管状工具の連続刺突を付けた咲畑式

第224図　遺構外出土遺物44

土器である。(第223図2657)は波状口縁を内反させ、地文に条の太さ約0.2cmのＬの撚糸文を付け、口縁に沿って半截竹管状工具の沈線を施し、沈線の中に棒状工具で相互刺突を付け、下に半截竹管状工具で連弧文を施した咲畑式土器である。

(第224図2658)は波状口縁部に沿って半截竹管状工具により横位、渦巻き、連弧状沈線を付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した咲畑式土器である。(第224図2659)は口縁に条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画し、渦巻きと連弧文を付けた咲畑式土器である。(第224図2660)は波状口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた咲畑式土器である。(第224図2661)は波状口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、区画内に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた咲畑式土器である。(第224図2662)は内反する口縁部に横位と楕円隆帯で区画した咲畑式土器である。(第224図2663)は口縁部から地文に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で横位に沈線を施した咲畑式土器である。(第224図2664)は波状口縁に沿って条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で波状沈線を付けた咲畑式土器である。(第224図2665)は隆帯を貼り付け区画した中に竹管状工具で刺突を付けた咲畑式土器である。(第224図2666)は隆帯を横位と斜位に貼り付けた咲畑式土器である。(第224図2667)は半截竹管状工具で連弧文を付けた咲畑式土器である。(第224図2668)は隆帯で区画した中に、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた咲畑式土器である。(第224図2669)は半截竹管状工具で連弧状沈線を付けた咲畑式土器である。(第224図2670)は半截竹管状工具で連弧状沈線を付け区画した中に、条の太さ約0.1cmのＲＬの縄文を付けた咲畑式土器である。(第224図2671)は半截竹管状工具で連弧状沈線を付けたと思われる咲畑式土器である。(第224図2672)は半截竹管状工具で連弧状の沈線を付け、地文に条の太さ約0.1cmのＲの撚糸文を付けた咲畑式土器である。(第224図2673)は半截竹管状工具で沈線を付けた咲畑系土器である。(第224図2674)は波状口縁に沿って隆帯を付け区画した中に、竹管状工具で連続刺突を付けた咲畑系土器である。(第224図2675)は波状口縁に沿って竹管状工具で連続刺突を付け、下に半截竹管状工具で沈線を施した咲畑系土器である。(第224図2676)は口縁に沿って棒状工具で刺突を付け区画し、区画内に半截竹管状工具で斜位の沈線を施した咲畑系土器である。(第224図2677)は口縁から半截竹管状工具で渦巻き沈線を付けた咲畑系土器である。(第224図2678)は口縁を扇状の把手にして、細い隆帯で縦位と渦巻き状に貼り付け、半截竹管状工具で縦位の沈線を施した咲畑系土器である。(第224図2679)は波状口縁を縦位隆帯で区画し、区画内に粘土紐と半截竹管状工具で渦巻きを付けた咲畑系土器である。(第224図2680)は地文に条の太さ約0.3cmのＲの撚糸文を付け、半截竹管状工具で弧状や鋸歯状沈線を施した咲畑系土器である。(第224図2681)は口縁に沿って半截竹管状工具の沈線を付け、沈線内に棒状工具で相互刺突を施し、地文に条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した咲畑系土器である。(第224図2682)は波状口縁部に隆帯を貼った咲畑系土器である。(第224図2683)は波状口縁から地文に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で横位と波状沈線を施した咲畑系土器である。(第224図2684)は波状口縁に半截竹管状工具で横位と弧状沈線を付けた咲畑系土器である。(第224図2685)は口唇部に棒状工具で刺突を付け、地文に条の太さ約0.3cmのＲの撚糸文を施し、半截竹管状工具で弧状の沈線を付けた咲畑系土器である。(第224図2686)は口唇部に棒状工具で刺突を付け、地文に条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を施し、半截竹管状工具で押し引き風に小波状の沈線を付けた咲畑系土器である。(第224図2687)は波状口縁の地文に条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で横位と波状沈線を施した咲畑系土器である。(第224図2688)は胴部の一部に条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた咲畑系土器である。(第224図2689)は波状口縁から半截竹管状工具で弧状と渦巻き沈線を付け、沈線で区画した中に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた咲畑系土器である。(第224図2690)は波状口縁から条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線を施した咲畑系土器である。(第

第225図　遺構外出土遺物45

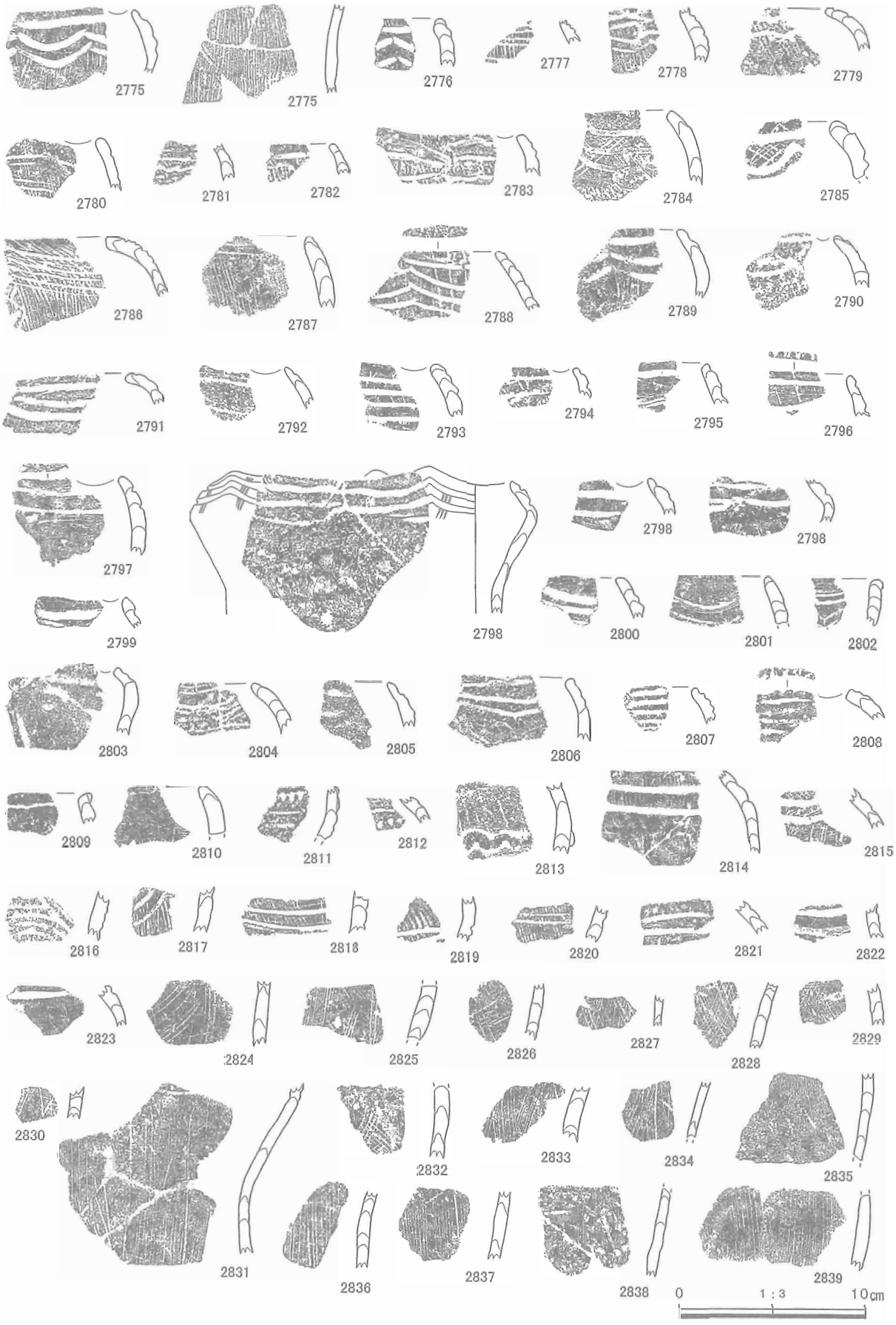
224図2691）は波状口縁の口唇部に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した咲畑系土器である。（第224図2692）は内反する口縁を隆帯と沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた咲畑系土器である。（第224図2693）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で横位と弧状沈線を付け、区画した中に条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した咲畑系土器である。（第224図2694）は口縁に沿って半截竹管状工具の沈線を付けた咲畑系土器である。（第224図2695）は胴部に弧状隆帯を付け竹管状工具で刺突を施した咲畑系土器である。（第224図2696）は隆帯を縦位に蛇行させた咲畑系土器である。（第224図2697）は口縁の内反する部分に弧状隆帯を付けた咲畑系土器である。（第224図2698・2699）は口縁に隆帯を貼り付けた咲畑系土器である。（第224図2700）は隆帯を斜位と縦位に貼り付けた咲畑系土器である。（第224図2701）は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた咲畑系土器である。（第224図2702）は地文に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具でコンパス文状の横位沈線を入念に施した咲畑系土器である。（第224図2703）は隆帯と沈線で弧状に区画した中に、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた咲畑系土器である。（第224図2704）は地文に条の太さ約0.2cmのＲの撚糸文を付け、上に半截竹管状工具の弧状沈線を施した咲畑系土器である。（第224図2705）は地文に条の太さ約0.1cmのＲの撚糸文を付け、半截竹管状工具で弧状の沈線を施した咲畑系土器である。（第224図2706～2708）は半截竹管状工具で連弧状の沈線を付けた咲畑系土器である。（第224図2709）は半截竹管状工具で縦位沈線や渦巻き沈線などを付けた咲畑系土器である。（第224図2710）は地文に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けて、半截竹管状工具で円形や斜位に沈線を施した咲畑系土器である。（第224図2711）は半截竹管状工具で弧状や斜位に沈線を付けた咲畑系土器である。（第224図2712）は隆帯を横位に貼り付けた咲畑式頃の土器である。（第224図2713）は竹管状工具で連続刺突を付けた咲畑式頃の土器である。（第224図2714）は半截竹管状工具で沈線を付けた咲畑式と曽利Ⅲ式の折中土器である。（第224図2715）は竹管状工具で刺突を付けた咲畑式と曽利Ⅲ式の折中土器である。（第224図2716）は扇状口縁の下に縄文を付け、半截竹管状工具で渦巻き状の沈線を施した咲畑式と曽利Ⅲ式の折中土器である。

（第225図2717）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を付け、沈線内に竹管状工具で刺突を施し、地文に半截竹管状で縦位に条線を付け、半截竹管状工具の連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。（第225図2718）は口縁部に沿って棒状工具で刺突を付け、地文に半截竹管状工具で条線を施し、条線の上から同一工具で連弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。（第225図2719）は口縁部に沿って半截竹管状工具で刺突を付け、地文に半截竹管状工具で格子状の条線を施し、条線の上から同一工具で連弧状沈線を付け、下に小波状の沈線を施し、連弧文と小波状の沈線の間に連続刺突した東鎌塚原式土器である。（第225図2720）は胴部に半截竹管状工具か櫛歯状工具で縦位条線を付けた東鎌塚原式土器である。（第225図2721）は波状口縁部に沿って円形竹管状工具で刺突を付け、地文に半截竹管状工具で縦位と斜位に条線を施し、上部に弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。（第225図2722）は口縁部先端が欠損しているが、地文に半截竹管状工具で格子状沈線を付け、棒状工具で刺突を施し、下に連弧文状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。（第225図2723）は口縁部先端が欠損しているが、棒状工具で刺突を付けて、半截竹管状工具で渦巻き沈線を施した東鎌塚原式土器である。（第225図2724）は波状口縁に沿って竹管状工具で刺突を付け、半截竹管状工具で縦位に条線を施し、半截竹管状工具の沈線で渦巻きと連弧を付けた東鎌塚原式土器である。（第225図2725）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を付け、沈線に沿って竹管状工具で刺突を施し地文に条線を付け、さらに半截竹管状工具で条線を施し、同一工具で連弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。（第225図2726）は波状口縁に沿って竹管状工具で刺突を付け、半截竹管状工具で縦位に条線を施し、半截竹管状工具の沈線で渦巻きと連弧を付けた東鎌塚原式土器である。（第225図2727）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を付け、沈線の中に横位に竹管

状工具で刺突を施し、地文に条線を付け、上に弧状沈線を施す東鎌塚原式土器である。(第225図2728)は口縁から地文に条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、区画内に竹管状工具で相互刺突を施し、上に連弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2729)は地文に口縁部から竹管状工具で縦位条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を施し、沈線内に半截竹管状工具で刺突を付け、下に半截竹管状工具で弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2730)は波状口縁の地文に条線を付け、円形竹管状工具で横位二列に刺突を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2731)は口縁に沿って半截竹管状工具で刺突を付け、半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、中に半截竹管状工具で刺突を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2732)は口唇部に刻みを付け、口唇直下から縦位に条線を施し、弧状沈線に沿って竹管状工具で刺突を付け、その下に半截竹管状工具で連弧文を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2733)は波状口縁に沿って半截竹管状工具の連続爪形文を付け、その下に弧状の連続爪形文を施した東鎌塚原式に近い土器である。(第225図2734)は波状口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、区画内に竹管状工具で刺突を付け、胴部に斜位の調整痕が付いた厚手の東鎌塚原式に近い土器である。(第225図2735～2737)は地文に条線を付け、波状口縁に沿って半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、区画内に竹管状工具で相互刺突を付け、連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2738)は口縁から地文に条線を付け、波状口縁に沿って半截竹管状工具で弧状沈線の区画を施し、区画内に矢羽根状に竹管状工具で相互刺突を付け、下に連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2739)は口縁から地文に条線を付け、波状口縁に沿って半截竹管状工具で弧状沈線の区画を施し、区画内に竹管状工具で相互刺突を付け、下に鋸歯状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2740)は波状口縁から地文に竹管状工具で条線を付け、波状口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、区画内に竹管状工具で相互刺突を付け、下に連弧状の沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2741)は口縁から地文に格子状の条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、区画内に竹管状工具で相互刺突を施し、下に竹管状工具で連弧状の沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2742・2743)は口縁から地文に条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、区画内に半截竹管状工具で相互刺突を施し、下に半截竹管状工具で沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2744)は口縁から地文に半截竹管状工具で縦位条線を施し、口縁に沿って半截竹管状工具の横位沈線で区画し、沈線区画内に半截竹管状工具で相互刺突を施し、下に半截竹管状工具で横位沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2745)は口縁に沿って地文に半截竹管状工具で縦位条線を付け、半截竹管状工具の横位沈線で区画を施し、区画内に竹管状工具で相互刺突を付け、下に半截竹管状工具で連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2746)は波状口縁から地文に条線を付け、半截竹管状工具で波状と横位沈線で区画し、区画内に竹管状工具で相互刺突を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2747)は波状口縁から地文に半截竹管状工具の条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具で横位区画し、区画内に竹管状工具の相互刺突を施し、下に連弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2748)は波状口縁に沿って沈線で区画し、区画内に竹管状工具で刺突を付け、下に小波状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2749)は地文に半截竹管状工具で縦位条線を付け、半截竹管状工具で横位に区画し、区画内に竹管状工具で刺突を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2750)は地文に縦位の条線を付け、半截竹管状工具で横位に区画し、区画内に半截竹管状工具で刺突を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2751)は口縁に沿って沈線で区画し、区画内に竹管状工具で刺突を付け、下に半截竹管状工具で横位沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2752)は口唇部に刺突を付け、口縁部に沿って沈線で区画し、区画内に竹管状工具で刺突を施し、下に弧状沈線で区画した東鎌塚原式土器である。(第225図2753)は口縁部から地文に半截竹管状工具で縦位の条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、区画内に竹管状工具で相互刺突を付け、下に連弧状沈

線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2754) は口縁部から地文に竹管状工具の条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具の沈線で区画し、区画内に竹管状工具で刺突を付け、下に連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2755) は口縁に沿って横位に沈線を付け、沈線に沿って棒状工具で刺突を施し、下に連弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2756) は口縁から地文に条線を付け、口縁に沿って横位に沈線を施し、弧状沈線で区画した中に半截竹管状工具で刺突を付け、半截竹管状工具の連弧状と渦巻き状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2757・2758) は口縁から地文に条線を横位と縦位に付け、口縁に沿って弧状沈線で区画し、区画内に竹管状工具で横位に刺突を施し、下にも連弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(2758) は器厚が薄手である。(第225図2759) は口縁から地文の条線を縦位に付け、口縁に沿って横位沈線を上下に施し、沈線に接するように半截竹管状工具で縦位の刺突を付け、弧状沈線で区画した東鎌塚原式土器である。(第225図2760) は地文に条線を縦位に付け、口縁に沿って横位沈線を施し、横位沈線に接するように竹管状工具で刺突を付け、下に半截竹管状工具で連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器で薄手である。(第225図2761) は口縁部に沿って横位の沈線を施し、沈線に沿って棒状工具で刺突を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2762) は口縁部に沿って弧状の沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2763) は口縁部に沿って半截竹管状工具で横位の沈線を付け、区画した中に連続爪形文を施し、下に沈線で連弧文を付けた東鎌塚原式土器である。(第225図2764) は波状口縁に沿って半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、区画内に斜位に沈線を付け、下に半截竹管状工具で横位沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2765) は地文に半截竹管状工具で縦位の条線を付け、竹管状工具の沈線で区画し、区画内に竹管状工具で刺突を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2766) は波状口縁の地文に条線を付け、口縁部に沿って半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、区画内に半截竹管状工具で連続の押し引きを付けた東鎌塚原式に近似した土器である。(第225図2767) は地文に半截竹管状工具で斜位に条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具で刺突を施し、竹管状工具の弧状沈線で区画した東鎌塚原式土器である。(第225図2768) は風化しているが、口縁部に沿って竹管状工具で斜位に刺突を付け、下に半截竹管状工具で弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2769・2770) は口縁部から地文に半截竹管状工具で斜位に条線を付け、半截竹管状工具で連弧状の沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2771) は地文に半截竹管状工具で斜位に条線を付け、半截竹管状工具で横位と波状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2772) は地文に半截竹管状工具で斜位条線を付け、半截竹管状工具で連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2773) は地文に竹管状工具で斜位に条線を付け、半截竹管状工具で連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第225図2774) は地文に半截竹管状工具で縦位条線を付け、半截竹管状工具で横位と連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。

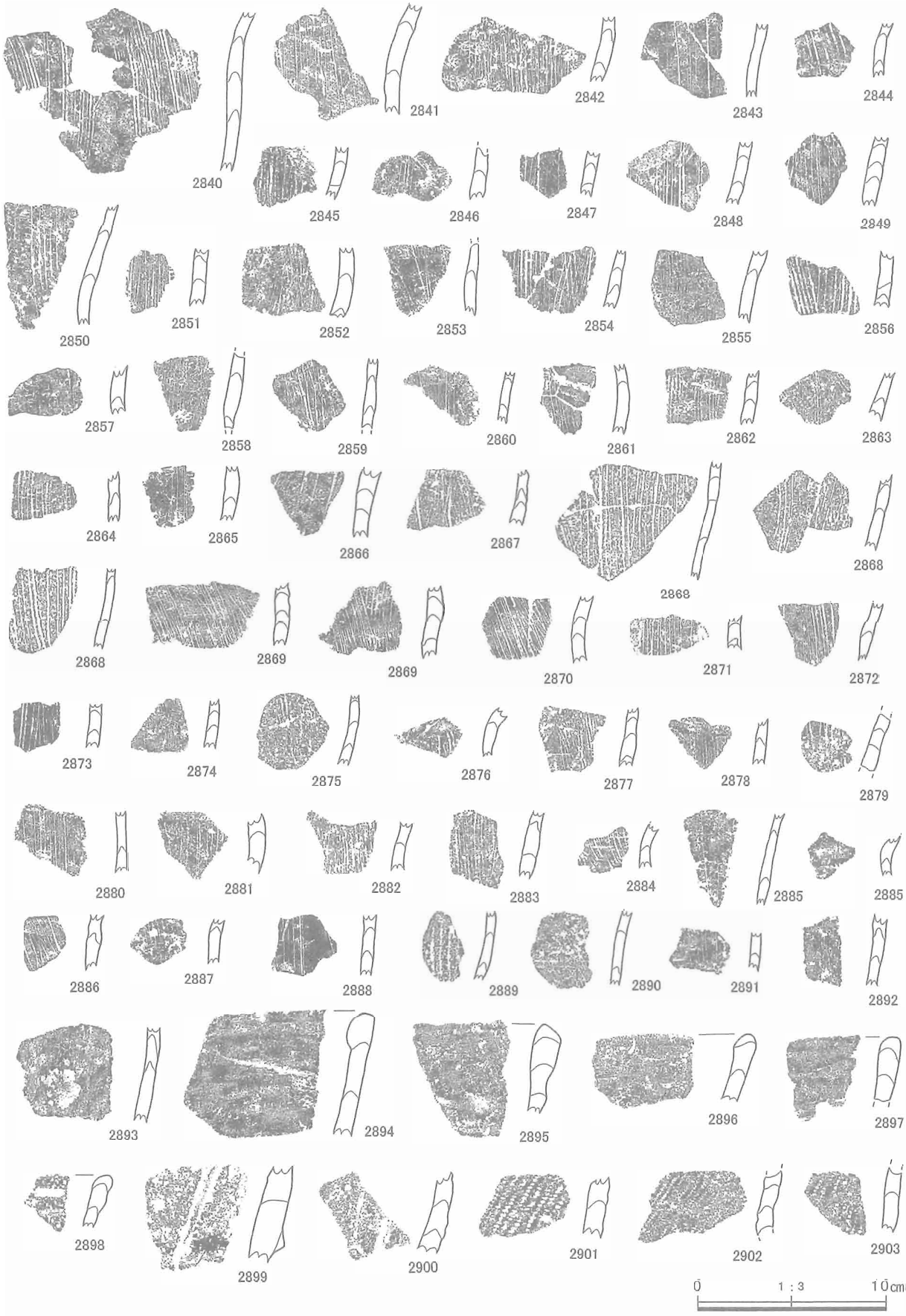
(第226図2775・2777) は口縁部から地文に半截竹管状工具で縦位に条線を付け、口縁に沿って同一工具で波状沈線と連弧文状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2776) は口縁部から地文に竹管状工具で縦位に条線を付け、口縁に沿って同一工具で横位沈線と連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2778) は地文に半截竹管状工具で縦位に条線を付け、同一工具で横位や波状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2779) は地文に半截竹管状工具で縦位に条線を付け、同一工具で横位や波状に沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2780) は波状口縁の口唇部から半截竹管状工具で斜位に条線を付け、同一工具で弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2781) は地文に竹管状工具で斜位条線を付け、同一工具で横位と波状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2782) は口縁から竹管状工具で斜位に条線を付け、同一工具で横位と弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2783) は波状口縁に半截竹管状工具で斜位に条線を付け、同一工具で楕円形の沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2784) は波状口縁に半截竹管状工具で粗い格子状の条線を付け、



第226図　遺構外出土遺物46

同一工具で弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2785) は波状口縁にヘラ状工具で粗い格子状の条線を付け、同一工具で弧状と波状の沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2786) は口縁から半截竹管状工具で斜位と縦位に条線を付け、半截竹管状工具で連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2787) は口縁から半截竹管状工具で斜位に条線を付け、弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2788) は口唇部からヘラ状工具で縦位に条線を付け、半截竹管状工具で横位と連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2789・2805) は口縁部から地文に竹管状工具で縦位の条線を付け、半截竹管状工具で横位と連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2790) は口縁部から地文に条線を付け、半截竹管状工具で連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2791) は口縁部から地文に条線を付け、半截竹管状工具で横位と連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2792) は波状口縁に沿って沈線を横位と弧状に付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2793～2795) は波状口縁からヘラ状工具で地文に沈線を付け、半截竹管状工具で横位の沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2796) は口唇部に竹管状工具で刺突を付け、口縁から地文に縦位と横位に条線を施して、横位、斜位、連弧に沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2797) は口唇部に条の太さ約0.4㎝のＲＬの縄文を付け、地文に細い条線を横位に施し、竹管状工具で弧状に沈線を付けた東鎌塚原式に近い土器である。(第226図2798) は地文に縦位の条線を付け、口縁に沿って半截竹管状工具で弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2799・2800) は波状口縁に沿って半截竹管状工具で弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2801) は口縁から半截竹管状工具で弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2802) は口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線を付け、同一工具で鋸歯状の沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2803) は口縁部から弧状と斜位に沈線を付けた東鎌塚原式に近い土器である。(第226図2804) は口縁部から地文に条線を付け、半截竹管状工具で連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2806) は口縁部から地文に斜位の条線を付け、口縁に沿って連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2807) は口縁部から地文に斜位の条線を付け、口縁に沿って横位沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2808) は口唇部にヘラ状工具で刺突を付け、横位と弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2809) は横位に隆帯を貼り付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2810) は斜位に沈線が付いた東鎌塚原式土器である。(第226図2811) は半截竹管状工具で刺突を付け、横位沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2812) は横位沈線を付け、半截竹管状工具で刺突を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2813) は地文に縦位条線を施し、横位に隆帯を波状に貼り付けた東鎌塚原式に近い土器である。(第226図2814) は地文に半截竹管状工具で縦位条線を付け、弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2815) は地文に半截竹管状工具で横位と斜位の格子状条線を付け、同一工具で連弧と波状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2816) は地文に半截竹管状工具で縦位条線を付け、同一工具で弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2817) は地文に竹管状工具で縦位に条線を付け、同一工具で連弧状沈線を施した東鎌塚原式土器である。(第226図2818～2820) は地文に竹管状工具で斜位の条線を施し、同一工具で弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2821) は半截竹管状工具で弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2822・2828) は半截竹管状工具で弧状沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2823) は半截竹管状工具で横位沈線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2824) は半截竹管状工具で斜位と縦位条線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2825～2827・2829・2830) は半截竹管状工具で斜位と縦位条線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2832～2834) は半截竹管状工具で斜位と縦位条線を付けた東鎌塚原式土器である。(第226図2831・2835～2839) は竹管状工具で縦位と斜位条線を付けた東鎌塚原式土器である。

(第227図2840～2848・2850・2851・2853・2855～2862・2864・2865・2868・2871～2883・2885・2887

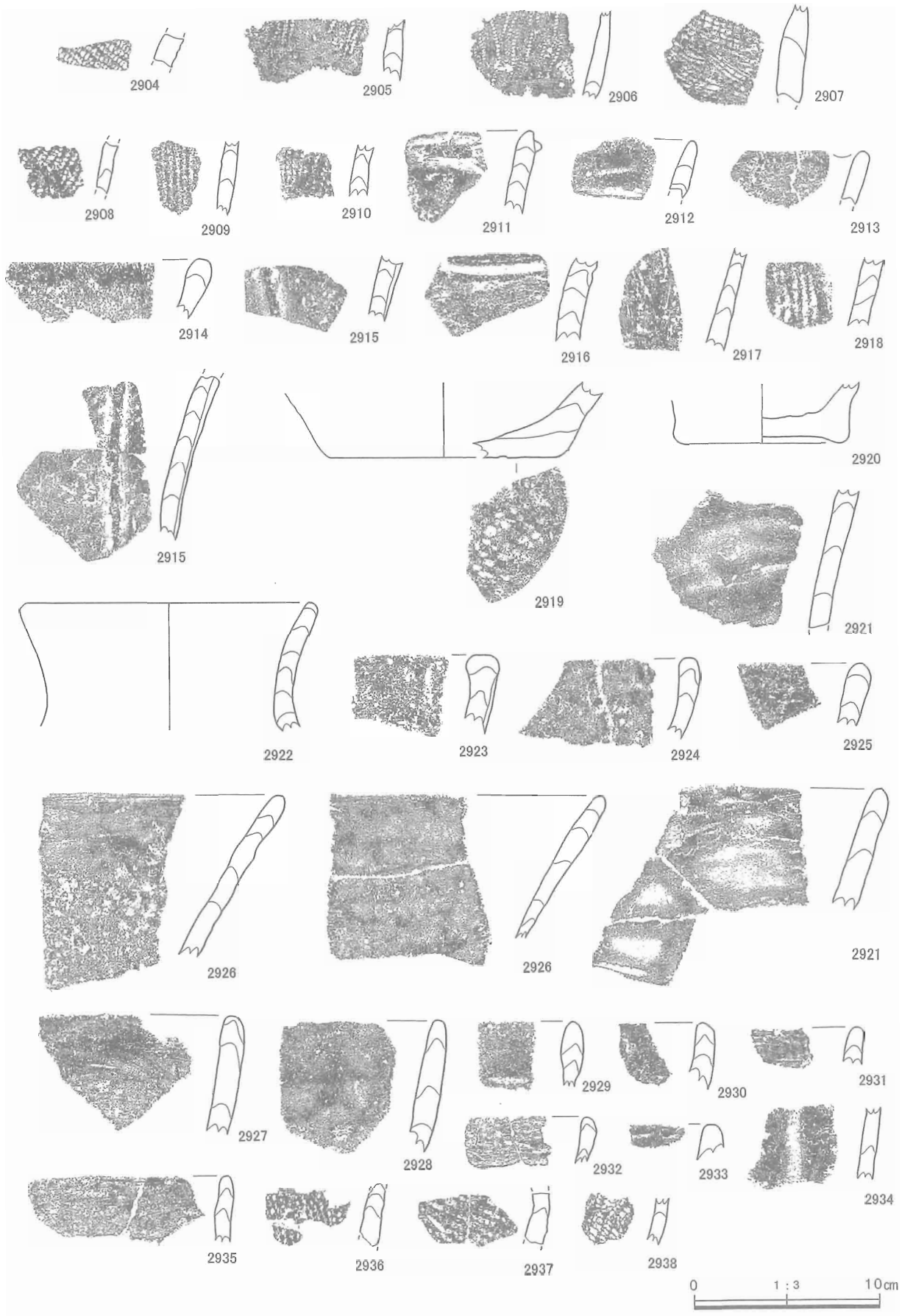


第227図　遺構外出土遺物47

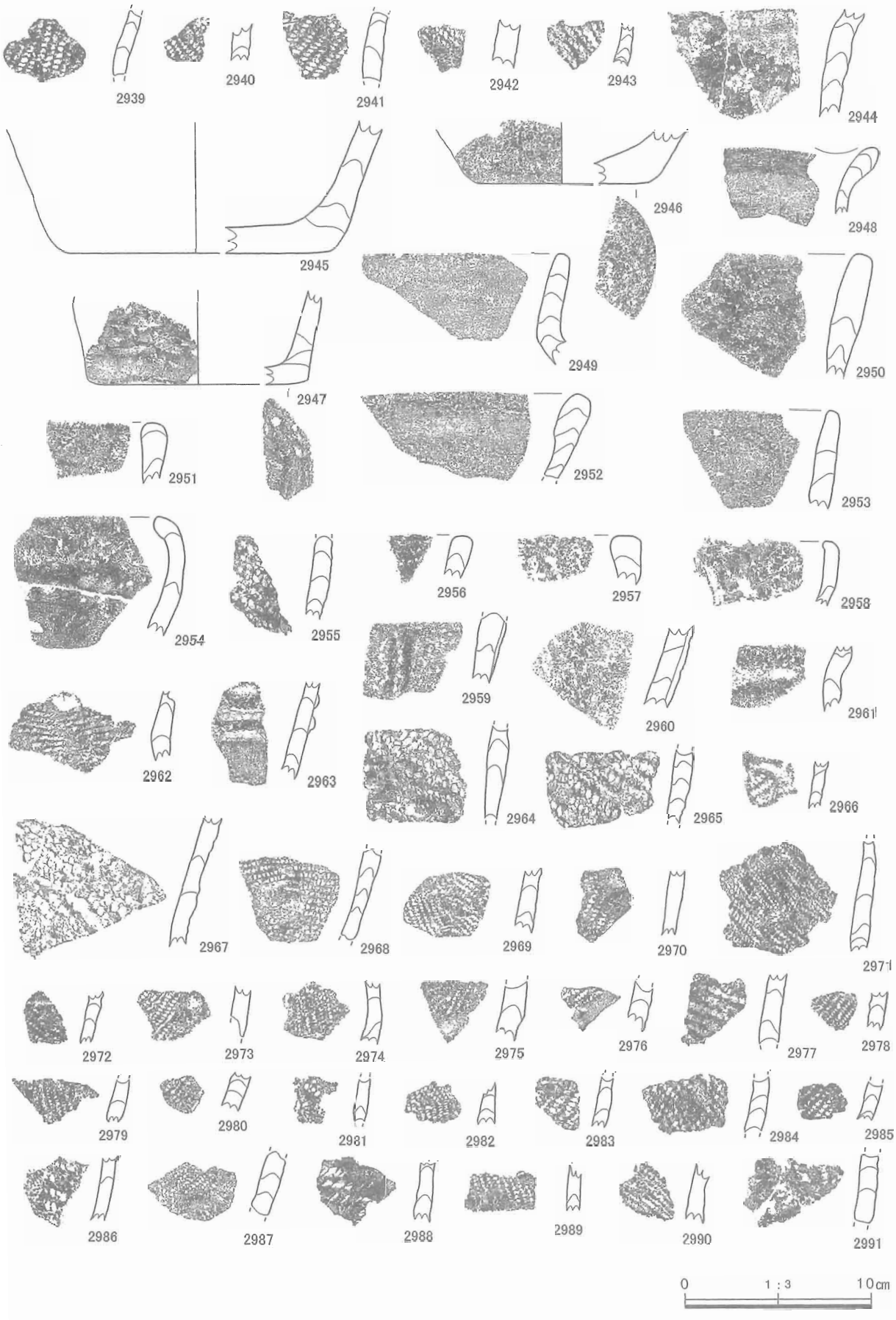
～2891）は地文に半截竹管状工具による縦位条線を付けた東鎌塚原式土器である。（第227図2866・2884・2886・2892）は半截竹管状工具による斜位条線を付けた東鎌塚原式土器である。（第227図2849・2852・2854・2863・2867・2869・2870）は半截竹管状工具による縦位と斜位条線を付けた東鎌塚原式土器である。（第227図2894～2897）は口縁の無文土器で中期後半と思われる土器である。（第227図2893）は無文の東鎌塚原式土器である。（第227図2898）は口縁から条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を横位に施した中期後半と思われる土器である。（第227図2899）は口縁に隆帯を横位に付けた中期後半の土器である。（第227図2900）は隆帯を斜位に付けた中期後半の土器である。（第227図2901）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を斜位に付けた中期後半の土器である。（第227図2902）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期後半の土器である。（第227図2903）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた中期後半の土器である。

（第228図2904）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた中期後半の土器である。（第228図2905）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期後半の土器である。（第228図2906）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を軽く回転した中期後半の土器である。（第228図2907）は条の太さ約0.3cmのＲの縄文付けた中期後半の土器である。（第228図2908）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期後半の土器である。（第228図2909・2910）は縄文を付けた中期後半の土器である。（第228図2911）は口縁部から隆帯を横位に貼り付けた中期後葉の土器である。（第228図2912）は口縁部から半截竹管状工具で横位沈線を付けた中期後葉の土器である。（第228図2913・2914）は口縁部を無文にした中期後葉の土器である。（第228図2915）は縦位に隆帯を付けた中期後葉の土器である。（第228図2916）は半截竹管状工具で横位に沈線を付けた中期後葉の土器である。（第228図2917）は胴部に条線の付いた中期後葉の土器である。（第228図2918）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた中期後葉の土器である。（第228図2919）は底面に網代痕を付けた中期後葉の土器である。（第228図2920）は底面を上げ底にした中期後葉の土器である。（第228図2921）は無文の中期後葉の土器である。（第228図2922）は口縁を無文にした中期末の土器である。（第228図2923）は口縁から隆帯を縦位に付けた中期末の土器である。（第228図2924～2928・2930～2932・2935）は口縁無文の中期末の土器である。（第228図2929）は半截竹管状工具で横位沈線を付けた中期末の土器である。（第228図2933）は口縁から横位に調整痕の付いた中期末の土器である。（第228図2934）は縦位の沈線を付けた中期末の土器である。（第228図2936）は縄文を付けた中期末の土器である。（第228図2937）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期末の土器である。（第228図2938）は条の太さ約0.5cmのＬＲの縄文を付けた中期末の土器である。

（第229図2939・2942）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期末の土器である。（第229図2940）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた中期末の土器である。（第229図2941・2982）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた中期末の土器である。（第229図2943）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期末の土器である。（第229図2944）は無文の中期末の土器である。（第229図2945～2947）は無文の底部で中期末の土器である。（第229図2948）は無文口縁で中期の土器である。（第229図2949）は無文土器の口縁で胴部との境が外反した中期末の土器である。（第229図2950～2954・2956・2958）は無文の口縁で胴部との境が外反した中期の土器である。（第229図2955）は条の太さ約0.6cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。（第229図2957）は口縁から隆帯を付けた中期の土器である。（第229図2959）は微隆起を付けた中期の土器である。（第229図2960）は隆帯を付けた中期の土器である。（第229図2961）は隆帯を付けた中期の土器である。（第229図2962）は条の太さ約0.3cm、長さ約２cmのＬの縄文を付けた中期の土器である。（第229図2963）は曲線と横位隆帯を付けた中期の土器である。（第229図2964・2970・2973・2979・2985・2989）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。（第229図2965・2983・2986）は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。（第229図2966）は隆帯で区画



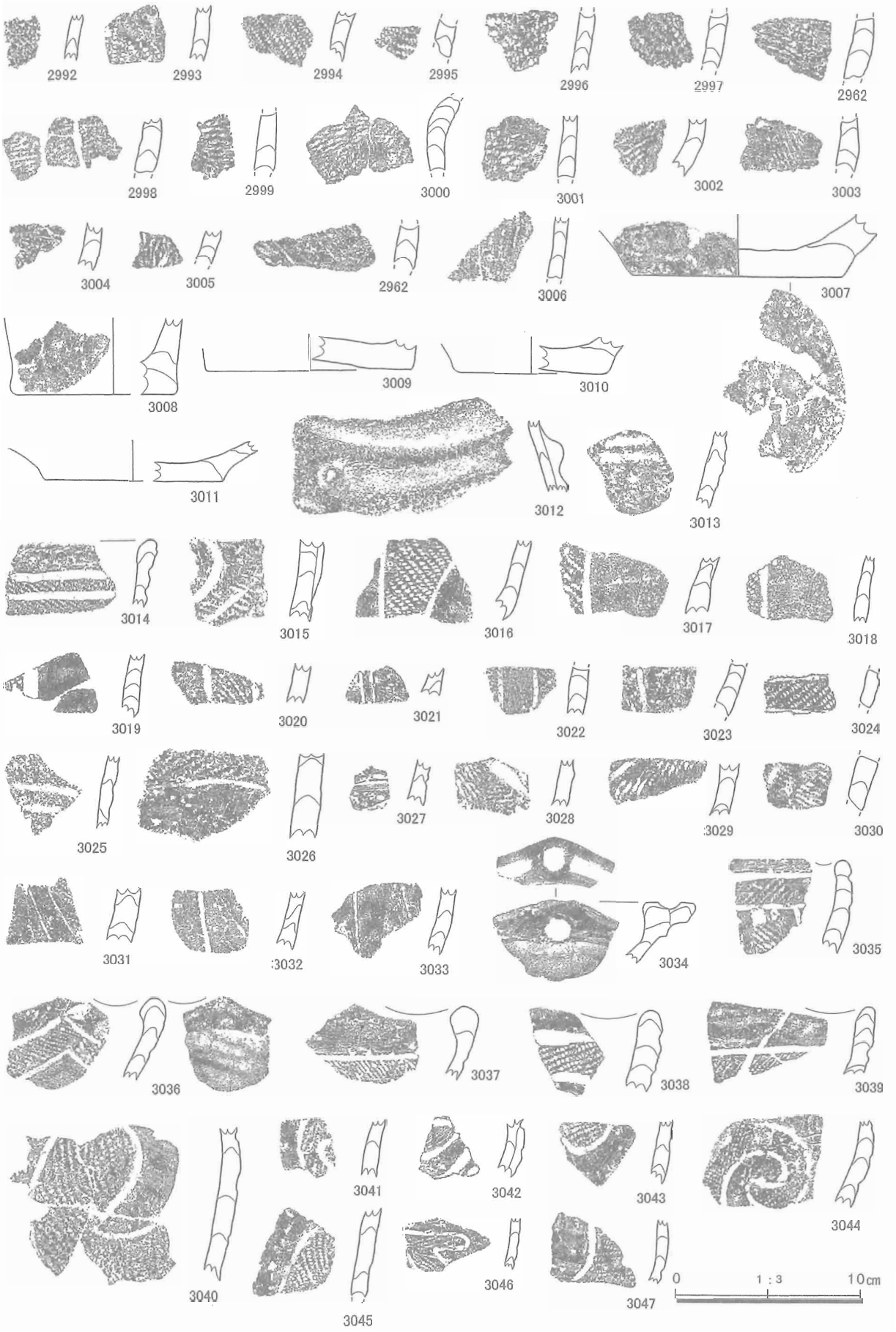
第228図　遺構外出土遺物48



第229図　遺構外出土遺物49

した中に条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2967) は条の太さ約0.6cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2968)は条の太さ約0.4cm、長さ約２cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2969) は条の太さ約0.3cm、長さ約2.2cmのＬＲの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2971・2984) は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2972) は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2974) は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2975)は沈線で区画した中にＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2976) は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2977) は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2978) は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2980) は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2981) は条の太さ約０.4cmのＬＲの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2987) は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2988) は条の太さ約0.5cmのＬＲの繊維の硬い縄文を付けた中期の土器である。(第229図2990) は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた中期の土器である。(第229図2991) は一部に縄文の付いた中期の土器である。

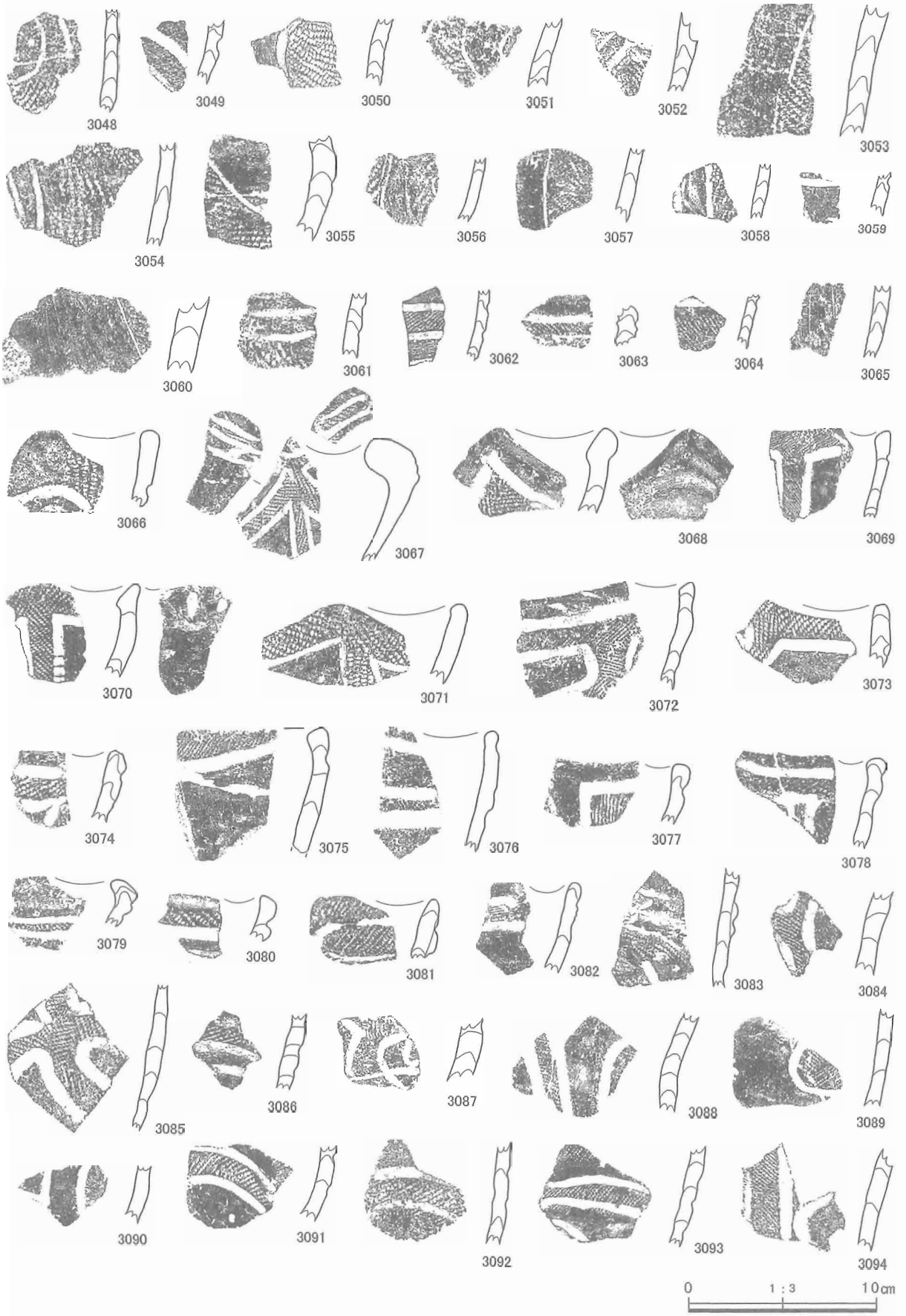
(第230図2992) は縄文の付いた中期の土器である。(第230図2993・2995・2997) は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文の付いた中期の土器である。(第230図2994・3002・3005)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文の付いた中期の土器である。(第230図2996) は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文の付いた中期の土器である。(第230図2962) は (第229図2962) と同一個体の土器である。(第230図2998) は縄文を付けた中期の土器である。(第230図2999・3000) は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付けた中期の土器である。(第230図3001) は条の太さ約0.4cmのＬの縄文を付けた中期の土器である。(第230図3003) は条の太さ約0.2cm、長さ約２cmのＬの縄文を付けた中期の土器である。(第230図3004)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた中期の土器である。(第230図3006) は調整痕が縦位に付いた中期の土器である。(第230図3007～3011) は底部で中期の土器と思われる。(第230図3012) は口縁部に鍔の付いた中期末から後期初頭の鍔付土器で、器壁を薄く作っている。(第230図3013) は半截竹管状工具の横位沈線の下に縄文を付けた加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3014)は口縁から無文にして、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の横位沈線で区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3015)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で渦巻き状の沈線を施した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3016)は条の太さ約0.5cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3017・3018)は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3019) は条の太さ0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位と横位に区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3020)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けて、半截竹管状工具で縦位に区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3021) は半截竹管状工具で縦位に区画し、縄文を付けた加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3022)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3023)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3024)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で横位に区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3025) は縄文を付け、半截竹管状工具で横位に沈線を施し、区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3026)は条の太さ0.4cmのＬＲ縄文を付け、半截竹管状工具で横位に沈線を施し区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3027) は縄文を付け半截竹管状工具で横位に沈線を施し、区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。(第230図3028) は条の太さ約0.2cmのＬの縄文を付け、半截竹管状工具で区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。



第230図　遺構外出土遺物50

（第230図3029）は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。（第230図3030）は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。（第230図3031）半截竹管状工具の沈線で区画した中に縄文を付けた加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。（第230図3032・3033）は半截竹管状工具の沈線で弧状に区画した加曽利Ｅ４式から称名寺式土器である。（第230図3034）は口唇部に玉だき文風を付け、口縁に円形の窪み文様を施した称名寺式土器である。（第230図3035）は条の太さ約０.3cmのＬの縄文を付けて、半截竹管状工具の沈線で横位と縦位に区画した称名寺式土器である。（第230図3036）は波状口縁に沿って、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けて、半截竹管状工具の沈線で山形に区画した称名寺式土器である。（第230図3037）は波状口縁に半截竹管状工具で横位に区画して、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた称名寺式土器である。（第230図3038）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で横位に区画して、区画内に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた称名寺式土器である。（第230図3039）は波状口縁に横位沈線を付け区画し、区画内に縄文を施した称名寺式土器である。（第230図3040）は半截竹管状工具の沈線で渦巻き状に区画した中に、条の太さ0.5cmのＲＬの縄文を付けた称名寺式土器である。（第230図3041）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した称名寺式土器である。（第230図3042）は条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した称名寺式土器である。（第230図3043・3047）は半截竹管状工具の弧状沈線で区画した中に、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた称名寺式土器である。（第230図3044）は半截竹管状工具の沈線で渦巻きを付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施した称名寺式土器である。（第230図3045）は条の太さ約0.5cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した称名寺式土器である。（第230図3046）は沈線でＪ状に区画した中に条の太さ約0.5cmのＬＲの縄文を付けた称名寺式土器である。

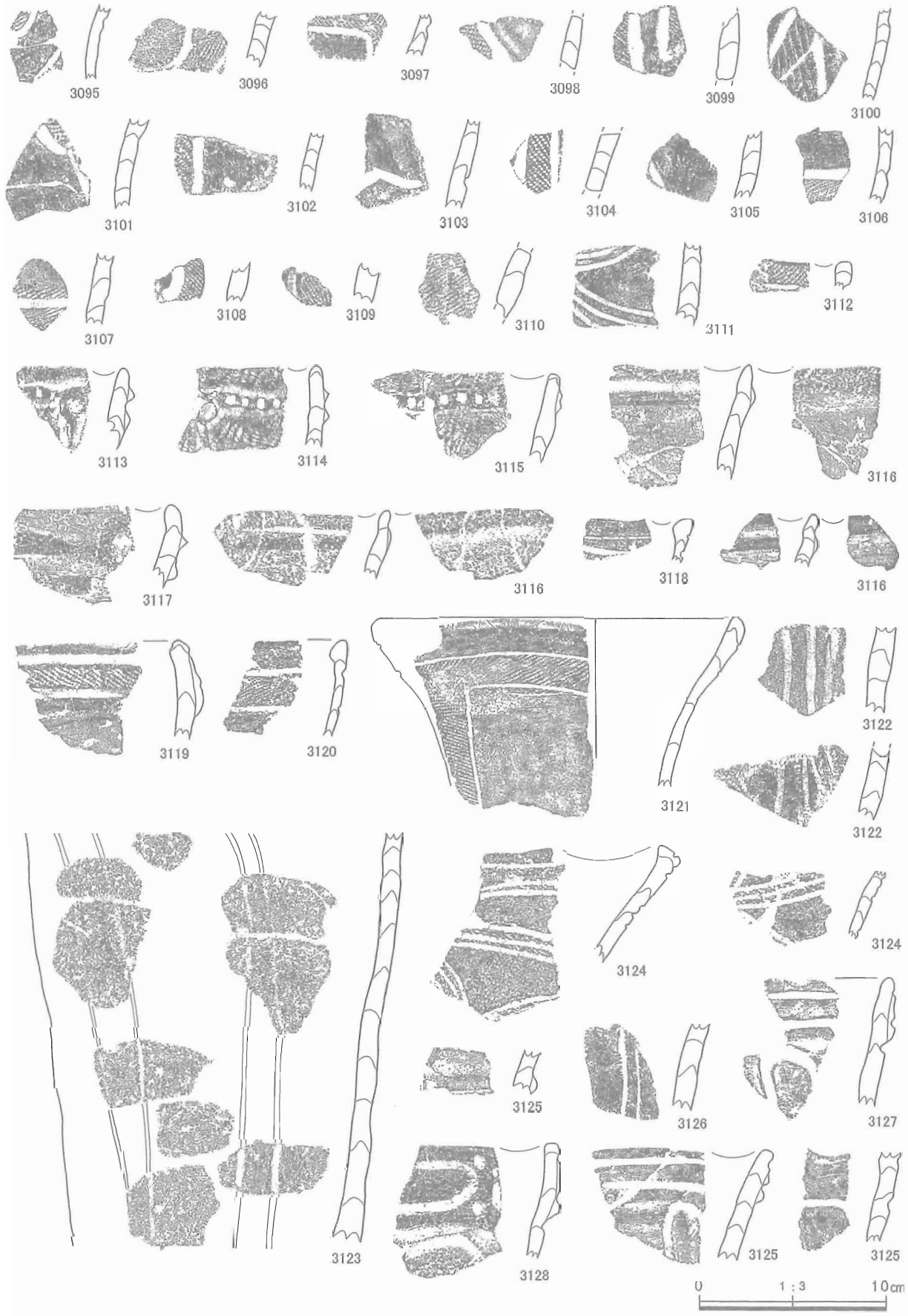
（第231図3048・3055）は半截竹管状工具の弧状沈線で区画した中に、条の太さ0.3cmのＬＲの縄文を付けた称名寺式土器である。（第231図3049・3062）は条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線や横位沈線を施した称名寺式土器である。（第231図3050・3053）は半截竹管状工具の弧状沈線や縦位沈線で区画した中に、条の太さ0.4cmのＬＲの縄文を付けた称名寺式土器である。（第231図3051）は縄文を付けて半截竹管状工具の弧状沈線で区画した称名寺式土器である。（第231図3052）は半截竹管状工具の弧状沈線で区画した中に、条の太さ0.3cmのＬの縄文を付けた称名寺式土器である。（第231図3054）は条の太さ約0.3cm、長さ約2.2cmのＲＬの縄文を付けて、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した称名寺式土器である。（第231図3056～3058）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の弧状沈線や縦位沈線で区画した称名寺式土器である。（第231図3059）は半截竹管状工具の横位沈線で区画した称名寺式土器である。（第231図3060）は斜位沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた称名寺式土器である。（第231図3061）は半截竹管状工具で弧状沈線を付け、条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を施した称名寺式土器である。（第231図3063）は口縁に沿って半截竹管状工具の横位沈線で区画した中に、条の太さ0.2cmのＬＲの縄文を付けた称名寺式土器である。（第231図3064）は半截竹管状工具の横位沈線で区画した中に、条の太さ0.2cmのＲＬの縄文を付けた称名寺式土器である。（第231図3065）は半截竹管状工具で縦位沈線を付けた称名寺式土器である。（第231図3066）は条の太さ0.5cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で弧状沈線を施した中津式土器である。（第231図3067）は口唇部を内反させ波状にして、条の太さ0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を施し、半截竹管状工具で区画した中にＲＬの縄文を施した中津式土器である。（第231図3068・3073・3074・3077）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を付け、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を施した中津式土器である。（第231図3069・3072・3075・3076・3081）は波状口縁に半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を付けた中津式土器である。（第231図3070）は波状口縁の内側に半截竹管状工具



第231図　遺構外出土遺物51

の沈線を付け、表面に条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を施し、半截竹管状工具の沈線と結節状沈線で区画した中津式土器である。(第231図3071)は波状口縁に条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画し、ＲＬの縄文を施した中津式土器である。(第231図3078)は波状口縁に縄文を付けた中津式土器である。(第231図3079)は波状口縁で内湾しており、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の弧沈線で区画した中津式土器である。(第231図3080)は条の太さ約0.2cmと約0.4cmのＬの条を撚り、条の太い原体と細い原体を撚り合わせたＲＬ縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第231図3082)は波状口縁に条の太さ約0.1cmのＬの縄文を付け、半截竹管状工具の横位沈線で区画した中津式土器である。(第231図3083)は隆線を弧状に貼り付け、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を施し、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第231図3084)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第231図3085)は半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中津式土器である。(第231図3086)は半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＬの縄文を付けた中津式土器である。(第231図3087)は半截竹管状工具の弧状沈線や渦巻き沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた中津式土器である。(第231図3088・3089・3093・3094)は条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線や弧状沈線で区画した中津式土器である。(第231図3090)は半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.1cmのＲＬの縄文を付けた中津式土器である。(第231図3091)は半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、条の太さ約0.1cmと約０.3cmのＲの条を撚り、条の太い原体と細いＬＲ縄文原体を撚って付けた中津式土器である。(第231図3092)は半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた中津式土器である。

(第232図3095・3097・3098)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第232図3105・3106)は条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第232図3096・3101・3102・3104・3107～3109)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第232図3099)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第232図3100)は条の太さ約0.1cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第232図3103)は条の太さ約0.1cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した中津式土器である。(第232図3110)は条の太さ約0.1cmのＬの縄文を付けた中津式土器である。(第232図3111)は半截竹管状工具で弧状沈線を付けた掘之内Ⅰ式土器である。(第232図3112)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した後期初頭土器である。(第232図3113～3115)は同一個体の可能性もある。波状口縁に沿って横位隆帯、縦位隆帯、円形隆帯などを貼り付け、隆帯上部に半截竹管状工具で刺突を付け、条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を施した掘之内Ⅰ式土器である。(第232図3116)は波状口縁に沿って横位隆帯を貼り付けた掘之内Ⅰ式土器である。(第232図3117)は波状口縁に沿って横位隆帯と円形隆帯に貼り付けた掘之内Ⅰ式土器である。(第232図3118)は波状口縁に沿って竹管状工具で弧状沈線を付けた掘之内Ⅰ式土器である。(第232図3119)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の横位沈線で区画した掘之内Ⅰ式土器である。(第232図3120・3121)は条の太さ0.1cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の横位沈線で区画した掘之内Ⅰ式土器である。(第232図3122)は半截竹管状工具で縦位や弧状沈線を付け、一部に条の太さ0.3cmのＲＬの縄文を施した掘之内Ⅰ式土器である。(第232図3123・3126)は胴部に半截竹管状工具で縦位沈線を付けた林ノ峰Ⅱ式土器である。(第232図3124)は口縁部を内反させ半截竹管状工具の沈線を施し、幅の狭い沈線内に条の太さ約0.1cmのＲＬの縄文を付けた福田Ｋ２式土器である。(第232図3125・3127)は横位隆帯や半截竹管状工具の横位沈線、逆Ｕ状沈線を付けた林ノ峰Ⅱ式土器である。(第232図3128)は口縁部に半截竹管状工具で楕円形の沈線と



第232図　遺構外出土遺物52

円形刺突を付けた林ノ峰Ⅱ式土器である。

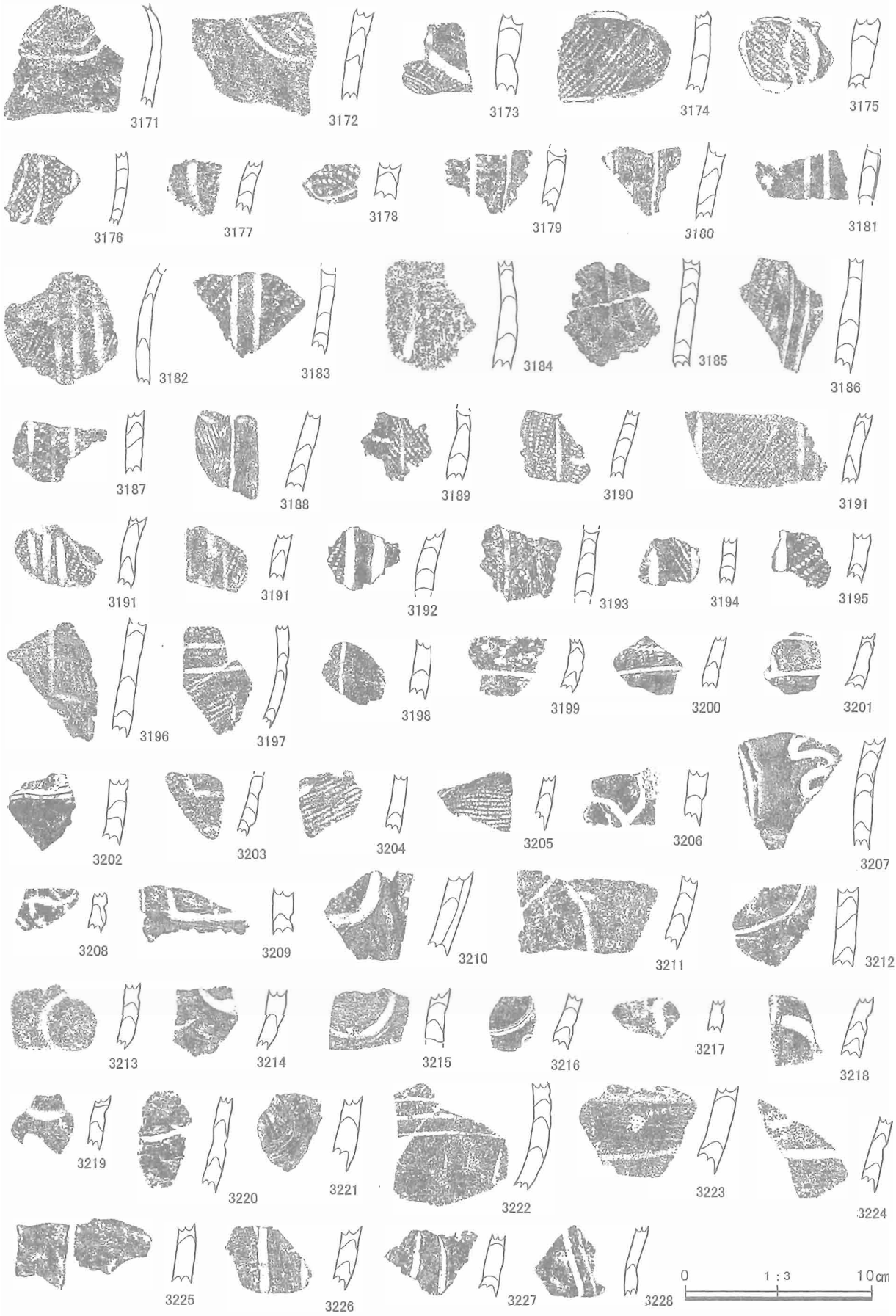
（第233図3129）は沈線を縦位に付けた林ノ峰Ⅱ式と思われる土器である。（第233図3130）は半截竹管状工具で縦位沈線を付けた林ノ峰Ⅱ式併行と思われる土器である。（第233図3131）は口唇部に沿って半截竹管状工具の沈線と竹管状工具の円形刺突を付け、表面に円形刺突と横位と弧状沈線を付けた後期前半の土器である。（第233図3132）は波状口縁に沿って隆帯を貼り、隆帯に沿って沈線と隆帯上部に竹管状工具で連続円形刺突を付けた後期前半の土器である。（第233図3133）は波状口縁の下に半截竹管状工具の弧状沈線で区画し、区画内に竹管状工具で刺突を付けた後期前半の土器である。（第233図3134）は波状口縁の頂点を平円形にして、中心に深い円形の刺突を付け、下に縦位の三叉状文様を施した後期前半の土器である。（第233図3135）は表面が風化しており、波状口縁の頂点に半截竹管状工具の沈線と刺突を付け、下に渦巻き沈線を付け縄文を施していると思われ、内面の波頂部に円形に沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3136）は口唇部に円形の窪みを付け、半截竹管状工具の弧状沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3137）は波状口縁に沿って半截竹管状工具で沈線を付け、波頂部から縦に円形刺突を施して、内面波頂部にも円形刺突の付いた後期前半の土器である。（第233図3138）は波状口縁の口唇部に竹管状工具で刻みを付け、口縁に沿って山形に半截竹管状工具で押し引き風沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3139）は波状口縁の口唇部に刻みを付け、口縁に半截竹管状工具で山形沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3140）は波状口縁に半截竹管状工具の沈線で区画した中に円形沈線を付け、下に半截竹管状工具の沈線で区画し、条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を施した後期前半の土器である。（第233図3141）は波状口縁に沿って沈線区画し、条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を施した後期前半の土器である。（第233図3142）は波状口縁に沿って沈線を付け、下に渦巻き状の沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3143）は半截竹管状工具で円形や弧状沈線を付け区画し、縄文を施した後期前半の土器である。（第233図3144）は半截竹管状工具で弧状沈線を付け区画し、中に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施した後期前半の土器である。（第233図3145）は繊維の粗い条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で弧状区画した後期前半の土器である。（第233図3146）は口縁部に条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の横位沈線で区画した後期前半の土器である。（第233図3147）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の横位沈線と弧状沈線で区画した後期前半の土器である。（第233図3148）は口縁から半截竹管状工具で弧状沈線を付け、縄文を施した後期前半の土器である。（第233図3149）は口縁に条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で横位と弧状沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3150）は口縁に条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3151）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3152）は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付け、半截竹管状工具で横位沈線を施した後期前半の土器である。（第233図3153・3154）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半の土器である。（第233図3155）は波状口縁から条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第233図3156）は口唇部に弧状の沈線を付けた後期前半の土器である。（第233図3157）は口唇部に沿って半截竹管状工具で沈線を付けた後期前半の土器である。（第233図3158・3159）は口縁部に沿って半截竹管状工具で沈線を付けた後期前半の土器である。（第233図3160）は口縁部に沿って半截竹管状工具で横位沈線と弧状沈線を付け、一部に約0.3cmのＬＲの縄文を施した後期前半の土器である。（第233図3161）は口縁部と胴部の境に幅広の横位隆帯を付け、隆帯上部に棒状工具で刺突を付けた後期前半の土器である。（第233図3162）は横位隆帯を付け、隆帯上部に刺突を付けた後期前半の土器である。（第233図3163）は隆帯を付けた後期前半の土器である。（第233図3164）は口縁部を内反させて、条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半の土器であ

第233図　遺構外出土遺物53

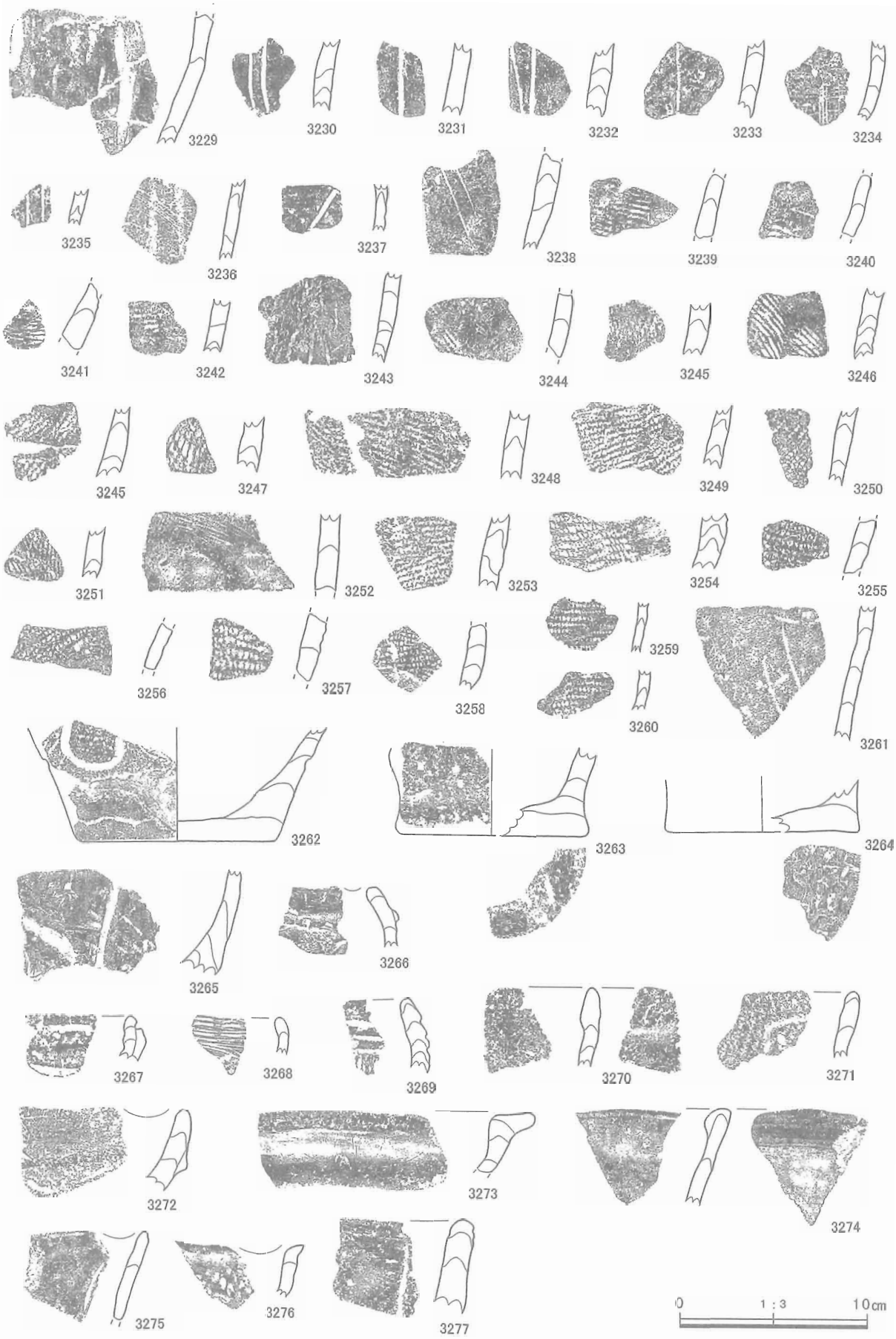
る。(第233図3165)は口縁部と胴部の境に隆帯を付け、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を施した後期前半の土器である。(第233図3166)は半截竹管状工具の沈線で区画した中に、条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた後期前半の土器である。(第233図3167)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で区画した後期前半の土器と思われる。(第233図3168)は条の太さ約0.1cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で区画した後期前半の土器である。(第233図3169・3170)は半截竹管状工具で弧状沈線を付けた後期前半の土器である。

(第234図3171・3172)は縄文を付け半截竹管状工具の沈線で弧状に区画した後期前半の土器である。(第234図3173)は弧状沈線で区画し、条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた後期前半の土器である。(第234図3174)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、沈線で楕円形に区画した後期前半の土器である。(第234図3175)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、沈線で楕円形に区画した後期前半の土器である。(第234図3176・3178)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半の土器である。(第234図3177・3190・3213)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半の土器である。(第234図3179・3180)は半截竹管状工具の縦位沈線で区画した後期前半の土器である。(第234図3181)は半截竹管状工具で縦位に沈線を施し区画した後期前半の土器である。(第234図3182・3185・3186・3191・3197)は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半の土器である。(第234図3183)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具の縦位沈線で区画した後期前半の土器である。(第234図3184)は半截竹管状工具の沈線で縦位と横位に区画し、縄文を付けた後期前半の土器である。(第234図3187)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した後期前半の土器である。(第234図3188)は条の太さ約0.2cmのＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した後期前半の土器である。(第234図3189・3194・3196・3201)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した後期前半の土器である。(第234図3192・3193)は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した後期前半の土器である。(第234図3195・3200・3211)は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位に区画した後期前半の土器である。(第234図3198)は条の太さ約0.1cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で縦位沈線を付けた後期前半の土器である。(第234図3199)は横位沈線を付けた後期前半の土器である。(第234図3202・3203)は縄文を付け半截竹管状工具の沈線で区画した後期前半の土器である。(第234図3204・3205)は条の太さ約0.2cmのＬＲの縄文を付けた後期前半の土器である。(第234図3206・3208)は半截竹管状工具の波状沈線を付けた後期前半の土器である。(第234図3207)は半截竹管状工具で縦位に区画した中に、縦波状沈線を付けた後期前半の土器である。(第234図3209)は半截竹管状工具で角状沈線で区画した後期前半の土器である。(第234図3210)は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付け、半截竹管状工具の弧状沈線で区画した後期前半の土器である。(第234図3212・3214～3220)は半截竹管状工具の弧状沈線を付けた後期前半の土器である。(第234図3221)は半截竹管状工具で雑に弧状沈線を付けた後期前半の土器である。(第234図3222～3224)は半截竹管状工具で横位沈線を付けた後期前半の土器である。(第234図3225～3228)は半截竹管状工具で縦位や斜位に沈線を付けた後期前半の土器である。

(第235図3229～3235・3237・3238)は竹管状工具で縦位沈線や斜位沈線を付けた後期前半の土器である。(第235図3236)は縦位沈線を竹管状工具で付け、櫛歯状工具の斜位沈線を一部に施した後期前半の土器である。(第235図3239)は条の太さ約0.3cm、長さ約1.5cmのＬＲの縄文を付けた後期前半の土器である。(第235図3240)は縄文を付けた後期前半の土器である。(第235図3241・3242・3247・3251)は条の太さ約0.3cmのＬの縄文を付けた後期前半の土器である。(第235図3243)は粗い沈線を付けたと思われる後期前半の土器である。(第235図3244)は条の太さ約0.3cm、長さ約1.2cmのＬＲの縄文を付けた後期



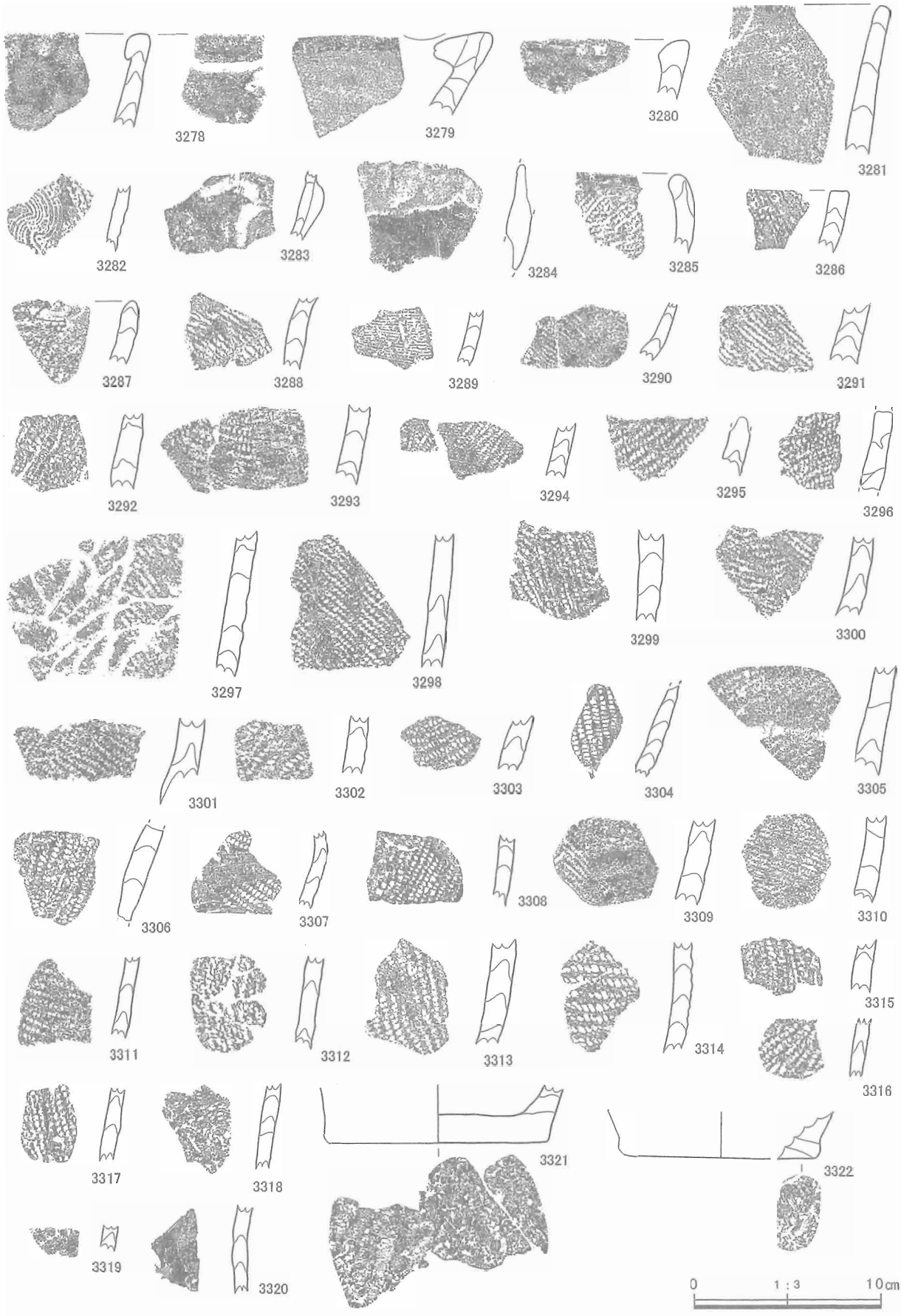
第234図　遺構外出土遺物54



第235図　遺構外出土遺物55

前半の土器である。（第235図3245）は条の太さ約0.2cm、長さ約1.4cmのＬＲの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3246）は条の太さ約0.3cm、長さ約1.8cmのＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3248）は条の太さ約0.4cm、長さ約1.8cmのＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3249・3250）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3252）は条の太さ約0.1cm、条の長さ約1.5cmのＬＲの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3253）は条の太さ約0.3cm、長さ約1.6cmのＬＲの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3254）は条の太さ約0.4cm、長さ約1.5cmのＲＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3255・3256）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3257）は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3258）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3259）は条の太さ約0.3cm、条の長さ約1.6cmのＲＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3260）は条の太さ約0.4cm、条の長さ約1.4cmのＲＬの縄文を付けた後期前半の土器である。（第235図3261）は竹管状工具で斜位沈線を付けた後期前半の土器である。（第235図3262）は底部破片で条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付け、半截竹管状工具で区画した後期前半の土器である。（第235図3263）は張り出した底部で底面に沈線が付いた後期前半の土器である。（第235図3264）は底面に薄く圧痕の付いた後期前半の土器である。（第235図3265）は底面に近い部分に半截竹管状工具で縦位沈線と曲線が付いた後期前半の土器である。（第235図3266・3272）は波状口縁に沿って隆帯を付けた時期不明土器である。（第235図3267）は波状口縁に沿って幅広の隆帯を付けた時期不明土器である。（第235図3268）は口縁に沿って竹管状工具で横位条線を付けた時期不明土器である。（第235図3269）は口縁に沿って半截竹管状工具で横位沈線と縦位沈線を付けた時期不明土器である。（第235図3270）は無文で内面に段を付けた時期不明土器である。（第235図3271）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた時期不明土器である。（第235図3273）は口縁部に沿って隆帯を付けた土器で時期不明土器である。（第235図3274）は口縁を無文にして内面の口唇部をふくらめた時期不明土器である。（第235図3275）は弧状沈線を付けた時期不明土器である。（第235図3276）は波状口縁に沿って条の太さ約0.6cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第235図3277）は口縁部を無文にした時期不明土器である。

（第236図3278～3280）は口縁部の表面が無文で内面に段を付けたり、内反させた時期不明土器である。（第236図3281）は口縁部無文の時期不明土器である。（第236図3282）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け、櫛歯状工具で縦位にコンパス状沈線を施した時期不明土器である。（第236図3283）は隆帯を付けた時期不明土器である。（第236図3284）は無文土器で接合部に親指痕を残した時期不明土器である。（第236図3285）は口縁からＲの条の太さ約0.3cmと約0.4cmを撚り合わせたＬＲの縄文を施した時期不明土器である。（第236図3286）は口縁から条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3287・3318）は口縁から縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3288）は条の太さ約0.3cm、長さ約２cmのＲの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3289）は条の太さ約0.1cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3290）は縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3291）は条の太さ約0.4cm、長さ約2.2cmのＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3292）は条の太さ約0.4cmのＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3293）は条の太さ約0.4cm、長さ約1.8cmのＬＲの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3294・3308・3310・3311）は条の太さ約0.3cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3295・3304・3306・3316）は条の太さ約0.5cmのＬＲの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3296・3312・3313・3315）は条の太さ約0.4cmのＬＲの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3297）は条の太さ約0.5cm、長さ約2.1cmのＬＲの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3298）は条の太さ約0.4cm、長さ約２cmのＬＲの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3299・3309）は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図



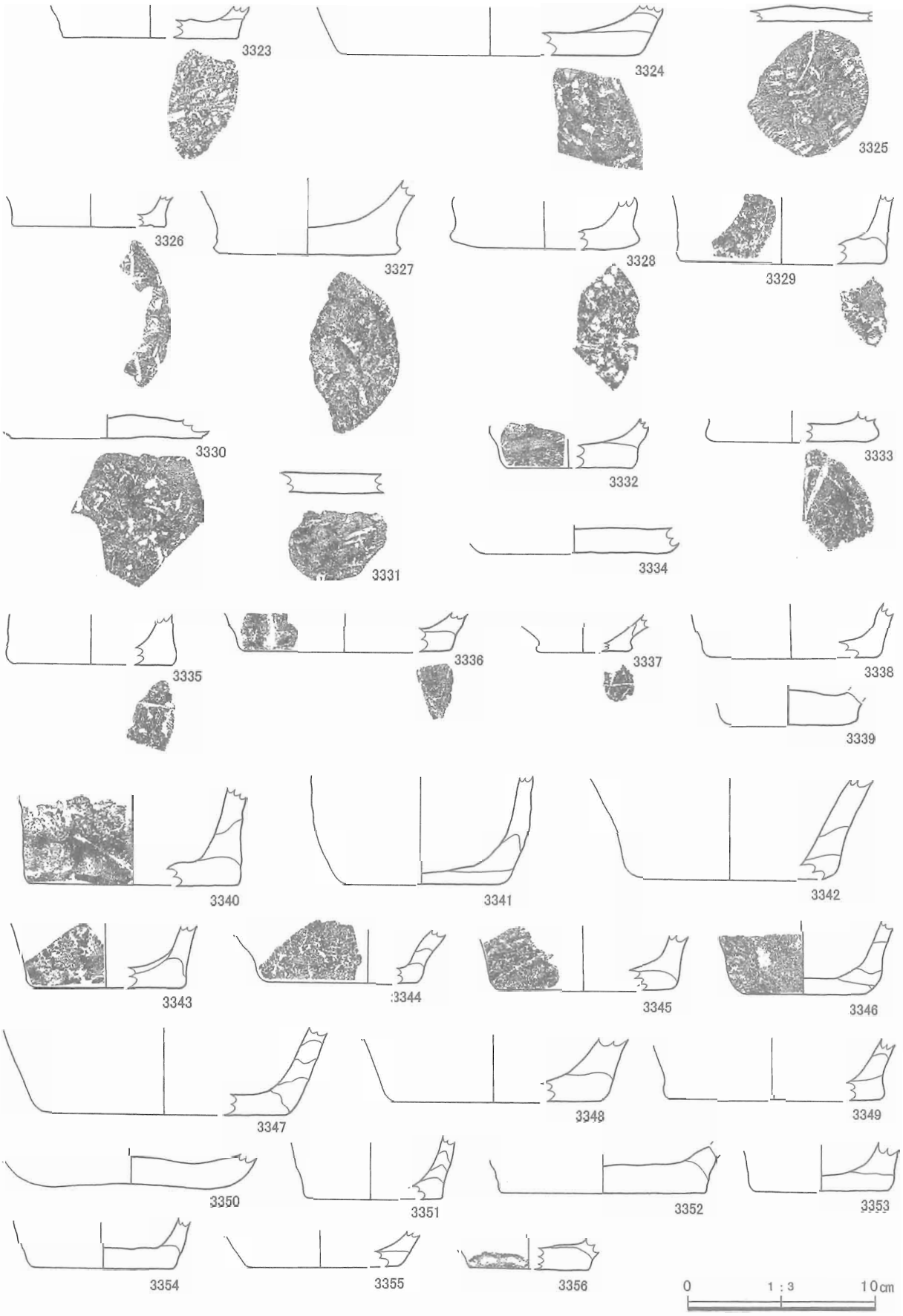
第236図　遺構外出土遺物56

3300）は条の太さ約0.4cm、長さ約1.7cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3301・3305・3317）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3302・3303）は条の太さ約0.5cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3307）は条の太さ約0.4cm、長さ約２cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3314）は条の太さ約0.6cmのＲＬの縄文を付けた時期不明土器である。（第236図3319・3320）は時期不明の無文土器である。（第236図3321・3322）は底面に圧痕がある時期不明の土器である。

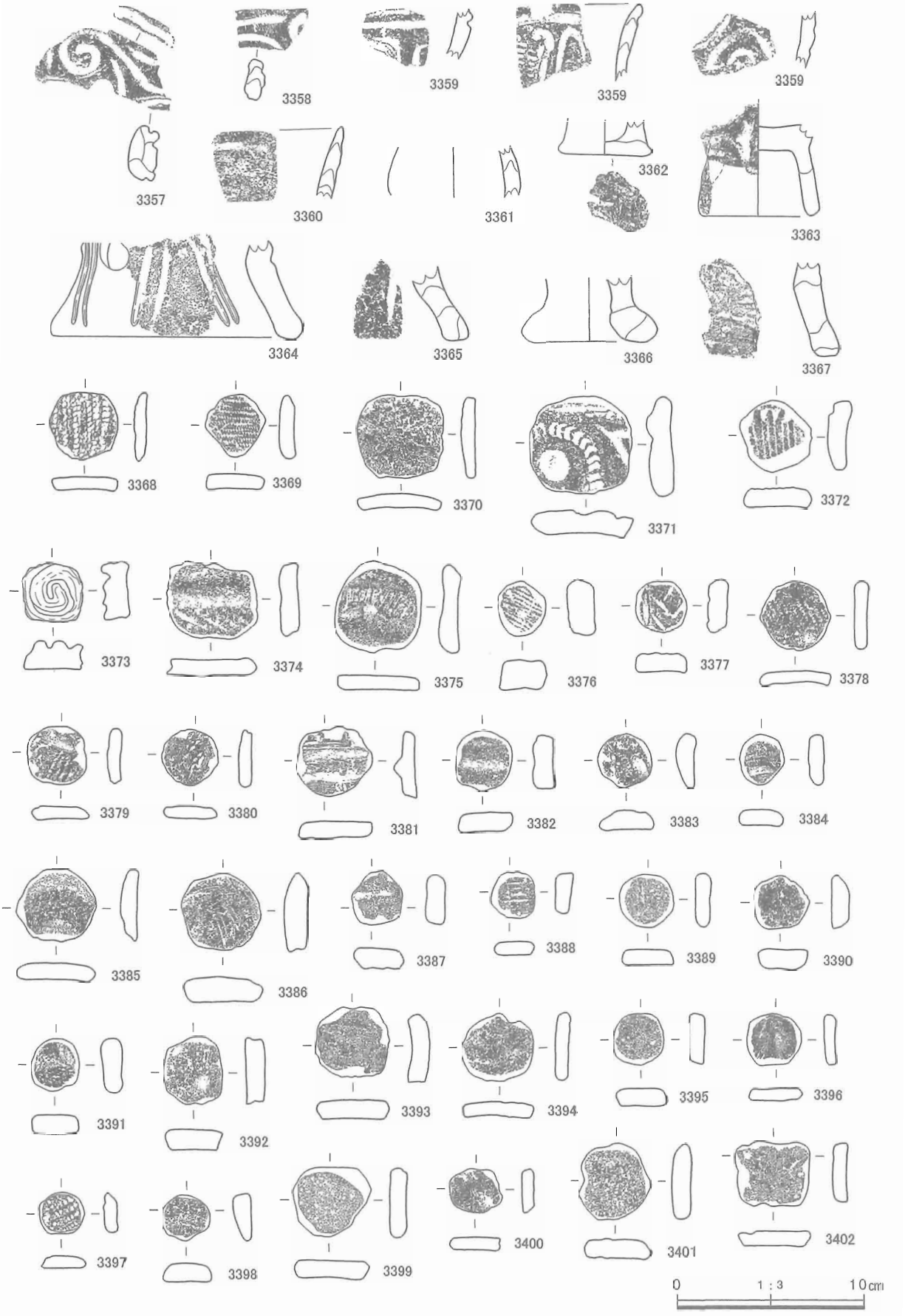
（第237図3323・3325）は底面に網代痕を付けた時期不明の土器である。（第237図3324・3327～3331・3349）は底面に圧痕がある時期不明の土器である。（第237図3326・3333・3335・3337）は底面に木葉痕の付いた時期不明の土器である。（第237図3332・3334・3336・3338～3348・3350～3356）は底部の破片で時期不明の土器である。

（第238図3357・3358）は釣手土器の橋部と思われ、半截竹管状工具で渦巻き沈線を付けた伊那系曽利Ⅱ式土器である。（第238図3359）は口縁から横位沈線や蕨手状沈線、逆Ｕ字状沈線などで区画した中に、竹管状工具の刺突で爪形文を付けたミニチュア土器で曽利Ⅲ式である。（第238図3360）はミニチュア土器の破片で口縁部に沿って半截竹管状工具で横位沈線を付けた加曽利Ｅ４式土器である。（第238図3361）は無文のミニチュア土器の破片で型式不明である。（第238図3362）は無文のミニチュア土器の底部破片で、底面に圧痕が付いており中期の土器である。（第238図3363）は台付き土器の台部の破片で、円形の透かしを施し隆帯を縦位に貼り付けた伊那系曽利Ⅱ式土器である。（第238図3364・3365）は台付き土器の台部の破片で、円形の透かしを施し半截竹管状工具の沈線を縦位に付けた曽利Ⅳ式土器である。（第238図3366・3367）は無文の台付き土器の台部破片で時期不明である。

（第238図3368～3400）は土製円盤である。（第238図3368）は条の太さ約0.4cmのＲＬの縄文を付けて形状が円形に近い。中期中葉の土器で周辺の一部を研磨している。（第238図3369）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けて形状が方形に近い。中期中葉の土器で周辺部を研磨している。（第238図3370）は縄文を付け形状が隅丸方形に近い。中期中葉の土器で周辺全体を研磨している。（第238図3371）は隆帯を貼り付け区画した中に竹管状工具で三角の連続爪形を施し形状が隅丸方形に近い。勝坂式土器で周辺部を打ち欠いている。（第238図3372）は半截竹管状工具で刺突を付け、同一工具で沈線を施して形状が不定形である。曽利Ⅱ式から曽利Ⅲ式土器で周辺部を研磨している。（第238図3373）は高い隆帯を渦巻き状に付けて形状が隅丸方形に近い。曽利Ⅲ式土器で周辺一部を研磨している。（第238図3374）は低い隆帯で区画した中に沈線を付けて形状が方形に近い。曽利Ⅲ式から曽利Ⅳ式土器で周辺一部を研磨している。（第238図3375）は低い隆帯で区画した中に沈線を付けて形状が円形に近い。曽利系土器で周辺一部を研磨している。（第238図3376）は条の太さ約0.2cmのＬの撚糸文を付けて形状が楕円形に近い。曽利Ⅲ式土器で周辺は研磨していない。（第238図3377）は竹管状工具の縦位沈線で区画し、ヘラ状工具でハ状の沈線を付けて形状が円形に近い。曽利Ⅴ式土器で周辺一部を研磨している。（第238図3378）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けて形状が円形に近い。中期末の土器で周辺の一部を研磨している。（第238図3379）は条の太さ約0.4cmのＬの縄文を付けて形状が隅丸方形に近い。中期末の土器で周辺一部を研磨している。（第238図3380）は条の太さ約0.2cmのＲＬの縄文を付けて形状が円形に近い。中期末の土器で周辺を研磨している。（第238図3381）は隆帯と沈線を付けて形状が楕円形に近い。時期不明土器で周辺一部を研磨している。（第238図3382）は隆帯を付けて形状が隅丸方形に近い。時期不明土器で周辺部の全体を研磨している。（第238図3383）は文様不明で形状が円形である。時期不明土器で周辺部全体を研磨している。（第238図3384）は半截竹管状工具の沈線を付けて形状が楕円形に近い。時期不明の土器で周辺部の全体を研磨している。（第238図3385）は弧状隆帯を付けて形状が不定形である。時期不明土器で周辺部の全体を研磨している。（第238図3386）は半截竹管状工具で沈線を付けて形状が円形に近い。時



第237図　遺構外出土遺物57



第238図　遺構外出土遺物58

期不明土器で周辺一部を研磨している。(第238図3387) は沈線が付き文様不明で形状が五角形に近い。時期不明土器で周辺全体を研磨している。(第238図3388) は半截竹管状工具で沈線を付けて形状が隅丸方形に近い。東鎌塚原式土器で周辺全体を研磨している。(第238図3389) は半截竹管状工具の沈線を付けて形状が円形である。時期不明土器で周辺全体を研磨している。(第238図3390・3392) は無文で形状が五角形に近い。時期不明の土器で周辺一部を研磨している。(第238図3391) は文様不明で形状が円形に近い。時期不明の土器で周辺全体を研磨している。(第238図3393) は無文で形状が不定形である。時期不明の土器で周辺一部を研磨している。(第238図3394) は文様不明で形状が楕円形に近い。時期不明の土器で周辺一部を研磨している。(第238図3395) は文様不明で形状が円形に近い。時期不明の土器で周辺一部を研磨している。(第238図3396) は無文で形状が円形の一部を平らに研磨している。時期不明の土器で周辺一部を研磨している。(第238図3397)は条の太さ約0.3cmのＬＲの縄文を付け形状が楕円形に近い。時期不明の土器で周辺の一部を研磨している。(第238図3398) は文様不明で形状が楕円形に近い。時期不明の土器で周辺を研磨している。(第238図3399) は無文で形状が三角状で角を丸くしている。時期不明で周辺一部を研磨している。(第238図3400) は無文で形状が楕円形に近い。時期不明で周辺一部を研磨している。(第238図3401) は縄文が付いており不定形である。時期不明で一部を研磨している。(第238図3402) は無文で方形に近く、時期不明で一部を研磨している。

【石器・石製品】石器は、石鏃、石槍、石錐、石匙、スクレイパー・二次加工剥片、打製石斧、石錘、磨石・敲石・凹み石、台石・石皿、石剣、磨製石斧、石剣、その他が出土している (第239図3403～3656)。ここでは器種ごとにまとめて記述する。

(１) 石鏃 (第239図3403～第240図3444)

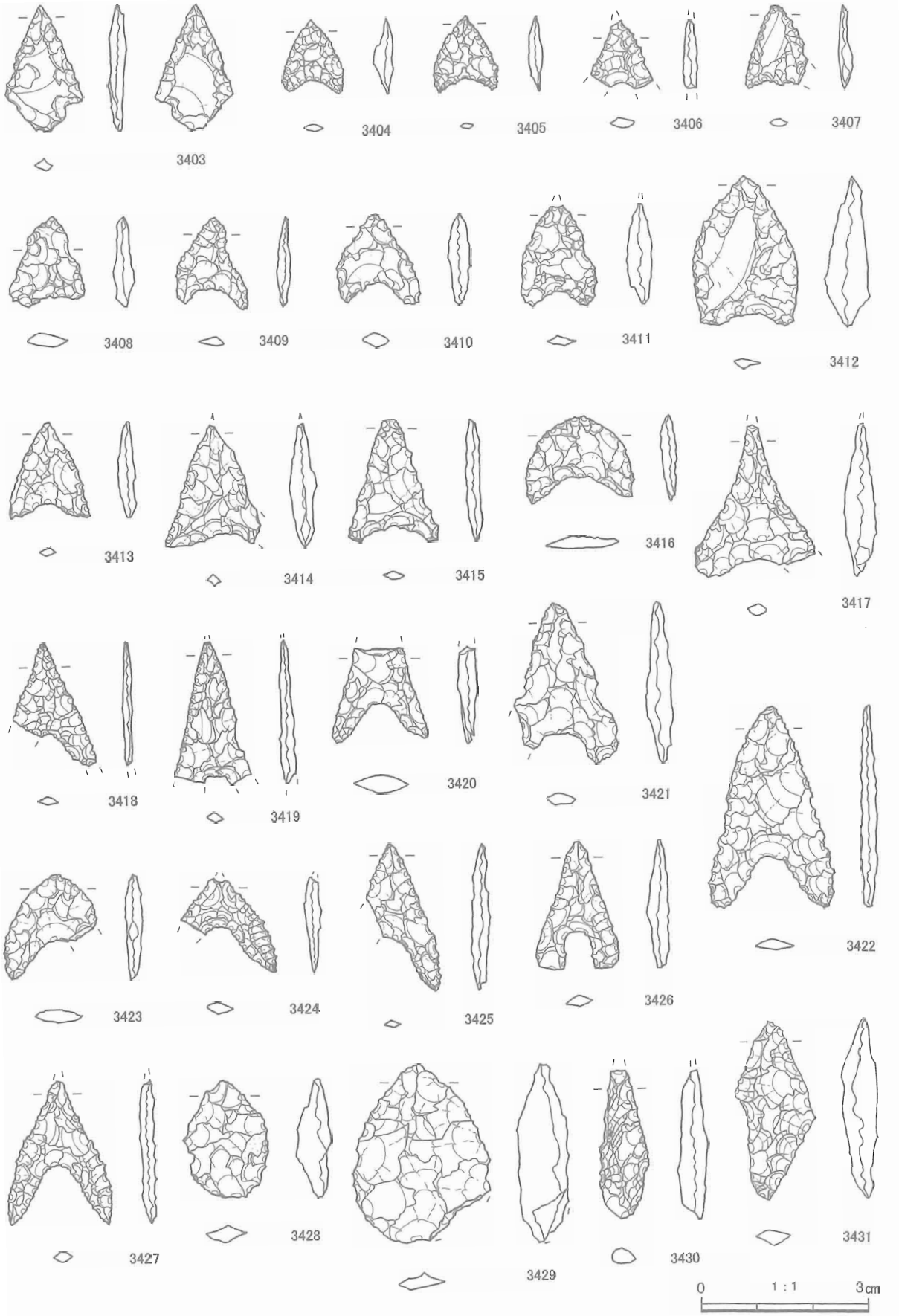
Ｂ区からの出土が最も多く、次いでＤ区・Ａ区からの出土が多い。Ｃ区西半分からは出土しなかった。実測個体中完形品は19点で、その他は先端部またはかえし部が欠損しているものがほとんどであった。黒曜石・珪質頁岩製のものが全体の70パーセントを占め、凝灰質頁岩製のものがこれに続く。チャート製は６点存在した。使用石材が限られるため、大井川水系に存在する石材をある程度選択して使用していたと見られる。黒曜石は、ほとんどは諏訪星ヶ台産のものが用いられているが、第239図3408は神津島恩馳島産のものである。黒曜石製のものは2.5cm以下に限られており、小型品に限って黒曜石を用いていたとも考えられる。

基部の形態別により、次の６種類に分類できる。

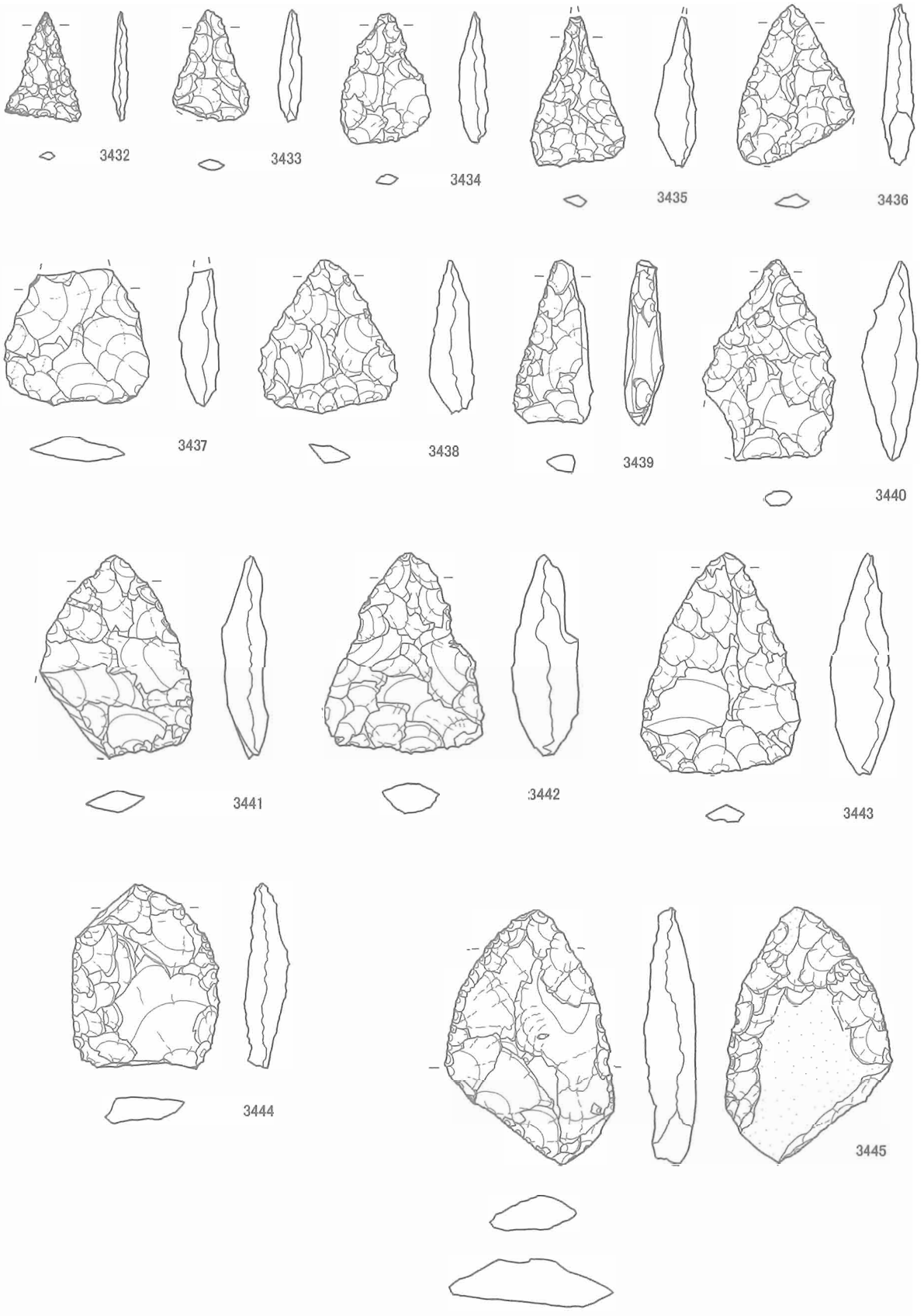
(１) 有茎のもの　１点 (第239図3403)
(２) 凹基無茎のもの　19点 (第239図3404～3422)
(３) 長脚のもの　５点 (凹基無茎で脚が器長の1/3に及ぶもの) (第239図3423～3427)
(４) 円基のもの　２点 (第239図3428、3429)
(５) 尖基のもの　１点 (第239図3430)
(６) 平基無茎のもの　13点 (第240図3432～3444)

有茎・凹基無茎・長脚のものは厚さが0.25cm～0.5cmと薄く、重量は0.3ｇ～1.6ｇの範囲内で比較的小ぶりのものが大半を占める。一方、円基・平基無茎のものは厚さが0.25cm～1.15cmと厚いものまで含み、重量も0.4ｇ～9.1ｇと範囲が広い。比較的大ぶりなものは抉りのないものに限定されると言える。

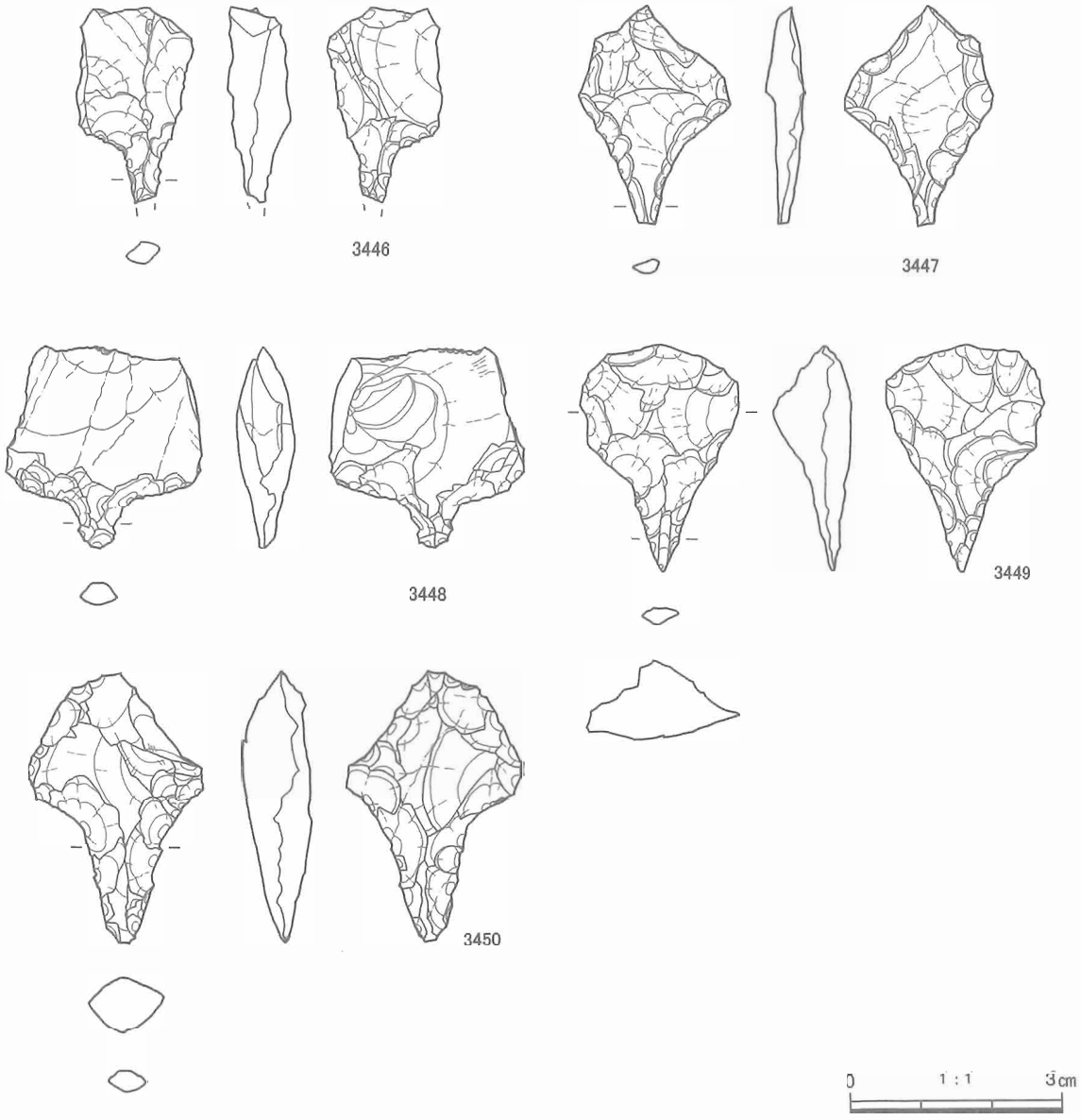
第239図3415は凝灰質頁岩製で風化している。第240図3438・3443は基部の中央付近がやや磨耗しており、矢柄の装着痕とも考えられる。



第239図　遺構外出土遺物59



第240図　遺構外出土遺物60



第241図　遺構外出土遺物61

（２）石槍（第240図3445）

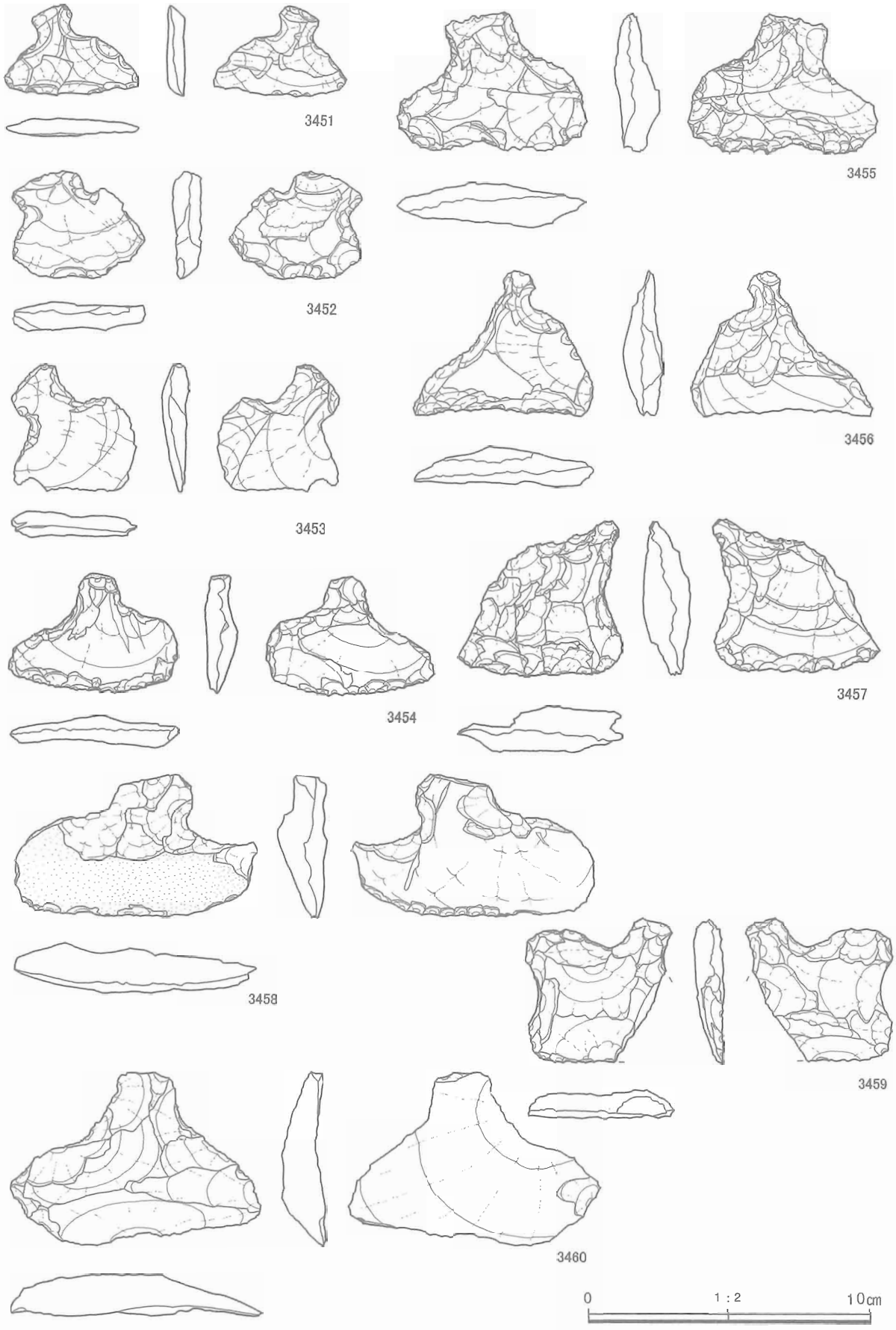
Ｂ区Ｈ・Ｉ８グリッドから出土した黒灰色のチャート製である。先端部はやや湾曲した尖頭状を呈するが、基部の形状は判然としない。裏面に原礫面を多く残し、未製品とも考えられる。

（３）石錐（第241図3446～3450）

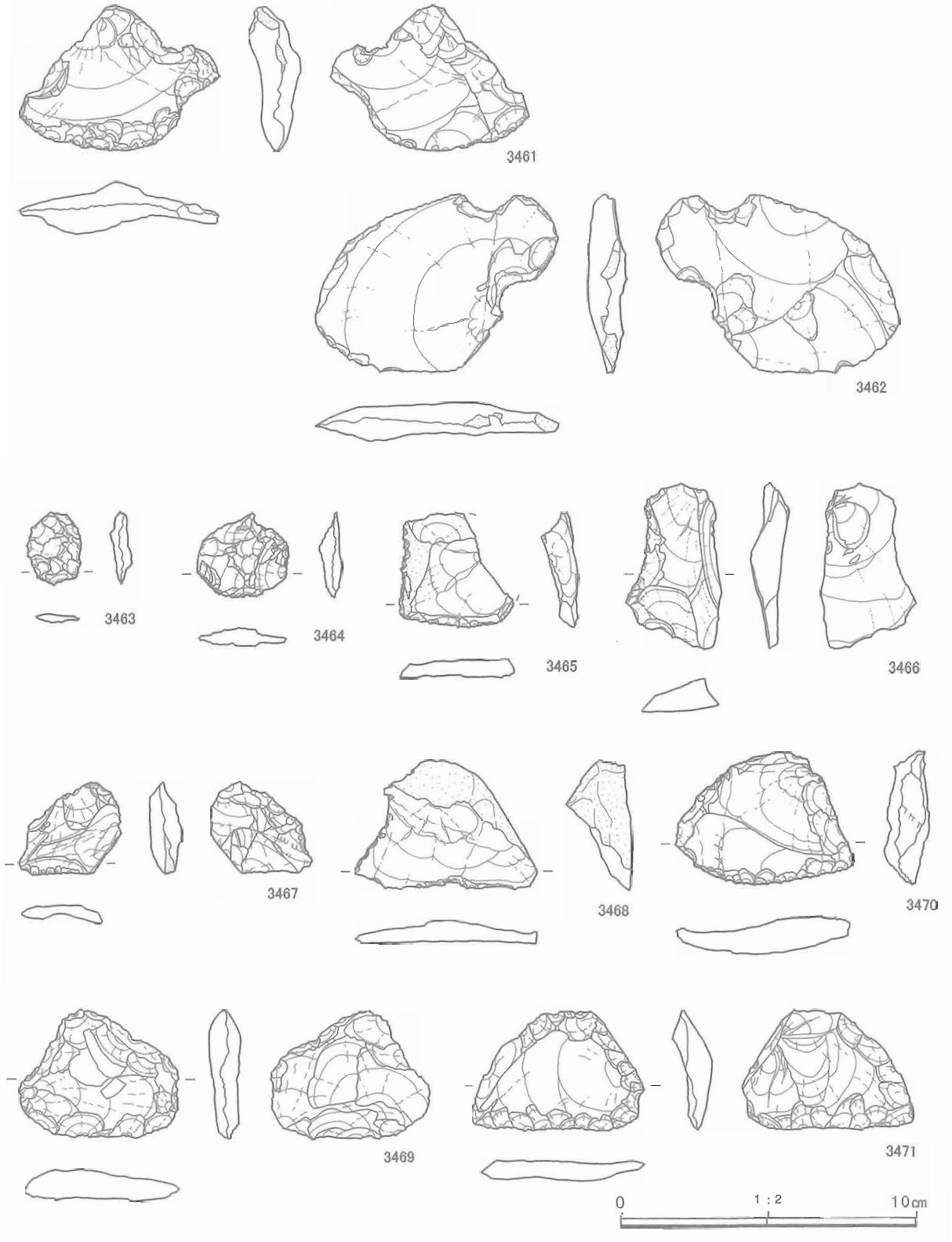
Ｆ５、Ｆ・Ｇ11、Ｐ26グリッドから出土している。いずれもつまみ状の頭部をもち錐部は短い。第241図3446はチャート製で先端は欠損のため状態は不明だが、第241図3447～3450は珪質頁岩製で錐部の先端が磨滅しており使用により磨耗したと思われる。

（４）石匙（第242図3451～第243図3462）

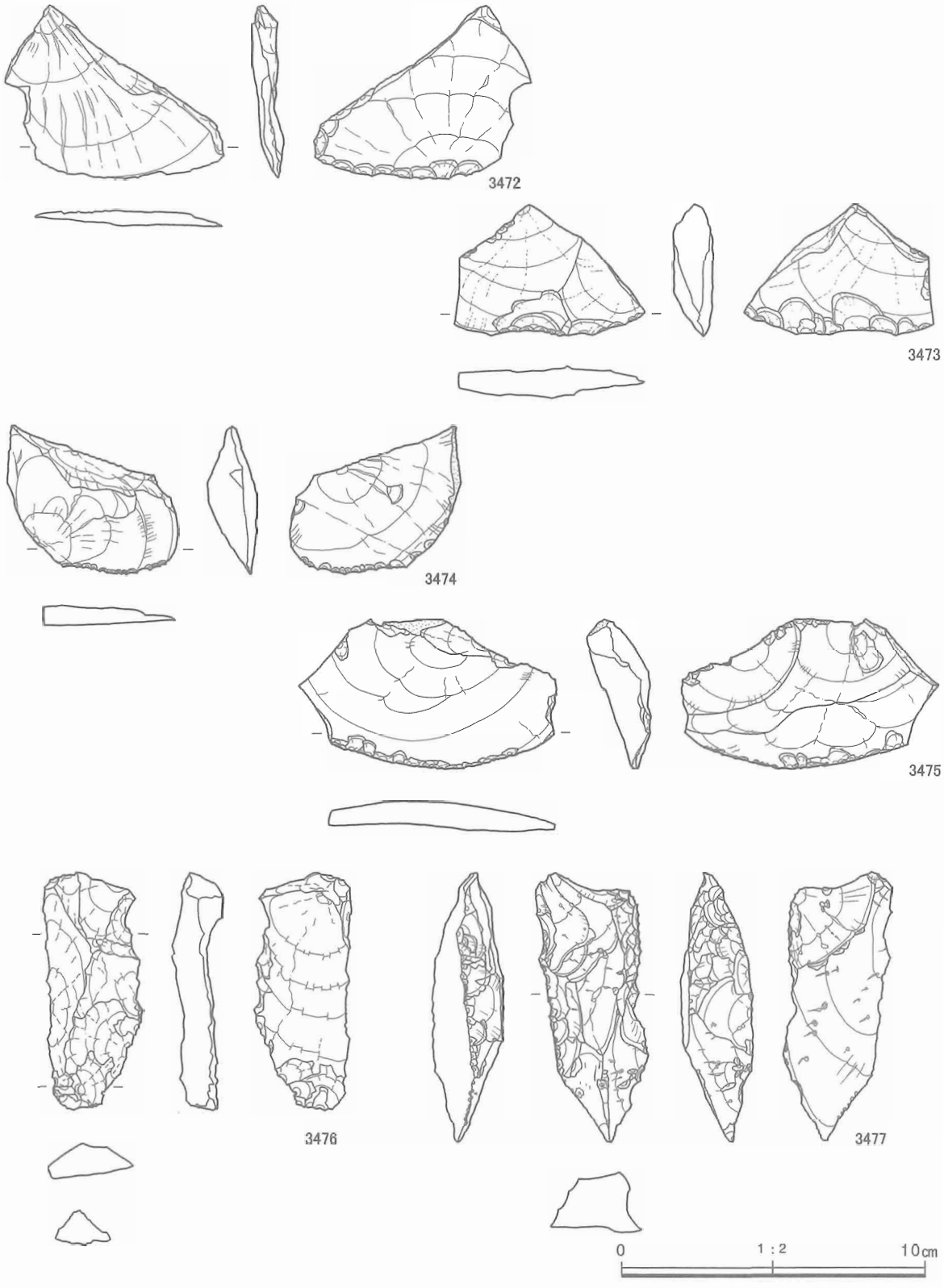
出土位置はばらつきがある。粘板岩、砂質粘板岩、頁岩、珪質頁岩、凝灰質頁岩、凝灰質砂岩が用いられている。つまみが上部に付く横形のもの10点と、つまみが横～斜め上部に付く斜形の２点に大別できる。第242図3451・3454・第243図3461は刃部とつまみ～抉り部分が磨耗している。また、第242図3456は裏面のつまみ～基部中央にかけて磨滅している。



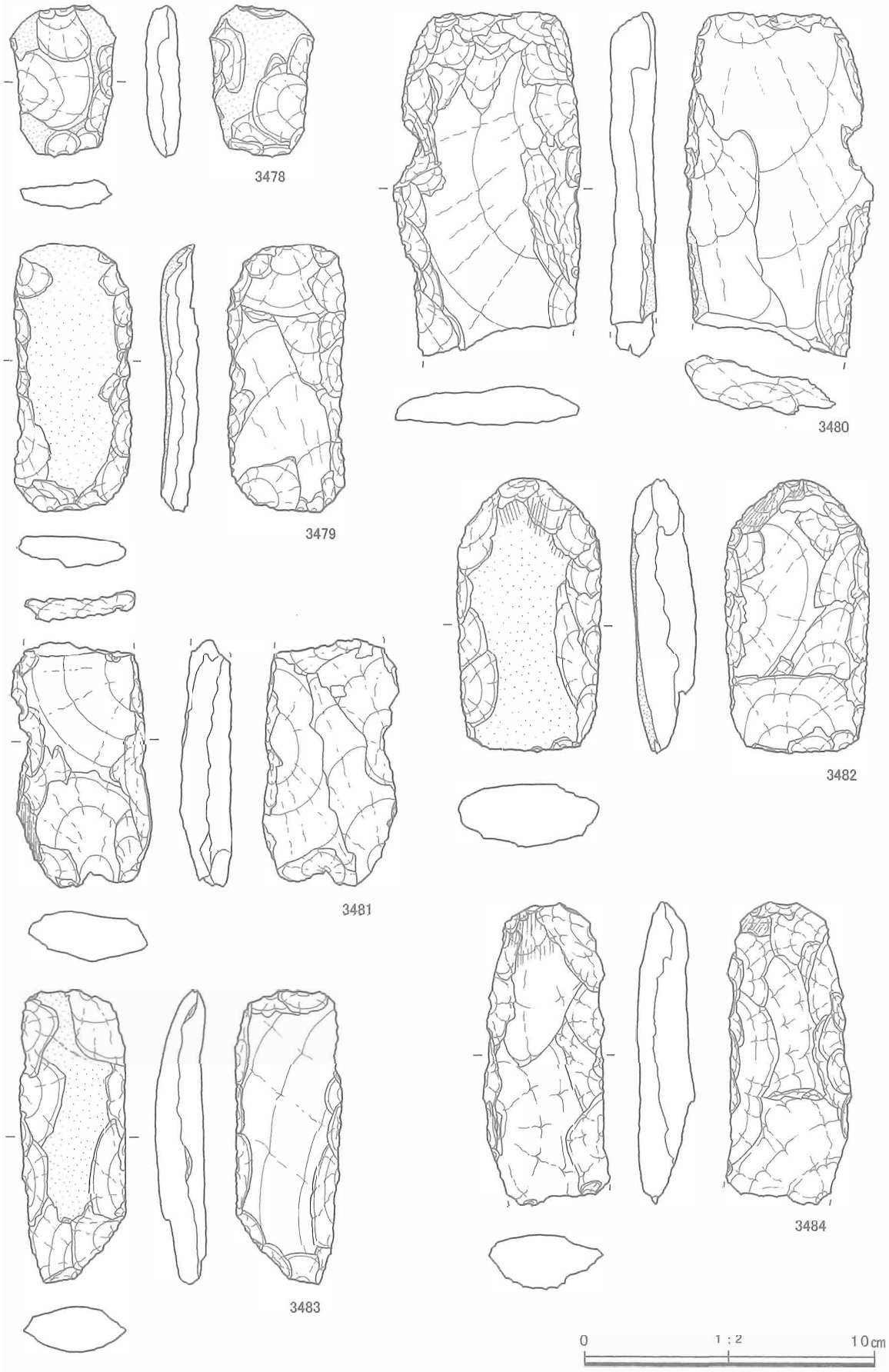
第242図　遺構外出土遺物62



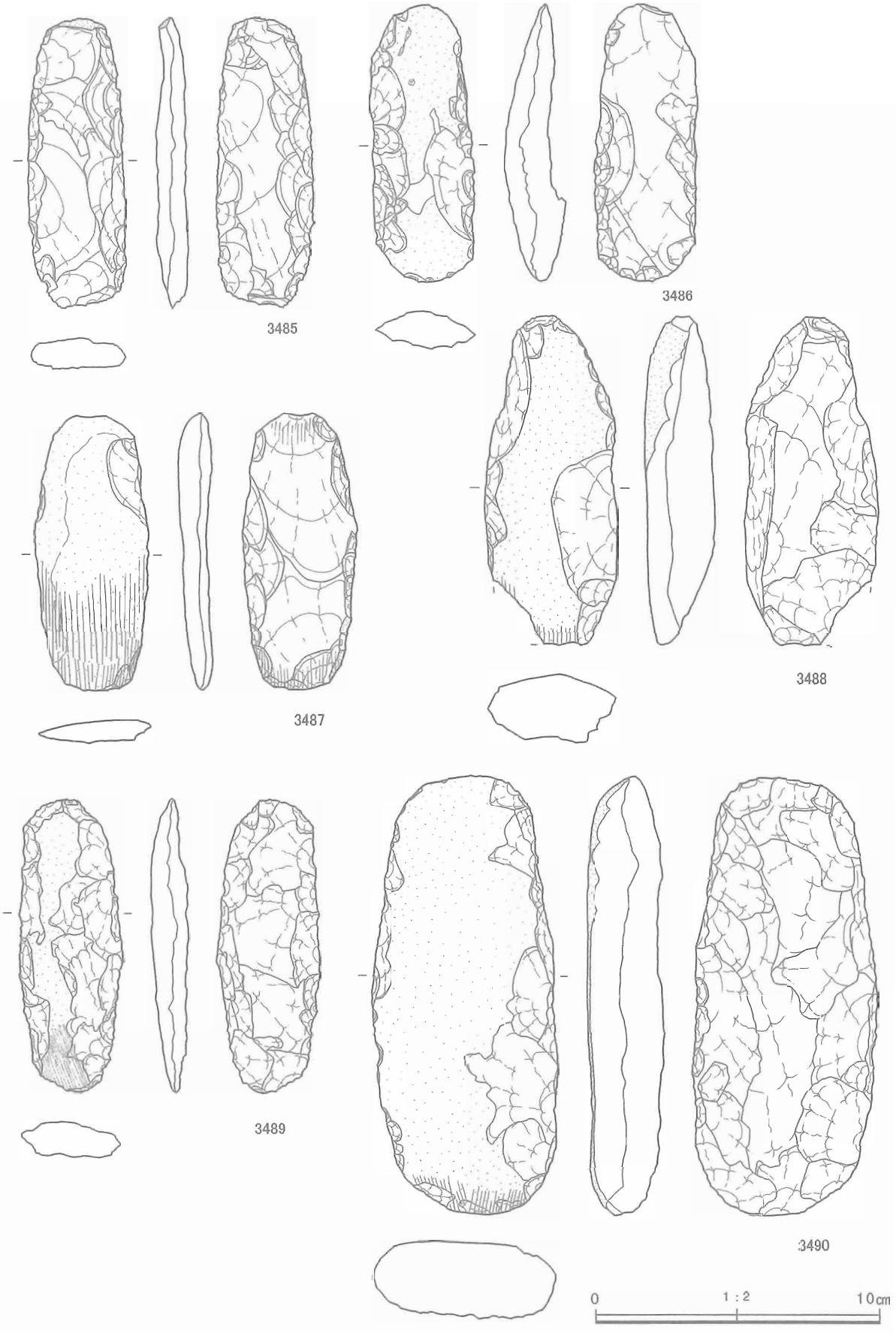
第243図　遺構外出土遺物63



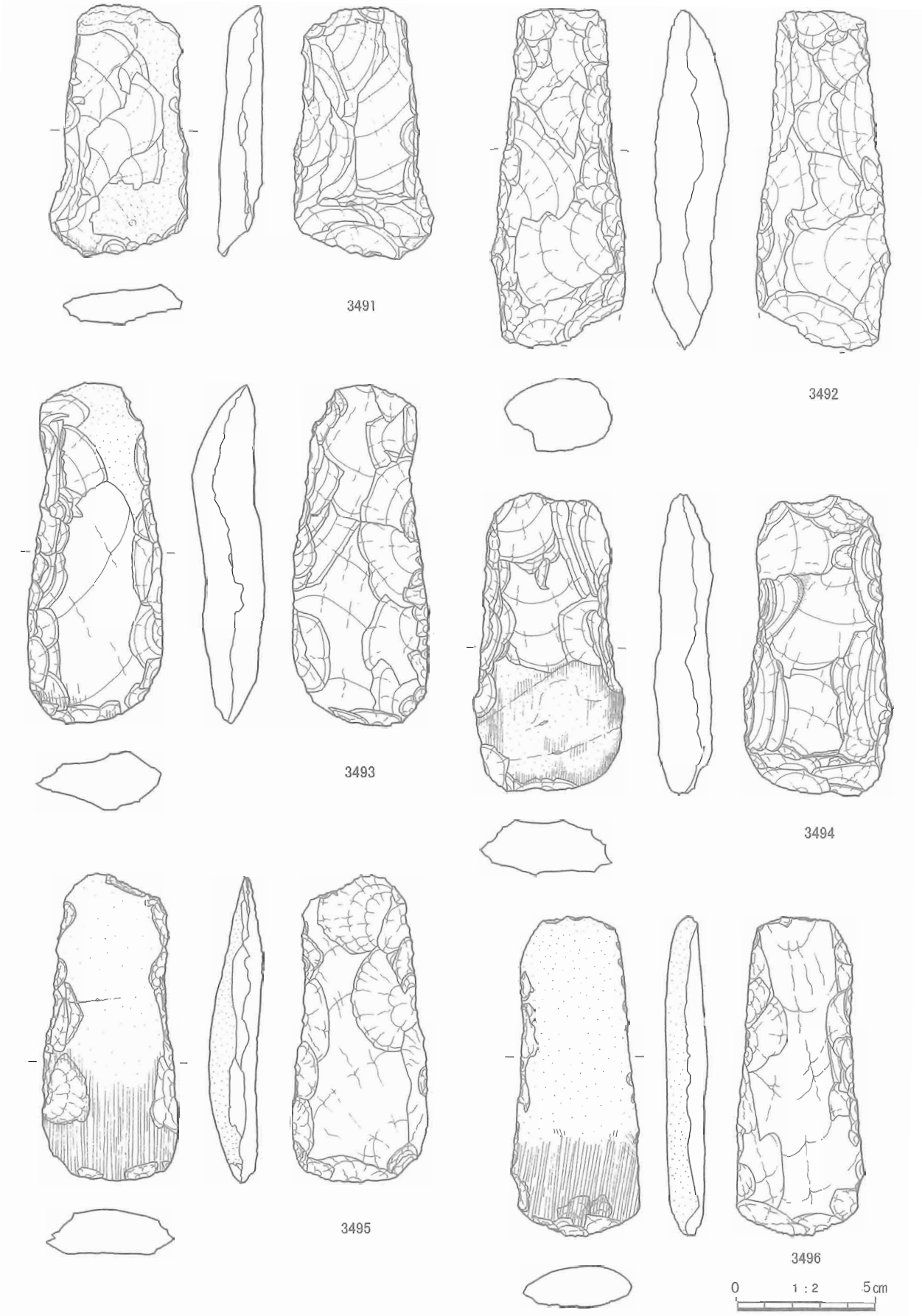
第244図　遺構外出土遺物64



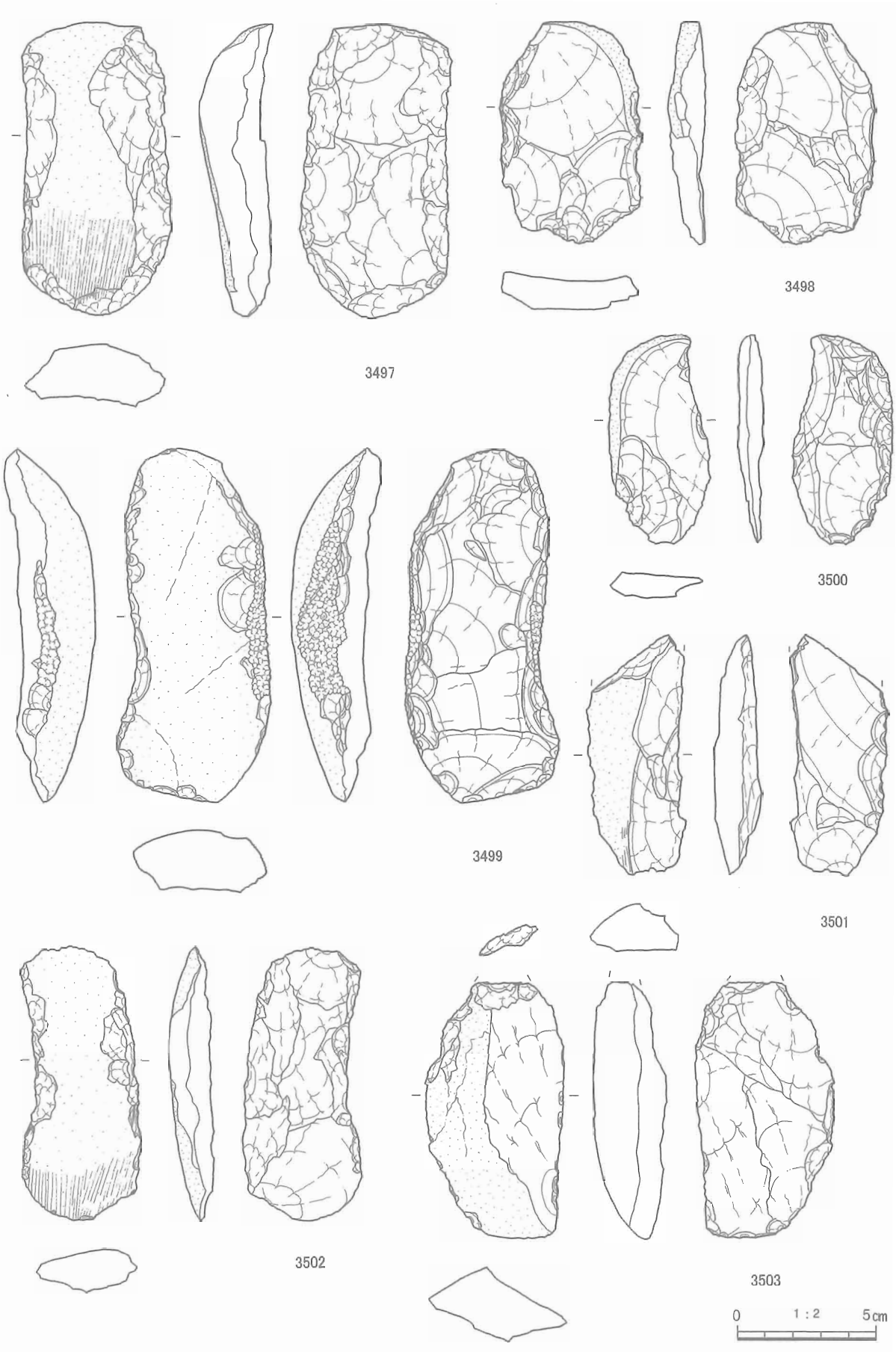
第245図　遺構外出土遺物65



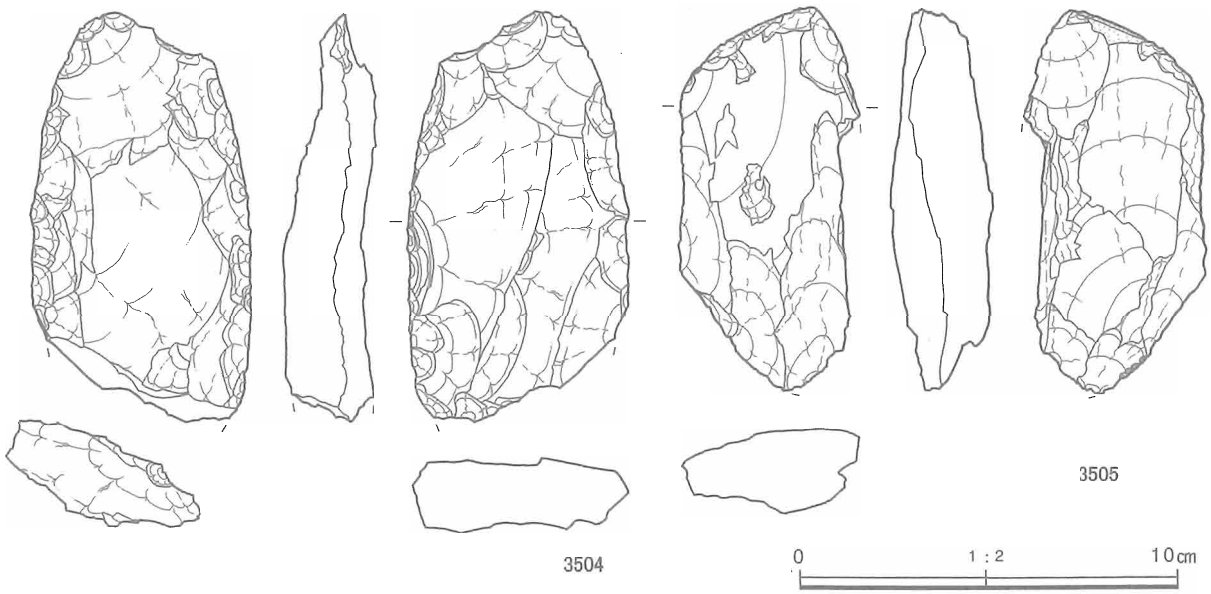
第246図　遺構外出土遺物66



第247図　遺構外出土遺物67



第248図　遺構外出土遺物68



第249図　遺構外出土遺物69

（５）スクレイパー・二次加工剥片（第243図3463～第244図3477）

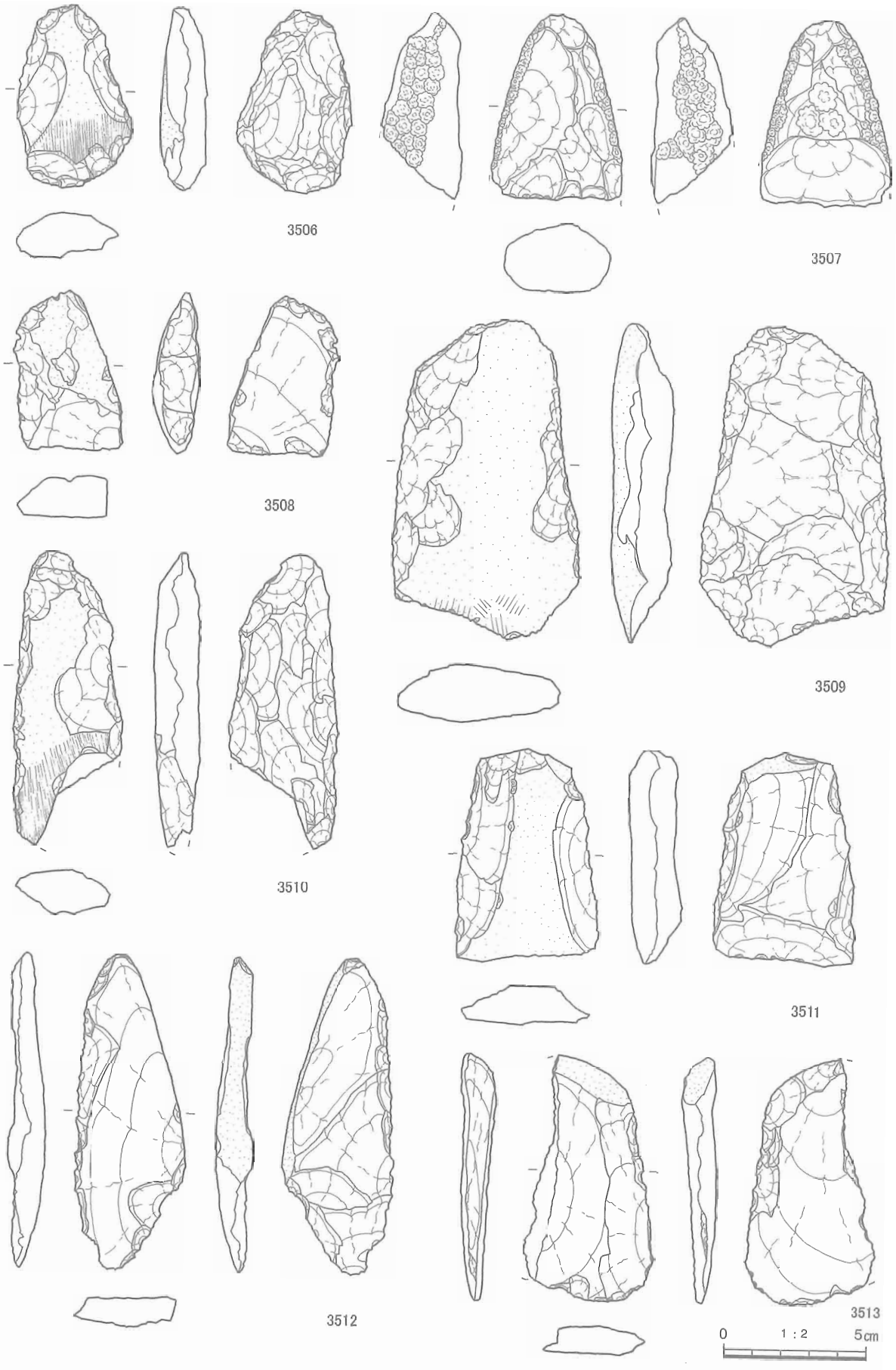
調整が精緻なものをスクレイパー、それ以外を二次加工剥片と称した。使用石材は石匙と類似しており、さらに黒曜石とチャートが加わる。①両面を加工した丸形のもの（第243図3463・3464）、②直線的な二辺を意識して尖頭状に加工したもの（第243図3465）、③二辺を調整してやや緩やかな尖頭状に加工したもの（第243図3470、3471）、④二辺を調整して刃部としているもの（第243図3466～3469）、⑤一辺を調整して刃部としているもの（第244図3472～3475）とその他に分けられる。第244図3476はチャートの縦長剥片である。第244図3477は神津島恩馳島産の黒曜石製スクレイパーで、両側辺を加工してある。

（６）打製石斧（第245図3478～第260図3572）

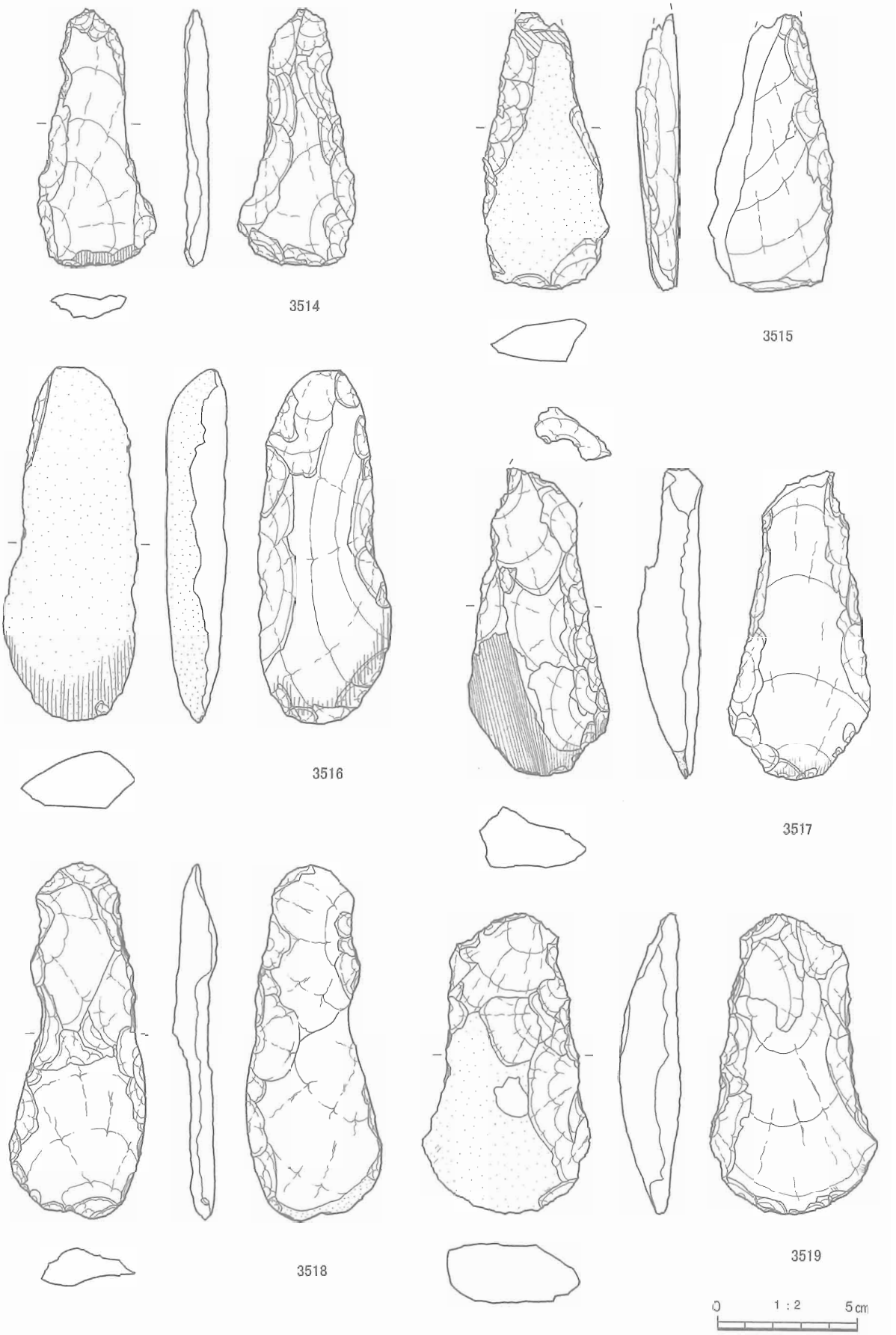
遺構外からの出土は213点である。Ａ区からの出土は極めて少なく、出土域は住居の分布域（Ｂ区南東寄りの地域・Ｃ区北東寄りの地域・Ｃ区とＤ区にまたがる南寄りの地域・Ｄ区北寄りの地域）に近いまとまりを示していると言える。使用石材は、砂質粘板岩・粘板岩や細粒～粗粒砂岩が大半を占め、凝灰質砂岩や頁岩製のものが１点ずつ含まれる。いずれも大井川で採取できる石材である。第250図3507のみ天竜川水系で採取される花崗岩であると思われ、残存する頭部断面は円形で厚みがあり乳棒状を想起させる形状で、他の打製石斧と比較すると石材も形状も異質である。

形態は、①短冊形（第245図3478～第249図3504）、②撥形（第250図3506～第254図3539）、③分銅形（第255図3540～第259図3561）、④不明（第259図3562～第260図3572）に大別した。さらに、それらの中は「ａ両側縁から調整を加え、原礫面を広く残すもの」と「ｂ原礫面をほとんど残さないもの」に二分できる。撥形が最も多く、次いで短冊形、撥形と続く。原礫面を広く残すものが圧倒的に多く、全体の約70％を占める。

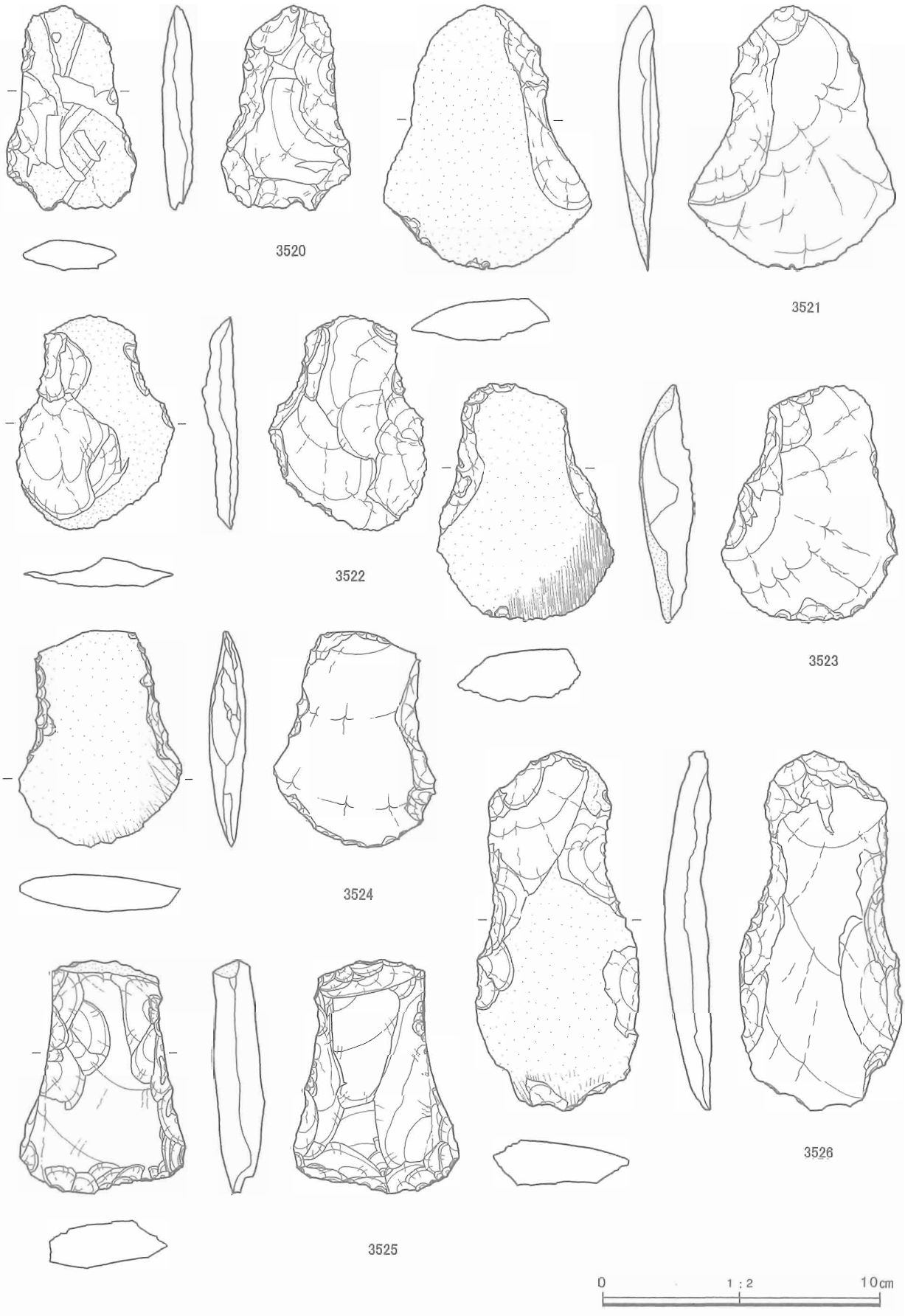
短冊形と分銅形には上下に使用痕が見られるもの（第245図3482、3484、第246図3486、3487、第256図3548、3550、第258図3559、第259図3561）があり、上下とも刃部として使用されたと考えられる。また、第248図3499、第250図3507、第257図3556は器厚が３㎝を超え、側縁または抉り部は敲打による調整がなされている。第246図3490、第251図3519、第257図3554などには表裏面の中央付近に剥離や変色・磨耗が見られ、柄の装着痕の可能性も考えられる。



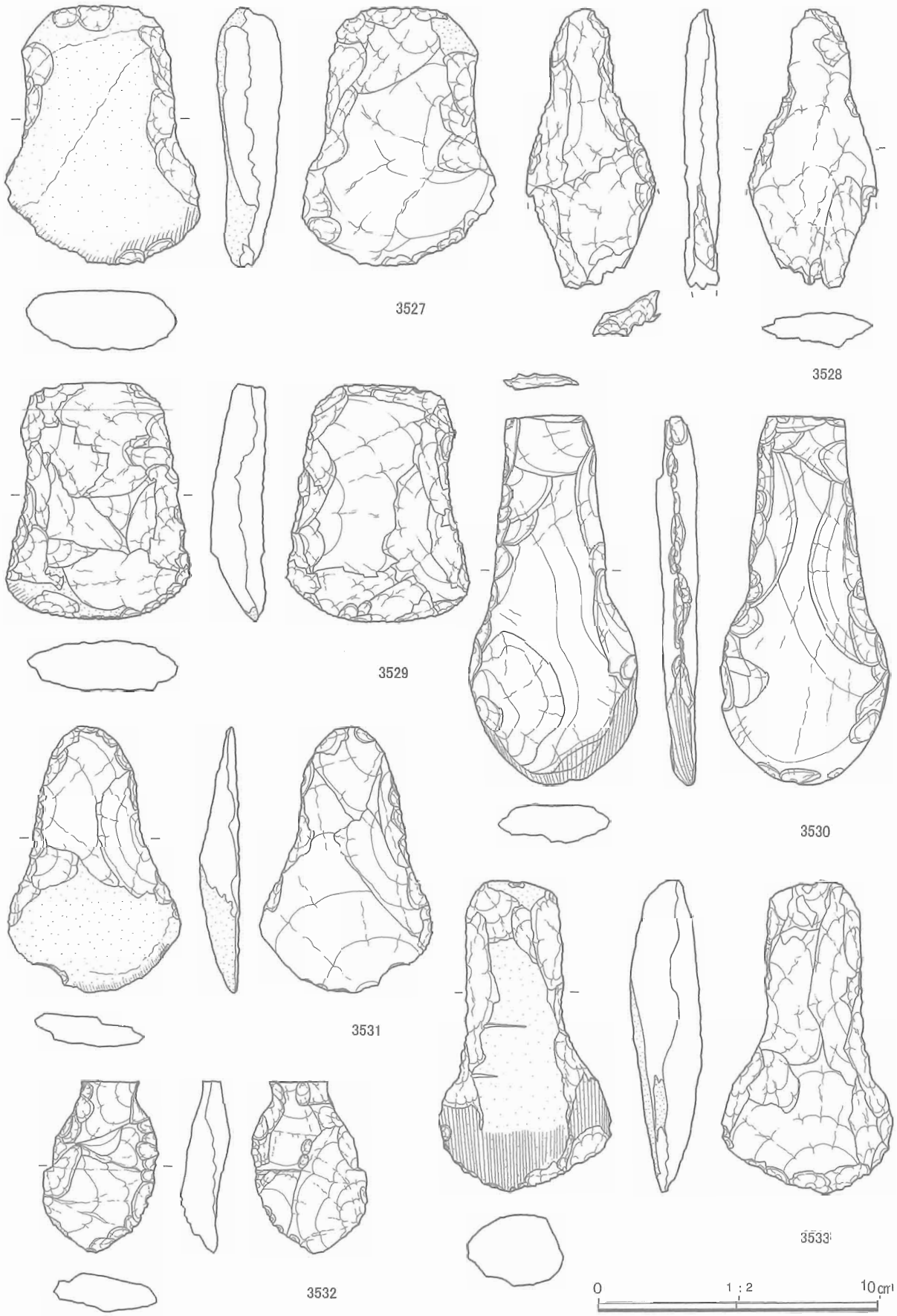
第250図　遺構外出土遺物70



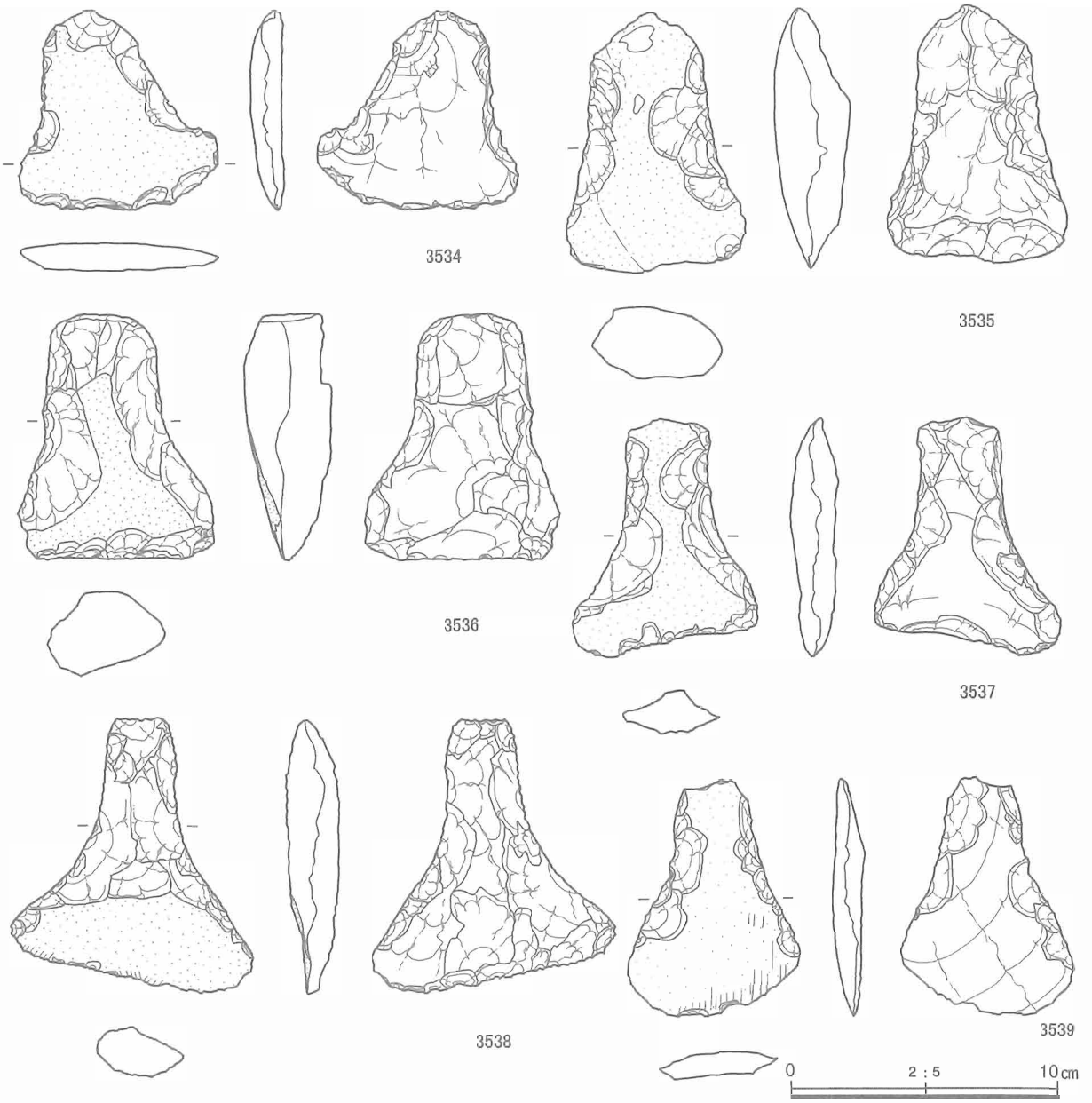
第251図　遺構外出土遺物71



第252図　遺構外出土遺物72



第253図　遺構外出土遺物73



第254図　遺構外出土遺物74

（7）石錘（第261図3573～第263図3608）

出土分布は極端な集中場所はないが、住居の集中域とやや重なる。全て、扁平な礫の両端もしくは側縁部に縄を掛けるための抉りを有するものである。使用石材の多くは粘板岩で、これに細粒～中粒砂岩と凝灰質砂岩が混じる。切目石錘3点のほかは、打欠石錘である。

切目石錘（第261図3573～3575）は、長軸の両端に擦切により縄掛け部が作り出されている。第261図3573は両端とも切目の周囲に細かい擦切痕が数本見られ、深い切目を定めるまでに何度か擦切を試みていることがわかる。

打欠石錘は、縄掛け部が長軸又は短軸の両端2ヶ所に作り出されているもの（第261図3576～第262図3601）が大半を占め、縄掛け部が3ヶ所のもの（第263図3602～3606）と4ヶ所のもの（第263図3607，3608）が若干量確認できた。第261図3583は縄掛け部が磨滅している。また、第262図3600・3601は被熱

した面に線状の白い部分が残る。これらはいずれも縄掛け痕と思われる。第262図3600の縄掛け部は敲打の後に擦切を施している。第261図3584は法量・重量共に最大で表裏に磨れた面があるため、磨石の転用品であろう。また、第263図3608表面に敲打痕があり、敲石の転用と見られる。

（８）磨石・敲石（第264図3609～第269図3631）

分布は住居域とやや重なるとも考えられ、中でもＡ区北とＢ区南東に集中している。Ｂ区では台石・石皿の分布域と重なるが、その他ではそのような傾向は薄い。使用石材は中粒砂岩が中心で、細粒・粗粒砂岩や砂質粘板岩も用いられている。扁平な円礫の表裏や周縁を磨面・敲面として使用しているもの（第264図3609～第265図3615、第267図3625～第269図3631）と、棒状礫の周縁や上下面を磨面あるいは敲面として使用しているものに大別される。第267図3624は立方体に近い厚みのある礫を用いている。265図3615・第266図3620・第266図3620・3622・3623、第267図3624、第267図3626～第268図3830は磨る機能と敲く機能を両方有しており、これらは磨敲石と称した。

多くは調理器具として利用されたと思われるが、第267図3625は磨製石斧製作用のハンマーの可能性もある。

（９）台石・石皿（第269図3632～第270図3640）

磨りにより磨滅した平らな面をもつものを台石、磨滅した窪みをもつものを石皿とした。細粒～粗粒砂岩製で、ほとんどのものが大きく欠損し一部しか残存していない。第269図3634、第270図3636・3637・3640は表裏に磨面を有し、両面を使用していたと思われる。第270図3639は直方体に近い形状であったと考えられ、隣り合う２面に磨面を有する。

（10）石剣（第271図3641～3645）

Ｆ２・Ｇ８・Ｌ14グリッドから出土した。調査区東寄りに限定される。粘板岩・凝灰質粘板岩・凝灰質砂岩が使用されている。第271図3641～3644は一部しか残存しておらず、表面は全体的に研磨が行き届いている。第271図3643は被熱のため赤色化している。第271図3645は両先端部に鎬のような稜を有し研磨痕が顕著である。

（11）磨製石斧（第271図3646～3648）

第271図3646・3648は定角式磨製石斧で、両側面と頭部が研磨され主面との間にはっきりした稜をもつ。第271図3646は凝灰質粘板岩製で、丁寧に研磨され精巧に仕上げられた小型品であるため、儀器あるいは装飾品として用いられていた可能性がある。第271図3648は凝灰質粗粒砂岩製で、実用品であろう。

第271図3647は凝灰岩製で、頭部・側面と主面との間に稜をもたない扁平な小型品で、やはり実用品であろう。刃部に刃こぼれ状の小さな剥離や使用痕とみられる細かな擦痕が付く。

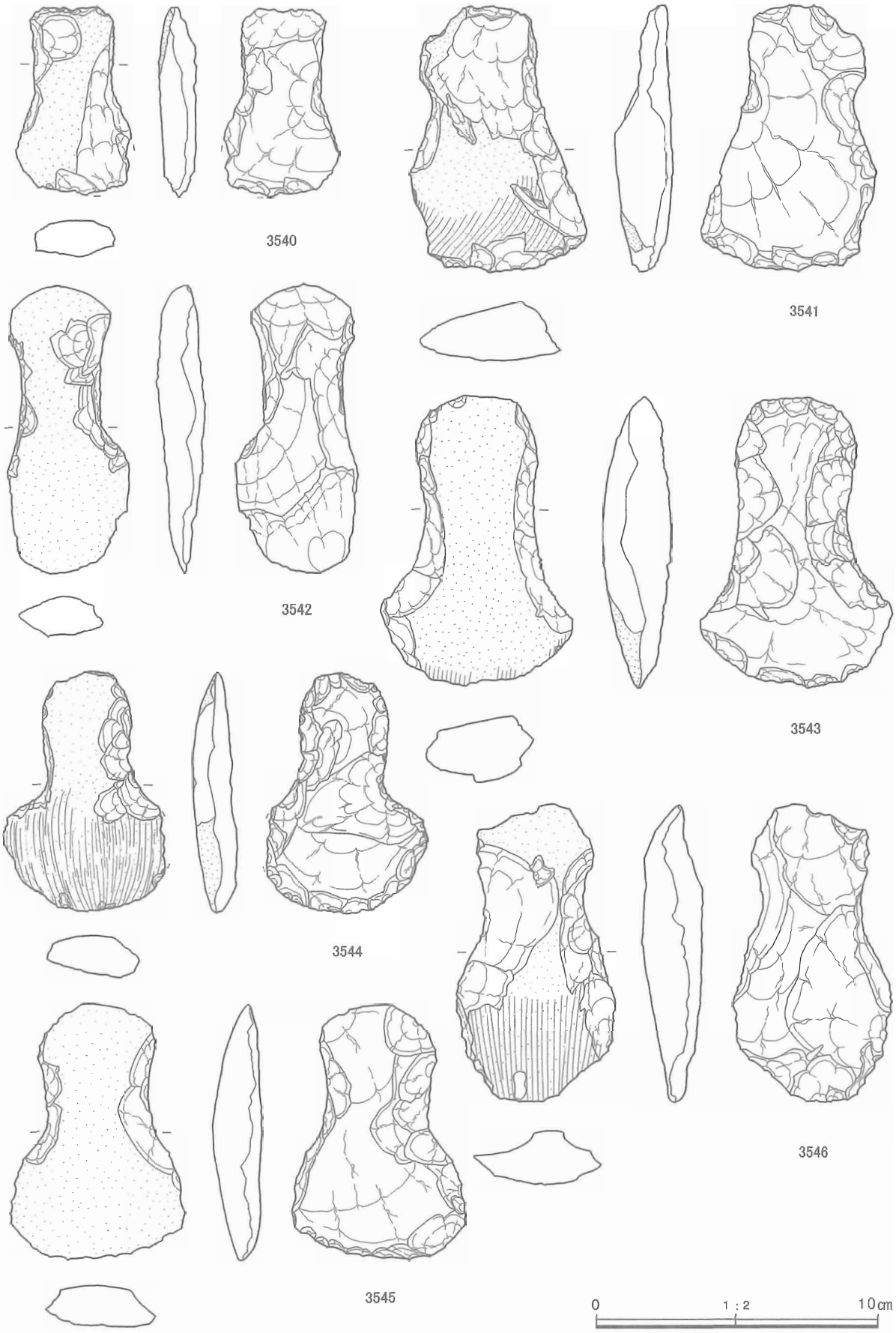
（12）石棒（第271図3649）

Ｋ20グリッドの弥生土坑に混入していた。淡褐灰色の伊豆半島産多孔質安山岩製で、頭部のみの残存である。

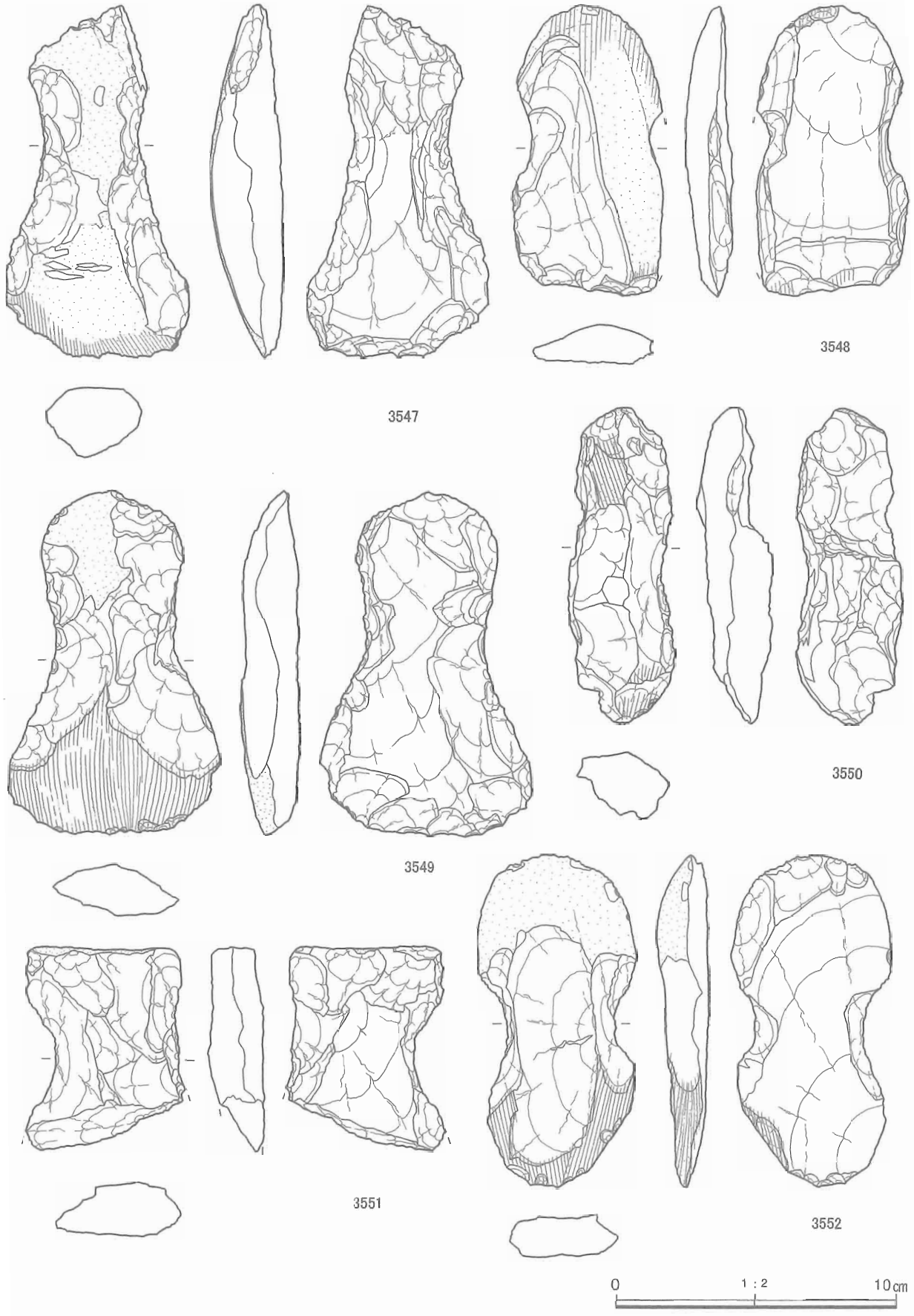
（13）その他の石製品（第272図3650～3655）

第272図3650は、用途不明の軽石で、磨面・竹管のようなもので穿孔された孔・擦切のような溝を数個所有している。第272図3651は剥片をとるために使用された石材であると思われる。第272図3652～3654は耕作土層や撹乱層から出土した砂岩製の持ち砥石で、中世以降のものであろう。

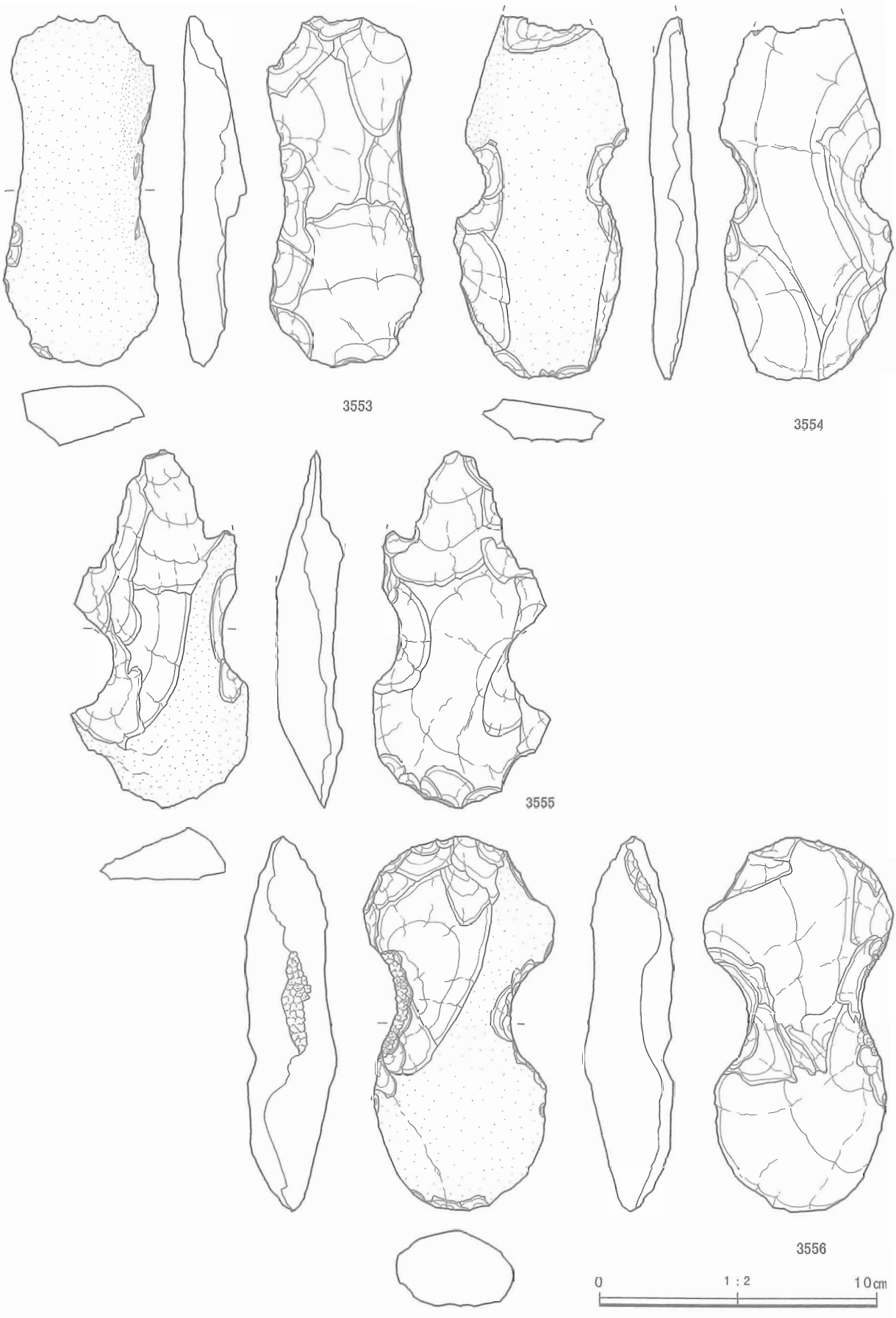
第272図3655はⅢ層上面から出土した石槍である。全体的に細かな調整で形作られるが、表面先端近くには調整の及ばない部分がこぶ状に残る。風化して灰白色となる。第272図3656はチャートの縦長剥片で、同じくⅢ層上面から出土している。これらⅢ層に含まれる石器はごくわずかで、縄文時代草創期頃のものであろう。



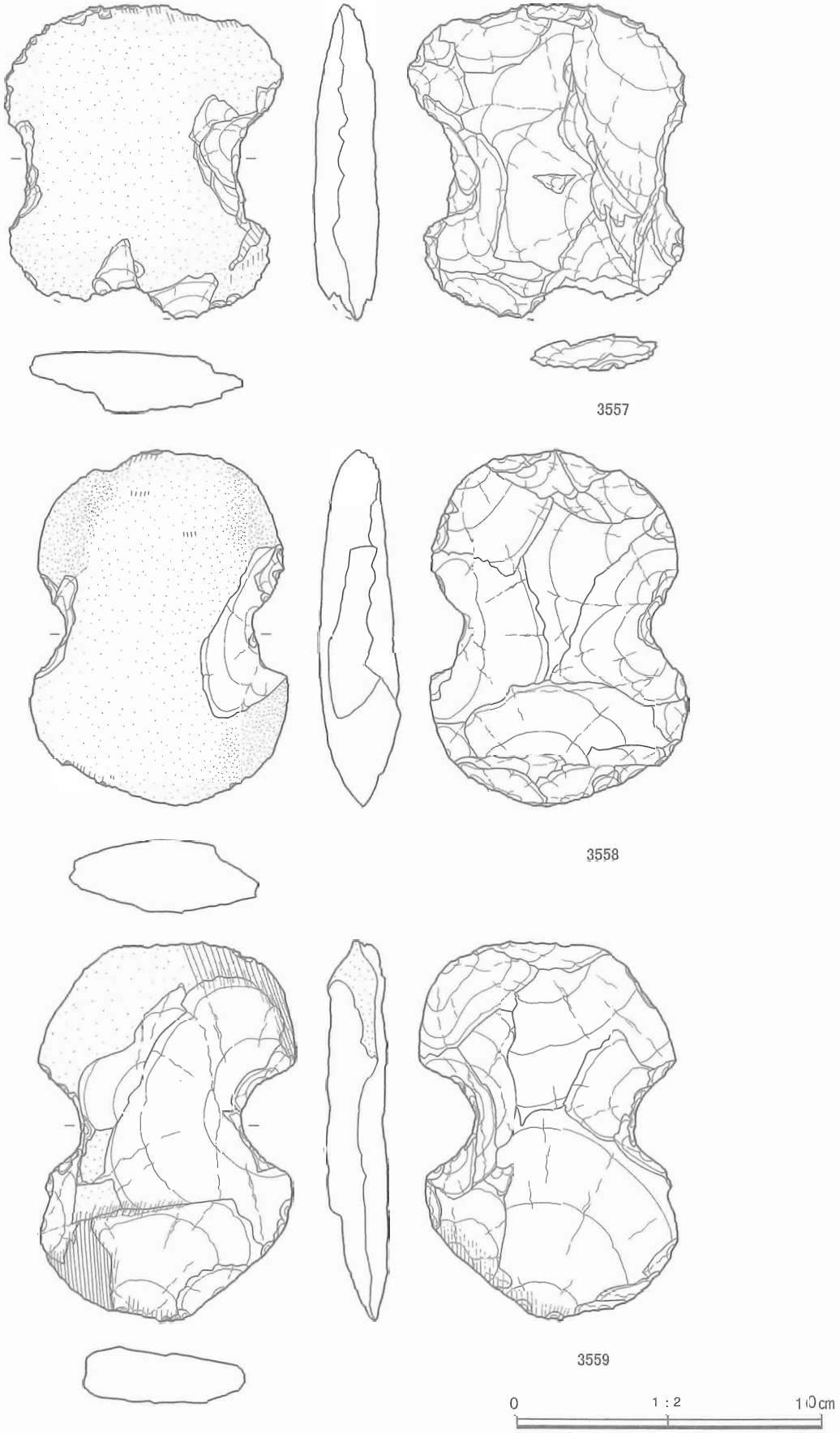
第255図　遺構外出土遺物75



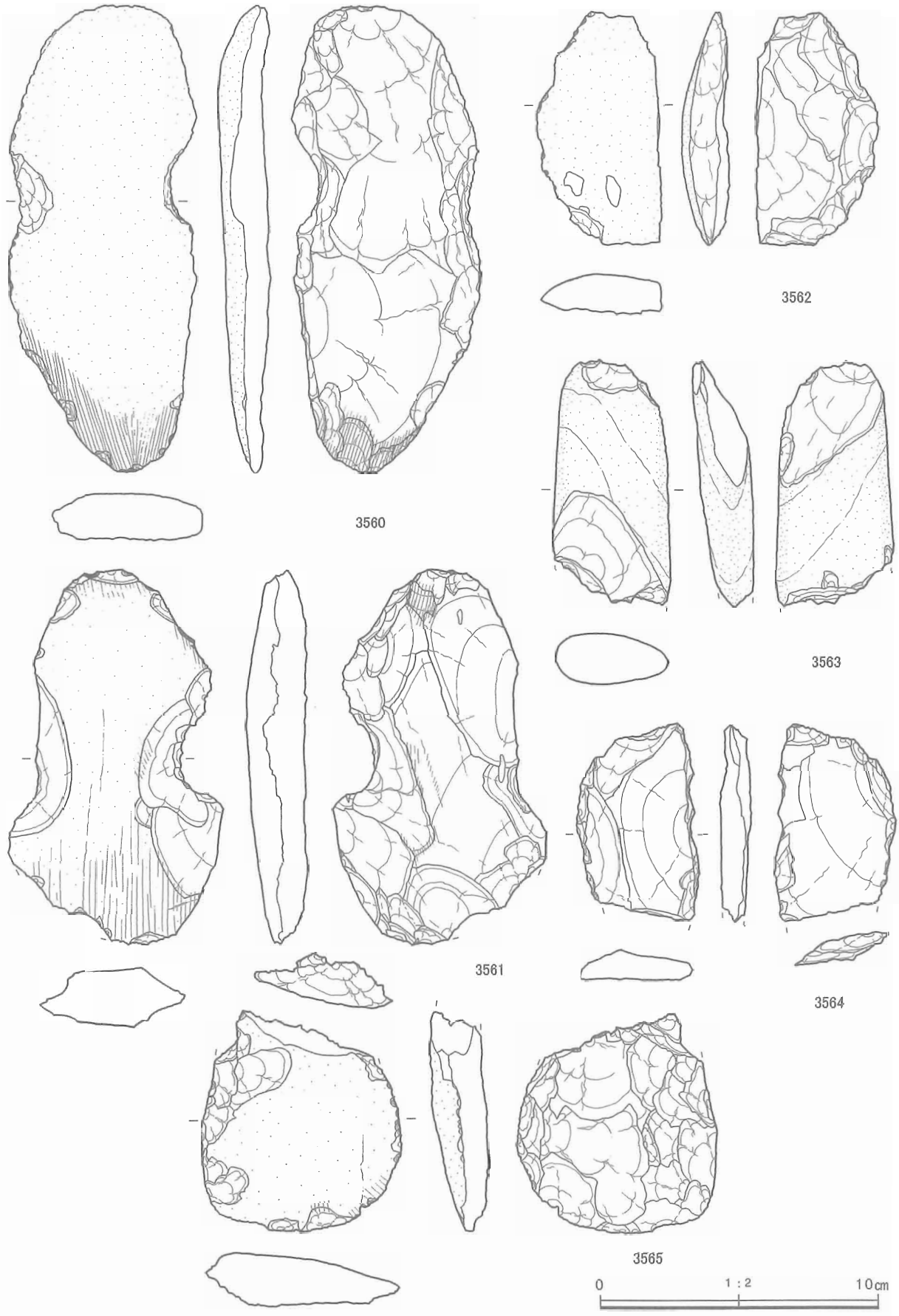
第256図　遺構外出土遺物76



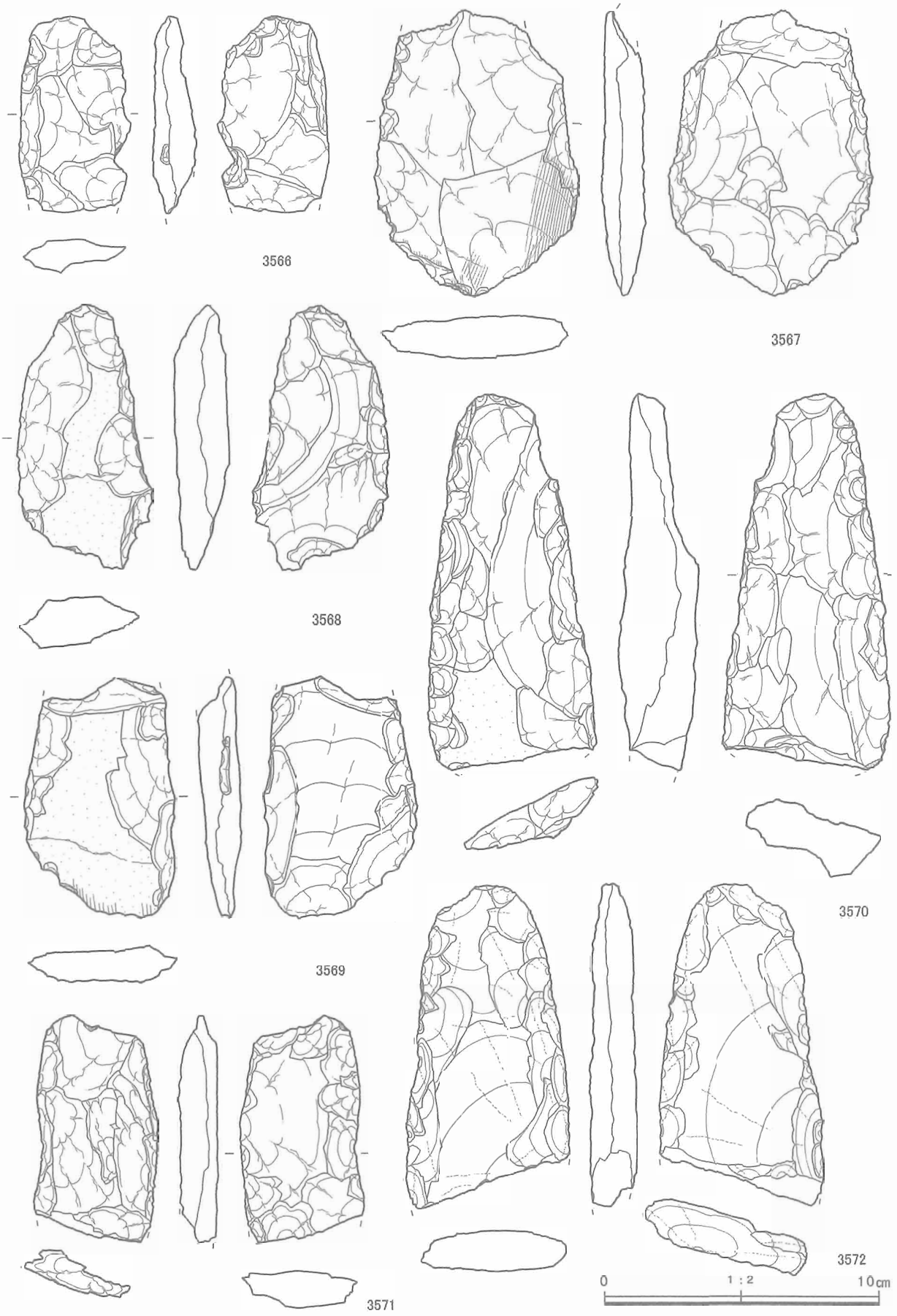
第257図　遺構外出土遺物77



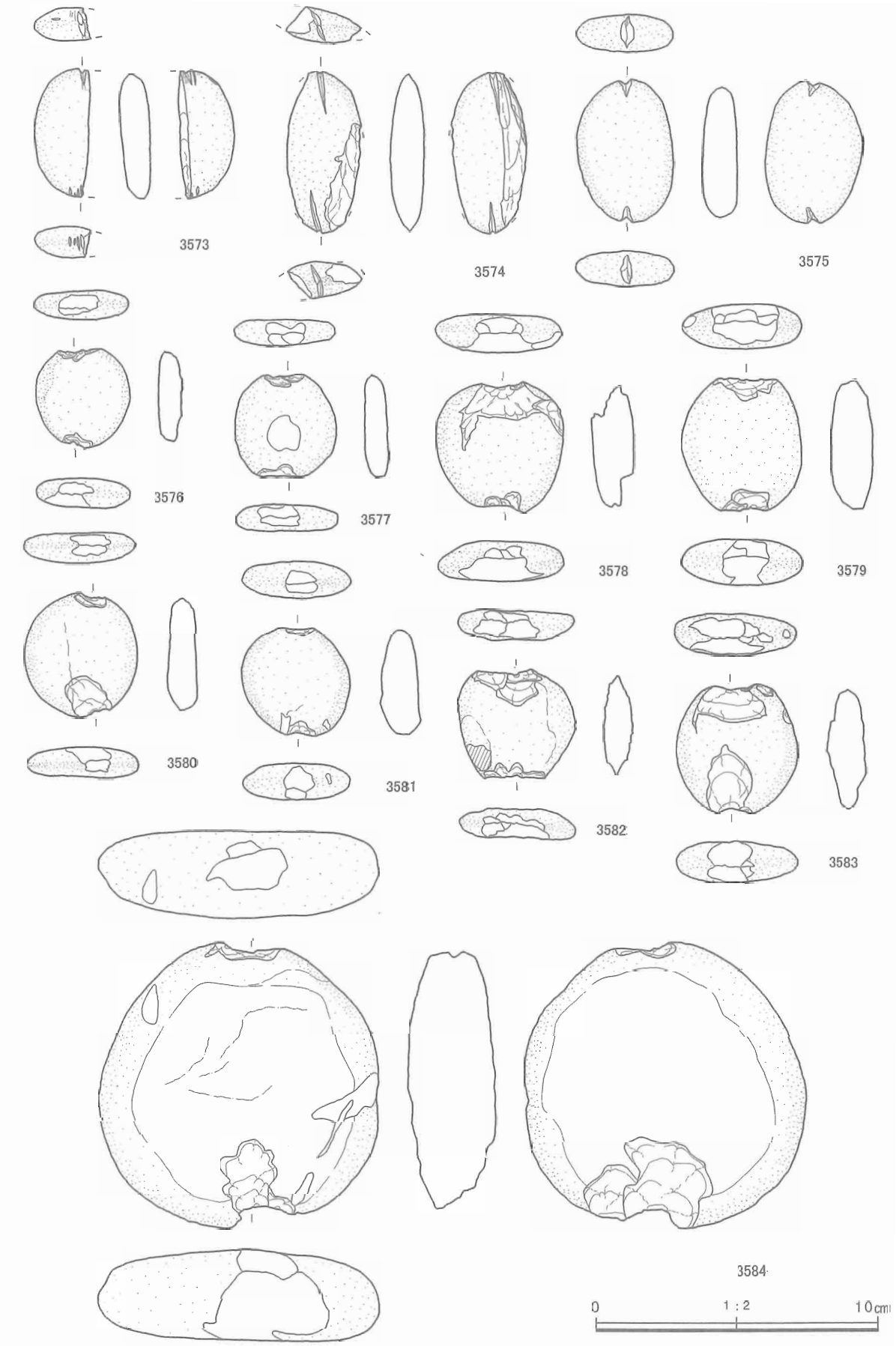
第258図　遺構外出土遺物78



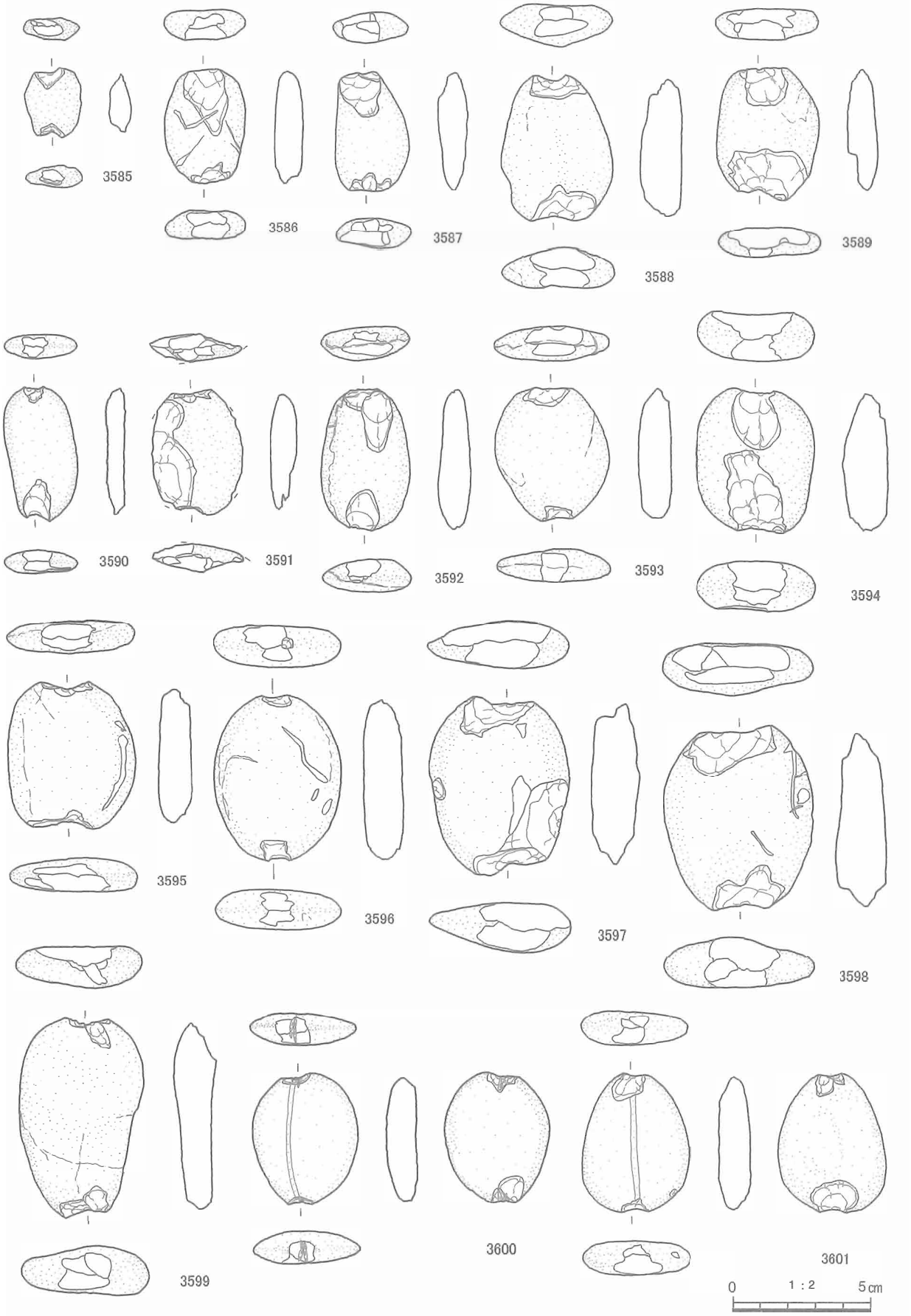
第259図　遺構外出土遺物79



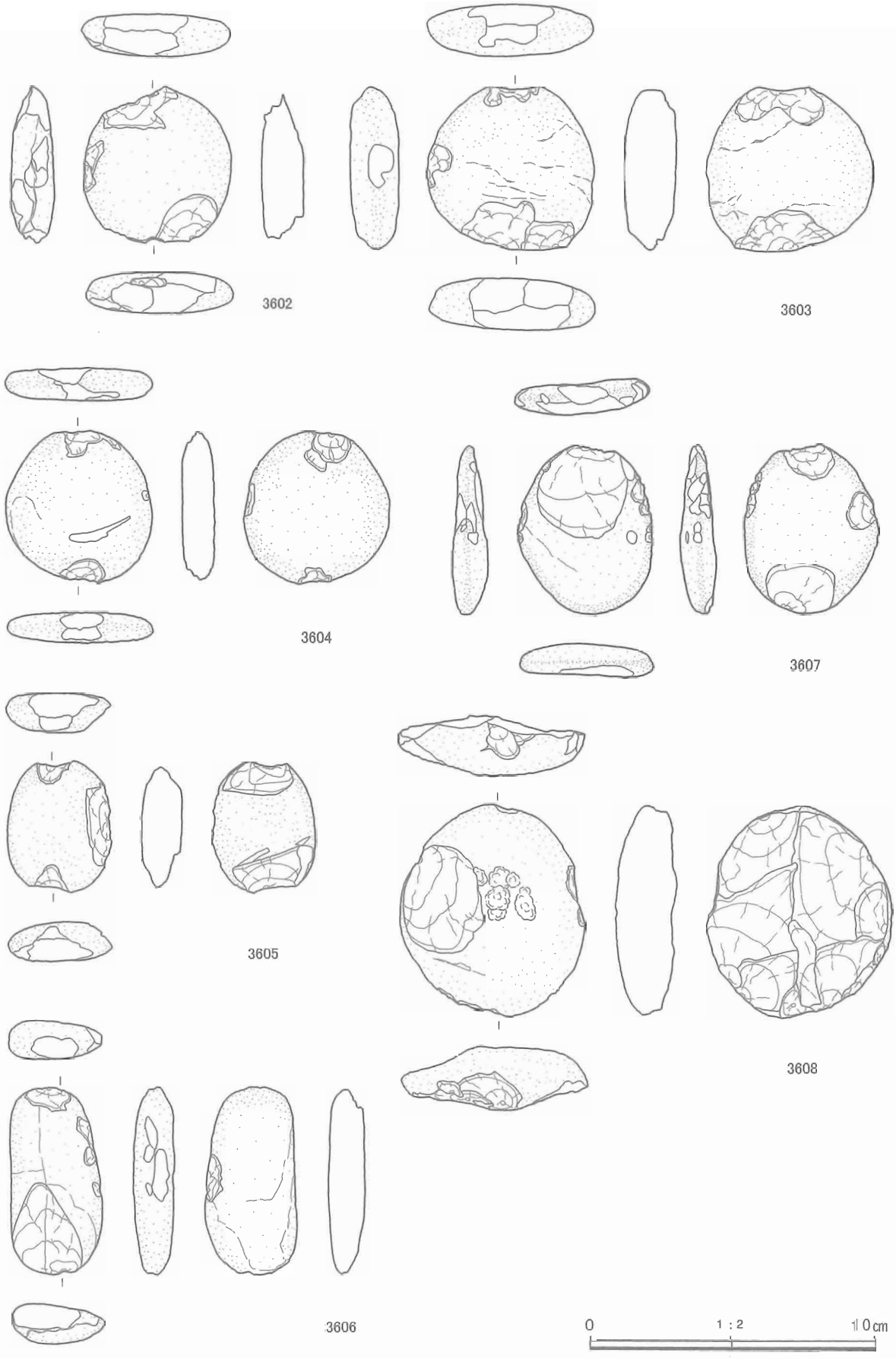
第260図　遺構外出土遺物80



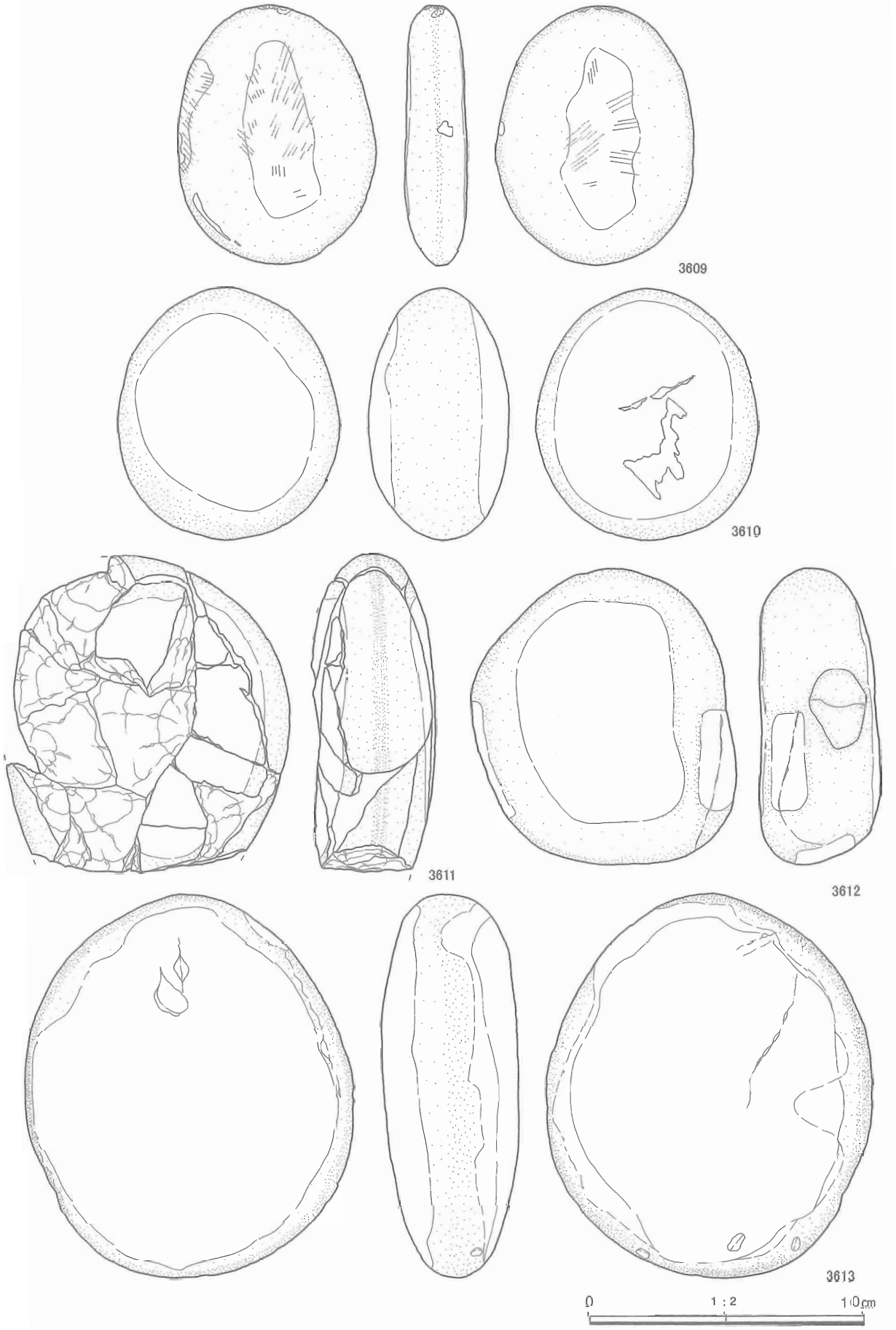
第261図　遺構外出土遺物81



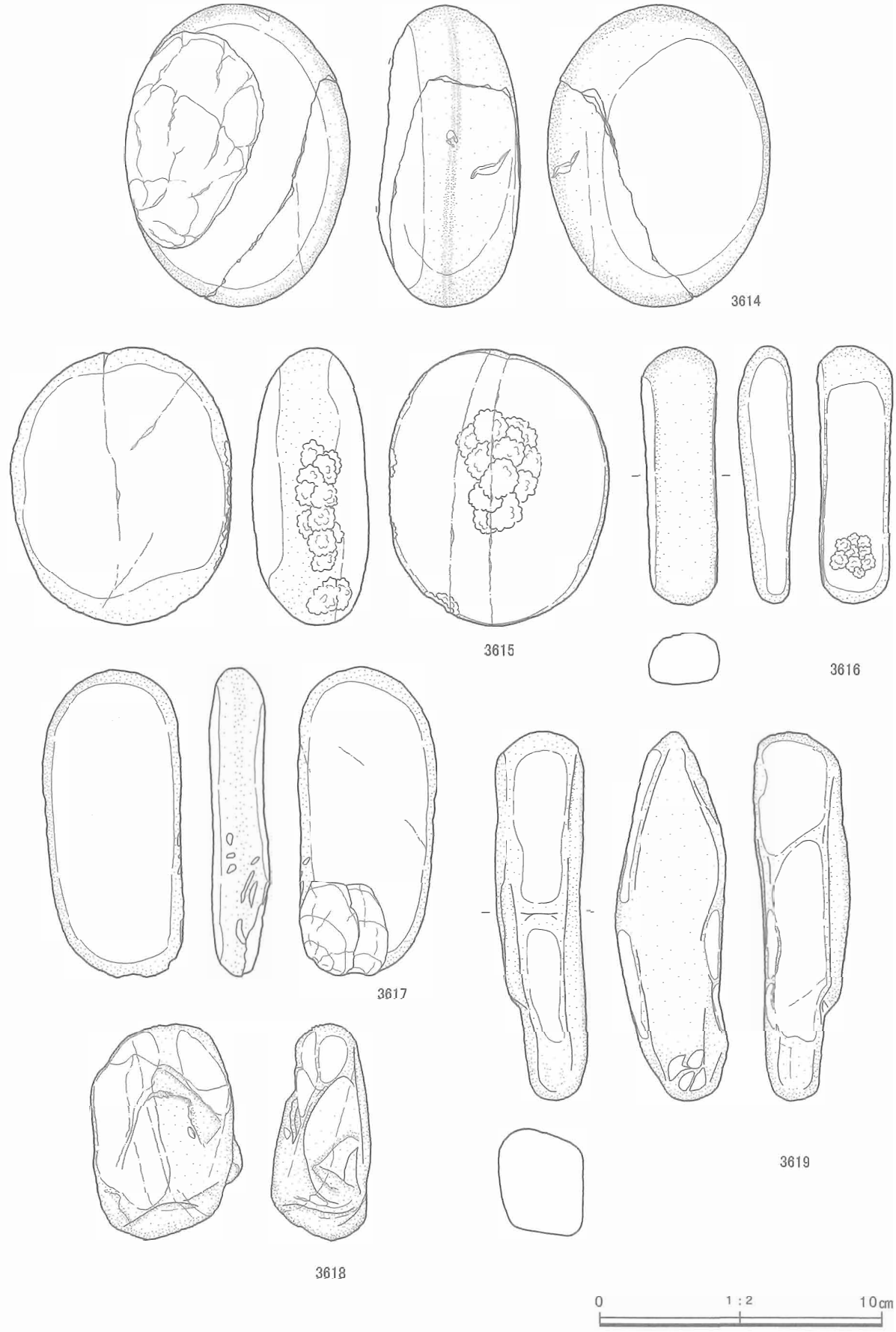
第262図　遺構外出土遺物82



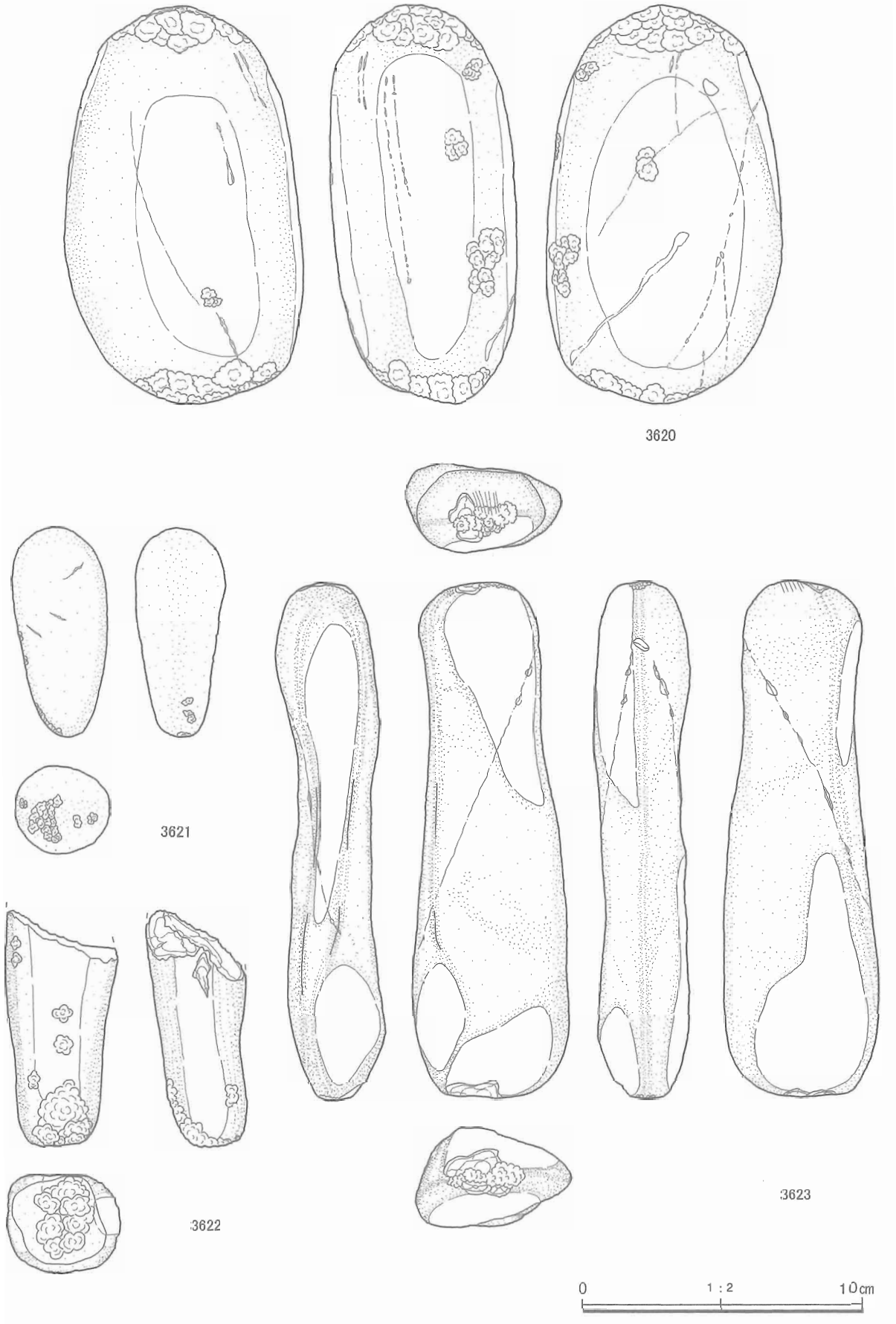
第263図　遺構外出土遺物83



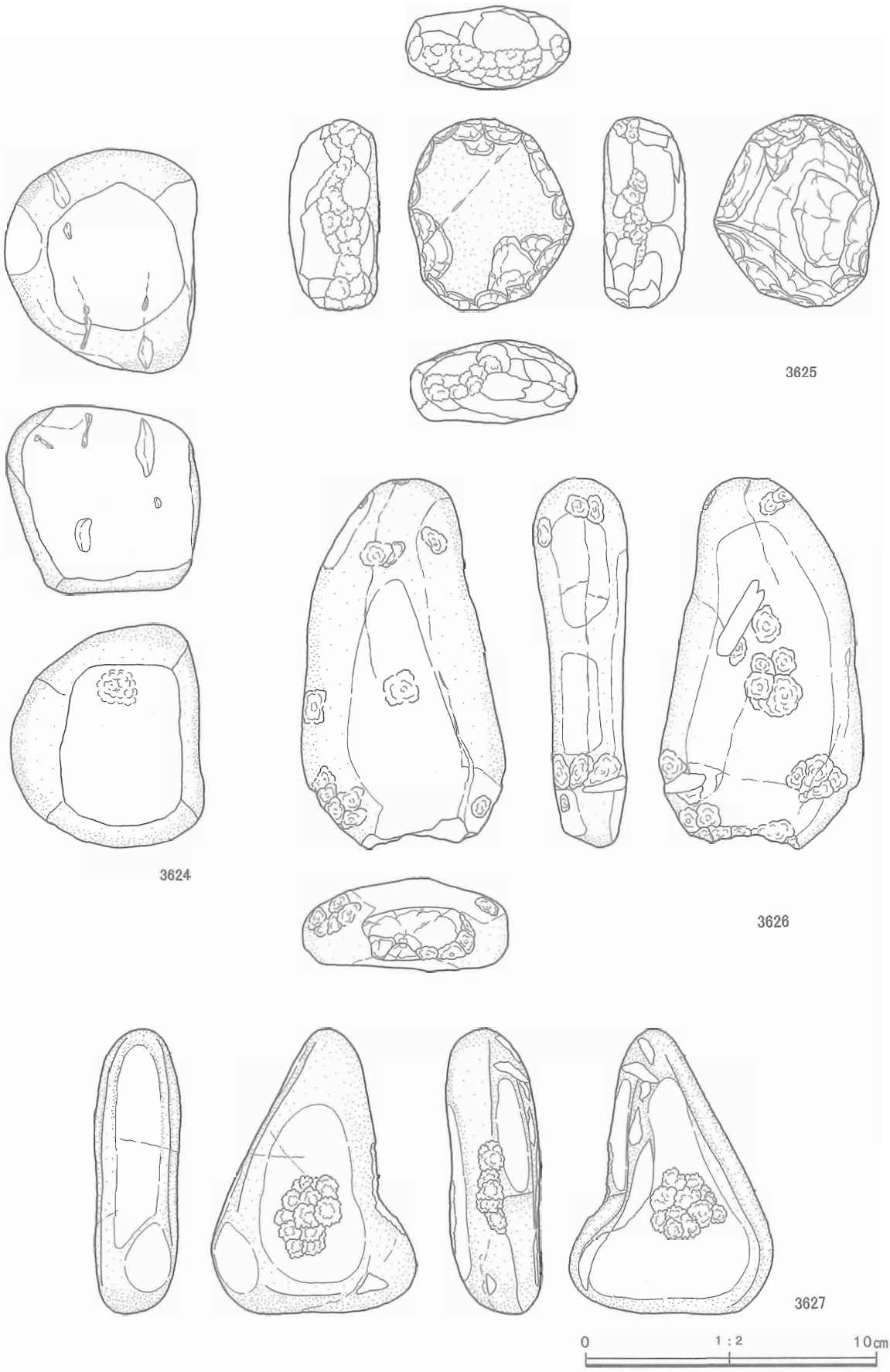
第264図　遺構外出土遺物84



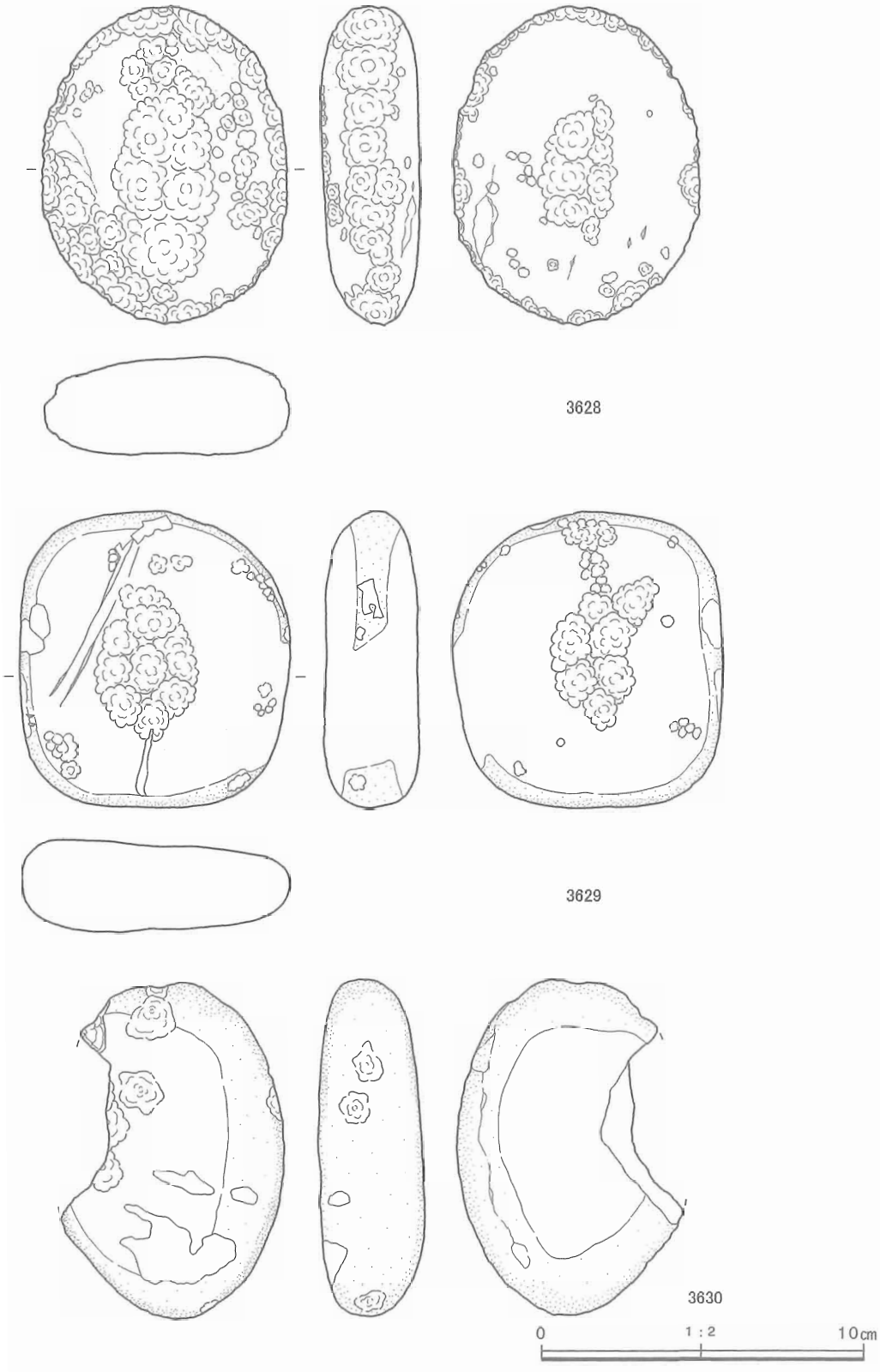
第265図　遺構外出土遺物85



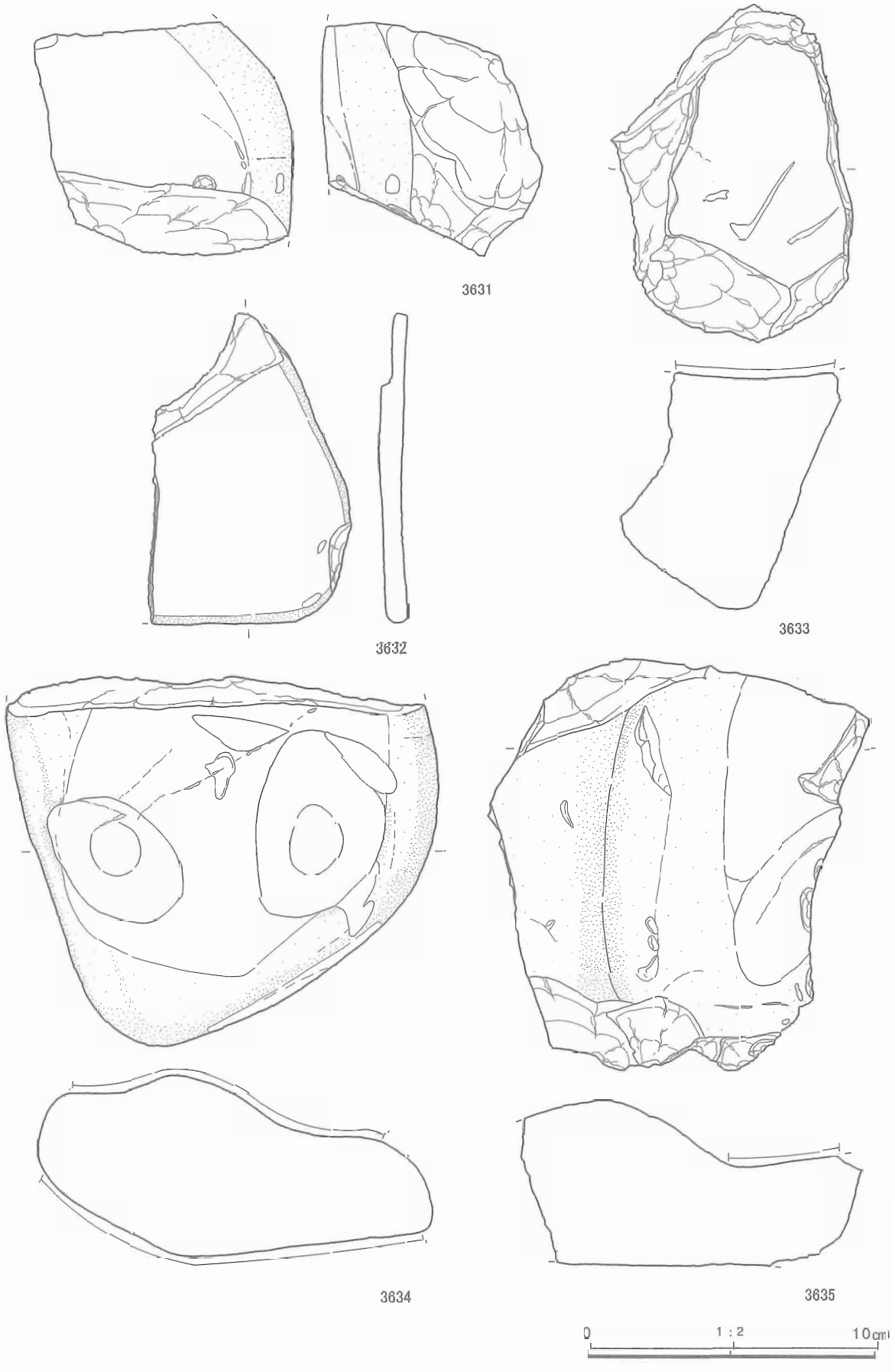
第266図　遺構外出土遺物86



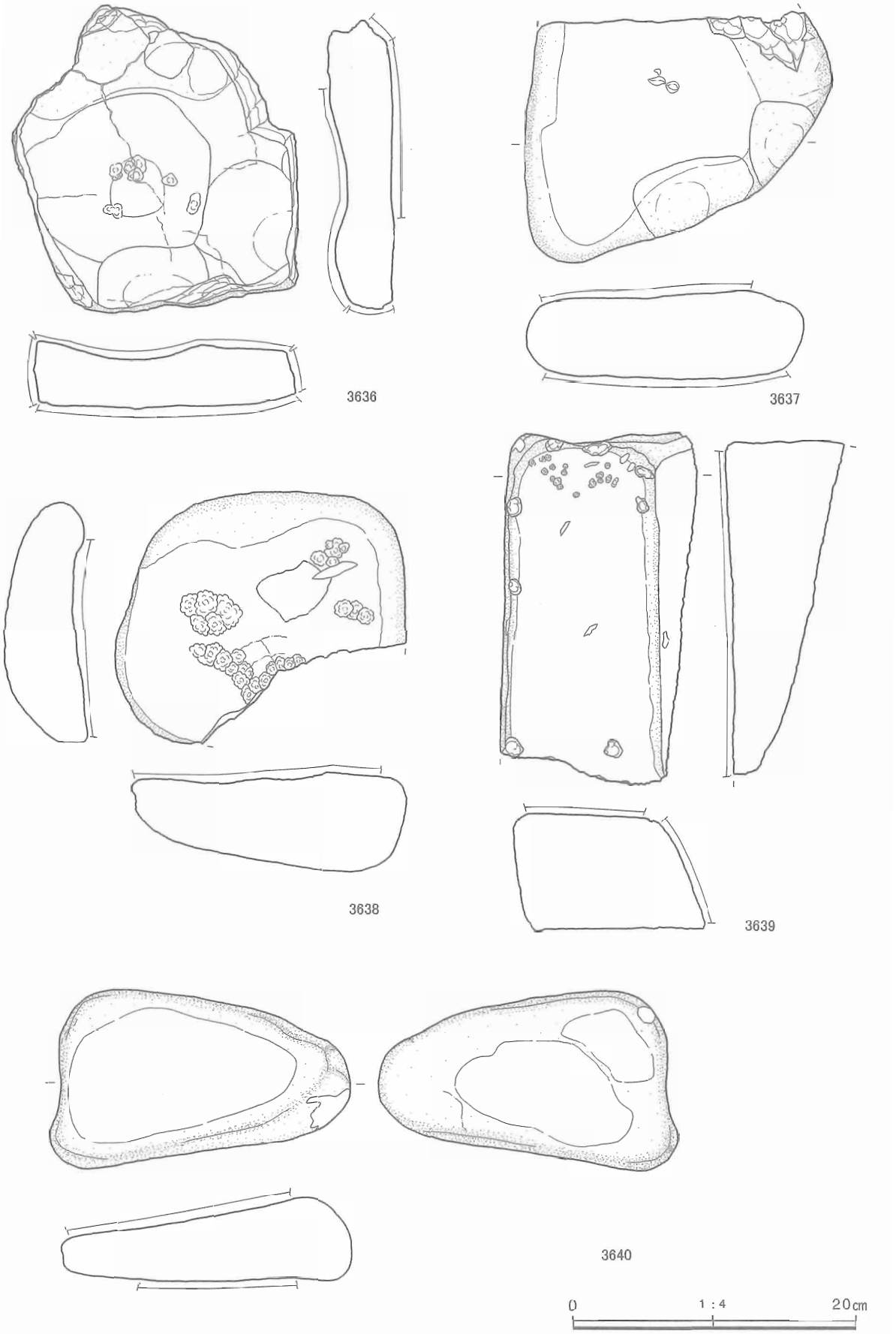
第267図　遺構外出土遺物87



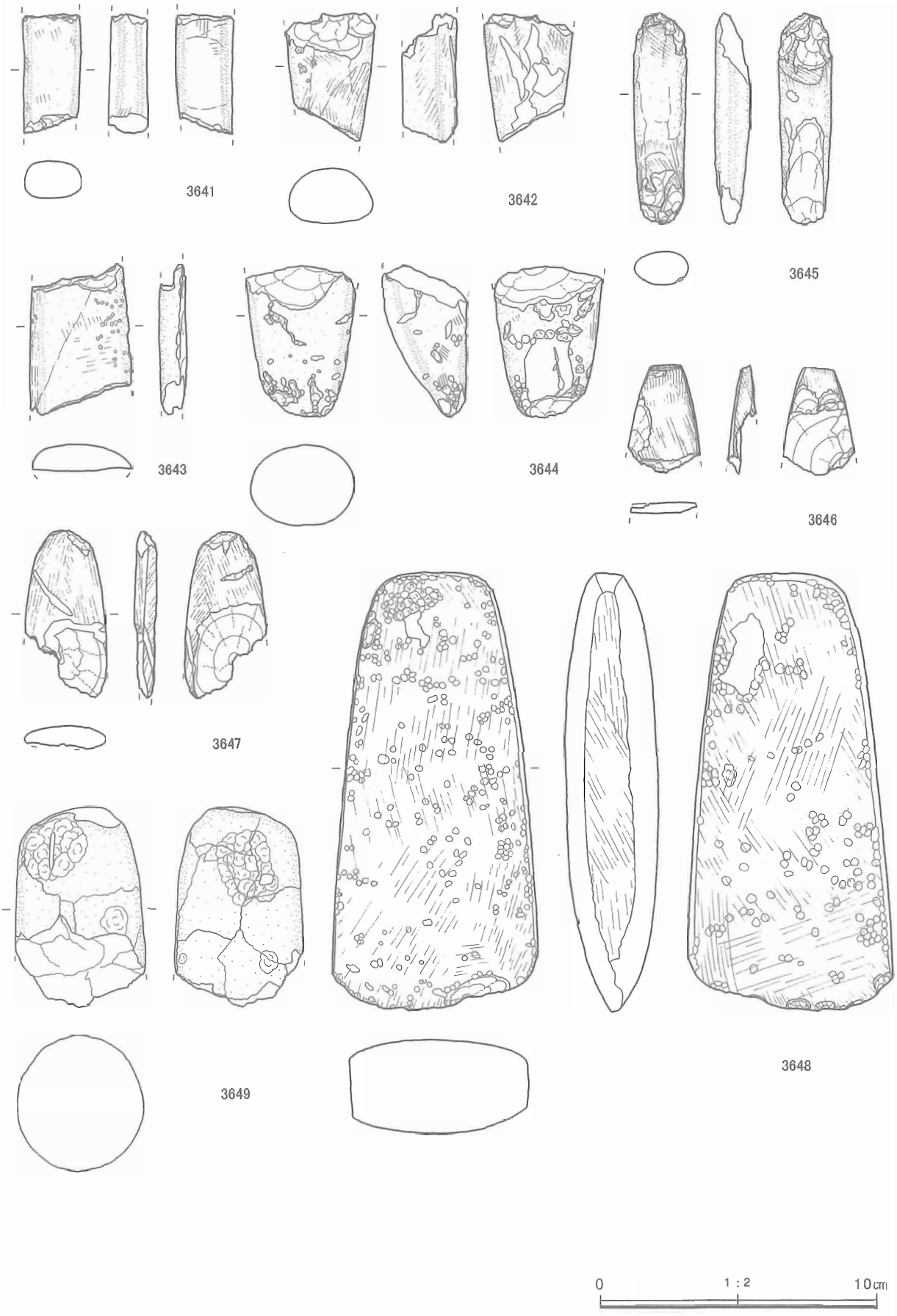
第268図　遺構外出土遺物88



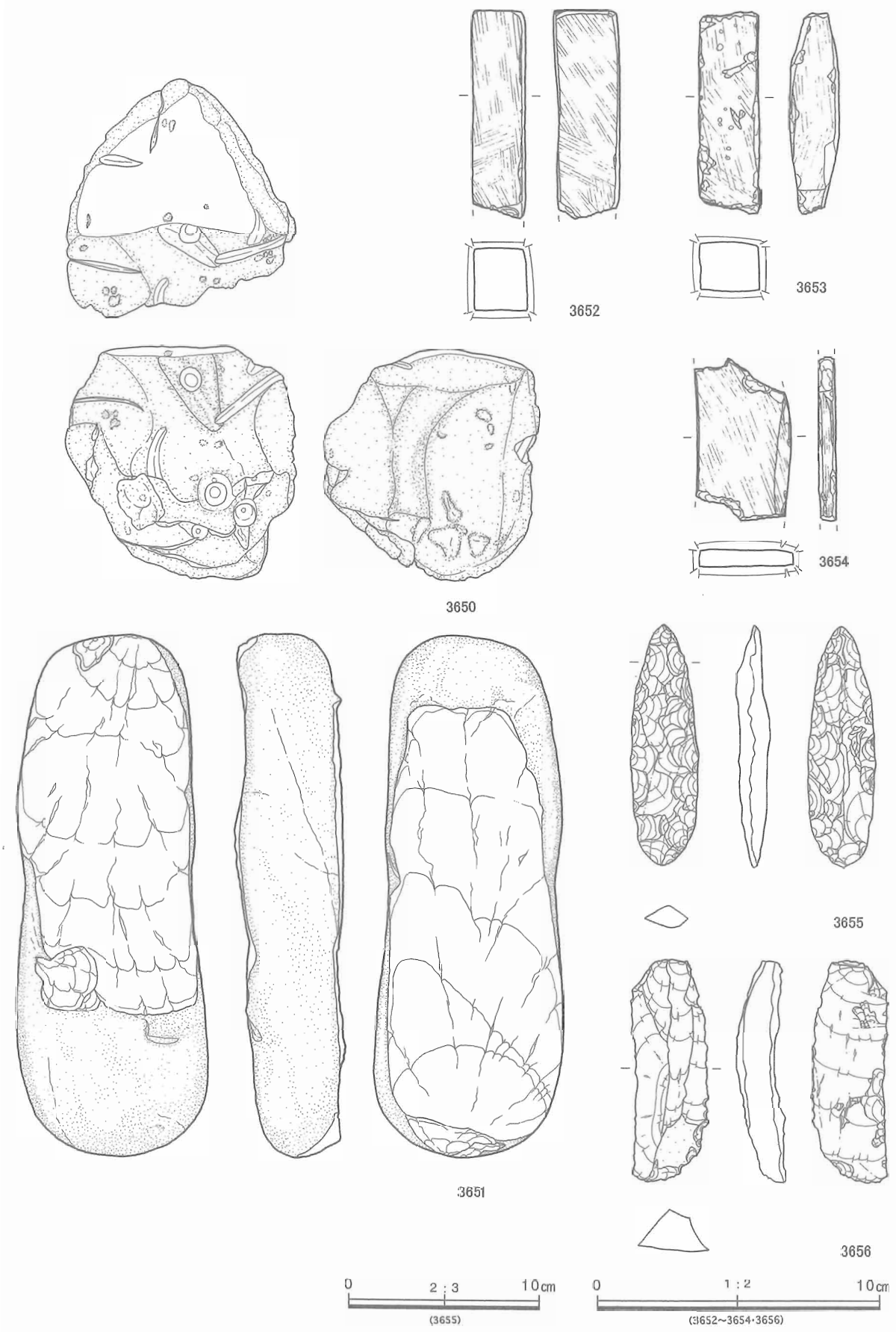
第269図　遺構外出土遺物89



第270図　遺構外出土遺物90



第271図　遺構外出土遺物91



第272図　遺構外出土遺物92

報告書抄録

ふりがな	するがやまいせきⅡ（じょうもんじだいへんだいいちぶんさつ）
書名	駿河山遺跡Ⅱ（縄文時代編第１分冊）
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	島田市－４
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第212集
編著者名	河合修／松川淑子／澁谷昌彦
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20　ＴＥＬ054-262－4261（代表）　ＦＡＸ054-262－4266
発行年月日	2010年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町名	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
するがやまいせき 駿河山遺跡	しまだし 島田市 うしお 牛尾	22209	25	世界測地系 34°51′13″ 日本測地系 34°51′１″	世界測地系 138°７′46″ 日本測地系 138°７′57″	199808 ～ 200203	23783㎡	開発等の事業に伴うもの（道路）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駿河山遺跡	集落	縄文時代中期前半～後期前半	竪穴住居、土坑墓、風倒木痕、土坑、小穴	縄文土器（加曽利Ｅ３～Ｅ４・曽利Ⅲ～Ⅴ・東鎌塚原・咲畑・勝坂・北裏Ｃ・北屋敷・称名寺・中津・林ノ峰式）、埋甕、ヒスイ大珠・小玉、石器（磨製石斧、打製石斧、石鏃、石槍、石匙、石錐、石錘、磨石、敲石、凹み石、スクレイパー）	

要約

駿河山遺跡は、縄文時代中期前半～後期前半、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代～中世を主体とする複合遺跡である。本書は縄文時代の遺構・遺物についての報告書である。

駿河山の台地上に人が定住し始めるのは縄文時代中期前半からで、後期初頭～前半頃までは生活が営まれていた。加曽利Ｅ３～Ｅ４・曽利Ⅲ～Ⅴ式の土器片が多数出土し、主体となるのは中期末頃と考えられる。中部・東海・関東地方の土器を包括し、他地域との幅広い交流が窺える。

竪穴住居は40棟存在し、４～５本の主柱穴や埋甕、方形の石囲炉などの特徴を有する。中期末に該当する住居は、不定形ながらある程度円形～馬蹄形を呈して配され、３～４か所に集落を成していたようである。

土坑墓は調査区東寄りの区域に４つの群を形成している。南の群ほど後期の土器を含む土坑が若干増えること・群によって土坑の形状に違いが看取できることなどから、４群には幅狭ながら時期差が存在し南の群ほど新しい時期のものになると考えられる。最も北の群からはヒスイ製の大珠２点・小玉１点が出土し、被葬者の社会的役割を示唆している。

調査区西端斜面地の包含層には土器片・石器・石屑の集中する一帯があるが、台地上に集落が存在した時期に長期に渡り土器や石器の破損品・未製品などが廃棄されたゴミ捨て場だと考えられる。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第212集

駿河山遺跡Ⅱ（縄文時代編第１分冊）

第二東名№91地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

島田市－４

平成22年３月31日

編集・発行　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20
ＴＥＬ　(054) 262-4261（代）
ＦＡＸ　(054) 262-4266

印刷所　松本印刷株式会社
〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡2210
ＴＥＬ　(0548) 32-0851（代）